

「『麻帆良学園から来ました烏丸イソラです！』『仲良くしてね！』」

おーり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

……少年は境界を越えた——！！

ネギまに様々なモノが混ぜ込まれた、混沌とした世界にて転生を果たした烏丸イソラ（尚、転生特典は未だに不明

諸々の事件を解決し、押し潰し、揉み消して、すったもんだの果てに中等部を卒業するにとうとう至る

それは、所謂『原作』の終わりを意味する

その現実にて何処かホツとするのも束の間、少年は気が付いたらまた別の世界線にて高校生として転校を果たしていた

受けた覚えも無い手続きに、そもそも親御も居ない自分が己の意志以外で転校する意味って何ぞや？と小首を捻る一ヶ月

中学で培った技術を駆使し、繋いだ絆を決して無かったことにしたくないがために

少年は帰る方法を探りながら、新生活を何とか営んでいた。

——そんな彼に、未曾有の危機が襲い掛かる——！！

目次

【被害者は】エロスと誤解が錯綜する第一章【シスターと人妻】 ※原作二巻相当分

「若干のタイトル詐欺に訴訟も辞さない」 1

☆「そらくんのwktk子づくり教室ーう」 9

「折角覚えた熊本弁が役立たずな世界線」 21

「ちっぱいの子ほど揉みたくなる衝動性」 37

☆「オーディエンスと50:50あと何だっけ」 50

「時には十字架が愛に力を与えるときか」 62

☆「お酒は20歳になっても弱い人は控えろ」 73

「フフフーン 燃やせー フフフーファン 起こせエツ☆」 95

☆「不死鳥は再び蘇るとかなんとかいう話」 108

【翻弄される】ギャグと友情が織り交ぜる不可逆なる第二章【少女たち】 ※原作三巻相当分

「ゲエツ！鳥m」待つてその反応可らしい」 119

☆「中身がいつぱい詰まったあもう1回！」 133

「愛と正義すら友達になってくれない件」 157

☆「今こそ愛という名の信仰心を試すとき」 170

「巡る想いが体中にショッギョムツジョ」 188

【番外編】「4人playと思っただけどそんなことなかった」

207

「功夫が足りないんじゃないか？（挑発）」 229

【常勝無敗で】幼女と謀略が犇めく縦横無尽な第三章【済むわけない】

※原作四巻相当分

☆「もうストーリーとかどうでも良くね？」 242

「ちよつと見逃したらまた負けてたよ!？」

「エロいモノは常時あつても判断に困る」

「そのとき、歯車が廻り出していた…!」

☆「決めたわ、お前から今日から俺の性処理係りな」

☆「イリナちゃんがprpr」

「元女子校の同級生の幼女の水泳授業の相方に俺がゲツツされた件について」

「お前を信じる、俺を信じろッ!」

☆「人妻抱くとか後ろめたいわー超背徳感あるわー」

☆「これを読めば万事オツケー! 貴女も今日から【あの人】の愛人!」

「宗教は遡るほどにマテリアル面での支援が信仰の主軸であるという話」

「わかんない!ぜんぜんわかんないよお! (裏声)」

☆「いやあ、激動の一日でしたね!」

【逝かれたメンバーを】天高く躍進する百鬼夜行な第四章【紹介するぜ!】 ※時系列上原作五巻相当

「ぼくのなつやすみ」

「さくさくいこう、さくさく」

「殺しのライセンスを持つてる美少年キラーが似たようなことをしてた」

「よくわかる戦術講座。そら先生にむわあーかせてえつ☆(鶏冠感)」

☆「男女の仲って奴は肉体関係のみに留まらせてはいけないのではないかと (ry)」

☆「……そろそろ俺も転生特典系の特殊能力欲しいなあ。必殺技として役立てられそうやつ……」

「深淵を覗くとき、深淵もまたお前を見ている」

「女性の絶頂時の感度をそのまま男性に与えるとショック死する位なんだってさ」

☆「亜麻色の長い髪を風が優しく包む…ドライヤーかな？」

512

「地上高く投げられたは良いけど拾いに行くのが面倒な賽」

「先ずはボコろう。話はそれからだ」

☆「美少女を悲しませるなって幼馴染が言ってた」

【番外編】「アスファルトの街抜け出してキミとアバンチュールなんちゃって」

「後顧の憂いも無いはずなのに、この寒気はナニ…？」

☆「よしお兄さんがんばっっちゃうぞお」

☆「考えて見れば遠慮なんてする必要なかった」

「別に忘れていたわけじゃ無いんだ。ホントなんだ」

【内政チートという名の】理想と現実が交錯する謝肉祭的な第五章【蹂躪劇】 ※時系列上原作六巻相当

「知ってた」

☆「もうわかってんだろ？キンクリだよキンクリ」

「世界が滅亡する理由を懇切丁寧に説明したら長いから3行でと却下された。何を言ってるのかと思いきや他の面子もそんな感じだった。疎外感とかイジメとかじゃねーもっとうすら寒い狂気的なモノを感じたぜ」

「これからのことを考えるためにもいつかこれまでのことを振り返

678

660

645

632

615

603

588

575

562

542

526

499

487

473

るべきだと思う」

696

☆「しばらく物語から離れていたサブキャラが再登場すると、なんかワクワクするよね」

706

☆「友人が教室の窓の外を見上げながら「馬鹿な、まだ早すぎる！」と口遊んだので、俺はとりあえず動画に撮って拡散することに決めた夏のある日」

715

「アアーン!? 誰だテメエ!? 人間の屑に知り合いはいねーぞ!」

727

☆「えーと、媚薬に荒縄、ピンクローターにアイマスク、ビデオカメラとマイクロビキニ、よし、準備オツケー!」

736

番外☆編「涙の数だけ、とはよく聞けけれど、強くなれなくてもいいから優しくしてほしいです」

747

「やべえ、今回俺出る必要がねえ」

759

☆「

773

「俺悪くないよね? って訊いたら大体のひとに「主犯です」って言われる。解せない」

788

☆「ドツキドキな駒王学園体育祭! が開催するってよ(白目)」

800

「次回、【放課後のラグナロク】。みんな絶対見てくれよな!」

817

【原作時系列?】超絶ルナティックストーリーモード! オリ主不在の第六章! 【奴などどうに用済みよ…】

「通算61話目でキリもいいけどたぶん読者が求めるものとは違うんだよなあ…」

827

「何でも知ってるわけじゃないけれど、あの先輩が信用ならないこ

とだけは把握できてる」

838

☆「その手に掴んだものは、決して手放したくない……！」

846

☆「何を書けばいいかわからないとき、とりあえずエロいのを書いておけば問題は無いってじっちやが言ってた」

860

『ぶっちやけると、まともな神なんて微塵もない』

869

「あの日上がったお前の断末魔以上の絶望を僕はまだ知らない」

878

『少年に宿る新たなチカラ！ 妖狐の母娘と乳の神！』

891

【被害者は】エロスと誤解が錯綜する第一章【シスター
と人妻】 ※原作二巻相当分

「若干のタイトル詐欺に訴訟も辞さない」

「……………アルジエント先輩……………」

「え、ひよ、ひよっとして同じ学校の方ですか……………」

魔力附加系チラシから超目前に召喚されたっぽいのは、同じ高校に
つい最近転校してきたと噂のアーシア・アルジエント先輩。

綺麗な金髪で外国の方と判るが日本語をとてつもなく流暢に話す、
やや幼げなその先輩と最初に口を利用して抱いたイメージは、何故か何
処か懐かしさを響かせた。

と、いうか、初邂逅が自室で対面30センチとかって、パーソナル
スペースを超過した完全に初対面で突き合せちゃダメな距離だろう
が。目測を測ることすら出来ないのかよ、この簡易召喚チラシ。

ロリ系クラスメイトから手渡された、デリバリーでヘルス的なサー
ビスを彷彿とさせる様相のチラシを呆れたように見下ろせば、その上
へと召よび出され座り込んでいる体勢の彼女とバツチリ目が合う。

……………つーか、チラシクレから呼ばれたってことは、この先輩も彼女みた
いにこういうバイトへ手を出しているってことか。

男と同棲している、とかって噂まで聴こえてくるし、天使みたいな
見た目して……………言っちゃなんだがすげえビッチだねこの先輩。

「あ、わわ、す、すいませんっ、私、今日が初めてのお仕事なもので
して、その、」

—— 駒王の制服という、いつも見慣れたはずの服装を来たあどけな
い表情の先輩が、何故か今日はとてつもなく魅力的に見得てくる。

……………何故かも何もねえよ、完全に理由が判明してるわ。

普段ならば、赤面し慌てて離れようとする女性の為すがままにさせるところだったのだろうが、本日はガチで日が悪い。

言葉を言い切る前に、逃さないように肩を掴み、

「——こちらこそすいません。抑えられません」

「え」

相手の了承を得る前に無理矢理に唇を奪いそのまま押し倒して思うがままに——、

要するに——この後無茶苦茶セックスした。

▽
▽
▽

——躰が熱い、こんなの初めて……！

と、まあボケている余裕も実はない。

本当に熱い。

何がと言うとナニがとしか言いようがないレベルでの熱さを抱いた我が肢体は、徹底的に貪るべき対象を求めてその渴望を持って余していると言っても過言じゃない。

考えて見れば、今迄は麻帆良と言う人外を封印すると同時に認識を逸らす結界を維持していた場所に居たお蔭かその所為か、自分の魔力は随時『障壁』へとオートで転用されていた。

その軛から解放されたということは、自転車操業的に廻転されていた魔力の行き場が一挙に失せたということ。

行き場が失せて魔力の精製を止めようとしても、生理現象にも似た体内循環というモノは意図して止められるモノでもなく。

……要するに、持て余しているのは渴望と言うよりは魔力そのものであったりして。まいったねこりゃ。

麻帆良でも思ったが、魔力と言うのは持て余しても良いところは無い。

其処は原作の魔法世界来たてのネギ君と同じように、例えば貯蓄率の上限が常人よりも上であったとしても、過剰飽和と表現も可能な程度に魔法を込められれば過度な熱となつてその身を蝕むのである……ッ！

……ちよつと色々ルビを振つて遊んでみたが、無駄に厨二心を煽らせてみただけだった。読む人いたら鬱陶しくてスマン。

そして遊んでいてもガチで限界なんだ。

くそ、一ヶ月大魔法も使わずにいた（というか使う用途が無い）弊害がこんなところで……！

これが麻帆良ならば、気の置ける女子らとそこそこにアレでアレな交流で以て解消できるというのに……！

自分でも良く分かる割かし屑な思考を頭の隅に放置して、一枚のチラシを眺める。

それは、同じクラスの今一番好かれている、と自覚できる少し成長不良っぽい少女から手渡されたモノなのだが……。

『アナタの願い、叶えます』。

そんな風に謳い文句が載せられて、僅か乍ら検出できる魔力附加エンチャメントされた、ちよつとばかりそれっぽい紋様まで敷いてあるチラシ。

……ヘルス的なデリバリー系出張サービスの勧誘チラシにしか見えない俺が本格的にどクズなのか……。

いや、術式は単純に移動系アポートっぽいけど、こんな文句が囁かれる時点で『そういうお願い』としか連想されないうつて。健全な男子高校生の性に対する欲求舐めてんのかコレの作者。

問題はコレを手渡したのが、先ほども言ったが成長不良っぽい少女だということだ。

例えるならばクールタイプ。6号にほど近い雰囲気を抱いた、身体的にも高校生と言うよりは中学生、酷くて小学生にも見え得る美少女、否美少女。それがこういうバイトをしている、ということを自己申告して来たという。

うん、もうわかるな。

……罨トラップだ！

思えば今日は、出会った時から気遣う様な目を向けられていた！
気の巡りが常人と精査比較するとやや違いが見受けられるという
ことは、要するにあの子も小太郎みたいな半妖タイプと観た！

以上の事から推察するに、探知タイプまたは可能な資質を兼ね備えた人外でFA！

……え、もろバレってことか？ 使えってことなのか？ 呼び出せと？

冷静になって思い返すとそうとしか思えない。

いや、冷静になれる程熱気は収まっていないし、そもそもこうやって思い悩んでいるから尚更悩んじゃって。

いつそ街へ飛び出して苦手なガールハントに繰り出せと……？

いやいや、こんな状態で外出したら完全に“やらかす”自信がある。

広瀬●美も時たま場違いな事を言うよね。ソレあるー。

そしてこういうときばかり、いつもは過剰なまでにコミュニケーション過多な同居人が部屋の中に居ないのは、間違いなく彼女の持つ危機察知能力の賜物だと言えるのだが如何に。

いや、居て貰っても普通に困るけどね？ 彼女、大家さんのお気に入りっぽいから、下手に手出しとかして傷物にでもしたらかなり人間的にアウトだし。

話を戻そう。

呼び出せと云われても、ぶっちゃけ小学生ゲフンゲフン中学生みた
いな見た目のクラスメイトが、そういうバイトに手を出していたって
だけで幻滅モノだしシチュエーション的には悪くないが現実として
はドン引きだ（所々本音がダダ洩れてるが気にするな）。

序でに言うと、俺はロリコンでは無いので彼女はぶっちゃけ性的対象外であつたりする。

麻帆良でも思ったが、俺って身体の何処かにロリータホイホイでも
実装してるのだろうか……？

無駄に幼女に好かれている気がするのは気の所為ではあるまい。
まったく、^{SUCk}超最低。

何処ぞの薔薇の聖母みたいにヤレヤレと吐き捨ててみても現状は変わらず、熱は熱のまま身体を、特に腹の下を突き上げるように滾らせる。

駄目だ……ッ！ やる気満々なコイツを抱えたまま何処かへ繰り出しても、碌でもない未来しか見えない……ッ！

何より絶対一回じゃ済まない。今なら抜かず3発をダースで連射出来る自信がある。

……さつきも似たようなことを思ったような気がする下ネタで思考を逸らそうとも、現状ピンチなのは変わりはない。

糞、自家発電で賄うしかないか……。無駄撃ちみたいで好きじゃないんだけどな……。

折角なのでクラスメイトから用意して貰ったシチュで、と己の妄想力を全力で投入してやろう。

そんな意気込みで、事後には絶対己の舌を噛み千切りたくなるような凌辱シーンを脳内スクリーンへと投影しかけたところで、

件の彼女が召喚された、——冒頭へと戻る。

……ホントすみませんアルジエント先輩。でもこういうバイトはホント止めた方が良いですよ？

ところで、彼女に対して懐かしさを抱いたのって、声があキラたんに激似だった所為なんだな。

初めは口調が全然違うから判りづらかったけど、途中の悦ぶ嬌声とか艶の乗った啼き声とかマジでそっくりだったわ。

アレかな。ホームシックみたいなものか。うん。

▽
▽
▽

別に初体験ってわけじゃないんだよ。

高校に上がってからは、まあ彼女らと疎遠つつうか異世界へと来ちゃった所為で交流が持てなくなっちゃったからご無沙汰だったけ

ど、卒業前にかけて都合7人くらいと性的に色々。要求されたから、つていうだけでも無いけどさ。

思えばあいつらも性に対して興味の湧く同年^{年頃}代であるのだし、特に好意的な相手が他にも何人か引つ提げているようにしか見えないのであれば、焦って功を急ようというのも無理のないことなのだろうし。

未成年だからどうのこうの、つていうのは、現代の倫理観で今更語ったところでどうしようもない。

そもそも日本人は歴史的に見てもがつつりロリコンだ。

寿命の関係で早いうちに結納を済ませよう、とかつていう意図もあるはあるだろうけど、それを受け入れるようになっていたのだから言い訳するにしても些か無理があるし。

というか、同年代なんだから俺だけが追求されるのも可笑しくない？

……いや、まあ、お前転生者だろ。つて突つ込まれたら、それで終わりなんだけどね……。

「おはようございませう鳥丸くん」

言い訳めいた苦悩に悩まされると言うダブルミーニングな葛藤中、声をかけてきたのは件のクラスメイトだった。

登校時刻だし、顔見知りと出会えば声をかけるのも判るのは分かるが、一晩明けて相対すればどの面提げて来やがった、という心づもりだ。個人的には。

「……おはよう塔城。何か、俺に言いたいことがあるんじゃないのか……？」

ジト目にも似た感情で背後へと目を遣れば、いつもと変わらぬ無表情系クールな彼女、塔城小猫はむしろ詰め寄ってきていた。え、何事？

「それはこちらの台詞です。使わなかったのですか。昨夜は万全の準備で出待ちしていたというのに」

「朝っぱらから何言ってるのこの娘」

やっぱり確信犯だったことはさて置き、転校してきて一ヶ月、無駄に好感度が高めなこの幼女系美少女にぐいぐい来られてまともな学生生活を送れて居ないと思うのは俺の気の所為なのか。

特に男子が、仲の良い男子生徒が未だに出来ないのは、此処が元女子校だからという背景が関係しているのかもしれない。

ぶっちゃければ、男女の比率が悪い上に、入学してくる男子の大半が下心を抱えてくる良い意味での男子高校生略してYDKだからだ。そりゃ女子も忌避するわ。下心を抱えているのって、要するにそれまで出会いが無かったっていう意思表示でもあるし。総じてそういう奴らは、見た目的にもイケメンと言うには数十歩足りない方々ばかりなのだから。

俺？ ほら、転生者だし。麻帆良でそこそこの幼女にモテた程度にはイケメンだし。外見レベルは最低限女子に好感をもたれる程度だと自負してるよー。見た目は青髪のバヌケDKをパクったような外見だからね、髪色白いけど。

多分塔城が距離詰めているのって、同じ白髪系しらがだからというのもあると推測。同族意識じゃね？

……あー、因幡に会いたい。癒されたい。白髪繋がりで思い出したらノスタルジックな気分になせられたわ。

「とりあえず、今日も待ってますからしっかり呼んでくださいね。結局昨日は待ちぼうけのままでしたし」

「何？ ノルマとかあんの？ いや、まああーいう仕事は歩合制だとは思うけど、客を選び好みしたら駄目だろう」

「よっぽどの酷い客ならばフィルターがカットしますし、個人的にああして紹介しましたから。どちらかという私のわがままです」

「結婚詐欺師はみんなそう言う」

その果てに何百万もする手術費や払え切れなくなったマンションの家賃を要求してくるようになるんだよな。

そうして貢がせて男を食い物にするモデル志望（ ）とか、この間ドラマで見たわ。

どちらにしろ、こういう仕事には理解があるが学生が、しかもクラスメイトがやるには少々駄目だろうと、何か別口の主人公ならば言いたそうな思考に毒されているオレガイル。

混線と言うよりは賢者モードに近いのかもしれない。実際、結婚詐欺師だろうがデリヘル嬢だろうが、俺に直接被害が無ければ気にすることでもない話だし。

そんな風に言い捨てて教室へと向かおうとしたところ、裾を引っ張られる感触に思わず立ち止まる。

「結婚とか……、まだ早すぎます……」

俯きがちで口を尖らせ、恥じ入るような表情でそんなことを言われてしまった。

あざと可愛いのは認めるが、コイツめげないな。

☆「そらくんの w k t k 子づくり教室ーう」

無理矢理に奪った唇を、絡む唾液を途切れさせないようにゆっくりと離す。

口中を弄まさぐった舌先を抜き取れば、今迄に感じたことの無かった快感であったのだろう。

アルジエント先輩は完全に脱力し、火照った貌のまま、閉じかけた瞼の奥からこちらを無言で覗っている。

朱に染まったその頬に引き摺られているようにしか思えない色気を帯びたその瞳孔には、嫌悪とはまた違う感情が潜んでいるようにも思えた。

「……先輩、初めてでした……？」

「……」

反応は無い。

十分弱かけてじつくりと弄った、その余韻に浸ったままの先輩の脳は、こちらが密かに伸ばした手にも気づいていなかったみたいだった。

口を塞いでいる間、俺の手は彼女の制服のボタンを片手で外し終えていた。

既に淡い水玉模様のブラが頭わになって、肌蹴た胸元と白い腹が垣間見える彼女。

最中には僅かに抵抗した様な反応があったはずだが、そのたびに口の中を弄られた刺激で遮られたであろう抵抗感は、最早虫の息と言った処だろうか。

我ながら、胴を締め付けて胸を強調するこのタイプの制服を、よくもまあ上手いこと脱がせたものだ、と手際の良さに感心する。

しかも完全に脱がせたのではなく、正面だけを開いたからこそ逆に逃走を連想し難いと言う出足封じ。

本気で逃げようと思えば可能かもしれないけど、そもそも此処まで湯立たせ蕩けさせた脳でそう判断できるかと言うと、……無理じゃないかなー。

我ながらガチで犯罪者チックな思考をしてる。けど、男の部屋に無防備でやって来たのは彼女の方だし、『続けて』も問題ないよな？

「……ん、」

「は……あう……っ」

小ぶりだけど、しつかりと形の良い胸へと手を伸ばす。

その際、身体そのものも離れたままでは無く、彼女の首筋へと舌を這わせるように。

人間的に敏感な部位は基本男女ともに差異は無い上に、唇へともう一度来られるよりは、と初対面の男性相手ならば比較的に入れられる部位でもある。

重ねて、甘えるような仕草が母性本能を刺激するって、アキラたんも言ってた。

年頃男女で互いに試行錯誤を繰り返し、練度を高めていた経験者に隙は無い。

アキラたんに比べるとポリウムが不足気味だが、女子としての柔らかさの象徴とも言うべきやや小さめの乳房へと、下着の下へと手を滑り込ませる。

「あ、あつ、あん、ふ、う……っん」

あくまで優しく、乱暴にやって形を崩さないように慎重に、例えるならば絹ごし豆腐を扱うかのような手際で、互いの『気持ち』を高めてゆく。

這わせていた舌も、時折啄むように唇へのキスを繰り返し、彼女に抵抗感を抱かせないくらいになるまで、肌の距離感を着かず離れずを維持しながら、空いている手は背中へと回してホックを外す。

するり、と手品のように脱がしたブラを持ち上げて見せて、アルジエント先輩の意識を身体の交わりから一度だけ外した。

「あ……」

小さく漏れた声音には最早抵抗のての字も残ってなかった。

続けて塞がれた唇も、まるでその快感キモチイイを求めようとしているかの如く、

「んむっ、んっ、んっ、んうっ」

脈動するような呼吸からは、とてもではないが逃れようとする意思も覗き得ない。

一度だけ見せたブラは、もう彼女の傍らへと放り投げてある。

空いているその手はもう一度潜り込まれた背中から腰へと伸びて、スカートの間隙から小ぶりの尻へと届いていた。

「うんっ!」

ぎゅ、と少しだけ強く掴む。

すぐに離すが、意識を戻すには意図がある。

ふやけた頭のままでは、差し詰めされるがままの人形のような反応では、正直俺の充足感を満たせない。

自家発電をしているんじゃないんだ俺は、抱きたいし、喰いたいから今女体を求めていたんだ。

——己に籠った熱を失せさせなくては、意味が無い。

「……あ、あ、ああ……!」

自分の立ち位置を理解でもしたのか、それとも彼女にもそれなりに好ましい相手がいたことでも思い出したのか。

まあ、男と同棲している、っていう噂があるくらいなんだし、やっぱり初対面の相手にただされるがままなのは、普通の倫理的には間違え過ぎることだとは思う。

「い、いやです、離して、んむうっ!」

そらくん知ってるよ、レ●プは犯罪だって。

でもなあ、やっぱりこうやって変なバイトをやっている時点で、この先輩はギルティだと思う。

一晩限りの間違いだった、ってしっかりと自覚してから帰ってもらいたいものだよねー。

「ふうっ、んっ、んむっ、いやあ……っ」

そういう『言い訳』以前に、とにかく女を求めているのが今の俺だから手加減なんてしない。

しかし身体を売る以上、この程度のリスクが生じることくらいは覚えておいて欲しいんだぜ。

「は、あつ、あうっ、あんっ」

しかしなあ、と少しばかり思い悩む。

強姦的なことってやったことないから、どうしたってこういう相手にも快感を与えるセックスになっちゃおう。

初めの内は本当に抱く気で弄んでいたし、貪る様な入口であっただけれど、だからこそ普段の抑圧された渴望が身体を動かすというか。

「ふうっ、うあっ、はあっん、はっ、はっ、あ……」

やっぱり間が悪いというか、運が無いというか、若干同情的にもなったからこそそのセーブが働いたんだろうかなあ。

この先輩からしてみれば完全に交通事故みたいなもんだし、……って、お？

「……っ、お、お願いですから、優しく、シテ、ください……」

……気が付いたら下着が片手ショーツにあり、胸肌蹴＋スカート残しの先輩がM字開脚で受け入れ体勢していた。

んー、アレか、快樂墮ちしたみたいな、そういう結果？

酷いキングクリムゾンを見た。

▽
▽
▽

さて改めまして。

考えながらやっていた所為で、オートで和姦モード移行していた俺がとことん接待プレイに勤しんだ結果、アルジエント先輩は逃げ場が無いと運命を受け入れる結果を待ち臨むらしい。

いつもならば此処で作者の限界がチラつくのだろうが此れはガッツリR18版、待たせたな野郎どもー此処からが本番だぜー！

って、なんか電波混じった。リテイクリテイク。
さて改めまして。

経験の為せる技なのか、はたまたオリ主としての妙なのか、ぐいつと反り立ち迸る情欲を隠そうともしない、活き立った肉棒をアルジエント先輩の秘処へと宛がう。

既にお互いに全裸であり、場所は自室へ備え付けたシングルベッドの上。

腰が抜けていたらしいアルジエント先輩を移動させた序でに、大洪水でぐしょぐしょになる前にスカートも脱がせたわけだが。

待ち臨むというのにその顔にはやはり鬩りがあり、火照ってはいるものの『もしかしたら』を期待するようにこちらを覗いている。

「……っ」

——いや、此処までやってお預けするほど、俺はお利口じゃないのよ？

「っん、ああ……っ」

にゅぷ、と肉を押し遣る感触がじんわりと伝わる。

ゆっくりと挿入^いれているからか、それとも接待プレイで其処までも蕩けた結果か、まだ云う程の痛みを受けていない彼女は初めて味わっているであろうその感覚に嬌声にも似た声音を漏らしていた。

破瓜の痛みを伴わない安堵か、はたまた初体験^俺を初対面の男性を相手にした絶望か。

その貌から覗える感情は、泣き笑いみたいな決壊寸前の様相を伴っている。わーお、ブギーポップみたーい。って全然違うか。

「あ、ん、ひっ？」

冗談みたいな脳内劇場をそこそこに、ぐいぐいとゆっくりと奥へ奥へと押し進む感触。

先輩も同じように味わっているであろう、内側を触れて伝導する、痺れるような感触をピリピリと感じていると思われる。

このままプチプチと、ゆっくりやるのも良いのだろうか。

——そういうのは想い人へ、もっと早くに注文するべきだったよな。

「ひぎゅうっ!?!」

中腰の姿勢からぐっと進めば、ぶちっと突き破る感覚が簡単に味わえた。

「あ、あ、あ……!」

痛みは伴えども快感も同時に伝わり、見事に泣き笑いの貌が出来あがった模様。

ハイライトさんがストライキを起こす気配が見受けられたが、その

前に唇を唇で塞ぎ、身体を改めて重ねて完全に密着した姿勢へと移行する。

「んむうっ!? んっ、んぐ、んうっ、あん、やあ、んっ」

身体も唇も、重なったままに上と下の口の中を、いやこの場合は腔内を、どちらか片方だけに意識を向けられないくらいの頻度で弄る。

時折離し乍ら、首筋を舐ると漏れた呼吸から嬌声が滲んだ。

え、慣れるの早くね? って思うよね。みんな?

俺も最初はそう思ったけど、多分自分の中の魔力密度が仮契約時みたいに擬似的な魔力伝達を發揮させているっぽい。

いわゆる『やればやるほど快感を与えられる状態』。

全身が媚薬みたいな相手に、耐え切れる初心者が居ないっていう――

……まあ、反則も良いとこだけど、こういう世界なんだって割り切ってくれ。

「あつ、あうっ、んんっ、にゃあんっ」

当然、下の方だっただだ密着した状態でそうなるわけでは無く、腰を動かして腔内の弱点を的確に擦る。

何処かわからないというなら、繰り返してぐりぐりと場所を探るのも悪くないと思う。

力任せじゃあ、やっぱりただの自己満足でしかないからな。

っーか鳴き声可愛いな。

「あうっ、ひあつ、んんうっ」

こちらが突然キスをした時以外は、アルジエント先輩は極力脛を開かないようにしている。

ぐいぐい、と腰を動かしている間も、俺の胸板で押し潰された乳房の感触を味わっている間も、顔を離している時の彼女は目を瞑ったままに耐えるような貌で啼き声を上げる。

「ひう……っ、………?」

動くのを止めると、先輩は脛を閉じたままに呼吸を整えていた。

が、『次の』何かしらが一向に来ないことに当然気づくはずで、恐る

恐る、といった様子でゆつくりと片目だけ瞼を開く。

それはこちらの反応が伺えないのか、不思議そうな表情に見えた。

「あ、あの……?」

「……気持ちイイですか?」

「っ!」

お、良い反応だ。

こちらの思惑通り、彼女はきつちりとこの『交流』を悦んでいた自分に気づけたらしい。

両目を見開き、数瞬前の嬌声を上げていた自分を自覚したのか、見る間に顔も羞恥で赤く染まってゆく。

「……先輩、可愛いですよ」

「っ……やあ、見ないでください……!」

恥ずかしさに悶え身体を振らせるアルジエント先輩。

凝視されていると自覚できる顔を隠そうと必死の様子だ。

しかし、隠そうにも両手は俺が恋人繋ぎでホールドしているし、2人の顔の距離だつてさっきまでキスしていたほどの近さだ。

再び目を閉じてイヤイヤと首を捻らせようにも、俺の吐息が邪魔をして逸らす程度の離し方しかできやしない。

「あ、んあ、んっ」

逃がす気は無く、もう一度キスをして、一緒に腰も上擦らせて、行為を再開。

「んんっ、」

突く。

「んあっ、」

引く。

「ひんっ、」

捻る。

「ひゃあっん」

振る。

舐る舌先を唇から離して、首筋をまた舐めて、耳元へ息を吹きかけて、

「何処を、シテほしいですか……？」
囁く。

「はあ、はあ、はあ……、し、して、ほしくなんか……」
「我慢しなくてもイイのに」

「ひんっ!?!」

じわり、じわりと反ったままのイチモツを膣内で摩る。

一瞬だけ跳ねた彼女の腰が互いの接合部をより深く密着させ、先輩的にも益々逃げ場なんて無い距離になっているのだと自覚もしているのだろう。

抵抗感を口では未だに吐くのだが、此処まで来ておいてその程度の言葉に何の意味があるの？と俺の目は語る。

「言ってくれなくちゃ、続けられないですよ?」

「……っ」

荒い呼吸のまま、葛藤が彼女の中に渦を巻いているのだろう。

あー、そういえば初めてシタせっちゃんなんかこんな感じだったなあ。

●^ビあの時は初めてだ、って言うことでこのかとの擬似百合プレイで3
だったんだよな。

そういう緩衝材が無いのだから、本当にこの先輩は不幸なのかもしれない。

まあ、これから『倅せに』シテあげるのだけど。

「……だ、さい……」

「なんて?」

小さく、この距離でも届かないほどの音量で、先輩は恥ずかしそうに、それとも心の片隅に罪悪感が滲むのか、赤い顔を背け乍ら呟いていた。

「っ……続けて、くだ、さい……」

「……どんなふうにな?」

「っ!」

俺の返事に、目を見開いてこっちを向いた。

一生懸命に懇願する、その様子が堪らなくって。思わず嗜虐心がむ

くりと鎌首を擡げました、俺です。

「は、激しくシテください！」

え、いいの？

多分、先輩は男って奴を軽く見てる。

動かして、体力の限界を迎えれば自分も早くに解放される。そういう打算があつたようにも思える。

「はっ！ あっ！ んあっ！ あんっ！ あっ！」

若しくは、早くに終わって欲しいから、という思惑もあつたのだろう。

まあね。あのままゆっくりじっくりのーんびり、と某月の名前のホテルみたいなコンセプトでやられていたら、いつ籠絡しても可笑しくないレベルで蕩けていたもんね。

既に手遅れな気もするけど。

「ひっ！ んあ！ ああっ！ あうっ！ やあっ！」

さて、激しく、と要求されてしまったので体勢には若干の変更点。完全に密着した状態から身体を少し離し、覆い被さる寸前の距離で仰向けの先輩へ腰を打ち付ける。

手は既に離して、手首を抑えつけるように掴んだまま、先輩の脚は大の字に開いたままに、腰の動きは止むことは無い。

某特命係長みたいに、ケダモノのようなリズムで膾壁をぐちゃぐちゃに苛める。

何を隠そう、俺は激しくシテあげることの天才だ！

「ひっ！ ううんっ！ あっ！ あっ！ ……っせーさんっ」

……んー？

「いっせーさんっ、いっせーさん、いっせー、さんっ、うんっ！ あっ！」

……あー。

ふと誰かの名前を呼んでいるなあと思つたが、噂の同棲相手の兵藤先輩か。

再び、ぎゅつと目を瞑つたアルジエント先輩は、自分をシテいる相手が件の先輩である、と思ひ込むことにしたらしい。

すげえ想われてんじゃん、あの先輩。

おっぱいおっぱい囀る童貞の先輩であつたはずだが、意外と距離の近い方からは高評価を貰っているってことなのか。それともお2人の出会いが劇的であつたのか。

少しだけ見直したけど、アルジエント先輩のはその場凌ぎにしてもちよつと悪手過ぎないかね？

だってあの先輩とスル時になって、今回の事を思い出しちゃうんだぜ？

経験のある俺と比較して、御二方の溝を作ることになってしまふのではないかな、とやや懸念が。

「いつせーさんいつせーさんいつせーさん……！」

「……先輩、アルジエント先輩」

「っ！」

俺の囁きで現実に取り戻されたのか、目を見開いた先輩が顔を近づける俺を凝視する。

ぎしぎしとベッドの軋む音が響く部屋の中で、俺はにっこりと笑顔を向けて告げた。

「烏丸イソラです。そらくん、って呼んでください」

「……っ！ っ!? ひあっ！ あっ！ あっ！ あああっ！」

はい、少し強めますよー。

マッサージ感覚で動きを更に強めて、近づけた顔をそのまま耳元へ、両手は離して腰と背中へ。

抱き着く形に、言うなれば種付けプレスとかいう体勢へと移行した俺は、

「手足は、抱き着くように絡めた方がもつと気持ちイイですよ？」

「あっ！ あっ！ あっ！ あんっ！ んっ！ んうっ！」

囁けば、鳴き続けるままに従って、抱き着く形になってくれるアルジエント先輩に、本日何度目かのキスをする。

くちゆくちゆと舐り、唾液の橋が出来るように離す頃には、意識が完全に蕩けた顔でうすボンヤリとこちらを覗う雌が其処に居た。

「そ、らくんっ、んっ、あんっ」

「はい、なんですかあ？」

「そらくんっ、そらくんうっ！」

——今更ながら、この先輩が別の意味で心配になって来たなあ……。

と、頭の片隅では冷静になっている自分がいるのだが、そんなことは当然先輩には伝わらせない心算で身体を捻る。

「あっ！ あっ！ あああっ！ あああああああっつっつ！！！！」

あ？

……………え、今この先輩、絶頂¹った……？

一際大きく叫び、先輩の身体が跳ねる様に攀じられたことで、こちらの動きも思わず静止する。

抱き着かれた背中に指の痕がきゆうつと引つ搔かれる感触をこそばゆく思い乍らも、俺の思考はある一点だけに留められていた。

——俺、まだイってないんだけど……。

▽
▽
▽

抱き着いたままの先輩の頬を撫でながらも、もぞもぞと下の方には治まって居ない感覚が燻っている。

反応が痙攣にも似たようなモノしか返ってこない彼女の貌は、すっかり蕩け切って目の焦点も合っていない。

繋がったままだというのに、こひゅうこひゅうと息も絶え絶えな状態の彼女は、終わったのだと、そう安堵しているようにも思えてくる。

まあ、今無理にやっても、壊れた人形を弄るのとそう変わりの無い反応しかないであろうし。

そう判断した俺が暫く撫でていれば、

「……………？」

漸く目の焦点が合って来た先輩が、何かを覗う様な疑問符に溢れた顔でこちらを見上げて来ていた。

「……………そ、そらくん……………？」

「もう大丈夫ですか？」

「……あ、はい……。……。？」

ゆつたりとした反応だが、意識も回復してきている。

意外に体力のある先輩だなあ、と思っていると、まだ何か疑問なのか不思議そうな表情で、

「あ、あの、……。お、ちん、えつと、その、したの、が……」

ペニスを明言したくないのか、恥ずかしそうに懸念を口にする先輩に、

「っ、ひうつ」

繋がったままのそれをぐいと突くことで、返事の代わりとした。

「あ、あの、もう、終わりです、よねっ？」

……。やれやれ、この先輩は未だに理解できていないらしい。

そんな彼女に明確に意図を理解すべく、俺は極力優しい声で囁いた。

「……次は一緒にいきましょうね、先輩？」

「……っ!?　　ゝゝッ！」

ようやく理解が追い付いたらしい。

声にならない声が、彼女の喉から掠れた悲鳴のように迸る。

——夜は、まだ始まったばかりだ。

「折角覚えた熊本弁が役立たずな世界線」

「……あの、桐生さん、ご相談があるのですけど……」

「お？ アーシアが相談なんて珍しいねー。何々？ エッチい相談？ 万事オツケーだよっ！」

「あ、はい。当たらずも遠からずと言った感じでしょうか……」

「マジかよ」

声をかけた時は実に愉しそうに嬉々としてご相談に乗ってくださいるように覗えたのですが、同意の意で肯定すれば驚きの表情で身を引かれてしまいました。解せません。

初仕事を自意識も擦れ擦れに朝帰りを果たし、やり遂げたと見えなくもない精神で振り切れそうな体力を絞り出しつつ、登校した私が真っ先に話を切り出したのは同じクラスの桐生藍華さんでした。

『相談』というならば眷属としての主であるリアス部長に話をするべきなのでしょうが、残念ながら私は一晩で汚れきってしまった身の上。つい最近眷属として命を助けていただいたというのに、その純潔を見も知らぬ男性に捧げてしまうような裏切り者であるなどと告白しようものならば、現状お世話となっっているイツセーさんのおうちからはこの身を退けなくてはならないでしょう。浅ましい身と思いつつも、この継る様な幸福を逃したくない私には、この『身内』と呼べるような方々に告白することへ背を向けるしかありませんでした。

その点で言うなれば桐生さんは、一般の男女の機微にも非常に詳しく、イツセーさんのおうちにお世話になっっているという事実を明かしても他の女生徒の方々のように一様に忌避するような目を向けずに、日本における女性のお世話となる男性に対する『身の在り方』を詳しく教えていただいた方でした。今回の問題に対しても、きつと何某かの理解が及んでいるに違いありません。

「んー、この前教えたことが役に立ったのかな？」

「あ、いえ、それはまだ実践してないのですけど……」

身を引いたのも一瞬のことで、桐生さんは眼鏡を押し上げ乍ら内緒話のように声を潜めて接近してきます。

教えていただいた『裸の付き合い』を実践するには、まだちよつと懸念というか不安材料が潜んでいますので後々の予定です。

「その、検査、というのはどのようにするものなのでしょう……？」

「……？ ん？ 何の話？」

「えっと、その……え、えっち、をした後の、あ、赤ちゃん、が出来たかどうかの……」

言うが速いか桐生さんは離れていたイツセイさんへと飛び掛かってキックを、つてば、ぱんつが見えちやいますよっ!?

『オツラあ兵藤死ねえッ!』

『グツハアツツツ!!? なんだ桐生いきなり何しやが、』

『いたいけで性知識も及ばないアジアに手出しするとか人間としてクズだッ! 死んで侘びろエロ猿ッ!』

『は、ハアツ!? 何の話、』

『それは真か桐生!?! 反論の余地は無い有罪確定だイツセー! ツツツ!!!』

『いやせめて俺の意見も聞いてッ!?!』

あ、あああ……、見る間に松田さんや元浜さんまで加わってカオスな状況に……。

物理的なパニッシュタイムとやらが始まったのを皮切りに、桐生さんはそこからとつと抜け出して舞い戻ってきていました。

「大丈夫なのアジア!? ゴメンネ! アタシが余計なことを教え

たばかりにあんなエロ猿に乱暴に突っつかれたなんて！」

「あのとりあえず落ち着いてください。あとお相手は、その……」

……イツセイさんでは無いんですよねえ。

「……場所変えよっか」

「はい……」

私の言いたいことを察してくださったのか、桐生さんは一気に真面目な顔になって手を引きます。

ホームルームが始まるのはまだもう少し先なので、本題を説明してしましましょう。

▽
▽
▽

そらくんに抱かれた後、気が付いたら時計の針は4時頃を指していました。

何度か覚醒と気絶とを繰り返していたのですが、そらくん曰く『絶頂』と言うモノらしく、快感が一定を超えると意識が暗転することは起こり得る事象であるそうです。空腹を我慢しきれない時以外にもなるものですねえ、と感嘆を吐くと「だな」と簡単に同意されていました。……口にしておいてなんですが、この現代日本で同意を貰えるような経験をしている彼は一体ナニモノなのでしょうか……。

それはともかく。

挿入^{はい}ったまま身体の向きをプロレスみたいにくねぐねと傾けられたり、座った状態からのコアラみたい抱っこの姿勢で抱き着いてとんとんと膺壁を刺激されたり、本当に恋人同士ならばシテても可笑しくない濃密な体験を一晚で全行程シタのではないかと思わんばかりのフルコースは、悪魔となって特に夜は強くなっている筈の私の体力を全削ぎするほどの強行軍でした。しかも総てが彼と向き合ったままの姿勢なので、……なんというか、既に嫌いになれない私がいま。

い、イツセーさんのことが好きはずなのに、何故こんな気持ちに……。

「ところで、幾らくらい払えばいいんです？」

彼の部屋のベッドの上、更に彼の腕を枕にしながら、そんな何でもない風に口を開かれました。

一瞬、何を言われたのかよく分からずに彼を改めて見直しましたが、言葉が紡がれたその口は目を覚ました私にお目覚めのキスをした口でもありましたので、直ぐに顔が赤くなるのを自覚します。

それを隠すように、被せて貰っていたシャツに奪い取るように包まりました。

「あ、ちょっと」

応えない私を追いかけるように、枕にしていたのとは反対側の腕がするりと、抱きしめるような姿勢で伸ばされます。

軽くですが、それでも逃げ場のない姿勢で抱かれて、隠そうとしていた顔を覗きこまれました。

「……今更、恥ずかしいことでもないでしょ」

「……はずかしいですよ……」

向き合えば、好きだという気持ちが私の頬を緩ませます。

初めは無理矢理でも、初めての相手で、しかも決して乱暴では無い、まるでお姫様のような扱いをされてしまいましたので。

抵抗する、という意識も疾うに消えて、触れてもらえることが擦くすくすつたくて素敵キモチヨクテで。

気付けばイツセーさんの事も忘れていて、その時は精神的な意味でも逃げ場なんて何処にもなかったようでした。

リテイク、とそらくんが呟いて空気を切り替え、改めて彼は最初に

告げた言葉の意味を検めました。

「そもそも、アルジェント先輩ってお仕事で此処に来てるんですよね？ 俺は幾ら払えばいいんでしょうか？」

実に現実的なことを口にされて、冷水を浴びせられた気分になりました。

……ああ、そういうえばそうでしたね。

思い起こしてみれば今日が初仕事で、そもそもいきなりこんな体験をすること自体が稀な気もします。というかそうであってほしいです。他の人にも今日みたいな仕事をしなくてはならない、となったら私は本気で考え直します。

「ちよ、ちよつと待つてくださいいね。えーと、」

床に脱ぎ捨てられた制服や下着の中から、リアス部長に手渡されていた端末を探り出します。

本当ならこちらの『奉仕』の前に対価を此れで計測し、相手側が支払われる限度で『お願い』を聞く手筈となっていた筈なのです。そういう事情をそらくんにも説明して、順序が逆になってしまいました。手にした端末をどうにか操作して『アーシア・アルジェントの処女』とこちらが提供した『お願い』を打ち込みました。……改めるとすごく恥ずかしいですけど。

そうして暫く待ちます。が、

「……えーと、あれ？」

「相場だと4、5万くらいですかね。いろいろオプションが付いたから、10万くらい？」

「いえ、あの、此れに対価が出る筈なんですけど……」

そう言っ指さす端末を、彼も後ろから覗きこみます。

吐息が触れるか触れないか、という距離感が先程までの経験を思い起こさせて、またもや赤面するのを自覚しました。

「……なんも出てないんですけど」

そう。彼の言う通り、端末には映し出されている筈の対価は掲出されません。

アレですか、私の処女なんて誰かに貰ってもらう価値も無いとか、そういうことを言いたいんでしょうか、悪魔としての『契約』は。

そういう想定に逸れてやや暗い気持ちに引き摺られてゆくと、そらくんは思いついたように口を開きます。

「とりあえず、小遣い代わりに10万程渡しておきますね。身体のケアにでもお使いください」

「えう、はい……」

ああ、なんだか尻すぼみです……。

それにしても、私は一応年上だというのに、年下の男の子からこんな大金を寄越されるとか、普通に人として駄目な気分させられます……。

悪魔のお仕事、業が深いです……。

「思っただんですけど、アレじゃないですかね。アルジェント先輩、結局最後までまぐろだったって言うか、されるがままだったって言うか、自分から『奉仕』をしなかったから対価が計測されてないんじゃない？」

「……あ」

「若しくは、避妊も何もしなかったから注がれた精子が対価代わりになっているとか。授かった子宝が掛け替えのない宝です、っていうオチ？」

ヤハハハ等と嗤いながら云われますが、若干冗談では済まされないのではそれは。

そういえば、とキモチ良くて拒否しませんでした。そらくんのアタカイモノがお腹の中にたくさん注がれていたのを今更ながら思い出し、丁度子宮の辺りを撫でる私なのでした。

▽
▽
▽

シーツに包まっていたお蔭か、お互いの汗とかでべたついたはずの身体はそれ程の後片付けも滞りなく済み。

色々と濡れたり零れたりしていそうな私の股間も一緒くたに、件のシーツが拭ってくれたので情事の前に脱いだ下着をそのまま穿くことが簡単に出来ました。

着替えていた時に、そらくんがお尻を撫でたりとちよつとエッチないたずらをしてきましたが、最後の一線をすでに通過している所為なのか、最初に押し倒された時みたいな抵抗感も特に感じず、『年の近い年下の男の子』というのも何気に初めて対処する人でもあったので、少しだけ悪くないかなあ、などと余裕が出てきた私です。

その後は、夜明け前でもやっているという近所のお風呂屋さんに連れて行ってもらい、一緒に入ったりした時には着替えの時の余裕も即座に消滅しました。

日記で書くならば改行してすぐの顛末です。すいません、調子に乗りました。

お風呂屋さんでシャワーを浴びながら、壁に手を付けて後ろから、という体勢でまたも声を上げてしまった私です。

本当に、今夜は、されるがまま！

ご近所の迷惑になるのではないかと戦々恐々としながら、凄く声の響いたお風呂屋さんのはきはきとちりとイツセーさんのおうちまで送ってもらい、なんやかんやで無事に朝を迎えました。

イツセーさんのご両親にはリアス部長が魔法で意識を少しばかり操作していただいていたらしく、夜の間居なかったことにも特に咎め

られなくて済んでいて助かりました。

イツセーさんご本人には事情なんて話せませんので、初仕事の内緒です、と言えば渋々ながらも納得していただけたみたいでした。

リアス部長には、そらくんから貰ったお金をとりあえず渡しておこうかな、と思っっています。

そして、一抹の懸念が、彼の言っていたアレに繋がります。

「とりあえず、近所のドラッグストアにでも行けば検査キットは売ってるから。つーか、やった次の日に妊娠を不安がるくらい激しいブレイとか……」

「……言わないでください」

「なかなか出来ることじゃないよねえ……」

「本当に突然だったので……。あ、幾らくらい必要なのでしょうか」

助かります。

桐生さんに連れられ、とりあえず下駄箱前まで逃げてきたところで、掻い摘んだ事情を説明した後には有り難くも判りやすい解説を説かれました。

要するに、そらくんの言っていた子宝とやらが本当に授かっていたら、という懸念です。色々、後天的にもアウトな身上なのです。悪魔は孕み難い、とはリアス部長には教わっていますが、其れも『あくまで』という前提があるのは間違いないわけですし……。

ところで、とりあえずと懐にあった大金を提示したところ、桐生さんにはやや引かれ気味に驚かれています。

「うわ、10万とか……。なに、アジア、昨日はエンコーでもしてたの？」

「そういう意図は一切無かったですけど……」

「……一緒に近藤さんも買つといたほうがいいんじゃない？ 相手の都合も考えずに中に出すような奴が相手なら、こつちが予防してお

かないと」

「二度目は無いと信じたいです……」

「んー……まあ、処女差し出したんだし、それでも安いかもね。でもキチンと支払うってことは、初めてにしては悪くない相手だったんじゃないの?」

「そ、そうなのでしょ……」

相場が良く分かりません。

相場の援助交際、と悪魔的読解力で言葉の意味を理解しつつ、前後の台詞の意味合いが矛盾する事実にも慄きつつ、微妙に日本のジョシコウセーの倫理観にもカルチャーギャップを覚える私です。

「だってさあ、世の男どもなんて、普通は女の子の事を慮ったりしないわけよ? 特にアジアみたいな流されちゃうタイプの娘なんかだと、乱暴にされて足腰も立たなくされちゃうのが初体験よ? 夜の街かどで暗がりに連れ込まれて制服剥ぎ取られて薬キメラれちゃって無理矢理されて帰れなくなっちゃうような体験している子だっってきたといるのよ? でも、アジアに昨夜シタ(ゆうべ)のって、なんていうか『女子が期待する』初エッチをしてくれるようなお相手だったんでしょ? その出会いには感謝しなきゃ。薄い本じゃなくてレディコミタイプの男子が実在してくれてマジ良かったよね」

コワイ! ニホンコワイ!

仰っている意味の半分くらいは理解が追いつきませんでした。自分が九死に一生を得ているのだという事はわかりました。

そういうえばチラシ配り時のイツセーさんとか、はぐれ時代のフリード神父とか、昨夜(むしろ今朝と言うのも過言ではない)の最近)で言えばおうちまで送ってくださったそらくんとか、考えて観れば日本に来てから夜に1人で出歩いた記憶がありません。

桐生さんの言ったような裏事情があるというのなら、そうだった経緯にも納得のゆくというものでしょう。

日本の治安が良い、等という話は幻想だったのでしょうか……。

「お？ あれって小猫ちゃんじゃない？」

「はい？」

密かに抱いていた幻想を桐生さんにぶち殺されてしまつて恐れ戦いていたところへ、その桐生さんの声が届きます。

まあ此処は下駄箱、要するに他の生徒も入ってくる正面玄関で昇降口ですから、誰が来ても可笑しくは無いのですが。そんな意図で振り返つたところで――、反射的に物陰へと身を潜めました。

「あ、アーシアちゃん？ 何してんのー……？」

「いえ、ちよつと……」

引き気味に一緒に隠れた桐生さんに問われますが、仕方のないことだと思われれます。

だってそらくんと小猫ちゃんが一緒に登校しているんですもの。

……思わず隠れても仕方のないことだと思いませんか!?

▽
▽
▽

「そういえば烏丸くん、課題はやりましたか？」

「かだ、い……？ ……ナニソレアツタツケ？」

視界の端に金髪が揺れた気がしたが、そんなことよりも塔城に気になる話を振られた。

思わず片言で返す俺に、やれやれとでも言いたげな表情（無表情）で嘆息する白髪娘。

「……今日指されると思いますよ？ 数学の課題は一限目です」

さ、昨夜は色々あったからあ！

と、言い訳をしようにも流石にR18の詳細をお子様にご語るわけにもいかず断念し、ついでにボツチ故の弊害である『友人の不在』というバッドステータスを患っている身として本日の劇終を自覚する。もう駄目だあ……お仕舞いだあ……。

「仕方ない人ですねえ。——ところで、此処に割と完璧な数学のノートが一冊ありますが、」

「我が身を御救いください塔城様！ 何でもしまむら！」

「……は？」

絶望に呑まれた俺を救う一条の光に斜め45度の角度でお辞儀したところ、真顔で疑問符を返すロリにより更なる絶望が見舞われる。こんなネタすらも通用しないなんて。クソツ、なんて異世界だ此処はっ！ 失望しました。ニュージエネのファン辞めて次の総選挙では星か白坂に票を入れます。輿水？ 知らない子ですね。

「何故此処で服屋の名前を出したのかは判りかねますが、何でもするというのがならばいい加減に名前と呼んでください」

「……え、ピンクの魔砲でビッグバンアタック？」

「ですから意味が分かりません」

名前と呼んで、と言うから。

お前が避けたら地球は粉々だ、って脅されても避ける身としては、バインドで固定されても回避選択不可避なのですがそれは。

ちなみにこの世界線で言うならばドラゴン波とか言うらしい。わお、まんま過ぎるネーミングセンスに星も軽くぶっ壊されそう。

……付いて逝けないんで元の所に還してもらえませんか？

「仕方ない、諦めるか……」

「烏丸くん烏丸くん烏丸くん、ホラホラ、此処に可愛くてぷりていで

性格が良くて授業態度も勤勉な美少女がいますよ。ちよつと勇気を踏み出せば素敵なプレゼントを施してくれる美少女ですよ。ぷりーずこーるみーまいねーむ」

「ごめんね塔城。俺幼女は性的対象外なんだ」

「断るにしてももう少しマシなセリフ回しがあるでしょうに」

後ろ脛を蹴るな小娘。

▽
▽
▽

「……え、なんですか、あれ」

目撃した光景に開いた口が塞がらない。

どうも、リアル市原●子です。

「あらいやだ。小猫ちゃんつてば、いつの間にあんな彼氏が出来たのかしら」

横に本物の家政婦さんがいました。

というか、ですよね！ 音声は届きませんでしたけど、雰囲気からしてそうとしか見えませんよね!?

「ど、どうすればいいんでしょう……」

だって昨夜のお相手が小猫ちゃんの恋人とか、……確実に私が眷属から追い出される流れです！

転生しても逃亡者人生とか……！

「ふ、こういう時、駒王生徒は慌てないものよ。とりあえず男子らを煽る為に写メって裏サイトへ投稿。これが正しい駒王民」

どやあとした顔で言いながら、一頻り蹴って反応が無いことに不満なのかそらくんの腕にくっついていった小猫ちゃんを携帯電話で激写する桐生さんが其処に居ました。

最近の携帯電話は写真も撮れるんですねえ。

ってそういう話じゃなくて！ と、とりあえず絶対にばれないようにしないと……！！

▽
▽
▽

流石に数学の課題と等価交換で本日の呼び出しを希望されるとは思わなかったが、さて果たしてどうしたモノか。

下宿先のアパートに帰宅し、デリヘルで呼び出ししてもツルベタ且つ一次性感不満な見た目どうしようもない相手に希望されてしまった『お願い』の内約に頭を悩ませる。

子供相手では勃つモノも勃たず、勃たせられても一抹の倫理観が邪魔をする。

無理矢理は良い結果を導かんよね、お互いにね。……俺は麻帆良でそう学んだ。

「あ、じゃあ罰ゲーム的なノリで要求すればいいのか」

なんだか発情期でも来てるのか、と問い質したいが問えばそのまま流れで押し倒されそうな幼女に対処するには贅沢な悩みだなあ、とも思いはするが。

麻帆良でエカテリーナ相手にしてもやはりあった抵抗と葛藤を、こんな場末の異世界で散らすのも家族に悪い。

そういう思考の末、塔城に課する『お願い事』は一応は決まった。

「すいませーん、小倉さんいますかー？」

「おおう、なんだ。学校帰りか、そら」

アパート2階の隣室に声をかけると即座に反応があり、中からは角刈りの小父様が人の良さそうな笑顔でご登場。

「メイド服あります?」

「サイズは?」

「多分、SSで」

「ちよつと待つとれ。おい母さん、メイド服何処に仕舞つとつたっけー?」

持つべきものは得難き隣人。

数分で覆面の奥様より用意して貰えた塔城用罰ゲームアイテムの小サイズのメイド服を片手に、礼を言いつつ自室へと戻る。

ところでそろそろ家賃の催促日となるらしいが、隣人の方々より聞いた話では毎月酒盛りになるらしい。

そういうところが『奥の方』が異界化している原因の一つなんじゃないかな、と益体も無い思考をしつつ、古めの木目扉を開けると美少女の着替えシーンに突入した。

「キャツ! もー、そらのえつちい!」

「メガネが無くてスマンね。あとそういうのはお風呂場でやんなさい」

「お風呂は共同だし、そら限定じゃなくちや意味無いじゃん」

「……言つとくけど、こう見えて俺も性を持て余す高校生なんだからね……?」

青狸の相棒に対するような台詞回しをしてくる同居人の少女に、剥き出しのままのおっぱいを隠そうともしない様子を普通に眺めつつ、完全に俺狙いな言い分についての苦言を呈する。

大家さんに最初は云われて面喰ったが、悪戯好きとの紹介に肖った彼女を相手取っても多分糠に釘かとは楽に想定できる。

ふむ、88のFと見た。美乳。

「みたいねー。ゆうべはおたのしみでした？」

「何処から覗いてやがった……？」

「覗かなくても、匂いが残ってるしい」

……そんなに匂うかなあ？

シーツは片づけて帰りに新しいのを購入して来たし、消臭剤も働いてる筈なんだけど。

まあそれはともかく。

「多分今夜もお楽しみだから、そちらは運動会でも楽しんで来てくれ」

「連日とか……。そらのけだものっ」

「なんで嬉しそうに言うのお前……」

いや、本当になんで？

あと『お楽しみ』の内容は多分お前の想定とは違う。

見て楽しむ系の奴を要求するから。

序でに言うと、こんな同居人がいることは余り知られたくない。

窓からするりと抜けだして行った彼女を見送り、塔城より先日戴いた件のチラシを床へと置く。

とりあえず、此処でいいか。

「えーと、エロイムエツサイムアーメン我は求め訴えたり？」

適当な呪文はフィーリングで、出て来い仲魔たちー。

気分は鳥取出身のゲゲゲなあの方の別口。

オカリナは手元に無いが、誘ってみれば即座に反応があったのでご了解である。

——輝き、

——光が集束し、

——そして形成、

——……おおつとお？

「……あれえ？」

「う、うう……」

……何故か、制服が肌蹴て、とうるか溶けて？いる、半脱ぎ状態のアルジエント先輩が息も絶え絶えに床に転がっていた。
ちよつとムラつときた。

「ちっぱいの子ほど揉みたくなる衝動性」

「う……っ、い……い！」

必死で声押し殺して、人が通り過ぎるのを待ちます。

場所は夜の公園。

隠れた木陰で、背後にはそらくんが、私の身を隠すように覆い被さってくれていますが、それと同時に昨日味わったばかりの感触が、膾の中へと痺れるように響くのです。

「は……、は……、あ……っ！」

呼吸も荒くなり、思わず出そうになる声を、自分の手で塞げば、そのタイミングで、ぐっぐっ、と膾中を彼の硬く反ったソレが突き上げてくるのです。

連日同じような目に遭っている為なのでしょう。視界が涙で滲むのを止められません。

……本当に、どうしてこうなったのでしょうか。

▽
▽
▽

「アジア、今日は仕事お休みよ」

「え、でも私まだ一回しか出てませんけど……」

「え、出てたの？」

「え」

「えっ」

なにそれこわいです。

本日の授業も終わり、オカルト研究部の部室へ赴けばリアス部長が冒頭の台詞を仰られますが、私の疑問に返された言葉には疑問符が浮かびます。

あ、あれだけの目に遭っておきながら、仕事と認識されないのですか……？

この世の理不尽に思わず死んだ目になりそうになる私を見ることは無く、朱乃お姉さまへと視線を移すリアス部長。

はぐれ時代の魔女狩りに似た記憶が呼び起こされますねえ……。

「朱乃、アーシアの召喚紙は還って来てる？」

「いいえ？ 果たしたというのなら、アンケートとして還ってくるはずなのですけど……」

「……でも、アーシアが嘘をいう筈もないし」

即座に返される台詞には、眷属としての温かさを感じました。

寸での処で落ちかけた気持ち、部長方の温かい信頼で掬い上げられてゆくようです。

しかし、それでは解決されない、謎が謎を呼ぶそらくんの『お仕事』。

あの時の痛みも、続けて味わった苦しみも、そして男の人の素肌の温もりも……。

無かったこと、と割り切るには酷くりアルで濃厚な記憶として、この身に刻まれているのです。

もうひとつ言うならばその瞬間の快感も、失われることなくこの子宮の一番奥へと、その残滓は未だに響いています。

ああ、——主よ、何故私にこのような試練を……っ！
「……大丈夫ですか？」

気づけば祈りを口に出し、鈍痛がこの身を蝕みました。

お蔭で響いていた残滓は払しょくされた気分ですが、小猫ちゃんにも痛ましげに氣遣われてしまい、気持的には少しだけ最低です。

本当に、私は、流されたままとはいえなんという罪を……っ。

「だ、大丈夫ですよ、心配かけてすみません」

「それなら問題は無いのですが……。何かあったら、言ってくださいいね？ こう見えて、悪魔稼業では先輩です」

何処か胸を張っているような、そんな誇らしげで愛おしい貌で小猫ちゃんは言います。

可愛さもさることながら、私は思わず申し訳ない気持ちにもなり、気づけばぎゅっと抱きしめてしまいました。

「わっぷ」

「っ、大丈夫ですよ。それを言うなら、私だって年齢的にはお姉さんですからね。そんなに弱くもありませんっ」

ごめんなさい。ごめんなさい皆さん。

アーシアは、悪い子です。

「ところでアーシア、昨日仕事していた、ってことだけど、どういう依頼だったんだ？ 帰ってくるのも遅かったみたいだし……」

と、イツセーさんに問われます。

その質問は皆さんが抱いていた疑問らしく、流れるように私へと視線が集中していました。

ピンチです。

正直に暴露してしまえば逃げ道は無く、黙ったままというのも問題かと。

そしてタイミングの悪いことに、今の質問でフラッシュバックした昨夜今朝の記憶が、子宮の奥の方をぐずりと蠢かします。

まるで——、私とは別の何かがこの奥に居着いているかのような、そんな快感が頬を紅潮とさせてゆきました。

「えっ、なんで赤くなってるの!? あ、アーシア!? どういうお仕事をしてきたのっ!？」

「い、言えませんっ。イツセーさんはえっちですっ」

「何だそれスゲエ気になるアーシアさんさわりでいいから教えてく

「ださいなんでもしますからっ!!」

「なんでも……、ああ、今朝烏丸くんが言っていたのは此れの冗句みたいなモノですか……」と、小猫ちゃんの眩きがぼそりと漏れましたが、今ははぐらかすのが先です。

「ごめんなさいイツセーさん。アーシアは汚れてしまった、悪い子です。」

「はいはい。遊ぶのはそれくらいにして？ 今日あなたたちに必要な契約を済ませておこうと思ったのよ。私の蝙蝠みたいな、使い魔を、ね。だから小猫、なんでそういう気合の入った格好に着替えてきたのかは聞かないで置いてあげるから、今日は眷属全員で使い魔の森へとピクニックに行きましょう?。」

「……残念です」

……そういえば、今更ですが小猫ちゃんは多分一回帰ってから、すつごく素敵なおドレスみたいな格好に着替えてから来ていたのでした。

胸も心なしか、いつもよりも大きくなって……。

……なんでしょう、先程とは別の意味で申し訳なく思えてきます。

▽
▽
▽

「へー、それでスライムに絡まれて、服が溶けたところを俺が間一髪
の召喚で助けちゃった、と」

「み、みたいです……」

使い魔の森ねえ。

此処とはまた別の異界っぽいな。情報を仕入れる為には、一度お目
にかかっておきたいもんだ。

意図していないが、こうして呼び出してしまった以上、件のオカ部

も大騒ぎだと思われ。

実は塔城の連絡先も知らないのです、というかそもそも異界で電波が届きはしないかと理屈でもわかるので、連絡は不要かと判断する。

そして次に、何故普通に召喚しただけの筈なのに、いつもアルジェント先輩ばかりが出てくるのか、を考察した。

そもそも先輩の話では、召喚チラシは使い切りタイプで、一回召喚したらアンケを自動的に書き記して持ち主の元へと戻ってゆくらしい。

らしい、というのは、先輩も聞いた話らしいので又聞きな所為だ。自動的、とは言うものの、其処には召喚者の願い事とその成果、そして満足度に比例しての自動書記が働く。

なので、この無駄に高性能な術式の前には捏造は不可。

甲と乙の相互関係をしつかりと把握し、その上でセーフテイの意味合いも含めた万能性召喚陣らしい（実は帰還も含めてだとか）。

——チラシの性質をスキャンした時に流した俺の魔力で、術式そのものが変質した可能性が微レ存。

「……というか、もっと他の服は無かったですか……？」

「いや、元々それ塔城に着せるつもりで借りてきた奴ですし。先輩じゃサイズが合わないのはしゃーないっすよ」

「いえ、サイズそのものはそれ程問題無いのですけど……」

何処かにもよると口ごもるアルジェント先輩を尻目に、俺はと
いうと着ている意味すら無くなってしまった襤褸切れとなっている
制服の熟れの果てを持ち上げて広げ、見事に修復は不可能だと判断し
た。

アルジェント先輩は現在、塔城に着せる予定であったメイド服（肩
出しミニスカ）で女の子座りをしている。

ちなみに個人的にはメイド服はロング派だが、子供に着せる予定で
あったから完全にコスプレ目的の趣味服としての選別しかしていな
かったので（実際、小倉さんにもそう提示して選別して貰っていた）、

アルジエント先輩は着るモノが無くこの状態だ。

塔城サイズでぴったりなのを考慮していた所為なのか、はたまた小倉さんが勘違いしていたのか、胸の差分で押し上げられワンピースタイプで製服されているらしき其れは丈が足らず、立ち上がればスカート部分が大事なところを踏むにする。

前を隠せば後ろが丸見え、後ろを隠せば前が丸見え、という、男子にとつては最高の1作だ。

加えて、フリルで覆われているものの剥き出しの肩や鎖骨を守る布は皆無に等しく、ウエストも絞つてあるので比較して普段小ぶりの胸でも大きく見える。えっ、これ本当に子供用？

そんな代物を、問題無い、とな……？

序でに言わせてもらおうとこの先輩、溶けた服と一緒に下着まで溶解させられちゃってるから、防御力は下がり切ったギリギリの数値だぞ。ドラ●エで言うならば『エッチな下着』と同レベル。

いくら一晩身体を許したからと言って、そこまで無防備になれるモノなのか……。

イマドキ女子ばねえ。

「こんな服を着せて、小猫ちゃんにナニをさせる気だったんですか……？」

あ、そっちつすか。

微妙に苛むような、ジト目で見上げてくるアルジエント先輩。

怖くは無く、どちらかというど拗ねているように見えるのは恐らく錯覚なのだろうと判断しておくこととする。

「いや、まあ呼べとうるさいので料理でも、と」

「……それだけですか……？」

「お恥ずかしながら、俺、家事能力がミジンコレベルなので」

えー……、と呆れたような目に心なしか思えてくる。

べ、別に問題ないしー。料理下手くそでもコンビニで買っちゃえばいいしー。

「あの、では、折角なので私がご用意しましょうか……？」

UFO見えてもまあ気にしないしー、と続けていた脳内再生はともかく、何故かそんなことを言い出すアルジエント先輩を2度見してしまふ。

え、マジかこの先輩。

ほぼレ●プ同然の事された相手の部屋で、其処まで無防備にry。
そんなデジャヴってる葛藤を他所に、帰り際にシャツ等と一緒に買ってきていた数点の材料をスーパーの袋からがさがさと探り、そのまま流しの方へととてとて進む。

そんな天使か聖母かと思わんばかりの先輩の生尻が、ふわりとしたスカートの下から顔を覗かせていた（詩的表現）。

▽
▽
▽

今朝も思っただが、本当にこの先輩は無防備が過ぎると思う。

夜道を前を周囲へと目まぐるしく気を遣いながら進みながらも、丈の足りないスカートから覗かせる真っ白なお尻を晒すことには留意せずに邁進する彼女を眺めつつ、ちよつと本気で心配になってくるオレガイル。

男の部屋にはホイホイくるわ、ラブホに誘われても疑問抱かずに付いてくるわ。

心中だけでも弁解しておくけど、アパートの共同風呂を使わずに場所を変えたのは先輩を慮つてのことだ。

同性相手の実家（確か、兵藤先輩は独り暮らしではなかった筈）で子宮洗浄させるのも忍びない、と思つての場所替えだったのだが、あの先輩ってばそういう行為を一切せず呑気にシャワーを浴びるだけで済まそうとしていた。

たっぷり膾内出ししてしまったのは流石に悪いと思っていたのに、ケアに手出しする気配が一切無かったのが俺の情欲の残滓に火を点けた。

いや、シャワー室がスケルトンであったことを云わずに部屋から見ていたのは悪かったかもしれないけど、自分の身体のことを自分で整調させない女子を放置も出来なかったただけですよ？

……掻き出した手段が悪い？ 悦んでたから良いじゃん（いいじゃん）。

そして現在。

どうやら俺に対してはそれ程の悪感情を持っていないようなのであるが（この時点で色々心配なのはともかく）、外に人気ひとけが無くなるまで時間を稼ぎたかった、というのも手料理を振る舞ってくれた理由であるらしい。

まあ、そんな恰好では表を歩けないのは重々承知の把握も容易い意気事情ではあるけれども。

そうならばただ待っているだけでも気にはしなかったのに、手持無沙汰が苦手な先輩と認識すればいいのだろう。

作って貰えた和食は出来高こそ拙く初心者丸出しであったけれど、食べて何処か懐かしさを思わせる良い出来だったし。良い嫁さんには、なりそうではある。

情緒面や羞恥心をキチンと現代日本に合わせられれば。

「あ、ちよつと待ってください」

「はいはい」

と、曲がり角にて停止し、こちらへと静止の手振りをしつつ、そつと角から先を覗き見る。

仕草が日々可愛いのはさておき、そうすることで尻を突き出す格好になっている点は、……指摘した方がいいのだろうか。

……眼福だから云わないが。

そして俺はというと、一応の背後からの壁役である。

このままコンビニにでも逝って（誤字に非ず）先輩の服を見繕っても良かったのだが、そうなる俺だけでなく先輩も色々終わる。

こう、体面的な意味合いで。

俺はというと、ノーパンメイドを従えてコンビニへ突撃する猛者、となってしまう。

先日魔法少女の格好をしたト●ロを目撃した覚えもあるから、この世界線の外観様相は考えるだけ無駄、と理解はしているのだが、流石に自分が『そう』思われるのは、ちよつと。

「……あつちの公園へ行きましょう。大通りは、さすがにまだ人がいっぱいいます」

「仰せのままにお姫様」

隠れるように、実質隠れながら木々の多く、夜間ならば見通しも悪い公園へと足を運ぶアルジエント先輩。

中は中で色々と言女の機微に挑戦中の方々がこの時間帯ならば多めにいらつしやるのではないかな、などという感想を抱きつつも言いは従う俺烏丸。

……案の定、自分の『気配を読む』という対人把握能力の前には居場所を丸裸にされているアベック（古）らが。

そして、それを観察している暇人もまた、その周囲には芥のように散乱とじていた。

こつちの方が人気が多いじゃねーか……。

『アツアツアツアツ!!』

『オラオラオラオラ!!』

『アツイクウツ!』

『ナカニダスゾツ!』

要らん副音声まで届いて来た。

虫の声に耳を傾けたいと思う、今日この頃。

対人把握能力とか、必要ないみたいですね。

そして、そんな俺とは裏腹に、アルジエント先輩の様子は結構初心だった。

……なんか、真っ赤になって俯きがちに進むんですけど。

こう、木に依り掛かるように、やつぱり隠れながらなんですけどね？

アンタも昨夜散々やったやん……。

「きよ、今日は暑いですねっ」

「あー、そうですね、熱いですね」

——周囲がな。

居た堪れなかったのか、雑談へと意識を向けようとする先輩。

そしてそう口に出す先輩はというと、どちらかという涼しそうに思えてくる。

特に下半身とかがな。

『——から、——じゃんか』

『——死んでください。——いやマジで』

……ん？

なんか今、すげえ聞き覚えのある声が聴こえたような。

対人把握能力（要らない子っぽい）を働かせるまでも無く声のした方へと視線を移せば、見覚えのある白髪とうちの学校の制服。

ていうか、塔城と兵藤先輩だった。

何やら雑談、というか、罵り合い（一方的な）をしながら道を来や
るお二方に、いつその人預かって貰えばいいか。と、思考しかけた
時には、

「っ!? こ、こいつちにつ」

「へ？ あちよ、」

茂みへと手を引かれて、道から外れる俺たち。

一先ず、他の方々は居ないようだけど、と心配するのも束の間、木々に隠れた先輩は通り過ぎる彼らから怯えるように息を潜めていた。

いや、なんで？

と、疑問符を浮かべたままされるがままになる俺を他所に、公園の歩道を近づいてくる彼らの会話が夜道へ響く。

「だからっ、アーシアが突然消えたのは『召喚された』からなんだろうっ!? だったらその客を探すのが一番手っ取り早いじゃねーかっ！」

「……だからといって、こんな場所へ連れて来られた私の気持ちをもう少し慮っては如何どうですか？ 茂みでハッスルしているアベックらとアーシア先輩と、どういう関連で連想したのかを説明してください」

「アーシアが言えないエッチなお仕事をしているというのならばそれを寸前で食い止めるのも保護者の役目っ！ そしてこの間チラシを配ったのはこの近辺だから、今のアーシアの格好（制服溶けV e r .）で興奮したお客さんが連れ出す恐れも在るっ！ エッチなお願いを要求しても対価を支払えない以上、思いつめたお客さんが悪あがきにそれくらいやらせようとするとする恐れだっ！ であるじゃないかっ！ どう!? この俺の完璧な推理っ！」

「……………その推論が出てくる思考の残念さに反吐が出ます」

「辛辣っ!?!」

推論への思考の流れが噂通りだなあ、とある意味あの先輩に感心を抱く。

なんとというか、『女の子と付き合えたらやりたいことリスト』にでも載せられていそうな要求レベルを推論として予測できる、ってことは、兵藤先輩もそういう考え方を持っている、って告白しているわけだよな。

うん。エロに見境のない、男子高校生的なある意味健全な思考だわ。

そう感心していると塔城が、路上にへばり付く糞虫を見下すような目をしながら、続きを促していた。

「……そしてその現場をpushさせたとして、仕事だとしたらどうするつもりなんですか？」

「そりゃあ止めるぜ。アジアはまだ世間知らずなんだから、そんなエッチなことはさせませんっ、つつてな！」

「ほほう」

「そしてそういうプレイに連れ出されそうなアジアのエッチな姿もばっちり保存するぜっ」

「……ほほう」

塔城の視線が益々鋭くなってゆく。

多分、後半の台詞は脳内で思い描いていた程度だったのだろう。口から洩れていたけど。

予想した通りに、随分と自分に正直な人だなあ。

……ところで、アルジエント先輩はなんで未だに息を潜めているワケ？

『アアンツ！ モウダメエツ！』

——と、俺たちの反対側の茂みから、一際大きく嬌声が響く。

それがこつちにも届くのだから、間の道にいる彼らにも当然届いている。

兵藤先輩も塔城もそつちへと視線を向けて、ガサガサと揺れる草むらと肉のぶつかるパンパンという音に釘付けとなっていた。お相撲かなあ？（すつとぼけ）。

「……で、なんで合流しないんです？ あの2人、アルジエント先輩

を探しに来たんじゃ？」

「……っ、今は、無理ですっ……！」

……格好かなあ。

まあ、メイド服だし、ノーパンだし、時間も時間だし。

色々と勘違いを推奨してしまいそうな傍目になっていることは間違いない。

——そして、それに現在付き合っている俺も、そろそろ限界っぽい。考えて観てくれ。

目の前で木に寄り添い、中腰の姿勢で草むらに身を屈めながら歩道側の様子を探ろうとしている美少女の、背後に控えて尻を隠す位置に立たざるを得ない俺の立ち位置を。

そして、現場には他のカップルらが、大胆にも発情真っ盛りな状況が大音量で情欲を注ぎ合っているわけで。

……例え理性の化け物がこの場に居たとしても、逆らえないと思うんだ。

☆「オーデイエンスと50：50あと何だっけ」

「っ!？」

ぐい、と私のお尻を掴む感触に、思わず出そうになった悲鳴を必死で抑えます。

手で自らの口を抑え乍ら首だけを曲げて背後を振り返れば、其処にいたのは先ほど茂みへと手を引いたそらくんの姿がありました。

知らぬ人ではなかったので一瞬安堵しましたが、すぐにそんな場合では無いことに思い至ります。

表の公園の歩道には、イツセーさんと小猫ちゃんが、反対側の茂みを窺うようにまだ佇んでいるのです。

「そ、そらくん……っ、ふざけるのは、あとにしてください……っ!」

小声で叫ぶように、というしたことのない声量で彼を諫めました。しかし、彼の手はぐにぐにと私のお尻を弄って……っ、

「んっ、ひう、あっ……!」

ああ……、昨夜も身を任せた手つきで、何処か優しく、それでいて男らしい無骨さも失せてない乱雑さが、私の肌を支配します。

彼の身体はそのまま私を覆うように近づき、空いた手が服の上から私の慎ましい胸へと伸びる。

下着も着けていない、剥き出しの鎖骨の下、胸元へかけて、拙い鎧衣が紙切れのように剥ぎ取られます。

前屈みとなつている所為か、普段よりもゆきりと重みを自覚できそうなふたつの膨らみ。その片方を、彼の手の平が愛おしそうに揉みしだく様に、昨夜のようにされるがままとなつてしまうのでした。

「はっ、あうっ、あん……っ」

駄目なのです。

彼には逆らえない、そう自覚していても、今だけは駄目なのです。元々、こんな場所へ逃げ込んだのは、イツセーさんとも小猫ちゃんとも鉢合わせしたくないが為です。

イツセーさんは私の好きな人で、小猫ちゃんはそらくんの恋人です。

私がこんなそらくんにされるがままになっているところなど、お2人に対する最悪の裏切りでしかないのです。

ですから、例えこの手がとてもキモチ好くても、この快感を失うことを惜しむ感情が燻っていても、この関係はお2人に気づかれることなく、……っ終わらせなくては、ならないのです。

んやあ……！ 先っばいじめちゃらめえ……っ！

「……っ、兵藤先輩、いつまで見てるんですか。速くいきますよ」

「………はっ！ あ、ああ、そうだった。思わず。……って、小猫ちゃんも見入って無かった？」

「その煩わしい口を殴って塞がれるのと哭かなくなるまで殴られるのと、どっちがお好みですか？」

「何その選択恐怖っ!」

……あ、ど、どうやらお2人はこの場を後にするようです。

良かった、いつまでも我慢できることでもありませんし……？

……あれ？ なんで小猫ちゃんは動こうとしないのでしょうか……？

「おうい、どうしたの小猫ちゃん。まだ見足りない？」

「殴りたいのですか。いえ、其れでは無くて、兵藤先輩、アーシア先輩のケータイに連絡は入れましたか？」

ッ!?

そ、そういえば、同居にあたる際にお義母様から携帯電話を渡されて……っ!

「あ、そつかそつか、こつちから連絡入れれば早いのか」

「まったく……。早くに気づいてくださいよ」

「すんまそん。えーっと、アジア、と」

だ、駄目っ、鳴る前に出ないと……っ!

▽
▽
▽

「あ、繋がった。アジア? 大丈夫か?」

「ど、どうも、すみません、ご迷惑を……」

ん? なんか音が二重に聴こえるような。

気のせいかな。

「いや、仕事で急に呼び出されたんだろ? むしろあの場から救助が成功したみたいなものだし、気にすんなって」

「は、はい。あの、ふあっ、ん、い、イツセイさんは、今何処へ?」

な、なんかアジアの声が艶っぽい……?

——はっ、まさかマジでエロエロなお仕事……!?

「え、えっと、駒王町に戻って来たところだけど、迎えに行くからさ、どの辺りで仕事してるのか教えてくれないか?」

何処のドイツだ、アジアにエロエロなことを要求している変態紳士はっ!?

待ってろよアジア、今助けるぞっ!

『わ、私なら大丈夫ですからっ、幸い、呼び出してくださいました方も優しい方ですし、1人でも帰られますっ』

「い、いやでも、夜道だし、危ないって」

あ、あれー？　アジアにはそれなりにフラグ立ってたはずだよなー？

此処で断られるって、くない？

▽▽▽

「ほ、本当に大丈夫ですから」

危ないところでした……。

そらくんがいち早くに携帯電話を取り出してきてくれたお蔭で、咄嗟の事にもなんとか対処できました。

問題は、どうやってイツセーさんに諦めてもらうか、ですけど……っ！

「(そ、そらくんっ、お尻、それ以上いじっちゃやですっ)」

そんな意図を視線に込めて、すぐ後ろの彼へと睨みつけました。

声を歩道にまで届かせないようにしながらなので、余計な言葉を使えません。

お行儀は悪かったかもしれませんが、彼はそれを了解したらしく、肩を竦めるように身体を私から離します。

『い、いや、大丈夫ってことはないだろ？　アジアだって日本に来てまだ日が浅いし、道順だってキッチンと把握しているわけじゃないんだらうし』

歩道の声と電話越しの声が二重に響きます。

もう、なんで今日のイツセイさんは聞き分けが悪いのでしょうか。心配してくださっているのは有り難いですけど、度が過ぎると只のお節介でしかないというのに。

「大丈夫です。何なら、呼び出してくださいました方に送っていただきますし、」

「『こんな時間になったのだから、ソイツのところから帰って無かったから遅くなったんだろ？ 高校生を今まで帰さないとか、信用できる奴じゃねーよ』」

……。

「イツセイさん、こんな時間になったのは私がそうお願いしたからです。制服も溶かされたあんな恰好のまますぐに帰ることが出来るはずが無いから、人通りの少なくなつた時間帯をお願いしたんです。仮にもお客様に、そういう言い方をするのはどうなんですか？」

「『え、そ、そうなのか？』」

「そもそも、私の格好があんなになつたのはイツセイさんが早くに助けてくれなかつたからですよね？ 小猫ちゃんだつて一張羅のお洋服を溶かされていたのに、ただ眺めていたのはどなたでしたか？」

「『うっ、そ、それはあく……』」

……なんだか気分が悪いです。

そらくんは悪いことをしたわけじゃないのに、私がお願いして今こうしているのに、それも知らないで悪く言うイツセイさんにちよつとだけご立腹です。

ともあれ、此処はそれを弁明するのも可笑しな話ですし。

「イツセイさんが言うのなら、私はキッチンと一人で帰ります。けれど、恰好がアレですから、もう少し遅くなりますからね」

『……はい。ほんとスイマセンでした……』

まったく……、って、え!?

「(そ、そらくんっ? まだ通話は終わってな、)——ひぎいつ!?

くくくっ!

「……怒られちった」

「……ぎまあw」

あ、危ないところでした……っ!

歩道の方からはお2人の会話が聴こえますが、私の悲鳴は届いてないようです。

何を焦っているのかと言えば、そらくんがおつきくなったおちん●んを後ろから突き入れた所為ですっ。

幸いにも、この場には他にも色んな女の人の声が響いています。

私の悲鳴は、運よくそれらに潜められた様子でした。

「は、あ、ぎ……っ!」

しかし、いきなりの挿入なので異物感が凄いです。

痛みこそは、昨夜の最初の方で色々緩和されたみたいなのですが、流石に突然無理矢理に、というのは初体験でした。

……あ、此れが桐生さんの言っていた、世の女子が一通り体験するという処女喪失に近いのでしょうか……?!

「……んー、じゃあ、どうしよう?」

「帰ります。お疲れ様でした」

「躊躇無し!? ふあ、ファミレスでお茶でもしないっ!?!」

「いえ、ファミ●キを買って帰る方が先決です」

コンビニに負けた……。と項垂れるイツセーさんは、既に通話も切っているご様子。

私はというと、ぐりぐりとした探る様な動きに呼吸も荒く、今は身を潜めるだけで精いっぱい。

膺内の弱点を重点的に責められており、他の事に感ける余裕も残ってませんでした。

「はっ、あっ、んあっ、あっ、」

声が漏れ、他の方々の嬌声に紛れながらも、艶も消しきれずに夜中へと響いてます。

確か、教わった話では背後から突く、という行為は実に野性的なSEXであるとか。

人の皮を剥ぎ取られているのは、私なのでしょうか、それとも。

「んぎっー」

時折、中の更に奥へと突き入れられる衝撃で、断末魔みたいな悲鳴も洩れます。

丁度その時、茂みの向こうのイツセーさんが。

……まだ帰っていないかったイツセーさんが、こちらへ注意を向けるご様子に気付きました。

「……っ」

木を抱えているのは別の手で、自分の口を急いで塞ぎます。

ふうーふうー、と呼気が漏れるのは、そらくんが未だに腰を動かしているから。

衝撃は断続的に私を苛み、気づかれないように、と息を潜めることが、何故か自分を酷く惨めに感じていました。

そしてその最中、ごくり、と喉を鳴らす音がやけに大きく響いたのです。

——イツセーさんでした。

彼は、こちらに興味を抱いたらしく、ゆつくりと茂みの方へと手を伸ばし、近づいてきます。

私はそれを遮ることも出来ずに、彼の近づいてくる様から目を離せません。

——ざり、と土を踏みしめて、あと十歩分。

——一歩進んで、あと九歩分。

「うふうー……っ、ふうー……っ！」

ああ、もう手を伸ばせば茂みを掻き分けられるくらいの距離に届いてます。

私は見て居られなくなり、咄嗟に顔だけはばれないようにと、視線を伏せてイツセーさんから逃げたくなるのです。

あんなに、そばに居たかったのに……！

「……うお、すげ……」

っ

「……………覗き見ですか変態先輩」

「っ!? こ、小猫ちゃんっ!? 帰ったんじやなかったのお!?!」

一瞬の、ことでした。

イツセーさんの感嘆とした呟きが、上から漏れたと思った時、呆れたような小猫ちゃんの声でガサガサと遠ざかる気配。

……ば、ばれてませんよね……?」

「部長からお呼びがかかって、兵藤先輩を召喚したいお客様がい

らっしやるとのことですので、呼びに来ましたが。」

「いや違うんだって！ 木がすつげえ揺れてるから、どういうことになってるのかなあつて純粹な疑問でっ！」

「こんな場所ならやってることは一つでしょう。敢えてそこへ覗きに向かうとは……。そちらの方、ウチの変態がお邪魔してスイマセン。ホラ、行きますよ変態先輩」

「弁解くらいさせてっ!? ナチユラルにお名前で罵らないでっ！」

「変態先輩のお名前は最初から変態^{兵藤}変態^誠先輩じゃないですか、何を馬鹿なことを言ってるんですか変態」

「先輩すら取れたっ!? 仕方ねえんだって！ 覗いて視たら洋モノなんだもんっ！ 顔までは見れなかったけどさあッ！」

「死ねばいいのにこの変態」

ば、バレなかったみたいです……。

遠ざかってゆくお2人の気配に安堵、する間もなく。

「あ!?! あっ！ あんっ！ ふあっ!?!」

そらくんの動きが、突き出す衝撃に、より一層激しく揺さぶられます。

彼の剛毅な其れは牆壁を粘膜が削げるほどに擦り上げられ、子宮の入り口へと何度もキスをします。

その衝撃が走るたびに、私は獣みたいに嬌声を上げます。

最中に驚いたのは、突き上げられた勢いのままに、私の腰が浮き上がってしまった所為でした。

「あっ！ あっ！ あっ！ んああっ！」

脚は既に地に付いておらず、私は落とされないように必死で木を両手で抱えて。

視界はぼやけたように滲んで、時折昼間のように明るく染まりま

す。

かと思えば何も見えなくらいに暗くなったりと、目まぐるしく変容する様相の前に、私は光の中に置いて行かれているような錯覚に陥っていたのでした。

その飛んでいるような感覚が、また私を快楽に浸らせる麻薬のように追い縋るのです。

逃げられるはず等、考えることも出来ません。

「んあゝっ！ あゝあゝっ！ んゝあゝあゝあつ！」

パンパンパンパン、って私のお尻が彼の肌とぶつかる音が卑猥に響く中、彼の其れの変容も膣内は敏感に捉えます。

膣中で膨らんでいるのが感じ取れます。

何度も交わったからこそわかる、男性の本能が、私を孕ませようと準備も万端なカタチへ準備してゆくのです。

「出じでえっ!! なゝがに、出じでぐだざいいっ!!」

そして女の本能の求めるままに、絶頂に至りそうな相手を拒む真似なんて出来ません。

喉が枯れるような声で叫んで、私はそらくんの射精を必死で要求していました。

「あゝーっ！ んゝあゝーっ!!」

~~~~~!!

——ドクツドクツ、って激しく注ぎ込まれる熱いモノに、雌として蕩けた声が本能で漏れます。

子宮に直接、解けない熱を帯びたその粘液が伝う感触を、私は悦んで迎え入れました。

▽  
▽  
▽

「あっあっあっあっ」

コアラのように、昨夜もシタ格好になって、そらくんに正面から抱き着きながら腰を動かされます。

これ、だいしゆきほーると言うそうなのですが、すごい密着する姿勢なのもそうですけど、深いところまで届くのですごく好きです。ゆっさゆっさ、って身体のぜんぶを預けるのがとても心地いいんです。

「んうっ、やあ、もっとお」

その合間に挟まれる、口の中を舌が蛇みたいに蠢くキスも、私を離さない理由なのだと思います。

身体じゆうが敏感にそらくんを求める性器になったみたいに、上も下も開いた穴は彼限定で全部全部任せてしまいます。

そうしていると、次第にまた膣内で膨らむお肉の熱が、いつしよのタイミングで悦ぼう、って呼びかけてくるんです。

「あっあっあっ、いくっいくっ」

どぶ、と子宮に収まり切らない精液が、私のお●んこから溢れ出ました。

ああ、勿体無い……。

……あ、そういえば、ドラッグストアに寄るのを忘れてました。

検査もまだですけど、私はどんな結果を求めているのでしょうか……。

ぼんやりとそんなことを、彼と繋がったままおっぱいを舐められながら、私は自分の期待の天秤がどちらに傾いているのかを思い測るのでした。

あんっ、噛んじややですう……。

「時には十字架が愛に力を与えるとか」

「——あ。塔城、ちよつといいか？」

開けて翌朝、しっかりとアルジエント先輩を送り届け、碌に眠っていない若干の睡眠不足であったがために、俺は登校と同時に机にて爆睡を敢行してしまっていた。

気が付けば4限目で、これから昼飯ということ俄かに騒がしくなった教室内にて目が覚めたのだが、鞆から教科書の類も出していなかったことに今更ながら気づいて持ち物を漁つての冒頭の発言。

忘れていた事実を、唐突に発見してしまったのである。

「なんですか烏丸くん。ボッチである事実に今更ながら気づいてお昼を一緒に食べてくれる彼女が欲しくなったのですか？」

「アルジエント先輩に渡して欲しいモノが、っておい何その言い草。誰がボッチだよボッチちゃうねん（震え声）」

「声震えてるじゃ——ちよつと待ってくださいなんでア—シア先輩なんですか其処はこんな近くにいる可愛いクラスメイトでしよう謝罪と賠償を請求しますから今すぐに私になんらかのプレゼントをくださいなんなら交際宣言でも構いません」

「句点読点入れるよ、声に抑揚つけろよ、息継ぎしろよ。そして関西弁はスルーか。相も変わらず俺のボケを全捨てしやがって」

俺だって本当はツツコミキャラなんてやりたくなかったんだ！

文字媒体にすれば実に読み辛い科白廻しを果たしてくれた塔城へと、俺の心の声が空しく響く。

きつと、これも聞き届けてくれる人は、いないのだろう（諦観。

「ボケキャラを主張しても烏丸くんを支持するツツコミはそうそういないと思いますけど」

「辞めてよ悲しい現実突きつけるの……」

「5限目は体育だそうです。組んでもらえる相手は果たしていらつしやるのでしょうかね」

「お前鬼か」

「彼女です」

違うよね？

因幡ー！オレだー！助けに来てくれー！

死体蹴り宜しく繰り出される塔城のワードラッシュに、親友と呼んで然るべき彼へと届かぬ救援を心の中心で絶叫していた。

そんな俺の葛藤はどうでもいらしく、泣き濡れた俺を放逐したままに質問の続きへと移る。

「で、アジア先輩に何を渡して欲しいんです？」

「うん、ちよつと忘れ物をね……」

「何故アジア先輩の忘れ物を烏丸くんが……？」

「昨日の晩に会った」

嘘だけど。

いや、会ったのは嘘ではないし送り届けもしたけど、正確には、忘れ物をしたのはその更に前日の初邂逅の時点。

制服を脱いだ拍子に落としたのであろう、簡素なロザリオが部屋の隅に落ちていたのである。

萌香ちゃんみたいなかぶつちゅガールもうちの下宿先には居ないと確認はとつたし、何より俺の部屋に落ちていたのだから下手人もとい落とし主は1人しか思い当たらない。

そんなわけで手に入れた銀細工の拙い十字架型ロザリオを、この2日消費したものの未だ衰えずに廻復する余った魔力を適度に廻し、<sup>高位</sup>洗礼と<sup>高準</sup>洗練と<sup>便利</sup>祝福と<sup>属性</sup>聖別とを<sup>附加</sup>施したスーパーアミュレットへとジョグレス進化を遂げさせて、折角なのだからと持ち主へと色を付けて返還しようという心積もりとなった次第。

べ、別に二晩続けて犯ったことに対する後ろ暗い気持ちがあるわけじゃねーしっ！先輩が無防備が過ぎるから、悪意を持って接する相手には最大限の防犯設備を、って用意したただけなんだからっ！勘違いしないでよねっ！

そんな、元の世界でも程よく奇跡級または宝具扱い出来そうなレベル（になったことに自分でもやや驚き。この世界、ひよつとしてアストラルステージがネギま世界よりも下垂してる？）の一品を鞆から取り出して塔城の手へと渡そうと――、

「――ニャッ!？」

――したところで飛び退かれた。

盛大に他の生徒の机と椅子とクラスメイト本人らを巻き込んだの後方推進ジェット逃亡に啞然としつつ、――面白そうなのでそのまま追いかけてみた。

「うゝにゝゃゝあゝあゝあゝあゝ!？」

「あははー、ほーら、待て待てー」

「ちよつとお!? 烏丸くんすてい！なんかよくわかんないけど小猫ちゃんを煽らないでツ!？」

クラスの女子（巻き込まれた娘）が床に伏せつつ絶叫する声を後ろ髪に、廊下への逃亡を果たす塔城をアルカイックスマイルで追いつく。

決して死体蹴りされた恨みを晴らそうとしたわけでは。

いつもと違う感覚が新鮮なので、ついつい昼休みをリアル鬼ごっこに費やしたのは偏に若気の至りであると数十分後に猛省。

ちなみに逃げ回る塔城は何故かネコミミモードで、ああ、だから十字架が苦手なのかな？と妙に納得してしまうオレガイタ。

▽  
▽  
▽

放課後、木場に呼ばれていつもの通りにオカ部の部室がある旧校舎へと足を運ぶ。

アーシアも一緒に来てくれはするけど、今日は朝から若干不機嫌だ。

アレですか。先日、知らぬうちにお仕事へと赴いていたアーシアさんの仕事内容を問い詰めたのが一番まずかったですか。

それとも、今日はこつちが仕事に時間をかけすぎて朝帰ったら既に帰宅していたアーシアさんに、事細かく身の無事を問いかけたのがまずかったですか。

ちよつとお父さん気分出ちやっただんです……。

電話口じやお客の事悪く言つちまったのもマイナス査定に響いているっぽーい……。

「……イツセイ君、アーシアさんにきちんと謝った方がいいよ？」

「わかっているけどさあ……、そもそも話したくない、って雰囲気させてる女子をなだめる経験なんて俺にあるわけねーだろ……」

自覚しているけれど、言葉にすると尚更情けない事実確認にブルーな心も泣き濡れる。

天国のレイナーレツ！ お前がもう少し今時女子らしい態度で俺を籠絡すれば、もっと経験豊富な卒業ボーイになれていた筈なのにツ！

死者に鞭打つ気は微塵も無いけど、愚痴をこぼすくらいはやつても構わないよな？

ていうか、最近おっぱい成分が不足しがちで、悪女で悪役でも見惚れたおっぱいを想い起すくらいの事は止め処無く進むわけで。何が？ってナニがだよ、青少年のリビドーだよ。

アーシアが同居しているお蔭で女子分が足りない、とまでは云わない。そもそも、女の子と一つ屋根の下で、というシチュがあるだけで年頃の男子垂涎なのは間違いない。だが、お蔭で自家発電のタイミン



グが現状開店休業中というわけだ。

……自室でこつそり？

出来るわけねーだろツ!? 自慢じゃないがうちの壁は薄いつ!

部屋数も少ないから、アーシアの部屋はすぐ隣だツ! 純粹で元修道

女のアーシアに、聖母とか呼ばれていた天使クラスの美少女に、男の

●●る様子を掠らせるとかお前らは何処の桐生だツ!!

——なんか今、変な電波が混じったような……。

そうした葛藤の中、気づけば部屋前へと辿り着いていた俺たち。

部屋を開けようとした木場が何故か静止して、普段は崩さないイケ

メンスマイルを驚愕の表情へと変えていた。どした？

「……っ、まさか、此処に来るまで気づかないなんて……っ」

……ん、中学二年生心の病か何か、かな？

思わず言葉に言い表せない顔で佑斗のことを見遣つてしまう。

声をかけるべきかどうか悩む間もなく、「失礼します」と、部屋の戸を開いた。

——其処にいたのは、銀髪スタイルの良い美人なメイドさんであつた。

つていうか新しいおっぱいかツ! 新キャラかツ! よつしや来

たこれで勝てるツ!

「先輩は誰に勝つ気なのよ」

「そりゃあ決まつてんだろ、粒ぞろいの我が部に新投入されるとなれば新たなハーレム要員なのは間違いないだし、此処で一気にポイント稼いでランキング入りを目指し誰お前ツ!」

小猫ちゃんの隣で紅茶啜つてる、メイドさんとはまた違う見知らぬ男子に遅まきながらツツコミを入れた。

ゲスうい……。等と呟くソイツは、本当に見知らぬ奴だ。

やや短め乱雑に刈つてある小猫ちゃんとはまた違う印象を受ける

白い髪に、焼けたような浅黒い肌はどちらかと言えば褐色と呼べそうな程で、そのままチヨリーツとか云われても違和感が無いくらいにはヤンキーな見た目。

う、うちの敷居は簡単には跨がせんぞおっ！と警戒心が表立つのも仕方のないことだと思う。

つうか、うちの制服駒王着ているけど校風に沿わないようなチンピラ具合じゃ我が校の生徒と思うには些かイメージに沿わないっす。むしろ近隣の仏滅高校とかから出張して来た他校生なんじゃね？

「あれ、そらくんじゃないですか。どうしたんですか？」

「ちよ、アーシアさんッ!？」

小猫ちゃんの隣に居るだけでも許せないのに、アーシアが顔見知りっぽい様子で簡単に懐へとッ!

どういうことっすかアーシアさんっ!? すげえ納得いきませんっ!

近づいて行ったアーシアに対処するべくか、ソファから立ち上がって迎える「そらくん」と君付けで呼ばれた彼。

身長はアーシアより高めで、多分俺よりも頭一つ分上だ。

……男は身長タップとちやうねん……。

「どもアルジエント先輩、忘れ物を届けに参りました」

「その騒動で昼休みを犠牲にされた被害者です。先輩とのご関係を説明してください」

「昨日会っただけ、って言っても聞かないんですよ、コイツ」

「浮気の可能性は出足前に封じる所存です」

……え、なに、小猫ちゃんの彼氏かなんかなの……?」

気づけばリアス部長も紅茶を持った手が止まっており、驚愕の表情で2人をガン見していた。

朱乃さんは部長程驚いた様子じゃないけど、あらあらまあまあと今

にも口にしそうなくらいには口に手を当てて目を見開いていたし。  
隣の佑斗はというと、多分部長以上の驚きっぷりである。すげえ目  
見開いてるし。

「ぼ、僕が部屋に入るまで気づかなかった……!? 一体誰なんだ彼  
は……ッ!?!」

——まだやってたのか、お前。

そんな佑斗はさて置き、一先ずは自己紹介とかからして欲しい  
なあ、つていう意図を含めて視線を向けて見る。

相も変わらずチンピラ具合が表立つ彼は、呆れた顔で小猫ちゃんの  
頭をぐりぐりと撫でていた。

や、やっぱ彼氏なのか……!?! その気安すぎる態度……っ!?!

「クラスメイト相手に浮気とか、可笑しなこと言うなーお前」

「ふにあ……。……いい加減認めましょうよ、学園裏サイトでは公  
認ですよ、私たち」

「……え、マジで?」

顔を蕩けさせた小猫ちゃんがそいつの言葉で一瞬で真顔に戻り、そ  
の台詞内容に今度はそいつの表情が固まる。

わ、わからん……。本気でどういいうご関係なんだ……。!?!

「小猫ちゃんと恋人、ではなかったのですか……?」

「違います」「そうです」

「……どっちですか?」

「と、とりあえず、そっちの奴の言葉を信じるならクラスメイトつて  
ことだよな! この会話ヤメヤメ! ほら、部長も楽しそうにわくわ  
くした顔見せないで、もっとやることあるでしょっ!」

まだ疑問が残って居そうなアシアを脇へ寄せて、あえて空気をぶ

ち壊すように2人の間へと入る。

小猫ちゃん侍らせといてアーシアまで懐へってハーレムかよお！  
佑斗みたいなイケメンでもない癖にふざけんなよお前え！

「——ああ、自己紹介遅れました。塔城とはクラスメイトやってます、烏丸イソラです。そらくん、って呼んでね！」

「兵藤一誠だ、イツセー『先輩』でいいぜ、烏丸……っ」

「……何対抗心燃やしてるんですか」

漢には譲れない時があるんですう！

「木場佑斗だよ、よろしく烏丸くん」

「どもども。そらくんで良いって言ってるのに、頑なだよねお宅ら」

「おい今さらっと暴言吐いたぞコイツ！ 先輩を敬わない奴は帰れ帰れ！ かーえーれ！ かーえーれ！」

「得体の知れない相手には警戒心も抱くさ」

「なるほど、納得」

笑顔で握手しつつ、そんな会話を交わす2人。

……あれ、俺だけなんか場違いな思惑で踊らされてね？

「イツセー、少し黙っていてももらえる？」

「……はい、部長」

気づいた時には笑顔のリアス部長に肩ポンされてた……。

……まるで道化だぜっ！

「まあ得体の知れない俺は用事を片付けたらすぐに帰りますんで」

「ごめんなさいね、何時もはこういうことをする子じゃ……なくてもないけど、ほら、知らない子がいて警戒心が強いだよ」

「犬みたいなパイセンっすね」

誰が犬だよ噛みつくぞわんわんっ!

「イツセー、ハウス」

きやいん……。

「ぎ、て。で、忘れ物なんすけど……お?」

と、烏丸が自分の鞆を漁り始めたところで、何かに気づいたように部屋の別方向へと視線を傾ける。

疑問に思っただけでもそちらへと目を向ければ、床には輝く召喚の魔法陣が……っ!?

「……フェニックスの紋章」

ぽつりと、小猫ちゃんが呟くと同時に、部屋中に焔の嵐が巻き起こるっ! 「熱っっ」

それは烏丸も巻き込んだらしく、火が走るのと同時に、何かがその中心へと手放すように放り投げられる様が目に映った。

ソレが何なのかは、俺には見測れなかった。

次の瞬間には、召喚陣の中心には男性が立っていたからだ。

「——ふう、人間界の空気は薄汚れているな。迎えに来たぞ、愛しのリアぐあああああああ!」

妙に気障な態度で立っていたそいつが何かを喋る、が、最後の締めに至る前に胸を掻き毟って苦しみだしていた!?

な、なんだ!? アイツに一体何が起こってるんだ!?

「が、ぐ、げえ、あひ——っ」

——ぱーん。

……と、熟れ過ぎた柘榴のように男の上半身が弾け飛ぶ。

その残された下半身の上には、鈍く輝く十字架が燦然と……十字架ア!?

「……………落としたんですか、烏丸くん」

——アイツが持ち込んだのかよおツ!?

驚愕のままに烏丸へと、小猫ちゃんの眩きですべての視線が集中する。

が、烏丸の視線は未だに吹っ飛んだ男性へと向いていた。

……何処か、冷めたような目が。

「あ」

そんな彼の漏れた声に、部屋中に飛び散っていた男性の肉片が焔へと変わり、下半身へと集まってゆくのを知覚する。

さ、再生するのか……。

良かった、この部屋で人死にとか出なくて……。

「——g、ぐ、が、あつ、くそつ、一体何が起こぎやあああああああ

ああああ!?!」

——ぱーん。

……………どうやら再生の際に、十字架を巻き込んだままに果たしていたらしい。

二度目の破裂がビデオ再生のように眼前で巻き起こり、どうしていいのかもわからない俺たち。

再生。

破裂。

再生。

破裂、と幾度となく、それはまるで壊れたおもちゃが『のたうつ』かのようにも覗えた。

その残虐的な破裂と再生の無限ループは、男性が召喚陣から自発的に還ってゆくまで繰り返された。都合、十数回ほど。

「い、一体誰がこんな惨たらしいことを……っ」

まず間違いなくお前だよっ！ お前の仕業だよおっ!!!

声を震わせる烏丸にそんなツツコミを入れた時、何故か輝くような目を向けられたのが一番怖かったです……。

——あ！ そういえば烏丸との関係をまだアジアから聞いてねえ！

☆「お酒は20歳になっても弱い人は控えろ」

凄いわこれ。何これ凄い。

擬音にするならばふかたぶもにゆずむ、と肉感たっぷりな音のどれかが効果音に選択されるのか。

ともかく、そんな感じの感触に顔中が包まれた。

全身の力を抜いても支えてもらえる、というのは女子相手では中々無いもので……あ、2人くらい居たな。

「あつ、はんつ、んつ、はあんつ」

経験上では一応の相手がいた、いわゆる『おっぱいまくら』と呼べるプレイに身を任せて、ぐりぐりずむずむと谷間に挟まって顔の横にてピンと勃つ尖端のぷつくらとしたさくらんぼを両方、指で摘まんで虐める豪華特典。

その分下の方はおざなりになってしまっけど、むしろ『こういう時は俺が愉しむのが第一な遊びだ。』

そっちはそっちで埋もれたままにて放置して、今はしっかりと反発力のある乳肉を思う様に味わせてもらおうとしよう。

低反発枕とか水風船とかではこの柔らかさは再現不可だと思われるね。

掴むことで形を変えるのに、しっかりと元へ戻ろうとする弾力性と、手に吸い付くかのような柔肌のしっとり感は複合されて初めて快感を男へと思わせる『モノ』だ。

おっぱいマウスパッドとか抱き枕とかじゃ微塵も足りない、男の欲望と生物としての本能は人の手では未だ追い付くことは無い理想の果ての更に果てなのだ、改めて思い知らされる。

え、心理描写とか分析とかマジでどうでもいいって？ それより『埋もれた』何かが気になる？

まあ俺ら2人とも全裸だし、正面から身体を重ね合っているんだし、答えは一つしかないでしょ。

「あ、あなたあつ、おっぱいばかり苛めないではあんつ！ し、したのほうもおつ」



聞かない。

ずりずりと顔を埋めたまま、変形可能な乳肉を傾けて、おもちゃみたいにぐいっと伸ばして先っぽを口へと含む。

無論、こちらも顔向きくらいは傾けるけども、こんな久々に上質な『お肉』を充分にも味わえずに『下だけ』で済ますのも失礼だと思うんだ(キリツ)。

「ひあんっ、ひゃあっ、いやあんっ、やめえっ、やめてえっ、らめえっ」  
おつきいと不感症だとかいう話があった気もするけど、この人は乳首舐<sup>ねぶ</sup>るだけで凄<sup>すご</sup>い仰け反る。

これで母乳とか出たらどんななんなってるか、なんて、下世話な妄想が一層俺の情欲に拍車を掛けた。

「んっんっんっ」

「——んひいひいっ!? 吸っちやらめえええっ!」

仕方ないんや! 俺母親の愛情受けてないから! せやから今日はこんな止まらへんのや!  
なんちて。——ぷはあ。

「……………あ、——……………っ、……………駄目になる……………。凄<sup>すご</sup>い、溶ける……………」

「はあ、はあ、はあ……………、ひ、ひとを此処までしておいて、その言い草はなんですか……………」

口を離して、しかし谷間に埋もれたままに、両腕で抱え込む様<sup>よう</sup>に下から抱き上げた両バストで、流行りとはまた違う乳袋を形成。

その中に納まって眠る。これが一番リラクゼーション効果がすやあ……………。

「……………ん、私はまだ満足してませんよ……………? ほら、起きてください、きちんと中に出してくれたら、キレイにしてあげますから……………」  
……………うおお、耳まで蕩ける……………。

このまま女体布団に埋もれたまま眠ってしまったかかったのも本音だが、女を食うというのはまた別の男としての本能でもある。

微睡む身体をそのままに、顔を上げずに腰の『先』だけを中で動かしてみた。浸透剽の応用である(嘘)。

「んひいんっ!？」

お、すげえ反応。

「えっ、あつ、ちよっ、だめえっ、そこだめえっ!」

言いながらも、彼女は俺を抱くように捕まえて離さない。

お蔭で頭はがちりホールドされちやつているし、脚も搦められちやつて受け入れ態勢バツチリだしで、完全に言葉とは裏腹にっといういわゆる『嫌よ嫌よも好きのうち』っという状態でおっぱい気持ちイイです。

「あつあつあつあつあつあーっ! あゝーっ! んゝあゝあゝあゝ  
ゝーっっっ!!」

そんな拘束を弾くようにフィニッシュはしつかりと腰を使つての突貫殺法。

手は背中へ回して抱き締め返し、種付けプレスも斯くやという勢いで腰を跳ね上げズンツズン動かす。

子宮の入り口へ叩きつける感触と、彼女の悲鳴がリンクして、止め処ない射精感が神経総てに走り抜けるっ!

「……あー……っ、……はあー……っ、……あー……っ」

勢い良く飛び出た精子が彼女の『赤ちゃんルーム』へどっぶどぶ沈むのを、重なった腹から繋がった膣から己の身から、鎮まってゆく彼女の吐息に掻き消されることなく響くのを感じ取り、弛む体中へと充足感がゆっくり満たされてゆく。

ああ、充実してるんじゃあ。等と、犯人は供述しております。

……ところでおねショタ言う程の体格の差も無いわけだから、実際は土下座みたいな姿勢なんだけど此れ。結構腰にクるなあ。

いや、まったくそれにしても、

——凄いいリアルな夢だよな。

うん、夢だよ夢。

第一、今の俺の周りに此処まで甘えさせてくれるナイスボディな大人の女性なんていないもん。

アパートの住人は大体呑んでくれだし、同居人は触れられはするけど悪戯好きな浮遊霊だし、俺の事を「あなた」等と呼ぶ女子は1人もいないし。

そもそも俺も嫁さんとはこういうことは一切してないから、そういう希望が夢となって先走ったんだろう。きっとそうさ。

「…………ふふ、今日はいつもより気持ち良かったですよ…………？ まったく、いつの間にあんな攻め方を覚えたのやら…………」

夢の奥さんが蕩けるような声音のままに、愛おしそうに谷間に挟まる俺の頭を撫でる。

うおおお…………っ！ あんな自分本位なSEXで随分持ち上げるなあ…………！

男子垂涎過ぎるだろ、むしろサキユバスかなんかに取り憑かれてると云われても納得できる。

ホント凄いや、完全に男をダメにする、この夢。

こういうタイプの女性に限って、普段はキチツと締めるとこ締めるキヤリアウーマンタイプなんだろうなあ、なんていう妄想まで飛び出しそう。

むしろこういうリアルブーツなんじゃねーの？ とかって思いつつ、理想の嫁さんの貌はどうなのかなあ、とふと気になった。

手に張り付いて離さないきめ細やかなすべすべのお肌とたぷたぷもっちりな美巨乳の二重奏<sup>コンボ</sup>から、離すことを惜しみつつも顔を上げれば――、

「……………か、からす、ま、くん…………？」

——…………PAD長と目が合った。

あ、いや、PADじゃねーな生乳だな。

ていうか、編み込みも解いているけどその銀髪はもしか……………グレイフィア、さん…………？

——やべえ、やっちゃまった。

▽  
▽  
▽

「どうぞ、粗茶ですが」

「あ、はい、どうも……」

と、差し出されたのは彼女が持参した紅茶である。

部室で淹れてもらった一杯は中々に鼻腔を擦るモノであったし、味覚音痴なれども期待は出来る。

知覚と情動が直結してない所為なのか、舌で感激する覚え等終ぞ無い己であれども、だ。

まあそれは良いとしても、……なんでこの人が直接俺の部屋へと赴いてくるわけ……？

『グランギニョル・リベリオン 惨劇の十字架事件』が引き起こされたあの日の直後、流石に男の身体をぐっちゃぐちゃに引っ掻き回して体液とか染みとかがついたっぽいロザリオをそのまま返還するのは遣る瀬無くも思った俺は、しっかりと洗浄してから改めて先輩へと返すことを約束して才力部を後とした。

その際、出てきた男が何だったのか、とかは別に気にならなかったのだが、其処を取っ掛かりとしてこちらの正体を交換条件みたいに尋ねたがるグレモリー先輩とかがいらつしやだったので、改めて「別に？」と小首傾げてあざとらしく返してみれば、ありえないモノを見たかのような目で睥睨されてるオレガイタ。なんすか。

こちらら興味も無いことに一々目くじら立てる程の暇も無い。

才力部はデリヘルやつてるけしからん高校生で、出てきた男は客の一種かなんかでしょ。

そう納得していることを改めて説明されても、ねえ？

まあ、悪意を以て近づいたモノへ問答無用で迎撃する十字架名付けKingAssiahて『KingAssiah 惨 酷 王』の性能は期せずして証明できたことだし、今回の一件で需要と供給の天秤だけじゃ隣り合わせの危険を防げないことだけでも自覚して貰えたのなら幸いだ。

もしもの時にいつでも誰かに助けてもらえる、なんていう能天気

じゃ、『お仕事』やるには意識が低すぎるしな。

それにしても俺今日は調子良いなw

厨二マインドフルスロットルじゃねーかw

名付け能力フル活用し過ぎて手痛いしっぺ返しは今から怖いわw  
ww

ところで俺、ロザリオに直接攻撃なんて附加したっけ？

ロザリオから放たれる聖なる光が相手暴漢の心を浄化する、っていうのが本来のコンセプトの筈だったのだが。

おかしいなあ。

しかし、其処を誰にも言わないという保証が無かったのが彼女らの不安を煽ったのか、はたまた新規の顧客ゲットをちやぶ台返ししたのが気に食わなかったのか、後日にしつかりと説明をする、と約束されてしまい今に至る。

其処でもう一度、最初の疑問に戻るのだが。

「あーつと、 그레이シアさん」

「 그레이ファイアです」

「失礼」

かみまみた。

最初に名前聞いた時に何処のポケモンか、と思ったのが裏目に出たっぽい。

BW2だとストーリーある程度攻略しないとゲットできねえんだよなあ（反省してないっぽい）。

「なんで貴女が来たんです？ 塔城はあの日から学校休んでますし、オカ部も全体的に休業中みたいだし」

「お嬢様と眷属の皆様方は一週間後に控えたとある催しの為の下準備に入ってしまったために暇も取れませんので、その代理として私わたくしが来ました。日が空いてしまったのは、こちらとしても色々と情報が滞ってしまっただための落ち度です。申し訳なく思います」

「あ、いや別に責めるつもりはありませんから」

つうか、眷属ってなんぞ？

オカルト部だからそういう言い方ってこと？

役になり切るのも大変じゃないっすかね。

そしてこの人、見た目からしてまさかとは思ったがグレモリー先輩ん家のメイドなんか。

今日は普通の格好というか、OLみたいなスカートスーツで来ているけど。

すげえ金持ちだとは噂になっていたが、実際部室にシャワールームを用意しても学園から何も言われない若しくは許可も腕ぎ取れるのだから、噂ものを得ていると見ていいのだろうなあ。

ただ問題は、

「問題は、よりもよって今日来なくても良かったんじゃないかな、ということだ」

「ああ……、其処までは私としても何とも……」

お互いに、部屋の外の喧騒に気を向ける。

アパートへと正面から入って来たからこそ彼女も知っているとかわれるが、どんちゃん酒盛り&バカ騒ぎが一步入ってすぐに響く魔宴の屋敷と化している。

そしてこの酒盛り、大家さんが趣味で徴収している家賃で酒代が賄われており、その酒代の中には既に払ってしまった俺の家賃まで含まれていたりする。

ぶっちゃけ、早く参加したい。

つうか大家さん、普段の大きな態度は何処へ逝ったのと云わんばかりに爆走してきたわけだが、よくよく事情を聴いてみると普段の大家さんでは無く、家賃の取り立てを趣味にしているのは“先代の”大家さんとのこと。

親子二代で甲冑着てたら見分けつかんわ。

現在中学生の娘さんも、その内着たりするのだろうか。

「まあ、来てしまったものは仕方ないとして、どうしましょうか？」

「どう、とは？」

「え、いやだって、」

説明と云われても、こちらから問いたいことは特にないので来られても困るというか。

言葉にしようとして悩む。これ、対面のこの人に言っちゃダメな言葉だわ。

▽  
▽  
▽

改めて対面して、正直どういう対処を取ればいいのか、言葉にするならば困惑という感情が近いのでしょうか。

彼の存在を初めて知ったときは、あの部室へ小猫が連れてきた時が最初でした。

対峙して初めて知るその存在に、圧倒されてしまったのは言うまでもありません。

部屋に入るまでは、いえ、対峙してからも一切の知覚情報を知らせないというのに、その魔力量は上級悪魔を軽く凌駕するほど。

その魔力の一切を、総て己の身の内に封じ込めている、イメージとして見るならば『破裂寸前まで静かに膨れ上がった風船』でしょうか。

それが目前に来るまでは、誰の目にも気づけないほどの爆弾。

そんな恐ろしいとしか言い表せない本能的な恐怖を煽る存在が、平然と紅茶を飲んでいるのです。

恐らくですが、この恐怖をはつきりと知覚できたのはあの部室の中では私のみなのでしょう。

常道的な部分では佑斗もまた得体の知れなさを感じ取ったようですが、それは氷山の一角に過ぎないと、しっかりと注意を促すべきだったのかもしれないと、今更ながらに震え上がります。

お嬢様より話を聞いていた新しい兵士ポーンの赤龍帝の子なんかは何一つとして知覚出来ていなかった様子でしたし。

歴代の神滅具ロンギヌス所有者の中でも、彼はひよつとしたら最弱且つ最愚なのでは？ と純粹に不安を煽らせられました。

そしてそんな存在が、神器に匹敵するほどの聖具を、軽々とひけらかしていたのです。

下手をすればあの部屋の全員、私を含めて総て塵一つ残さずに消滅させられるであろう程の殺傷力と神秘性を秘めた、かつての「折れる前の聖劍」すらも超えられそうな逸品を、です。

エクソシストとして教会より秘密裏に派遣されてきた暗殺者なのではないかと、あくまで秘密裏に情報を精査したのは仕方がないことだと思われれます。

結果は白。

何処の勢力が送り込んだものでもなければ、協会に登録されている魔法使いの一角でもない、つまり、完全にフリーの個人である、と結論が出ました。

だからといって、その危険性が薄れたというわけでは決していないのですが。

問題は、その個人を相手にどういう対処をするのが正解なのかということです。

魔王様に報告するのも考えましたが、お人好しの魔王様の事ですから、あんな得体の知れない存在でも容易く懐へ、下手したら眷属に引き入れようとまで企むやもしれません。

私としては彼の手綱を完全に掌握できるとは、……とてもではありませんが想像が及びません。

その果てにはぐれ悪魔にでもなられた暁には、リゼヴィムに匹敵するほどの大敵を自分たちで作ってしまう羽目になるのかもしれないのです。

よって、報告は慎重に。

不敬？ いいえ、これは魔王様をよく知るが故の決断です。



王の為に国があるのではなく、民の為にこそ国がある。だからこそ  
の判断、これは間違ったことでは御座いません。

では、放置する？

そうすれば、我々とは別の一派が彼を取り込もうと画策するでし  
う。

墮天使や天使では飽き足らず、他の神話群も関わろうとする可能性  
だってあります。

その時に訪れるパワーバランスの崩壊は、間違いなく真つ先に『一  
番弱い』悪魔社会から潰すのでしよう。

これも選択から外れますね。

では、ひっそりと処理する？

一番在り得ません。

というか、出来るわけがないのです。

仮に消すとしても、その犠牲として真つ先に義妹が、お嬢様とその  
眷属が巻き込まれるでしょう。

彼個人が砂漠を悠々と歩いて居るならば別ですが、まず間違いな  
く、数が多いこちらの被害が一番大きな殲滅戦となります。

1人を殺すのに群を動かす、それは道理的とは到底言えません。

その果てに疲弊しきって、悪魔社会が息絶える等というのであれ  
ば、それは最悪の決断となるのでしよう。

要するに、何と於いても距離を置いて、現状一番距離の近いので  
あろう小猫に籠絡させる。

それが不可能であっても、お嬢様の一派またはソーナ様一派との  
融和を優先させる。

これが一番の選択でしょうね。

存在が強大でも、一応は人間（……人間ですよね？）である彼なら  
ば、友愛の心もきつとあるはず。

心理的に近い者のサポートか、最低でもこちらの事情を慮っても  
らえる友人関係を構築してもらおう。

長くなりましたが、本日彼の家にまで赴いた理由は此れです。

——まさかこんな環境下で生活しているとは思っても見ませんで

したが。

落ち着いて対峙するには、少々騒がしすぎる生活環境ですね。

しかし彼は平然としているのだからひよっとして、此れが日常なのでしょうか。

さて、ではどうしましょうか。

こちらの社会を改めて紹介する、にしても、先ずは彼の興味の矛先が向かないことには意味の無い応酬です。

先ほども思い描いた通り、融和と友好を優先させる為には『押し売り』のように主張するのは悪手でもありません。

信頼関係を結ぶには、まずは対等な立場にある、という前提条件を構築しなくては。

さもなければ一決すらもままならぬ、不平等条約を準備していると不興を招く羽目になる恐れも生んでしまうのですから。

個人としては、たとえ得体が知れなくとも彼本人への悪印象などは抱いておりません。

本来ならば先日説明するはずであった『フェニックス家との縁談とそれを賭けたレーティングゲームの開催』をお嬢様とその眷属へ伝達するのみであったはずなのに、其処へと先走って乗り込んできたフェニックス家の3男が悪いのです。

彼本人が神器級聖具を放ってしまったのは見ていましたが事故ですし、早くに逆召喚を済ませて冥界へと還っていればいいものを、無駄に意地を張って何度も死に返った3男の間が悪いとしか言いようがありません。

救助？ 触れたら自分に被害が及ぶようなモノに関わる気は御座いません。

何より、3男様は本来あの場に居ない筈の人物ですから、私の公務の対象外でもありましたし。

まあ、私事だとしても手を出すのは御免蒙りましたけれども。

気に入らない上級貴族の3男坊を偶然の事故で人間界恐怖症一步手前の心的外傷トラウマを植え付けた話はさて置き、問題そのものはまだ片付

いていません。

お嬢様がゲームに負ければそのまま興入れする、という不平等なルールを敷かれたフェニックス家との確約は、あの3男坊の思惑次第ではその眷属すらも冥界へと引き連れてゆく可能性まで内包しているのです。

そうなったとしたら彼との融和と籠絡はソーナ様へそのまま鉢を回すこととなるのでしようが、その結実を私が見届けられないというのは不安を拭うには二手も三手も足りません。妹の行く末をどう変貌させるかも見通せない話を、そのままソーナ様の姉君であるセラフォル様へは到底回せないことですし。

かと言つて、お嬢様が学園へ来なくなつたというのに私が顔を出すのも極まりの悪い話ですし。

……いつそ、彼を今回のレーティングゲームに引き入れて、勝利を目指してもらおう、というのも考えかけましたが……。

当然、それでは私が秘密裏に動いている意味が無くなります。

ああ、面倒臭くなつてきましたね……。

何か全てを吹き飛ばせるような、そんな案でも見つければ――。

――と、そこまで思考が傾いたその時でした。

一升瓶を片手に持ったアパートの住人らしき集団が、ご機嫌な笑顔で彼の部屋へと赴いて来たのは――。

▽  
▽  
▽

互いに何を話せば良いのか見通せなくなつたであろうタイミングで、店子の面々が酒を抱えて宴の河岸<sup>かし</sup>を俺の部屋へと変えたのは、恐らくは同居人の美少女幽霊にでも見張らせていたのであろうか。

此処の住人は気は良いのだが、酒盛りには素面を許さないという、一種悪癖染みた原則を抱えている。

俺を含めて住人全員呑めることだし（まあ大家の大矢一家は別としてだが）、近隣住民でも近寄らなければ問題ない、と古くからの慣わし

みたいな慣習が周辺には回覧板よろしく行き渡っているので、一応の問題は無い。

話が詰まったことで場の緊張感でも解きほぐそうとしたのか、まずは一献、と全員へと盃を巡らせたのも問題では無かった。

グレイフィアさんも場の雰囲気が悪くするのを避けたかったのか、きつちりと其れに参加する流れとなったのも、悪くはないのである。

——問題は、彼女の酒への耐性がこの場で誰よりも弱かったこと

で。

いちばんぐれいふいあうたいまあす、と一升瓶片手にPerfumeをたどたどしく歌い出した時には、既に手遅れだと実感できた。

流れるように動くのだが、流石にタイトスカートにスーツは窮屈だったらしく、ダンスに合わせて一枚つつ脱いでゆくのはもう何処のストリップなのかと。

あれーおかしいなー、まだ御猪口に一口程度しか呑んでないよねー？

男女入り乱れた飲み会であるからこそ、下手な色気を醸すのはご法度とするのが住人らの認識なのか。

脱衣シンギングが一幕終わったと同時に、住人らは再び河岸を変えようと部屋を脱出していた。

要するに、置いて行かれたのである。

俺は場を盛り下げない様にと口笛拭いて拍手喝采までやったのに！？

酒に弱いのに呑むのを止めない彼女を留められるはずも無く、とうか俺の部屋だし逃げ場がないし、廊下へと移った喧騒を肴に差しで飲み交わす男と女。

酔っぱらった彼女からの本音なのか、俺にもつと塔城とかグレモリー先輩とかと仲良くなって欲しいだの、しかし妹が結婚するのは止められそうにないだの、俺に手を出してもらえるのであればそれが一番簡単だのと、まあちぐはぐながらも先輩と家との確執？みたいなものは理解は出来た。

その際に薄着且つスカート脱いでシャツも肌蹴たグレイフィアさんにしな垂れかかられてドキドキしたり、沫やゲロイン昇格一步手前で洗面台への誘導とこれ以上の飲酒の阻止、というオプシヨンまで引っ付いて来たのは余計でしかなかったが。

——其処まで思い出して、何故冒頭の情事へと傾いたのかを思い出せない。

俺も呑んでいたけどさ、泥酔とまでは逝ってなかったはずだよな？  
なんで一緒のベッドで身体を重ね合って寝ていたわけ？

アルジエント先輩ついこの間喰ったじゃん。

情動は解消されたはずじゃん。  
マイミーターン  
ありえないよ。

きつとこれは公明な罠、というところまで連想して——、  
未だ重なつたままの彼女が、恥ずかしそうに身を振るのを眼前に捉える。

「あ、あの……、とりあえず、まずは離れません、かあっ?!」

……………スンマセン、一番ありえなかったの俺ですわ。

酒ツ、呑まされたのが運の尽き！

まあ要するに、アルコールで元気になった血の流れがぐんぐんと一部に集まってきているわけで。

現状の様相、つまりはグレイフィアさんの曝け出された恐らくは90オーバーきつと四捨五入すれば100に届くであろう巨乳と呼ぶのも憚られるレベルのふたつの膨らみと、むっちりすべすべな太腿を己の脚で抱えている絡みついた互いの下半身の感触と、うねる内側にきゆうきゆう締め付けられる震えて脈打つ膣壁の狭さ、極めつけは未だ目元が蕩けている薄化粧で隠し切れない火照った貌。

それら総てに集束したのが、今の俺の息子の有様。

きつとこれも世界線の集束が関係しているにちまいない。

運命石の扉の選択は、目の前のイイ女を喰いたいツと絶叫しておりますわ。

「か、からすまくんっ、いまっ、うごいちやっ、だめえっ」

艶の乗った嬌声が彼女の口腔から漏れるものの、それが悲鳴になつてないのなら問題は無いよね。

そもそも、この人はグレモリー先輩の家のメイドだし、此処で中途半端に逃がしたりしたら先輩経由で塔城にまで情事がもとい事情が届く恐れがあり。

……此処は口封じしかない。丁度、下の口は塞いでいることだし、上も序でに塞いでもらおう。

目指せ快樂墮ちエンドだー！ ヒヤッハー！

▽  
▽  
▽

次回へ続くと思った？

残念！キングクリムゾン俺のスタンドじゃないんだっ（浜辺で男子を誘う女子っぽい口調で）。

——と、いうわけで場面転換してのエロシーン突入です。

心の準備は良いかヤロー共。俺は既にギンギンだ。

「んひいんっ!？」

繋がったままの接合部をぐいと動かし、角度を変えてしつかりと奥まで行き届くように彼女の体勢を変える。

具体的に言うならば、片脚を開くようにまっすぐに抱き上げて、彼女を横向きに寝かせると同時に繋がった部分をズンツと押し込む。

「んあっ！ あっ！ あっ！ ああっ！」

魅力的な乳からは手放さなざるを得なくなってしまうが、その分太ももの程よくむっちりとした質感を身体で味わえるのは悪くない。

特に腹へと当たる内腿の柔こさが、突き上げるたびにぴたぴたと響くのが気持ちいい。

肌と肌がぶつかり合う熱気に燃えるのは、人としての本能的な部分を刺激する最上級のコミュニケーションではないかと思うんだ。

「んひいつ、やあつ、まつへえ、とまつへえつ、らめえつ」

声音には艶が乗り始めており、言い分とは裏腹に快感に抗えていないのがはつきりとわかる。

というかですね、突くたびにきゆうつきゆうに締め付けて来ておいて、止めても何もなくなえねえ？

グレイフィアさんマジ名器。

絞り具合がきつつきつで、こつちとしても休憩挟まなくちや責め続けるのも難しいかねえ。

試しに、突くのを一回止めると、息を荒げたままに顔を赤くしたグレイフィアさんが、やや弱々しげにキツと視線を向けてきた。

「……っ、い、今やめるなら許してあげます。お酒を飲んでいたことで箍が外れた、ということにしておきます。怒らないから、すぐに抜きなさいひいんっ!？」

動かすと、反応良すぎて、草不可避（ハイク風）。

睨んでいるつもりなのかもしれないが、全裸で、しかもSEXしたままで説教とか説得力の欠片も覗えない。

それでも抵抗しようとするのは、恐らく人妻だからだと思われる。さつき、＼あなた＼とかつて口走っていたし、彼女自身も誰かと間違えたとか、そういう食い違いが今回の原因なんじゃないかなと密かに分析する。

……このプロポーションで人妻とか、旦那さん勝ち組過ぎるだろ。

「やめっ、やめなさいっ、それいじょうつシテもっ、感じないっんっ、ですからあつ」

「……本当にい？」

横に倒れ寝ている彼女へ覆い被さる体勢へと雪崩れ込み、顔を寄せ、囁くように尋ねていた。

——休憩とは何だったのか（呆れ）。

必死で身を振り、彼女の空いている手が逃げ場を探し、ベッドの上のシーツ類を皺くちやになるまで握り締める。

言葉では否定の意を唱えている彼女だが、目元の蕩け具合からして感じまくっていることは確実。

それを俺が把握していることはグレイファイアさんにも伝わっているようで、俺の視線から逃れるようにぎゅっと目を瞑ったのが妙に可愛らしく思えた。

「ひやめっ、やあっ、らめえっ、らめなのおっ！」

そもそも、さっきいつもより気持ちいいって口走っていたよね？

ログを遡れば逃げ場なんてない。

はつきりわかんだけどね。

「——んぎいつ！ んああっ！ いぐうっ、いぐうつつ！！」

ほらねー。

っていうか、やっぱ感度イイよねこの人。

旦那さん羨ましいわー、こんな若くて美人で名器な奥さん娶れた旦那さんにマジで嫉妬だわー。

「……あ、はっ……はっ……あは……」

都合二度目の絶頂に至った彼女の呼吸が整うのを被さったまままで待機して、同時に自身のスタミナの回復にも気を回す。

もし今サーモグラフィで覗いたなら、丁度丹田の下の当たりに熱が溜まって真っ赤に見えるだろうぜ。

——腹上死マツタナシっ！

「ひやあっ!?!」

ていうか無理だ。

回復とか考えられずに、そのまま第3ラウンド突入したくなるくらい奥さんが可愛すぎる。

まさにマツタナシ。

脚を捕まえて再び姿勢を元へと戻す。

開脚する要領で、ぐりぐりぐりつと繋がったままで彼女の身体を90度回す。

逃げられると困るので嵌めたままですけど、正直もう逃げる気力も残っていないんじゃないかなと思うのですよ。

「あー……っ、あー……っ！」



回したことで刺激が互いに響くのも当然なのだけど、其れが余韻に浸って力の抜けていたグレイフィアさんの目に、別種の色を移している。

諭えるなら、好気。

以前に公園でシタ時、アルジエント先輩の視線に最後の方には宿っていた、もつとして欲しいと訴える情欲を宿したような目。

より判り易く言うなら、おち●ほ欲しがって已まない雌の顔つき。

……亜子とか、徹頭徹尾こんな顔していたな。そういえば……。

「は……っ、は……っ、は……ん……」

……うわあ、膣中ながきゅんきゅん締め付けてくるう……。

呼吸を整えているグレイフィアさんが、目の中にハートでも出来るの？ ってくらい輝かせて、期待した目で正面と相對した俺を見上げてる。

ほんの数秒前まで言葉では嫌がっていたはずなのに、下の口は正直というか、むしろ身体が正直というか。

正面から向き合ったことで向きを変えたことで、改めて彼女の手はシートから外されており、皺くちやになつたそれらへと放り投げられるようにして大の字になつていた彼女の両腕は、俺を押し退けるどころか『期待』を抱くように胸を持ち上げる形へと組まれている。こう、肉が横へと垂れないように、諭えるならば皿の上に並んだ特大のプリンみたいに。あんなに張りがあつたのに、それでもプルプルと震えているのは、もはや凶器としか言いようがない。並の若奥様じゃ中々出来つこない仕草だよ。さすおにならぬ、さすおくっ！ てやつかな。

……結局堕ちてんじゃねーかよ。それでいいのかよ奥さあん。

「……それで、止めて欲しいんですけどっけ？」

「……………えっ？」

声に成り切らないが、はつきりと判る困惑を孕んだ音が彼女の口から洩れる。

締め付けている下の口からは力が抜けて、若干緩くなったようにも感じる。

其処をゆつくりと腰を引きながら、囁く口調を止めずに問いかけ

た。

「充分気持ち良くなつたみたいですし、俺は割と満足ですよ？　こんな美人の乱れる姿を特等席で眺めさせてもらったんだし、これ以上とか望んだりしたらバチが当たっちゃうかも。つーわけで、今日はこれで仕舞としましょうかね」

駆け引きは大事だ。

一発目は酔いも抜けていなかったし（今も完全に醒めているとは言いがたいけど）、現実味を帯びなかったのだからまだ言い訳はできる。

だが、此処でアルジエント先輩のときみたいに率先して墮とそうというものならば、まだ見ぬ旦那さんに申し訳が立たない。

ナニイツテンダコイツ、みたいな目で見ていることだと思っけど、俺だつて此処で本気で嫌がられたら止めますよっ！

惜しみつつも辞めて見せますよっ！！

不倫や浮気は犯罪と違うけど、無理矢理犯ったら完全にレイプ強姦じゃねーですか。

無理矢理はダメ、絶対ダメ。胸糞禁止ッ！

……え？　兵藤先輩？　……同居していて手を出さない方がヘタレなんじゃねーの？

「……………す、」

「……………はい？」

色々と言ひ訳みみたいな回想を瞬間的にしていると、奥さんの言葉を聞きのがしていた。

もう一回、みたいな意味合いで尋ね返すと、——腰に彼女の脚が絡みつき、引き抜こうという俺の腰を捕まえて離さなくなる。

……えーと、要するに、

「おうっ」

「……………ま、まだ、ダメ、です……………」

……………顔を真っ赤にしつつ、そう宣言する奥様が拠所無く可愛いです。

そして解いた腕を俺の肩に届かせて、そのままぐいつと抱き寄せたグレイフィアさんに押し掛かり、——押し掛かるというか、完全に正

常位の受け入れ態勢、いやさ、だいしゆきホールド？

あー、これ逃げ場がねーわー、仕方ないわー。

「……んじゃあ、遠慮なく」

「あつ、あつ、あんつ、はあつ、いいつそこつそこおつ」

彼女の潤滑油でぐしよぐしよの膾穴を、埋もったままの肉棒でぐいぐい押し上げる。

押し上げるというか、個人的には出したり入れたりと勢いつけたいのだけど、脚で腰を絡まれていたらやっぱりそう出来ないわけで。

ほら、冒頭のエロシーンみたいな感じ？

汁音なんだか肉音なんだか肌音なんだか、むしろギシギシ云うベッドのスプリングも併さっているから複合音？

それが部屋中に響くのに併さつて、悦ぶグレイフィアさんの嬌声が叫ぶ程でなくとも大きく響く。

まだ表の酒盛りの方が騒がしいからいいけど此れ、外にも漏れていたら羽衣ちゃんの情操教育にも悪いよなあ。

近いうちに引つ越しも視野に入れておくべきかもしれない。

「からすまくうん、んうーっ」

「え……、んー」

ちゅぶぬちゅぐちゅちゅちゅうちゅうちゅうちゅうちゅうう、と逃れられない奥様の舌技が口内へと侵入してくるのでお返しみたいに搦めて蠢く。

吸い合いにもなっていたけど、多分余計なことに気を向けるな、つという彼女なりの甘え方なのかもしれない。

つーかそこまでやったら収まり付かないんですけど。

いいんですか？

いいんですね？

……舌を搦めながら上昇するやる気ゲージに促されるように、自身の身を振って絡まされている彼女の腕を解し取り、正面から恋人繋ぎに絡め直してベッドへと押し付ける。

「くっつぷあ、じゃ、ちよつと本気出しますね」

「あつ！ んあつっ！」

上体をわずかに起こし、押し付け合っていた互いの胸、というかグ

レイファイアさんの潰れた乳肉の感触を惜しみつつ。

絡まったままの脚を気にせずに、腰を打ち付ける勢いを増す。

「ひっあっああっんっひゃあんっ！」

水音みたいな濁音より、パンパンとした肌がぶつかる音が大きくなり、そのたびに揺さぶられる彼女の身体が振動に合わせて上下する。

そのリズムに合わせて、アルジエント先輩とは比較にならないレベルの彼女の乳肉が、これでもかと縦横無尽に暴れまわっていた！

……うわー、久しぶりに見た、おっぱいダンス。

でもこれあんまりやり過ぎるとクーパー靱帯千切れて無残になるからなー。

視覚的には最高なんだけど、垂れさせるのも忍びねえし。

……回復手段あったとはいえ、そこで構わんよとか云えるゆるーなのあの漢らしさは一体なんだったのか……。

「んひいつ！ ひあっ！ あーっ！ あーっ！ あーっ！ あーっ！」

余計な事へ思考を逸らしている合間に、レイファイアさんは仰け反るような姿勢へと変わってゆき、大きく口を開けて悲鳴になりかけた嬌声だけが咆哮のように、真っ赤になった貌から解き放たれた。

そろそろ俺も逝きたいし、スパート懸けますかっ！

「何処に欲しいっ？ 言ってみてくださいよっ！」

腰を打ち付けながら尋ねるので声音に抑揚と勢いが付くが、そういう間の抜けたリズムにツツコミを入れる余裕は無いらしい。

「あーっ！ あーっ！ んんん あっ！ くっくっ！ なかあっ！

なかにっ！ ほしいのおっ！」

「りようーかいっ！」

それでも要求を止める気は無かったのか、身体が今求める快感を必死で声にしようと唸るレイファイアさんがリズムの合間に言葉へ換えて、それに俺は一際大きく、深く奥へと、突き入れる勢いを留めなかった。

叩きつけるような勢いになってゆく腰の動きに、容赦の二文字は無残に散りばむ。

視覚では乳のダイナミックな動きに血気が迸り、触覚ではぐしよぐ



「フフフーン 燃やせー フフフーフン 起こせエツ  
☆」

「……………何事ですかこれは」

「あれー？ 塔城？ どした、こんなところで」

オカルト研究部員合同合宿という名の修行を終え、レーティングゲーム開始まであと一日という猶予を貰った私・塔城小猫。

勝てるとは到底思えない彼我の実力差をよく理解できる身としては、怒らせちゃったっぽいフェニックスの3男坊の言い分だと、眷属も併せて愛人として納めてやるとか云われているから、人間界も此れで見納めなのかもしれない。

そんな思考の末、決意の元に烏丸くんのお家を探して隣町までやってきたのだけど…………、

「…………隕石でも落ちたんですか？」

眼前に広がるのは徹底的に“ひしゃげた”、壊滅したアパートの残骸。

そして、其処の瓦礫拾いを率先している彼の姿だった。

「んや、ちよつと地球の自転に置いてかれただけらしい」

わけがわからない。

「そんなことよりどした、えーと、九日ぶり？」

そんなことで済ませていいのだろうか。

察するに、此処は彼の住居で、今日から寝泊りとかどうするつもり

なのだろうか。

色々言いたかったが、口下手且つ恥ずかしがり屋であると自覚している私は、とりあえず自分の要件を優先することとした。

何より、私の決意はこんなことで折れて良いわけがないのだから。

「はい、久しぶりです。烏丸くん、お願いがあつて来たのですけど」

「……お願い？」

何故か随分と顔を顰められる。

あれ？ 私つて其処まで嫌われていた？

「あー……。……まあ、仕方ねえか。叶えられる範囲でな」

色々葛藤がありそうな決断で、何処か仕方なさそうに不可の境界線を釘差すように張られる。

負けない。

「ありがとうございます。烏丸くん、私の処女を奪ってくれませんか？」

「落ち着け」

頷くでもなく、先ず否定から入る返事とは……。

いや、一言でも尋ね返しでも聞き間違いでも言質を取れば済し崩しに逆レ●プするつもり満載だったのだし、むしろ的確な対応力と褒めそやすべきかもしれない。

しかし、相も変わらさずこちらの出足を封じてくる人だ。

これが、以心伝心か。

「むしろ思いっきり種付けしてください。子供が出来るくらい濃厚に濃密に。一晩かけてじっくりねっとりパンパンと」

「辞めろ、ア●ネスが来る」

「児ポ法が怖いと？ 大丈夫です。此れは『駒王学園』に通う『高校生』のストーリーではなく『学園生』のストーリー。そして此の物語はR—18版、故に私は 十八歳！ 見た目が子供でも中はキツチリ大人の女性を相手にしているんです！ ●ナン君なんです！ 挿絵と需要の都合で制作側が欲しがった所謂合法ロリータ！ 倫理規定的には 何も問題は無いんです！」

「第2の壁を壊すような発言も控えろオツ！ あと俺、普通に恋愛するなら同級生が良いから」

「ごめんなさい嘘つきました。私ホントは15歳。花の女子高校生。てへぺろ。」

「いや本当に何があった？ 九日前の塔城は冗句は口走ってもそういうことは口にしなかったろ、悩み事があるんならお兄さんに話してみろよ？」

「……っ！ ——ふむ、なるほど。お兄ちゃん、と呼んでほしいのですか」

「その場合確実に恋愛対象からは外れるけど」

「……!?! 『妹萌』が通用しないと、烏丸くんは本当に日本人ですか……!?!」

「なんだろう、倫理的には間違ったこと言っていない筈なのに、常識的に俺が間違っているみたいに聴こえるんだけど」

いつもは見せない慈愛の表情を浮かべて気遣われたのが嬉しくて、思わず『デレ』を予告してみたらこの有様。

つくづく私の気持ちを空回りさせる彼の嗜好に、遣る瀬無さが心を逸って逝く。

私はこんなに好きなのに、なんで此処まで食い違うのかが納得がいかなかった。

しかし、彼の優しさに触れたことに間違いは無いので、言葉が足り



ないと思いつつも私の想いを漏らさないように伝える。

部長の話では修行で時間を取れないオカルト部の代わりにグレイ  
フィア様が詳細を語りに向かった、と聞いていたので、さくつと。

ゲームに負けたら貞操の危機で、勝てる要素がほとんど無いからほ  
とんど消化試合の体。

それで自分の好意まで無下にされるのは納得がいかないのです、意趣  
返し張りに先走って好きな人の子種を己の中に遺したかった、という  
部分は委細詳細明確に伝えた。

すると、こめかみを押さえて難しそうな貌をする烏丸くんが出来上  
がった。

やはり少し先走り過ぎたのだろうか。本当は私も、もつとゆっくり  
と、学生らしい恋愛をしたかったのだけど。

「手を貸してほしいってこのことか……？ でも、対価も貰っ  
ちやったしなあ……」

「そういうわけをお願いします。初めてなので優しくシテくださ  
い。でも絶対に種は欲しいので奥までください」

「幼女相手に出来るかバカ。嫁さんにもシタことないんだぞ」

男は潜在的にロリコンだから一線越えれば大丈夫だ、とお姉ちゃん  
が言ってた。

が、ちよつと待って欲しい。

え、今『嫁』とか………ああ、二次嫁とかいう？

意外と草食系なのか、彼。

「とりあえず、だ。なんだ、そのゲームってのはどういうモノなんだ  
？」

「最初を熟せば怖くないですよ、近場のホテルでいいですよね？」

「質問に答えろ」

彼の腕を取ったら即座に外されほつペをむにむにの刑を受けた。

理不尽な受刑にモノ申す。弁護士は要らないからお腹ふにふの刑に変更して欲しい。

「むう……、肉体言語で語り合う基本体力勝負のぶつ殺試合です」

「……暗黒武術会か何かか？」

呆れた顔の烏丸くん h s h s。

むにむにをされるがままではなく反骨精神フル喚起で、彼のお腹に顔を埋めてぐりぐりの刑返しだ。

あんこくぶじゆつかいが何かは知らないが、多分彼の普段からの判りづらいボケだろうからスルー。

語感的には大体合っている気がするし。

「ちなみに、猶予は何時間ぐらいだ？」

「二日ですね。正確には20時間くらいは余裕なので、がつつりしつぽりこましてください。れつつ子づくり」

「しねーよ。つうか、20時間あるならまだ余裕だろ。俺が鍛えてやるから、勝てばいい」

……なんですと？

「というか、グレイフィアさんにもお願いされちゃってるからな。対価を先払いされてるし、お前らが学園に居られるように尽力して欲しい、つてよ」

「……ああ、なんか変な顔したかと思ったら、そういうことでしたか……」

オ・ノーレ、グレイフィア様め。折角済し崩し的に情に訴えて一線を越えるはずだったのに。

しかし、こちらに気を使ってくださいしてもらっているのも事実。だが……、

「というか、あと20時間鍛えられたところでそんな劇的に強くなれるとは思えないのですけど……」

「いやいや、なんとかなるなる。つーかさせる。これで出来ませんでした、じゃ俺の沽券に関わりそう」

そう応え、「アデアット」と片手を掲げる。

その烏丸くんの手には、一冊の本が開かれていた。

……今、魔力使いました？ と、思わず敬語が思考に混じる。

「……それは？」

「アーティファクト『ラヴクラフトの書架』より『ルルイエテキスト』起動。術式『スクロール』を選択、投影開始」

私の問いには答えず、地面の上に部屋で見るような魔法陣を構成してゆく。

というか、やつぱり只者じゃなかったのは今更だけど、『魔法使い』だとは思ってもみなかった。

「と、いうわけで、行って来い。向こうには俺の嫁さんがいるから、詳しい話は彼女に聞け」

「え、あ、ちよっ——」

▽  
▽  
▽

「……………勝てました」

「そいつは重畳」

納得がいかない。

「いえ、勝てたことには問題は無いんです。でも、敵味方両方から畏

怖の目を向けられて、『跳ね回る金華猫』とかいう二つ名まで付けられる結末はどうなのかと言いたいです」

「言ってんじゃねーかよ」

「察してください」

愚痴の一つでも言いたくなる、っていう私の意図を。

あの後、烏丸くんの言う処の『術式世界』へと招待された私は、現実の72倍になっているとかいう説明を受けてそのまま修行へと移行した。

実質、中では大体2カ月の時間経過があつたのにも拘らず、外へと出れば本当にゲームが始まる前だったことには、予め云われていても驚きを隠せなかった。

2か月あれば、悪魔が本気で修練を積めば強くなれない方がおかしいのだが、烏丸くんから教わったことと言えば歩法と戦術。

そもそも『世界』の中での成長は肉体へと直接影響を及ぼせないらしく、判り易く魔力の上限が増える、といった成長は見込めないとは説明は受けていたけど……。

『だからこそ』の修行内容で、『それでも』ライザー・フェニックス率いるハーレム眷属という名の『烏合の衆』を一網打尽にする程度の修練を積めたことは言うまでもない。

ただ、

「釣り野伏、でしたっけ。烏丸くんはアレを割と知られている兵法だっけって言っていましたけど、ああも見事に引つかかる上級悪魔の眷属と言う部分を思うと、少々悪魔社会の将来に暗雲が立ち込めますね」

「悪魔……？ いや、まあそれだけじゃねーだろ。一緒に雲耀と跳ね馬の『併せ』も使ってたんだろ？ アレは縮地とまで行かなくとも無拍子一歩手前位の間合いの取り方を確かにさせるし。初見で見切れるのは精々達人クラスだよ」

瞬動みたいなトンデモ歩法よりかはずっと地に足着いた体裁きが

織り成す『技術』にそうそう追い付かれて堪るかよー、とけらけら嗤われるが、それよりも最初の眩きに「まあいいか」みたいな顔をした部分にモノ申したい。

あれ？ グレイフィア様が事情を説明していたとか言っていた筈なのに、何故『悪魔』という単語に疑問符浮かべてるの？

そしてそれについては特に問い詰めない、という彼の態度が余計に不穩。

なんだか放置しておいたらめんどくさくなりそうな、そんな誤解が潜んでいるような予感がひしひしと。

あとしゅんどうってなんですか？

それからもう一つ。

「あと出てきた時には気にしませんでしたが、アパートが既に復元していたのはどういうことなんですか。いくら烏丸くんが魔法使いでも、1日経たずに住居を復元させるとか人間業とは思えません」  
「アレは俺の仕業じゃねーよ。大家さんお抱えの大工さんの仕業だよ」

気になっていたことを問えば、さりと人間の技だと教えられた。出てきた時には半壊の住居は傷一つなく、幻術でも掛けられたのかと疑ったくらいには新築同然のアパートだった。

曰く、ゴンザレスとかいう御爺さんが1日掛けなかったとか。

世の中まだまだ、びっくり人間の宝庫である。

「それより、その荷物。出てきた時から気になってたんだけど、ひよっとして中に入ったのか？」

「ああ、此れについてもモノ申したいんですけど」

云われて、私の後ろに放置してある全部が黄金で構成された直方体の匣はこをぽん、と叩く。

衝撃で開くような構造になっているらしい其れが開放されると、中

には射手座の形をしたこれまた黄金で形成された模型がある。

「中師匠の人にフェニックスと戦う、と述べたらそれなら此れだろ、と差し出されたこの呪いの武具、お返ししたいのですが」

「え、なんで？」

なんでじゃねーですよ。

「何処に行くにしても付いて来ている時点で恐怖感を煽ります。なんで自然と付いてくるんですか。呪いの人形でももう少し控えめに押入れの奥に居座りますよ」

「気に入られたんじゃね？」

なに、その適当さ。

というか、普通に悪目立ちし過ぎていてこの先の生活に支障を来す。

何処に行っても黄金の匣が背後にあるとか、どういうバッドステータスだ。

棺桶を引き摺る剣士じゃあるまいし。

「しかし、何処に仕舞ったのか忘れてたが『スクロール』の中からも取り出せたのか。まあ、『倉』に接触できる権限のある嫁さんしか取り出せないとは思うけど、認められたんなら問題はないだろ」

「結局、なんなんですか、此れ」

「2年前くらいに適当に造った玩具」

「……………拳が光を纏って速度が音を越えた気がしましたが……………」

「そういう仕様に造ったからな。まあ原作でも最終的に不死鳥倒すのに一役買っていたんだし、嫁さんの判断も間違っていない」

原作って何の話だ。

そしてその適当に造った玩具で上級悪魔を打倒できる程度の聖属性を『敵のみ』へと発せられるって……。

ついでに適宜質問に応えているようだけど、この烏丸くん現状から察するに私の質問に上の空だ。

応え乍ら別の事を考えているような、そんな気配がやや滲む。

「とにかく、憑いてくる仕様だけでもなんとかしてください。造ったんなら改造も出来ますよね？」

「……ん？ ああ、はいよ、了解。じゃあちよいと弄りますか」

呼ばれて戻って来たのか、気安く応えて匣へと手を掛ける。

中身じゃないの？

「アデアット、『妖蛆の秘密』発動、対象『ゴールデンミミック』、対話機能open」

「ちよつと待ってください」

「あ？ なによ？」

え？ ミミック、って言ったよね？ この匣、モンスターか何かなの？

だとしたら付いてくるのは納得の機能だけど、まさか生きていたとは……。

そしてそれを平然と押し付ける、烏丸くんの非道さに私のジト目が止まらない。

「呼ばれるまで部屋でおとなしく待ってる、ってさ」

「交渉が終了してるじゃないですか……。流石に使い魔契約もしていない魔物と相部屋というのはちよつと……」

「安心しろ、擬人化しない限りは自室に丁度いい警備員セキユリテイが張り付くのと同程度だ」

その言い分限定だと後々に要らぬ不安が懸念されるのだけど。  
擬人化、できるの？ やだなあ……。

せめて女の子でありますように、と可能性を考慮の上で念じて置く。

まかり間違つて脂ぎつたおっさんの姿に変身でもされたら、目も当てられない。

一抹の懸念に気を取られていると、それにしても、と烏丸くんは云う。

「嫁さんを師匠と呼ぶとは。たった2カ月なのに随分と馴染んだもんだ」

「実際、アレだけ限定されていたのに勝てませんでしたからね……。教えを乞う立場の側ですし、最低限の礼儀は尽くします」

と、礼儀を重んじるJKあびる。

ちなみに師匠はルビにマスターと書いて読む。

最初会ったとき、本物の嫁だったのか、二次嫁じゃなかったのか、と啞然としたのもいい思い出。

そんな師匠は、露出多めのゴスロリで金髪でロリータで児童ポルノっぽい美少女。

アレを嫁さんと呼ぶとか、烏丸くんは『本物』<sup>ロリコン</sup>の可能性が微レ存。ワンチャン有りっぽい。よっしゃあ。

「あ、忘れるところでした。グレイファイア様が今回のお礼をしたい、と何某かの権限を働かせてくれるそうです。何が良いですか？」

「グレイファイアさんが？」

私の言葉にふうむ、と唸る。

ふむ、此れは多分、色々と検算を働かせている顔とみた。

暗躍を画策とする烏丸くんの横顔がキリツとしています（キリツ）。



「ん、じゃあ一つ頼まれてくれるか？」

▽  
▽  
▽

烏丸くんに伝言というか、伝達というか、手紙を預けられて数時間後。

私は再び彼の住居へと舞い戻っていた。

「手を貸してください……！」

懲りないフェニックスの3男坊が、よりにもよってリアス部長を拉致しやがったのである。

確かに、結婚式の準備までしておいて負けているんだから恥かいたのは理解できるけど、アレだけ（私に）撲殺されて於いてよくもまあ奮起したモノだ。

戦後処理とかいう名目で部長と朱乃さんだけが呼び出された時点で、可笑しいと思っておくべきだった。

部長の使い魔からは朱乃さんを人質にされている、とか伝わったけど、時間を置けば部長の身だつて危なくなるのは間違いない。

いくら相手が嫌いとはいえ、部長とて女子の一端。

『お●んぼには負けないっ（キリッ』というスタンスであっても、即座に『んほおおお！』とかされちゃう姿が幻視される。

それくらい女騎士な部長を一刻も早く救うために、一番頼りになる戦力を確保しに来た次第。

ちなみにアーシア先輩と変態もとい兵藤先輩を呼びに行ったのは木場先輩だ。

「手紙は渡した？」

こちらの事情を説明した返事が、まずそれである。

自体は一刻を争うのだから、自分への褒美とかは後回しにしてもら

いたいです。

「グレモリー先輩に、直接渡したのか？ って聞いてるんだけど？」  
「……？ はい、そう頼まれていましたから、何よりもまず部長へ」

部長経由でグレイフィア様へと届かせるつもりだったのかと思っただけど、ひよつとして烏丸くん、別の意図を？

「貴族のボンボンが自分に思い通りに行かない場合、っていうのを想像するのは容易かったし、保険を掛けて置いて正解っぽいな」

「……………何を仕掛けたんですか……………？」

例の十字架アミュレットや、件の黄金鎧が脳裏に浮かぶ。  
酷く冗談みたいな、惨たらしい何かが潜んでいるような。  
そんな危機感がじんわりと、

「——内緒♪」

訂正、はつきり確信へと変わった。

逃げてー、3男坊超逃げてー。

口が三日月のように弧を描く凄味の覗える笑みを浮かべている彼を見て、私はひっそりと誰かの冥福を祈るのであった。

## ☆「不死鳥は再び蘇るとかなんとかいう話」

彼女の髪とよく映える赤の装束に身を固ませ、自身の前に毅然として立つ姿を睥睨する。

その装束は女性の身を守るには酷く儂い薄手のネグリジエであり、其の様を彼女は恥ずかしそうに顔を背け乍ら、目の前の男へと晒している。

其れを彼女は着用したことも少ないのか、ワンピース型と呼ぶには丈の短い其れは彼女の腿までしか覆われていない。

其れで隠せるのは精々彼女の張りのあるのに豊満な乳房と、これからそぼ濡れる筈の未開通の陰部。そして正面からでは身を傾けなければ覗えないが、程よく引き締まっているのに肉付きが良く、思わず揉み解したくなる魅力の溢れるむっちりとした白桃のような臀部くらい。

悔恨か怒りか、はたまた羞恥の所為か。上気し熱を抱いた張りのある肌は当然晒されたままであり、胸元が開いている仕様のその寝間着からは、豊満乍らも垂れることを知らない膨らみが作る谷間が覗え、頬を落ちる汗が首筋を伝って其処へと流れる様を偶然覗ければ、ゴクリと思わず唾を呑む。

未だ17だというのに、否、だからこそ在る若さが、家柄故出来上がった気品ある色気と喰い合わせり、相乗効果で依り男の欲を刺激する。

今から此れを好きに出来る、そう思うだけで俺、ライザーⅡフェニックスは逸る心を押さえることも出来ず、勢いのままに彼女を床へと押し倒した。

「ッ、ライザーっ、あなた……っ」

「っは、抵抗するなよ……っ？ ま、出来るわけがないだろうかな……っ」

言い乍ら、馬乗りになった時に掴んだ手首を放し、乳房へと回せば息を呑むのが良く分かる。

思えば、婚約者だと言うのに此処まで近づけたのも初めての事だ。

唯一『輿入れ』と同時に引き連れてきた彼女の従者は既に別室へと監禁してあり、それもまた彼女の身を縛る枷として機能することは百も承知。

だからこそ彼女は、リアスIIグレモリーは嫌気を隠そうとせずとも従う立場にあり、この俺もまた彼女を従えることの出来る立場として此処にいる。

その嫌気も、すぐに撤回させてやるがな。

俺は眷属の数から当然わかるだろうが、女体に関する『経験者』だ。

女性の身体の何処が弱く、何処が感じて、何処を責めればいいのかも、全てお見通しだ。

だがまあ、未経験処女ならば先に奪っておくべき個所がある。

人によつてはともすればより一層守るであろう、下の口ではなく上の唇。

男女の關係に憧れを抱いているであろうお嬢様へ、本当の男女の営みの入り口を指し示してやるのも旦那の役目だ。

「っ、いや……っ！」

「っがあ!？」

ツチ、顔を背けるどころか、咄嗟に肘で顔を押し退けてまで拒否するか。

拒絶の仕方が、偶に眷属にさせるシチュエーションとは違う、本気の挙動だ。

流石に少し苛つかせられるな……!

……まあいい、事を成してゆけば、そのうち雰囲気に流されて良いように身体を開くだろう。

数十秒ほど抵抗された直後、呼吸を整えて自身を律する。

抵抗すれば別室の『女王』がどうなるかわからないぞ、と脅しをかけてから、俺が用意してやったネグリジェを力任せに破り捨てた。

▽  
▽  
▽

人間界へと赴いた際に、謎の攻撃によって撃退されたのはさておき、リアスとの婚姻に於いてレーティングゲームで結果を決める、というのは互いの家で決定された暗黙の了解であったはずだった。

公式上、俺はプロの一角で、対する彼女は初心者に毛の生えた程度の眷属持ち。

眷属の数も、質も、どう考えても釣り合いも取れない、ゲームとして成立するはずの無い勝負である以上『俺』の勝利は揺るぎが無く、だからこそ此のゲームはリアスに納得させるためだけの消化試合である。と、そういう腹積もりで提案した魔王様義兄も今回の婚姻を納得してくださっていると、そう思っていた。

結末は散々。

まさか予め情報が集まっていた『雷の巫女』でも『無限の剣士』でも『未熟な赤龍帝』でも『伏せ札のはぐれヴァンパイア』でもなく、はぐれ悪魔となった姉を持つだけの猫又からの転生悪魔に、たった一匹の猫に盤上をひっくり返されるとは思ってもみなかった。

戦車ルークの特性を抱きつつ騎士ナイトの『速さ』を熟して一騎当千の働きでこちらの戦力計15駒を各個撃破するとか、もうアレ1人でいいじゃないか、と観客の誰かが呟いたとかなんとか。

そうして最終的に俺と対峙した時には、謎の神器を使ったのか黄金の鎧で身を固めての聖なるオーラの込められた避けられない一撃。

再生するから負けることは無い、と観客は云うかも知れないが、俺の心が折れるまで繰り返された以上、二度とアレとは対峙したくない。

だが、負けっぱなしで居られるほど貴族というのは、上級悪魔というのとは諦めが良くはない。

あの結末はあー塔いう反則存在小という『白い悪魔』が居たからあんなにただけであって、王個人の資質を対比させれば間違いなく俺の方へと軍配が上がるはずだ。

その証明と、婚約解消を撤回させるための策として、俺は今回リアスへの直接の『説得』を買って出た次第。

説得の最中、互いの意思の疎通が及ぼされて男女の仲になる、とい

う事態だつてあり得ることだ。

その説得を誰にも邪魔されない為に、非公開かつ極秘裏に会談の場を設けたのも仕方のないことなのである。

……リアスを会談場へと招待する際、彼女の家から件の猫が出てくるのを見かけて決心が鈍りもしたが、彼奴が充分に離れたのを見計らつてリアス並びに『女王』の姫島朱乃を招待することに成功はした。先に捕えた『女王』の身を隠すのに、言う程の手間もかからなかったのは僥倖だ。

ゲームで元堕天使であつたことを知つたのには警戒したが、何故か使える筈の『光』を使おうとしなかつたお蔭で手間もいらぬ。

単なる『雷』ならばこの身を焼かれようとも、やり切れるだけの再生力を備えた俺ならば決して無様は晒さないのだ。

——そうとも。

マウント取られて『聖なる一撃』を何度も振り下ろされることに比べたら、随分と楽な『女王』戦なんだ……！

招待した2人のうち、先ず『女王』から別の部屋へと監禁する手筈を整える間に、リアスには会談に相応しい格好へと着替えて貰つた。

フェニックスの火にグレモリーの赤、合わさればこれ以上ないくらいのお似合いの夫婦が出来上がる。

それを暗喩した輝かしい色彩のネグリジェだ。

世継ぎを作る際には、是非とも着飾ってもらいたいという意図を含んだプレゼントも送つた。

あとは、俺の手練手管——ではなく、采配と真摯な言葉遣い次第、だ。

——このチャンスを、逃すつもりはない。

▽  
▽  
▽

唇こそ奪えなかつたものの、彼女の頭わになつた肢体は極上と言える。剥ぎ取つたことにより身を隠す衣は手元に無く、しかし先ほどの抵

抗からも察せられるように、彼女本意ではないその様を俺へと曝け出すという意図は当然無い。

だが、その自身を『何処へ出しても恥ずかしくない』と育んできた貴族社会ならではの価値観が、この部屋へと最初に足を踏み入れた時に見せた毅然とした態度を、自ら崩させることは無いのだろうか。

押し倒された時に取られた手首をそのままに、抵抗として肘こそ出たのはさて置き、女性の象徴を隠そうともしない仕草が滑稽さを醸し出す。

しかし、その顔の向きは俺から外され明後日の方向へと向けられており、さも意思は向けまいと云わんばかりの態度が彼女の気品を顕しているようだ。

——ん……？

「ん？　なんだこの痣は？」

とその時、芸術品を鑑賞し愛でるような気分であったところ、流れるように向けた乳房に妙なモノを見つけた。

だが、それは取るに足らない痣にしか見えず、虫刺されか何かであろうと意識の外へと流す。

それを見つけても、彼女の身体は素晴らしいモノである。

曝け出されている胸は重力に従って横へと崩れるものの、先程掴んだ肉の塊はそう容易く零れることを良しとはしない。

広がった山は堰き止める囲いも無くては、土砂崩れのようにズレてゆくのが道理。

だが、リアスは何某かの“囲い”を魔力で維持しているらしい。

埋もれぬ桃色の先端がぴんと自己を主張しているままに、彼女の鼓動に合わせて玉のような白い果実が重そうに揺れる。

恐らく、己の乳房に関わる重力を魔力で遮断しているからこそその、『主張』が可能なのだろう。

ユーベルーナなんかは先端が肉に陥没しているのだが、それはそれで発掘の楽しみがある。

そうはなっていない『肉玉』を、これから弄ることが出来るわけか。淑女としての嗜みか、はたまた女としての意地なのか、より『美を

磨こう』というその意識には敬服すら感じた。

お蔭で、若い未通女を開発する、という楽しみを抱けるわけだからな……………」

脚は内股で、少しでも陰部を見せまいと太ももを擦り合わせており、僅かに覗く赤の恥毛の奥へ期待が高まる。

其処に、これから指を這わせるのだ。

だが、いきなり挿入するような無様は晒さない。

俺は童貞じゃないからな。

「っ、いや……………」

「抵抗するな、と言ったろう？　くく、なあに、すぐに自分から求めるようになるさ」

「誰が…………、ひっ……………」

ぬぷり、と這わせた指を、見えない穴の入口へと押し込める。

にち、ぐち、ぬち、と蠢かせて彼女の嬌声を誘えば、自由になっている手を己の口へと宛がい、声を堪えているリアスが滑稽であった。

「あ……………！　ふ、う……………！　いや……………っ！」

「は、無理をするな。我慢できなくなったらすぐに声を出してもいいんだぞ？」

と、口では言うものの、……………可笑しい。

何故だ。まだ濡れないとか、愛液の一滴も染み出してこない。

「おら、こっちはどうだ？　旦那様への謁見を特別に許してやるよ」

「ひ、ぎいっ！」

空いている手で、彼女の乳房を持ち上げて揉みしだく。

ぐいぐい、ぐにぐに、と玩具みたいに、いつもするように弄ぶ。

リアスは、嫌そうにだが、声を上げて苦しそうに呻く。

……………だが、決して色気のある反応では無い。

可笑しい……………、いつもなら胸を苛めてやるだけで、イザベラ辺りは喜んで股を開くの……………。

「っち、力任せだし、下手くそだわ。こんな男に良いようにされても、あなたの眷属は本当に気持ちいいって言うのかしら？」

っ、コイツ……………！



苦悶の表情のままだが、スタンスを変えないリアスが苦々しげに挑発してくる。

良いだろう、其処まで抵抗するというのなら、もう勘弁ならない。男の怖さって奴を、しっかりと刻み込んでやる。

「オラ、脚を開けっ！ 抵抗したらリアス自慢の女王がどうなるのか、わかってるんだろうなあ！」

「っ！…この…っ！…」

優しくしてやるのはもう辞めだ。

強姦？ 最後には自分から腰を振るようになるなら、それはそういうプレイの一環だ。

睨みつける彼女に股を開くことを促して、俺は腰のベルトを抜き取り放り投げ、穿いていたズボンを摺り卸し、自慢の逸物をそそり立たせ、彼女の眼前へと突き出してやるッ！！

「……………えっ？」

虚を衝かれたような、妙に間の抜けた声が、彼女の口から洩れていた。

▽  
▽  
▽

「部長っ！ 助けにきました……………た？」

「あら、遅かったわね」

部屋の入り口から入って来た彼らに、私は極めて平然とした仕草で対処した。

強がりとか、ライザーに丸め込まれたとか、そういう事態では断じてなくて。

単に取るに足らなかった、それだけのことでしかなかったのよね。

「…………えーと、ご、ご無事の様です、ね？」

「そうね。大体無事だわ」

部屋に入ってきたのはイツセーと佑斗。

小猫は、多分朱乃を助けに行ったのかしら。

私は連れられた時に着ていた服を着直しておこうと思ったけど、部屋の中の何処を探しても見当たらないから諦めて、彼に破り捨てられた普段は着た事も無い服を魔力で編み直し、マントみたいな簡易な形へと変えて羽織るだけの格好だ。

大事な部分も隠れたりしないが、悪魔には演出も必要不可欠。

より一層男子の視線を誘うのであろう恰好で居れば、遅れて気付いたイツセーが『おお』と呟いて前屈みになっていた。

うん。これなら悪くないかもね。

「というか、本当に大丈夫なんですか？ その格好もそうですけど、大事な一線とか……」

「そうね。とりあえず、早く帰ってシャワーを浴びたいわ」

飽く迄も平然と応える私に、佑斗は一瞬顔を顰めるような表情へと変わったが、本当に何でもなかったのだから心配しなくても大丈夫よ、と笑って見せる。

まだ納得いってないみたいだけど、なんとか頷く仕草に私は揃っての退出を促した。

囚われのお姫様を助ける褒助こそ与えられないけど、そんなことよりとにかく、ライザーにべたべたと無遠慮に触られた嫌気を流してしまいたいよ。

少なくとも今はその気分ではいい。

「って、そうだ！ あの焼き鳥野郎は何処ですかっ!? あの似非ホストっ、部長に拒否られたくせに今度は誘拐するとか男の風上にも置けやしねえっ！ 俺が引導渡してやるから覚悟しやがれっ！」

イツセーが顔を上げて、部屋を見回しながら如何にもな正論で怒気を振りまくけど……。

うん。納得の意図ではあるけれど、正直「こうなってしまうと」今更怒っても仕方のないことよねえ、としか言いようがないし。

当然、フェニックス家本家の方には相応の謝辞を返して貰うつもりではあるけど、それもこれもこちらの用事が片付いたら、という腹積もりなので今は瑣事でしかないし。

そして、部屋を見回していたイツセーの視点が、ある一点で止まる。

「……………えっ、と……………」

どうすればいいの、といった声音で、其の一点を指差してこちらへと目を向けられる。

イツセーの指差した其処には、「ちっちゃくないよ、ちっちゃくないよ……………」とブツブツ呟き膝を抱えて部屋の片隅で蹲る、ライザー。フェニックスの情けない姿が、ただあった。

「……………何がどうしたらああなるんすか」

「私の所為じゃないわよ、多分」

畏怖を抱くような目で2人に見られた。不本意なのだけど？

其れも此れも、全てはライザーの「自身」とやらが粗末であった所為よ。

人間でいう処の小学生くらいだろうか、そんな私の『甥』であるミリキヤスを少し前にお風呂に入れたことがあるけど、ライザーのソレはその時の甥のソレとどっこいどっこいなレベルだったというか……………。

子供ならばカワイイで済むけど、成人男性が「そう」なのは正直どうなのか、と問いたくなるくらいには粗末さで……………。

私とて未経験とはいえ女なのよ？

眼前に曝け出されたソレがどういう意図で私へ向けられたものは本能のレベルで理解できるけど、ライザーのソレは危機感の欠片も感じられなかったのよね。

要するに、思わず口をついて出たの。言葉が。

『うわ、ちっちゃい』って」

「うわあ……」

改めて口にしてみると、戦慄の眼差しで口角をヒクつかせる眷属2人。

視界の隅でライザーがビクツと跳ねたような気がしたけど、もうどうでもいいわね。

そもそも、よく考えると可笑しな話なのよね。

貴族社会で生きていて他と比べるような交流はそうそう無いだろうけども、一応は異性の眷属が備わっているあの三男坊。

そのソレが粗末で矮小で剥けてないままの短剣、というわけは無いはず。

父親か執事かはたまた兄か、彼を諫めたり嗜めたり奮起したりと、成長を促すならば手段も人材も揃えられるはずなのが『貴族』という社会の有り様よね。

其処で突然にライザーのアレが“押し折れた”かのように粗末になる、なんて……何らかの外的要因が関わっているとしか思えないわ……。

と、そこまで考えた時に、思い出したのは部室で見た『あの』ロザリオだった。

そして、それを製作した、という『彼』に手掛けて貰ったお蔭で、私たちとの修行時以上に洗練された小猫の働き。

更に思い出させられるのは、ライザーに自宅を襲撃される前に小猫が寄越した『中身の無い』彼から私宛に届いた封筒に、ライザーに指摘された身に覚えのない胸の痣。

特にこの痣、よく見ると謎の魔力が漂っているように見えてくるから……、もう此処までくると確定としか思えない。

今回助かったのは、間違いなく『彼』の仕事、ということに……。

——確認するためにも、小猫にも話を聞く必要があるわよね。

そして年頃の男子ということなら、ひ、ひよっとしたら私の魅力で眷属に入ってくれるかも知れないし……。

——うん。ちよっと楽しみになって来たわ。

「さて、帰るわよ2人とも。朱乃と小猫を拾って、然るべきところへ話を通しておかなくちやね」

思わず笑顔が滲み出ることを自覚しながら、意気揚々と2人へ告げる。

——何故か引いたような顔で付き従う男子らに、怪訝な気持ちを抱いたのはそれから数分後の話だった。

「翻弄される」ギャグと友情が織り交ぜる不可逆なる第二章【少女たち】 ※原作三巻相当分

「ゲエツ！鳥m 「待ってその反応可笑しい」

リアス部長の婚約騒動もひと段落した数日後、快晴のグラウンドで毅然と居並ぶオカルト研究部面々が居た。

本日は駒王学園球技大会！ 種目は部活対抗ドッチボール！ この日の為に人知れず練習したチームワークを全校生徒へ見せつけるチャンスだぜツ！！

と、そこまでは良かった。

「なんでお前が相手チームに居るんだよ烏丸アツ!?」

「むしろなんでそこまで警戒されてるのがわかんねつす」

指差し指摘してやれば平然と返してくる、その飄々とした態度がまたムカつくくんじゃあツ！

ライザーに誘拐されたあの日以来、部長はなんでか小猫ちゃんに烏丸を部室へ連れてくるようにそれとなくお願いしてるし！

それに対する小猫ちゃんの返事はいつもN.Oだからまだ良いモノ、小猫ちゃんだつて今現在オカ研では最強ということまで一目置かれてるけど一応は部長の眷属だ。『主権限』なんつーものまで持ち出して来たりされたら、それこそ部長が烏丸に本気ってことになっちゃうじゃねーかよっ!?

今は学内じゃそんな噂は漂ってないからまだいいけど、同じ部内の俺を差し置いて顔見知り程度の後輩が部長に気に入られるとか認められねえ！

だからこそ、部長が楽しみにしていた学内行事で良いとこ見せて俺の株を上げようとしていたって言うのに、なんでお前ピンポイントで邪魔しに来るんだよツ!?

「俺はまあ、中学の時サッカー部だったんで、クラスで数が足りない、とかっていう勧誘を受けて一時的に助っ人に」

「……今日は敵と言うことですか。むううー」

むくれてる小猫ちゃんも可愛いっ！

でもその対象が烏丸だというのがShi<sup>嫉</sup>ti<sup>妬</sup>ッ！

あと部長は……とりあえず、自分の気持ちを確認してから出直した方がいいっす。

もじもじとしているところは可愛いですけど、どういう対応したいのかを自分でも把握しきれてないって言うのは、普通に出遅れてるんじゃないっすかね？

……認めねえけどなあッ！

「くくく、愚かな。これで貴様と小猫ちゃんの関係はガタガタよ……。よくもまあ俺たちの策に此処まで見事に嵌ってくれたものだな、烏丸ア！ くはは、はあーっはっはっはっはっは!!」

……あとなんかアイツ、自陣のメンバーからも目の敵にされてるっぼいな。

まあ、クラス内で小猫ちゃんと距離近い、とか言うんだったら普通に嫉妬対象か。

つかひよっとして友達いねえの？ 烏丸は友達が少ないの？

「なっ、キサマ、斎藤っ、裏切ったのかあ」

「裏切った？ 馬鹿を言ええ……貴様と仲間になった覚えも無い。裏切ったんじゃないやねえ、表切ったんだよお！」

ある種驚愕の表情（つばいモノ）を浮かべてノリノリで台詞回しを（但し超棒読みっぽく）した烏丸に、サッカー部1年のエースだと実は地味に女子の間で囁かれている斎藤が自らの策を暴露した。

俺が言えたことじゃないかもだけど、そうやって自分晒していると

女子からの信用も無くすぜー、斎藤くんー。

というか普通に現状、サッカー部は学校中のヘイトを集めてるんだけどな。

俺が言うのもなんだけど、オカ研は美男美女の集まりだから。

それでドツチボールと言うことは、普通にぶつけ合うわけで、ボールを。

……うちと戦いたくなくって棄権チームが続出した所為で、今普通に決勝戦なんだよなあ。

俺、未だに活躍してないんだけど？

……あれ？ 前回のレーティングゲームも含めて、見せ場が無かったような……。錯覚？

「どこぞの縦ロール若本系皇帝みたいな口調で宣言しやがって……！ それがお前の正義だと云うなら、俺は敢えて策に乗ろう！ 勝負だ、塔城！」

「意味が分かりません」

「ぶつちやけ遊んでくれるチームメイトが居る時点で楽しいから罠の一つや二つ問題ない！」

「悲しいですね……」

びしいっ！ とボールを片手に悠々と宣言する烏丸に、小猫ちゃんの辛辣なツツコミがさく裂するう！

しかし、……くくく、敢えて乗ったのかは、……悲しい、事件だったね……。

だがそうして敵対してくれるというならばこちらとしても好都合。

そうして対峙してヘイトを集めてくれるというならば、俺も敢えて策に乗ろう！

要するに、部長の積み上げかけた好感度を一息に払しよくするいい機会ってことだよな！

姑息？ 姑息結構！



「…………、これは遊びの誘いに乗ると言うことで受けていた恩に報いるべき……？ それとも彼に悪い風間が付かないように隔離して避難させる……？ それに悪魔の身体能力的に、まともに戦ったらたとえゲームでも危ないし……」

……なんか葛藤している部長もいるし、速めにその感情を晴らすべきだと男の本能が訴えていますし！

というかそんな特別扱いしたら完全にリアス部長のお気に入りだ、つていう噂が独り歩きするつす！

部長第一のお気に入り男子生徒の座は渡さねえ！

俺の噂が広がっているのは自クラス周辺と範囲狭いっぽいけど、それだけでも晴らさせるものかよ！

「つーわけで、——第一球ツ！」

ゲーム開始だ、と一名除いて心意気は伴ったと思われるところへ、烏丸の宣誓がコートへ響く！

……え？ あれ？ そう言えばちよつと待って、試合開始どころか、ボールの先攻権も未だ決定してなくね——、

——そう思う間もない、刹那。

烏丸から放たれた豪速球は、見事に俺の仲間の顔面へと突き刺さった。

「——つぷああ……」

——リアス部長の顔面へと。

「二——り、リアスお姉さまあああああ——?????!!??」  
「二——ぶ、部長おとおおお——?????!!??」  
「二——ぶ、部長おとおおお——?????!!??」

鼻血を噴出し、目を回して仰向けに吹っ飛ばされる部長へ、観客か

ら相手チームから俺と佑斗の口からと、悲鳴に近い絶叫が響き渡る中、投げたフォームの烏丸はその有様を見て一言。

「——しまった、顔面セーフか……」

「何処がセーフだよ!? アウトだよアウト!! あとまだ試合開始の合図は出てないだろ!？」

「いや、とつくの昔にホイッスルは鳴ってますけど……。あ、小粋なコントで錯覚させていたらすみません」

「今更だよッ!!」

女子がしちやいけない吹っ飛ばされ方してんのになんで平然としてるわけコイツ!?

思わず、部長を助けに駆け寄るのと共にツツコミを入れる。

確かに、ルール上は顔面セーフ、という言い訳が効くけど、今回問題なのは其処じゃないと思われる。

「なるほど、吊い合戦ですね。えい」

「——えなんでこっちに來げぶう!？」

「「武蔵小杉い!?!」」

どぼん、とボールが出しちやいけない音を出して、小猫ちゃんの手から放たれた凶器が、烏丸では無く別のチームメイトへと突き刺さる!

——また顔面だよ! もう辞めたげてえ!

た、たった一分もしないうちになんだこの惨状……!?

ドッチボールってこんな殺伐としたデスゲームだったっけ!?

「——極力、顔を狙うのはお互いに辞めようか」

「ですね」

お前ら示し合わせてたのかよお!?

そんなわけないじゃないですか、と互いに否定する烏丸小猫の横では、誰か助けてください——！ と先ほど吹っ飛ばされた武蔵小杉くんとやらの遺体を横抱きに叫びそうになっている斎藤くんの姿が見えたけど……。

叫びたいのはこっちも同じだ!!

▽  
▽  
▽

さて、互いに退場したりアス部長と武蔵小杉くんをフィールドから除外して、仕切り直しである。

もうデスゲームは辞めようよ……、という意見の元、互いに危ない顔を狙う攻撃はしないと宣言を取ったことで試合再開。

違う……！ 俺が言いたかったのはそういうことじゃない……！

互いにあのボールが顔じゃなくて別の所へ突き刺さったとしても、充分に殺傷能力があるよね……!?

「さーて久方振りのドッチボールだあ。ホント、黒百合を思い出すぜ」

呑気に腕を回しつつ、そう呟く烏丸のメンタルに驚愕を隠し得ない……！

今お前（ひよつとしたら学校中から）すっごいヘイト集めてるからね？ リアス部長の顔面から血の花咲かせておいて、よくもまあそこまでのほほんと試合続行できるよね？ 俺だったら今頃女子らに制裁受けて死んでるぞ……。

「さて、どうやって戦おう？」

「そうだなあ……」

そんなことは後で考えるとして、問題はどうやって勝つか、だ。佑斗に話を振られて、俺も一応は考えてみる。

うちの部は少数精鋭主義、と言えば聞こえはいいのだが、実質部員数が足りなくて一人欠員が出たら補充する、という手段は使えない。かてて加えて、ドッチボールのルール上、初めから外野に1人配置する必要性があり、本来内野の初期人数は7人以上であるはずなのに現在4人しか居ない。

外野には当初から朱乃先輩が回っており、攻撃力と回避力でそれぞれ小猫ちゃんに佑斗がいるけど、其処を衝かれないとも限らない。

一点瓦解すれば、あとは烏合の衆でしかない。

……考えてみれば、オールラウンダーの部長を初めに仕留める、というのも確実な手段なんだよなあ……。

地味にアイツ、凄くね？

そこまで考えて、ちらりと相手コートへと視線を向けた。

「「烏丸くん、頑張れー！」」

「はい」

「……は？ え？ どういうことですか？ なんで烏丸くんに女子の応援が付いてるんですか？ しかもあの人たち3年じゃないですか？ 一つの間になんか誑かしたんですか腕ぎりますよ？」

「知らん。グレモリー先輩吹っ飛ばしたから女子受けが良くなったとか、そういう理屈じゃね？ 同性からは嫌われる……とまではいかないだろうけど、苦手意識を持たれるくらいは有りそうな先輩にも見えたり。あの人とは俺と似た匂いを感じる……。あと腕ぎるのは勘弁」

「ボツチじゃないと思いますよ、リアス部長は。……ああ、でも身近な友人は少なそうですね。試合終了と同時に腕ぎりに逝きます」

「ひいひい……い」

3年の先輩方（女子（超重要））から応援を受けて、更には敵チームであるはずの小猫ちゃんと仲良く談笑中である。

それらを見て、俺は決意を固めた。

「……佑斗、作戦を考えたぞ」

「え、ほんとかい？ どういう策で行くの？」

「とりあえず烏丸を辱めよう」

「なんで!?!」

羨ましいんじゃないボケエ!!!

あと部長を吹っ飛ばしといて更にレッテルでフルボッコなのがムカつく！

主を貶されれば牙を剥くのが悪魔の戦い方だ、ってじつちゃん言ってた！

つーわけでこの仕返しは正当な理由による復讐であり、決して嫉妬からくる策略では無いと此処に断言する！

それではあ、本邦初公開ッ！ 魔力集中ッ！

「逝くぜ烏丸ア！ 受けて見る俺の必殺魔球ッ！」

「おつ、準備出来たっすか。それじゃあお手並み拝見——」

レーティングゲームでは披露できなかった、修行にて獲得した必殺の一撃！

ボールに魔力を込めて、思いっきり振りかぶる!!

受け止める烏丸！ これが俺の全力だア!!

「——あつぶね」

「——えっ」

——が、受け止めようとした体勢で居たはずの烏丸は何を思ったか、咄嗟にボールを躲して見せる。

ボールは軌道をそのままに、「えっ？」とまさか来る筈は無かったであろうと予測していた朱乃さんの手元へとぼすんと届いていた。

誰が見ても受け止められそうなスピードと姿勢であったにも拘らず、其れを避けたことに観客も含めて怪訝を隠し得ないのだろう。

そして、俺はと言うと思惑が外れたことに、内心滝のような汗をたらだらと流していたのである……!!

——ビリイツ!!!

……すいません朱乃さん、今のうちに謝っておきます。

込められた魔力は届いた朱乃さんへと伝達し、暴発するように伝導し、彼女の身に付けていた衣服の一切を破り捨てる。

名付けて、——ドレスクレイク装備破砕!

「!!!」——……う、うおおおおおおおおおおお

おおおおおおお????!!!」

観客・相手チームと、其の様子を目撃していた全校男子が歓喜の絶叫を上げた!

無論俺もだ!

申し訳ない気持ちよりも眼福過ぎて情動リビドーを抑えきれねえッ!

「あ、あら……っ?」

おっとりとした破れた衣服を抑えるように、朱乃さんは困惑した顔つきでその身体の大事なところを隠すように立ち尽くす。

リアス部長よりも実はデカイおっぱいとか、細い腰とか、すらっとした御身脚とか!

先端とか股の谷間とか本当に大事な部分は隠せてますけど、正直はみ出た部分だけでも男子垂涎っす!

「やはりエクサルマティオ……、なんかやな予感したと思っただけど、ネギ君と同系統のキャラかよあの先輩……!」

烏丸が戦慄の表情で何か言ってるのも今は気にならないっ!

ゴチソウサマですッ！ 朱乃さんッ！

「……………とりあえずイツセーさん、後で謝りましょうね？」  
「アッハイ」

アシアの冷たい目が一瞬で俺の心を凍てつかせました。  
やだ、この娘いつの間に氷の魔法を覚えたの……………？

▽  
▽  
▽

「一体何回仕切り直せば気が済むんすか」

「うるせえ。そもそもお前が避けなけりや問題無かつたんだ……………」  
「酷い責任転嫁を見た」

上半身裸の烏丸が呆れた目で俺を見る。  
そんな恰好のお前に呆れられたくはない。

投げる寸前に「魔球」とか口走ったのが悪かった。

朱乃さんのサーブシーンを成功させたのが俺だということは周知の事実として伝わっており、『女子を無理やり脱がせるケダモノ男子』というレッテルが後日全校へと広まるのはまた別の話。

そしてその朱乃さんが着替えるとして退場する際、紳士のように自らの体操服（上）を投げ渡した烏丸の女子株が鰻登りなのも計画と違う。

くそお……………！ 全裸にして辱めようとしたのに、自ら脱ぐ正当な理由を付けたら今更もう一回ドレスブレイクしても意味がねえ……………！  
っーか引き締まってるな、アイツの身体。

褐色で程よく筋肉がついている、女子が見惚れるのも頷ける肢体だ。

実際、外周からは「……………ゴクリんこ」と息を呑む女子の小声が。

「不埒な視線を感じるっす」

「気にしたら負けだ。ほれ、そっちの番だぜ」

転がったボールは既に相手チームへ。

外野から飛ばして貰おうにも、朱乃さんの代わりに外野へ渡ったアーシアに捕ってもらうのは酷な話かもしれない。

……というか、アーシアが外野に自ら行ったのって、俺の近くに居たくないから、とかそういう理由と違うよね？ 最近、うちの子との距離感が離れすぎてる気がするんです……。

「ふうむ……、まともに投げてでも捕られるよなあ。——よし、斎藤、そのボールちよつと持ってて」

「え？ なんだよ烏丸、何する気？」

「いーからいーから」

また何か策を持っているのか、チームメイトの斎藤くんがボールを掲げさせて、その後ろへ控える烏丸。腰を落として、拳を構える。

「最初は、グー——」

——ツ!? 魔力が拳に一点集中!?  
ちよつ、やば、

「——ジャン！ ケン！ グー！」

ドゴオ！ という轟音と共に、ボールを殴りつけた烏丸の拳の衝撃がそのままに、俺たちへと大砲のようにぶちかまされる！

お前、一体何処でそういう奇抜な発想を覚えてくるわけ……!?

「くっ！」



ボールが襲い掛かったのは小猫ちゃんだった！

咄嗟に躲す、ということが出来ないスピードのソレを、彼女は全力の跳び返し蹴りで弾き返す！

が、それは精々威力を殺した程度で、てんてんと転がったボールは再び向こうの陣地へ。

そして、

「アウト、ですね……」

ルールの盲点を突けば、正直足で弾き返してもそのまま地に着けずに相手にぶつけければ己のアウトにはならない筈だが、それも為していなければ只の自爆でしかない。

自分の思惑が外れたことに消沈しつつ、小猫ちゃんは外野へと赴く。

ひ、一人ずつ確実に削る為に最大戦力から倒した……？

狙ってやってたのかよ、烏丸……!?

「……いや、躲せば良かったんじゃない……？」

転がったボールを再び手にした斎藤くんが怪訝な顔で呟くけど、其れはアレだ、漢と漢の勝負みたいな話だよ、きつと。

「よし、成功。もう一発逝くぞ」

「お、おう」

そしてもう一回同じ体勢で構える斎藤くん&烏丸。

——つてちよつと待て、セオリー通りなら次に狙うのは当然戦力の一つである佑斗……？

お、俺一人が内野に残されても勝てる見込みねーぞ!?

「最、初！ から！」

タメ無し!? クソツ! 間に合えええええツツツ!!!

「佑斗オ! 危ねえ!」

「ツ! い、イツセー君ツ!」

ぶつ放された豪速球は、俺の読み通り、佑斗を狙って放たれ——、  
——ただ一つ読みと間違っていたのは、その進攻ルートが足元を  
狙ったモノだったという事実。

恐らくは、佑斗の直前でカーブがかかるように下へと曲がる球癖だ  
か回転だかにタイミング悪く割り込んだお蔭で、ボールが落ち切る前  
の位置に射線は放物を描く。

即ち、

「!!!!!!?!!?!!  
オ、ツ——!! ゴ、オ……………ツ!」

俺の、股間に。

「い、イツセーくうううん!!!」

……何処か遠くで、佑斗の叫ぶ声が響いている気がする。  
掠れる視界の隅っこに、俺を抱えた親友の目に、光るものが滲んで  
いるようにも見える。

はは、馬鹿だな、お前が泣くことなんて何もない……。

俺は親友を守れた、それだけで充分なんだ、だから、お前は……、

「——笑って、ろよ……、しん、ゆう……」

俺は、ただ一言。

そう告げて、意識を手放した——。

それから十数分後、試合終了後にリアス部長と朱乃さんから正座を強いられる俺と烏丸が居たのはまた別の話である。

☆「中身がいつぱい詰まったあもう一回！」

若干黴臭い倉庫の一室、前回の話でお察しの読者予想があるならば十中八九正解を導けるであろう、即ち体育用具室に俺たちは居た。

其処に何故いるのかは追々話すとして置いて、今は優先しなければイケナイ人物&シチュが待機中である。

「はっ、あつ、んっ、そらくんっ、あつ、んいつ」

くちゆくちゆと湿った水音と少女の嬌声が、暗く静かな室内に染み入るように響く。

体操服から着替えぬままに、下から捲れて肌蹴た白いお腹とピンクのブラを晒した状態。

あすなる抱きにも似た逃亡も容易い筈の姿勢で、アルジエント先輩は俺にされるがままとなっていた。

イツサだったかバシヨードだったかが読んだ句に『蝉の声が岩に染み入る』とあるのだが、ならば学舎に響く生徒の声は校舎へと染み入るのだろう、と連想もされ、その論理で往けばエロシチュが引っ切り無しに在る体育用具室には生徒らの嬌声などが染み入っているのでは、と拙くも思う。

卑<sup>エ</sup>猥<sup>ロ</sup>な音響<sup>レ</sup>媒体<sup>コ</sup>を量産するのが学び舎で果たして問題は無いのだろうか、等と胡乱にも心痛を抱くのは間違っているのだろうか……。

「ひっ、うっん、あつ、ああうっ、んあああつ」

そんなことはさて置いて、その体操着姿のアルジエント先輩が潮を吹いた。

噴き出した清水は下着やブルマに遮られるも押し留められず、プシヤアツ！と潮とかじやない量の濁流をじよぼじよぼと広げる。

うわあ、すごいよアーシアちゃん……。

クンニというか手マンというか、抱き抱えて胸へ手を回しつつ下も弄っていたら我慢が出来なくなったらしい。

はひい……、と垂れ流しの『アーシアちゃん』が放心した様<sup>さま</sup>で、脚をM字にしたまま体重を俺へと預けてくる。

ん、もー！ 勘違いしないでよねっ！ こんな姫プレイをいつもするわけじゃないんだからっ！ あ、アンタだけなんだからねっ！

等と、まあとりあえずツンデレっぽく脳内で言い訳してみるが、飛び散った愛液の行方は敷いたマットにしっかりと染み入ってしまったので、蟬の声ではないが此れ又卑猥なレコードが追加されたぜ、と良い訳にもならない。

後進が気付いたらその時はその時だ。美少女のラブジュースなんだし、拝辞で受け入れるが良からう。

「あ……、ご、ごめんなさい、わたし……」

「いや、まあ、やつちまったのは仕方ないし……。そう匂うモノでもないし、問題ないんじゃないかね……？」

見事に世界地図一步手前の有様だけど、気づいた彼女を気遣って目を逸らす。

とりあえず、後に折を見て天日干しするくらいの事を愚考しておくべきか。

それよりなにより続きだ続き。生活臭よりエロ臭漂わせろ、って読み手は注文してんだよ。

「ひうっ」

「んー、止まらないのかなー？ 下のお口がヨダレで凄いことになってるぞー？」

「んあつ、あつ、そら、くんっ、あつ、だめえ、これ、だめえ、あつ」  
気づかせない腹積もりで、ブルマとかぐっしょくしょくしよなんだけど膣穴弄りの続きを再開。

敏感になつちやつてるアルジェント先輩は、俺が指を動かすたびに小刻みに躰を竦めて声を漏らす。

声漏らすどころか尿ゲフン、は兎も角、ブラ越しに揉んでいるバストの先端もコリコリと主張してきておりますので、ぶつちやけ止めどころが見つかからない。

一回吹いたんだから、ちよつと落ち着こうよ。

「どうしたらいいのかなあ」

「あつ、んっ、と、止まらないのであればっ、んっ、せ、栓をするの

がつ、あつ、正解なのではつ、ないですかつ、あんつ」

途切れ途切れになりながらも、顔を傾けて視線は背後へと回される。

蕩けた、しかし期待した目でそんなことを提案されたが、その目がしつかりと俺を捉えているので催促であるのも確実。

特別何か異論があるわけじゃ無いけれど、ある思いを抱きつつも、言葉を続ける。

「……どうして欲しいのかなあ？」

「んくうつ、おつ、おマ●コにつ、そらくんのつ、をつ、くださいいつ」

「えー……、もうシテるじゃん、指」

「チ●ポおつ！ お●ンポがいいのおつ！」

……………兵藤先輩に言えよお。

▽  
▽  
▽

土下座である。

漢は黙って土下座が第一。そう長くも無い女子との付き合い方の一つとして、俺はとりあえずそう学んだ。

とは言っても、この手段は自分が本当に間違った場合とか、相手側へマジで迷惑かけたと思った時とか限定と言う枠組みでしか通用しないモノであり、過剰に気心も知れる仲となっては時に役にも立たない時もある。

……少なくとも、記憶の中のエヴァは俺が土下座すると嬉々として踏んで来た。他にシタ相手もないから参考にもならんけれど。

は？ ご褒美？ 幼女に踏まれて悦ぶ変態性は持ち合わせてないなあ。

つまり、

「退きなさい、塔城」

「ヤです」

土下座を敢行しようとして正座した俺の膝の上に、ちよこんと座り込んだ塔城に興奮する腹積もりは微塵も無い。

先の宣言通り、試合終了と同時に腕ぎりに来たニヤン娘むすの伸ばす手を躲す躲す。躲せっ！（ポケ●ン風）

「退きなさい。今、俺一世一代の謝辞をするところなんだから。シリアスシーンなんだから。ほっぺに手を伸ばすんじゃないの」

「宣言通りに腕ぎります。序でに美味しい思いも逃しません。イチヤイチャしましょう」

「なんでだよ。やらねえよ。そういうのは恋人とヤレよ」

「だから今こうしてるんじゃないですか」

「おつかしいなあー、コイツとの意思の疎通が一向に噛み合わないんだけどなあー……!」

考えてみれば、今まで噛み合ったことも無かった気もするので今更である。

「とりあえず、こんな姿勢ですけどスンマセンでしたグレモリー先輩。顔面無事です?」

「うん、色々言いたいことはあるけど、倒れた時の見た目ほど残る傷じゃないみたいだし、気にしないでいいわよ? どうしても気になるって言うのなら、こちらとしても補償を貰うというのも吝かでも無いけれど……」

「そうですかー。やー、気にしないって言うんなら問題ないですねー」

「躊躇無しに話を切り上げた!? え、えっと、女の子を傷物にしたんだし、責任……」

「傷が残らないなら平気ですよねー。助かるなあー、苦学生だから賠償金とか払え切れないしー」

「補償の仕方が生々しい! うう、でもお金で応えられても困るのも事実だし……。わ、わかったわよ、もう云わないからそのわざとら

しい棒読みは辞めて頂戴……？　あと小猫、其処から降りてちよつと話をしましょうか」

「にゃあー、ぐろぐろぐろ（棒）」

「おいホント降りろお前わざとらしく猫の鳴き真似しても棒読みじゃ騙されないからな」

「とりあえず一回落ち着きましょう。誰が喋ってるんだかわからなくなりそうですし」

対面で椅子に坐したグレモリー先輩へと気を遣いこちらに責任を要求しないと一言質を取るまでチラツチラと視線向けてくるも右から左へ受け流し、妙に剣呑な眼差しで塔城へと目が行きそれを挑発宜しく棒読みで返事したニャン娘にいきり立ちそうになった先輩を宥めるように、最終的に俺が執り成した。

もうどうなっているのだから。わけがわからないよ。

ちなみに場所は以前にも来たオカルト研究部部室で、俺の横ではにつこにこと超笑顔の姫島先輩の前で兵藤先輩が土下座姿勢のまま滝のような汗を流している。まさに青春真っ盛りである。

エクサルマティオした兵藤先輩が怒られるのは自明の理であるけれど、ネギ君と同系統キャラであつても年齢的な部分がネックであるのだろうなあ、とも理解できる。

此れでリトIIサンみたいなラブコメ主人公だったならキヤーエツチい！の一言で済むのだろうけど、高校生にもなつて女子の衣服に意図的に手をかけるのは流石に犯罪行為にしかないわけで。

……着替えの為に校舎へと戻つてゆく後姿からチラチラ覗けた姫島先輩のお尻とかはとつても素敵でしたよっ！　つて口出ししても減刑は免れないだろうなあ……。南無。

「とにかく、前回の個人的ないぎごきを解消してくれたお礼として、私から烏丸くんへ責任を要求する意図はないわ。此れだけはしっかりと周囲にも言い含めておくから、それでお互いにチャラということにしておきましょう？」



あつ、兵藤先輩は放置なんですね。わかりましたっ。  
いや、それにしてもちよつと待て。

「前回？ 俺なんかしましたっけ？」

惨酷王での過剰防衛改め惨劇グランギニョルリベリオンの十字架事件はともかくとして、それ以降を何かしらの手配をしたという記憶が特にない。

塔城に関してはちよつと修行付けさせただけだし、そもそもグレイファイアさんに頼まれていたという経緯があったので才力部に何かしらの利益が出たとしてもお礼を受ける謂れも無い。

はて？

「えつと、小猫を強くしてくれたのが貴方だと聞いたのだけど？」

「はあ。まあ一応そうですね」

小首を傾げているとグレモリー先輩が今更な事実確認。

それがなんすか、としか言いようがない。

「アレで助かったのは事実だし、そういう利を無償で施してくれたのだからやっぱりお礼を言うべきだと思ったのよ。本当に助かったわ、ありがとう、ね？」

「……はあ……」

にっこりと微笑まれて真摯にお礼を申し上げられてしまったのだが、正直心苦しい。

い、言えない……！ 本当は酔っぱらったグレイファイアさんを美味しく戴いたのを前払いとして、先輩方に手を貸すことを要求されていた、なんていう笑劇の事実。今更言えない……！

美人は身を削る鉋カンナだとか云う慣用句を思い出し、本当のことだったのだなあと身を以て知る今日この頃である。

「それはそれとして、貴方にはもう一つ借りがあるのよ。寸での処でライザーから助けて貰った、という大きな借りが、ね」  
「ん？」

話が終わったと思ったら続投、むしろ此処から始まったという雰囲気、グレモリー先輩は自らの体操服に手をかける。

「というか、脱いだ。」

——おま、

「ちよっ、先輩何してんすか。いきなり胸晒すとかご褒美塔城邪魔だ目隠しすんなっ」

「形振り構わないビッチ部長の魔の手から守る為です断固拒否します」

眼福を味わう間もなく塔城の手の平がむぎゆうと顔へと押し付けられる。

「邪魔ー、じゃーまー！」

「小猫、退きなさい？」

「聞きません」

「小猫」

「ノーです」

「……別に誘惑してるわけじゃ無いから」

「服を着ろツツツテンダロ」

主従とやらの遣り取りがどう考えても関係性に罅入<sup>ヒビ</sup>ってるようにしか思えない、殺伐とした空気へと変わって逝くのが遮られた視界でも良く分かった。

口調が乱暴且つ片言になる塔城さんのハイライトも、恐らく既に臨終なのだろうか。

「こーねーこー!」

「いやーでーすー!」

待つて止めて眼球抉れる!?

塔城さん!?! ちょ、いい加減お放しになってくださいませんかことイダダダダダ!?

「俺を大きな蕪みたいに引き摺るのは辞めて貰おうか!? もう高校生なんだから口で解決しろコブシはNGッ!」

いい加減迷惑なので、塔城のおててを目隠しから解雇する。

にやあー!と引つ張られていたのか、勢いつけて中空へと巴投げみたいに放り投げられたのが、明るい視界に映った最初の映像であった。

「——ふう。それで、此れなんだけど」

「あつ、何事も無く話進めるんすね」

一仕事終えたぜ、みたいに額を拭い、脱いだ体操服で胸の下半分から腹にかけてを隠したグレモリー先輩がずいと近づく。

ブラはきちんとシテいるらしいが、持ち上げられた御胸が他の女子と比べると特に顕著に大きいので目に毒過ぎる。

というかブラジャー赤って、高校生がシテイイ色とデザインじゃなくね? 明らかにお水のお姉さま方が客用にと控えるような代物っすよ?

——あ、そういやあ此処つてデリヘル系のバイトを斡旋している部活だったっけ……。納得。

「此処の痣、多分だけど貴方の仕業よね? 怒らないから、正直に言ってくれる?」

「——あつ」

と、見せられたグレモリー先輩の、乳房の谷間のお肉の表面。

やや薄くなっているが、俺が手紙を媒体に間接的に施した呪術刻印の痕がしっかりと目に見えていた。

……やっべえー、この人見える人なのかよ……。

普通の人には目視するのも難しい秘匿性を秘めている筈なのだが、魔法に通じる奴には見えるのが弱点と言えば弱点であったのは事実。というか、見える奴がこの世界に居るとは思ってもみなかつたでござる。

ちなみに効果は『男避け』。

本人の意に沿わない男性に無理に手を出された場合、要するに痴漢や強姦魔なんかを排するのに役に立つ『呪詛』だ。

刻むと発動する度に消耗してゆくモノではあるが、完全に消えるまで効果を持続するので此れが意外と役に立つ。

発された呪いは刻印を目視したり触れたりした相手の男性へと直接届き、不能・短小・破裂・切除のどれかの効果がランダムに出現する。

先程も言ったが、呪詛は刻印が消失するまで持続するので、相手の男性の再犯防止にも役立つたりするのだ。

問題は、それを本人確認せずに勝手に刻んだことが若干後ろめたかった。

見える相手には見えるし、キレイな肌に勝手に痣みたいなの付けたら、怒るのも当然だよね……。

しかもこの部はデリヘル斡旋してるし、見事に営業妨害なのだろうなあ……。

「いやあ、知らないっすねえ。何処かでぶつけでもしましたかね？」

そこまで連想出来たら、今更自白も苦しいと思われ。

俺は！全力でしらばつくれることに！した！

声が裏返ってる？ まっさかー。

「……ふうん、そう？」

「あはは……、あの、ちよつと目に毒なんで、そろそろ仕舞ってください。あと隣の兵藤先輩がすげえ血涙で歯あ食い縛ってるんで……」

どう見てもお前知ってんだろ？ ああん？ みたいな目で眺めてくるグレモリー先輩から、恥ずかしい健全な男子高校生を装って目線を逸らしつつ、すぐ隣に這い寄る恐怖を提示。

未だに土下座姿勢で姫島先輩の笑顔（コワイ！）から逃れようとしている兵藤先輩ではあるが、すぐ隣でピンクな空気醸していれば流石に誰でも気づけるわけで。

というか、以前に噂が流れた通りに、やっぱりこの人グレモリー先輩と付き合ってるのかなあ？ そのすぐ後くらいにアルジエント先輩と同棲してる、っていう噂も付き合っているって言う噂も流れたのに。

……あれ？ その状態でデリヘル斡旋する部活に同時に在籍しているって、普通の男女関係としてはあり得無くねえ？

自分の女を他所の男へ流す屑なのか、はたまた彼氏のみで満足できずに男を漁るビッチなのか……。

どっちにしても健全とは言えないなあ。でも学園理事の血縁だから好き勝手出来てんだらうなあ。

……あんまり深く関わりたくなくなってきた。この件が終わったら出来るだけ接点を控えよう。

「そうね。じゃあ、烏丸くん、少し頼まれてくれるかしら？」

「はい？」

「球技大会の後片付けを、私たちが本来は生徒会に頼まれているのだけ。正直、今日は仕事にならなそうなのよね、一部を除いて」

……何故そんな話を？

まあ、件の一部とやらをチラ見すれば納得の理由ではあるけど。

「キミが何も云う気が無い、っていうのなら其処を配慮するわ。さっきの責任の取り方をこれでチャラにする、ってことでちよつとした『お使い』を請け負ってくれるかしら？」

悪戯っぽい小悪魔的な微笑で、傷物に付いての『責任の話』を再び持ち出してくるグレモリー先輩。

その話は終わったはずでは、という理屈が女子には通用することは無いって、そらくん知ってるよ！ 知ってたよ……。

少なくとも納得はしてないんだろうなあ、とは思うけど、一先ず此処から逃れられるならば件の『お使い』を請け負うのも吝かでは無きにしも非ず。

というか、兵藤先輩へとにじり寄る姫島先輩の手には随分とアングラ臭漂う革製のアイテムが所持されていて此れからの展開をぶちやけ想定したくない。

此処から逃れられる上にアブノーマルな世界の隙間を垣間見たくも無い俺としては、グレモリー先輩からの責任追及をも払拭できる壱投式取のご提案にわかりましたあ！と元気良く応えて部室より飛び出した。

部室を後にし暫くした後ろの方で、アツ……とかいう声が聴こえてきたのは……、幻聴だよ。うん……。

▽  
▽  
▽

と、いうわけで、体育倉庫へとやってまいりました烏丸です。

それ程の間を置かずに合流したアルジエント先輩と雑談しつつ、グラウンドへ放置してあったボール入りの籠他数点を押し込めるだけの簡単なお仕事です。

俺のペナルティだったのに手伝ってくれるアルジエント先輩マジ天使い。

ちなみに、塔城は復活した後グレモリー先輩と取っ組み合いのキヤットフアイトに発展したり、それを宥める木場先輩と別の思惑で楽しそう（意味深）な姫島先輩と兵藤先輩はスルーのままに、彼女は俺に独断で手を貸してくれるという話であった。

何やってんだオカ部。あ、いや、詳しくは聞きたくないから話さなくてもいいや……。

「やー、助かりましたアルジエント先輩。俺一人だと多少手間取ったと思いますし」

「いいんですよ、これくらい。私も、ちょっと用事がありましたし」

既に日は傾き、用具室に差し込む明かりは室内を橙に染める。

それが、ガラガラという音と共に細まって往き、色を伴わない光源が枠付きの窓から差し込むのみに絞られる。

……え、扉閉めました？

「ちよ、アルジエント先輩いつ？」

「——アーシア、です」

一瞬、何をされたのかと慌てて振り返れば、後ろ手に戸を閉めるアルジエント先輩の俯く姿が目に入った。

てつきり、外から閉めて閉じ込めるつもりだったのかとばかり思っていたが……。

というか、そうされても可笑しくないことをこの先輩にはしていたんだよねえ……。

……謝るべきかな？

「え、と、すいませんでした。謝って済むことじゃないとは思いますが、一応言葉としての感情は伴っているということを考えていただければ——」

「——なんで、」

「え？」

「なんで、そんなにそっけないんですか？」

……………ん？

「えーと、……先輩？」

「名前で呼んでくれないのはなんでですか？ 召喚も、あれから全然お呼びがかからないし。待ってたんですよ？ ずっと」

「ええ……？ いや、いやいやいや、何言ってるんですかせんぱ、」  
『『アジア』ですっ』

困惑を隠せない俺を他所に、アルジエント先輩が俺に詰め寄る。

普段なら押し留めるくらいのが概も保てたのだが、暗さと彼女の押し強さ、そして足元のマットにバランスを取られて、そのまま座り込むようにマットへと腰を落とす。

当然、勢いのついた先輩もまた、俺の胸へと抱き着くようにして共に倒れ込む。

むぎゆう、と倒れたままになるのも気にはしなかったが、言いたいことはまだあるらしい先輩は、即座に起き上がって顔を上げた。

「そらくんは、責任を取るべきですっ」

「またっすか……？」

本日で何度その単語を耳にしたのか。

というか、彼女が口にする場合だと別の意味に捉われる。

……………え、まさか……？

「まずは、これからは名前で呼んでください。私も『そらくん』ってきちんと呼びます」

「あ、はい」



お、おう。

普通に年齢的に健全な要求から始まった。

良かったよ……、お腹の中に居る子を認知しろ、とかいう色んな意味でドアウトな話題にならなくて。

まあ——、最初に襲われた時の火事場のなんとやらを発揮した結果、自身の『繁殖』ステを弄ることで低値まで振り切ったからそういう懸念は実は無いんだけど。

種類で分けると把握している分は、今言ったのに加えて『催淫』『回数』『総量』『命数』の計5つ。

『催淫』は名の通りに、相手側へ与える快感の誘発性質。

『回数』は発射数、『総量』は一回で出る精液のアレで、『命数』は精子そのものの寿命。

『繁殖』は云わずと知れた命中率みたいな意味合いのアレだ。

それらを自身に空廻る『魔力』余剰分で補って、俺自身にとつての『最悪』な展開には至らないように確率を下げたわけである。

要するに、頑張つて『種無し』に限りなく近い『性』能へと自分を近づけたので、子供はそうそうできませんよ。という話だ。

好きに弄れるならとつくにやっているが、此れ、全部低値まで振り切れば性欲も抑えられるかと思えばそうでは無い。

少なくともどれか一点すらも0には出来ず、どれかを下げれば別のステが上昇するシーソーゲーム。

限りなく安全圏へと逃れるために『命数』と『繁殖』を低値まで設定することが必要であるから、必然的に他の3つが絶倫を天元突破するレベルで振り切ってしまったのである。

……ひよつとして、その『催淫』が先輩の脳みそ蕩けさせちゃったか？

可能性としては有りそうな話だ。

いくら最終的に和姦っぽい雰囲気だったとしても、レ●プ同然の相手に此処まで自分から近づいてくるとかぶっちゃけありえない。

ご都合主義？ おいおい、勘弁してくれよ。エロ漫画と現実を混同するなっつーの。

あ、そういや俺二次元に転生してたっけか。それならあり得る、のか？

「赤ちゃんはまだいませんですけど、そらくんがきちんと付き合ってくれるんだったら、え、えつちなことも覚えます。お姉さんですから、わたしっ」

——アカン。

呑気に回想と分析してる場合じゃなかった。

この人、脳みそ軽いのに一途なタイプだ。

そういう『気持ち』はキチンと元々好きだった方へと送るべきですよー、例えば兵藤先輩とかー。

「えーと……、兵藤先輩はいいんですか？　ほら、確か同棲してましたよね？」

「……イツセイさんは、ないです」

「ええ……」

俯きがちになるが、はつきりと言葉で拒絶の意が出た。

最初に名前を口に出していたとは思えないほどに、随分と気持ちが冷め切ってしまったおる。

一つ屋根の下にいるはずなのに、何故そんなに心が離れてしまっているのか。

むしろナニカしたのか、兵藤先輩よ。

「イツセイさんは、わたしを助けてくれた方です。だから、この身を捧げることで恩返しをしたかったんです」

なんか意味深な自分語りが始まった。

というか、そう思うのだったらそのまま突き進むべきじゃね？　Y

o u、告っチャイナYO。

「でも、イツセーさんは部長さんのことが好きなんです」

「あー……、それは、まあ……」

一時期に噂にもなってたしなあ、アルジエント先輩の来る前、だよ  
ね？

「あと、おっぱいは大きい人が良いみたいですし」

「あー」

むしろ其れが第一の理由だよな？

「でも、そらくんは貧相なわたしの身体とかでも、気にしてませんよ  
ね？」

「まあ、そうですね？」

自分から云うのは、どうかとも思うのです。

あと、俺は普通に普通の女の子なら好きですよ、という常識的な範  
囲で抓めます。

亜子とゆうーなが並んだ時とか、このかとせつちゃんが並んだ時とか  
も、同じように興奮しましたし。胸の大きさとか気にしません。

でもエヴァでは性欲湧かなかったんだよなあ。

やっぱロリコンじゃないから、そういうセーフティが倫理面に掛  
かっているのかね？

「それなら——、」

思考がブレブレに反って逝こうとする（人、それを現実逃避と言う）  
己の思惑を他所に、アルジエント先輩は自らの体操服を下から捲り上  
げる。

白い肌にすすべとしたお腹が覗えたかと思えば、そのままピンク

色のブラジャーが付いたままの胸の上まで、大胆に上げて晒す。

鉄格子の窓から差し込む微かな光源でも、この距離ならば見えないという言い訳も通用しないくらいの至近距離で、アルジエント先輩は恥ずかしそうに己を曝け出していた。

「——わたしをこんなふうにした責任は、取ってくださいませよね……？」

……………ていうか、生乳晒すんじゃないんだ。

まあ、男子としては女子に追いかけられるとか垂涎の夢でもあるし、そもそも俺は来るものは拒まぬ主義でもあるし。

そんな言い訳を口にはせずに、俺は彼女の身体を自分へと引き寄せ、抱き抱えるような口づけから始める。

「あ、んう、む、ふう、んああ……」

少しの間、舌を中へと這わせるだけで、火照った貌と蕩けた目元がこちらを向く。

唾液が拙い糸のように唇を繋げるのを惜しむような、見上げてくる彼女へと、呆れたような声で応えた。

「……………これで良いかよ、『アーシア』」

「あ……………！ はいっ……………！」

途端に嬉しそうな声を上げて、俺の胸元へと再び飛び込んでくる彼女。

あははーこの先輩、ほんとちよろーい——どうしてこうなった。

「あ、あの、それで、ですね……………？」

やったことは無かったことには出来ないし、オールマイクシヨン大嘘憑きが欲しかった

たなあ!!!と心中で絶叫するも束の間、もじもじとした様子で、アルジエント先輩は胸の中で疼く。

はいはい、なんですか？

「ぎよ、ぎよう、これから、シマスよ、ね……?」

——まあ、据え膳は戴く主義です。

期待するように縫った眼を向ける彼女へ、応えることも吝かでは無かった。

▽  
▽  
▽

日も沈んだ薄暗い校庭を歩く。

学外の常夜灯や、校庭の幾つかへと設置されている運動部用のライトなんかがあるから、実はそれほどの暗さも無い。

そんな不安が煽られるよりは安心感の方が比率的に上の場所で、私がやっていることはといえば人探しだ。

——つい先ほど部室を後にした、烏丸くとアーシアちゃんの2人の。

というか、そもそもリアスは彼に私たちの仕事を替わって貰おう、という思惑で『お使い』を頼んだわけでは無い。

少し部室がごたごたと騒がしくもあることに仕事が遅れることを懸念し、その手伝いを生徒会へと打診する伝言を届けて欲しい、という意図があったようだ。

誰の所為だと言う気はないが、部員が手分けて動くことが困難なのも理由の一つ。

体面的に諸手を上げて『仕出かしてしまった』烏丸くんを無罪放免とするわけにもいかない、リアスなりの責任解消の思惑だったのでろすが、……烏丸くんを送り出して一時間後に、彼女はようやく生徒会

の誰もが部室へ来ないことに気づいた。

『ところで……、遅いわね、烏丸くんたち。伝言を伝えてそのまま帰っちゃったのかしら?』

『……部長、伝言とかアナタ烏丸くんに言っていないですよ?』

キャットファイトの末に敗北し、頬をむにむにとさすりつつ小猫がそう告げたことで、私もようやく彼女の意図を汲み取ることが出来た。

まあ、イツセー君で遊んでいた私が汲み取ったところで、どう転ぶモノでもなかったけれど。

現状によりやく気付いたリアスが動ける面子を動員し、ようやくグラウンドへと赴いた時には後の祭り。

片づけは終了しており、誰の姿も無かったことで第二搜索を各自命じられる羽目となった。

リアスと小猫は生徒会室へ行き、烏丸くんが来ていないかを尋ねに。

しかし、時間的に既に生徒会も解散していそうな気がするのは私だけなのだろうか。

佑斗君はいつの間にか部室からいなくなっていたアーシアちゃんを重点的に搜索し、私は可能性の一つを考慮して体育用具室へ。

イツセー君は反省の為に、部室で『吊るした』まま放置だ。

そもそも、あの子は烏丸くんには妙に突っかかっている様に見える。

まあ、リアスが気にかけている自分以外の男子、なんていう存在が出てくれば妬み嫉みも抱くのだろうけど、それにしただって後輩へと抱く感情としては、やはりやや湿っぽいと思われる。

アレでもう少しドライな部分があれば、私も少しは懸想を抱いてもいいかなあ、なんていう感情は、今はまだ向けられそうにも無い。

それに、『私』には恋愛へ踏み出すには色々とハードルがまだ患っている部分も多いわけだし……。

話を戻すが。

体育用具室に可能性があると思ったのは、まあ一種の下世話な連想からくる冗談のような一手でしかなかった。

リアスの読む少女漫画恋愛参考書の一端曰く、学園で人気ひとけの無い場所では男女の逢瀬が在るものである。

日も暮れて、悪魔の活動する時刻へと変わった影響も多少はあるのだろうか。

私たちの中のバイオリズムの波長は、活動的になるとどうも『そーゆうこと』を連想するくらいには淫靡になる風潮があるようにも思えてくる。

下世話な言い方だと、夜になるとエッチになる、とか。

……淫魔じゃないんだから。自重したいモノだ……。

そうして（肉体的には一見して判りづらいだろうけど）控えめに振る舞っているつもり私だが、そういう連想が為されてしまったことには矢張り自分でも笑い飛ばしてしまいたくもなる。

しかし、まあ確認のため、ということを選択肢の一つとして自分で挙げたのだから見て回ってみようと、閉じられた扉に手を掛けたその時。

——用具室が、魔法的に閉鎖されていることに気づいた。

というか、この魔力波長はアーシアちゃんのモノでは？

10日程だが修行を付けた私が間違える筈も無く、では、何故彼女はこんな場所を開けられない様に閉鎖したのか。

しかも、内側から閉じられているということは、中に居るといふことも容易に連想できる。

音声的にも空間的にも閉じられている為に中の様子を覗えないし、彼女にある思惑を解除した時に台無しにする可能性を思うと、下手に弄ることも押し留められる。

私もリアスも妹みたいに想う彼女の『なんらか』をダメにするのも

憚られた為に、一先ず私は扉から離れて、用具室の周りをぐるりと巡ることとした。

空間を閉じる、要するに結界系の魔法の初歩みたいなモノだが、それは密室であれば『完全に』作用するモノだ。

人の手も目も届きづらいが、用具室の反対側には窓も付いている。学校の敷地とは少し離れた場所にある常夜灯の明かりが届く程度の、人が一人通るくらいしか出来ない隙間だけの空く、生垣が外からの通行人の目を届かなくさせる死角を生み出したか細い『通路』。

其処へと入り込むと、開いている結界の隙、要するに用具室の窓の下へと、私は近づいて息を潜めた。

人より大きな胸が現在の進行の邪魔になるのだが、突き出た己の部位で生垣を揺らすことを懸念した私は、用具室の壁へと押し付けるようにして横這いに進む。

潰れてみつともなく形が変わるけど、人目が無いのだからそんなことを気にする意味も無い。

とにかく、窓の下へと赴き、結界の空いている隙間のみ集中して干渉し、音声を拾うことを目的とした。

『ふああんっ！ そらくんっ！ そこっ！ そこおっ!!』

——うえっ!? ちょ、こ、コレはマズイッ!?

駄目っ！ 結界張り直しっ！ 生垣の外側へ防音結界いッ!

アーシアちゃんの結界を一部解除した直後に甘い艶の乗った声で響く、とてつもなく変態的な言い方をするところの所謂エロい声音が窓から漏れたことに驚きつつ、慌てて用具室の外側を結界で重ね掛けすることで外へ音が漏れることを遮る。

一瞬の判断だったのだが、それがなんとか成功したことに安堵しつつも、しかし自分の居る所へは未だ響く声に心が泡立つ。

と、いうか、まず間違いなくアーシアちゃんの声なのだけど、どうなっているのか……!!



『あつあつあつ！　いくつ、いくつ！　いつちやううつ！』

ま、マツサージとか、そういうオチ、じゃないかしら……？

などと、淡い期待を込めつつ、爪先立ちになって格子付きの窓を、顔を出さない程度に覗き見てみる。

『ふむううつ、んむうつ、つぶん、ちゅつ、んあつ、はあんつ、んあつ、そらくうつ、いいのおつ、もつとお、もつとうごいてえっ』

………用具室の床に敷かれたマットの上に座り込んだ『彼』に押し掛かるようにぎゅううと抱き着いて、口付けたり離したりしてゆさゆさ上下に動かされるアーシアちゃんの姿が。

此れ、完全にアウトだ。

こっちの淡い期待とか、安心させる気持ちとか、完全にぶった切る勢いで、見事に『男女のアレ』をやってしまったているお2人にもうなんて声をかけて良いのかも思いもつかない。

見るからにアーシアちゃんは無理にやらされているようには見えないし、そもそも用具室に結界まで張って邪魔されないように仕組んだのは彼女で間違いないだろうし、考えてみれば彼女が部屋からいつの間にか消えていた時に彼と一緒に行動していることを覗われたくないからこそ黙って消えたようにも思えてくる。

………というか、あの2人はいつからこういう関係が続けていたのだろうか？

まさかこれが最初、と思えるほどアーシアちゃんが初心な反応には見えないし、そもそも相手の男子も……白い髪の後姿から烏丸くんかというのほぼ断定的だけど、アレで初体験だとすると凄い才能を秘めているようにも窺い知れる。

挿入<sup>い</sup>れただけで嬌声を上げられるほど、女の子は単純では無い。

にも拘らず、アーシアちゃんのあの反応は、もう其処に至るまでに色々と『通過した』ラストスパートに差し掛かっていると見て間違いなかった。

用具室の中にアーシアちゃんのみではなく、烏丸くんと居たという今更過ぎる確認事項には目を瞑るとしても、その事実を私たちにも秘密にしていたというのは何故なのだろうか。

そういう微かな疑問も、抱くことは抱くのだがそれよりも、

『あっあっあっあーっ！ ああーっ！』

顔を真っ赤にして我慢しきれずに叫ぶ様子に、目が釘づけになる。親友のリアスの淡い想いとか、仲間の小猫ちゃんに対することへのアレコレだとか、アーシアちゃんが懸想していた筈だと思っていたイツセー君に対するナンチャラだとか、言いたいこと注意したいことが色々あるはずなのに、2人の絡みつく姿を阻むことが出来そうもない。

というか、見ていてこちらも気持ちが高ぶってきているのを自覚できる。

潰れた胸が微かに壁と擦れているのが、嬌声に誘発されて知らず己の呼吸も荒くなるのを感じていた。

ああ……、アーシアちゃん、あんなに気持ち良さそうに興奮がっ

……！

はっ、と気づき、覗くのを止める。

顔を引っ込めて、生垣へと身を隠す。

——その数瞬後に、生垣の外側を自転車ギコギコと音を立てて通過していった。

あ、危なかった。

覗いたままだと確実に見つかった……。

『やああっ！ らめっ！ そこおっ！ らめなのおっ！』

……ああ、まだ響く。

座るに座り込めない場所だけど、そんなことより押し付けた乳房が擦れることが止められそうにもない。

そして、むしろ見えない方が自分もまた興が乗るらしい。  
はっ、はっ、と息が荒くなりながら、胸の先端を服越しにずりずりと擦ることが気持ちイイ。

何をしているんだろうと、己の何処か冷静な部分が警鐘を鳴らすけど、そんなことよりも自慰を優先しているのは、先も思った種族的な資質なのだろう。

夜は、止められそうもないのだ。

『いくうっ！　いくのお！　あっ！　あっ！　あっ！　あっ！　あーっ！  
やああああっ！　いっちやううううううっつっつ！！！！』

「——んんっ!!」

——ビクン、とアーシアちゃんの一際大きな声と一緒にタイミングで、触つても居なかった股の閉じた膣口からじわりと染み出すのを実感する。

気づけば、胸を擦りつける為に壁へと寄りかかり、お尻を若干突き出すような、見る人が見れば酷くイヤらしい姿勢になっていることを自覚した。

……とりあえず、夜ならばすぐに見咎められることはないだろうから、着替えるのは後回しにして。

今は、行為が済んだはずのお2人へと声をかけるべきだろう。

急いで入り口側へと戻り、結界を解除しつつ今来ました、と装ってアーシアちゃんを発見——、

『——ひいんっ!?　そ、そらくんっ、いまっ、いったばかりっ!  
ひゃあっ！　うごいちゃらめえっ!!』

——え、まだ続くの……?」

「愛と正義すら友達になつてくれない件」

「何故呼んだし」

球技大会も無事に終了し、後片付け序でにアーシアを美味しく戴いて翌々日。

昨日は別段溜まっているわけでは無かったけど、彼女だけ気持ち良くなるというのも納得がいかず、とりあえず俺が一発出すまで攻めに攻めたら痙攣して失神寸前まで逝きまくった彼女が出来上がっており、どうしようかというところで姫島先輩が用具室へと現れてくれたので事なきを得た。

というか、覗いてたよね？

後ろから視線感じたし、覗いて自分で慰めていたよね？

隠しきれてませんよ。用具室の匂いに混じりもしない牝の匂いを、がつつりと股間から漂わせてんじやねーかよ。着替えてから来たら良かったんじやね？

そんなこつたさでおき、絶頂し過ぎて意識のはっきりとしないアーシアを預けるには最良の相手が現れてくれたことには素直に感謝し、いい加減に帰宅に付こうとしたところで後日、改めて話を聞きたいと直に頼まれてしまった次第だ。

が、今日の用事はそんな七面倒臭いモノでは無く、純然たる遊びの範疇。

優勝チームであるサッカー部面子の率いるクラスの打ち上げに御呼ばれしたよ！ ニエーイ！

やったぜ、これで俺もリア充の仲間入り！

……そう思っていた時期もありました。

「カラオケかあ……い」（絶望）

実に困ったよ。

隣ではサクサクサクサクサクサクと頼んだポテトを齧歯類宜しく頬張る塔城を脇目に、選曲用モバイルを弄りつつ困惑の表情を浮かべずにはいられない。

そんな俺へと怪訝な顔をするのは、反対側に座る別の女子である。こちらは塔城のような小学生体型ではなく、そこその胸囲とスレンドーボディの持ち主。元の世界やオカ研の美少女らと比べれば見劣りするが、それでも目元のはつきりとした顔立ちの美少女でもある。

というか、女の子はみんな可愛いよね。

二次元の世界だからね。モブでも美少女に成れる法則。

「あれ？ 烏丸くんってカラオケ嫌だった？」

「嫌じゃねーよ、否じゃねーけどさ……、色々とジエネレーションなギャップがね……？」

「……同年代だよね？」

最初の自己紹介でバスケットだと名乗った彼女へ、若干の親近感に近い感情を抱きつつも、理解されないであろう実情を語れそうにも無い。

——知ってる曲が、微塵も無い……ッ！

ニュージエネが無いのは知ってたけど、ボカロ系、東方系、特に拘りは無いがアニソンは少なくとも全滅。

更に知ってるアーティストも全滅。水木の兄貴い！を筆頭にBump何某に水樹とか西川とかおいおい影山もいねーじゃねえかよ。そうなるも必然応援していたNITTLE GRASPERもBAD LUCKもOOZも名前すら無く、イツサすら無いってことは乾巧もジャステイファイズ出来てねーってことじゃねーかよふざけんな。ちなみに小林じゃ無い方な。

サブカル弾幕うっすいよー！ 何やってんのオー！

実際問題、此処に来てかつて辿っていたサブカルチャーの範囲の狭さに愕然とした。

俺だつてオタクと言うほどでは無いけど、少しくらいは更新を追いかけている趣味の一つや二つはある。

その総てが紛<sup>パチ</sup>いモノに成り代わっている世界だぜ？

ネギ君とか大柴とかがやって来ていたとしたら、一ヶ月持たずに発狂するんじゃないか。

麻帆良があの世界で世間の文化を十数年分引き上げていたとしたら、この世界はそこから十数年分引き下がっているのが現状だ。

この世界に来て手持ちのスマホがうんともすんとも云わなくなつたからな。最低でもケータイ程度は普及しているっぽいけど、俺が自分のを所持するには新しく契約し直さなきゃならないし、加えて身寄りも無いから実質不可能。

酷い情報弱者を此処に創り出してるよー。

術式は出来ても機械系は云う程出来ないんだよね。

ちなみに、術式ショートカットは代替品であるアーティファクトで問題は無いが……、やっぱり慣れてないと手間だよね。

まあそんな難しい話はどうだっていいんだ。

現状の問題は他にもある。

……俺、斎藤くんらに呼ばれたはずだよね？

なんで彼ら男子は別グループで、俺だけ女子グループに混ぜられるんの？

さも居て当然な顔で付いて来た塔城小猫が隣に座つたのを皮切りに、反対側へは先ほどの女子、正面には別の女子3人、椅子の背凭れには被り付くようにギャル系の子が俺の手元を覗き見る。

何の包囲網だよ。塔城除いてみんな若干目が怖いんだけど。

アレか？ グレモリー先輩で血華を咲かせたのが不満でお礼参りみたいな思考回路か？

人気者だよねえ、あの先輩。中身はやや残念そうだけど。

大部屋頼んだん誰よ？ 離れてないでこっち来いよー。若干嫉妬みたいな目を向けてないでサー。

いや、俺が行けばいいんだよね。

そこまで考えて隣の塔城を見遣れば、メニューを見て一部を凝視し

ていた。テーブルの上の皿は空である。ポテトは犠牲になったのだ……犠牲の犠牲にな……。

「塔城、注文か？ よし、お兄さんが奢ってやろう。季節のタルトとかどうだ」

「え、烏丸くんが優しい……っ、デレましたね!？」

「ただの親切だよ。っーわけでちよつと退いてくれ、今連絡を――」

「あ、ソレで注文も出来るよ?」

「――……そうなん?」

目の前の女子の一人が俺の手元のモバイルを指差して笑う。

剣道部と名乗った短いポニーテールの快活な娘だ。

髪の色こそピンクでは無いが、軽く佐々木を彷彿とさせる印象を覚えて。

俺はそれに曖昧に晒って、件の彼女にそのまま操作の手ほどきを受けつつ絶望していた。

電話で注文取るために居場所の移動作戦、――失敗である。

それにしても……危なかったぜ、此れでピンクだったらこの世界のヒロイン確定じゃねえか。

二次元の世界で生きてる以上は主人公らに関わると碌な事が無い、と言う程度は学んでいる。

ひよつとしたら彼女に懸想をする主人公格が、この場にやって来ていたかもしれないのだ。

そんな修羅場、御免蒙る。

そんなわけで、俺はモブに徹するぞオー！塔城オー!! と、決意新たに彼女の右隣の前髪ぱっつんにモバイルを受け流す。

選曲しないで何時までも抱えていても迷惑だろうしな、歌いたい娘、挙手!

「烏丸くん、選ばなくて良かったの?」

「……あー、まあ、俺は後でいいよ」

「えーっ？　じゃあさあ、アタシとデュエットしない？」

佐々木もどきの左に居るメガネの娘が怪訝な顔で訊くことへ曖昧に笑い、その隙について後ろのギャル系がほいとマイクを差し出した。

だから曲知らねえって言っただらうがダラズ。

恐ろしい……、そうやって俺を公衆の面前で辱めるつもりだろう

……！　小学女子のイジメみたいに！

（あの少女漫画再現アニメの目のデカさはホラーだと思いましたまる）

「いや、ごめんなー。俺その曲知らないわー。ガオ●イガーなら歌えるんだけど」

「むしろそっちを知らないわー。ていうか聞いたことも無くね？」

烏丸くんってやっぱオモシロイねえー」

面白くねえよ寄りかかってくんなよ雌の匂い漂わせんな興奮しちゃうだろ。

ケラケラ笑うギャル子に依り掛かられて、その拍子にふわっと肩口に彼女の乳の重みが。

……ふむ、これ、見た目以上にあるな。着やせするタイプ？

「か、烏丸くん、飲み物お代わりしない？　ドリンクバーいつしよに行こうよっ」

モバイルを渡した黒髪ぱっつあんが、何故か慌てたように席を立つ。

ところで今更だが、振替で休日なので全員私服で来ているわけだが、ぱっつあんはどうも大人しめな外見の割に服装は露出が多い。

立ったその時に、ホットパンツから覗く太腿が白くて眩しかったという話。



つまりぱつつん娘改めぱつつあんはhotなガールでパンツァーだったという……スマン、自分でも何言ってるのかわからんくなってきたわ。

あと行動するときには俺独りがいいなあー、一緒じゃ席替えも難しいよね？

「や、まだ残ってるし、」

「ああ、錬金してみよっか！ 目指せ味のマエストロ！」

「店の迷惑になることは辞めようぜ？」

隣のバスケット娘が、何故か乗り気で俺のグラスを確保する。

これだから高校生は。素人が手を出せば大概が目も当てられない悲劇で終わる、という現実を未だに自覚できておらぬ。

——って待て待て、自分のでやれ。

そのまま往く2人を止めるべく、俺も仕方なしに立ち上がった。

……ドリンクバーには、勝てなかったよ……。

「あ、烏丸くん、私はコーラをお願いします」

「塔城は動く気ねーのな？」

コイツ……！ 一回優しくしてやれば付け上がりやがって……！

▽  
▽  
▽

炭酸と苦みのエクシード融合！ 隠し味は酸味と午後Tea、って俺のコップが酷い錬金術の実験台になって逝くのを止めることは不可能に終わる。持って逝かれた……！

処分する勇気が無かった俺は、そつとそのコップを机の中心へと置くことしかできなかった。え？ 飲み干さなきゃ帰れない？ お残しは許しまへん、って最近のカラボは忍術学園でもリスペクトしてんの？

そんなわけで、烏丸くんのちよつといいところ見てみたい！という  
コールの後にイツキを戴いた烏丸です。そらくんって呼べよ。あと  
誰だ、シロツプをめつさ投入した奴。糖尿病になるだろうが、俺は死  
んだ魚の目をした侍と違うぞ。

そのイツキのノリのままにいつそネタで、それいけ！な菓子パン顔  
面の正義のヒーローソングを選曲すればバラードだったという罨。  
アソパソマソって誰だよ。と思ったけど聞き覚えもある。

……ははーん、さてはこの世界ラブコメだな？ 難聴系主人公が九  
州辺りに居るんだな？

やはり九州は鬼門。前の世界でもそうだった。無理やり連れて行  
かれて得たモノが文化祭に招致されたバンドのみで、泊まり掛けと言  
うトラップの果てに捕食されたのだから溜まったモノじゃねえ。明  
日菜のド阿保うめ……！

とまあ、過去を振り返ったりトラップに嵌ったりこの世界の真実を  
垣間見たりと、様々にカオスな3時間を過ごした。

楽しかったのは愉しかったからまあ構わないけど、きつと過去を振  
り返った経緯のアレは走馬灯の類じゃねーのかな。

二次会？ いや、ちよつと無理っす。

——雌の匂いで欲求掻き立てられて、もう少し連れ立ったらどいつ  
かを喰ってしまいそうで。

喰種か俺は。

初めて塔城が天使に見えた。アレだけ情欲を刺激しないまな板が  
隣に居たお蔭で、子供には見せられないという理性で抑えつけた本能  
に従うケダモノを解放せずに済んだ。ありがとよ！

いや、普通に同じクラス的女子とか喰っちゃったらダメでしょ。  
今後気まずいわー。絶対碌でもない噂を流されるわー。

生理現象としての雄の解放は仕方ないと割り切っているけど、俺は  
根本的に違う世界の住人だから、その内帰るといっものは確定的に明ら  
かなわけ。

精々一夜限りのお相手に済ませたい、というのが男女関係を続けて  
ゆく上での思惑でもあります。

要するにアーシア先輩は現状お呼びでないです。

付き合うフリして、その内別の男を宛がう策でも練ろうかな……。アレだけ美少女なら選り取り見取りだろうに、なんで最初が兵藤先輩に逝っちゃったのかねえ。あの人の趣味と真逆、とまでは云わないけど、相性と時期が悪かったよねえ。

話が逸れたけど。

そんなわけでちよつとムラムラしてる俺は、クラスメイトらと別れて日も落ち掛けた街中を散策中。

喰っちゃつても問題ない子はいねがー。

ちなみに塔城は別口で用事があると言って解散の流れであった。

あれ？ アイツも歌ってなくね？

『お恵みをー、この憐れな隣人に皆様方のご配慮をー』

『恵まれない者らに愛の手をー』

益体も無い思考で街を散策していれば、丁度好さげな襪襦マントの美少女二人を発見した。

募金、みたいなことを発言しているけど、手にある箱にあるのは無駄に凝った十字架のみで、何処への寄付だとかそういうことには触れていない。

観るからに怪しいし、そもそもホントに募金活動か？ なんか見た感じ、個人的思惑の果てに成り下がった現状を打破しようとしている考え無しに見えてくる。そもそも未成年だし。

『くそつ、誰も止まらないとはどういうことだ！ 日本人は宗教に優しくないと聞いたが、そもそも人へ無償の愛を施そうという精神性すらないんじゃないのか!?!』

『駄目よゼノヴィア！ いくらホントの事でもそうやって当たり散らしても無駄にお腹が減るだけよ!』

『そもそもお前があんな絵を買うから資金が足りなくなっただらうがっ!?! 人を諫める前に己の行動を鑑みろっ! 大体なんだこの

絵は誰が描かれているというんだ!』

『え、えーと、多分、ペテロ様……?』

……なんか、本当に自分の為だけの活動に見えてきたな。

まあ、変に取り繕って神への愛とやらを訴える宗教家よりはマシか。

そう判断し、人に警戒されないような笑顔を貼り付けて御二方へと近づいてゆく。

「お姉さん方、お腹空いてるの?」

▽  
▽  
▽

そもそも、俺は聖書を布教するような一団を個人的には好ましく思っただけ。

話を聞くのを断れば他人へ人非人みたいな扱いで目を向けてくるわ、聞いてやれば聞くことが当然みたいな態度で延々と時間を取るわ、拳句の果てには自らの宗教が隣人への愛を謳う癖に他の宗教を認めない教義の矛盾っぷりだ。

一神教、つー考え方そのものが日本人の観念とは別物なんだろうけど、それ以前に唯一のモノとやらを崇めてそれ以外を排するっていう優越感に浸るのは己だけで充分、みたいな思惑も見え隠れするのは結局支持するのが人であるが故の弊害と云うか限界と云うか。

話が逸れるのでグチグチと云う気はないが、要するにそういう己らに都合のいい常識を正義という薄皮で包んで他人に擦り寄る神経が気に食わないのだ。

——だが、それが彼女らに目を掛けたという理由であるわけでは無い。

単純に、見た目が良い。

喰っても遜色の無さそうな外見と若さを持って、実に釣り易そうな状況に陥っているので釣り針を垂らしてみた。

本当にそれだけの理由。  
食いついた大魚は――、

「……で、ファミレスで1人頭5人前、都合10人前の食事を平らげた以上、まさか言葉一つで済ませようとか言う恥知らずなわけないよな？」

うん。

相手の見た目が高校生くらいでこつちが高校一年生だからひよつとしたらと隠れた年功序列を意識しつつ初めは碎けながらも敬語もどきを使おうとしていたけど、餓鬼かと思紛うばかりの喰いっぷりを見た時点で口調は既に平坦です。

食事の合間に聞けば、どうも布教みたいな？ことをしに日本まで来たのは良いけど、片方の茶髪の子が碌でもない絵画にうつつを抜かして活動資金を袖にしたらしい。

結果として、差し出せるモノが無いので後日改めて、等と言い出したので俺は口にしたわけだ。

それを易々と信用するほどお人好しじゃねえ。

「なっ、食費はキミが払うと言ったではないかっ!？」

「いや、そつちに支払い能力が無いのは初見で分かっていたから其れは良いけどさ、御飯だけ喰ってハイさよなら、とか言い出しそうな雰囲気だったから聞いてみただけ。別になんか俺の得られるモノを支払うって言うんなら問題は無いけど?」

奢るとは言ったけど、聖職者の辞書には遠慮という言葉が載ってないのかしらね？

青髪の子が憤慨止む無し!と言葉を荒げるが、俺は『今』確実に返してほしいナア。

出来れば身体で。

マントみたいな恰好だけど、その下にチラチラ見えるのがなんかボ

ンテージっぽい衣装なんだよね。今時の聖職者ってどういう服装で布教するんだよ、ってちよつと立川市の誰かさん（片割れ）が不憫に思ったけど、それ以上に俺の現状（クラスの女子に煽られてムラムラ中）だと更に興を乗せられる材料でしかない。

「は、払わないとは言っていないじゃない。……お礼は、後ほどなんとか」

「それを信用させられる保証は？ 身代としてなんか預かるか？ その場合本当に返して欲しいってお前らが思う様な物品じゃなきや証明にならんぞ？」

質屋みたいなことやってるけど、俺は金を要求してるわけじゃ無いからまだセーフ。

茶髪でツインテール？ ツーサイドアップ？ な髪型の子は、自分で出した条件に胸を押さえる。

本当に一文も持っていないらしい。

まあ、端金を寄越されても足りない分を喰った以上、それで解放するほど俺も甘くは無いです。

「……己むを得ん、此れでどうにかできないか……？」

「ぜ、ゼノヴィアっ!? アナタそれっ!?」

と、青髪ボブの子が差し出すのは、椅子の脇に立て掛けてあった彼女らの所持品。

随分と大きい布で包まれた何かだが、……ひよつとして剣、とかじゃないよな？ ファンタジーな小説とかの冒険者が持っていそうな所持の仕方してるけど、まさかこのご時世に。

「破壊のエクスカリバー、というこの世に二つとない品だ。必ず払うので、それまで預かっていてくれ」

「ちよ、ちよつと!? それを差し出したら任務が……ッ！」

「なに、私には代わりになるモノもある。当然、だからと言って返さなくても構わないという品というわけでもない。証明になるはずだ」

布をずらして覗かせる、鈍い反射光。

本当に剣だった。

銃刀法、仕事しろ。

というか、彼女騙るに落ちてるよね？

彼女、自分で代わりになるモノがある、って口にしちやっつてんじやねーかよ。

あとき、エクスカリバーって、お前……、此れで？ 馬鹿にしてるの？

「要るかこんなナマクラ」

——パキイ！

「——ちよっ!?!」

俺がこの間片手間に造った惨酷王よりも魔力含有量が少ねえ。

破壊の、とか銘打ってるくせに、こんなんじやアーウエルンクスシリーズの障壁すら壊せねえんじやねえの？

そう判断して、屑、と看做した名前負け過ぎる剣を拳裏拳一つでスコンと真ん中から叩き折る。

可哀想に……、騙されてるのよあなた達……（憐憫）。

「えっ、あつ、ちよっ、うゝええええゝえゝえゝ!?!」

「——いや、いやいやいや……、え、え？ 何これ、ギャグ……？」

本気で信じていたらしい彼女らは状況を呑み込めずに、思考回路も恐らくはショート寸前。

「ただ純情だよ、電話した方がいいんじゃない？（クーリングオフ的な意味で）」

「どっかの路地裏でも購入したんか？　ほんと糞みたいな出来だなあ……。こんなんじや何十本あっても選定剣には到底及ばねえぞ、つうか、そもそも概念附加が薄すぎるし、素材も拙いし、刃も荒い。え、鈍器？」

魔術は専門外だけど、構造と骨子と冶金術くらいの嗜みはある。そらくん知ってるよ、本気でエクスカリバー造ろうとしたら常温超伝導するくらいの錬金を成功させなくちゃ切れ味も悪いって。

これじゃあ元の世界の魔女さんが造った量産型魔剣の一振りにも及ばねえなあ……。

「で、支払い能力が無いんなら、ちよつと付き合ってくれる？　なあに、軽く労働してくれば文句は言わないから」

そんなわけで本題を切り出した俺に、呆然とした彼女らは渋々とホテルまで連れ立ってくれた。

入るときにその建物の外装と雰囲気で察し若干ごねたけど、宿泊施設も兼ねていることを教えると嬉々として入館。

数日振りに風呂に入れるとか、……お前らどんだけ金が無いんだよ。



☆「今こそ愛という名の信仰心を試すとき」

「っ、いっ、ぎいっ!?!」

ぞぶり、と自身の身体を裂かれるような鈍い痛みを感じると共に、腹の下から異物を押し込められているような衝撃を受ける。

そうなるとは自覚していたが、破瓜の痛みを味わうよりより以上に、己の口から真っ先に漏れたのは悲鳴であった。

「ぎや、あっあっあっんぎいっ!?! ひっ、やだあ、やめ、えっ!?!」刺されたような苦しみが、彼自身が腰を動かせることで、身体を揺らされた私の呼吸が乱れる。

逃げようとも、右太腿を彼の脚でがっしりと固定され、2人の接合部は密着したまま離れなかった。

その上で伸ばされた左脚は彼自身の腕が捕まえて、空いている腕が私の腰を捕まえて彼自身へと抱き寄せられる。

寄せられたニヤニヤと愉悦に歪むその貌から伸ばされた舌が、鎖骨と首筋をぞるりと舐めればより一層の嫌悪がこの身に走っていた。

「くっ、このっ! んぐあっ! あひいっ!?!」

——蠢く。

子宮の入り口で、膣の中で、彼の『自身』に別の生き物のような暴虐を果たされた。

跳ねるような脈動の硬いソレを押し返すことは最早私には不可能で、16年守つて来た純潔はあっさりと彼の手へと奪われていたことを、今になって苦しみが心中へと襲い来る。

——惨めだった。

「がっ! あっ! あっ! んあっ! あうっ! とめっ、とめてえっ、うごくのっ、とまってえっ!」

暴れられるソレに、人間としての、生き物としての雌の本能に従つて『反応』を示してしまっている私自身が。

そして、いとも容易く掃き捨てられてしまった『聖職者である』という『過去』に、未だに縊ろうと心の何処かで叛意を抱えようとして

いる『計算』が。

——事此処に至つては、最早何も抗えないということをして騎士として自覚してしまつた筈なのに。

「やああっ！ らめえっ！ らめらめらめんあああああっ!!!」

勢いで動かされた腰が、生物として何を意味するのかを知らないほど、女として疎くは無い。

放射される感觸を子宮の奥へと響かせられるそれと、ほぼ同時に果せられた絶頂に、私は、ゼノヴィア・クアルタは女としても実に情けの無い悲鳴を上げて仰け反つた。

「……あつ、あ、うあ、っ……」

腰から手を離されてベッドへと自然に仰向けに沈み、半開きになつた口から酸欠した時みたい息が漏れることを自覚する。

そして、それを己で止められないことも。

子宮の中に弾けている、彼の精液の熱さで、自身の躰が未だ跳ねるように反応を示すのを抑えられていないのだ。

これは恐らく、鍛えたはずの聖騎士としての己の意志でどうにかなるモノでもなく、生物としての反射的なモノ。

捨て去つていた筈の女を、雌を、半ば無理やりに起こされて身体を開かれたようなモノだ。

すぐに順応なんて、出来る筈が無かつた。

「あ……、ん、んあ、っ!？」

ぐじゅ、と解放されたはずの『私』へと彼の『未だ硬いモノ』が奥へ押し付けられる。

余韻にすら浸ることなく、もう身体を休めたかつた私は、覚醒されたその身に更に断続的に打ち付けられる衝撃で再び声を上げた。

今度は悲鳴では無く、それはもう、

「ひゃうっ、んあつ、まつへえっ、まら、いつらまつかりっ、なのおっ」

——嬌声。

身体が、意思が、反射だけで雌としての反応で、彼へ拒否することを出来なくなつてしまつている。

閉じることを忘れた口から出ている其の音が、言葉にすらなつてな

いことに気づくことも出来ない。

そんな反応だけを身体が自然と応えている状態で、がくがくと仰向けで揺すられていた私は、視界の端に其れが映っているのをようやく認識した。

——それは、イリナが呑気にシャワーを浴びている姿——。

ガラス戸で仕切られた部屋の向こうで、こっちに気づいてない様子で身体を洗っている。

「気づいたか？ アレ、マジックミラーみたいだな」

胸に手を添えられて、掴まれてぐにぐにと片方の乳房を潰しながら、彼に面白そうに囁かれた。

私は叩きつけられる腰に甘く蕩ける声を上げることではしか応えることは出来なかったが、イリナの其れが私と同じ目に遭うための『下準備』にしか見えなかったのは仕方のないことなのだろう……。

▽  
▽  
▽

「ぜ、ゼノヴィ、ア……?」

まさに戦々恐々としたご様子で、ツーサイドアップに括っていた髪を下ろしたままの湯上り美少女がお風呂シーンを終えて戻って来ていた。

女騎士みみたいな青髪ボブの娘は、その間俺に蹂躪しつくされていたわけで、其の様を、結果を目の当たりにした上での戦慄の表情なのだろう。

こちらの青髪美少女は、ベッドの上で息も絶え絶えに、股からは白液をごぼりごぼりと時折噴き出すくらいに痙攣で、序でに全裸であつただから。

「……………イリナか……………」

小休止中の俺を挟むことも無く、湯上りで部屋に備え付けのバスタ

オルを巻いた彼女を認識し、長めの沈黙ののちに何処か掠れたような声で小さく呟くゼノなんとかちゃん。

ふむふむ、そっちはイリナちゃんね。りよーかい。

「あ、アナタ、その、それ……」

「お風呂空いたし、ゼノちゃんも頂いてきたら？ 身体洗っておい  
た方が良いだろ？」

「……………ああ、そうさせてもらおう……」

視線だけが何かを言いたげにこつちを向いた気がしたが、それを検める気もなさそうなので放置。

よろりと足取り覚束ない様子でだがなんとか立ち上がり、ふらふらとイリナちゃんの方へと歩み寄るゼノちゃん。

それを心配そうな眼差しで、しかしどういいう経緯があつたのかは空気で理解できたのだろうイリナちゃんは、声をかけるのを躊躇っているようだった。

そんな様を見て、ゼノちゃんは空虚に微笑う。

「…………イリナ、心配するな。私が此れだけ受けたのだから、あの男ももうそれ程激しくはないさ……」

「ぜ、ゼノヴィア、それって……」

イリナちゃんの疑問に直接答えることはせず、そのまま幽鬼のように丸見えであつたバスルームへ足を運ぶ。

前にアーシアの時にも使わせてもらったけど、此処って結構サービ  
ス良いよな。

それはさておき、交替のお時間です。

呆然と見送るイリナちゃんの腕を掴み、それ程広くない部屋の中央にあるベッドへと放り投げるように引きずり込む。

何が起きているのかを今一つ理解していない様子の彼女は、抵抗する暇も無く為すがままにその身体を柔らかな其処へと沈めた。

「——キャツ!？」

「改めて思うけど、2人とも身体つき良いよなー。聖職者なのは間違いないんだろ? それでこんな男を誘惑するような身体つきって、教義に反したりしないの?」

「な、何を言っつて、ひいっ!?! 触らないでっ! あんっ!」

倒れた拍子に広がったバスタオルを回収することも出来ず、あられもない姿を晒してしまうイリナちゃん。

そんな彼女の年相応に豊満な乳房に健康的な桃色の先端を観察し、そして健康的なしっとり湿った湯上り肌へ手を伸ばす。

さきほどアレだけ喰った箸のモノは何処へ行つたのかミステリーな、細い腹へ手を回して撫でるように弄んだ。

「まあまあ、ゼノちゃんは受けたぜ? 此処の宿泊費は俺持ちだし、一宿一飯の恩をこうして支払うだけで良いんだ。今後ともこういう付き合いを続けよう、みたいな誘惑じゃないんだから、破格の値段なんだと割り切らなくちゃ」

「お、女の子の身体をそんなに安く差し出せるわけないでしょ……!?!」

「そうか? むしろ充分高価で扱っていると思うけど。あ、それと、キミもやっぱ処女だよな?」

んぐ、と言い淀む。

まあ、此れで処女でなかったら問題でしかないのかもしれないけど、日本じゃ神職代表の巫女さんだって元々は身体を差し出してお布施を回収していたっていう歴史がある。

欧米でシスターが似たようなことをしていても特に不思議とは思わない。

そもそもが人間は何処で生きていても人間なのだ、生物としての本能をそうそう易々と切り離せたら、とつくの昔にもっとマシな進化を

促しているだろう。  
話が逸れた。

「誰か好きな奴でもいる？ 操を捧げるって誓った相手とか」

「い、ない、けど……」

ふむ？

この反応は、思い当たる人物がいるけど其処まで深く想っていない、くらいのレベルか？

それなら問題ねーな。

「居ないんなら早いうちに此れくらいの『経験』しておいて損はないだろ。『そういう御相手』っていう認識だから俺もアンタらを相手に一晩付き合ってくれる、っていう条件でこちらの支払いをチャラにするって提示してんだしー。……そもそも、若いうちだけだぞ？ こうやって処女を高価に扱ってもらえるのなんて」

「……」

何か言いたげだが、納得もしたのか、恥ずかしそうに顔を背けるイリナちゃん。

うむ、お2人とも、喰われるくらいなら死んだ方がマシーとか生死を問う様な短絡思考でもなく、散々奢ってもらったけど食い逃げしようぜ！みたいな逃亡も選択肢には入れていないようで、良い子過ぎてお兄さん一安心だよ。

それじゃあ、始めますかねえ……（ゲス顔。

▽  
▽  
▽

首筋から胸元へ、撫でるように舌を這わせ、流した水気みずけを搔いて肌を流う。

仰向けに倒れたままから自発的にサービスする気は恐らくなさそ

うなので、そのままの姿勢での攻勢だった。

片手は彼女の秘部を、穴の周りを弄び、指先で比較的『開けても平気な』浅い処を、薄く生えそろうった陰毛の奥をくちゆくちゆと蠢かせる。

若いから薄いのか、はたまた手入れをしているのか、それとも元から薄毛なのか。

ああでも、確か外国人は生えっぱなしではなくて処理をするとか、むしろ無毛に傾けるとかって聞いた覚え有るな。

ということは、アーシアがパ●パンだったのもそれなりに理由があったのか。

ゼノちゃんも剃ってみたいだったし。

それはさておき意識を戻す。

もう片方の手はたばたと意外に重量がある乳房を水風船で遊ぶかのように弄び、時折コリコリと先端を摘まんで、力を入れないようにくにくにくと潰す。

唯一不満があるとすれば、普通に姿勢が遣りづらい。

せめて後ろ手から回すか抱くかするような姿勢になってくれれば、もうちよつと楽に手を掛けられたのだけどなあ。

「あつ、んつ、んひつ、いあつ」

いきなり挿入<sup>い</sup>れるわけではない、執拗なその前戯に、イリナちゃんは戸惑いつつも抵抗することは無い。

生物として反射するように反応するのはゼノちゃんと同じだが、彼女と同じに扱うにはタイプが違うのだとすぐに理解できた。

というか、ゼノちゃんの方が一般的には珍しい方かも知れない。

例えるならば『女騎士タイプ』。正義の魔法使いタイプ、と銘打つても意味合い同じやも知れぬ。

悪党に屈するくらいなら自決か死を選ぶ、つていうステレオでテンプレな誇りの高いタイプだ。

高音<sup>キユン</sup>さんとかと話が通じるんじゃないかなろうか。はたまた同族嫌悪で恥<sup>キユン</sup>ずか死するかも。

ああいうタイプが「くつころせ！」とか云うのはなんか様式美みた





曲げて突き立てて閉じて開いて蠢かせれば、緊張した肉壺を解すように均す。

「あ、っ、あつ、あつ、あ……い！」

ぐばあ……、と歪な二等辺三角形を作る様な小さな『隙間』をゆつくり広げれば、最終的には閉じたがっていた目元から手も離れ、焦点の合わない目が何処と無しに中空を見上げる。

実際目で見て確認したわけじゃ無いが、指先から感じる感覚的にも拡張できたのが本当に『隙間』だ。

……今更だけど、『こういう相手』ばかりとやってばかりいる気がする俺は外道なのではないだろうか……。

まあ、逆に今更的に辞めないけど。

息も絶え絶えに両腕を広げて、放心している彼女の膣口に、俺は休んだお蔭で復活した自身の先端をこっそりと宛がった。

それにしても自分で言うのもなんだけど、復活速いなあ……。

「——ふぎっ!？」

ずむ、と挿入れた其れが、膜のようなモノを一息にブツツと突き破る感触を覚える。

イリナちゃんもまたそれを自覚できたのか、意識を失いかけていたっぽいのに呻き声を上げて覚醒した。

彼女が正常に事態を理解しきる前に、ぐにずぐむにゆずむ、と膣中を奥まで押し進める。

「な——はひいっ!？」

歯を食いしばる様な顔で、子宮口にキス（意味深）したと同時に仰け反って声を上げられた。

何か言いかけた気もするけど、多分現状確認の為の言葉でしかないだろうから問題は無い。

「あ、っ、おつ、んおつ、んひっ、ひあつ、あはっ！」

子宮口へ突き入れる寸前のキスを何度も、腰を打ち付けることで繰り返す。

雌としての本能でも起こしてしまったのか、辛そうだったのは最初だけで、次第に悦ぶような声まで上げるようになった。

叩きつけるスピードをもっと早くし、勢いもついて肌のぶつかる音が激しく部屋へ響く。

「あゝっ！ あゝっ！ んゝあゝっ！ あゝっ！ あゝっ！ がっ！ んゝあっ！ ぎいっ!？」

手が空いてるのだからこっちに反撃でもすれば良さそうなモノなのだが、そういう意図を抱えていないのかはたまた思いつきもしていないのか、随分と律儀だなあとは思う。

そんな彼女は悲鳴に似た声を上げつつ、両手を放り出すように大字に広げたままに、顔を強張らせたように目を見開き歯を食いしばってされるがままに揺さぶられる。

対して俺は空いた片手で腰へ添えて揺らす補助、もう片方は乳房を掴まえて感触を楽しみ、視覚的には突くたびに跳ねるもう片方のおっぱいの上下運動を愉しんでいた。

おお、跳ねる跳ねる。

バインバインだぜっ！

「つと、そろそろ出すぞっ、膣中なつかにイクからなっ」

手と下の触感的に割といい感じで締め付けてもくれるイリナちゃんへご褒美タイム。

あとついでに目も愉しませてくれたから、これはチップ代わりね。

「ひっ、ぎっ、あっ、やあああああああああっ!？」

どぶう、と普通の量ならば嘔き出して注がれている筈の一発が、どびゅどびゅどぶどぼどぼどびゆるびゆるびゆるるっ!!とまあスゲエオノマトペで効果音表した方が正確じゃねえの?っっていうくらい噴射して彼女の子宮へと直出しされた。

熱さが直接内臓へ伝わっているだろうから、そのタイミングで絶叫を上げるのも納得の一発である。

腰を完全密着させて、おっうおっう、て声にならない気持ち良さを上げている俺の余韻に白目になりかけつつも、伝わる射精の脈動にあへっあへえっとして身体を痙攣させるイリナちゃんがちよっとな可愛かった。

「——んあっ!？」

——ので、思わず腰を更に動かした。

ぐじゅりつ、と出した精液が押し込まれたのか掻き混ぜられたのかわからない感触が伝わった気がしたが、インターバル無視で続投。

VSイリナちゃん、第2ラウンドの始まりです。

「くくあつ、まつ、」

はい、それじゃあ続きと逝きましようかねえー（アルカイツクスマイル）。

▽  
▽  
▽

「……………え？」

「おー、ゼノちゃん来た。やっと来た。早くしろよー、夜はまだこれからだぞー？」

「あつ、あつ、あつ、あんっ」

目の前で行われている光景に声にならない声しか出ない。

というか、認識がすぐに出来なかった。

なんとか腹に注がれた精液を出せる分だけ掻き出し終えて、身体の疲れを落とすようにゆつくりと熱いシャワーで流し、ついでに汚された感触も落としたかった私は時間をかけるように湯浴みを終えて部屋へと戻った。

最中に、そういえば浴室のこの大きな鏡には私の姿が全部映っているのだろうか、ということ思い出したので、あまり長く居てもバレルだろうとは理解も出来たから、渋々戻らざるを得なかったというのも本音だが。

だが、その時間も精々取れて1時間が限度だろう、とは思っていた。自分で言うのもなんだが、私は元々早湯なタイプだ。

風呂に時間をかけるということを元よりやり方を知らないのだから、ずっとシャワーだけ浴び続けているわけにもいかなかった。

そうして、体感時間で1時間ほどしか稼げなかったとも理解している。

——その1時間で、イリナが完全に陥落している様にしか見えないのだから、私が間抜け面を晒すのも仕方のないことだとは思わないか……？

件のイリナは完全に悦んだ声を上げている。

座った姿勢の彼に抱き着くように密着し、首に手を回して脚まで腰へと絡めて、彼が掴まえているのは彼女の尻だ。

そこを持ち上げるようにイリナの身体を動かして、自分の上で跳ねさせて遊んでいる。

その勢いは解けた彼女の長い髪が、跳ねるたびに放射状に広がって乱れる程だ。

その姿も扱いも、まともに女性へと施される行いで無いのは明白なのだが、それでも何処か淫靡なそれには、思わず目を奪われた。

それを、白く剥いたような半目で蕩けたように悦んで、甘んじて受け入れているのだから、本当に我が目を疑っても仕方がないと思う。

間の抜けたところがあつたり、幼馴染が悪魔になつていても気安く話しかけたりと、色々とアレなところのある娘だがああ見えてイリナも敬虔なシスターの一端だ。

それが、ああして肉欲の快樂に意図も容易く溺れる？ それもわずか1時間で？

……それとも、私の目論見が明確では無かつたのだろうか。

少なくとも、一般的な性知識として知っている限り、男性というのは日に何度も射精できるものではない、と聞いていた筈なのだが……。

「んひあつ！　くっつ、つ、んっ、あひええ……」

「おい、早く来ないとイリナちゃん人語忘れるぞ。2人ともきちんとして相手してやるから、ベッドへ戻れよ」

——っ!?

……気持ち良さそうに顔を蕩けさせて、恍惚の声を漏らす彼女が本当にシスターであつたのかと問い質したくなってきたが。

それ以上に、彼の言い分に、今、腹の奥が蠢いたような感触を覚えた……。

こう、なんか、ジユン、って……濡れた、漏れた？

もしくは、こう、妊娠した、みたいなの？

まあ、アレだけ出されたのだし、むしろ納得も出来るが……。

「んほおお……、もつとお、もつとしてえ……」

「あ、これ駄目だ。ほんと駄目だ。さっきまでの面影微塵もねえ。此れ完全に堕ちた雌豚の貌だ。見て見ろよゼノちゃん、面白いよ？」

「……仮にも私の相棒にトンだ言い草だな」

「雌豚なだけに？」

「ぶひい〜」

——おい。お前本当にそれでいいのか。

冗談めかして挑発しているのだから、本気で冗談を口にしていいのか、彼の思惑は理解できないが、少なくとも共に任務の為に日本まで赴いたかつての相棒は既に死んだのだと諦めの念とか思い出とかが心中に去来する。

しかし、豚みたいな啼き声で喘いだ彼女を救う、という目的もあるのも事実。

「——ふつ、良いだろう。その挑発、受けてやるっ！」

「お、おう。なんかやる気になったみたいで良かったけどさ」

「んあつ、んあつ、んひあつ」

……取りあえず。

其処を退けイリナっ、私が相手だっ！

▽  
▽  
▽

「……やっぱ見つからねえかなあ」

「なあ、今更なんだけど結構穴だらけじゃないのか？ その作戦」

昨日、球技大会も無事（……無事？）終えてホッとしたのも束の間、この町へ新たな火種が舞い込んできた。

それは【聖剣】。

7本に分割された俺でも知っている有名な聖剣「エクスカリバー」のうち4本が、とある一団の手に渡った上でこの町の何処かに潜伏している、という情報である。

その情報を持ってきたと同時に、聖剣回収を目的とした2人のシスター、紫藤イリナとゼノヴィアというエロいレオタードもどきな戦闘服を着た2人を探す。

それが今日の目的であった。

「おい、なんかキリッとした貌で回想モノローグ入れしているっぽいけど、言葉の端と顔つきは完全に下卑たおっさんのソレだぞ。なんか、今から援交するために獲物狙っています、って制服のJKを品定めするようなソレ。どうせアレだろ？ 美少女シスターの上に身体の線がびっちりとお出る服装にハアハア（\*、口、）してたんだろ？ エロゲなら最高のシチュで最高の素材だもんな。わかるけど真面目な雰囲気ですれ出された俺の事も覚えておいてくれよ」

「うるっせえよ匙！ 文句ばっか言っただけで探せ！」

「いいから落ち着けよ、マジで。ほんと今のお前警察呼ばれても可笑しくねえ目つきだから」

この失礼なことを言う男子は匙匙なんかか。

球技大会前に顔合わせをした、生徒会所属の兵士ボーンだ。  
そして生徒会唯一の男子でもある。

美少女ハーレムかよ、爆発しろ！

「町の何処かで聖剣とやらを探している最中なんだろうさ、そうい

うのは基本的に隠密行動だろ？ 駅前で探して見つかるような手段を取っているっていう保証も無いんなら、やっぱ探し方を変えようぜ、小猫ちゃんたちみたいになさ」

「……匙、お前、聖剣の気配とか、追えるの？」

「そりゃアレだろ？ 聖なるオーラを追っかければいいんだろ？」

簡単だろ、みたいに応える匙。

……俺、そういうのわかりませんっ！

しかし、同輩のコイツが出来て俺が出来ないとか、不覚にもほどがある……！

なんか、いい言い訳は……あ、

「待て待て、それじゃアイリナとかじゃなくてもっと持つてる敵方を先に発見しちゃうじゃねえか。俺たちには基本毒なオーラなんだし、いきなりボス戦とかじゃまず無理だろ。仲間集めから始めねえと」

「……あ、そっか、それもそうだな。わり、それでシスターから見つける目的だったのか。俺、てつきりエロいっていう恰好をまたしみじみ視姦したいから先に探してるのだとばっか思ってたわ。マジで考えてるんだなあ」

「は、はは、当たり前じゃねえかよ……」

ば、バレてねえよな……？

……模擬戦じゃこてんぱんにされたし、あわよくば今度こそ脱がせようと思っていたけど、やっぱそれはもっと後に持ち越したなあ……。今回はマジで真面目な話みたいだし。

聖剣計画。

それは佑斗が幼いころに（省略）〜というわけである。

その果てに成功例として生み出されたらしいあの2人の高慢ちきな鼻を折るために、佑斗はハイライトさんを解雇して（省略）〜し

かし、勝てなかった。

そのついでに、堕ちた聖女なんていう不名誉な誹りを受けたアーシアまで侮辱され、憤慨許せなかった俺も模擬戦に及んだがあっけなく捕縛。

聖剣ズリィよ……、形が変わって縛りつけるとか、しかも聖なるオーラまでくつついて来て痺れさせるとか……。

だが、朱乃さんに新しい扉を開いてもらった俺に死角は無い！

その程度の痛み、快感に変えてくれたわ！

話が逸れたが、日の目も見せられなかった<sup>ドレスブレイク</sup>装備破壊を次の模擬戦では確実に食らわせてくれる……！

佑斗の復讐を晴らすために、俺たちは『戦力』として認められる必要があるのだから、そのためには戦って実力を示すのが一番だもんな！（ゲス顔。

幼馴染だろうが関係ねえ、全裸にひん剥いて成長したおっぱいを堪能……じゃなかった、俺の前に屈服させてやるぜ！

「お、おい兵藤走れ！ さっきの女子高生らがマジで通報してやがった！」

「にやにい!?!」

そんな！ 待ってよおまわりさん！ ちょっと脳内で<sup>ビィィィ!!</sup>●のひと枠にぶっこんだだけじゃないっすかっ!?

そんな言い訳むなく、俺たちは夜の駅前を全力疾走するのであった。

▽  
▽  
▽

「ぜ、ぜの、ヴィ、ア、生き、てる……?」

「な、んと、か……?」

返事は返って来たけど、何故か疑問符を抱えての応え。



自分でも、無事をキチンと認識できていないのだろう。

何が無事なのか。

何をもつてして、無事と定義すればいいのか。

少なくとも今は、この先一般社会へと復帰できるかどうか、という点を注視して応えて欲しい。

窓から射すのは朝日の光。

部屋には既に彼の姿は無く、床へ脱ぎ散らかしてある服のところには彼が置いていったお金が何枚かあるのを、私たちは後になって確認した。

しかし、この時の私たちはまだ彼が部屋に居て、多分シャワーでも浴びていて、出てきたら何度目かわからない享樂の宴が再開されるのだらうと、そう思っていた。

その最中に2人だけで会話が出来た、ということ自体が可笑しい話に今なら思えてくるが。

それが笑い話で済まないくらいに絶倫であった彼ならば、まだ来るんじゃないか、と心持ち身構えてしまったのは仕方が無かったかと思われる。

止まらなかった。

理性こそ働いていなかったが、快感を追い求める本能で脳のリソースは完全に占められていたわけだが、それでも意識はキチンと残っていた。

四つん這いになって後ろから交互にあそこへアレが出し入れされたり、2人一緒に彼へと胸を押し付け乍ら股間を両手でそれぞれ苛められたり、重ね合わさって彼をサンドイッチの具みたいにして一番下の私が身体へ2人分の体重を掛けられたまま子宮も下から押し潰されたり、それが逆になったり、私たち自身が重ね合わさってその股間の隙間に彼の其れが上下交互に入れされたり、2人一緒に彼のアレを舐めて綺麗にしたり。

思い出すと、一晩で遣り尽せることを遣り切ったみたいだな、そういう濃密な宴だった。

始める前、彼は今夜だけで済ませると言っていた。

——冗談じゃない。

今夜だけで終わるほど、私たちは聞き分けも良くない。

「ゼノヴィイ、ア……、任務、絶対、生き延び、よう……。わ、たし、もつと、シたい……し」

「……そう、だな、異論は、ない……が、」

「まず、は……休ませてほしい、な（ね）……」

苦しくも同じ意見になった私たちは、今度こそ意識を落とした。間際、そういえば彼の名前を聞いていなかった、という思考にも苛まれながら。

「巡る想いが体中にシヨツギヨムツジヨ」

「そういえば、アーシアちゃんはいつからその、烏丸くんと、お付き合いを？」

「……えっ!？」

「えっ?」

「お、お付き合い……してるのでしょうか……?」

「え」

「こ、婚約なら既に出来ている筈ですけど……っ」

「——えっ!？」

▽  
▽  
▽

「hum……、鼻腔を擦る官能的な匂いが、またなんとも言えない快感を覚えさせるね……。マスター、この豆、高かったんじゃないのかい?」

「いえいえ、自家製の豆でございませれば、値段など問題無いのですよ」

「素晴らしい……! これだけの味を手軽に味わえる喫茶店など、他にないだろうねえ……!」

「ありがとうございます」

ちなみに、その一杯に熾されるコーヒー豆には微量ながらの依存性が備わっており、呑み続けると次第に日に何杯も要求するようになる禁断症状が出てくるらしい。

おお、怖い怖い。

それ麻薬つっーんだよ、というツツコミはさて置き。

なんだかグルメ漫画みたいな導入の寸前に、なにやら背筋を擦る微妙な気配を感じた気がする。

気の所為であって欲しいけど、俺の場合こういう予感は無駄に命中

率が良いからなあ……！

その分何処かで比率が下がっているのだというシーソーゲームが成立している筈だ、と希望的観測の元に不安は頭の隅へと押し留めて置いた。

「からーすまくーん、3番テーブルにおまたせでございますですー」  
「はいりようかーい——お待たせしました、亀ゼリーでございます」

初老で老紳士なマスターとこれから常連カツコ意味深カツコトジになるやも知れぬお客様の談笑を尻目に、バイトリーダーである褐色コーヒー肌には碧い瞳のお嬢さんの指示でウェイターを勤しむ俺。

労働とは、斯くも尊きモノである。

本日現在は不審者系欠食児童型シスター2人組をホテルで美味しく戴いてから、三日くらい経つての夜半過ぎ。

こう見えてしっかりと正規雇用に辿り着くことを目安に、とある喫茶店でのバイトに精を出す勤労学生をやっております烏丸です。

実は色々と己の戸籍とかがなかったりするので、普通のバイトが出来ないという現状。

そこを深く追求せずに雇ってくれるマスターマジ最高。

今、いい韻踏んだ。

序でに支払われるバイト代にも色を付けてくれるから、辞められない、止まらない。

——多分、内訳は口封、じゃなくて、口止め料の意味合いも含まれているのかも知れないけど……。

基本儉約精神で日々を送っているけれど、散財するときには本当に素寒貧になる江戸っ子気質も兼ね備えているのは、普通に此処が己の居るべき世界線では無い、という前提が精神的なブレーキを踏ませないのだらうなと推測中。

先日も女子に10万弱使ったわけだから、マスターに支払いの良い仕事を斡旋してもらったためにも此処三日ほど顔を出しているのだ。

……でもアーシアに使った分と比較すれば安く済んだ方じゃない

かな？

「烏丸くん、配達を頼まれてくれるかね？」

「はいはい、了解しましたよー」

ほい来た。

表沙汰に出来ない『お屋敷』なんかへの豆の配達である。

中身は本当にコーヒー豆なのだけど、マスターが趣味で栽培しているオリジナルブレンドであるから、表通りに面しているこの喫茶店へは表立って入店出来ない方への出張サービスみたいな仕事だ。

これがまたあぶく銭、おっとこれ以上は禁則事項。

「からーすまくんー、今日はもう直帰でございますかー？」

「あー、そうかも知れんすねえ。お嬢はもう少しお仕事？」

褐色コーヒー娘に問われて、行って帰った場合の時間を検算すると閉店過ぎとなることを把握する。

こちらも問うてみれば、お嬢はマスターへと視線を移していた。

「——ふむ、ライラくん、もう上がってもかまわないよ？」

「おー、ではからーすまくんー、おくりおおかーみをおねがいござい  
ますですよー」

「人聞き悪い!? 送るだけですよー!?!」

マスターが気の利かせたことを口にすれば、時間も時間なので女子を一人歩かせることも配慮に要れる俺の意図も当然お嬢は含めておられる。

が、イントネーションのアレさ加減からやはり外様のお嬢であった彼女の言葉は色々と店内へと残るお客様へぎよつとした反応を見せてしまうわけであり、慌てた俺が聴こえるように声を張れば、彼女の見た目からファンになっているのであろうロリコン紳士からの殺

気の籠った視線が若干ながらに緩和された。  
さて。

同年代と聴いていたが150程度かつツルペツタンの彼女へ情欲を沸かすほど憂いているわけもなく、なにより同じ褐色肌を僅か以上でも危機に晒す趣味も無い。

実は少し遠回りとなるのだが、「豆を送り届けた後に彼女もすっかりと送り届けることを予定に要れて、俺は喫茶店『KOYAMA』を後とした。

——その数十分後、因果に報いられる羽目になるとは思いもしなかった。

▽  
▽  
▽

聖剣を持ち逃げしたとされる狂科学者、ともつぱらの噂な『バルパー・ガレイ』とやらを搜索してはや三日。

当初合流する予定で、且つ味方であると認めさせる予定であった2人の聖剣使いイリナ&ゼノヴィアとは既に話は済んでおり、碌な進展も無いままに日数は過ぎて行った。

合流当初は、またひと悶着あるのだろうなあ、と警戒していた俺たちであったが、件の2人はどうにもその辺対立することに關してはやる気は無く、戦力を確保できるというならば、と易々と味方へ引き入れて貰うことに成功してしまったのである。

……クソツ！ 脱がし損ねたッ！

ま、まあ其処は冗談として置いて（メソラシ）。

どういう心境の変化があったのかは詳しく聞いていないが、どうにも命を懸けてまで2人だけで事態を解決へと導けることは不可能だと想定したらしい。

というのも、ゼノヴィアの持っていた破エクスカリバー・ディストラクションの聖剣が真つ二つに折れていたのを、荷物になるからと佑斗に預けてしまったのである。

……え？ 今探索中のお相手って、エクスカリバーをぽつきり押し

折れる人なの……？

俺のうちにこの危険物の熟れの果てを置いておくわけにもいかないから独り暮らし中の佑斗に預けるのは良い判断だと言わざるを得ないが、それにつけても戦力は俺たちだけでは不足している予感がぶんぶん漂う。

やっぱり部長とか朱乃さんにも話を通しておくべきかなあ……（葛藤）。

「ま、今更遅いみたいだけどな……っ！」

現実逃避にも似た回想を切り捨てて、対峙したその男と向き合い拳を構える。

ブーステッドギアを発動させて、倍化の準備を始めれば、それを見越している様にそいつは陽気に片手を上げた。

「ちよりーっす！ 悪魔くんおっ元気い？ フリードさまが遊びに来てやったぜえいっ♪」

そいつの上げていないもう片方の手には、既に抜身の剣が握られている。

この距離ならば遠くても判る。

エクスカリバーと似た気配をなんとか察知することが出来た俺にも理解できる、碌でもない図式に思わず歯を食いしばってしまった。

「聖剣……！ エクスカリバーをお前が持っているってことは……！」

「お察しの通りっ、バルパーの爺さんとは仲良しちゃんな俺様がー、新しい力を手に入れて駒王町へー、キター！ ってなわけですよんっ」

俺が悪魔になった経緯に出会った墮天使の一团に所属しており、アーシアを生贄にすることに何の躊躇いも見せなかつた糞神父、フ

リード・セルゼンと名乗る少年がニヤニヤと淀んだ笑顔で宣言した。性根こそアレな狂人だけど、その実力は目を見張るものがある。そんな奴が再びこの町へ来た事に、最悪の予想が当たっていたことに俺は身震いする。

「フリード・セルゼン……！ 教会のブラックリストにも載っている殺人鬼だと!? 貴様、残りの聖剣は何処だ!」

ゼノヴィアが声を張る。

つて、そういえばお前武器は!?

手ぶらで戦える相手じゃねえことくらい判っているよね!?

「はあ? 此処にしつかり4本ともあるし。つーかあ、おたくらも聖剣使いっしょ? なんなら俺様が残りの2本を貰っちゃおうかあ? ついでに最後の一本も見つけて俺が唯一最強の聖剣使いになればあ、教会もおいそれと俺様の『救済活動』に口出しできねえっしょー」

そう云うフリードだが、どう見ても手に携えている一本しか見当たらない……??

そこで先に理解が及んだのは、小猫ちゃんだった。

「っ、まさか呼べば来るとか、そういう類の代物ですか……!?!」

「お、おう、ナニソレかっけえ仕組みだな。違うつて、此処にあるつて言ってるんだろ?」

違うらしい。

え、ひよつとして小猫ちゃんの黄金鎧って呼べば来るの? マジで?

予想が外れたことに「くっ」と悔しがる小猫ちゃんを尻目に、フリードは携えている剣をゆらりと翳す。



刀身がブレて、穂先が陽炎みたいに波打ち曲がり、中ほどが透明になり、付け根には変化が無い。

なんだ、あの奇妙な剣は……!?!

「統合、したってこと……!?!」

イリナが驚愕の表情でそれを口にしたとき、——フリードの姿が掻き消えた!?

「——ぎつつらああいと♪」

ガギン!! と金属同士がぶつかる激しい音が背後から響く!

慌てて振り返れば、いつの間にか背後へと回っていたフリードと佑斗が、剣を打ち合っけて鏢迫り合っていた!

「おっほ、天ラビットドリイ閃のスピードに追い付くとか、やるにやーイケメンくん♪」

「キミが最初に答えを言っていたんだろ、なら、予め何処に斬りつけるかを予想していれば抑えるのも容易いよ」

そ、そういえばフリードは最初から手元に全部のエクスカリバーがあるって口にしていただけ。

ということは、予め盗まれた剣のそれぞれの特性を予測しておけば対応も可能ってことか!

イリナの持つてるのは鞭みたいに自由自在にもなれる剣だし、ゼノヴィアのは破壊特化だ（もう壊れてるけど）。

エクスカリバーそれぞれが別個の能力を示していても、可笑しくないうって証明でもあるしな!

「そう、予測していれば簡単なんです」

「い、い、い、い!?!」

罅迫り合いの最中へと、潜り込んだ小猫ちゃんが拳を振りかぶって殴り抜いたあ!?

腹パンされたフリードが対応できずにバウンドして吹っ飛ばされるのが、残像のように目に焼き付いたぜ……!?

「つかそれ、小猫ちゃんも予測していたってこと!?

さっきの察して悔しがったのはなんだったの!?! フェイクだったのか畜生!

「——ちなみに、逃がすつもりはねえ」

そして匙がいつの間にか神器を出現させて、フリードを捕縛していた!

「役立たず、俺だけ!!!」

「黒い龍脈、アフソープシヨン・ライン捕えた相手から力を吸い取るコイツから逃れる術は、そうそうねえ。やつちまえ、木場あ!」

「はああああああああああつ! ソード・パース魔剣創造ツ!」

トカゲみみたいな黒い手甲から舌みたいに伸びた其れがフリードへと絡まり、身動きを空中で取れなくして置いて繰り出されるのは佐斗の魔剣による連続した剣戟!

何十本かの剣を同時に創り出し、その総てをフリードへと突き刺した!

「よ、容赦ねえ……!」

悲鳴を上げさせることもなく、フリードを撃破しちまった……!?!  
だが、これで……。

「とりあえず、これで聖剣を奪い返せた、よな?」

「うん。あとはバルパーの居場所を聞き出すだけだね」

「……え、これ死んでねえの?」

「かろうじて生きているんじゃないかな」

……………お、おう。

ハイライトさん帰って来てえ！

佑斗くんの『優しさ』と一緒に、速く帰って来てえ！

間に合わなくなっても知らんぞおーっ！?

「——き、貴様らは先ほどから、なにをやっているんだ……?」

「「「「——え?」」」」

困惑する俺たちに、何故かゼノヴィアは震えた声で言葉を紡いでいた。

何をつて、コイツこそ何を言つて——、

「——くきつ、いつからこれが俺様だと錯覚していた……?」

——その言葉と共に、『串刺し』になっていた筈のフリードが掻き消える。

また超スピードによる移動か!? と目を見開いたが、次の瞬間には、

「——カフツ」

——匙の腹に、刃が一本突き刺さっていた。

▽  
▽  
▽

にやー、<sup>ナイトメア</sup>夢幻で残像剣ブツパしといてよかったつちよー。



「フリードお！ てめえええ!!!」

「つ兵藤先輩！ 今は匙先輩を抑えるのを手伝ってください！」

にははっ。

わーお阿鼻叫喚☆

ま、この隙に逃走してー、追っかけてくるであろう聖剣持ち美少女らを返り討ちでー、とりあえず5本目と6本目を戴く算段っ！

「そーれじゃあ、俺様はこの辺でバイナラー、」

「――随分と近所迷惑だな」

――ツツツツツツツツツ  
!!!!!!???

「夜中に高校生が出歩くのはまあテンション上がるんだらうけど、とりあえず騒ぐな。珍走族じゃあるまいに、ごしやごしやと煩わしい」

な……………んだ、コイツ…………ツ!?

距離はやや遠め、俺様の後方、逃げようとした方向の開いた一角から、馬鹿みたいな魔力の塊が、染み出すようにぬるりと顔を出した。問題は何より、其れだけの存在がその場に現れるまで、俺様ですら何一つ感知できなかつたという事実。

浅黒い肌の、白い髪をした男が、不機嫌な顔で闇夜から顔を覗かせている。

ただそれだけなのに、俺様が思わず一步後ずさった…………!?

「…………？ 塔城に、兵藤先輩…………、と木場先ば、」

息を呑む様子が覗える。

俺様の背後の現状を認識して、思考の隙間が出来ている。

逃げるなら今のうちの筈なのに、俺様の本能は未だに俺様を動かさうとしない……っ！

「——おい。アレを遣ったのは、お前か」

状況を見て、一番怪しいと見たのか、俺様へと完全に意識が向いた。今からあっちへ向かって蹴散らしてゆくことも可能かもしれないが、聖剣使い2人に被害を考えなければ戦力になり得る悪魔3人、分が悪いつたらありやしねえ。

つてことは、多少無理でもたつた一人で目の前を塞ぐ、コイツを何とかするのが最善手つてことでやんすね？

んじやーあ、いっちょ頑張ってみますかあ……！

「——は、誰だか知らねえけど、悪魔くんのお仲間ならば容赦はしにや、「動いてはいけない」」

——ッ!?

……あ？ いや、待て、今の声、誰だ……？

目の前の男はまだ口を開いていない、そもそも、ただ近づいてきている最中で、妙に世界がゆっくりと動く。

というか、俺の次の動きを完全に把握した上での、今の声音の様子から察するに……『忠告』に、聴こえた……？

ただ、剣を振り上げて夢幻でもつてまた幻影を見せようとした。

俺様には相性の良くない夢幻や祝福ナイトメア  
ブレスリングはモーシオンを一々振らないと出来ないから、それを遣るための第一段階を振る寸前の一声。

……振り上げたら終わり、つていう、そういうこと？

そんなら、トランスベアレンシー透明で——「姿を消してはいけない」  
ッ、またかよッ!?

あーあー、今度は分かったよ！

消えるのに若干のタイムラグがあることを言ってるんだろ!?

其処の隙を突かれて、何をされるかわかったモノじゃねえ、つてこ

とだよな!?

だったら超スピードの天ラビットドリイ閃で「素早くも動けない」

な　　ん　　で　　だ　　よ　　!!?

くくくくつ、アレか……、こっちの一投足も見逃すはずがねえ、つていう相手と対峙しているから、そういう『忠告』か……。

此処まで来たら俺様でも理解できるよ……。

さつきからの声は、俺様自身の『本能』の声だ。

知覚領域が全力で生き残る道を模索して、走馬灯に似た体験を負わせているっていうことだ。

聖剣とは言っても、所詮は付け焼刃。

この『程度』じゃ、生き残り得ないって俺様の本能が、一番理解しているから押し留めていやがるんだな……。

……つくそ、なんでこんな極東でこんな規格外が平然と出歩いているんだよ!?

コカビエルの旦那の方がまだ可愛げがある……!?

推定魔力だけなら下手な魔王も凌駕してんぞ!?

ふう……。

おーけーおーけー、そんなら別の道だ。

こう見えて聖剣が無い時から生きてきた人喰い神父様だ、技術だけで生き残る道を探してやらあ!

いったん距離を取「引いてはいけない」

銃「打てない」

くくつ、足腰のばねで跳「跳べば狙撃される」

……カウンター「待ち構えては対応が遅れる」

………足払「しゃがめば相手の膝が出る」

どれもこれも無理ってどんだけだ!?! どうすればいい!?! 「どうすればいい」

動くことも出来ないし、下手にモーション取ればその瞬間に攻撃が飛んでも可笑しくない……!?

かといって動かなければ死……。……??

警告が無い……??

あ。

「——おーけい、りようかい、わかったよわかった。俺様の取れる手  
段は此れだけってことだよな」

それに気づいた時、ようやく世界は普通のスピードに追い付いて来  
ていた。

漢フリード一世一代の大勝負！ 解くと見ろやそこな悪魔どもツ

!!

▽  
▽  
▽

「——……な、マジか……!?!」

フリードの取ったその行動に、誰もが目を見開いた。

烏丸がひよつこりと顔を出したのにも驚いたが、それと対峙したフ  
リードの取った選択が、誰にも予測のつかない行動だったからだ。

それは、

「降参。もう悪いこともしないし逃げないから、命だけは許してく  
だしあ」

聖剣を捨てるように放り投げ、土下座になって頭を差し出した。

烏丸へ向けて。

………え、あの外道神父が、この選択肢って……!?!

マジか、何者だよ烏丸。

そうして土下座られたご本人はというと、俺たちの様子からフリー  
ドが危険人物だと最初に目にした時に理解はしていたらしく、珍しく  
怒っているような真面目な表情で近づいて来ていただけだったのに。

そんなそいつは、今は困惑している様に頬をポリポリと指で搔いて  
いる。



まあ、話は通してないから、理解が及ばないのも当然だろうけどな。

「……あー、とりあえず先輩方、そこのお方はご無事ですか？」

「お、おう、なんとか」

匙を指して問う烏丸は、ひとまず、と土下座神父の方は意識的に除けて置く腹積もりらしい。

応急処置がなんとか済んだ匙はというと、うーんもうたべられないよう等との妄言を呟きつつ意識不明の重体であるのだが此れ意外と余裕あるんじゃないの？

いつでも斬首体勢のフリードを横に置いたまま、どう移動したモノか等と困惑していそうな烏丸へと、小猫ちゃんがとてと近づいてゆく。

いつでも彼女は平常運転だなあ（白目）。

「なんでまた此処にいたんですか？」

「バイト帰り。物騒な騒ぎの声が聴こえたから、ちよつと見学に来ただけど……」

随分と呑気な思惑で動かれて居られる御様子です事……ッ！

ま、まあでも、そのお蔭で助かったのも事実だし、深くは追及しないでおこうかな（メソラシ）。

え？ 他人の事言える立場じゃねえだろって？

はいはい、その話はヤメヤメ。

……ところで、そのバイトってどんなダークなサイドのお話ですか……？

「ひとまず助かったのでお礼は云わせてもらいますが、好奇心は猫を殺すとも言いますよ。興味本位で動くのは感心しませんね」

「……つまり、塔城が死ぬ？」

「なんですかその理不尽。あとバイトって、人に言えないような闇

の住人相手のハンター系とかですか？」

「それこそなんでそういう発想になるんだよ。オリ主じゃあるまいし」

オリシユってなんぞや。

そして小猫ちゃんも俺と似たような感想を持っていたらしい。

現在時刻は午前2時、普通のバイトならば帰宅には遅いし、深夜枠なら帰宅には早い、そういう中途半端な時間帯なのである。

それにしてもこの現状、一体どこからどう手を付ければ良いモノやら……。

と、そこで唸りそうになっていた俺へと、横からちよいちよいと指先で突つつく感触が。

「ね、ねえイツセー君、あの彼って、キミたちの仲間なの？」

と、イリナが気になる様子で問いかけて来ていた。

見れば、ゼノヴィアの方も烏丸に声を掛けようかどうか、悩んでいるようにも見える。

……それは何処か、恋慕を抱いているのにも似たような風体が覗えるので、根本的な『気になり方』とはまた違った意味合いが内情を揺るがす事態になって居そうな気配が覗かせられる。

糞ツ！ 烏丸ばかりが何故モテるツ！?

ギリイ、と食い縛る俺を脇目に、乾いたように微笑う佑斗が応えてくれた。

「仲間、とまではいかないけど、顔見知りだよ。彼に頼めば、フリードと聖剣を引き渡してくれるんじゃないかな」

「へ、へー、そうなんだー」

何処か上擦った様子で、イリナはそう応えを受け止めて、そわそわちらちらと烏丸を気にかけている。

……あーあ！ 世界なんて滅びればいいのになー！

「イツセーくん、とりあえず、彼に近づこう。話はそれからでも遅くないよ」

「……だな。じゃあ、ちよつと匙を見ててくれるか。フリードをどうにかできないか、詳細を詰めちまおうぜ」

「その話、私たちも混ぜてくれるかしら？」

と、聴こえちゃいけない声が響いたことに、俺も佑斗も身体が思わず強張った。

ゾ、と背筋に氷を差し込まれたかのような、そんな錯覚を感じたのである。

その声の主は背後に居り、俺たちは其処へと、ゆつつつくりと振り返った……。

「「ゲエツ!? 部長ッ！」」

「こんばんは、イツセー、佑斗。こんな時間に何をしていたのか、きっちり話してもらおうわよ……?」

ジャーンジャーンジャーン、と銅鑼の音が響く幻聴もどうでもいいくらいに良い笑顔の我らがオカルト研究部のリアス・グレモリー部長が、すぐ傍に陣取っていた。

——まさにホラーの如く！

あ、あと序でに支取会長も傍にいた。

「此れ距離的にも逃げらんねえわ（吐血）。

「い、いやいや、先ずは話を決めちやうのが先なので烏丸に話を聞くのが一番優先ッ」

具体的に言うとう丸くん助けてッ!?

しかし、部長氏はそれをも見込んでいたらしく、静かに指を指す。

そこへ振り返ると、烏丸の前には小猫ちゃんの他に、既に朱乃さんとアーシアの姿があった……。

「ごめんなさいねイツセーくん、今日は烏丸くんにどうしても聞いておかなくちやならないことが出来たから、リアスとのOHANAS HIはそちらで済ませてくれるかしら？」

「えっ?」

「そらくん、ちよつとだけですから、時間をもらえますよね?」

「え」

「……なんだかよく分かりませんが、本能が付いて往けと咆哮までしているので私もいっしょに話を聞かせて貰っても良いですか?」

「どうぞどうぞ」

「俺の意見は!」

何故だかお2人から恐るべきオーラがじんわり澱む。

お、俺はこういう感知能力は才能無い筈なのに、それでも感じるオーラだと……!?

とりあえず、烏丸もなんだか逃げられない様相であることは覗えてしまい、引き摺られてゆく彼を見送ることしか出来なかったよ……。何の話だったのだろう……。小猫ちゃんまで付いて行っちゃったし……。

あと朱乃さんの『お話』のイントネーション、すげえ怖気が走ったのですがそれは。

「……なあイリナ、アレは私たちも付いて行くべきだったのではな  
いか?」

「う、うーん……。確かにそういう空気にも見えたけど……」

と、何故か聖剣使い2人組まで行こうとする始末。

おいおい待て待てちよつと落ち着け! お前らは先に任務だろ!?  
土下座姿勢のまま置いてかれたフリードくんをどうにかするのが

先決だよツ!

つと、そうだそいつが居た!

「ぶ、部長っ、とりあえずフリードをどうにかしましょう!　それが今は一番大事!」

頼む!　此れでなんとか命だけは…………!

どうして其処までして回避に徹してるのかという教会の動向に悪魔が絡んではいけないって前にも云われていたにも拘らず、俺や佑斗が独断で聖剣組に協力を申し出たからってという理由があるからなので、詳しくはググってね!

咄嗟の危機回避選択肢に妙な電波まで混じるぜ!　なんでもいいから助けて!

「…………そうね、それじゃあとりあえず、殴ってから考えましようか」

引き摺られてゆく烏丸を見てやや呆然としていたが、俺たちとフリードとを見比べて、そんな妙に脳筋なセリフを口にする我らが部長。

か、勝った!?　第三部、完ツ!?

——あ、あれ?　なんでこっちに近づいてくるんですか?　先に何とかするべきはフリードですよ?　ははは、やだなあ、そんな、手首のスナツプを生かした素振りをする必要なんてないじゃないですか!!　魔力を手の平に集中するとか、全然必要ないことですよね!!　待って、止めて、お、お尻だけはツ!

……………………アツーーーーー!?

【番☆外☆編】「4人playと思ったけどそんなことなかった」

「……あつ、く、ふあ……!?!? んあ……っ!」

「ん、ちゆ、む……ふむ、ちゆ、どーやろー? そらくん、気持ち良くなってきたかなあ?」

このかが乳首を攻めながらそんなことを問うが、応えられる状態ではないことは火を見るよりも明らかだろうに。

お嬢様つてば超オニチク。

別に乳首と掛けたわけでは無い。流せ。

「応えられんとしばらくこのままやで」

「……っ!?!」

「そらくん pr pr」

「~~~~っ!?!」

お嬢様つてばマジオニチク（確信）。

後ろ手に縛られてシャツの胸襟肌蹴させられてピタリと密着した状態で首筋に手を添えられるのはまあいいけどその指先が蠢いて撥るのと連動して舌先で胸元弄るとかとても初体験とは思えないテクニクを見せてくれちまいやがって誘ってるってレベルじゃねえぞそれよりも傍で顔真っ赤にしてフリーズしてるせつちやんを見てやれよお前わあああああ!?!

思考だけは冷静（きつと冷静。恐らく冷静）に働けられるモノの、言葉に出来ないくらいの感触に敏感な我が肢体がモノを云うのも億劫になるも仕方がないレベル。

目を見開き開いた口も塞がらない（別の意味でな）己は見るも無惨なだらけた表情筋を曝け出してしまっているであろう。せつちやんが生唾呑み込んで俺らの遣り取りを黙して凝視しているのも、きつ

と彼女のエロ琴線に触れたからとかそういう話では無くて、アへ顔寸前の俺に呆れているとか、そういう理由であるのであろう。というか、そうであつてほしい。せつちゃんはキレイなままで居て。……くそつ、いつそ殺せつ！

「むふう、クンカクンカ」

「ハアー、ハアー……っ！ こつ、このかさあん……っ？ もうっ、満っ足、したよな……っ？」

舐めてしゃぶっていた肌から顔を離し、今度は後ろ髪に顔を埋めて匂いを嗅ぎだした京都のお嬢様に、息も絶え絶えに問いかける。

そんな俺へとふむ、と呼吸を置き、正面に座り直して、一言――、

「全然！」

畜生！ 無駄に惚れ惚れするくらいの良い笑顔で断言しやがつて！

「何なの？ 俺、今日は新年の挨拶に来ただけなのよ？ 入室早々せつちゃんに不意打ちで気絶させられたと思つたらこんな羞恥プレイの役処？ 男のアへ顔とか誰得だから即刻やめてくれやがりください」

最後は懇願になつていたけど、マジで頼むわ。

最早先日大柴君が何処かの祭典で購入し部屋に俺が戻つたにも拘らず置き場が無くて広げられていたエロ同人誌みたいに辱められるのも時間の問題。

俺的ファンクラブが消失しないうちに、速く。

尚、件の同人誌関連を片付けるまでご飯抜き、と宣言して自部屋からの逃亡を果たした先がこの様なことから、もう笑うに笑えない。

俺の懇願が届いたはずのこのかはというと、俺の膝の上に乗掛か

り姿勢を正す。

——対面である。

「でもなあ、そらくんも卒業後とか、麻帆良に居らん選択もあるんやろ？」

「……あー、まあ、エヴァの呪いも解けるし、進学を麻帆良に狭める意味も無いからなあ」

え、この姿勢で真面目な話？

膝に乗つかるこのかのお尻の感触とか、体重とか、匂いとかが普通に此処まで近いと色々収まりが悪くなるんですけど？

微妙に目線を逸らしつつ、志望校、というか行き先を未だ誰にも告げてないので自然と後ろめたい気持ちにジクジク心中を苛まれる気分である。

「せやったら、やっぱりなんか繋がりは作つといてええんちやうかなあ、つて思うとるんよ。ウチもなあ？」

「いや、別に音信不通になるとかそういう予定は無いですし……」

「あれえ？ なんやあ、此処までなつても気づかないわけないやろお？ そらくん、そんな鈍い子ちやうよなあ？」

「……つえ、えー？ なんのことかなあ、そらくんわつかんないなあー」

真面目な話かと思いきや話が変わっていなかっただ！？

先ほどとは別の意味で視線を合わせられなくなる俺。

そんな俺に、このかは、着ていた着物の帯をしゆるりと解き、ニコニコ笑顔のまま俺の顔を両手で掴み、このかへと向き直らせ、ずいと近づくと体重をかけ直した。

「ウチが言うтонのはもつと直接的な“つながり”や。具体的に言うと、セックスしよか、そらくん？」



「……………っ！」

引き攣った顔しか出来なかった。

▽▽▽

俺、魔法世界から帰ってからこっち負け続きじゃね？

なんなの？ 此れで捕縛されたの4回目よ？

……あ、いや5回目だ。

うち一回は引き分けで済んだから、まだ大丈夫……じゃ、ねえよ……（落胆）

幸い、校内へは噂とかの類は広まってないみたいだから問題ないとしても、こんな己を果たして堂々と向き直れるかと云うと断言できないわけ。

要するに己の裁量の問題なのだけど、やっぱ不純撒き散らしているとしか言いようがねえ。

エヴァに顔向けできない、っていうかバレタラ縊ラレル……ッ（g k b r 感）

あとは俺の事をお兄ちゃんなどと慕ってくる下級生らにも顔向けできない。ごめんな、お兄ちゃん穢れちゃったよ……（泣）

「断るー！」

と、そんなわけで断然この言葉は出てくる。

しかし、

「——まあ、断ってもやることはもう決まっとなるんやけどな」

「おおおおおいいいい!?!」

そんな言葉を発していたこのかは、既に俺のズボンから苦しそうにしている我が息子を後ろ手でぼろんと解放し握々と弄り始めていた。

感触と匂いで半勃ちだった其れはこのかの手<sup>て</sup>に直に触れられて、しかも力任せとかじやない優しい手つきが触感の琴線を刺激する、と同時に理性の壁をもガリガリ削る。

何この娘コワイ！ とても初めてとは思えないくらいに手馴れていて超コワイ！

「ほら、せつちゃんも来<sup>こ</sup>な。優しく摺<sup>ス</sup>るんやで？」

「っ、は、ハイっ！ で、ではしつれいしまひゅ……！」

待て待て待て待て待て待て!!!

「そういえば今更ながらなんでせつちゃんまで同室でこんな有様になつているのを放置で更に参戦?! おい護衛！ 仕事はどうしたあ!!?」

「そうは言うてもなあ。このセツティング、そもそもせつちゃん<sup>の</sup>為<sup>に</sup>に用意したんやで？ っつながりっ 持って欲しいんもどつちかといえ<sup>ば</sup>せつちゃん優先で取っ<sup>と</sup>いて欲しいからなー」

「汚い！ 流石『近衛』汚い！ それもどうせこのかから<sup>の</sup>お願い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>う名目で下された命令なんだろうに！ お嬢様の無茶振りに一々応える健気な半デコ娘が可愛そうだとは思わんのか?!」

「言い方悪いなあー。ちゃんとせつちゃんにも許可とつとるえ？」

「だったら声裏返ったり語尾噛んだりしねえよ！ 男慣れしてない美少女に何させるつもりだお前は!?!」

「姫始めと貫通式やな」

「解答が具体的!?!」

もうヤだよこのお嬢様。

幸いなのは明日菜<sup>が</sup>いないことか。

同室なのに居てないのは何処か不安が蔓延りもするが、なんとか拘束を逃れればこの2人に後れを取ることも無い筈。

墓守り人の何某で英雄共と遣り合つたのに比べれば、この程度乗り

越えられない筈もねえ！

今こそ湧き上がれ！ 凡人力フルパワーツツ!!!

「大体、そらくんは初でもないんやし、そんなん拒否することもないんやないの?」

ぶしゆうう……、と自身のオーラが抜ける様を幻視した。

今このかに口走られた言葉に、虚を突かれたように彼女の顔を覗く。

ニコニコしていたのも束の間の事、今は何処かむくれたように目線を合わせないお嬢様が其処に居た。

「……………明日菜か」

「ま、な。あとはゆうなからのLineでクラス内に情況は広まってるし」

戦犯を言い当てれば、ある程度は予想通りの名義も友釣れる。

アレだろ? ゆーなが明日菜と張り合ってるんだろ? 柿崎からメールが来たよ、大草原付きの爆笑メールでな。あとちうたんからも『死ぬ』って来たよ。なんでちうたんって俺にやたらと辛辣なの? 今回のに関しては何からんでもないけど。

い、いや、まだ半分だ。絶望するにはまだ遅くない筈、

「——で、察するにあと2人くらいクラス内に居るんやないの? 距離感から察するに、アキラとアコかな」

お前エスパー?

「……………当たりか」

気づけばこちらを見据えて、俺の表情から読み取ったらしい。

女子ってそういうのホント目ざといよねえ……。

「……教師陣にはせめて云わないでください」

「云わへんよお、ウチらだって『そういう』んに興味ある年ごろな  
んやし、クラスメイト売る様な性根でもあらへんし」

「でしたらついでに此の拘束も解いてください」

「其れは後でなあ」

ニコニコ笑顔に戻って応えるこのかさん……。

……後で？ って、

「——うひっ!？」

ちよ、なんか股間のところを濡れたモノが全体を!？」

待って、この感触まさか……、

「よいしょ」

と、思う間もなく、このかが俺に抱き着いてくる。

肌蹴たお互いの胸元がくつつくくらいに密着しており、ぷにいと彼  
女の小ぶりながらも形のある発達途上のぷちぱいの感触が同時に加  
わった。

乳房というよりは、先端が肌の上で潰れるような様だ。

上と下とで刺激のある感触に苛まれて身悶えが止まらないんすけ  
ど!？」

「こーすれば、見えるかなあ?」

ぐい、と俺にそのまま抱き着いて、首筋へと顔を伸ばし、肩へ顎を  
乗せる姿勢。

そんな彼女の肩越しに、俺の股間に吸い付いて、というか啜え込ん

でいるせつちやんの姿が見えた。

……お前何してくれてんの!?

「んぐ、じゅぽっじゅぽっ」

「ちよ!?! せつちやんやめっ!?!」

「ふふふー、そらくんとやると決めてからしつかりと教え込んだんやでえ? 美少女にご奉仕されるのか、まんざらでもないやろ、そらくんも?」

完全にご奉仕要員です、と宣言するこのかが不敵な笑みを浮かべていた。

見えないけど。

殴りたい、そのどや顔……!」

見えないけど。

「んむ、……ちゅぽっ。……お嬢様、準備が出来ました」

「そか。ほなそらくん、いただきまーす」

気づけば反り立つ我が息子の様から万全だと思ったのだろう、せつちやんが口を離し、このかは身体を離したが腕は俺の首へと絡ませ直して、反り立つ其処へと着物を捲り上げながら跨ってゆく。

わあ、着物を着るときは下に穿かないって都市伝説と違ってたんだあ……じゃなくて!

「おいちよつと待てこのか、そのままとかお前もうちよつと慣らしてから、」

「ん、ひぐ、っ、あ、んぎい……っ!?!」

う、わあ……! ほんとにそのまま挿入れやがったよこの娘……! せつちやんのご奉仕とは比べ物にならないくらいに窮屈な、あまり湿っているとは言えない肉襞を押し広げる感覚。

いきなり体重をかけたのか、入り込むその異物感に連なる痛みを想定しきれていなかったのか、目を見開いたこのかは流石に笑顔にはなれなかった。

視点を虚空へと定めたままに、食い縛ったような口はなんとか空気を取り入れたのか、陸上でもがく魚のように意味も無く開閉を繰り返す、だが、何も目論み通りにはいかない筈である。

さて、此処で一回抜いて、とか選択するようなら、その後がまた最初以上に忌避感を抱きそうではあるが。

果たしてどうするつもりなのか……。

……って、なんか中が湿って来た？　じんわりと熱を帯びたような伝導が……ああ、破瓜か。

……俺、この半年で一体何人の処女をかつ食らってるんだろう……。

思わず、自嘲するような乾いた笑みが浮かぶ。

但し目元が笑っているとは到底思えないのだが。

「くくくつ、は、ああ……！　ん、うん、ん。こ、れで、初めて、デ

キタ、な……？」

「……うん、まあそうだけど」

苦しげに、だがなんとか言葉を絞り出すこのか。

おかしいなあ、このかはもうちょっと利口なはずだったんだけどなあ。

興味があるから、とかそんな軽い理由で好きでもない男とこんなことをする意味もないだろし、そもそも『繋がり云々』だって肉体関係に直接なる意味合いだってこのかには薄いはずなのだが……？

せつちゃんを優先してほしいと言いながら、何故か先に自らを差し出すその順番に、どうにも作為的な意味合いを覗わざるを得ない。

そんな風に彼女の有様に疑問符を抱いていると再び俺に抱き着いて、しな垂れかかって腰を浮かせるように膝立ちのまま、自身を上下へとゆさゆさ動かし始めるこのか。

そのテンポは随分と緩慢だが、彼女と俺との結合部である『其処』へは確実な差異が滲んでいた。

「んっ、ほ、ほな、うごく、な？　これ、でっ、きもち、ええ、かなあ……？　あっ」

滲み滴っているであろう血にもお構いなく、部屋に微かに響くだけの膣穴が喰い付く肉の滑る音に依り、その程度の動作だとも判る。

だが、ぬぶ、ぬぽっ、と連続して響くそれは断絶することもなく、このの身体が上下するタイミングで淫靡に響くことから、それが俺の自身にも連動している動作であるというのも良く判る。

緩慢な動きは次第にその間隔も短くなって行き、俺に抱き着いたこのかの呼吸が荒くなってゆくことを、何もできずに耳に届かせることしかできなかつた。

せめて後ろ手の拘束だけでも外して貰えれば、拙いながらもどうかサポートは出来たのだが。

其処を外してくれないのは、やはりこのかなり色々な判断している部分でもあったのだろう。

そんなことを頭の隅で何処か冷静に読み取りながら、彼女の荒い呼吸に連想する彼女の表情を容易く連想する。

「あっ、んっ、はっ、はっ、あっ、あっ、んっ、ひあっ」

抱き着いている所為ではつきりとは覗えないが、次第に狭まる間隔からもこのかが快感を覚え始めているのは確実だ。

自慰をしている時と同じような調子でリズムに乗り出しているというならば、自然と目を瞑って顔も紅潮としている可能性が高かつた。

「んっ、はっ、せつちやあん……、っん、あんっ」

「はい、お嬢様……、此処にいます」

そのこのかの様相に連動しているせつちゃんがすぐそばにいらね。

これで判らなかつたら嘘だわ。

呼ばれてこのかへとしな垂れかかるせつちゃんは、同じように着物を着崩して肌蹴させ、それでも限界ギリギリの局部だけは晒さないような有様のままにこのかへと顔を寄せる。

このかを挟んで俺の反対側へ並ぶせつちゃんに、俺に抱き着いていたこのかは首を向けてせつちゃんと相對した。

紅潮とした2人は、そのまま優しくも卑猥に唇を重ね、ちゅぱちゅぱと粘つく水音を響かせながらも、腰の動きは止まることは無い。

「んっ、んっんっんっんっんあっ」

「はっ、あっ、んっ、おじようひやまあ、んっあっ」

このかの反応は腰の動きに連動し、間隔が狭まっているからこそこの反応だと判るのだが、せつちゃんの方は唇を重ねているだけなのでそこに追いつくことは無い。

しかし、俺の横でそういうレズプレイを実践されていると、どうにも置いてかれてる感が否めないというか……。

「あ……はううっ！」

びくん、とこのかの身体が震え、抱き着く力が強まった。

強張ったその手が、俺の背に回されていたその先の細い指が、引つ搔くように肌へと喰い込む。

……どうやら絶頂<sup>1</sup>つたらしいが、俺は未だに半勃ち<sup>だ</sup>だったりする。レズプレイは好みとちやうねん。興奮しきるにはもうちよい欲しいなあ。

「っあー……、……っ、ふうー……はあー……、こ、これアカンわ、



もう、むり……」

「ふあ……ん、お嬢様、だいじょうぶですか？」

このかの横で自慰の真似事みたいな好意で己を慰めていたせつちやんが、遅ればせながらお嬢様の身を案じる。

……老婆心ながら思わせていただが、せつちやん今のうちに逃げしておくべきなんじゃね？ だってさ、このかのさっきの発言からすると、次は、

「ん、今退くからな」

「いえ、そんな御体に障ります。直ぐに動くことなくとも……」

「だーいじょうぶや、つて……ん、っ」

「お、お嬢様……」

「あ、はあ、ふー……——ほな、次はせつちやんの番やな？」

「……あ」

ですよね。

さつきも言った通りならそういうことですよ。

俺の逸物から跨ることを放棄し、しな垂れかかったままだがせつちやんの方へとしつかりと顔を向けたこのかは、恐らくはにんまりとした笑みで以て彼女へ俺を促していることであろう。

それより全体的に此れを辞めるのが第一だと思われまーす。

この中途半端な大きさを維持するのつて、すつごい大変なんですけどー。

▽  
▽  
▽

「ほな、此処で見えてあげることから、せつちやんもしつかりな」

「……ハイ、オジヨウサマ……」

後ろから実に嬉しそうに朗らかなこのかの声が聴こえる上体で、正

面にはせつちやんが全裸となつて俺の膝の上へと跨ろうとしていた。ハイライトこそ仕事しているものの、その声音に覇気は無い。

お嬢様のご命令に然り従いますよ、と全身で以て応えて居る所存であるのだ。

例えそれが好ましくも無い男とのSEXであろうとも、命令とあれば応えなくてはならないのが彼女なりの矜持であるのだろう。

阿呆である。

断言し、為すがままとなっている俺はというと。

衣服は総て剥ぎ取られ、肌蹴た背中にこのかのぷちぱいが密着している状況。

要するに女体サンド寸前という、男の夢が今ここに！

……後ろ手の拘束さえなければね。

はよ外せ。

「せつちやんさあ、そんなに嫌ならきちんとかへ云えば？」

「……私の為だから、の言葉で押し切られたんだ。今更できません、とか、先に処女を喪つたお嬢様に申し訳が立たないだろう……」

その点はこのかの自己責任と思われるのだが。

というか、お前ら百合百合してたのに貫通式未だだったんだな。今更気付いたけど。

「というか、その辺の細かい理屈とかは無いのか。流石に『お前の為』の一言で全部を片付けて貰えるほど世の中は優しくないだろう」

「……」

そう応える俺に、無言のジト目。

なんすか。

「流石は明日菜さんの為に魔法界を殲滅した男の言は格が違うな。それを貴方が言うのか」

「人の黒歴史穿<sup>ほじく</sup>って楽しいか？」

それで済ます気は無かったから黙っていたのに、なんでちうたんは其処を暴露させちまうのかねえ。

しかも全員の目の前で。

「これも愛だ。貴方と同じ、な」

「ねえホント止めて？ 何気ない言葉のナイフが俺のライフをぐりぐり抉ってるからマジでやめて？」

「そんなことより、その、なにか無いのか、せめて……」

俺の黒歴史が『そんなこと』扱いである。悔しい！

それはそうと。

そう言葉を紡ぐせつちゃんは、今更ながらもじもじと顔を赤らめさせて身を振る。

ふむ、

「……」

「……」

胸は、他と比べて言う程目立た無いのだが、中学生ならば年相応。

ふつくらと手のひらに収まるサイズで、垂れを微塵も覗かせない微かなふくらみに、桜色の先端が淡い円を滲ませた局部もしつかりと晒されて、恥じらいとか無いのこの娘？と思わず問いたくもなる。

だが、其れが良い。

このかの時には確認できなかったが、下の毛は無くつるりとした恥丘が顕わでもあり、小さな割れ目に俺の自身の先端が添えられている。

今にも沈んで行きそうなその様へ、俺は頷くと一言告げた。

「キレイだな」

「あ、りがとうございます……」

もっと飾った言葉でも出てくるとでも思っていたのか、一瞬呼吸が止まったようにつかえたが、せつちゃんは絞り出すような返答で視線を合わせてくれた。

やる気になっっている、とか自棄になっっているとか、彼女なりのそういう態度云々は除けておくとしても、男として女子の肢体を堂々と眺められるのは冥利に尽きるのも事実である。

「で、では、いきます、ね？」

「おー、ゆつくりでいいからな。何処かの阿呆は人の忠告も聞きやしなかつたけどな」

後ろからむうーと怒ったような声が聴こえるが無視。

ぐいぐいと背中形のある柔っこいぶつくらした突起物系の何かが潰れているけどそれも無視である。

「ん、あつ、は、あ、ふつ、んんんっ」

ゆつくりでいいって言ったのにこの娘てば。

「はい、り、まし、たあ……っ！」

はっ、はっ、はっ、と息も絶え絶えに手は俺の腰を掴み、赤らめた顔のままに半目のせつちゃんが自己申告。

上目遣いまでされて、意外にもエロい。

「うっ、動きます、ね？」

いえ、そんな、無理しなくとも宜しいのですけど。

と押し留めることも出来ず、ゆつくりと、だが、せつちゃんが腰を

上下へと稼働させる。

抜き取る仕草で彼女の割れ目から滴る血は、挿<sup>1</sup>入れ直すことで潤滑油代わりとなつて彼女の恥丘の周囲へと滲む。

後ろから見れば小ぶりの尻が俺に押し掛かり、一生懸命に上下しているのであらう。

なにそれ、超見たい。

そうして数分くらい動かれた後。

そろそろテンポが安定して来たな、と思つた矢先、不意にこんな声が後ろから聴こえてきた。

「——ほな、それじゃあここからはお楽しみタイムやな」

本日の戦犯の楽し気な宣言である。

何をする気だ……!?! と戦々恐々とする暇も無い束の間、手首を封じていた何かの拘束が緩んで消えた。

「此処まで来たならそらくんやて辞めたりせんやろ? フリータイムに突入やでー」

——ほほう、有り難い。

「っ、えっ?」

がしい、と自由になつた手を、せつちゃんの背と尻へと回す。

しかしそれにしても、確実に狙っていたのが間違いないくらいのタイミングでの解放。

このか……! 恐ろしい娘……!

「——っは!? きゆうゆうゆうっ!」

奇声を上げて驚愕しているのは、尻と背に手を回されて抱きしめら

れたから……だけでは無いのだろう。

そのついでに俺自身へと押し付けて、セツナの膣穴の深いところまで一息に届けてやったわけだから、今迄浅い部分で自慰とも変わらぬ軽めの刺激だけで酔よがっていた其れでは耐え切れないのも自明の理。

例えるならば、肩叩きで満足していた肩凝り初心者にも、お灸と足つぼマッサージとタイ式整体とのフルコースへと連れ出すようなモノ。死ぬしかない（確信）。

「はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、はっ、ああっ!?!」

犬みたいに荒い呼吸になったせつちゃんを抱き締めつつ、がっちり嵌った膣穴の中のそいつへと押し留めていた血流を意識して送る。

要するに、テンパリせつちゃんが可愛いので我慢しきれませんという、実に判り易い論理の旋律。

ぐんっ、と大きくなった肉棒の刺激が、彼女の中へとびりびり響くのがよく伝わっている筈である。

「……今更だけど、せつちゃん肉付き悪いよなあ。まあ、付いてるところは付いてるから問題は無いか」

「あっ、んひひっ、まっ、どこさわ、はひひっ!?!」

ぐにぐにと、何度も言うが小ぶりなお尻を揉み解せば、敏感肌のご様子なセツナさんがビクンビクン悶えた。

女子って皮膚が柔らかい分、触られるだけで気持ちイイってアキラたんとかも言っていたのだけど、せつちゃんの場合は男慣れしていないのも相俟って凄い敏感。

普段の修行で生傷作っている、とかいう設定すら凌駕する反応の良さに、せつちゃんの中で自身が跳ね捲ります。

「~~~~~つっつ!!!」

「さあて、弱い部分は何処かなあー」



定まっではないご様子で口は開いたまま。

腕とかが否定の姿勢を取ろうとするも、衝撃に流されて俺を掴むのもままならない。

揺るたびにちっばいがふよんふよんで、縦横無尽に跳ねるのも好評価だよね！

「ああー、これ良いわー、せつちゃん、もうちよつとがんばってなー？」

「ひやうつ！ むつ、むりいつ！ これむりいつ！ やあつ、やだあつ！ とめてとめてとめて！ んひああつ！ んにやああつ！」

「いっくぞー」

「やあああああああああああああつっつっつ」

——つと、脳みそが真っ白になるくらいに、凄、出た。

そりやあなあー、このかの時出してないんだから、出せるときには出しちゃうのが生物としては自然だよなあ（他人事）。

せつちゃんの瞳中にどぶどぶ注がれて、出されている感触に反応しているのか、それが続く間はずっと痙攣するように身体が跳ねているセツナが其処に居た。

目も見開いて、虚空を見上げて、口は半開きのままに言葉も無い。いっしょに絶頂もしていたようで、気持ち良くなってもらえたのなら言うことは無いのだ。

……ところで、さつきから誰か静かじゃないか？

「あ。このかー、交替」

「——えっ!？」

気づいたので後ろを振り返り、せつちゃんをそのままにベッドの上へと寝かせると、やや距離を取っていたお嬢様が視界に入った。

んん？ 引かれた？ それとも逃亡寸前？



「何驚いてんだ、次はお前の番だよ」

「え、い、いやいや、ウチはさつきキモチヨクしてもらったし、そらくんも連続で疲れたやろ？ ほなら今日はこの辺で、」

「いやいや、寝た子を起こした所為か今凄いヤル気になっちゃってんだよね。しつかり相手して貰わないと、収まりがつかないわ」

じり、じり、と窓辺へと近づくこのかへ近づく俺。

逃げ道なんて寮内への内ドアだけなので、本気で逃げようとしたら窓から飛び出して3階の高さを飛ぶしかない。

が、せつちゃんという足代わりを封じられた今となっては、このかに逃亡の手段など既がない。

「つーわけで、第2ラウンドよろしくねー！」

息を呑む攻防戦空しく、俺は早々に攻勢へと打って出る！

詰んでいることを自覚したらしきお嬢様が絶望の貌を見せる前に、全裸俺はルパンダイブを決行した――！

▽  
▽  
▽

「たっだいまー、っておわ、凄いわねー。あ、そら、あけおめ」

「お、おう、あけおめ」

やだ、超気まずい。

あの後、逃げようとした戦犯このかにも極太のアレで足腰立たなくなるくらい後ろからズコバコしてやったり、目を覚ましたセツナを上重ねてレズプレイの隙間にこのかの穴を苛める遊びとか、逆に重ねてこのかの乳を揉み解しながらせつちゃんを組み敷かせての擬似レズ貫通式もどきとか、下の口だけじゃなく上の口中も舌で交互に蹂躪して蕩けさせたところで盛りの憑いた雌猫が2匹出来上がったので横に並べて四つん這いになれよお！とかさせて交互にとか。

まあ色々やっていたわけだが、そのもう数回目のフィニッシュで4つのぷちぱいで微分ぱふぱふも愉しんだ其処へ白濁ぶっかけとかやった仕上げ段階で帰って来たのが明日菜であるわけで。

考えて見ればこの部屋は元来明日菜とこのかの部屋で、そこへ昼間から彼女が居なかつたというのは、普通に疑ってかかるべき事項であるはずなのだ。

居ないのいいことに、というつもりは微塵も無かつたが、全裸でルームメイト+αと3pな情事に勤しんでいる幼馴染（しかも肉体関係済み）という図式は、いかにもな修羅場の様相でしかない。

は、図つたなあこのかああああ!?

「え、えーと、これはだな、」

「あーあ、もうこんなに汚しちやつて。ほらこのか、せつなさんも、お風呂湧いてるから洗って来たら? 今なら人は少ないと思うし」

「んあー……、今何時なん……?」

「ま、まだ、昼の2時です、お嬢様……」

「んー……ほんならいつかい休もかな……、せつちゃん、あらいつこしよか……?」

「そうですね……、これ、ちよつとじゃ落ちなさそうなくらい濃厚ですし……」

あれよあれよという間に、よろよろと足取りの悪い2人に柵からバスローブを出して着せて外へと送り出す明日菜。

いやいや、もつとなんかしら気に掛けることがあるんじゃないの? というか手際良いな。

「なんか、凄い計画が陰で働いている気がするんだけど……!?!」

そうして送り出した明日菜はというと、さて、と気を入れたかのように呟き、俺へと向き直った。

「そら、まだ元気よね?」

「お、おう、一応な?」

「じゃ、2人が帰るまで私専用ということだ」  
「いや待て、その前に説明——」

と、静止も止む無く、魔法世界の元お姫様はルパンダイブを敢行して来た——!?

待て！ 説明！ 説明プリーズううう!!!

——姫御子には、勝てなかったよ……!!

「功夫が足りないんじゃないか? (挑発)」

「——で、改めて云わせてもらうのだけど、烏丸くんはアーシアちゃんとかとキチンと付き合う気があるのかしら? 私たちはこんな形なりであるけれど、アーシアちゃんは元は清廉なシスターだから。気持ちを踏みにじるといふことは、人として最低な行為であることくらいは、自覚できるわよね……?」

「うす、スンマセン。正直、遊び半分で弄りました。もう手を出しませんのでご勘弁ください」

「というか、女子つてそう言えば貞操観念のキチンとした子もいるんだよね。」

麻帆良ではあんなんばかり(女子校のノリでパンチラとかも気にしないくみたいな)だったし、すっかり意識から抜け落ちてましたわ。そんな反省を抱え五体投地の勢いで謝罪すれば、後ろのアーシアさんがガアンとショックを受けたような顔をされていた。でもさー、俺から言わせてもらえば普通に重いよー。

高々二日ほど身体の付き合いがあつた程度で、いきなり嫁面は無いわ。

奥さんは既に間に合ってますし。あ、愛人みたいなものな。そっちは不本意だけど。

「……あなた人間のクズですか」

「おう、塔城からそんな目向けられるのは初めてだな。だが撤回はしない。俺は、アーシア先輩と付き合うつもりも結婚する気もない!(ドンッ!)」

「……無駄に男らしいのがまた腹立ちますね。あとなんですか、最後の効果音……?」

やっぱりネタが通用しないんだよなあ、この世界線。

アーシア先輩と姫島先輩ついでに塔城にも連れられて、以前にも来た旧校舎の才力研部室。

学外からの連行途中なんかメタ的に言う処の一話分余分な話が挟まった気がしないでもないが、そんなことはさて置いて彼女らに『悪魔』だと自己紹介を戴き、背から蝙蝠か鳥みたいな三者三様の羽を生やした御三方に取り囲まれての事情聴取を受けてしまった俺である。

——直に生えている、というよりは魔力的な性質を帯びた『波長』を成形する発信機に近いか。

一息に種族間での身体的特徴、とも言えなくも無いけど、それだと物理法則とか進化論とかを無視した形成になるから、やはり生物的な役割よりはもっと根本的なところで『世界の構成』自体に余計な手が足されている気がする。

簡単に言うと、神秘存在が受肉してるんだな、この世界。

……通りで無駄に魔力が溜まる筈だよ。

概念武装そのものが資質的なオーバースペックで形成されるから、俺に備わっている魔力精製回路だと廻転稼働が過剰過ぎて収まりつかないって言う。

今すっごいメタ的な妄想したけど、もしも奈須き●この型月世界とこの世界とがクロスオーバーしたら確実にバランス悪いことになるだろうなあ。どっちかが冗談みたいに強すぎて、片方の視点から「お前TUEEEEEE！」っていう二次創作が生まれる気がする。どっちがどうなっても可笑しくない、みたいな。まあ妄想だけだよ。

「……今全然関係ないこと考えていませんか?」

「ん。いや、そうでもないけど」

先ほど塔城の背中の羽も少し弄らせてもらったけど、感覚は一応繋がっているらしい。

神経が通っているというよりは、出し入れできる、ってことからせつちやんみたいなタイプかな。

羽そのものが魔力を放射する形質を構成するから、剥き身の魂の一

部、って解釈した方が近い感じ。

ということとは、強ち全然趣旨の違う世界線とは言い切れない、ってことか。

あつちの世界でも神族魔族が降臨することは偶にある事象だし、完全受肉している所為で悪魔種族そのものに神秘性という概念不足が発生しているっぽいけど、その分を魔力で補ってる、とか？

でも内包魔力が此れ、多分高音さんとかの一般魔法生徒と同程度だな。

やっぱりバランス悪そう。

武装解除をくしやみで発動するネギ君ほどじゃないけど、羽を生やしたことで魔力解放状態になっているのに外に漏れている余波が契約執行時の強化にも足りてないし。

体内に在るのか、と思つて軽く探ってみても、この人らに力が巡っているという感覚は見出せない。

うーむ、……ひよつとして、俺ですらランク的に上位君臨できちゃうレベルなのか？

いつちやう？ イージス艦二隻分いつちやう？

「やっぱり見当違いなこと考えてますよね？」

「いや、そんなことねーけど？」

いい加減に塔城からの言及が鋭くなって気がするので視点を戻すが。

要するに、姫島先輩が心配していたのは、妹分であるアーシア先輩がろくでなしの後輩に騙されているんじゃないか、という点だろう。

そもそも、最初の時点でこちらが『そういうお仕事』を斡旋する方々だ、と勘違いした所為であんな関係になつた2人である。撤回するのも俺としては気にしない。

いよいよ性欲がヤバくなつたら、またこの間みたいに夜の街中で釣れそうな女性を一晩限りのお相手として漁るだけであるし。

年頃を狙うのは俺自身の年齢的にも定石となるのだが、大学生辺り

へ絞った方が良い気がしてくる今日この頃。

「……あなたね、女の子の初めてを奪っておいて直ぐに捨てるって、  
どういう料簡をしていますの？ 責任を取る、と言うまでは帰す気はあ  
りませんわよ？」

「えー？ 勘弁してくださいよー。前の所じゃ女子の方が貞操観念  
アレだったんで、こっちも勘違いしたんですよ。というか、最近の女  
子ってその辺は緩いと思うんですけど」

「アーシアちゃんをそこらの雌猫と同じ目で見ないで欲しいですわ  
ね」

「姫島先輩の猫っ可愛がり半端ない件について……。でも、最初  
に俺の部屋に乗り込んできたのもアーシア先輩ですけど。チラシで」  
「そこについては小猫ちゃんに後でしつかりと話を聞きますわ」

「!?」って姫島先輩へと首を勢いよく向ける塔城は兎も角として、誰  
かに似ている声音で語る姫島先輩が普通にしつこい。

似通っている大元の所為なのかな、俺を領かせるにはカリスマが足  
りない。

素直に聞くことを生理的に受け付けられない俺へと、先輩は話を続  
けた。

「あなたが普通の男子であるなら、正直こちらとしても催眠とかで  
言うことを聞かせる手段に出るんですけど、」

「せんぱーい、今俺より碌でもないこと言ってますよー」

「自覚あったんですね……」

塔城、うるさい。

「ですけど、あなたにはどうにも『そう言うモノ』がかかりにくい体  
質みたいですし。こうして正攻法で認知させようかと」

「個人間の付き合いに口出しするのってどうかと思うっす」

「……グレイファイア様から、あなたとの付き合いをそれなりに確立しておくように、と通達もありましたの。要するに、仲良くやりなさい、と。……あなた本当に何者ですか?」

「知らねーっす」

流石に、グレイファイアさんまでは自分も喰われたことを告げてない様子。

しかし、姫島先輩が此処までしつこい背景にそんなモノがあるとすると、あつちはあつちでまためんどくさい何か背後にありそうな気がするなあ。

それは今は一端さておき、堂々巡りで話は進まず。さて、どうしたモノか。

「——あ?」

「……なんででしょうね?」

ふいに、全員が外へと意識を向けた。

音、ではなく、何か騒動の気配みたいなモノを感じ取った所為である。

その辺は確かに、人間とは別の種、と言えるだけの感知能力は有しているようだ。

「……? 少し見てきますわ。小猫ちゃん、一緒に行きますわよ」

「え。いえ、この場にお2人を残す方が問題なのは、」

「2人だけでしか話し合えないことだって、世の中にはありますわ」

「先ほどまで色々口出ししていた人の台詞とは思えな、」

全て言い切る前に連れていかれる塔城。

部室には、見事に俺とアーシア先輩だけが残された。

……俯いた様子でいる彼女と、2人きりで顔を突き合わす。

俺は言いたいこと言ったし特に気にしないが、アーシア先輩なりに



は言いたいこともあるんじゃないかなと思う。

なので、言わせる気でもある。

許してとは言わない。好きに言えばいいさ、それで気も晴らせるなら安いもんだよ。

「……………私じゃ、ダメ、ですか…………？」

「まあ、うん」

心を鬼にして頷く。

「身体には、不満は無いつて…………」

「あー、言ったね」

でも、この人マグロって感じで、こう、俺ばかりが接待プレイしてるから、そこだけは不満かも。

「…………小猫ちゃんから聞きましたけど、奥さんが他にいらつしやるって…………。同居していた方ですか…………？」

「ん？ 会ったの？」

同居云々の彼女…………、魅衣のこと、だよな。

いつの間に会ってたんだ。

まあ違いますけどもね。

「や、やっぱりおっぱいが…………！」

「それは違うよー！」

そこを重点的にしていたら、俺は今頃ゆるなかアキラさんと結婚しておるわ。

思わずネタ的に口走ってしまう。ダンガンな論破って感じで。

「じゃあ捨てないでください！ なんでもしますから！ そらくんが望むことを、なんでも応えますから捨てないでください！」

——うわっ、重っ。

泣いて縋られるが、やっぱり重い。

多分だけど、女性の意識する『なんでも』の範疇って言う程広くないよね。

この人、元シスターとか言っていたし、元々の社会意識の狭さが痕を負って比例しているって感じ。

困ったなあ。これじゃあ兵藤先輩と縋りを戻せ、って言って聞くようにも見えないし。

……つか、いよいよ外もうるさくなってきた。

なんなの？ 何騒いでるの？

「あー。ひとまず、俺外見て来るから、その話はまた後にしない？」

「くっく、でもっ、」

「じゃあ言い換えるから。アーシア、ハウス」

「っ、わ、わんわんっ」

縋っていた涙目だったアーシアさんは、犬の降伏ポーズみたいに手を胸の前へ揃えてしゃがみ込む。

ポーズはM字で、命令されたことが嬉しかったのか、泣き笑いみたいなエへ顔になっていた。

良し。そのまま待機な。

あー、めんどくせ。

▽  
▽  
▽

「……で、此れ何の騒ぎ？」

聖剣使いの因子を自らに埋め込んで、コカビエルの手によって再び

奪い取られた4本統合エクスカリバー、更に『擬態の聖剣』と模造  
剣として精製された『支配の聖剣』に『破壊の聖剣』の総てを  
完全合成と銘打たれた『究極合体エクスカリバー神改』等とい  
う名で振り回されていた剣を押し折り、制御しきれない狂乱の様相で  
振り回していたバルパー何某というお爺さんの下半身を狙い某年末  
の笑ってはいけない番組宜しくタイキックで足蹴にしつつ、烏丸くん  
は全員を睥睨する。

アーシア先輩はどうした。

「いま、エクスカリバー……、え、え!?」

「嘘だろ、なんだ、よ、それ……」

聖剣が容易く折られたことに狼狽える佑斗先輩と回避行動で息絶  
え絶えな兵藤先輩、あとリアス部長とさつきまで彼に懐疑的だった朱  
乃さんが初めて目にした彼の實力に慄いているけど、私からしたら大  
体彼なら出来そうなことなのである意味納得である。

あまり深く考えても意味も無く変なところに置き去りにされるの  
で、程ほどで納得しておかないと疲れるかと。

「で、塔城、なに、このはっちゃけていた爺さん」

「おうっ!?! おうっ!?! はへえっ!?! ひぎいっ!?!」

タイキック止めなさい。

「何故執拗にローを狙いますか……。なんか、今回の騒動の主犯と  
いいですか……」

「騒動? なんかあったのか?」

「えーと、聖剣が奪われたとか、それを新しく造ったとか……」

「……ん? なんか最近街中で似たようなモノを見た気が……」

蹴りを辞められて、ビクンビクンのたうつバルパー何某さんを放置

し、ぐるりと周囲へと視線を巡らせる。

いつものオカ研メンバーに、先程土下座したフリードが傍に……仲間にもなったのだろうか？

あ、教会派遣のお2人まで居る。仕事しろください。

「……………なんか、何処かで見たような……!？」

「何に怖いてるんですか、あなた」

アレか。全身タイトスカというかレオタードみたいな痴女スタイルの女子高生が目についたのか。

アジア先輩とはきつちり男女の関係になっただけ様子だが、この人はそこそこの貞操観念も持っているのだから目に余る変態を目の当たりにして処理が追い付いていないのかもしれない。

貞操観念云々は、今迄散々アピールしてる私を相手に一切手を出してこなかったことからの推測だ。

自分で言うのもなんだが、私は正直女子としては完全に未熟な身体つきをしている。

言いたくないがペド野郎垂涎の肢体で、此れに本気で懸想する男性ならば社会的にも確実に死んだ方が良いロリコン野郎だと自負も出来る。

しかし、烏丸くんは違う。

奥さんと紹介されたマスターとは肉体的な関係を持たず、私にも手を出さないのだから、そういう趣向でないのは絶対的だ。

かといって他の女子に現を抜かしているのは問題だろうが、彼なりの理屈だとそういうわけではなく、欲望の解消としか操を預けない心情を開かぬ徹底ぶりには別の意味で擦られてしまった。

ちなみに私こう見えて悪魔だから、男性の性欲云々に関しては結構リベラル。

ロリータ女子に幻想抱いてる童貞どもー、残念でしたー☆キヤハッ。

……気になる程度だったから、これまで色々とちよつかいを掛けて

いたのだが、身体は「こう」でも私だつて年頃でもある。

アーシア先輩ばかりは、やはりずるい。

朱乃さんは受け入れられないかもしれないが、アーシア先輩との話し合いに決着が付いたら私ももつとアピールしようかと思った。

本気で我慢しきれなくなったら、夜這おう。

そんな決意を隠しつつ簡単な説明で片を付けると、烏丸くんは厭な顔をしてお爺さんを見下ろしていた。

「……つまり、この爺さん噂に名高い聖剣の刀鍛冶か。なんか嫌だな」

また碌でもないネタでボケている気がする。

「馬鹿な……い。なんだ、貴様は……!?!」

あ、コカビエルも一緒に驚いてた。

どうもあの聖書にも載ってる古株の堕天使だが、この件で黒幕的な立場だったらしい。

私と朱乃さんが来た時には、聖書の神が既に死んでいるとかいうことをバルパー何某に説明して、そのバランスのどうのこうの、と喋りつつエクスカリバーの統合を促していたように思えた。

自分たちの信じる主上が既に存在しなかったことに絶望した教会組お2人が呆然自失となるのも仕方ないかもしれないけど、それで手にしていた聖剣を二つとも奪取されるというのは見過ごせない。やはり此処は仕事しろ、と叱咤すべきであったか。

まあそれも総て折られたのだけだ。

烏丸くん、ぐう有能。

「魔王でもない只の人間が、こんなところで障害になり得る、だと……!?! くそ、フリードが寝返るのも無理のない話か……! だが俺も今更後には引けん! 戦争の引き金を引くためにも、貴様らには賛

となつてもらうぞ……!」

「……塔城、あのオツサン、なんかひとり物騒なこと口走つてる気がするんだけど」

「今の烏丸くんほどじゃありませんよ」

「どういう意味だ」

いやホントに。

驚異的な墮天使とかいうので朱乃さんが顔を強張らせていましたけど、本気出した烏丸くんに死角はないのでは。

「私たちは先ほどのバルパー何某さんでも勝てないくらいの実力ですから、烏丸くん任せます」

「全投げとか、投げ槍にもほどがあるわあ……」

「いえ、普通に敵わないので、ホントに何とかしてくださいお願いします。……アシア先輩に関する事で少々私個人的な友誼を謀るのも吝かではありません」

傍に兵藤先輩もいらつしやいますので最後の一言は小声である。

なんだかねでアシア先輩へ最初に手を付けようとしてたエロ坊主ですし、未だに同居している方々ですし、アシア先輩に他の男がいるとかいう事実を未だ受け入れきれないキャパなのではないかと思われる私なりの心遣いです。小猫ちゃんてばなんて出来た後輩なんでしょう!

そんな打算で付け加えた言葉に、しかたねーといった顔つきで烏丸くんはコカビエルと向き直る。

焚き付けておいてなんだけど、本当に単騎で渡り合うつもりなのか。

「あー……、大体アールウェル<sup>4</sup>と<sup>5</sup>と<sup>号</sup>と同レベルか……? 魔力が他

より高密度で性質までは分析しきれないから、とりあえずごり押しで往くか。さて、『シヨートカット』『帝 釈 廻 天』」

▽  
▽  
▽

——数分後、其処には只の肉塊にされたコカビエルの姿が……!!  
いや、いやいやいやいやいや、待つて待つて、ちよつと待つて!?  
か、烏丸T U E E E E E E E E E E!?

三つ又の槍みたいなのを出現させたと思つたらそれを投擲、投げつけられたコカビエルが回避するも何故かその槍に引き寄せられるように動いて翼の一つがごつそりと抉り取られた。

自分が動いたことにも驚いたようだったコカビエルへ説明なんて全くせずに、烏丸は同じ槍を数百単位で出現させ、その総てを連続して包围するように逃げ場が無いように投げつけた。

投げつけられるごとに自壊する槍。

その自壊に伴つて肉体を抉られるコカビエル。

あとはもう一方的だった。

こんな惨たらしい戦い初めて見た、いや、戦いなんてものじゃない。  
い。

これはもう私刑だ。<sup>リンチ</sup>

1人袋叩きとか、実現できる奴存在したんだな……。

「——で、これで良いか?」

「——……ッ! ……つ、くくつ、……つ」

かひゆうかひゆううう、と音も漏らせないレベルでのか細い呼吸で弱り切っているコカビエルを踏みつけて、烏丸は誰にもなく確認を取る。

つか、アレで生きてるとか、流星は聖書の墮天使。

……いつそ殺してやれよ……!

「……はは、コカビエルを引き取りに来ただけなのに、これはまた凄  
い奴に巡り逢えたものだ……!」

今度は何だ!?  
声のした中空を、全員が一斉に見上げると其処には――



【常勝無敗で】 幼女と謀略が犇めく縦横無尽な第三章

【済むわけない】 ※原作四巻相当分

☆「もうストーリーとかどうでも良くね?」

むにぃ、と形はあるのだがそれ程の重量は無いふたつのおにくを、彼女は無理矢理に持ち上げて挟む。

潰すように抑えつけた其れが小さな谷間から顔を覗かせるのが興味深いのか、蛇みたいに舌をちろちろと出して寄せた唇で味わされ、『アイスクャンディを舐めるようだ』と例えるにしても余りにも淫靡な扱いに、俺もまた収まりが効かなくなってしまっていた。

上目遣いとなる視線に沿うように、流麗な黒髪を優しく撫でつける。

ヘッドドレスを弄らぬような手探りだが、感情の読み取れない目線が若干喜色で濁ったような、そんな気がした。

「ん、む。ソラ、気持ちイイ?」

「っお、おう、それ、良い……」

「ん。我、もつと頑張る」

「っ、いや、それくらいで、良いって」

云うと、彼女は直ぐに「ん」と手を離す。

ふくらみは義務教育適齢期の少女のそれと同程度しかないので、抑えが無ければ直ぐに零れて、挟むほどの肉感も維持することはできない。

ぼろりと、充てるならばそんな擬音で。

行為を済ませて身を離れた彼女のベッドへと座り込むその仕草は何処か儂く、肌を隠す意匠を備えてないゴツシクロリータを模した衣装しか身に纏わせていない裸体に、ほよんと柔らかかそうなふくらみが揺れることに目が止まる。

変態的な胸当てで部分のみ隠されたソレから浮き出るように、小さな先端がつんと上向きなまま擦る前よりもぶつくと自己主張していた。

「ソラ、早くせつくすしよう」

「お、おう」

が、直球な言いように、こちらが挙動を危ぶまされてしまう。幼い雰囲気、というよりはどうにも社会性が足りていないような、反射にも似た未熟で未発達な応対能力。男女の機微を言う程熟知している俺でもないが、普段から抑揚のない彼女は果たして今からスルことと今シタことをキチンと理解しているのだろうか。と、要らん心配が頭を過ぎる。

こちらは完全にやる気になっているというのに、これ下手したら塔城を相手にするよりも犯罪的なんじゃないかしら？ と今更過ぎる懸念で二の足を踏まわされていた。

「……ていうかオーフィス、きちんとわかってる？ 要するに子づくりなわけで、男女の性的な意味での肉体交流が此れからすることだけど、やり方というか心積もりというか、把握できてる？」

思わず問うのも仕方がないかと思われ。

「……どうすればいい？」

こてん、と小首を傾げられた。

ううむ、以前がどのような形なりだったのかは知らないが、現状そういう身体になっているのだから性教育くらいは備えておいてほしい。そう思いつつ唸り、衣装を指差す。

「とりあえず、その服は取っ払っちゃおう。隠す意図も無い衣服なんざ着ている意味も無いし、初心者に着衣プレイとかニツチにもほどがあるし」

ほんと誰だよ、こんな変則変態ゴスロリのデザイン考えた奴は。エヴァが視たら絶句どころじゃ済まねーぞ。

互いに衣服を取っ払い、剥き身の姿で絡み合う。

ベッドの上で、改めて撫ぜる彼女の肌は、年頃相応と思わせる柔らかさと滑らかさを指先へと伝わせる。

唇は互いを求め合い、脚は太腿を擦り合わせ、伸ばされた彼女の腕は背中へと這うが、俺の手は彼女の背中と尻へと蠢いている。

開かれたままの眼は無感情にこちらを見上げたままなのだが、身体

は少女の体を喪っているわけでは無いらしく、全体的に肉付きの薄い身体を弄られる度に、目の奥に感情の残滓のような濁りが疼くように覗える。

そう覗えるのは、やはり過去の経験に依るものか。

6号とかサブローとかでクール系キャラとの経験が積まれているからこそ、塔城を教室で相手取ってもおチャラけられるというモノであった。

「……………ん？」

ちくり、と背中へ這わせられる手が小さく抓るような仕草で、こちらの意識を誘う。

唇を離し、オフィスの目元へと視線を向けた。

「……………今、我以外の女のことを考えた」

……………そう言う処だけはしっかりと女子を遣りおつてからに。

「スマン」

「ん。許す」

応えられ、再び唇を繋ぐ。

今度は彼女から、首筋へと腕を回し、抱き着く仕草で俺を求めてきた。

相変わらず目は開いたままだが、唇だけでこつちを搦めようとする要求は如何ともし難く。

其処を抉じ開けて舌を這わせ、口中を弄れば目はさらに大きく見開かれていた。

ようやく、感情らしきものはつきりと瞳に映る。

肌蹴た胸元で擦る互いの肌と肌、未熟ながらも依然と在るふくらみは柔らかく、乱雑に潰されるそれを快く感じているのだろう。塞がれた唇から時折漏れる呼気が、その証拠に荒げて揺れる。

背と、尻と、脚と胸と、唇と舌の上、そして太腿と股の隙間を、全身を隈なく弄られて、——滔々と離された時には、目元は愉悦で濁り切っていた。

蕩けた眼が、上気した頬と舐られ半に開いたままの唇が、声も出せずにこちらを見上げる。

「……じゃ、そろそろいくぞ?」

「……ん」

擦り合っていた股の逸物を、外側かわをなぞっていただけの反り立つ其れを、生理的な反応で好く濡れそぼった彼女の割れ目へと宛がうと、肉体に沿う本能的な意思なのか、オーフィスは自ら其処へ指先を沿わせていた。

くぱあ……、と小さな秘所が開け広げられる。

俺は其処へ、遠慮することなく自身のソレを押し入れる。

「……ん、つ、あ……」

「くくつ、う、わあ……」

今まで味わったことのないような狭きで、しかし押し返されるというわけでもなく、吸い込み挟み込み徐々に侵入を受け入れられてゆくことが、快感となって背筋神経を走る。

小ささゆえにすなりと、では無いが、彼女は拒否も抵抗も一切ない為すがままに、捻じ込まれる俺を奥まで届かせた。

「……く、あつ」

「……つふ、……ん」

だが、それは半分ほどしか埋うずまっておらず、それなのに先端はそれ以上進めないことが感覚で伝わる。

彼女の小ささを、よく思い知らせる事実であるのは間違いない。

「……い、たい、か?」

「ん。でも、だいじょうぶ」

俺は狭さで呼吸すらヤバイ。

何此れ、名器とかそんなレベルじゃない。

全部が収められるようになったらどれだけの快感が待っているのか、と想像しかけてごくりと喉が鳴る。

「だいじょうぶだから、奥まで来ていい」

「……!?!」

「動いてほしい。ソラ」

……おいちよつと待て、じゃあひよつとしてこの一番奥かと思わせ  
て留めているの、膜か?

どんだけだ無限の龍神……。

「突き破って、かまわない」

他の世界線最強の概念そのものの規格外さに戦慄を覚えていると、それを蹂躪して欲しいとの要求が放たれる。

この世界来てから色々振り回されている気もしたが、彼女には群を抜いてアレな気がするなあ……。

ぐ、つと力を入れて、腰を沈める。

ミリ単位でじわじわと進撃する、例えるならば俺のバルムンク。

龍へと押すのだから竜殺し、つて安易な連想をしてしまったが、受け止める幼い秘所は時折震える程度で、その衝撃のほどを微塵も顕わにはしない。

というか、彼女自身痛みも味わっていないのではなからうか。つてくらしいに変化が無い。

ゆっくりと破瓜として侵攻してゆくことを、ほぼ無言で姿勢を変えることなく受け入れる。

今までに無いパターンではある。

……実は初めてと違うとか、そんなオチが待っているのだろうか。

「……っぐ、っ」

「……ん、んっ、あ……、ん」

じゅぶつ、と根元まで入り、今度こそ奥まで届いたことを実感する。改めて見直すと、オーフィスの膣口からは少量の血液が滲み出ていた。

「……あ、本当に初めてだったんだな」

「ん。ソラ、失礼」

「スマン。なんか全然痛がらないから……」

無感情気味に窘められてしまった。

そんな彼女の未熟に膨らんだ乳房を撫でながら、小さく勃った乳頭を摘まんで優しく弄る。

ほぼ無意識であるが、こういう時奉仕気味に仕草が働くのはデフォルトに備わっているわけでは無い。

どうせなら気持ち良くなつて欲しいとは思うからこうしているが、

痛みを感覚で味合わないのならばやる意義も無くなっている気がしてくるな……。

「痛いのは我、気にしない」

「そうか」

「でも、気持ちイイことは知らない。だから、しっかりと教えて欲しい」

「そうかー」

試しに、挿入した状態で穂先を起こす。

「んっ」

「……お？」

「あ、ん、んっ」

「……おお」

「どうやら不感症というわけではないらしい」

「何故か感動に似た感想を抱きつつ、蠢かせる度に小さく声を上げたオーフィスへ、跨るように覆い被さった」

「何か感じたらどんな風でも良い、好きに声を上げて見ろよ。あと、力抜いたほうが良いぞ、脚ももう少し開いてみるか」

「……ん。わかった」

云われたとおりに、脚を抱き枕カバープリントのように内股で伸ばしていたオーフィスは、跨る俺の股へと届かない程度に脚を開き、弱い蟹股かO脚を思わせる隙間を開けてだらしなく身体を弛緩させる。そんな彼女とは対照的に、俺は穂先へ血を滾らせ、より硬く熱くと伸ばした其れへとぐつと力を込めた。

「ん、ソラの、熱い……」

「判るか」

応えると、狭さを押し広げるようにゆっくりと動き出す。

膣内をマグマみたいに滾ったソレが、情欲を迸らせることを目指して前後に運動を始める。

……人の雄は本能で動物的に理解しているこの動きを、幻想の存在として概念的な成り立ちを備えているドラゴンは果たして理解できるのだろうか。

そういう懸念も、あるにはあった。

「ん、あ、んう、は、あ、あん」

動かすたびに、雌という毛色を微塵も匂わせない嬌声を上げるのだ。

若い肢体を備えているが故の未熟さなのか、はたまたそういう体<sup>てい</sup>が兼ね備えられたが故の『無限』たり得る概念体なのか。

とりあえず、もう少し激情を迸らせてもらうのを目指して運動を続けよう。と、思った。

「あ、ん、ん、んあ、は、つ、つぶ、んい、つひう」

腰先を捻る様な動きをシタ時、微妙に違う反応が出た。

改めて彼女へと視線を向けると、見開いていた筈の目はいつの間にか閉じられており、半開きとなった口から呼吸の抜けるように吐息が漏れている。

当然、動くことは止めていない。

部屋中へ、肌と肌がぶつかり合う、水音のような濁音と一緒に、彼女の嬌声も準じて響く。

「あつ、あつ、あつ、あつ、あつ」

「……オーフィス」

「んっ、あつ、あつ、ソ、ラっ、あつ、んむっ」

可愛さ、を最初に目にした時のように、彼女へと愛おしく声をかけ、唇を再び塞ぐ。

彼女からの腕は俺の背中へと再び這わせられて、俺は彼女の腰へ添えていたものを頭へと回し、抱くように自らへ引き寄せた。

「んっ、んっ、んうっ、むうっ、ソラあ、ソラあつ」

「ああ、気持ち、良いか？ オー、フィスっ」

「んっ、はっ、いいっ、イイっ、これ、がっ、気持ち、イイ、って、こと、んっ、わか、ったあつ、あんっ」

貪る様な口付けの隙間に、名を呼ばれ、名を呼んで、目を再び開いた彼女の、喜色で濁った蕩けた瞳に自分を映されて。

男女の交わりを、生殖という幻想には必要のない行為を、此処で初めて理解できた彼女へ、腰を沈めることを止める気はない。

突かれて届く、彼女の性感帯とその付近を執拗に攻めれば、そのたびに雌の貌へと成って往く。

幼かった無垢で無感情な何かはもう居ない。

快樂と愉悅とを覚え始めた少女が、跳ねる身体を雄に抑えつけられている姿だけが此処にはあった。

「ソラっ、ソラあっ、なにか、きてるっ、なにかっ、きちやううっ」

「ああ、我慢すんなっ、俺も、もうっ」

「なにつ、なにこれっ、わからないっ、わからないっ」

「だいじょうぶ、だからっ、おれも、いっしよにイクからっ」

「あっあっあっあっふあっ、あああっ、いくっ？ いっしよ？ いっくっ？」

「ああっ、いくぞっ、オーフィスっ」

「あっあっあっ、あっあっ、んあっ、ふあっ、ああああああああっ」  
——っ。

狭い膣内へ俺の熱気と精液が、溢れるくらいに注がれて逝った。

「さい、ご、の……、な、に……っ」

「ああ、……、ああいう、やつなんだよ。セックス、っていうのは

……。要するに、共同作業だ」

「きようどう、さぎよう……っ？」

「いっしよに、って意味」

俺の下に抱かれたまま、オーフィスは自分に起こったことを理解できていなかったのか、質問を重ねる。

気怠いがために明確では無く答えたが、それでも満足したのか、何処かその言葉を噛み締めるように何度か頷くオーフィス。

俺はというと、余韻に浸るくらいの気は配れるが、此れまでに相手した女子らと比べるとどうにもタイプが違い過ぎる所為なのか、今日は初めて一回きりで満足となってしまっている。

求められれば応えたいと思うが、果たして本日は未だ続ける気なのだろうか、彼女は。

「いっしよ、いっしよ……。うん。うん」

きゅ、と未だ繋がったままの接合部を外そうとはせず、俺の背へ



回したままの手に力が込める。

胸元へ抱き着いてくるだけの彼女の柔らかい肢体を、第二ラウンドへ向かおうという気配が無いことにやや安堵を覚えつつ、俺は優しく抱き締め直したのだった。

「ちよつと見逃したらまた負けてたよ!？」

「くー……、くー……、うーん、むにやむにや……」

「……………え？」

……………どういうことだ。

朝、目が覚めたらベッドの上で、全裸のオフィスが隣で寝ていた。そして俺もまた全裸で、いっしょにシーツに包まって抱き合っていたのだ。

此の様に『KENZENな睡眠でした』とは、口が裂けても間違っても言えない事態。

どう視点をひっくり返しても誰が見たとしても、間違いなく事後です本当にありがとうございます。

これは思考が完全に停止しても仕方のない状況。

……………ていうか、昨夜の記憶が鮮明にあるし。

「いや、いやいやいや……。俺、ロリコンじゃねーのに、アレは可笑しくね……?！」

むにやあ、と寝言ガチなんだか演技タヌキなんだか判別しづらい声を上げつつ俺の腰へ抱き着いてくるオフィスの感触に小さくてもやはり女子は女子なのかと女の子特有の柔らかさと魅力にドギマギしつつ酩酊しかけるも、それでも己の理性が仕事を放棄したくなるほど泥酔した記憶も無い。

昨夜はこの下宿場でも宴会は無かったはずだし、呑んだ記憶も無いし。

更に遡って思い返すも、寝床に入る前に彼女が部屋へ訪ねて来た記憶しか……、

「——おいこらオフィス、お前俺に何をした」

「……むう、もう回帰した。やはり完全にはいかない」

確信を持ち、腰に引っ付いている彼女の頭を掴まえるが、  
アイアンクローアイアンクローそんな仕草も障害にならないらしい。

頭頂部を鷲掴みされているにも拘らず、平然とした面持ちでどう見ても中学生以下の全裸少女はこちらを見上げた。

「ソラに近い者と錯覚させるように、認識の改変を施した。でも一晩しか持たなかった。我、もつとセックス知りたかったのに、あの悪魔女と比べても回数が少ない。残念」

「無限の龍神はなんでもありか……?!」

「此処で暮らすうちに小手先の技も覚えた。我、万能」

何処か誇らしげに、というかVサインを作りつつ自身の成果を語るオーフィス。

確実に余計な成長です。矢荷成荘は本当に魔窟だなあ……！

というか障壁さん！俺のATフィールドさん！こういう時こそしっかり仕事しろよ!?

アレか。昨夜は帝釈廻天連続具現をブツパしたから魔力使い切ったってことか。

障壁が働かなくなるタイミングで其処を、しかも寝込みを襲いに来るとか、好奇心旺盛だなあオーフィスさんは……ッ！

「……というか、悪魔女って誰のことだ」

「銀髪の、お酒に弱かったアレ」

「ああ、グレイフィアさんね……」

其処も覗いていたのかよ。

▽  
▽  
▽

「そういえば、昨夜着ていたあの変則ゴスロリ、何処から持って来たんだ」

「仕事先から貰った。似合ってた？」

「お前就職してたの!？」

俺はズボンだけを穿きオーフィスはシャツに包まったまま、階下へ赴き洗面所へと足を運ぶ。

その傍ら、気になったことを問えば予想外の答えが出てきたことの方が衝撃的であった。

俺はバイトしか出来ない苦学生やってるのに……。

「なんか、祀り上げられた」

「きよ、教祖……?」

コイツの仕事内容が凄い気になるんだけど……。

そんな気になる彼女は無限の龍神オーフィスたん。

見た目は女子中学生だが、それは肉体だけの話。

ドラゴンとしての性能に加え、無駄に高スペックに概念的な『無限』まで内包しているので、一端の受肉系神秘とかとは完全に一線を画す傑物である。

軽くスキャンさせてもらったことがあるが、憑依体が死んでも次の肉体を得ることが可能な精神体、明確には物理世界の法則としてあり得ない0で構成された別位相に近い場所へ意識の本体を補填することが可能な根源生命であり、例えるならば型月的な『英霊』とか、ウチで言う処の『造物主』、またはぬら孫の『羽衣狐』とかと同レベルの存在性を備えたモノだ。

だから、その身体は完全に彼女のモノであると同時に、この世に女子として生を受けた人としてのモノでもある。

但し、概念的な不滅性と長期的な老化遅延を兼ね備えた、という割といるんな人が羨みそうな不老不死系スペックという付加価値も併せ持つが。

あ、此れだと教祖に祀り上げられても可笑しくねえな。  
むしろ納得だわ。

「其れより似合ってた？」

「似合わないから止めなさい」

「ん、ではソラに見繕ってもらうことにする」

女の子なんだから腹を冷やすような恰好はお兄さん認めないなあ。  
そんなことを思いつつやんわり止めれば、明後日な答えが返される。

苦学生だと言っておるだろうが。見るけどよ。

「お前の歯ブラシどれだっけ」

「ピンクの」

「3本くらいあるんだけど……」

「そこの赤い線が2本入ってるやつだよ」

「ああ、此れか」

と、洗面台上の鏡台から目当てのモノを探し当てて、オーフィスへ  
渡し。

途中に挟まったオーフィスとは違う声の主が、鏡に映っていること  
に気づいて振り向く。

内跳ねボブカットのスレンダーなタンクトップ少女が、ふわっとし  
た調子で其処に居た。

「羽衣ちゃんか。おはよ」

「おはよー烏丸さん。オーフィスちゃんもおはよー」

「ん、おはよー」

後ろ手から伸ばされるそれは開けたままの鏡台から自分の目当て  
を俺の肩に若干の体重を乗せて爪先立ちでひよいと取り出し、並んで

歯を磨く体制へと連なる。

大家さんちの一人娘は確か中学生だったはずだが、自部屋の居候宜しく此処の若い女子らは、どうにも距離感に危機意識を感じていない様子で不安にさせられてしまう。

「あつ、忘れてた」

「あん？」

「昨夜はお楽しみでしたねっ」

……やっぱ昨今の女子貞操観念可笑しくね？ 昨夜はアーシア先輩に詰め寄られたけど、この娘たちを見てると彼女の方が稀有な例だつて思うのも無理ないと思うわあ。あと姫島先輩。

「つーか、聴こえてた？」

「聞こえはしなかったけど、2人が朝一緒にいるしそうなのかなー、つて。前にも魅衣ちゃんから話聞いたことあるし、あと匂いが一緒だよ？」

「このシーツ、ソラの」

誇らしげにナニを語っているのオーフィスさんや。

つうか、女子は其処まで鼻が利くのか……。

つまり、今の俺は乳臭い低学年婦女子のニホイを纏わりつかせている変態、と……。

「……羽衣ちゃん、内風呂使わせてくれない？ 後生だから」

「特例認めちゃうと他の人に示しがつかないからねー。っていうか烏丸さんに使われるのちよつとヤダ」

嫌いか。俺の事何気に嫌いかイマドキJC。

……この時間でやってる風呂屋って……、俺、ラブホしか知らねーや……。

あ、此れ嫌われても文句言えねえ。

「……仕方ない、早めに行って学校のを借りよう」

「烏丸さんの通っている高校って駒王だったっけ。そう言えば、前は女子校だったんだよね」

「今その情報出す必要がある？」

(元)女子校で使用されているシャワールームで身体を流す、って言葉にするとホント酷い置換だよ。

羽衣ちゃんに関わると、どんどん俺が変態みたいな扱いに変わって逝くような気がする風潮エ……。

錯覚だと思いたい。

▽  
▽  
▽

「それではあ！ よろしくお願いしまあす!!」

「す、すっごい気合入ってるわね……」

朝一番で部室にて、リアス部長に礼をすればやや引かれた様子で対面した俺がいた。

気合も入るのも無理も無いというモノで、そうなった経緯は部長に約束を果たしてもらおう為の早起きだ。

兵藤一誠16歳！ 久方振りにご対面させていただきますツツツ  
!!!

それというのも、昨夜の事件に事は起因する。

フリードをなんとか捕縛した俺たちの前に現れた、バルパーとかいうマッドな爺さんとコカビエルという強者の一角。

フリードが再び寝返ることは無かったから良いモノの、アイツらはフリードが使っていた統合された聖剣を再び奪い返し、全ての仕上げを俺たちの学園で執り行おうと宣戦布告して去って行ったのだ。

聖剣の奪取とバルパーの捕縛の為に、聖剣使い組と一時的に手を汲

んだ俺たち。

朱乃さんや小猫ちゃん、そしてアーシアとは連絡は付かなかったので、万全とは言い難いメンバーで学園へと乗り込んだ。

其処で対峙したのは『地獄の番犬』と名高い『ケルベロス』。

巨大で暴虐的なそいつを何とか討伐した俺たちに知らされる、『神の不在』という真実。

その隙を突き、イリナとゼノヴィアは使っていた聖剣を奪い取られ、其れも総てバルパーの実験へと姿を変えてしまった。

聖剣使いの人口因子、とかいうモノを取り込んだバルパーは3メートル近くにまで筋肉が膨れ上がり、ケルベロスよりもずっと恐ろしい雰囲気を纏っていた。

此処で大事なのは、その強大な敵と対峙する際、俺が部長に約束を取り付けたことであるッ！

『部長、此処を乗り切れたら、俺にもう一度……、——部長のおっぱいを拝ませてくれませんか……ッ!?!』

——モチベーションって、大事だよな！

部長も緊張していたらしく、俺の言葉に破顔して了承してくれた。

つまり、あの事態を乗り越えたのは全て、部長の“生乳”を再び戴くためにバイタリティがフル喚起した結果だったのだよッツツ!!!

……いや、実際はそんな俺の隠された真の力が解放されたことなんて微塵も無くて、途中合流した烏丸に全部持っていかれたんですけどね……?!

でも、約束は約束だ！

勝てたら、じゃなくて、乗り切れたら、と言っておいて正解だったぜっ！

そんなわけで俺は今極上の笑顔で、上着をすすると恥じらいつつ脱ぎ捨てる部長のおっぱい様をガン見出来ているのである。

恥ずかしがるとか超珍しいっすね、普段部室備え付けのシャワールームで男子なんて意にも介さず身を清めているお方が。



——だがそれがイイツ!

「あ、あんまり凝視するのはどうかと思うわよ?」

「いえ! 初邂逅のあの日以来の久方振りのおっぱいですから! 見逃す方が無礼に当たりますツ!」

「そ、そう言うモノなのかしら……?」

そう言うモノなんですツ! (断言)

そんな会話のされる中、部長はシャツも脱ぎ、髪色に良く映えた赤いレースのブラに包まれた、極上の双丘を露わにする。

大きさは申し分なく、かつて拝ませてもらったあの日より何一つ劣ることのない、実に形の宜しい美しい二つ島が頭角を抜きん出て来ているのである。

その様はまさに、元旦に輝く初日の出のように神々しい。

これはやはり、全貌を拝みたいものですなあ……。

「……これも脱がなきや、ダメかしら……?」

「駄目っす!!!」

自身のブラを摘まんで問う部長へ、全力で応える!

それを脱がないなんて有りえない!!!

「い、イツセー、鼻息が荒いわよ?」

「仕方ないんですっ! 部長のおっぱいは興奮するのが世界の真理ですからっ!」

むふう! と言い聞かせるためにも断言する!

お宝は拝見してこそお宝です! それがわからないなんてこれだから女子はっ!

そうする俺の熱意が伝わったのか、部長は静かにため息をつくど、後ろ手に動き出す。

そうして待つこと、ほんの数秒だが、その待機時間はまるで何時間も経っているかのような、そんな錯覚を覚えたのである。

——ふるんつ、と支えが無くなったことにより、重力に沿って弛むはずのそれは、むしろ解放されたことに歓びを感じるように小さく跳ねてその存在を堂々と晒す。

大きく、まあるく、美しい、部長のおっぱいが、——ご降臨なされた……ッ!!!

「——う、おおおおおおおおおおおおおおおおツツツツ!!!」  
「……………ええー……」

部長はそんな俺に困惑しているようであつたが、その時の俺はそんなことは微塵も気にならなかつた。

「ありがとうございますっ！　ありがとうございますっ！　ありがとうございますっ！　ありがとうございますっ!!」

麗しき女体へ感謝の三礼ッ！

グラビアアイドルみたいなスタイルに一般的女子とは一線を画す特大おっぱい！　白くてまあるくて先端のぽっちはほんのりピンク色なイヤラシっぱいが、下手なAV女優をも凌駕する魅力と色気を全力でアピールしているぜっ！

「ぶ、ぶちようつ、さ、触つてもいいですかっ？　いいですよねっ？」  
「え、っ、み、見るだけって……」

「これを見せられてそれだけなんて健全な男子には生殺しもいいところっす！　部長はそんな酷い真似をするご主人様だったんですかッ!」

「う……、そ、そんなつもりはないけど……、でも……、」

此処で躊躇うなっ！　畳み掛けるんだ全力を出せ俺えっ!!!

「お願いしますッ！ ほんのひと触りひと揉みで問題無いんですッ！ 息子が病気なんですッ！ 触るだけでも完治に導けるのがおっぱいの魅力なんですッ！」

「あなた高校生でしょ……」

「比喻表現ですッッッ!!」

震える声で言い訳する部長。

俺は俺の全力を見せつけるためにも、必死で頭を下げた。

無論、その視点は部長のおっぱいへと釘付けのままにだが。

「……わ、わかったわよ、優しく、しなさいね……?」

「ッ！ ありがとうございますっ！」

「ひゃんっ!? ちよっ、待っ!?!」

恥ずかしそうに顔を背けるリアス部長の快諾の声と同時に、俺は部長のおっぱいへと全力ダイブ！

覆い被さるようにして、ふつかふかなふたつのふくらみへと両手を伸ばして驚掴みにさせてもらった！

「ちよっ、んっ、痛っ」

「うほおおおおお！ すげえっ！ なんだこの揉み応え堪んねえっ

！」

「おちっ、落ち着いてイッセーっ、んっ、やあっ！」

もみもみもみもみと連続握撃っ！

もう離さねえっ！ この爆乳は俺のモノだあッ!!

あそーれ、もみもみもみもみもーみもみっ、とくりやあ！

「……あー、通報した方が、いいっすか？」

もみも……………ええ？

「へぶうつ!？」

「つて、かつ、烏丸くんっ!? なんでそこに、つていうかなんで全裸っ!? ちょよ、ち、違うのっこれはっ!」

「あ、いえ、お2人のご関係とか特に口出しする気は無いんですけど、兵藤先輩の顔つきがなんかもう完全に強姦魔のそれと同じだったんで、つい声を。お邪魔ならスンマセン。あとシャワー借りてました」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜっ。

慌てた部長に顔面パンチで押し退けられてソファから転げ落とされたと思ったら、部室備え付けのシャワールームから全裸で登場した烏丸に、おっぱい両腕で隠して必死で言い訳をする部長が其処に居たんだ。

烏丸は烏丸でマイペースなままに、のんびりとシャワールーム外横にあるタオルで身体を拭いている。

「ていうか誰が強姦魔だコラっ! 合意の上だわあっ!」

▽  
▽  
▽

「イテテ……、くそ、良い処だったのに邪魔しやがって……」

「先輩、男の子だし『忍法つばめ返しっ!びっしいー!』つて叫びながら谷間にダイブすることにも理解はありますけど、流石に無理矢理は駄目っすよ」

「そんな真似しとらんわッ!? ていうか無理矢理でもないわッ! 合意の上だわッ!」

大事なことなんで2回目言いました、つてことですねわかります。部室から退室する途中、こちらのボケに対して漫画みたいに腫れた

頬をさすりつつツッコミで返す兵藤先輩。

大方、懸想としているグレモリー先輩の生乳の感触に我を忘れたとか、そんな理由なのだろう。

その感触でも思い出しているのか、でれえつと蕩けたヌケサク先生みたいな目で笑みを浮かべているのが実にキモイ。

「その顔で言っても説得力ないです」

「うっ、うるせえっ」

「駄目っすよ、女の子の肌は敏感でデリケートなんですから。扱うときは爪を切って、豆腐を扱うみたいに優しく愛撫しないと」

「と、豆腐か……。つか、烏丸ってひよっとして経験あるの……。？」

「まあ、そこそこ」

ちなみにグレモリー先輩はというと、兵藤先輩の最後の台詞に右ストレートを繰り返しつつ「違うのぉー！」と叫びながら俺たちより先に部屋を脱兎の如く逃げ出していた。

またもや顔面パンチであった。

其処で授業も始まるというので戻ることにしたのだが、タイミングが合ってしまい同時に出た俺たちだ。

関係ないけど、必死で胸を隠そうとしていた先輩の腕の中で変形するほどの質量を伴った乳、というのは中々拝見し得ない光景で、正直眼福でもあった。

乳だけならばゆるいやアキラたんにも勝てるレベル。

グレイフィアさんも凄かったけど、同年代であそこまで言うのは……。この世界の女子、成長著しすぎねえ？ 真倉翔の漫画かよ。

そして何故か、再びいやらしい笑みをにやにやと浮かべる兵藤先輩。

こっちは妄想著しい男子ですね。

「……。なんでまた緩んでるんすか。そんなツラだとまた通報されま  
すよ」

「またってなんだ!? 何度も通報受けるようなことをやっただつもりはねえよ!?!」

「本当に?」

「ほん、とうに……」

——え? されて、ないよね……?」

……勢いで応えたが、日頃の行いから絶対とは言い切れず言葉が尻すぼみ目線が伏せられたとか……。

そんな才チであるのを期待する。

ガチで通報経験済みな先輩とかだったら、目も当てられない。

「そだ、お前には一応聞いておきたいことがあつたんだ」

「なんすか?」

会話を切り替える腹積もりなのだろうか。

しかし、そんな意図は特に見出せない儘に、話を切り出す兵藤先輩。経験人数は二桁ですが?」

「イリナとゼノヴィアだよ。帰るときお前のことを聞きたそうにしていたんだけど、知り合いだつたりするの?」

「……帰つた?」

違う話だつた。

そらくんてば、勘違い☆。

そんな先輩が切り出したのは、昨夜俺が帰つた後の話。

白龍皇を名乗る白い鎧の何者かが半死半生のココビエルを引き取つて行つたのだという。

聖剣使い組とか呼ばれている女子（要するにゼノちゃんにイリナちゃん、だつたらしい。驚愕）はというとバルパーの爺とフリード何某を教会本部へ移送する必要が出て来ていたとか。

まあ、本部とか銘打っているんだから国内じゃなくて外国だよな。

バチカンとかかな？ 懐かしいなあ。前の世界でも『キルシエ』とかいう異形対策秘密結社に超りんが絡まれていたつけ。……あれ？ いたつけ……？ なんだろう、微妙に記憶に齟齬が……？

俺の記憶の齟齬はさておき、兵藤先輩の話は続く。

その時に俺がやったジンキとかいうモノの話を聞きたいから、と近いうちに魔王がやってくるらしい。

ジンキってナニ？ 寝取られ凌辱アリアリのロボット漫画？

更に、聖剣使い組から教会へも話が逝くのを覚悟しておくように、と有難迷惑な忠告まで貰ってしまう。

「統合されたアルティメットミクスムエクスカリバーゴッドコンバートを折ったんだから、それくらいの報告が行くのはある意味当然なんじゃねーの？」

「ナニソノ香ばしい厨ニネーム、心がwkwkする」

アルティメットミクスムエクスカリバーゴッドコンバート、ね。そら、覚えた。

「で、だ。俺が聞きたいつつうか、お願いしたいことがあるんだよ」

「？ はあ、なんすか？」

向き直ると、兵藤先輩は改めて頭を下げて、声を張った。

「頼む烏丸っ、俺を強くしてくれっ！」

「いやっす」

とりあえず、即答しておいた。

「エロいモノは常時あっても判断に困る」

「なあ、兵藤先輩に鍛えて欲しい、とか頼まれたんだけど、お前なんか言っただ？」

「……詳しくは教えてませんけど」

昼休み。

同じ保健委員として連れ立って歩く私に、烏丸くんは思い出したように言葉を投げた。

静寂を望む小猫ちゃんはいつものキリツとした表情を崩さずに、彼の言わんとするところを暗に把握するのである（キリツ）。

「……以前に私が活躍したのも皆さんとの修行の一日後の急速な成長ですし、烏丸くんの世話になったことは隠しようもないままに知れ渡っていますし、コカビエルを単騎で討伐したことからも実力を認められたからお願いされたのでは？」

「奥さんのことは」

「一切暴露していません」

するはずがないでしょう。

「ふーん。てことは、純粹に強くなりたいたいか、そんな理由かね。まあ聞く気はないけどな」

「私に言われても困ります」

「同じ部活だろ？ 言っといってくれよ」

「困りましたね」

ノーと言える小猫ちゃん。それが私。

同じ部活でなければ変態先輩へ橋渡しする義理も無いので、一々私の魅力溢れるバスツ<sup>bust</sup>へと視線を向けるような男とは要件も無しに同



席するのも中々嫌なのです。

それもこれも私（の胸）が魅力的過ぎる所為ですね。

つらいわー、魅力あふれるマスコットキャラって男の目線集め過ぎてつらいわー。

……自分で言つてて情けなくなってきた。くそそう。

「というか、前にも言ったけどお前らなんでそんな実力勝負（物理）思考なわけ？ 貴族社会って聞いた覚えがあるんだが、悪魔って」

「え……。……なんででしょう？」

「おこ？」

確かに云われてみれば、人間社会に准ずれば貴族階級というのは要するに支配と政治の社会。

支配に実力が要るのは確かだけど、政治というのは臣民の生活を安定させて保証し行く末を補う、という側面がある。

領地経営を武力で以ての暴動鎮圧のみで治められるほど脳筋社会でも無いくらいには、臣民の識字率や学習能力は中世とはまた違う。

そもそも、貴族社会である必要性とは？

格差があつても才がある者が上へと登れる、ということは下剋上等一揆上等とも取れる有り様だろうし。

……私が今より小さな頃は、こんな思考に至ることも恐ろしい格差社会であつたはず。

これが改定されている現状は、果たして本当に正しいのか。

……なんだか思考そのものに薄ら寒いモノを挟まれたような寒気が。

そう思うのは、私自身が魔王の妹様より庇護を戴いている所為だろうか？

「まあ詳しいところはどうでもいいや。俺、関係ないし」

「其処で放り投げないでください」

私のこの寒気を解消してくれなきゃホント困る！

そんな私たちがのほほんと校内を歩いているのは、偏に保健委員としての要件確認の為である。

昼休みに呼び出しがあった、ということ私を私が伝え忘れていたのが原因（という建前で）。

そんな烏丸くんは、自分が保健委員であった、という事実には驚愕していた。計画通り（ニヤリ）。

「というか、ホント俺いつの間に委員に含まれてた？ 最近なんかキンクリが多すぎて場面飛び飛びで付いていけてねえよ。ディアブロエ……」

「わけのわからないことを云わないでください」  
「軽口すら通じない……くそう……」

歯噛みする烏丸くん。可愛いなあ。

そんなこんなで、保健室。

「すいませーん、烏丸と塔城です遅れましたー」

「遅れてはいないわよ。いらっしやい、烏丸くん」

——そう出迎えてくれたのは、我らが主リアス・グレモリー。

珍しく啞然とする烏丸くんを部屋の中へと押し入れて、私は入口の鍵を閉めた。

1名様ご案内ーい、にえーい！

「……謀ったな塔城……!?!」

▽  
▽  
▽

「まず、昨日はありがとう。貴方が居てくれたおかげで私たちへの被害も特になく、大まかな事態を恙無く治めることが出来たわ。そこ

だけはお礼を言わせてほしいの」

グレモリー先輩と顔を合わすと、毎回こんな話ばかりだなあ。

思考を明後日へと逸らしつつ、彼女がそれだけで俺を呼びつける筈がない、と確信している。

彼女らしかまだ知らないが、悪魔というモノは割と無駄に高潔で、そして欲望に忠実だ。

「そこで、貴方には一度キツチリお礼を、というか、望みを叶えてあげるわ。何でも言ってみて。私のこの身体を欲しがっても、欲しい儘に従えることも許せるわよ？」

真つ先に己を差し出す辺り、価値と言うモノを把握している様に聴こえる。

だがそれは彼女らの社会で形成された価値観に基づく基準であつて、俺の中ではそうそう高価というわけでもない。

そこを履き違えているから、こんな無駄に滑稽な場面が出来上がるわけだが、それより何より、気になることがあつて塔城へと視線を向けた。

——言つてないんすか？

「……もう、女の子が自分から好きにしていって言ってるんだから、そこで他の女の子を見るなんて真似しないで」

拗ねたように言葉を続け、しな垂れかかる彼女の体重に甘い吐息が鼻腔を擦る。

今更だが、今の体勢はベッドの上で隣同士に座り肩口へと顎を乗せるように寄ってくるグレモリー先輩、という構図。

彼女の仕草も相俟って、なんだか『そういうお店』で酒を召している気分である。

塔城は本日待機令でも下されたのか、部屋の入り口ですまし顔だ。

……アーシアのことは部長であり主であるこの人に、未だ通達せず、つてこと？ それ、不敬に当たらんかね？

「とは云われましても。俺、先輩に要求なんて別にないですけど」「なんでもいいのよ？ それこそ、今朝イツセーがしていたみたいにちよつと乱暴に、つていう要求でも聞いてあげるくらいの度量、当然あるのだし」

そこで他の男の名前を出す時点でキャバクラ系 play は失敗だと思われるが。

つて、そういう趣旨とは違うのか。

悪魔つて口走つてるからなあ、性に関してはやはり奔放な気配が微塵も隠れねえ。

というか、俺との距離を縮めて自分らに有利な立場へ追い込もう、つていう懸念が裏側にありそうで。

彼女本人はそれを微塵も抱いてないけど、彼女で最大でもない組織の総意つてやつが確実に潜んでいるのだろうし。

「——無いつすね」

「むう……」

だからこそ拒否する俺に、剥れた顔で不満を露わにするグレモリー先輩。

くそ、ちよつと可愛いじゃねえか。

「だったら、——わ、私の眷属にならない？」

「おいちよつと待てこら糞アマ」

思わず口汚い言葉が飛び出すのも仕方のないことだと思ふんだ。

当然そんな俺の豹変に怯えた、というか引いた態度で顔を青褪めさせている。

これご褒美云々以前に説教入れるべきじゃねえの？

「——突然失礼。しかし、先輩？ 其処で部下に、というのは些か乱暴な浅慮だと思われませんが、何故その思考に至ったのか、問い質しても構わないか構わないよな」

質問では無く、断定。

コクコクと頷く彼女に、一つ一つ確認を。

「え、と。お兄様に、現魔王のサーゼクス・ルシファーに今回のことは通達済みなのよ。その上で、貴方という強者がフリーで居るのは、他の貴族が手を出す口実になるから、保護をした方が良いって……」  
「……悪魔社会、ってそこまで世界へ影響ある代物なんですか？  
又聞きですけど、弱点が多いのによくもまあ繁栄できてますね」

光に弱い、って聞いた時には惨酷王をアジアへ渡したことは間違  
いだったんじやないか？って一瞬頭を過ぎったもの。

自滅の可能性がある護身具とか、冗談じゃなーいわようー、って感  
じで。

「それだけ人の欲望が強い、ということね。悪魔って、見た目が良い  
のも大勢いるから、それだけで擁護する人種だっていくらでも出てく  
るわ」

「三竦み以外の陣営からしたら『黒いアレ』的な立場の癖して……」  
「ちよつと烏丸くん辛辣過ぎない？」

思わず本音が漏れた。

しかし実際弱点だらけなのだし、神秘が受肉してるこの世界線じゃ  
間違いなく立場上最弱の陣営が悪魔だ。

種族的な問題、とでも云うべきか。

長く生きている筈なのに、判り易すぎる弱点が克服できてない時点

で良くここまで繁栄で来たなあ、と。

聖書だと創造主の手から零れ墮天したのが大本らしいのだが、それだけで此処まで弱体化するとかまず無いはず。

……これ、多分『件の書物』は充てにならん世界だな。

そもそも堕ちた天使である墮天使と同一と見ていいはずなのに敵対しているしな。

根本的に何か碌でもない部分がズレてる。そんな気がする。

「ともかく、そんな強力な実力者の癖して何の庇護も受けてないなんて、無防備にもほどがあると思うのよ私も。だからおねーさんがご褒美として飼ってあげようかなあ、って」

「人権問題についてちよつと話し合いまししょうか。とりあえず拳で」

「ゴメンナサイ」

飼育発言飛び出した時点で「とりあえず殴ろう」の体勢に、しかしそこは茶目つ気であつたらしい。

むぎゆう、と振り翳そうとした腕を挟み込む乳の圧迫感が既にあつた。

……謝罪は言葉だけか！気持ちイイから許すけど。

つうか、制服の上からわかるって凄いな。

此れは兵藤先輩も強姦魔になるのも納得の魅力――、

「許してにゃん♪」

「オラア！」

「ひゃうんっ!？」

一言で台無しだよ！

イラッとしたから空いてる手で片乳を鷲掴んで挟まった腕を脱出

！

……うわ、吸い付き凄い。

「んっ、か、らすま、くん、あっ、ふっ、すご、おいつ、ふあんっ、やあんっ」

掌に収まった服越しでも主張する乳肉の弾力が、自然と揉むことを要求するようにたふんと震えている。

柔らかさは何気に今迄でも最上級で、片方だけなのにしっかりとした重量を期待させる。

そして、揉むごとに響く敏感な声音。

まるで処女みみたいな嬌声を上げる先輩に、気づけば雄としての本能を刺激されている自分が居た。

流石悪魔というべきか。

男を魅了する術はしつかり備えているのだろう。

滾るわあ……！

「………ごほん」

小さな咳払いが聴こえたが、気にせず揉む。

グレモリー先輩と言えば以前に仕掛けた呪紋が気にかかるが、根本的に俺は呪いの類を無効化できる障壁をオートで発動可能なわけだし、そもそもがこの先輩の許可を事前に得て触れているのだから心配は無用。

脱出した手も添え直し、両手で両乳へと手を掛ける。

過重表現な気もするが、伝わる感触は期待以上であった。

「ひうっ!? んっ、ひゃあっ、はっ、あはあんっ！ なにこれえ、す

ごいっつ」

「んー、ごほんっごほんげっほん！」

「………なんだよ塔城」

物言いたげな咳払いがすぐ背後に控えて来たので、ついそちらへと

視線を向ける。  
手は止めない。

「あっあっあっ」

「止めなさい。イチャつかせるために呼んだわけじゃないんですよ」

「お前のご主人様が許可したんだからいいんじゃないの？」

無言で睨まれた。

「どうか、この目は『アジア先輩の事暴露すつぞオラ』って脅迫してる目だ。」

俺としては別段何時バラされようとも気にはしないが、彼女の立場的に無駄に荒波立てられるのも問題なのだろう。

だからこそ、姫島先輩も塔城も、彼女のことを他へと漏らしたりはしないのかもしれないし。

となると、やはり俺個人の理屈でバラすのも得策とは言えない。

「はあ、はあ、はあ……！」

呼吸も荒く、俺から解放されたグレモリー先輩がぐつたりと身体を預けるのを尻目に、塔城は背中へと。

「ペたん」と擬音が聴こえるくらい、俺に引っ付いている彼女が其処に居たが、

「……」

「……」

悲しいことに、女子にくつつかれていたというのに魅力が微塵も湧かない。

ふくらみは、なかった。



「なんか言つてください……」

「……お前ホントに同年代？」

「ぶち殺しますよ」

怒られた。

理不尽だと思えます。

▽  
▽  
▽

「し、失礼、取り乱したわね……」

「ホントだよ」

「暴走したあなたが云う事では……」

塔城、うっさい。

「それで、どうかしら？ 眷属になる気はない？ 悪魔になれば寿命だつて延びるし、欲しいモノを欲しい儘に出来るわよ」

「なりませんよ。寿命云々は元より興味もないし、そもそもわざわざ自分から弱点増やそう、なんて酔狂は持ち合わせてません。大体、ホントに欲しい儘に出来るんだつたら今頃本気で悪魔社会が天下取ってます」

でも実際は、人間の望みを叶えるために寄生しつつある下請け業が盛んな異種族。

はい、ロンパ。

「そもそも部長、烏丸くんを転生可能な悪魔の駒なんて、余ってるんですか？」

「小猫はどっちの味方よ……」

人間を悪魔へと転生させる、要するに眷属化させる手続きに必要な

のが『イービル・ピース悪魔の駒』と呼ばれるマジックアイテムらしく詳しくはググレカス。

多分アレだ。モザイクオーガン人為変態に必要な薬とかと同種なんだろう、きつとどちらにしろ、おとといきやがれ!

「むうー、それじゃあ、せめてお願いしたいことがあるのだけど……」

「先輩、当初の目的と立場が逆です」

むくれて言い募る、俺との接点を喪失しないようにと必死にも見える。

しかしてその実態は、男女の関係にリーチが掛かったのを寸止めされたことで不完全燃焼な情欲の捌け口としてのストレス発散……違うか? 違うか。……違うかな?

「烏丸くんの強さに憧れたみたいで、うちの子たちを鍛えて欲しいのよ。小猫を一日でライザーにも勝てるようにしたのだし、余裕を持てばもっと強くできるんじゃないかしら? 当然、相応の報酬は支払うけど」

「だからお願いする立場じゃねーでしょうよ。お断りします」

そもそも、鍛えるとしたらウチの『倉』を開放する必要性出てくるでしょうよ。

そしたらウチの奥さんとも邂逅させることになるやも知れんし。

……強姦魔先輩を遭わせるとか、ガチで御免蒙る。

というか、話がループしてないか、今回?

とりあえず、おとといきやがれ! (二度目。

「そのとき、歯車が廻り出していた……！」

あ、さて。

炉に焚べたるはかつて見せて貰ったヒイロカネの標本を基に、おっかなびつくり何とか練造した劣化ヒイロカネ云々十何貫。

先日『倉』から発掘することに成功した分はこれで使い切ってしまったのだが、死蔵させていても遣い道の無い合成金属だ。試金石として、刀剣二差しくらいなら充分に役を果たしてくれる。

精錬は完全には往かず、目玉であるはずの常温超伝導も再現出来なかった。精々微低温伝導くらいが関の山で、エネルギーの伝達効率是最良であっても極上とはいかない。此れでは魔法媒体としては過充分であつても、魔剣聖剣の類として造ると下地としてどうしたって伝説上からは見劣りしてしまう。かてて加えて、件の伝承刀剣類に見られる概念附加を如何無く発揮可能とは到底届かず、術式内包というエンチャント系を受け入れ易くするくらいの性質変化しか附加しきれなかった。これ以上だと存在周波数の関係上、人に換算すれば良く見繕って8世代程度で自壊するのも見通せられる。本物ならば都合30世紀に渡って存在し続けられるくらいの代物になるはずなのが。

……今出来る己の上限が此れなのだという戒めにもなる。人は足ることを知らぬし、求め出したらキリがない、今在る手札で最上を。

「ゴヴァノン・フラウ・マカ・ナイサ・フォマルハウト」

ボヒユウツ、と用意したカンテラから火が吹き出しし炉の中へ。

こちららも、標本を見せて貰った際の某魔女さんの『眩桃館』とかいうお宅から譲り受けた神火を灯せる代物なのだが、同じモノを造ろうとしても上手くはいかない。術式付与で合成しきれない。魔法使いじゃ手も足も出ねえのも納得の仕様だった。

火星へ赴く以前に伝手で渡されたマジックアイテムとかを軽く超

越する概念魔具を選別に貰ったこともあったが、魔女つてのはどうしてドイツもコイツも規格外な技術水準を見せつけてくれるのか。魔術とか錬金とかで説明つかねえ、もっと得体の知れない法則に則ったオーバースケールの何かだ。ホントはあっちが転生者だって云われても納得のレベル。まあ年の功という隔たりがある以上は、どうしたって突破しきれないモノなのだろう。越えられない壁が分厚いわあ。

同じ屋根の下に鍛冶場が在る、というのも変な気分だが、借対として純米吟醸一本差し出したわけだし。

槌を振るう以上、腕前を出し惜しむのも失礼に値する。

少々邪道も良いところだが、好きに打たせて貰おう。と、貸して下さった筋骨隆々の爺様へと感謝の礼。

元は飛驒の山奥で一刀彫を嗜んでいた名人だったらしいのだが、木材のみで勝負する師匠と袂を分かち巡り巡ってこの土地へ、と色々と紆余曲折在ったらしき偉人に過去在りきな吞兵衛の爺様。

そういう異文録は一度コースアウトすると中々戻って来れないので、この辺りでカットである。

どちらにしろ貸家の一室に鍛冶場こさえている時点で変態であるし。

類が友をなんとやら。同じ屋根の下に何人の修羅が眠っているのやら。

神火に晒された金属塊が、見る間に融解して逝くのを直視で観察する。本音を言えばサンガラスでも掛けたいけれど、尸魂界の鍛冶師曰く火の温度が視れねえじゃねえかYOとのことなので肖ってみる。チョー眩しいYO。

しかして溶け出し鑄型へと流れる『それ』を見直し、確かに視界を遮るものは邪魔になると納得する。

今から此れに術式の付与も同時の行いながら、刀剣として然るべき形へと練磨するのだ。

特に刀なんかは形式そのものが日本人の偏執性をしつかりと顕にしている。ファンタジー系では鍛冶のスペシャリストであるドワー

フをして『打てない』と謂わしめたその複合性と練磨の果て。果たして俺の腕で何処まで再現を可能と成し得るのか。

『呪紋』を解放しコードを編み、打ち込む意気込みで槌を振り上げる。

集中し、先ずは、一刀――、

「願う、ことは、一つ――！」

▽  
▽  
▽

キングクリムゾン！ 結果だ、この世には結果だけが（ry。

兵藤先輩の強姦未遂事件より既に2週間が経過した。

その間に起こったことと言えば、オカルト部の面々が無駄に人を勧誘しようとしていたこと、あとはゼノちゃんイリナちゃんの両名が駒王へと転校してきたことだろうか。

お2人ともに、あの知能指数で上級生だったことに驚愕を隠せない俺である。

行きずりの関係であったことは公表していないご様子なお2人。

日本へ再来日したのは一週間前で、理由を問えばなんとも七面倒臭いモノをつらつらと語ってくれた。

曰く、『主の不在』とやらを認識した彼女らを教会側は正式なシスターとして取り扱うわけにいかないらしく、エクスカリバー（？）の回収と不良神父2名の捕縛を評価に入れるとしてもこのまま教会の膝元では扱いにも困るのだとか。

ならば、と『さらに上』とやらが下した主命は『外交官』であるという。

どうもこの町では以前から色々と見逃しようも無い事件ばかりが勃発しているらしく、教会側としても悪魔領でもない人の社会の一部を放置していたことには見過ごせない事態だとか。遅いわ。

更に言えば、今後この町で教会側にも関連のあるイベントが執り行われるので、その先駆けとして現地入植を済ませておいてほしい。

というのが彼女らの『上』からの言い分である。

キナ臭くは無いが、面倒臭いことこの上ない事態が進行しているのは確か。

しかし、その外交をこんな脳筋らに任せてしまつて本当に大丈夫なのかこの世界の宗教は。

そんな2人だが、オカ部とはまた別口で俺を誘惑してくる。

……いや、肉体的な意味では無く、宗教的な意味で。

がっかりだよ。思春期（もう思春期過ぎた気もするけど）男子の妄想を励起せずに宗教色が濃厚だよ。

一週間ばかりお断りの言葉だけで突き放してきたのに、一向にハニトラを敢行しようとしないうのはどうということだ。やる気あんのかお前ら！

『カラスマ、今ウチの傘下に下ればキミはかなり上位の、ひよつとすれば司祭、いや司教……ともすれば大司教の地位に就くことも可能かもしれない。それだけキミの成した実績は大きい。私たちと共に本山へと赴いてくれないか？』

『烏丸くんがいれば例え主が不在でも人々の平穏を守ることは不可能じゃないわ！ 私たちと一緒にカトリックへ転向しましょう！』

此れがこの一週間で行われた勧誘の実態（の一部）である。

興味ねえええ！ 可能じゃねえよ！ 位階を決めるのは上の人たちのコンクラーベで要するに投票だよ！ 無名の素人がいきなり現れて大司教とか素人ラノベでも有りえねえよ！

家やまにまでは押しかけて来ていないし、人目もあつてかハニトラ的な誘惑をしてこないのは、まあ学内の噂と注目の温床にはならなかったから見過みすごすとしてしよう。

だからといって宗教にただ勧誘されるって、なんか釈然としねえんだだけど!?

……まあ、俺の場合一度リミッターが外れたらいつ終わるか不明瞭、っていう前例があつたからな。

向こうとしても、一応はシスターで在る以上はアーシアみたいにい  
つでもおこみみたいな誘惑は禁則事項に値するのかもしれないし。

エロシスターはアーシアだけか。彼女が例外か。

……かといってがつつかれてもなあ。

そしてそんな彼女らは何故かどうにも仲が良くない。

2人が勧誘しているところへ、時折アーシアが弁当持ってやってき  
たりするのだが、そういう時は必ず口数が減る。

腫れ物に触るみたいに、こちらからもちよつと距離を置くのだ。

アーシアは笑顔で、何処か勝ち誇ったような様子で俺へと接近して  
くるのだが、それに対しての2人はやや渋い顔で距離を取るだけであ  
る。

お蔭で教室内はこの一週間妙に空気が悪い。

はい、俺の所為ですね。

……反省してるから男子の皆様、露骨に舌打ちとかヤメテ？ 泣く  
よ？

逆に女子が近づいてくるのは何故なんだ……、カラオケで一緒に  
なった前髪ぱつつかギヤル系おっぱいとかポニテバスケットとか。  
ゴシップとか大好きか、人の男女関係に起因するんじゃないかと穿つ  
た見方で傍で聞き耳立てるのが大好きなのか。畜生、ネタとか絶対提  
供しねえからな。ところでポニテじゃなくて良く見るとサイドテー  
ルっぽいな。サイテ？ 語呂悪いな、ポニテのままでもいいか。

無論、そんな諸々の女子交流の悪さとかを采配出来るスペックは俺  
にはない。

麻帆良？ あそこはノー天気な女子ばかりでイジメとかガチな対  
立とかは完全に無縁だったよ。

認識阻害の効能だったのかもねえ、外の社会に出たら逆に気疲れす  
るだろうねえ。

話が逸れたが、そんな采配が可能そうな人材を探して、行き付いた  
のが木場先輩だった。

「と、いうわけで、これをお納めください」

「う、うそ……っ?」

「……なんだ、これは……?」

差し出したのは、打ち据えた二振りの刀剣。

アーシアに以前渡した『惨酷王』と同じように、聖職者と云う事で聖別と祝福とをちよちよいとなど施しもした試供品だ。

木場先輩曰く、『聖剣を折っちゃったんだし、代わりの何かをお詫びに差し出せばどうかな?』そこを基点として、というかキミが起点となつてみんなを牽引できるようなれば仲良くできるんじゃないかな。頑張つてね!』との有り難いアドバイス。

さつすがイケメン、兵藤先輩とは踏んだ場数が違うね!

というか、あの先輩はどうにもアーシアとのことを察しているような気配がする。

人前じゃ一応「アーシア先輩」と呼ぶのだが、俺が唯一下の名で呼んでいることで距離感を理解させてしまったような。

尤も、それを応援されてしまったのだが。

アンタ兵藤先輩の親友と違うんですかい。親友と同棲してる女子とのことを他の男へ応援している節が見受けられるのは、果たしてなんなのか……。

話を戻そう。

「前に折っちゃまったじゃねーですか、そちらのエクスカリバー」

個人的には屑駄剣を塵ゴミに換えた程度の認識だが。

「これはその代わり、ということ、個人的に用意したんすよ。とりあえず二振り。刀と剣です」

尤も、本領で打ったとしても技術的にはまだまだ未熟、素材と術式を備えてなんとか形を保った『偽剣』としか呼べない試供品レベルの代物である。



仕方ねーですよ、武器とかを1から造ったの初めてだからね。やっぱ既に在る道具や素材を弄るのは違うわあ。

「銘は『偽剣・袖白雪』と『偽剣・天竺叢雲』。お2人へ譲りますんで、どっちでもお好きにお使いください」

あれ、なんか反応ねえな。

——あ、啞然としてる……。

▽  
▽  
▽

「こつ、こんな立派な聖剣渡して何を要求する気っ!? 身体!? 身体なの!? 私たちのことを忘れられなくてジャパニーズ袖の下つてこと!? で、でもこんな天使様の光臨をも凌駕するようなオーラを秘めたモノと釣り合うモノなんて本当に身体だけで足りるの……!?!? や、やはり当初の予定通りに私たちが揃って性奴隷になるしか……!?!?」

「おおおおお落ち落ちつ落ち着けイイイイイリリナ、そ、そんなことしても彼の負担にしかからないとじじえんにきめていたではにやいか。私たちがひきわたせるものなどないと前もつてわかかっていたことなのだし、求められれば差し出し出すのはと当然のことだだ。や、やはりここは、この剣をほ、ほほんぶへと渡して、しつかりと、彼についての再考をだなな……!」

「……あれ。要らんですしたら仕舞うけど、」

「要りますッ!!!」

カラスマに屋上へと呼び出されたと思ったら、なんか本当に現実かと正気を疑う様なとんでもないレベルの聖剣が飛び出してきたあ!?!

しかも二振り!? こんなモノ前にしたらエクスカリバーなんて確かにゴミだ!

佇むだけで、朝日がステンドグラスから差し込むような『教会の最

も美しい姿』が幻視されるほどの聖なるオーラを發揮している……つ  
！  
……それなのに、決して攻撃的では無い、ただ其処へあるがままに  
在る、……なんとという静謐さ。

拜むだけで天へと昇れそうな強大さと神秘を併せ持つのに、柄を握  
るだけで波立った心が凪いで往く……。

……恐ろしい。

此れは、只『魔』を滅するためだけの剣では居られない……。  
在れば、人の有り様すらも変貌させてしまうだろう。

そう、——まるで神へ至らせr

「ゼノヴィアスト………アップ!!!」

「——はっ!」

待て！ 今私は何を考えてた!?

「落ち着いてゼノヴィア！ こ、この剣はやばい！ 持つと心が呑  
まれるわよ!」

「あ、ああ、確かに恐ろしい……！ これだけの性質であるというの  
も領けるが、振るうだけの資格も必要と云う事だな……！ イリナは  
平気……イリナ?」

「——光が見える……!」

「戻ってこいイリナ!!」

クソツ!? 剣の性能が強大過ぎてエクスカリバー使いであるはず  
の私たちのキャパを軽く凌駕してる!

というか、此れは聖剣とかそういうレベルじゃないだろ!

最早『神代の剣』と見ても良い、所謂『神剣』という奴だ!

人の手には余りあり過ぎるツ!

「あー、そんなに力まんほうが良いんじゃないっすかね。所詮剣な

んだし、力抜いて気楽に振るってください」

「そんな風に考えられるか!!! これを握って出来る筈がないだろ!!!」

「くう………！ 鎮まって、私の新しい相棒………！ 今はまだ、斬るときじゃないの………！」

「……あれ、俺『村正』とか打ったんだっけ………？」

妙に気になることを呟くと、しようがないにやあ、と呟いて渡した剣をひよいひよいと回収するカラスマ………つて、おい。

「要するに、オーラをもう少し抑えられればええんですね？ 今ちよちよいと遣りますんで、しばしお待ちを」

「え、あ、はい」

「あ、ああ………」

本を開いて、呪文のようなモノを口ずさみつつ、剣へとそれぞれ何らかの術式を施してゆくカラスマ。

見る間に聖剣より齎されるオーラは減少してゆき………いや、アレは、封印………？

オーラを外へ逃がさないように、封印式の重ね掛けか………!?

「そいえばゼノちゃんは、つと失礼。ゼノ先輩は確か、デュランダルトかいうモノを扱っていたとか？ 木場先輩からの又聞きなんすけどね」

「え、あ、ああ。まあ、奪われた上に、キミに折られたがな………」

「え、ナニソレ知らねえ」

まあ、エクスカリバーの中に『破壊の』と間違われて統合されてしまったし、自覚されないのも当然のことだとは思うが。

それにしたって折るなよ、とは思う。

ところで、呼び方や口調が以前と違うのは、年功序列の精神なのだ

ろうか。

日本人は面倒臭いな。個人的にはもっとフランクでもイイのだが。

「話し戻しますけど、アレって決闘者の剣とかいう代物だとか。呪い持ってるのに聖剣とか、世の中は分からねえもんですなあ。対決者を勝たせる代わりに絶対に命を奪わなくちゃならないとか、使いにくいことこの上なかつたんじゃないっすか？」

「……待て、それは本当か？」

「え、知らんの？」

聖剣二振りとかラスマから距離を置きつつも、気になる話を世間話みたいに切り出された。

確かに、破壊のエクスカリバーが折られた代わりに、対コカビエルにとデュランダルを使った。

だが、所詮は未熟な腕前。

それを判っていたからこそ、前任者は私に引き渡す際に封印状態でデュランダルを継がせたのだろう。

実際、じゃじゃ馬で云う事を聞かない、一度振るえば破壊のエクスカリバーなんて物ともしない攻撃力を――、

……いや、待て。

云われてみれば、意思を持った剣なんて、確かに呪いみたいなモノではないか……？

そう考えると、確かにラスマの云う事も一理ある……。

……そんな扱えきれない代物、折られて正解であったか？

「――はい完成。偽剣・天竺叢雲 ver 2。丈夫で長持ち、攻撃力抜群。付与術式は切る時のみに発現するんで、発破くらいしか成りませんが」

ほん、と再び私の手へと戻る、アマノムラクモとかいう過剰な剣。先ほどよりもしつくりと手に馴染み、軽く振るってみれば判る程よ

い重量がその剣が持つ技量を決して遮っていないことをも実感できる。

その上で、私の振るえる限りの腕前に見合った威力を、最大限発揮できると振るうだけで理解できる……！

……やはり、彼は侮れない。是非とも、こちらの陣営に欲しい人材だ……！

「そしてこちらが偽剣・袖白雪。切り口から熱を奪い、対象を凍結させるつす。間違つて自分を切らない様に」

「あ、うん」

イリナも、刀の方を渡される。

私たち2人共、外交官という名目で日本へ再び派遣されたが、その実体の良い左遷ではないかと疑っている。

現に、悪魔の領内へと赴かせられるのに武器の一つも所持を許されていないかった。

こちらのグレモリーらは既に見知った顔だし、教会の陣営に進んで茶々を入れないような甘ちゃんでもある。

武器を持たないからと言って見逃されていた私たちだが、だからこそカラスマという彼女らでさえ抑えきれない特化戦力を籠絡するの  
に他の者では当て嵌まらないのだろう。

教会の本営はカラスマを軽視しすぎている。

エクスカリバーを折つてコカビエルを単騎で撃破し、更に謎の槍のような神器を扱う、等と伝えれば荒唐無稽と鼻で笑われるのがオチなのは判っていたが。

実際に命じられたわけではないが、自由にさせていい人材では無いことは確か。

そしてそれを手に入れられるためには、この身体すらもいつでも差し出せる。

そんな意気込みだつて視野に在るのだ。

他の者に任せるなどと、あつてはならない。

……別に、あの快感を味わう為とかいうシスターにあるまじき思惑で動いているわけでは無い。いや、シスターは既に辞めさせられたが……。アレ？ だったらイイのか……？

「さて。プレゼントする代わりに、ちよいとお願い事が」

——！ やはり来たか……！

いや、だがなんでも構わん。

このような稀代の名剣を施されたのならば、元騎士として応えぬわけにはいかない！

さあ、なんでも命じて見ろ！

イリナだって既にお預け喰らった雌犬みたいな目で待機しているぞ！

「アーシアと、仲良くできません？」

——……なんだと？

「何があつたか知らんけど、そこまで牙を剥くような関係で居られると普通に迷惑つす。郷に入つては郷に従つてくださいよ、此処は日本です」

「……むう、しかしなあ……」

唸る。悩む。そして受け入れられない、と言い淀む。

イリナも似たような心境なのだろう。私みたいに苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

アーシア・アルジェント。

堕ちた聖女。悪魔をも回復させる『奇跡』の持ち主で、現在は悪魔となつてグレモリーの眷属。

此処が悪魔の陣営で、グレモリーの領内であるから居るのは理解できてるが、やはり気に食わないモノは気に食わない。

しかし、カラスマは彼女のことを気にかけているし、彼女自身も何故かカラスマへと良く近づく。

……気づかれないようにこの剣で切り捨ててしまうか……？

「聞き入れられないというなら今渡したその剣、両方とも折ります」

「仕方ないな！ 仲良きことは美しきともいうしな！」

「そうね！ 平和が一番、ラブアンドピース！」

彼なら出来そうな気がする！

アレだけのオーラを一分も漏らさずに封印式を定着させた術師だ、エクスカリバー（笑）の二の舞になるのも簡単に予想がつく！

話が着いたと互いに認め合った処で、こちらからも切り出す。

「ところで、本当に教会陣営へと参入してくれまいか？ 今なら私たちが好きにしても構わないぞ？ まあ、所詮は一度味わい尽くされた中古の身だからな、云う程捧げられたモノでもないが……」

「——あ？ ひよつとしてハニトラで来なかつた理由ってそれ？」

自分で言うのもなんだが、教義の関係上『未通女』こそが『良きモノ』であるという教えが一般的だ。

散らされた私やイリナでは、俗に云う中古品と表現されても仕方のないわけだから、捧げたとしても袖にされるだろうとは思っていたから身を引いていたわけだが……。

——眉を顰めた様子で虚を突かれたような声を出したカラスマは、調子もそのままに言葉を続けた。

「若いし肉付きも良いし締まりが早々悪くなるようにも感じなかったから、一晩シタ程度で気にすることでもないと思うけどなあ」

「その言い草はどうなんだ……って、え？」

——今、なんと？

「ちよ、ちよつと烏丸くん？ 私たちもう初物じゃないけど、それでもいいの?」

「散らした相手に言う言葉でもないと思うんですが……」

イリナの問いにも、肯定し受け入れるかのような発言で、少なくとも否定的な意味合いは含まれてない様に思える。

……そうか、良かったのか……。

「ふ、ふふふ……」

思わず笑みも漏れる。

それはイリナも同じようで、嬉しそうに微笑みつつ股をもじもじと擦り合わせている。

そうか、相棒も我慢の限界だったか。

怪訝な顔なのはカラスマのみであった。

「カラスマ、剣の礼がしたいのだが、今夜は空いてるか?」

「あつ、私も私もつ！ おねーさんが教えてあ・げ・るっ♪」

「おい、イリナは云う程経験があるわけでもないだろ。私と同じような戦歴の癖して、横からしゃしゃり出てくるな」

「2人つきりなんて危ないわ！ 何時もの通り、ツーマンセルで事に臨みましょ相棒っ！」

まったく、仕方のない相棒だ。

「……いや、別に今は云う程やりたくもないっす」

「バカなツ!」「そんなあ!」

ひ、ひとをその気にさせといてえ!?

頼む！ セックスさせてくれカラスマ！ 何でもする！ 何でも



するからあつ!!

▽  
▽  
▽

「ところで、なんでそんなアーシアと仲悪かったんですか」

「いや、一応教義的な食い違いは初めにはあつたんだが、今では……  
なんか、勝ち誇った顔でキミと絡んでいるじゃないか？ それが如何  
にも自分が先を行ってます、みたいな感じだったのがまたイラツとさ  
せられてな……」

「ああ、まあ、お2人と似たような立場つすよ」

「そ、それは……足腰立たなくなるんじゃないの……？ ああ、彼  
女、中毒になつてたのね……納得だわ」

「なるほどな……。しかし、敬虔なシスターを3人も墮とすとか  
……どれだけ業が深いんだキミは……」

「誰が修道女フエチつすか」

「言つてない」

☆「決めたわ、お前ら今日から俺の性処理係りな」

「ところで悪魔くん、知ってるか？ このマンションは中々に高級志向のようだなあ、最上階には宿泊客プライベート専用の屋内プールまで用意してある。どうだ？ ひと泳ぎしていかないか？」

「夜中にオッサンとプライベートプールとか何の拷問っすか!? 絶対御免です！」

「残念だなあ、お前さんの実力を測っておきたかったんだが」

こここのところ呼ばれ続けているオッサンに今夜も御呼ばれしたイツセーですっ！

常連さんがご指名入るのは嬉しい話だけど、せめて美人なお姉さんとかが良かったぜ！ 支払いは良いけど、このオッサンの用事ってシヨボいのぼつかなんだもんよ！

——そんなシヨボいオッサン略してシヨボサンが、実は墮天使の総督だとわかるのは大体あと数分後の話。

先日は聖剣使いであった2人も眷属入りまで果たしたし、なんでも耳に馴染まない事態ばかりが集まってくるのやら。

相変わらず、俺の周りは騒動だらけだな！

▽  
▽  
▽

奥行きは8メートル弱、幅は3メートル届かない程度の適度な大きさのプールが目の前に在る。

四角い水箱でしかないのだが、それが『在る』場所が場所なので言う程の拙さを感じさせない高級感が垣間見える。

上は斜に張られたガラス張りの夜空で、横に目を向ければ若干遠くに駒王町の夜景が覗えた。

柵こそあれど、屋外へ出れば一望できるくらいに距離が開けた、ベランダと云うにも憚られる屋上庭園。

その中心に位置するこの部屋は温室プールになっており、本格的な『水泳』では無く『水遊び』を愉しむための水箱だ。またはサロンでも呼ぶべきか。

何処か適当に場所が取れる遊び場、と希望したところ、バイト先の常連さんからご紹介されたのがこのホテル最上階のプライベートプールであつたりする。

何者だ常連さん。名前はサクライ某と云うらしいが、孫娘がアイドルとして有名な財閥にそんな名が連ねてあつた気がする。気の所為か。偶然か。

そんな水場へ今夜誘つたのは、とりあえずアジア。

「あ、あのつ、どう、ですか……？」

「——ん、似合つてんね」

「え、えへへ……」

屋内を睥睨していると場違い感でも覚えているのかややおつかなびつくりな仕草で、しかし確りとレンタルのライトグリーンにラメの入ったビキニを着て参上仕つた、内股でもじもじとはにかむ金髪少女。可愛い。

グレモリー先輩や姫島先輩を筆頭に先日転校してきたゼノちゃんイリナちゃんとも比べれば胸部のポリウムはやや心許無いのだが、年相応の女子高生や塔城なんかと比較するならば充分以上に膨らんだ其処へ詰まつて居るモノは恐らく夢と希望だろう。今現在布の下からわずかばかりに食み出ているし、かつて手の平へ収めれば微かに溢れる乳肉がその存在感を興していたのだから、間違いはない。比較対象が絶望的？ そりやスマン。

数度ばかり全裸姿を見せている相手なので羞恥はそれ程覚えて無さそうにも見えるが、マイクロナなそれを着て参戦するという現状には別の期待感が見え隠れしている。

先ほどから垣間見せていられる『恥じらい』が特に。水泳が苦手だとのいう話を伺つたので指導入れてやろう、という『名目』で呼んだ

のだが、どう見ても『別の授業』を求めているんじゃないかって顔つきだ。

そもそも最初の名目があるのだから、学校指定のスクール水着でも用意してくれば宜しいモノを。

……まあ、この格好はこの格好で眼福なので否定する気はないが。しかし格好に場所柄も相俟ると、どうにもジュニアアイドルのイメージビデオを此れから撮影します、とでも言い換えられそうな現状だ。

特に彼女は小柄だから、脱いで寄せた時のボリュームを思い返すと完全にロリ豊乳というニツチな趣向へストライク……ああいや、今は言う程隙間でもないのか。

「じゃ、先ずはストレッチから」

「はいっ」

余計な思考だが強ち間違っても居ない推移とは一端おさらばの腹積もりで声を掛ければ、喜色張った声音で返事が返る。

だから期待する目をやめい。

▽  
▽  
▽

嬉し恥ずかし密着授業をKENZENに終えて、水箱に入っ手の手を引くバタ足作業。

姿勢を制御するために腹や胸へと手を廻しつつ、その度に嬉しそうに身を振らせる彼女へ、しかし俺はそれ以上へ進もうとはしない。

今はまだ、飽く迄も水泳の授業ですから（素っ惚け）。

「そういうえば、2人とは最近どう？ 眷属入りしたんだよな？」

「あ、はい。色々とお互いに、んっ、難儀なところもあるのですが、あつ、元々同じクラスですし、っ、みなさんと、仲良くしています、よっ?。」

「それはオカ研でも？」

「はい。あつ、あの、そらくん、んっ、もう、そろそろ……あんっ」

ばしやばしやと水音と一緒に互いの声が響く中、アーシアはこちらに身を預けつつ、潤んだ目で俺を見上げる。

まあ、そろそろいいだろうとは俺も思ってた。

「んじや、下脱いじやうか」

「えうっ、あの、」

「ほらほら、上も、早く」

「あ、……ん、はい」

水の中で彼女のセパレートな水着の下半分、その布の下へと手を潜り込ませ、尻肉を撫でながら徐々に摺り下げる。

抵抗もせず恥ずかしげにだが、着けていた上部分を支えている後ろ紐へと手を廻すアーシア。

少しもしないうちに彼女の着ていた水着は剥ぎ取られ、波間の無い水箱でぷかぷかと揺蕩う。

此れがガチのイメージビデオならば憤慨モノであろうか。詳しくは無いが。

透き通った水面越しに覗えるアーシアの裸身は身を覆うモノは何一つ付けておらず、そんな実はやはり恥ずかしいのかより一層俺へと近づいて抱き着くように身を寄せる。

晒された素肌は温水など何の抵抗も見せず、ぴたりと吸い付くように俺の胸板と密着する。

相性の良いことを判っている彼女は、気づいて我が儘に呟いた。

「そらくん、そらくんも、シタ、脱いでください。ね？　いいですよ  
ね？　今日はそういうつもりなんですよね？」

「まあ、慌てない慌てない。スル前に、ちよつと話があるんだけど」

何しろ前の会合ではお前要らね、って言ったのはこっちだ。

なのにアーシアは、どうしたって離れようとしないうし、昼休みなんかには弁当持って突貫までしてくる始末。

そういうのは兵藤先輩相手にやってあげればいいだろうに、いくつか覗いた処、兵藤先輩は先輩でグレモリー先輩狙いだらうとアーシアの中では決定されてしまっているらしい。

一つ屋根の下での自身を預かってくれている家族の下なので口にしづらいとは口遊んでいた覚えもあるにはあるが、直接聞かれない限りはギリギリまで回避を続けそうだという若干腹黒い面がうつすらとも覗える。

まあ女術宜しく俺が彼女を見受けする気は無いのだから、そんな状態で放逐されてそれを何とかしてくれるほどの度量の広さを及ぼせる誰かに巡り会えるまではそれもまた選択だろう。

それを浅ましいと思えども、しかし、俺もまた経験則上見限れるわけもない。むしろ共感すら覚えるし。

だが、それとこれとは別だ。

俺はこの先この世界から抜け出すためにこそ今を消費している。

その上でこの世界上での出会いなんぞは足枷にしかならないし、帰る時に連れてゆける保証もない。

ならば、と行きずりの関係で終わらせる気ではあったのだ。

帰らない、という選択は無い。

遺してきたモノは幾つもあるし、死別したのでもないそれを見限れるほど、俺の『執着』は軽い気はない。

なれば、仕方がないよね。

「アーシア。俺はお前を愛する気はないよ」

「……っ」

先ずは、言うっておかねばならないこと。

次いで、その上での事。

「それでも、身体だけの関係でもいいって言うなら幾らでもシテあげr」

「お願いしますっ!!」

「お、おう」

喰い気味に詰め寄られた。

ま、まあ、気持ちは絶対ではないし、何度かするうちに手放せなくなる気持ちを抱くようになるかもしれないし。

帰る気は絶対のつもりだけどな、やはり残してきたものがどうしたって不安要素煽るし。

「本当にいいのか？ 俺がしたいときにしたいだけする関係になるけど」

「だいつ、だいじょうぶ、です……っ！ 桐生さんが言っていました！ 女の子へ優しくエッチしてくれる男の子はめったにいないから、手放すのは無しだっ！」

誰だ、キリユウさん。

ある意味余計なアシストを決めてくれた何処かのどいつへと若干の胡乱さを覚えつつ、

「んじゃあ、とりあえずは今日もいっつかいめ」

「は、ひぎゅういんっ!?!」

じゅぷう、と回想の合間に準備していたイチモツが彼女の股間を貫いた。

じゅぶぶぶぐじゅにゅぶ、とほとんど一番奥までゆつつつくりと突き刺さったその感触に、か、は、は、は、はあっ……！ とアーシアは呼吸を漏らす。

俺へと掴み掛ったような体勢のまま、白目を剥きそうになるくらいに舌が飛び出るくらいに目と口とをかつ開いて、痛みとも快感とも覚

えれないであろうその衝撃にされるがままに、こっん、と一番奥までようやく届いてやつと口を閉じ、んっんう、と声音を絞る。

俺は彼女が水中へと落ちないように抱き締めて、その体重を支える姿勢でアーシアの頭を後ろから撫でつつ、彼女の唇へと舌を這わせた。

「んちゅ、はむ……ん」

「んむ、みゆ、ふみゆう、んあ……」

「ぷ、は……、はーい、お疲れさま」

「ふひゆい……、はひい……」

文句ひとつ言わず、というか、蕩けた目つきでされるがままのアーシアへと、もう一つのサプライズだ。

「ちなみにアーシア、お前のその役処ってお前だけのモノじゃないから」

「はー……はー……はー……………はい……？」

「沈黙長いな。まあ、そんな状態なら無理もないか」

「アーシア、次私たちの番だから、すぐに逝っちゃってくれないからね？」

「……………」

つい先日、転生悪魔へとシフトした聖剣使いの2人組。

白いマイクロビキニを着けたゼノヴィアと、レモンイエローなビキニのイリナがプールサイドに並んで居た。

ゼノヴィアの乳房は以前にも弄ったが、大きさも柔さも過充分で魅力的に丸く白いふかふかのもっちりとした乳肉。それでいて張りもあるのは、彼女自身が脳筋であることに由来するのであろうか。全体



的には筋肉質なのに、胸や尻や太腿ばかりは柔らかくもち肌且つ重量感抜群とか、女子としての魅力の潜在的期待値は実はトップレベル。小さな布地でほとんど先端と局部だけを隠している水着は、彼女の肢体を素晴らしく魅力的に推し出していた。修道女をしていたというのは、実に何気に勿体無かつたのだろう。特別着飾らなくとも素材の味だけで勝負できる。そういう自信の表れもあるのかもしれない。

イリナの格好は元修道女と云えば過激かもしれないが、年相応と見れば少し大胆でもそのままレジャーへと繰り出せそうなくらいには健康的だ。髪の色ともマッチして、彼女自身の持つ澆刺さを惜し気もなく演出している。日系と覗えるイリナはゼノヴィアと比べると肌は比較的黄色おうしょく依りなので、揃った元修道女2人と比べればその残滓は実に希薄だ。事実、何度か苛めた素肌の張りはやや筋肉質であると思しきゼノヴィアよりもほんの少し粗く、乳の膨らみも一歩足りない凡才気質。しかし、それは先も言った通りに『年相応の女子高生』として見れば、美少女としては基準を突破できる魅力なのだ。前の世界で例えるならば大いに揃っていた48人アイドルグループの一角、とても呼べるのではなからうか。是非ともそのまま偶像として参戦して貰いたいくらいの期待度を彷彿とさせる。

それらの格好もまたレンタルなのだろうが、品揃えが如何にも映像作品に使われてそうチョイスで不安になる。このプライベートプールってどういう意図で借りられる場所なんだよ。教えてサクライ||サン!

そんな俺の葛藤など当然知る由もなく、2人を見て固まったアースは再び俺へと視線を向けた。

「ど、どういうことでしょう……?」

「いや、あの2人とも前に関係持ったんだよね。で、お前と同じような要求が出たからさ」

「で、でも、お2人はリアス部長の眷属に……」

そこは、まあ誰だとしても問題じゃなかったんだけど。

「それ、俺からの要求。ホラ、悪魔って子供が出来難いんだって話でしょ?」

性欲解消の為にするのだから、子供とか不要ですし。

信仰がどうのこうの、って話も出たには出たけど、上手く播れば何とかできるんじゃないかな。力技で。

……可笑しい、真面目なことを呟いたはずなのに次元の果てからの視線が若干鋭くなった。

最近糞親父に似て来たね、って頓に云われるんだよねえ。心外だわあ。

「そ、そういうえばそうでしたね……。あ、あはは……」

「ん? 作りたかったの? やめとけやめとけ。学生のうちから妊娠するとか先行き不安しかねえよ」

だったらきちんと避妊しろとな? 子種メガ●テ術式避妊してるじゃないか(白

目。

というか、アーシアの目が微妙に泳いでいる辺りを見ると、どうにも俺との関係を継続させるための布石としてその辺の事情を伏せていた感が。微妙に強かだよ、彼女。

……危険日とかは特に要注意だろうから、アーシアから強引に要求された時には断るべきかね?

「と、というか、転校してきてから妙にそらくんに近いって思ってたらしいことだったんですね? 私だけで充分ですっ! お2

人はお呼びじゃありませんっ!」

「おいこらアーシア、そうすると私たちがわざわざ悪魔にまで転生した意味は無くなるじゃないか」

「せっかく表向きはグレモリー先輩の戦力を増やす、っていう名目を叶えたのに、それはないんじゃないの?」

「知りませんっ。そらくんは、そらくんだけは私が……っ」

む。妙に独占欲が強いな、……兵藤先輩がアレだからハーレムに否定的とか、そういうことかな？

まあ、決めるのは彼女じゃない。

「あっ!? はっ、んっ、はひいんっ!? そ、そらくっ、いきなりっ、はげしっ、んあっ!?!」

「悪いんだけどさー、俺元々は結構絶倫っぽいんだよね。まあそこはアーシアも実感済みだとは思っただけど」

「あっ、んひっ、はっ、はあんっ」

「そういうわけで、何人かで役処分割してくればキチンと相手してあげられるし。其処を了承してくれないことには、やっぱりアーシアとは相容れないなあ」

「はっ、んっ、んっ、いつ、いやですうっ、そらくんはっ、そらくんはわたしのおっ!」

強情め。

「……じゃあ、耐え切れたら、ってことで」

「んいっ!?!」

▽  
▽  
▽

肌と肌の打ち付け合う、パンパンとした濁った音が反響しています。

朦朧とした意識を起こしたのは、其れと合わせて耳に響く女性の嬌声でした。

「あっ! んあっ! そっ、そこおっ! しゅごいのおっ!」

「おいおい、キャラが崩れてるぞ。普段の精悍さはどうした」

「んほおおっ! らめえっ! お●んちんでいつじゃううう!!」

——気づけば、隣で絶叫しているゼノヴィアさんが目に入りました。

それを後ろから覆い被さり、ケダモノみたいに腰を打ち付けるのはそらくん。その手はゼノヴィアさんのお胸を鷲掴みにして、四つん這いになっている彼女を決して逃がさないと体中で表しているようです。

「ほら、何処に欲しい？ 言ってみろよ」

「中あつ！ 子宮の中にたくさん注いでえつ！ 赤ちゃんほしいのおっ！」

「そう直ぐにはできねえっての」

「っ、んひゅううっ！ ギダアアアアっ！」

ごごっつ、と2人が繋がったところから濁った水音が溢れました。

……そういえば、ゼノヴィアさんはリアス部長の眷属入りを果たした時に、修道女であったままでは叶えられない夢、女性としてのあるがままの姿を叶えたい、と口にしていた筈です。

子供を作り、家族を作り、旦那様を支えるという、ごく平凡でも女性としては憧れる『普通の夢』を叶えたい、と。

リアス部長曰く、悪魔とは己の欲望のままに生きる者だとか。

夢もまた欲望の一端、それを目標として妨げを振り払うのは、悪魔として正しい姿である、と。

その時「まずは子づくりだな」と呟いたゼノヴィアさんへと向けるイツセーさんの目がイヤらしかったのは兎も角として、女性としては実に憧れる夢だと思ったのも確かです。

——白目を剥いて舌を出すくらい口を大きく開いた、だらしのないくらいに己の欲望に忠実に従ったケダモノみたいなアレが、本当に女子としての夢への第一歩と看做して宜しいのでしょうか……？

「あひいい……、はひいい……！」

「あーあ、もう飛んじまったのか。——あ。アーシア気づいた？」

「は、はい……。あの、そらくん、わたし、一体……」

と疑問を口にして、思い出しました。

「っ、そ、そらくんっ、浮気はっ、やあう……っ」

自分がなんで気を失っていたのか、そして今の光景への抗議をと立ち上がろうとしたところで、そのまま崩れ落ちます。

自分の体を支えられず、脚にも腰にも力が入らず、へなへなと這いつくばる自分に困惑しか浮かびませんでした。

「な、んで……？」

「いや、そりゃあアーシアが果ててからまだ30分も経ってないし、腰とかがくがくじゃんか。力入らないのは当然だって」

そう云われて、思い出すのは直前までシテいた悦楽の記憶。

繋がったまま水際より持ち運ばれて、プールサイドで大きく脚を広げさせられて、子宮へ届くくらいにガンガン押し付けられた容赦のない衝撃と快感。

それでも求められることが嬉しくて、もつともつと彼を抱きしめて、身体を放さないように脚と腕とを彼へと絡めて、腰がぶつかるたびに、子宮と脳の奥に火花が飛ぶくらいに熱く痛く弾けた感触。

全身を走った嬉しい悲鳴に、自分が何を叫んでいるのかもわからなくなつたその果ては、真つ白く塗りつぶされたのが最後の情景です。感覚がほとんど無くなってますけど、自分の股から熱い何かが溢れて零れてるような滑った粘度が覗えて、思わず動かない手を添えようとぶるぶると腕を廻しました。

「くくんっ、あう、……っ」

「ああ、処理したいの？ 手伝ってやろうか？」

へたり込んだゼノヴィアさんをその場へ置いて、腰を離したそらくんは彼女を跨いでこちらへ来ます。

処理、とは一体……？ と疑問を思う前に、彼の身体に抱かれて、廻した腕をそらくんは添えるように支えました。

「ひうっ、んにゃあっ」

「アーシアってほんとスキモノになっちゃったよなあ。起きてすぐオナニーって、エロいなあ」

くすくすと晒いながら、彼はおっぱいもくにくにと弄りつつ、添えた私の腕を股間で擦りました。

ぐちゅぐちゅとした粘り気のある濁音が全身へ響かせられている

のがわかり、尚更恥ずかしくなるのに、それよりも彼に触られていることの方が嬉しくて、別の意味で身が振ります。

「あつ、あうつ、そら、くんつ、う、うわきはああつ」

「まだ言うか。というか、そんな様でよく言えるね」

それでも、と苦言を呈しても、確かに自分の有様では説得力は無いのです。

彼を取られることは、普通に嫌です。

しかし、彼が先だつて一方的に告げた条件はクリアできず、私一人の躰では彼を満足させるには到底足りないことも確かみたいです。

それでも。

「それ、でもお、わたしだけおお、みてほしいのお……くっつ、ひうっ」

「アーシア……重いわ」

「酷いっ!？」

直接に返された言葉に、思わず悲しい衝撃が身を苛みました。

うう……、そらくんは酷い人です……。

そう云う癖に、私の身体を弄るのを止めないのだから、決して魅力が無いというわけでは無いはずなのに、なんで私だけ、と操を改めてくれませんか……!

そりやあ私も悪魔になった身ですから、修道女であった頃の常識が通用しないのは分かりますけど、そらくんは人間じゃないですか……。

……人間ですよね？ 今夜間なのに、なんで私を<sup>悪魔</sup>体力的に圧倒出来てるんです……？

「うわあ……、ゼノヴィア凄いことになってる……」

疑問符が浮かんだところへ、イリナさんの声が届きます。

振り返ると、………何故か犬耳を備えたイリナさんが、そこに。

「そらくん、ここのうのつて好き？ わんわんっ」

腕を、ワンちゃんみたいに服従のポーズで揃えて、おっぱいを挟んだイリナさん。

実に変態的に誘惑してきますが……、——ふっ、甘いですね。

そらくんはイツセーさんみたいな変態さんでは無いのです！ 例え私一人では満足できないと口にしようとも、私以上のポリウムがありそうなおっぱいを見せつけようともっ、安易な変態プレイで流されるようなら今私は苦勞してませんっ！

「……うん。嫌いじゃない」

「やあんっ♪」

——イリナさんの乳房へと伸ばされた手は、嬉しそうに声を上げる彼女に容易に受け入れられました。

そらくんっ!?

えっ、あの、わたしまだ身体に力が入らないんですけど、放置っ!?!  
「どうして欲しい？ ゼノちゃんみたいにバックでやる？ それともアーシアのみたいな種付けプレス？」

「あっ、んっ、まずはあ、キスして？」

「犬だろ？ ペロペロ舐めるのはお前じゃない？」

「んひゅふ、じゃあ、しちやおっかな♪」

私が見ている目の前で、イリナさんはそらくんの唇をペロペロと舐ります………!

……やだ、やです、けど……、ずるい………!

「そら、くん………!」

「アーシア、暫く見てろ」

「んちゅっ、んむう、ねえー、余所見しちややだあ」

こ、この泥棒猫………! いや、雌犬ですけど！ 調子乗ってますよね………!?

………良いでしょう、その喧嘩、買いますよ。

身体が動くようになったら、絶対そらくんを奪い取るんですからあ………っ!

☆「イリナちゃんがprpr」

事実上、今夜抱く女子がこれで3人目と相成るのだが。此処の処、鍛冶はシタものの特別魔力を消費したという程働いてはおらず、消化する機会を凶っていたのも事実ではある。

要するに、まだまだ元気なそらくんはイリナちゃんとのわんわんプレイも望む処だ！ と言いたいわけで。

「わんわんっ」

期待した目でイリナは見下ろす。

プールサイドで犬耳少女とか、いつかの俺ならば忌避していたであろう愛玩動物を冒瀆するかのようなこの所業。

——しかし、人とは成長する生き物である。

レモンイエローのビキニは小さ目なサイズが仕様であるらしく、視覚情報だけではつきり大きいとわかる2つの膨らみを零さないようにと下からも食み出さないように支えている。

それをイリナは、むぎゆつとお犬様服従のポーズみたいに両腕を備えた。

結果、挟み込まれた乳房は元より結構大きいので、牧場で出来立てのモツツアレラチーズみたいに柔らかくぽよんと変形し、布から上下の乳肉が食み出る始末。

付け耳の可愛らしさとか割と最早どうでもよく、零れ落ちそうなその色気に思わず手を伸ばした俺はきつと敗北者の体なのであろう。

俺実は犬派とか、この瞬間には気にしないことに決めた！

「やあん♪」

語尾にかっこはあとかっこことじ、と副音声で聴こえそうな嬌声。

男の誘い方を、この数日でどうやって把握して来たのやら。

イリナの着ている水着はゼノヴィアの着ていた三角ビキニと同タイプのモノだが、彼女自身の筋肉の張りはゼノヴィアのようなスポーティな雰囲気醸すに些か届かない。

実際に触って揉むことで把握できるのだが、ゼノヴィアと比べると



サイズは同じなのに感触はイリナの方が若干柔らかめだったりする。多分、肉付きそのものはイリナの方が多めなのだろう。

だというのにサイズをゼノヴィアと同じそのままを選んでしまったのが敗因か、乳の稼働率はこの場の3人の中でもかなりぷるんぷると躍動感が溢れていて、水辺で動こうとするならば今にも零れ落ちそうなくらいだ。

誰だ、前回そのままレジヤーへ行けそう等と宣ったのは。……俺だ！

むしろグラドルじゃねえか、歌手グループにこんな混じってたら周囲と反りが合わずに即脱退してAVに転向してるわ！

正面から食み出る乳肉に手を伸ばし、指先が沈み込む感触を楽しみつつ、もちもちと布がずれるのもお構いなしに揉みしだく。

「んっ、はっ、あん、んうん、ひあんっ」

触れる度の感度は良好で、飛び出したピンク色の先端を指で刻むように弾けば、その都度小さな悲鳴がイリナの口から息をするように漏れた。

丸く大きな、先程も言ったような出来立てのモッツアレラチーズみたいな柔らかさを、とても一介の女子高生が得ているとは思えないサイズに自慢の在るおっぱいプロポーションを堪能しつつ、肌蹴た谷間へと埋まりたい欲求を自制……出来なかつたあ！

「はあんっ♪ そらくんっ、だいたあんっ♪」

ぱふう、と柔らかい乳房のクッションが埋もれた顔を優しく包み込むのは、やはり『母性』があつてこそ為せる業。

埋もつても指先は静止せず、彼女の成長著しい柔らかイリナっぱいを思う様に味わうのであった。

しかし、それにしたとしてもこの世界の女子のプロポーションは一種異様では無かろうかと思うのだが。

一部成長率の可笑しい例外が居たとしても、育っている者は育っているモノで未成年とはとても思えないくっそエロい人妻系の色気を醸し出しても居たりするし姫島先輩とか。

オカ研の例外中の例外である見た目(だけ)は極上のグレモリー先

輩とかを引き合いに出すのは反則だと思われるが、それでも負けていない色気でこの世界の女子らは僕ら男子を誘惑してやがる。

ボクらはおっぱいに振り回され過ぎていて、と口にしたのは果たして誰だったか。

其れが過言だと若かった俺は想定していたが、現実には常に非情で、男子は勝てる見込みのない戦いを強いられていると断言出来るほどに決して過言ではなかったのだ。

「んふっ、そろくんてば、赤ちゃんみたいね」

座っていた俺を上から覗きこむ形で誘惑して来た犬耳イリナは、俺が自分の胸に夢中なことに実に満足しているらしく、慈愛に満ちた目で俺の頭を優しく撫でる。

なんと情けない……。

これでは実に敗北者の体ではないか、3人目でもまだまだオツケーと意気込んで女体へ飛び込んだ冒頭の俺は何処へ行ったのか。

これでは放置中のアーシアなんかに、呆れた目で見下げられること請負である。

しかし、この時の俺はおっぱいに夢中になっていたので、アーシアは泣きそうな顔でこちらを覗いていただけであつたことなど一切知る由も無かつた。

というか、気を引きたければご奉仕でもすればよかろうモノを。

そんなんだからマグロなどと揶揄されるのである。

まったく、情けない。

閑話休題。

話を戻すが、俺は特別女性の乳のみに執着するタイプでは無い。だが、時折誘惑してくるその果実に抗う術など、男子である俺には一切無いのだ。

おっぱいとは無上の勝利者であり、巨乳とはその中の最上の君臨者チャンピオンである。幕張でも言っていた。

男子である限り勝つことが出来ないのは、元よりアキラさんに捕食された時より知っていた事実では無かつたのか。

俺は何故、今になってもそれを自覚できなかつた……っ！

この世界でも、先立って知っていたグレイファイアさんの母性的爆乳とか保健室でのグレモリー先輩のアレとかに抗えなかった時点で、詰んでいた兆候など垣間見えていたではないか……!!

圧倒的……!! 圧倒的敗北……!!

勝つ見込みは最早ない……!! 愛おつぽいに包まれた視界が悔し涙で歪む……!!

——いや、待て……?!

まだまだ、まだ光明はある……!!

今、俺はおっぱいを何と言った。

母性と、そして、……愛と呼んだ……!!

その事実を思い返し、——ついに、悟る。

愛とは、勝たなくても構わないモノでは無かったのか……!?

不知火半袖なる大喰グラトニー幼女が、7億弱の悪平等ノットイコールの頂点として君臨する人外・安心院なじみへ告げた、勝ち負けで語れない心の天秤を正しく釣り合わせる一言だ。

『正しい』とは『善』ではない。

『正義』とか『悪』とかの後天的な概念ではない、ただ『間違っていない』という、誤りを改めるといふ為だけに在る定規としての『言葉』だ。

それは『個人の話』を型に嵌めるための言葉では当然無く、周囲の測るモノすらも間違わせるわけにはいかない為にこそ存在する定義だ。

故に、其処を本当に判断するべきなのは、個人の有り様では無く結果を想定して其処へと至らせる、プロセス道筋。

その言葉から今回把握すべきことは、勝利こそが目的では無い——

——勝ち負けで語れるほど、男女の機微とは単純ではない……!!  
その事実を悟った俺は——、

「ひゃうんっ!!」

——紫藤イリナの柔らかかおっぱいへ、がぶりと噛みついた。

▽  
▽  
▽

どうも、絶賛放置中のアーシアリアルジェントです。

用意された、なんて云うんでしようねコレ、プールサイドに置かれていた椅子みたいな、いや椅子にしては随分とゆつたりと寝そべることの出来るチェアー？と云うべきコレに寝そべっております。全裸です。

先ほどまでは起き掛けで、そらくんにお、おまたをくちゅくちゅと弄られておりましたが、イリナさんが登場してからは本気で放逐され、イリナさんのおっぱいへとダイブインしたそらくんを涙目でご覧しております健気な私です。

やっぱりおっぱいですか。

男の人はおつきなおっぱいに夢中ですか。

……私も最近は大きくなって来たみたいなんですけどね、ブラが少しだけきつくなった気がします。なんででしょうね？ 食生活が改善されたお蔭でしょうか？ 日本食って美味しいですよ。教会に居た頃は本当に粗食でしたから。

しかし、そう考えるとゼノヴィアさんやイリナさんの成長っぷりはちよつと納得がいかないのですが。

教会の粗食生活であんなスタイルを維持できるとか、神様が喧嘩を売っていると思えない現実です（日本的表現）。

あつ、神様はいらっしゃらないんですね。

……じゃあ運命ですか。ちっぱいというFate的な無常が働いていますか。

そんなところばかり仕事してないで、もう少し私の生き方をどうにかすべきだったのではなからうかと苦言を呈します。

例えば教会前へと悪魔さんを放置するとか、そういう取って謀った様な差し回りには色々と言いたいことは止まりませんか？

ふふふ、最近小猫ちゃんとお話するようになって、少しだけ日本文化を知ってきた気がします！

おっと、ちっぱい同盟を結束するかどうかという話が流れた小猫

ちやんとのタッグマッチは今は別の話でした。

今は勢い余ってイリナさんを押し倒したそらくんを中継しようかというお話でしたね。

初めは母性の塊、まあリアス部長や朱乃さんと比べればまだまだ未熟ですが、年頃として見れば充分に大きなイリナさんのソレへと飛び込んだそらくんでしたが、途中、イリナさんが悲鳴に似た声を上げました。

それを皮切りとし、制止を呼びかけるイリナさんを無視するように、夢中になつて肉を貪るそらくん。

野獣です。

兵藤家へと預かつてもらっている身で拝見させていただいた『てれび』で見た覚えがあるのですが、サバンナのライオンさんが生肉を屠る時だつてもう少し優雅だつた気がします。

こ、此れがおっぱいによつて目覚めた、そらくんの雄……ごくり。制止しようとするイリナさんは言葉を紡ぐことは直ぐに亡くなり、乳房を思う様に嬲られ舐られ齧られ吸われる、衝動の赴くままのその蹂躪に一つの音しか漏らせなくなっていました。

すなわち、悲鳴。

あつ、あつ、あーつあーあーああああああつああつあああーつあああああーつーつ！ と、まあこれまたトンデモナイそらくんが言う処のイキっぱなし蹂躪劇。

悲鳴はプール中へ大きく響き、そしてその中に在る艶めいた喜色も隠し切れず、イリナさんは悦楽の泉へ1人溺れて逝く始末。

いえ、最後に、と言つた方が適切であつたのかもしれませんが。私もゼノヴィアさんも、結果として似たような顛末でご臨終シテおりましたからね……。

おっぱいを苛められるだけで、あんなに盛大に感じられるモノなのでしょいか。

顔を埋めて齧りついて、揉んで引っ張つて変形させて、啜つて舐られて上下へ左右へ激しく可動することを止められるモノは何処にもなく、イリナさんの御胸はおもちやのように嬲られるがままです。

犬耳は、最早滑稽です。

肉食動物、という捕食者をイメージしたかったのかも知れませんが、いくら受動型に見受けられようとも私たちを真っ先に開発したのはそらくんご本人です。

受けでは無く攻めこそが、彼の真骨頂……！

……ところで、攻めの反対は守りだった筈なのですが、クラスの皆さんと話していると何故かこれらの単語が組み合わせて飛び交います。

特にイツセーさんと木場さんとの話題になると、何故か多めに。

……日本語って、まだまだ難しいですね。

そらくんを抱きかかえていたはずの腕はひとまとめに吊るすように抑えつけられ、組み伏せられ悲鳴が聴こえなくなっただかと思いきや、イリナさんの唇を塞ぐそらくん自身のディープなキッス。

プールとはまた違う水音がぐちゅぐちゅと響いて、逃れることも出来ないイリナさんは今度は口中を蹂躪されるという羨まコホンけしからんご褒美ンンツ……とにかく、そらくんは遣り過ぎだと思います。

これ前戯ですよ？

既に腰砕けなのは明白ですよね？

イリナさんを殺す気ですか？

やはり此処は最初の奥さんである誰かさんへと食指を向けるべきだと思うのですがー。

そらくーん、私は手暇ですよー？

▽  
▽  
▽

おっぱいを堪能した後は流石に高揚した気分の赴くままに、イリナの唇と口の中を舌で俺色に染め直すお仕事。

うむ、愛とは勝ち負けでは無いが、セックスはやはり前戯が重要と偉人も言った。

……言ったよね？

蕩け切って意識不覚のイリナを見下ろし、誰の言葉かと適当な思考を巡らせる。

それはさておいても、絶叫と快感で熱気を放ち、薄ぼんやりと紅潮した眼差しでこちらを見上げるイリナは、自分から起きることも出来ないほどに身体に力が入っていなかった。

思いがけなくイニシアチブを奪取し直したらしい。

今ならば、犬耳に相応しいプレイを強要することも可能ではないか、と俺は己の肉棒をぼろんと顔先へ突き出してみた。

「ほら、舐めろよ」

犬だろ？

と雌犬へフランクフルトを丁寧に舌拵えさせてみる。

動作はぎこちないが、まずは舌先をチロチロと出して、ゆつくりと舐め回す仕草が続く。

その匂いは意識を起こす気付けにもなったのか、段々と目に熱が戻ってくるのが見張るごとにはつきりとしていた。

その動作の隙間へと、ずいと肉棒を差し込んでみる。

「……ん、む、くぷつ、んちゅ、んぶつ、じゅぷつ」

拙いが、小さな口ではサイズが合わないのか、亀頭の先端だけを啜るイリナ。

ナニを口に行っているのかを認識できているのかは微妙だが、そろそろ自覚も出来るころだとは思う。

「じゅむつ、んぶつ、ぷえつ、えつ、えほお、おえつ、やあ、んやあつ」

啜えるのを嫌がり、吐き出したイリナはまだ起きていない頭で子供みたいに愚図ついた。

我慢汁とか、まあそういう先走りのアレが出たせいではある。

精液は苦いし喉に粘つくしで良いとこないよ、とパイズリの後に宣ったのはゆるなだったか。

彼女の弁を参考とするなら、確かに良いところの無い前戯だろう。

むう、『ご奉仕』にはまだまだ遠いなあ。

「おえつ、えほつ、……ん、あれ……？」

起きたらしい。

じゃあ、とりあえず本番と往こうか。

そういう意気込みで押し掛かろうとしたところで、腰を掴む誰かの手。

「そ、そらくん、私が、続きしましょうか……？」

アーシアが後ろから、腰、というか肉棒へと手を伸ばして掴まえていた。

やだ、この娘アグレッツィブ……！

「んむっ、ちゅっ、ほむっ」

いつの間に傍へとにじり寄っていたのか気づかなかつたが、マグロ返上の意識向上でもあるのか勧んでフランクフルトをじゅっぽじゅっぽと啜えだすアーシア。

今回はもうイリナの独壇場かと思っていたが、顎が外れそうになるのもお構いなしに“おつき”を助長させる仕草は流石修道女連盟では先輩なだけはある。

この子ってば、いつのまにこんなに成長して……と、丁寧な口遣いに目頭も熱くなる。

遅ればせながら、それに気づいたのはイリナだった。

「……うっ、ちよ、ちよつとアーシア？ 今は私のターンなんだけどっ？」

「んぼっ、じゅぽっ、じゅぽっ、っじゅっぽっ」

「やめ、やめなさいっ、ていうか聞けっ！」

肩を掴まれたアーシアが引き剥がされそうになるも、いやいやと啜えたまま頭を小さく振る。

んあっ?! その仕草、イイねっ！

「くっつ、あーもうっ！ じゃあ競争っ、それならいいでしょっ？」

「んぶ、……じゅぽじゅぽっ」

一瞬考える素振りを見せたが、即座に口遣いを続行させる。

確かに、イリナの提案は良く分からないモノであった。  
「ふふん、見てなさい、アーシアが知らんぷりしてても、私の手を出せるところなんていくらでも余ってるんだから」

何処か誇らしげに言う、イリナは伸びている肉棒の横つ面を舌先



で弄り出した。<sup>まさぐ</sup>

最初と同じようにチロチロと、アーシアの顔が近づくのもお構いなしに、犬っ娘的舐め行為で根元近くを舐り出したのである！

うっおおお……！ 美少女2人でフェラって、男子垂涎の夢じゃね!?

「んひゅ、むちゅっ、どうう？ きもちいい？」

「ああ……、気持ちいい……。イイのもあるけど、見た目的にすげえ……！」

興奮して来た。あ。

「じゅふっ、——むぶうっ?!」

啜えているところへ思わず発射したそれを、流石に不意打ち過ぎたらしく受け止め切れなかったアーシア。

亀頭の先端くらいしか啜えられていなかった小さなお口からは、白く濁った粘液が収まり切らずに噴き出して彼女の口周りを手酷く汚していた。

いやー、スンマセン。

「うっわ……、あ、アーシアっ、タオル、使う……?」

「……っ (コクコク)」

言葉を漏らせなくらいに衝撃を受けたにもかかわらず、彼女は噴き出した以上のそれを零そうという行儀の悪い真似をしようとはしない。

しかし、そのお蔭で無言のままにイリナの気遣いに頷くくらいしか反応が無かったのだから、むしろ反発心が無くていいんじゃないかな。

で、だ。

自らを整えたアーシアと、状況をなんとか把握したイリナとが、改めて俺へと向き直るのだが。

「……っ」

「……！」

互いに、そそり立った俺の股間を直視して、どちらからともなく生唾を呑むような嚙下がごくりと覗えた。

その意味は、推して知るべし。

「……い、イリナさん、お先にどうぞ」

「えうっ!? あ、アーシアが先でいいんじゃないかなっ! ほら、私  
愛人枠だしっ!」

「それを言ったら私もそうです……、いえそうではなくて、ここはやはり経験の少ないイリナさんが存分に味わうべきかと」

「先輩を立てるよー、年功序列っ☆」

何故かお互いに譲り合うという、謎の席次転身が発生していた。

つい先程まで自分が自分が、と喰い気味に売り込んでいたハングリー精神は一体何処へやったのか。

あとイリナさん、あんた自分のキャラ見失いすぎじゃね? 星を付けるなよ、何処の姉ヶ崎だよ。

「同い年ですし、ほら、私はさつき最初に充分愛して貰いましたし。主は仰られました、隣人へ己の得られるモノを差し出すことこそが、真の敬愛の精神足り得ると。この身になっても私は敬虔なクリスマスチャンであることを辞めた覚えはありませんし、それに、」

「男の人に股開いてる時点で敬虔も何もないと思う」

「くっつ、イリナさんだつて人のこと言えないでしょう!? というかあなたのターンとか言つてたじゃないですか! そらくんも待つてますよっ、あなたこそ股を開くべきですっ! 右の女が犯されれば左の女も差し出せ、と主も仰られてますっ!」

「云わないよっ!? あと誰が左の女!? 確かに先に犯されたゼノヴィアは相棒だけど、あんな馬並みの極太ち●ぽとか何回突き出されても直ぐに受け入れられないしっ! とうかそそり立ち過ぎだよ!? アーシアが頑張るから凄くなっちゃったんじゃないのおっ!」  
どっちでもいいから、股を開け。

▽  
▽  
▽

「つーか、聖剣使いが2人して悪魔に転生したって聞いたが、マジなのか?」

レーシングゲームで鎬を削っていた俺へと、アザゼルさんなる墮天使の提督はそんなことを呟いた。

世間話でもするかのように、こちらの事情を気安く問うてくる。やや警戒しつつ、なぜそんなことを聞くのかを不審に思いながら、俺はゲームを操る手を止めなかった。

「……なんでそんなこと聞くつすか？」

「世間話だよ。てゆうか、有名だぞ？ 教会側が貴重な戦力として売り出そうとしていた使い手を、揃って悪魔へ転身させたとかいう情けない話だしな」

けらけら嗤いつつ、おっさんは適度に弄りゴールイン。くそっ、また負けたっ。

というか、なんで知らんが敵組織のおっさんと教えられても、俺が態度を敵対させようという気にならないのが不思議だ。

むしろどうすればいいのかがわからない、と言った方が良いのか。

「悪魔側へ行くくらいならウチへ来ればいいのになあ。墮天、つて言えば聖女側はそれっぽいじゃねーかよな？ 例の、アールリアルジエントとかな」

っ、こ、このオッサンそれが狙いか!?

そういえば、アールリアルを確保していたレイナーレはそもそもアザゼルに認めてもらいたい、とかって理屈であんなことをしてたんじゃないのか?!

前言撤回、充分警戒に値する相手だ……っ！

「俺のアールリアルも幼馴染も同僚も、墮天使なんかには絶対渡さねえぞ！ 墮天使だけじゃねえ！ ウチの女子は主様も含めて俺のハール候補だっ！ 他のどんな奴がしゃしゃり出てこようが、絶対に簡

単に差し出させるかよおっ！」

啖呵を切って睨みつけるっ！

思わぬところで意思表明してしまったが、目前に在る美少女ハーレムを見ず見す逃すとかいうへまは遣らかしたりしないぜっ！

▽  
▽  
▽

「や、ま、あ、ついにやあああああつっ!？」

ずぶり、とイリナの膣穴に極太の自身が沈み込む。

処女以外を喰う経験は少ないから他所との差異は判別できないが、最初にアレだけ穿ったにも拘わらず、イリナの膣口は実に狭かった。

ゼノヴィアを今日抱いた時にも思ったことでもあるけど、狭くて一回じや奥まで直ぐに届かない。

血こそ出ていないモノの、何度も押し込んで広げて往かないと全部沈めるにはかなり手間取るのだ。

一気に奥まで、と往けるほど浅い膣でもない。

その点アーシアは浅過ぎて、全部呑み込ませようとすれば子宮も貫通しそうなくらいの掘削工事だ。

俺のドリルは何処までも突き進むぜ！

「くっつ、まっ、まっつて、そらくんう、おねがっ、まだっ、いつ、ひょうううううっ!？」

ひよっとしたらこの世界の女子特有の現象かもしれんね。

創造神が処女厨の可能性が微レ存。

あとは巨乳好き。

まあ男子は基本巨乳好きだから、メインヒロインに据えられれば段々とでつかくなる自然現象が起こっても可笑しくない。

そんな益体も無い話を妄想しつつ、腰を動かす。

奥へ奥へと、振じ込むぜっ。

「あゝっ、くっかはっ、はゝっ、む、りい……っ」

イリナ曰く馬並みとのことである極太のコイツは、やはり簡単には

据えられないらしい。

というか、こつんと奥まで届いているのに未だ全部入りきらない。未成年である所為なのか、はたまた修道女は浅めという謎法則でも働いているのか。

「無理じゃねーよ、まだまだイクぞっ」

「ひっぎいっ!?! いひゃっ、あにゃあっ!?!」

わんわんプレイは何処へ行ったのか、雌犬であったはずのイリナは襲われることを由としない雌猫みたいに悲鳴を上げる。

が、俺を押し返すまでの抵抗は見せず、自由であるはずの腕なんかは大の字に放り出されたままだ。

体勢はというと、腰を掴まえての正常位。

寝そべり直したイリナへ、宗教的に正しい形での男女の上下関係が脈動を伴って、要するに暴虐的なち●ぽへ形を変えて襲い掛かる。

動かすたびに揺れる乳房へ、何度やつても目を奪われるのは最早仕様である。

しかし、そこまで嫌がられると少し寂しいなあ。

「なんだよ、嫌なのか？ 辞めるか？」

ぴたり、と突いていた腰を止め、どうしたいのか彼女自身へ問いかける。

だが俺は知っている。

最初の晩に、散々苛めたのに要求だけは辞めなかったイリナの欲求を。

だからこそ、逡巡するような仕草で俺と目を合わせないようにという否定の意も、ただのポーズであることも。

熱気に浮かされた眼差しで、嵌ったままの腰が組み合わさっている姿を覗いつつ、イリナは赤い顔のままふいと視線を逸らす。

「や……やめない、でえ……」

要するに、マゾなのだ、この元修道女は。

そしてそんな自分が恥ずかしく、直視できないからこそ悲鳴を上げて、しかし逃げる事が出来ない。

……そんな心内を思うと、更に興奮する。

「よし、じゃあ……オ、ラあつ！」

「ふぎいいいっ!？」

ずぶり、と全部が収まった。

根元までしっかりと呑み込むことに成功したお利口さんなま●こは、ぎゆうぎゆうと俺の肉棒を食い千切るかのように締め付けてくる肉厚さで。

沈み込んだ先っぽは子宮口の奥へと振じ込まれたことは明白に、イリナの呼吸は本日何度目かの死にそうな喘ぎへと替わっていた。

実に、ソソラレル。

「あ、か、はっ、あゝゝっ、んあゝ あゝっ」

「どうだ？ 此れが欲しかったんだろ？ 気持ちイイんだろ？ ほら、言ってみろよ？」

「んひいゝ、ぎもぢいいいゝ、おぢんぽおゝ、いいのゝ おゝ」

はつきりとしていないだろうに、浮かされた意識のままに応えを促されるイリナに苦笑しつつ、俺は腰をねじ回し始める。

「しっかりと答えたな。じゃあゝ褒美だ、悦べよバカ女っ」

「あゝひいいいっ!？」

夜の宴は、まだ始まったばかりだ。

「元女子校の同級生の幼女の水泳授業の相方に俺がゲッツされた件について」

「……もう一度言ってもらえるかしら、リアス？」

「だから、プールの清掃を今年はオカ研が替わってあげましょうか？　って……、何か問題でもあったのかしら？」

何を言い出すのだろうこの能天気赤髪姫は、みたいな目で見られていることに気づかず、我らが主は小首を傾げる。

『何か問題が？　お願いする立場にある私から見ても、問題しか生まれそうにない発言だと思う。』

「……それで、こちらに何を要求する気？」

「そ、そんな警戒しなくてもいいわよ。ただちよつと、清掃した後にプールを一足早く使わせてもらえたら、って、」

「——はっ。」

本気で阿呆な発言にソーナ会長から「威圧」が染み出た。

覇気に晒されてビクツ、と身を竦めるのは同じ部屋に居た匙先輩や隣のクラスの仁村さん。

無論、ウチの主であるリアス部長もその剣幕には驚いたらしい。

しかし、驚いているだけ、って感じで、今回の本題には理解が及んでいないご様子。

お願いした立場ですけど、うちのあるじがなんかスイマセン。

「リアス、生徒会の運営費用がどうなっているか知ってるかしら？」

「え？　えーと、学園から出ているのよね？　ウチの代理だけど、理事長に立てた人間が表の立場で、」

「知ってはいるみたいね。詳しくは今が良いけど、それがきちんと

動いていると云う事を自覚しているのなら話は速いわ。

——その上で、貴女は今なんて言ったのかしら？」

うわ、ソーナ会長劍幕凄い。

今度こそヤバい話題に触れたと自覚できたのか、困惑を隠せないリアス部長。

しかしやはり雰囲気だけでしか把握できておらず、言い返すことも無い部長へと、しばらく見ていた会長は溜め息を吐く。

「……いいかしら？ お金と言うものは使わなければいい、というわけじゃ無いの。使わない分はしっかり廻さないと運用にはならなくて、『貯めておく』という選択は采配される『資金』にはあつてはならない事態だわ。そもそも、配分としてどの程度必要とされているのか、は先立って会議で決定する問題だからね。此処までは良いかしら？」

「えーと、う、うん」

要するに、国家予算を各自配分するようなモノと同じなのだろう。年内に使い切らなければ多量には必要ないと上は判断して、次年度からは削られるのが基本骨子、とか先日何故か烏丸くんが説明した。

数学の授業なのに、何故か。

まあうちの学校の先生方の授業内容がアレなのは既知の事実だし、何もまちがってはいない（白目）。

「生徒会も、潤沢とは言えない予算をやりくりして、『次』が足りないと言いつきさないように生徒活動に充てることで運用しているわ。其処に不備があつては、生徒の自治活動という『やり方』が『次』に通りに難くなるの。立っている代表が私たちの事情を知っていたとしても、その周囲が全てというわけでは無いし、悪魔が正体を晒すことは決して正しくは無いから」



「それは、わかっているけれど」

「ええ、其れが分かっているのなら、——何故目立つようなことを繰り返すの、貴女は……!」

語気が、強まった。

やだ、コワイ!

「き、貴族は領民の手本となるべく、相応に優雅な生活を披露する必要が、」

「此処は日本で貴女は学生! いい加減に特別扱いを享受するだけの生活態度を改めないと、生徒会としてもオカルト研究部を擁護できるわけがないでしょう!」

「よ、擁護?」

気づいてなかったのだろうか、この人……。

「部長、私が説明することでもないのですが、こちらがいち部活動派閥である以上『生徒会』は『私たち生徒を纏める組織』という枠組みです。名目上は正規扱いにもならない、活動内容が不明瞭な『オカルト研究』という部活動名を掲げている以上、鼻眞目で扱われていることは既に他の生徒にも知られていることですし、これ以上の特別扱いを要求したら……まあ、いち部活動をわざわざ槍玉に挙げるような暇人が早々居るわけではないかもしれませんが、人目を憚るような目を向けられるのは確実でしょうね」

「……小猫の言ってることがよくわからないわ」

「そんなんだから学園裏サイトで色々言われるんですよアナタ」

「色々言われてるの!?!」

主に、【脳筋】とか【恋愛脳】とか【男子の才●便器】とか。

まあ此れはどうでもいいことだから放置でもイイだろう。主に少ない男子の視線を集める為に妬んだ一部<sup>お姉さま</sup>同学年女子からの心無い力

キコだろうし。其処に何らかの影響力なんてものは見当たりそうにもないし。

同じように裏サイトを巡回し把握していた朱乃さんが、リアス部長を宥めつつ言葉を選んでいた。

「とりあえず、支取会長が言いたいことはこう云う事だと思えますわ。6月とはいえ中々に暑い日が続くとはいえ、まだプール開きも決定されてない状況で先走って一部の生徒が勝手に学校施設を使用しようとしている、という利己性へ訴えかけられそうな他の生徒からの懸念。ということかと」

「ええ、と……？」

「……要するに、私たちだけが一足早くにプールを愉しむというのは、羨ましがられて意識的に反感を買うのでは？ と言いたいのでしょうか？」

最後の言葉は会長へ向けたモノだ。

というか、本当に部長の理解力が及ばないのがどうにかして欲しい。

朱乃さんもせっかく色々オブラートに包んで言い方を選んでいたので無駄足である。

おう、お前高3やろ？

「そ、そう云う事なのね。それなら、私<sup>悪魔</sup>たちの魔術で意識を操作すれば、」

「見る者だけが全てでは無いのに、其処だけにしか及べない認識操作で何をどう動かそうというの貴女は。というか、その認識阻害に頼るやり方はいい加減に止めなさい。重ね掛けして効果がどこで薄れるかわかったモノでもないわよ」

「」

会長の攻撃！ クリテイカルな言葉が部長の胸を抉る！

いつそもう少し物理的に抉れたらいいのに。

「それと、清掃後を使用したいと言ったけれど、プールの水は一朝一夕に貯まるはずがないでしょ」

「そ、それは魔術で大量の水を……」

「さつきも言ったけれど、というか先に言おうとしたことなのだけど、其処に出る筈の公共料金水道代が消えると云う事が何処にどういう影響を与えるモノなのかを把握できないのなら、迂闊な発言は今後控えるように。帳簿改竄を彷彿とさせるような裏技で水道代を削れて意識的には良好でも、結果としては消費するはずだった費用は何処に廻ったのかという懸念が恒久的に記録されることを貴女はまだ理解できていないの？ 余計な仕事が増えるのは確実に私たちや学校運営に携わる方々なのよ？ 胃腸へのダイレクトアタックはもう沢山……！」

あれ、その言い方だと既に何らかのストレスが会長の身に被さっているような気配なのですが。

言い負かされて背中が煤けている部長に代わり、私が気になったので問うてみることに。

「何かあったのですか？」

「先日のコカビエル襲撃に連なる件で、聖書関連の三種族会談がこの駒王学園を舞台にすることに決定されたのです。……4名いらっしやる魔王様方の代表として2名、サーゼクスールシファー並びにセラフォルーレヴィアタンのお二方がいらっしやることに……」

「……ああ」

確か、会長の姉がセラフォルー様だったはず。

噂の『魔王少女』が来るのか。

……それは胃痛も痛くなる（表現重複）。

「え、お兄様も?」

「むしろ、サーゼクス様が先立って代表としていらつしやるはずでした。セラフオル様は、その、無理矢理自分から組み込んできたというか……」

「ぐ、ぐ愁傷さまです」

部長の疑問に答える以上に、会長のストレスが姉妹愛でマッハ。

うちにも似たような姉が居たので、ちよつと共感を覚える今日この頃。

「……朱乃、ソーナと小猫が私を無視する……」

「サーゼクス様からは一応連絡は入っていますわよ? あと、何故か私のところに天界のミカエルさまからも連絡が。……父バラキエル 関連かしら」

「そ、そう。この分だと、墮天使からも何らかのアクションが在るのかもしれないわね」

一瞬でハイライトさんがお亡くなりになった朱乃さんを氣遣う気だったのか、廻って来た話題にそれっぽい予測で乗っかる部長。

そんな墮天使は総督が動いていた、と帰宅した兵藤先輩より教えられたのは、わりと直ぐ後のことだった。

そんな話があった、昨夜の話。

▽  
▽  
▽

「——そんなわけで、先走らせてもらいますけど数日後に控えたプール授業では烏丸くんの相方は私がゲットです。泳ぎ方を教えてください。お願いしますお兄ちゃん」

「待て待て、体育の授業だよな? 男女合同なの?」

「男子が少ないのでいっそ混ぜよう、という先生方からの提案だそうです。あとスルーは酷いと思います」

普段他人のボケをスルーしてる身で何を言うのか。

俺はそう呼ばれて悦ぶ人種とは違うと、以前にもツイートしたはずなのだが。

そして先生方、というよりはなんか別方面からの横槍が入った気配がぶんぶん匂う。

これまでは男女合同なんて微塵も無かったのに、水泳の授業になって何故今更。

まるで、自分の想う様に行かなかった懸念を解消するために、力の使い方を斜め上へ修正した誰かさんが教師の意識改竄を促したかのような、そんな教育方針の急速旋回具合だ。

……まさかな。

「此処だけの話、リアス部長が先生方へサイミン||ジツでオハナシしたそうですけど」

「やめて裏話聞かせないで」

想定した事態がガチだった。

犯罪くせえ、というか、あの人はむしろ体格的にも催眠掛けられる方じゃねえのか（エ●ゲ風味。

「まあまあ、いいじゃないですか男女合同。男子は飲んでますし女子も、一部は沈んでますが反面喜色も混じってますよ。主に健康的な肉体美が無料鑑賞できると云う事でふひひ」

「オッサン発言やめえー。というか、ターゲットが絞られてる気がするのは、……懸念で済みそうにねえな。あと沈んだ一部女子つてのが無駄に気がかりなんだけど」

こう、嫌な予感が腐臭を伴ってて、

「おや、気づきましたか。まあ烏丸くんは基本攻めだそうですから、

大丈夫ですよ」

「ナニが!？」

塔城の友人関係を一度改善した方が良いのではないかと、ちよつと思ふ。

むしろこの学園の女子の有り様をどうにかできやしないモノかも。

さてそんな話はさて置き、いい加減に気になっていることを問うてみたいと思うのだが。

「——で、朝から俺の隣の席に置いてあるこの段ボールは何なんだ」

「ご丁寧に椅子の上へと鎮座ましま坐しておるダンボ。

閉じた蓋の上から覗き込めば微妙に震えるし、なんかナマモノが入っている気配はするのだが、変に静かなので問いかけるタイミングがつかめやしねえわけであった。

ちなみに今は昼休みだったりする。

「ああ、やつと突っ込みましたか。このまま放課後まで放置プレイなのかと」

「ツツコミ待ちを呼ぶには難易度高えよ……、つーか開けるぞ? 時間的にもクラスメイトらも待ちぼうけ喰らってんだし、いい加減にお披露目する頃合いだろうよ。今日は先輩方も来ないみたいだし」

「というか、学校来てんだろうか。」

「腰が砕けている可能性が微レ存。」

「そうですね、時間的にも丁度昼ですし、エサやりにもタイミングは間違ってますし」

「ナニ? 犬猫? 仔犬系の何か? むしろ犬なら大歓迎」

「えっ」

おう、俺が犬派なのがそんなに異論有るのか。

そういやこの世界って『らぶらぶアニマル』も無かったんだよな。ようやく始まった竹村あんじゅの犬コーナーエッセイも読めないという絶望。

何が何でも元の世界へ戻らなくてはならないと、心に決めた一件でもある。

そんな心意気のままに、段ボールの蓋をぱつかーんと開く。

閉める。

……？

もう一度、開く。

目が合った。

「誰だコイツ」

「ギヤスパーーヴラデイ、同級生です。ギャーくん、と呼んであげてください」

中に納まっていたのは、肩口まであるストレートな金の髪に紫水晶アメジストの瞳を持つ少女……間違えた男か。

しかし、幾ら小柄でもダンボに納まるとかってどうい物理法則が働いたらそんななるのか。

エスパーカーか。エスパーカーか。

『うっおおおっ?! 美少女! 美少女が増えたあっ!』

『やったぜ勝ち組じゃねえかこのクラスっ!』

『クラスメイトが増えたよ! やったね齋藤くん!』

外周にて様子を覗っていた男子らがドツと沸く。

いや、少年だから。気づけよお前ら。

……まあ、箱の中に納まっている服装見た感じ、女子制服着用してるから勘違いしても無理ねえか。

俺？ 骨格見れば判るでしょ。  
そして密かにフラグが立ってる斎藤くんには、敬礼。

「で、なんでこんななってんだコイツ」

「極度の人見知りで対人恐怖症も相俟ってコミュ障も併発してます。トレーニングという名目で昼の学校へと連れ出したのですが、結局自分から動こうとしなかったのでイマコレです」

これでホワイトカラーにレッドアイならば子兎認定も容易かったのですがねえ、と他所の話を持ってきて続けた塔城。そういうことじゃなからう。

「というか、引き籠りの連れ出しをしたご本人の言うセリフとは違う気が。」

ふうむ、しかし微妙な既視感。

引き籠り、コミュ障、対人恐怖症、見た目美少女……なるほど、森久保か。

いや、そうじゃなくて、必要なのは経緯だろ。

「転校生、とは違うのか」

「引き籠りです」

「こ、小猫ちゃん酷い……」

小刻みに震える美少女（見た目）が涙目で呟く。

その小さな抗議に視線を向ければ、更に小さな悲鳴と共にダンボへと潜り込んでゆく小動物系同級生（2人目）。

目が合っているうちに、にっこりと微笑って警戒心を解くお手伝い。「ヒイツ!？」

「……塔城、なんだか更に怯えられたんだけど」

より強い悲鳴と共にダンボへと収納された小動物系同級生2号の



姿が其処に。  
解せぬ。

「烏丸くんは正直見た目がかなりチャライですから。自分とは違う人種で忌避感が先立ったのかも知れませんが。差し詰め、街中のナンパ野郎に怯える清楚系少女の如く」

「塔城の言い分がことさら酷い件について」

誰がシブヤ系か（言っていない）。

「おうおう、どけどけい烏丸っ。美少女怯えさせるとか口ほどにもねえやつめっ」

「ギヤスパーちゃんだよ、初めましてっ、紅のスーパーガイ・橋爪ですっ」

「同じく外神田ですっ、よろしくうー！」

「新宮坂だ、ふん、よろしくな」

色々とキャラ付けを終えたらしいクラスの男子が、歓楽街の客引きみたいに顔出しを開始した。

クソうぜえホスト臭がぶんぶんするぜ……。他人の失敗を見計らってモブが湧く湧く。

——吹き狂え、元素の、彼方まで……。っ！（舌打ち）

「ひい、いつ、いやあああああ!？」

少女みたいな悲鳴を上げて、ヴラデイなる小僧は詰め寄る男子から逃げ惑う。

が、普通に考えて、段ボールとか完全に逃げ場がない。しかし、其処にて何故か、俺の障壁が発動した。

「——あ？ おい塔城、あの小僧まだ他になに、か……。塔城？」

気づけば、——クラス中の『なにもかも』が静止した世界。

教室内で動いているのは俺とヴラディのみで、時計の秒針すらもその動きを止めてやいることをも把握して怪訝に思う。

何がどう働いてこうなった？

「っ、ひっ、いうっ、な、なんであなたは動いてるんですかあっ……!？」

怯えた顔のまま、ヴラディはこちらへと問いかける。  
なるほど、お前か。

「無差別な存在凍結……？ ていうか、時間干渉だよな……。マジか、マジか……!？」

無差別つてことは制御が未熟、ネギ君みたいな感覚に近い魔法制御。広範囲つてことは認識上の絶対線が及ぶ範囲内と云う事だから、要するに視界に納まった射線上が術式の対象内つてことか。

そして超りんのカシオペアで再現が近い性能つてことは、原作を準拠すれば並行世界移動への希望が見えて来た……!？」

「おいちよつとヴラディ、少しいいから解剖させろ!」

「いつ、いやあああああああ!？」 唐突に命の危機が差し迫ってきたあああああ!？」

ほんのちよつとだ、先っぽ、(眼球の)先っぽだけでいいからっ!

「お前を信じる、俺を信じろッ！」

「——心に思うがままの姿を、その造型へと当て嵌めてください。芸術で繋がるコミュニケーション——そんな英語があっても良いと、私は思う。レッツトライ！」

「「レッツトライじゃねえよっ!!」」

俺もそんな『英語』、知る範囲でだが聞いたことも無いな。

眼前に粘土の塊を『英語の授業』に用意された時は何事かと思ったが、赤龍帝のを筆頭に何人かの生徒らがツツコミを入れている以上はこの学園特有の『一般教養』の類なのだろう。

経営はグレモリーが裏で采配を下しているという噂もあるくらいだから、此れだから悪魔という奴は、と呆れた感想しか湧いてこなくもなる。

駒王学園へと通うようになって早くも3週間が経過したが、当初の目的だった槍の神器遣いとは未だに顔を合わせていない。

というか、詳細を探ってみたところどうやら下級生らしく、編入する学年を間違えたらしい。

悪魔の跋扈する学園内だから情報を仕入れられないのは仕方のないことだと思われるかもしれないが、此処を占有しているのは他でもないグレモリーだ。

自身の支配権に墮天使が乗り込んでいても下手に接触しようとしなかった実績を持ち、結果として後手に回りアーシアリアルジェントの命の損失と直接殲滅で墮天使下位組織20数名を葬り去ったあのグレモリーだ。

『魔王の妹』という手札を筆頭に悪魔社会内ですらも様々に伝手があるのだから、それらを駆使して早い内に墮天使総督などを筆頭に各方面へと報告してやんわりと遠ざけることも可能だったはずなのに、みすみす被害を広げた『実績』を持っている脳筋娘だ。

ついでに言うと、墮天使が領内で神器所持者を狩っているのに見逃

すほどの情報のザルっぷりだ。

結果として赤龍帝を死なせてしまった被害も、悪魔に転生させたか  
らと言って見逃せるような記録ログでは無い。

そんなグレモリー領内で情報を見逃す？

ありえない。

要するに、件の彼は悪魔側へはほとんど認知されていない、非常に  
秘匿能力が（恐らくは本人のが）高い人物だということだ。

外周から覗って、余計に下手に接触するわけにはいかないと判断す  
るに至る。

——が、それとこれとは別問題だと思うんだ。

分厚い瓶底眼鏡で隠れた目線を、ちらりと教室内で無駄に目立って  
いる赤龍帝のへと向ける。

一心不乱に女体の立像を作っていた。

お前さつきはツツコミ入れてたじゃないか、順応性高いな。

というか、お前が育てるべきスキルはそういう方面じゃなくて戦闘  
方面だろうが、まだ目覚める予兆も無い赤ウエルシユ・ドラゴンい龍が草葉の陰で泣い  
てるぞ。

アルビオンが言う処の俺のライバル、とやらの有り様に知らぬうち  
に嘆息が漏れた。

最初にコカビエルを単独で撃破した様を見た時は心が震えた。

が、それと同時にアレは決して敵対してはいけないモノだ、と理解  
も出来たのだ。

だからこそ、コカビエルを回収するときも素顔を晒さず、赤龍帝の  
が覚醒していないことも相俟って用事を片付ける方面のみで事態の  
収拾を図った。

その帰り道に『禍カオス・ブリゲートの団』という芳ばしいネーミングの一団にスカ  
ウトされたりもしたが、旧魔王と分類される真魔王等と自称する一派  
まで加わっている以上は適当なところで潜入して見切りをつけるべ  
きだと思う。

というかアザゼルに報告したときに、潜入捜査を促すような演技で  
適当に乗り切れ、とも指示されていたりする。

恐らくだが、墮天使の中にいるコカビエルみたいな戦争賛成派のよ  
うな奴らの受け皿になっている可能性も考慮して、内憂外患を捌く時  
間稼ぎも兼ねているのだろう。

話が逸れたが、俺自身強者と戦闘し強さを重ねたいという願望があ  
るにはあるのだが、その目標の途上としてこの俺ヴァーリールシ  
ファーの祖父に当たるリゼヴィムⅡリヴァンⅡルシファーを討伐する、  
というモノがある。

それを可能とするために旧魔王派閥、要するに前魔王の子孫の1人  
が名前に組み込まれていることが確実な集団に属するとか、寝言は  
寝て云えとしか言いようがないのだ。

いくら自己の研鑽が目標とはいえ、いや、だからこそ其処に余計な  
『澱』を組み込んでショートカットを果たそうとするほど短絡的にな  
る気は無い。

それに最初にも理解したことに繋がるが、件の槍の神器遣いは正  
直、俺の思う『強さ』とは全くの別ベクトルの存在のような気がして  
ならない。

例えるならばアレは殲滅兵器のような、利己的で計算的で相手の感  
情を一切配慮しないタイプの『強さ』だ。

何かと敵対する以上はその心内もまた必要な分野かもしれないが、  
彼の場合は恐らく『戦いに赴く』という『前提』が無い。

『相手の目的』を阻止する方向へ計を積むタイプであり、だからこそ  
実力が全ての『この世界』においては、四つに組むことすらも遠い存  
在。

武術家のように練磨と研鑽で鍛え上げる精神性を一切排除した、た  
だただ敵が目の前に来たから切り崩した、と云わんばかりの作業。

あの時目にした『コカビエルの排除』からもその志向は覗えたので、  
俺の推測は間違っていない筈だ。

同時に、祖父リゼヴィムと似たようなタイプだとも思ってしまった。  
た。

その点を自覚してからアザゼルへと直通したのが、結果的には最良  
であったのだろう。

自身を冷静に見つめ直すことが可能な隙間を得られたお蔭で、どう考えてもテロリストにしか思えない集団に後ろ盾も無く合流しようとか思わなくて済んで良かった。

敵がいけないことは目標上嘆かわしいが、『途上の目的』すら達成出来ように無い横道に逸れることは迂回路にしても進む意義が無い。

件の一団は『集団の目標』が何処かに定まっているのかすらも怪しいので、それならば俺に追従できる『個人』を牽引しても問題では無いはずだ。

精々引つ掻き回して時間を稼ぐとしよう。

そんなことはさておいて、駒王に通うようになった経緯だが。

——— 他にも、アザゼル養父に嵌められた感じがしないでもない。

初めは、件の槍の神器遣いを見張る名目でアザゼルに打診された編入であった。

編入というよりは潜入に近いし、事実悪魔側から俺への接触は一切無い。

魔力の隠し方をしっかりと出来ることの確認も兼ねてと云われていなければ、学園の外での接触まで凶つていたかもしれないし、結果としては問題は無かった。

だが、それならばやはり最低限度の情報収集はあつて然る筈だし、何より赤龍帝のと同じクラスに編入された、という部分が一番納得がいかない。

……やはり、これはアザゼルが俺に集団生活とか社会性とか倫理なんかを学べとの、遠回しなメッセージなのではないかと思う。なぜならば——、

『——おっと、すみません。いやあうちの娘が可愛くて、この通り最新式のビデオまで買ったちゃいましたよ！』

『ほほう奇遇ですなあ、うちも同じ理由でコレです。部下たちからも、晴れ姿を見せろとうるさいもんで』

……教室の後ろの方で、他の生徒の親御さん（というか、赤龍帝の

の父親に見える。娘というのは、アーシアールジェントの事か？とハンデイカム片手に談笑しているアザゼルの姿があるからだ。まるで『親バカ』の如く、ひとが粘土目前にどうにも出来ない様を見るのがそんなに愉しいか。

というか、仕事はどうした墮天使総督……っ!?

『――月に牙を穿ち天を衝け！ ギガ・ドリルう!!!』

――葛藤した次の瞬間、そんな絶叫と共に爆音が校舎階下の方から響いた。

おい待て、何の騒ぎだ……？

▽▽▽

「えー、諸君らにとって非常に残念なお話があります」

一学年英語担当の安田先生が、授業開始に開口一番に切り出したのが始まりだ。

「二学期分、終わっちゃったんだよね、英語……」

非常に言いづらそうな感じで、目線逸らしつつ呻く安田先生。

確か、今日の授業参観は英語が……、え？ どうする気？

「スマン！ 俺の授業の進め方が超上手いからこんなことになっちゃまった！」

「先生、それは上手いと言えるんですか？」

「きよ、今日の英語は仮眠とします！」

「ダメ教師だ!?!」

授業参観だよ？

自習にするのもアレだとは思うけど、仮眠で。

「よし！ みんな大好き安田先生への質問コーナーにしよう！ 特に女子！ どしどしご応募しやがりください！」

オナシヤス！としようもないことを続ける安田（先生）。  
もう駄目だこの先生。

あと私春日部先生の方が好き。

「先生休日何してんの？」

「安田先生どうして教師になろうとしたの？」

「安田はどうして女子高生とか好きなの？」

「せんせーせんせー」

「男子は黙ってる!!! 二次性徴終わりきってない可愛らしい声音で囁るんじゃねえよ!？」

男子onlyで質問コーナーは和気藹々と進む。

クラス単位でどうしようもない気がしてきた。

あと、どう考えても二次性徴終わってるっぽい烏丸くんが「うそ、俺変声期終わってるからそれなりに声渋いと思ってたんだけど……」って微妙な顔してたけどどうでもいいよね。

渋いつてよりはハスキーだよ、烏丸くんは。

「先生恋人とか作らないの〜？」

「おっ、樋笠いいぞ、その調子だ。10ポイントとかあげちゃおっかな」

ギャル系の樋笠さんが質問を投げる。

お蔭で安田（先生）は調子に乗ったが、ピンポイントで男子らへ何某かの刺殺効果が走った気がする。



「俺はほら教師だからさ、お前ら（生徒）が恋人みたいなもんだからさ……」

「安田ゴメン！ 俺恋人いるんだ！」

「俺も好きな人が！」

「俺も！」

「俺は嫁さんが」

「男子に言ってるじゃねえんだよ！ あと烏丸、嫁ってナニ詳しく」

珍しく殊勝な声音で応えた安田（先生）に先程みたいに男子らの声が唱和する、中に、烏丸くんのが交じってた。

それ、この場で暴露しちゃっていいの？ まあ安田（先生）が今は主役だし問題無いのかな。

「先生どうしてクビになんないの？」

「直球は辞めて!? 傷つくっ！」

案の定、烏丸くんでは無く安田（先生）へとポニテの斧裂さんが。というか、彼女の場合はカラオケでの前科があるから聞きたくない答えを回避させた恐れが。

なんで烏丸くんて無駄に女子に人気なんだろう。特に美少女に。

「そいえば塔城、質問あんだけど」

クラスの熱気に押され気味だった控えめ系美少女へと、烏丸くんが潜めるように声をかけてくる。

「というか私だった。」

「なんですか？」

「なんでグレイフィアさんが後ろでハンディカム回してるの？」

「ああ……。」

「私、保護者が居ないので、代わりに出張つていただいでるのがグレイフィア様なんです。今日はなんとかギャーくんも一緒に授業を受けているので、ああして記録を撮りたいのだと」

「なんか、こんな状況になってて申し訳ねえな……」

「まあ、しかたないんじゃないですかね。というか、烏丸くんの場合には……」

彼こそ、保護者の類はどうなのだろうか。

天涯孤独と本日初めに聞いていたので、来てる筈はないと自負していたようだったが……。

「ご覧の通り、同居人が後ろで手を振ってる」

魅衣さんが烏丸くんの言う通りに手を振っていた。

女子高生にしか見えない人と同居してる時点でギルティである。

私の懸念を返せ。

「つーか、そのグレイフィアさんの隣にいる黒髪美女は親戚とかじゃないのか？ こっち見て手え振ってんぞ」

「……………何故？」

何故バレマシタカ……？

「何故も何も、妖気流れてるってことは妖怪で、つーかお前と波長同じだからむしろ姉妹か？ 美人さんだな」

後ろ目に確認しつつ、烏丸くんは何でもないことのように応える。グレイフィア様の隣に居る黒歌姉さまは、呑気な顔でこちらへ手を振っていた。

アンタ今でも逃亡犯のままの筈ですよ？ いつリタイアしたの

？ 申告で昼日中から出歩けるくらい制度緩かったっけ？

▽▽▽

にやっふふふ、やっぱり来てよかったわあ。

クラス行事に積極的に参戦できないしろてばカワイイ！ 手を挙げないしろ可愛いよチョーカワイイよ！

ヴァーリを仲間に引き込んで良かったなあー、お蔭で今日こうして授業参観があるって事も知ることが出来たしっ。

「それにしてもなんか不安な先生だなあ、この学校だいじょうぶなのかにや……？」

「生徒人気は高そうなので問題は無いかと思えますよ？ それに校長は人格者です、本当にダメな教師なんかは採用されていない筈です」

独り言ちらたら隣の銀髪でタイトスカートなお姉さんに教えてもらった。

ていうか、この人ルキフグスのひとだよね？

なんで単独でこっち来てんだろ、魔王の妹様は3年って聞いてたはずなんだけど。

「わざわざ教えていただいてありがとうございますにやん。お姉さんもご家族がこちらに？」

「明確には部下という立場かも知れませんが、義妹は家族として大事にしている様子でしたので。こうして様子を覗いに来た次第です。貴女もっ？」

「はいにや。ちよっと疎遠になっちゃってる妹の様子を覗える、良い機会と聞いて来ましたにや」

「それはそれは」

のほほんと嘘偽りなく情報が交わされる。

まあいつかにや、特にしろをどうこうしようという気配は見られないし、慌てて連れ出さなくとも済みそうなので安心したにや。

というか、しろてば隣の男子と仲がいいのかにや？ 表情には出ないけど、好意を持っているのがバレバレだにや。

『――月に牙を穿ち天を衝け！ ギガ・ドリルう!!!』

ドオオオン！つてなんか隣のクラスから聴こえた。

ていうか美猴の声だった。

なにしてんのにやアイツ!?

☆「人妻抱くとか後ろめたいわー超背徳感あるわー」

じゅぶっ、と濡れそぼった女性器が反り返るほど勃起した男性器を押し返すことも無く受け入れる。

抵抗も無くすんなりと挿入<sup>はい</sup>ってゆき、尚且つきゆうきゆうと締め付ける肉の脈動に正しく悦ぶ己の肉棒は、締めることにいきり立つかのような反響を返す。

そういう『返事』を受け入れて、更に脈動が返す肉壺の蠢く様は共に享樂を貪り合う獣欲の咬合の如し。

そんな『会話』はまた、互いに負けまいと鬨ぎ合う勝負のようでもあった。

「……っ、くっっ」

それなのに、彼女、グレイフィアさんはやや苦し気に、如何にも意に沿わないかのように声を漏らすことを押し留める。

事実、自らの口を手で塞ぎ、苦しそうな呼吸を繰り返し、押し掛かる俺の身体から逃れることへも意識を割けない状態で彼女は、隣で寝入るサーゼクスさんに気づかれないうように声を殺していた。

男女の性差を分つ互いの特徴は組み合わせるのが自然な姿である、と彼の世界で最も売れている書籍でも宣っていたが、倫理をも推す彼の書籍は更に『人の妻を寝取るなかれ』等とも言っていた筈だ。

件の書を抛り所とし、その上で翻意を唆するのが悪魔という者らの本分であるのだから、俺がこうして魔王の奥方を抱いているという現状は悪徳を促す彼らの存在意義<sup>レゾンデートル</sup>を後押ししているはずなのに、何故に彼女は隠れて突き合うのであろうかとちよっと問い質したい。

▽  
▽  
▽

なんだか横道の方で、文字通りサイドストーリーが展開していたっぽい授業参観は、校舎内の様々なところで騒動が巻き起こっていたらしい。

コスプレ少女が写真撮影会を開催していたのは序の口で、隣のクラスでは参戦した父兄らしき方が人外バトルを繰り広げたとか風の噂で耳にした。

実質自習扱いであった我がクラスはまだマシだったご様子で、2年の何処かでは英語の授業なはずなのに工作が実施されていたとか。

……小学校じゃねえよなあ、駒王って。

塔城は塔城で、参観に来ていたと思しき黒髪のお姉さん？を追いかけて校舎内を駆け回ったらしいが、結局放課後にはしよんぼりしたご様子で隣席へと戻って来ていた。

ご家族が見つからないって、どうなんだそれは。

俺は俺で、矢荷成<sup>ウツチ</sup>荘<sup>チ</sup>の住人らが参戦してカオスになる可能性をやや懸念していたが、実際に顔を見せたのは同居人程度で無事に終了。

むしろ羽衣ちゃんの授業参観とダブルブッキングしていたご様子で、他の皆さま方はそちらへと遊びに行っていたらしい。まあその辺はドンマイとしか言いようが無かった。

そんな事情を肴に二次会が催されていた酒宴の席へと、のこのこ現れたのが魔王様ご夫妻であった。

「突然お邪魔してしまって申し訳ないね、私は魔界の現魔王、サーゼクスールシファーという。リアスの兄だ」

「はあ……、あ、烏丸です」

本当に唐突にやって来られて思わず生返事が出た。

遅ればせながら、軽い自己紹介で相槌を打つみたいと言を返す。

事実、初対面で何をどうしたらいいのか、サーゼクスさんの隣に居るグレイフィアさんに聞くわけにもいかないだろうか……と自己判断を駄目だろうなあと下す。

というか、魔王と名乗るからには矢張り立場的には国家元首みたいなモノなのだろうし、そんな人が場末の下宿へと参戦したらどんな事態が起こるのか想像したくない、ってやや脳裡が悲鳴を上げているのだが果たして。

「とはいえ、キミは悪魔こちらの事態には直接関与しているわけでもないし、私のことは名前呼びでも構わないよ。リアスと良いお付き合いをしてくれる、というのなら是非とも『お義兄さん』と呼んでいただきたいのも事実だが」

「え、妹さんの付き合いに口出ししないんすか？」

此処で『主人公』的なキャラクターならば難聴系で押し通すのが割合的には高いのだろうが、サーゼクスさんの無駄に好感度高い言い分に素直に疑問を口にする。

この場合の『お付き合い』というのは、当然男女関係に端を発する意味合いだ。

兄弟兄弟と言えば腹違いの無駄に似通った兄がいる程度で、特別な感傷も感情も抱いたことのない俺が言うのもなんだが、妹の付き合い相手には幾つか難を思うのが兄という立場の人間なのではなからうか、と無駄に気を配ってしまった。

見た目は美少女であるし、小さい頃も可愛かったであろうあのグレモリー先輩ならば実兄がシスコンになっても可哀しくもないんじゃないかな、って。

「釣り合う家格で相手を探すにしても、とある一件以来無理に話を通した父が家庭内での発言力を若干落としているらしくてね。そもそも、恋愛結婚をしてしまった私とて、リアスに口出しできる立場でもないし」

「そんな赤裸々な事情を俺に語られましても……」

やはり貴族的なご実家であらせられるか、と今更ながら実感させられたのだが、尚更俺に言うべき話では無からうに。

ところでとある一件で何の話？ 俺に関係してるはず無いよねえ（すっ呆け）。

「旦那様」

玄関先で話していることに焦れでも生じたか、グレイファイアさんが口数少なめに声をかける。

というか、先程から思っていたが悪魔のルビ読みと言い『世界の裏側の事情』を明かさないように、ご夫妻そろって言葉を濁している節があった。

種族として格上であるはずの『魔王』を、体面を気遣ってか旦那と呼ぶタイトスカートの出来る秘書風グレイファイアさんが無意味にエロい。

秘書で若妻プレイとか、無駄にムネアツ。

「おっと、そうだった。今日ここに来たのは、三日後に開かれる会議に、キミにも参加してもらいたかったからだ」

用件を思い出したのか、手の平にて拳をポンと叩いて単刀直入に魔王は語る。

手の平ポンは表現が古典的かと思いきや、どうも此れで軽い認識障害結界が発動されているっぽい。

とはいっても、俺に直接効果が出る類のモノでは無く、自らの言葉が他の者には届き難くなるタイプのモノだ。

使い方としては実に緻密。

それはともかく、会議、とな？

「リアスや朱乃の報告で耳にしてはいるモノの、キミは私たちの世界に直接は本来かかわりのない人間だ。しかし、コカビエルを単騎で撃破し、新しき聖剣を打ち、その使い手を我々の陣営へと引き入れてくれた。キミは単体で三竦みのバランスを充分に崩すことが可能な人物だ。そのようなキミを放置して、こちらで話を通すというのは余りにも不義理だと思ってるね。他の陣営に声をかけられるより先に、私が一足早くに声をかけに来た次第だ。何より、キミの通う学園で行わ



れるモノだ。知らないうちに終わっていた、では流石に不本意だろうか？」

魔王様なりにはこちらをキチンと重視してくれているみたいで、少しだけ感慨深い自分がある。

こういう為政者って、個人の思惑なんかは割と二の次にして勝手に事態を進めるイメージがあるからかな。ホント少しだけ感激したわ。言ってる内容としては中々に未熟だけど。

個人の感情を優先しては駄目だろうよ。

集団を率いるリーダー的な立場で合ってるんだよね、魔王って。

どの程度の被害が出るのかを与り知れぬ地雷みたいな人材を、引き入れるわけでもなくただ立場だけを用意して、権利を履行させる約束も取り付けずに各国代表と話が出来る立ち位置に連れ出すって駄目じゃねえか？

ああ、なんかグレイフィアさんが俺を紹介してないっぽい理由が臍気ながらにわかった気がする……。

やっぱり、先にグレイフィアさんに声をかけなくていて正解だったわ。

そもそも先立ってグレイフィアさんが俺のことを紹介していたんなら、この魔王様も妹さんの関わった件で功績の一つとして挙げている筈だろうし。——おっと、俺には関係ない話だったね。失敬失敬。

……というか、今更だが、お二方のご関係は御夫婦でFA？

男女連れ合ってこんな時間にやって来たからご夫妻って自然に呼んでたけど、秘書的立場にある上で秘密裏の会合に連れ添って来ている時点でプライベートな時間帯って見た方が確実だよな？

さつきも恋愛結婚云々言っていたし、というか義妹がどうのこうのって前にグレイフィアさんも言っていたし。

グレモリー先輩にもう1人か2人兄が居ない限りは、この人が旦那さんで確定だろうなあ。ていうか距離感からして絶対か。

「それで、どうかな。参加してくれるかな？」

いいともー、って思わず口にしそうになった。  
このネタってこの世界線通じるの？  
それは兎も角、

「いや、ちょっとお断りします」

と、ご意見を却下する。

「え……何故？」

「話を持ってきてくれたことには感謝しますが、だからこそ俺が交じっても大して意味が無いというか。三竦み？の世界にはこれからも直接拘わりになる気は無いので、是非とも中立且つ不干渉で推し留めておいてくれたらば、と」

ぶつちやけ、そんな立場になつてんの？ とサーゼクスさんの言にはモノ申したい部分もあった。

が、そんな彼らの事情など俺が知ったことか。

俺は帰るために時間を割く所存であるので、そちらのルールで縛られている暇などないんですー。

「いや、それならキミが直接言うべきでは……」

「ひっそりと暮らしていたいで、顔見せを直にやるといのは控えたいですなー」

あの学園で暮らしていて、今更ひっそりも無いだろうって？  
建前ですよ建前エ。

▽  
▽  
▽

そんなこんなでお断られて、サーゼクスさんご夫妻はそのまま帰宅

となるはずであった。

が、長々と玄関先で話していたのがやはり目についたのか、気づけば宴席へと連れ込まれているご夫妻の姿が！

程よくほろ酔いであった住人らには、一度参戦していたグレイファイアさんの事情には無頓着であったらしく、俺との関係性を追求されなくて済んで良かったとだけ言える。

旦那の前でどの程度まで知れ渡っているかわからん性事情を暴露されたのかわかったもんじやないのが、彼女の立場からした矢荷成荘なのであろう。何という地雷物件。え？ 言葉の意味合い違う？ そうかなあ。

そうして騒宴に巻き込まれ、  
酒に潰れて泥酔したサーゼクスさんらを帰宅させるわけにもいかず、

俺の部屋に布団を敷いてご宿泊と相成った。

結果として追い出された同居人は、そのまま墓場で三次会である。運動会とも言う。

——その晩にて、ようやく今回の本題が始まるわけである。

「……アンタ何してんすか、グレイファイアさん……」

「申し訳ありません、烏丸くん。今日はこのような形になってしまつて……」

並べられた布団の片割れから抜け出して、俺の上へと跨った彼女が  
小声で謝る。

何を謝罪してるのかは置いとくとしても、就寝の為にか衣服を取っ払い、全裸である彼女の肉感あふれる肢体が俺の肌へ直に触れて覆い被さっていることは謝る事では無いはず。

というか、ご褒美過ぎて勿体無い。

え？ 食べちゃっていいの？

「ごっご、お好きにしてください」

「……え、マジで？」

ぴとり、と胸板へ、豊満な乳房が柔らかい重みを感じさせてくれる。囁くような小声のまま、彼女の吐息が耳元で振れた。

「その代わりと言っては何ですが……」

「……あー、なんとなくわかった」

「話が早くて、何よりです」

にこり、とサーゼクスさんの横では終始鉄面美であった彼女が、此処に来て微笑みを向ける。

反則クセエ……、そんなモノまで持ち出されたら、男子が逃れられるはずが無いでしょうに……。

策士！ 悪魔！ グレイフィア！

今回重視しているのは、悪魔としての体面の問題だ。

更に付け加えるならば、サーゼクスさんの魔王としての立場的なモノとも。

三竦み世界的には過剰評価にしか思えないが、駒王に通っている筈の俺という個人を、その開催地で牽引することも出来ないようでは面子が丸つぶれだとか、そういう話だろう。

更に言うなら、その後で俺が別の陣営で参加表明しないとも限らない状況で、『魔王』が話をすんなり引いた、という話題が万が一外へ漏れたらそれだけで立場が無いのである。

国と国との交渉が喧嘩や駆け引きで成立するのと同じように、ハツタリとか面子とかが意味を為さなくなっただけではどのレベルの不利益条約を下されるのかもわかったモノでもない。

グレイフィアさんは其処を恐れたわけである。

結果として、俺をこうして身体で誘惑し、悪魔陣営に連れ出されての参加を表明すると約束させるに至る。

が、まあ少し待つて欲しい。

「というか、旦那の横でよくもまあそんな場外プロレスで交渉できますね……」

「ああ……。大丈夫です、サーゼクス様は泥酔すると一晩起きませんから。それでも不安だと仰るのなら、睡眠の魔術で保障しておきましょうか」

旦那の指示と違うのかよ。

「他に手段は無いんすかね……」

「貴方には、この方が効果的でしょう?」

再び嘔き、胸板で潰れた乳肉の先端がはつきりとわかるくらいに押し付けられた。

……正直、堪りません。

▽  
▽  
▽

互いの上下を入れ替えて、冒頭にて成ったような挿入になったところで回想終了。

相変わらず抱えた腰と尻の肉付きが雌の匂いをぶんぶんさせる、ムチムチな手触りもキュウキュウとした締めまりも尚宜しい恵まれた肢体。

好きに弄つて良いと許可は既に貰っているので、こうして生物として実に遣り易い体勢、所謂ヨツンバイニナレヨオ!つていう姿勢になつて貰ったのであるが。

挿入の具合が良すぎたのか、グレイファイアさんは一突き目で背をビクンと仰け反らせた。

そのまま嬌声も上げるのかと、思った処で自ら口を塞ぐ抵抗にもならない隠避術である。

直に見得たわけではないが、顔を赤くしつつ悲鳴を漏らさないようにと必死で手の平で口元を塞ぐ様は、なんとというか本当にそそる。

ぐつと、力を籠める感じで、挿入れたまま押し付けるように前後させれば、その毎に声にならない悲鳴が、塞がれた彼女の口から洩れるのだ。

「っ！ んっ！ ふっ！ うっ！ くっ！ くっ！ くっ！ っつ！  
あつ！ んぶうっ！」

当然ながら、そのたびに部屋へ響くパンパンと肌を打つ水気の混じった濁音。

それが隣で寝入る泥酔した旦那を起こすのではないかと、そう危惧しているであろう彼女の締めりは更に良くなっていた。

それが、果たせて行為を速くに終わらせようという気持ちからくるのか、はたまた気持ちイイが故に反応を示してしまっているのかは、……まあどちらでも構いやしない。

「ああっ、いいぞ、すごくいい締めりだっ、ずっと味わってたいな……っ！」

「うっ！ あっ！ こっ、こえをつ、出さないでっ……！ 旦那様

につ、聴こえてしまいます……っ！」

自分から誘っておいて言える立場でもないであろうに、グレイフィアは責めるような口ぶりで口から手を放し俺を嗜める。

しかし、そんな彼女を今支配しているのは、他でもない俺だ。

彼女の口答えに、俺は覆い被さる形へ密着し、揺れている乳房へと手を廻して掴み上げた。

「グレイフィアさん、おっぱい何カップ？」

「んっ、あつ、いま、はっ、そんなことおっ」

「いいから、答えてよ」

片手では掴まえきれない、零れる大きさの肉に埋もれるような掴み方で先っぽを潰し、その間も腰を打ち付けることを止めない。

余っているもう片方の乳房はそのたび重そうに前後に揺れるので、付け根なんかは実に痛そうに見えた。

「えっ、えいち、かっぶで、すうっ……！」

えいち。Hか。

英語で顕わすと改めてデカイ、って思うよな。

「旦那におつきくしてもらったの？」

「そんつ、そんな、ことはっ」

「元からってことはないだろ？ 答えてよ」

腰を止めて、囁くように尋ねる。

少なくとも、人妻で巨乳は予め大きいというのは幻想なのでは、と  
というのが持論だ。

子供を産むと大きくなった、とか聞いた記憶もあるが、それは母乳  
を出すに当って肥大化するのが正鵠だったりするし。

実際、最近新たに加入したイリナやゼノヴィアなんかは、相応に大  
きな乳房を持つてはいても無理に体型を崩すほどでは無い。聞けば  
2人共Fカップらしいが、見た目だけならばそれでも充分に大きい  
だ。

グラビアなんかではJKLと、グレイフィアさんよりも2カップ以  
上跳ねあがった数値が出回っているのだが、それでも彼女よりも大き  
いのかと問われると、……視覚的にはグレイフィアさんが上？

実際に触れているからそう思うのかもしれないが、【育まれた躰】<sup>土壤</sup>つ  
て素直に感想を浮かばせる抱き心地が数値以上の視覚的快感を教え  
てくれているのかもしれない。

……何の話だったっけ？

「か、らすま、くん……っ、こたえ、こたえ、ますからあ、むね、と  
め、てえ……っ」

気づけばグレイフィアさんの両乳を苛めてしまっていた。

支えるように抱え上げて、下乳を掴むように揉みしだき、指先で乳  
首を捏ねるように弾いていた。

自らの口を手で塞ぐことも忘れて、グレイフィアさんは四つん這い  
の姿勢のままに嬌声を囀る。

止め処なく溢れる声音で、呼吸困難になるのではないかと思わせる  
ほどの、休まない断続的な艶の乗った悲鳴が部屋にも溢れた。

……今更だが、防音結界を敷いて置いて正解だったな。

胸だけで此処まで碎けるとか……。

悪魔ってなんか乳が凄いのばかりだから、若干の偽パイ疑惑があつ

ただのだけど、此処まで感じるとなると少なくともグレイファイアさんはシリコンでは無いのだろう。

その答えも、しっかりと訊けた。

「そ、その……、息子を産んでから、おおきくなりました……」  
——息子さん、おったのですね……。

「はひいんっ!？」

一児の母、と改めて知ること興奮度が増した。

胸で感じ切っていたグレイファイアさんへ、刺さったままの肉棒が硬度を増す。

乳房から手を放し、腰を改めて掴まえて——、

——子宮口へ押し込むように、ピストンを再開するっ！

「やつ！ あつ！ らめえつ！ いったばかりっ！ むりっ、これむりだからあつ!？」

キャラ崩壊してるんじゃないかと苦情が来そうなくらい蕩けた声で嬌声を上げて、しかし身動きが出来なくらいに腰が砕けてしまっていた彼女に逃れる術は最早ない。

声だけで止めてと懇願する彼女へ、腰つきで応えを示して勢いはドンドン増す。

断続する拒絶の言葉も、スパートが掛かりだした局面に於いては言葉にも出来ず、再び悲鳴と息遣いを交互に漏らすことしか出来なくなつて逝く彼女は、既に快樂の虜となる以外に意思を保つ術は無かつた。

「ああーやばいつ！ もういくっ！ いくぞグレイファイアっ！ どこに出す？ 何処に出してほしい言ってみろっ！」

「あゝっあゝっあゝっあゝっ！ ーっ！ んあゝーっ！ にやがああつ！ にやがにいっ！ ほじいのおおっ!!」

まだ一発目だというのに、濁音で聞き取り辛い答えで絶叫する彼女に——、

「いくぞおおおっー！」

「んゝにゝやあああああつ!!」

——要望通りに、子宮の中へと勢い良くぶちまけてやった。



▽  
▽  
▽

さて。

未だ興奮冷めやらぬ、繋がったままに放然とした彼女に覆い被さったまま、静かになった室内に唯一響く時計の針の音に耳を傾ける。

思うのは、自ら身を差し出したというのに抵抗が僅かにあった事実。

アレか。姿勢で膣奥まで届いたのが予想外過ぎて、自分の思惑と違う快感に身を預けるのが怖くなったとか、そういう可愛い話……だったらいいなあ。まあ十中八九それっぽいが。

一発目を出してる最中は、あゝーっあゝっあゝー……っ、とくぐもった声で感じるままの悲鳴が漏れていたわけだし、しっかりと奥で逝ったはずである。

……ところで、元修道女組ら3名をセフレにした事情は、果たして彼女へ連絡往つてたりするのだろうか？

「グレイフィアさん、まだ終わってないっすよ」

「っ、んっ、ふっ、あひい……っ」

艶の落ち切っていない悲鳴を漏らしながら、再び掴まえた乳房に反応を返してくれる。

囁くように耳元へ口を寄せれば、ぞくりと背筋が震えたのが密着した肌で判る。

一度抜いて、されるがままの彼女をごろり、仰向けへと寝直させた。

「じゃ、次は正常位で、」

「か、からすま、くん……」

「はい、なんすか？」

熱に浮かれたまま、解されて抑えるモノの無い肢体を眺めつつ、何

か言いたいことがあるらしき視線で見上げる彼女へ、目を合わせて言葉を返した。

「こ、こんな様で申し訳ないのですが、是非ともご協力していただきたい、提案があるのです……」

「……う？ 真面目な話、っすかね？」

「……ん、ある意味、真面目な、しかし、アナタにも得があるモノ、かと……」

はて。

よくわからぬが、とりあえず寝物語の合間に聞くこととした。

さて、第2ラウンド——開始っ！

☆「これを読めば万事オツケー！ 貴女も今日から【あの人】の愛人！」

「——というわけで、聖剣を扱える者を人工的に、と彼らが望んだ理由を理解してほしいとは言いませんが、今後は決してキミのような者を生み出さないように戒める所存でもあります。

木場佑斗君、キミには幾ら謝つても言葉が足りないと思われるでしょうが、どうか彼女らのことを忌避するようにはだけはならないでいただきたい。これが、私からの『お願い』です」

と、お忍びでいらつしやつたミカエル様が、祐斗君へと頭を下げました。

此の方がわざわざ会談前に、時間を空けてまで非公式な場を設けさせた理由が、私たちの陣営へと下つた聖剣使いの2人をどうか仲間として認めて欲しい、と云うモノ。

バルパーの確保で明るみになった教会の汚点聖剣計画とやらの謝罪かと思われましたが、内容が内容なだけに初め鼻白む様相を被っていた祐斗君も意識を向けざるを得なくなっているようですわね。

会談が決定付けられた現状では、いきり立って対立を意図するわけにもいかなかったのでしょうか、かと言ってこうした対応をされてしまえば、いつまでも無下にも出来ませんでしょうし。

……狙つてやっているのだとしたらとんだタヌキですわ、この大天使長。

「……頭を上げてください。僕らの仲間に関しては、貴方に云われるまでも無い僕たちの事情で片づけるべき問題です。『親』役にウチの子と仲良くして、と云われて易々と請け負うべき話ではありませんが、僕はリアス部長の騎士だ。同列となった仲間には、いつまでも蟠りを抱くほど子供でいるつもりもありませんよ」

貴方、つい先日<sup>私たち</sup>こちらの事情を無視し先走って聖剣確保に乗り出していたではありませんの。

復讐に踊らされていた子供が、よくもまあ言えたモノですわね。

……まあ、越えるべき一線を乗り越えて一つ大人になった、と希望的に読ませておきますけれど。

まったく、リアスがキチンと手綱を握る『王』であるのならば、『女王』の私がこうして『家<sup>部</sup>族』の意志を看做す必要も無いというのに……。

呑気に話を聞いて相槌を打つだけでは無くて、もう少し空気を理解しようとする心備えくらいは抱いて欲しいで——

「あの、ミカエルさん、不仕付けで申し訳ないんですけど、アーシアとかも含めて、悪魔に転生したとしても元シスターですし、お祈りでダメージを受けるような形だけではどうか解消できませんか？」

「……申し訳ありませんが、其処はシステムの都合上難しいかと……。私としても、彼女らには不都合の無い生活を送っていたいただきたいのですが、下手にシステムを弄れば信徒への影響が出かねませんので……。」

「そ、そつすか。いや、無理云ってスンマセン……。」

——ちよ、ホラアアアア!?

イツセー君まで口挟んじやつてるじゃないですの！ 止めなさい<sup>あるし</sup>主でしよ貴女は!?

ミカエル様としても、横に居た目的と違う人物に突然話を振られて一瞬「誰だっけ」みたいな目をしてましたわよ!?

そこを億尾にも出そうとしない表情の直しは流石ですけど、それを引け目として覚えられたら二日後の会談にもどのような不備が出ることか……!?

色々と神経を削られる非公式な会合は、その後特に何らかの展開を見せずに終了し。

祐斗君はミカエル様より「お詫びと友好のしるし」として竜殺しの聖剣・アスカロンを授かる、という結果に。

……もし何かあれば此れでイツセー君を斬れ、という暗喩でないことを祈るばかりですわね。

▽▽▽

「リアス、イツセー君にはきつちりと注意しておいてくださいね」

「え？ 何を？」

「先ほどのことです。目上の方の話がまだ終わっていないのに自分の要求を先走って突きつけるとか。失礼にもほどがありますわ」

貴族とかの人種の違いなんかではなく、社会に准ずる一員として備えておくべき心遣い、いわゆる『目上の者を尊重する』という思考が備わっていないのが原因なのでしょうね……。

中学生までならばギリギリ許せますけれど、高校生にもなつて殊勝を知らない人生は如何なものかと。

やはり同じ年の男子では、私の期待に沿える子はいないのかしら……。

「ミカエル様だって、特に気にしていなかったように見えたけど……」

「それは相手があくまでも大人であつたからです。第一、これが悪魔社会に出ての行動であれば礼儀の成っていない半端者、として嗤われることになりますわよ？ ……まあ、悪魔社会の場合なら嗤うだけで終わりそうですけれど」

元来が秩序を重んじることのない生物性、所謂【chaos】に准ずるのが悪魔という種族特性ですからね。

ぶっちゃければ、人間社会の真似事をしているようにしか見えないのが救いかしら。

……あ、これ救いどころか、衰退へ向けて崖を転がってますわね。駄目じゃないですよ。

「というか、学園を出れば普通に貴族社会に戻るのでしょうか？ イッセー君を眷属として連れてゆくのなら、最低限のマナーや常識を備えさせておいても邪魔にはならないかと思われそうですけど」

「……そうね。私の眷属が嗤われる、というのは確かに屈辱だわ」

ふむ。この辺りのプライドは備えているようで安心ですわね。

というか、暗に仄めかせたその辺の話すら通用しないのであれば、貴族としても終わってるところでしたわよ。

「では、その後は任せましたわ」

「って、朱乃は来ないの？ 会談前にギヤスパアの調整をしなくてはならないし、もう時間も足りないのだけど……」

「私はまだこの後、お客様が待っておりますの」

そうして学園へと戻って往くりアス・祐斗君・イッセー君を見送って、自室へと戻ります。

非公式会合の場として指名されたのが私神社の家というのは、宗教観の差異を突っ込まれそうな気もしますが、此処は既に社格も返還されている廃社ですからむしろ隠れ蓑には丁度良いと思われたのでしうね。

だから――、

「お待ちせしましたわね——烏丸くん」

「……あー、いえ、俺は気にしてませんけどね……」

——彼が隠れて居たとしても、神社という立地の都合上、魔力波長が漏れていても気に掛けられることは無い。

実際、歩く魔力タンク彼という特異存在が本殿と数十メートルも離れていない

此処私の寝室に居たというのに、今日いらつしやった彼らの誰にも気づかれな  
いという結果になりましたし。

ミカエル様も、本来目的としていたのは彼であった可能性が高いの  
でしょうけど。

其処は会談前に合わせるわけにもいかない、とグレイフィア様に仰  
せつかつておりましたので、こうして鉢合わせしないように少々細工  
を施した次第ですわ。

……ところで、なんで彼は居心地悪そうな表情を？

「女子の寝室に通されるとかは初めてじゃないですが……、姫島先  
輩はそれで良かったんですか？」

初めてではないのね。

それなら、こちらの要件も通せそうですわね。

……個人的には不本意ですけど。

「お気になさらず。それと、2人きりなのですから朱乃と呼んでい  
ただければ、と」

「えー……、先輩は【あの話】マジで受けるつもりなんすか？」

科を作り、こちらが用意した座布団の上に胡坐を掻いている彼の横  
へと座りましたが、彼は乗り気ではない様子。

しかし、こちらとしては彼の意思は受け付けません。

「グレイフィア様からの勅令ですからね。子供を作れ、との」

「豪く直球で来ましたなあ……」

若干引き攣ったような貌で、烏丸くんは空を仰ぎます。

それは、彼が請け負った【嘆願】を思い出しているかのようでした。

▽  
▽  
▽

まだ二晩目だというのに、幾つ身体を重ねたかも数えきれない。

今夜は獣の雄のようにこちらを従わせる激しい【交尾】で情事は口火を切り、背後から力強く責められ子宮へと押し付けられる滴る肉と血潮の熱に、雌の本能は容易く屈服させられた。

私の旦那様のみへと誓った筈の貞淑に準じた女性としての尊厳など紙のように棄却されたが、元より神へは反逆した身、原初の血を想い起させた彼へ抗えないのならばと、私はせめてもの抗いとして彼を利用することを決めていた。

これは、初めの夜には決めていたことだ。

「か、烏丸くん……、その、ままで、よいので、きいて、いただけます、か……？」

あつ、あつ、あんつ、と彼に押し掛かれて体重を掛けられ、子宮も大きく口を開け嬌声が交じるままに、彼が正面から抱き着いている横顔へと言葉を紡いだ。

それは、旦那様へと送る睦言よりも甘く、自分でも信じられないほどに蕩けた声音を漏らしていた。

「ん、なんだ？」

「実は、以前に貴方に抱かれた際、私の中へと注がれた子種を、個人的に調べたのです」

ずん、と奥へと突き刺さった脈動がぴたりと止まる。

私のことばに、思う処があつたのだろう。しかし、

「と、とめないでください、そのまま、もつと……」

「……ああ。で、なんかわかったのか？」

私は思わず懇願をしていた。

その要求に、腰の動きは再開され、奥を刺激する快感が喉から洩れる声に嬉色を混ぜる。

自然と出る雌としての喜びに、この感触をもつと欲しいと望むそれは、最早理性で抑えきれぬモノ<sup>本能</sup>ではない。

抱き着く彼の身体を抱き返し、曝け出されている太腿が彼の腰を放さないようにと絡みつき、背中へ廻す手が彼へ私の【あかし】を刻み



たがり皮膚を引っ搔く。

初めて好きな人と結ばれた時のような、そんな衝動が込み上げてくる少女のように、私は彼の【支配】を全身で受け止めていた。

「……続きは？」

身体でしか応えない私に、激しかった腰つきが静かに緩やかに穏やかになってゆく。

応えなければまた止められてしまう、そう感じた私は、途絶えそうになる呼吸に合わせて、ゆっくりと説明をした。

「わかったことは、アレほど出されては流石に妊娠するのでは、という懸念が、消えたことでした」

「うん、まあそういう風にやったし」

「それ、です」

詰めるような私のことばに、彼は抱き着いた私の顔を正面から見る。

呼吸も荒く、頬も上気し赤く染まっているであろう、化粧も落としてある【女の貌】をまじまじと見られることは、流石に恥ずかしかった。

「貴方が施していたのは、術式ですね？　しかも、遺伝子へと働きかけるモノ」

「……あれ？　ひよつとして珍しいの？」

「というか、初めて見ました」

私の答えに、きよとんとした表情で目を見開く烏丸くん。

その仕草が微妙に可愛くて、思わず子宮がきゅんと窄んでしまう。

「どれも【自死】を施された精子とか、確保するのがとても大変でしたが、そこは私の中に既に大量に出されていたので問題は有りませんでした。本題は、それをなんとか逆に利用できないか、という点です」

その科白に、彼が身を振った。

「利用？」

「んっ、い、言い方が悪いかもしれませんが、大事な事なんです。なにせ、悪魔は子供が生まれにくいので、少子化を阻止する方向へと役立てたくて……っ、ひうつ」

順序立てて話すはずのことが、早々に漏れてしまい、完全にイニシアチブは彼に掌握されていることを気づかれてしまった。

初めから交渉は負けていたわけだが、それでも続けなくてはならない。

これは、悪魔の社会上、どうしたって外すことの出来ない命題を解消する、最大の契機なのだから。

「つまり、俺の施したのと逆に働く術式を、他の悪魔へと施せ、と？」  
「め、命令する気は有りませんし、むしろこれは、お願いです。あつ、んっ、それにつ、気が進まなければ、貴方がっ、直接っ、あつ」

「ああ、直に沢山の女を抱かせてくれるとか、そう交渉したいのか」  
割と何もかもが見透かされていてどうしようもなく、更にスローペースであった腰つきは再び激しくなり、想定していたことを考えることも難しくなつてゆく。

むしろ、こんなタイミングで要求すべきことでは無かったのだろうが、旦那様サーゼクスが正面から姿を晒した以上、彼らが今後顔を合わせるようになれば尚更振れる話には成り得ない。

今夜を逃すと、いつ旦那様の目を盗んで「私だけ」が会え得るようになるかが見当がつかない為に、こうして勇み足で逸ってしまったわけだ。

「断るよ。俺にだって女性を選び好みする権利くらいある。……あるよね？」

最後の小声はこの距離なのに良く聞こえなかったが、彼の言い分ももつともだ。

だから、こつちにはもつと良いモノを献上する準備もある。

「あつ、朱乃をつ、差し上げますうっ」

「……………は？」

「あつあつあつあつあああああつ!!」

私の返答に虚を突かれたような顔を再び見せた烏丸くんであったが、激しかったそれを我慢しきれず、私は先走って絶頂を迎えてしまっていた。

目を剥いて、しかしそれでも身体を離さないように抱き着いたま

ま、大きく口を開いて絶叫が漏れる。

遮音結界を張っておいて良かった。

この宿泊上でこんな情事が他人へ聴こえてしまえば、流石に隠蔽も難しいであろうから。

▽  
▽  
▽

昨日の今日で連続してやる、という気には流石になれないのですが……。

いや、体力的には問題は無いのだけどもさ。

昨夜のグレイフィアさんとの「秘密のお話」を思い出しつつ、その後にも色々責めたなあ、とぼんやり思う。

でつかいおっぱいが自分の胸肌とに潰れて擦れる感触や、片脚を上げさせて太腿を持ち上げ、突くたびにダンサブルな爆乳の素晴らしさとかに目を奪われていたとか。

ついでに聞くとところによると姫島先輩のソレはグレイフィアさんよりカップ数が上だとか。

胸囲そのものは視覚的にグレイフィアさんの方が上に思えるのだが、大きさというか、成長度合いは17・8という年齢なれば過剰なくらいに著しい、という情報まで寝物語で語られてしまった。

教え込まれたら、漢としてはやはり味わってみたい。

そう思わせるように意図された、グレイフィアさんの目的にはしっかりと沿った推薦状交渉であつたさ。

だからといってYESと請け負えるかというのと、そういう気には一朝一夕になるほど猿でもないのです。

夜も明けて、話を通しておくと言い渡されて、昨夜の情事など億尾にも出さないグレイフィアさんをサーゼクスさんの前で止めるわけにもいかず。

結局、本人へと直に断りを入れようとやってきたらこの状況である。

年頃の女子の寝室へ真つ先に通されるって、もう完全に誘われてん

じゃねえか……。

あ、アキラさんの時は別な？（今更感。

「リアスは大学へ進学するつもりですけど、私としましては其処まで学びたいモノもありませんし。卒業前には身重になつていたとしても、それほど気になることでもありませんし」

「気にしましょうよ。そもそも俺に子供を作る気がないって部分だけでも」

「アーシアちゃんとかつつり子作りしてる烏丸くんに言われたくありませんわ」

ああ、そういえばこの人はすっかり覗いていたっけ……。

——いや、だからこそ止めて置けっ！

「貴方にその気が無くとも、アーシアちゃんは完全に受け入れるつもりで行為に准じていますし、貴方へ好意も向けていますわ。そこを見逃しているのだから、このくらいの要求を呑んでくれてもよろしいのではなくて？」

「グレモリー先輩はいいんすか……？」

「グレイファイア様としても、リアスを差し出すわけにいかないから私を推したのでしょうかしね」

いや、そこでなくて、あのひと、何気に俺へと好意向けてなくね？ってという疑問がね？

勘違いであればいいなあ、ってレベルだけど。

「それに、元々悪魔は子供が出来難い性質ですから。別に今日出来るまで帰さない、というわけでもありませんし」

微笑みつつ、巫女服の姫島先輩は胸襟をそれっぽく開く。

曝け出された谷間は、確かに男性へと生唾を呑み込ませるくらいの

魅力を醸し出していた。

——ところで今更だけど、なんでこの先輩【博麗霊夢】のコスプレしてるの？

「宗教は遡るほどにマテリアル面での支援が信仰の軸であるという話」

神社よりの帰り道、悪魔の俺らが天使の総長に寂びれているとはいえ神様の社へ呼び出されたという事実はともかく、気になっていることを俺はぼつりと呟いていた。

「そういえば、朱乃さんってなんで今日あんな格好してたんです？」

「ああ、あれ普段着よ」

「普段着!?!」

え、あのなんか巫女服っぽいけどなんか違う、むしろ少女趣味的なフリル付きが普段着!?

あ、朱乃さん、意外と可愛い趣味してるっすね……。

「なんでも、普通の巫女服だと胸が立派過ぎて先端が主張するとか。透けるそうよ?」

「ぶふあっ!?!」

思わずその様を妄想して鼻を押さえる。

マジか! 和服って下着を付けないってというのはマジな話だったのか!?

推定メートル越えの立派なお山ならばさもありません、と理解はできるが、出来れば実物を是非ともご拝見したかった……!!

「くっ、何故本来の巫女服では無いんですか!?! 神社に居たんだし、コスプレするなら本格的にやってくれよ……!」

絶望に、苛まれる……!!

……いや、あの格好でも有りつつや有りだな。肩が開けているノースリーブで脇が丸見えだし、その隙間から横乳が、……ぐっへっへっ。

「まあ、それ以外にも理由があるらしいのだけど」

「ああ、前に話したことですね」

と、脳内フォルダに納まった朱乃さん艶姿を脱がせる妄想中に、祐斗の声が挟まれる。

なんだ？　なんか事情でも知ってるのか？

「日本の神道で巫女というのは、元々『拝観』の一部として支持者に差し出される役割を持っていたのが始まりらしいからね。要するに、巫女が処女であることを歓ばれるのは『そういう仕事』へ駆り出されるに至っては価値があるから、というか」

なん、だと……!?

「その話を調べ終えてから朱乃ってば普通の巫女服は着るのヤダ、って言いだしちゃってたのよね。まあ、元々本職として従事するにはご実家の事情があるから受けてられない、というのもあるのでしようけど」

奥にモノの挟まったようにリアス部長と佑斗は語り合う、が、俺としては聞き逃せられない話が今出たよ？

「スンマセン！　忘れ物したんでちよつと朱乃さんのところまで戻ってきます！」

ホルスタイン巫女のご奉仕プレイが俺を待ってる!!

……なんてことは微塵も無く、普通に部長に首根っこ引っ掴まれて学校までドナられる俺なのであった。

まあ、ギヤスパアの神器をしつかりと扱えるようになるのも大事だしな。

早くマスターさせて、駒王女子の時間停止だ！

こう聞くとアダルト系のDVDみたいでワクワクするよなっ！

▽  
▽  
▽

博麗コスプレ巫女風脇巫女服を肌蹴させて露わになった、そこいらの女子高生と比べるとむしろ悲劇しか生み出さないのではないかと懸念が浮かぶふくらみを後ろから両手に抱える。

ふくらみ、と控えめな言い方では到底届きやしない、まさに爆乳と呼ぶべき“それ”の存在感は【圧巻】の一言に尽きる。

支えなくては零れてしまいそうな重さを主張するはずなのに、しつかりとした張りと手に吸い付いて離さない魅惑を併せ持つ柔肌にてばんばんに詰め込まれた肉は、解放されれば男子一人程度など一瞬で呑み込めるのであろう【欲望】という名の奔流を封じ込められているかのようにもある。

それらを暴れさせないように、思わず大事そうに傷つけないように痛めつけないように愛撫する。

その『ひと揉み』のたびに漏れる呼気が、朱乃さんの感受性を如実に顕わとしているので、そこがまた恥ずかしそうに感じられているようでもあった。

「そういえば、これどれくらいあるんです？」

熱くなつて汗ばんで来たもちもちのおっぱいを、たぶたと弄びつつ会話も交える。

はひい、とエロく返事をする人妻メイドから子作りを推奨されていたはずの巫女風先輩は、急かされたはずの使命を全うするタイミングを先送りにされていることに気づいているのかいないのか。

個人的な興味のピロートークへ傾ける矛先へと、しつかりと嵌って



くれていた。

「ひゃ、ひやくにせんちの、Iカップ、です、わ……」

でかい（確信）。

メーカー越えかよ……。

企画モノのAVなら居そうな女子高生だけど、実在するとなると途端に年齢詐称の可能性が蔓延ってきた気がする。

そんな彼女の、stgも穿いてない生足が朱色のスカート袴もどきからすりりと伸びる。

誘い方と言い下準備と言い、貴様とんでもねえ痴女メスフタだな……！

「な、なにか、んっ、しつれないなこと、かんがえてません……？」

妥当だと思う。

ところで何故こんな格好なのかと問うたところ、普通の巫女服だと胸がご立派過ぎて先端が浮き彫りになるという返答が。

——着ろよ、肌襦袢。知らんの……？

どうにも悪魔は、和服は下着を着ない、というモノ知識を筆頭に、間違った外国人感覚で生きているのかも知れない。

昨夜の酒宴でも、サーゼクスさんなんかも酒の席にスゲエ馴染んでいたし。

魔王がへべれけになつてていいのか。

拳句の果てには其処を上手い事奥さんに利用されてるし。

九尾の仙狐に上手いこと唆されて傾国に手を貸したどっかの元名君（漫画版）を思い出したよ。

あれもなあ、愛人が炮烙ほうらくとか蠶盆たいぼんとか庭先に造らせてんだから、せめて何かしら諫めて置けよとは思うのだけどなあ。ちよつと姐己さん、とかさ。

「か、らすま、くつんう、せめつてえ、もつとお、ばに、そう、はな

し、をおっ」

「とは言われましても」

やる気が起きないんだよなあ。

そもそもが、俺の術式を充てにしている悪魔の、種としての繁栄を促そうって言う他力本願だし。

ていうか、それほど珍しい魔法かねえ？

俺が遺伝子に術式刻む、っていう手法を得たのも漫画知識が元だよ？

元は人間を吸血鬼へ、またはその逆へと変貌させるための【遺伝子弄り】の初歩ですし。

とはいっても、エカテリーナに雇われた術式構成とは別物だから、ずっと前に捨てていた過程技術。

まさか日進月歩な技術革新を志す俺が過去の遺物に手を出すことになるとは、なんて学者みたいに芳ばしいことをいつか思ったけど、それが真新しい技術として見られるこの世界線の水準ってほんとうなってるの？

魔法使いが居ないわけじゃないだろうに、科学的見地で魔法を解明することくらい思いついても可笑しくないんだけどなあ。

▽  
▽  
▽

「そうだ、イツセーくん。このアスカロンは、キミに預けておきたいんだけど構わないかな？」

「っへ？」

悪魔でも所持することが可能と調整されたアスカロンを、【次元の靴】と呼べる封印から解除し彼の前へと出現させた。

場所は校庭だが、リアス部長がギヤスパークンと小猫ちゃんを連れに行った時を見計らい、2人きりとなったタイミングで内心を明かす。

これは、僕よりも彼が持っていた方が適任だと思ったから。

「い、いやいや、俺剣とか扱えねえし」

「僕よりもキミの方が相応しいよ。それに、既に【白い龍】とやらも活動を始めている。対抗策の一つは持っていて、間違いじゃない」

「えー……、でも、どうやって持つておくんだよ？ 異次元ポケットみたいな封印術？なんて、それこそ俺扱えねえぞ？」

「【赤龍の籠手】ブーステッドギアがあるじゃないか。それに同期させれば、一体化も可能じゃないのかな？」

「セイクリッドギア 器を発動させるイツセーくん、半ば無理矢理にアスカロンを差し出す。」

なお苦い顔をするイツセーくんに、僕は言葉を重ねた。

「イツセーくん、僕はキミには感謝してるんだ。復讐に捉われていた僕を、普通の友人として日常へと引き戻してくれた。そんなキミだから、僕はキミを守るための【剣】になりたい。守るために誰かの力を預かるんじゃない、キミを守るために【僕の力】を真摯に示したいんだ。それに、僕には僕の戦い方魔剣創造があるからね」

「……祐斗」

何より伝承通りなら、アスカロンには『全ての裏切りと暴力から回避する』という祝福が備わっている。

イツセーくんに関しては、烏丸くんの伝手で眷属になったゼノヴィアやイリナに若干の懸念があるのだし、この程度でも備えておくのも間違いでは無いと個人的に思うのだ。

「はあ、わかったよ。この剣、預かせてもらうぜ」

「うん。まあもつとも、使わないに越したことはないけどね」

溜め息を一つ吐くと、イツセーくんはアスカロンを籠手で掴む。

暫く集中しながら同期することを試みているのだろう彼を眺めていると、不意に言葉を続けてくれた。

「でもな祐斗、一つ間違ってるぜ」

「えっ？」

「俺はお前のことを只の友達、って思ってねえ。お前は、俺にとって一番の親友だよ」

「イツセーくん……！」

ああ、この選択はやっぱ間違いじゃない。

噛み締める嬉しさを胸に、僕はやはり彼にこそ誓いを立てよう、と決意を新たにするのだった。

▽  
▽  
▽

「ところで朱乃さん、知ってます？ 聖ゲオルギウスの竜殺しは、後付けの可能性があるそうですよ」

「んっ、いま、するはなし、ですの……っ？」

「アスカロンそのものの由来は17世紀の小説が元で、その更に元となった伝説では剣そのものが明記されていないとか。更に、実在したゲオルギウス没後の5〜7世紀のオリジナルな伝説では、竜殺しそのものが存在してないとか」

名前だけが先行して後付け設定がさも本物のように扱われたという極端な例である。

この分だと、伝承上剣に掛けられている筈の祝福とやらも怪しいなあ。

なんでこんな話をしたかというと、離れではあるけどあちらでの子を覗いたからに他ならない。

剣を造る、という工程を挟んでいなかった件の聖剣(笑)の大本、と呼んで然るべき作り<sup>集団</sup>手代表が来ていると小耳に挟んだので、どうい

人物なのかをちよつと確認したかったから覗いていたのだ。

見た目は荘厳なオーラ発してるけど、どうにも胡散臭さが眉を顰めさせる天使長とやらが日本の神社に顔を覗かせていた。

サーゼクスさんでも思ってたけど、神秘存在として概念支柱が在るべき方々が受肉してるって何なの？

身体が人の形をしてる以上、上限はあるのだけど。

魔力込めていてもそれを十全に扱えないのだから、人としてのレベルを超えていても『向こう』の「本物」を知ってるこつちからするとあんまり怖くない。

いつか探偵事務所で出会った烏枢沙摩明王が小手先であしらえる様な、そんな人らがトップなのですか。と口にしたいのだが如何に。そんなことを、朱乃さんの乳房揉みながらつらつらと考えていた。乳の付け根からたぶたぶと苛めると、そのたびに嬌声を上げていて満更でもないご様子。

しかし……、据え膳食わぬは男の恥、とも云うのだし、一先ず手を出してみたモノの。

女性として人妻と見紛わぬばかりの色気を醸す朱乃<sup>女子高生</sup>さんを好きに出来るというのは確かに魅力的だが、実際の人妻でメイドという異色キヤラを昨夜に楽しませてもらった身としては所詮紛い物である。

読み手側だって、式週連続でそういう話ばかりを読んでいたら萎えるよね？

なんか今電波混じったな。カットカット。

ともあれ、ピロートークで場を繋ぐのもそろそろ限界。

何か期待してるようだが、お応えするのを構わないほど見境ないわけでも、無いのよ？

「あー、じゃあ、ちよつと疑問があるので、お返事プリーズ」  
「……っ、ーっ」

息も絶え絶え、絶頂も幾らか果たしていきそうな朱乃さんを弄るのを一端止めて、ふと思いつ出したことを尋ねる良い機会かな、と身体から

力が抜けた彼女を後ろから支える。  
その姿勢のまま、割と純粋な疑問をぶつけてみた。

「朱乃さんって、ひよつとして堕天使とかと混じってます?」

「っ、なぜ、それを……!?!」

「いや、今現在、羽根出てますし」

力なく出しっぱになってる羽根は、鳥みたいな黒い翼と蝙蝠みたいなモノとが別個に生えている。

このサイズなのだし、まさかの鳥人間とか言われるよりは可能性ありそうなところを攻めてみた次第だ。

予想は的中なのか、しかし何か思う処でもあるのか、朱乃さんは息を呑むような貌でこちらを見上げていた。

「……っ、お察しの通り、私は堕天使との相の子で……、」

「あ、詳しいところは別に気にしないんで、語らなくとも問題無いっす」

「あれえ?」

種族に偏見も持ってない俺としては本気でどうでもいい話なのでさらりとスルーを推奨したが、彼女の的には何か覚悟でも覚えていたのだろうか、拍子抜けしたかのような頓狂な声を上げられる。

問題はそんなところでは無く、少しばかり腹に据えかねる懸念のような疑問である。

「問題は、……前の何処かのボンボンとのぶっ殺試合で堕天使としての力を初めから使う、って明言しておけば、塔城が俺の処に来ることも無かったんじゃないっすかね? って思う処なんすけど」

「……………」

気まづげに目線を逸らされる。

おい、こつちを見る。

又聞きでしかないけど、墮天使の力って悪魔に有効なんですよ？  
確実に勝てるカードを持っていてのに、なんでそれを使おうって言う戦略が練られなかったのかな？

自分らの先行きがかかっている場面で爪を隠すのは、どう考えても能ある鷹じゃねえよ？

「で。返答や如何に？」

「……私だって、自分を受け入れられないことぐらいありますわよ……」

拗ねたように、齒噛みするように何処か嘆いた様子の朱乃さん。

しかし、先程まで子作りを推奨していた女が口にする事では無いだろうに。

アレだな、彼女は子供染みているというよりは、未熟な上に自暴自棄な部分が微妙に隠れている感じがする。

破滅願望というか、自分の身体を微に至るまで自愛としない、そういう自棄になろうとする前提が備わっている感じ。

幼少期の成長過程に何某かの問題でもあるのかねえ？

「朱乃さん、俺が言えることでもないかもしれないけど、そんな自分を擲なげつような真似をする女性を抱くほど俺は飢えてないんすよ。子供作りたいんだったら、先ずは自分を好きにならなくちゃ」

「……烏丸くん、貴方は……」

と、余計なお世話だろうに云ってしまったことを撤回する間もなく、見上げられたことでこちらも気づく。

なんか、察せられた？

こうしている分には優秀な人なんだよなあ、岡目八目というか。

力の抜けたような肢体を支える腕の中で、彼女の身体がより弛緩したようにこちらへ預けられるのがわかる。

此処で初めて、朱乃さんはふっとはにかむような笑みをこちらへ向けた。

「……小猫ちゃんやアーシアちゃんが気にかけているのも、判る気がしますわ。貴方にも、拭えない過去というモノがあるのですわね」

あるにはあるが、わざわざ口にすることもないので明言する気はない。

というか、むしろ黒歴史だよアレは、と現状弩屑の男子高校生が気まずげに遠くを見遣ります。

弩屑が何を抱えていたとしても、ナニを挽回できるものでもないと言いますか。

「烏丸くんのお眼鏡には叶わないのかしら？」

「つーか、これじゃあ負け犬の傷の舐め合いでしょう」

「あら、そういうケダモノみたいな好意も、アリだと思いますわよ？」

行為と好意を掛けているのだろうか。

昨夜散々メイドを黽つた身としては、余り巧くないと思われる。

「それに、本当に貴方にその気が無いのなら、もう手放してもいいのではなくて？」

たぶ、と自ら乳房を持ち上げて、誘惑するような口調でこちらの唇へと声を添わせられた。

桃色の先端がさつきよりもつんと上を向いており、自らを愛撫して欲しいと懇願してるような目は、何処か幼い少女のようにも思えてくる。

彼女にも幾許かの柵が合った筈なのだが、本日は気にかける余裕も最早無いご様子だ。



先ほどまでの作業みたいに弄る愛撫と何が変わったわけでも無いが、ちよつとその気になっている彼女をもう少し上向きにその気にさせようと意識を傾ける。

自分をどうにでもして良いと暗に訴える少女が、ほんの僅かでも自分を好きになれますように、と余計なサービス精神を発揮しながら、俺は少女の柔肌へと優しく指を這わせるのであった。

「わかんない！ぜんぜんわかんないよお！（裏声）」

「え、ナニコレ、イジメ？」

会議とやらが翌日へと差し迫ったらしい、明けた次の日の放課後のことである。

校庭の隅っこでオカ研の先輩方の手に依り、バレーボールやバスケットボールを独りズンドコ投げつけられているヴラデイの姿がそこにあった。

どうみても現行犯です、先生にユツテヤロー。

あ、でも昨今では教師も見て見ぬ振りするか。

……でも俺が見ぬ振りするのもメンドクセエナア。

「ちげえよ、特訓だ！」

「特訓？ あ、あー」

無駄に熱い兵藤先輩の言に納得。

アレか。

「あの眼球の奴か。目的だけを止めるとか、そういう細かい調整が目標？」

「う、うん、そうです」

ヴラデイが若干距離を感じる。

もう解剖とかしようとしなから、あんまり退かないでくれ下さい。

「その言い方はなんなんだ……、ま、まあそうだよ。そだ、烏丸も持つてるんだよな。コツとか教えて貰えねえか？」

「……何を？」

「え、何って、セイクリッド・ギア神器について、とか？」

せいくりつどぎあ、って、何……あ、いやいや、待て待て、なんか聞いた覚えがある様な……？

「なんだっけ、何か何処かで誰かが話していたような記憶の隅に引つかかる……。何処かで小耳に挟んだような……！」

苦悩懊悩困惑し、もやもやが晴れない。

誰かー、もやっとボール持ってきてー！ キバオウサンでも可。

小耳……、と絶句する先輩方が何か事情でも知って居そうなので、ちよつと話を摩り合わせることに。

互いの情報を取り交わすというのは、実はかなり有意義なことだそうです。

議論とは、共同作業の一環である！

▽  
▽  
▽

「へー、ほー、なるほどー、死んだ主神が遺した人間のみに宿る異能力を発現する特殊道具ね。取ったら死ぬ？ マジで？」

「むしろなんでお前が知らないんだよ……」

そこはほら、俺って並行世界出身の異世界人だし。

涼宮ハ●ヒとかが居たら引つ張りダコなんだろうけどなあ。

それにしても危うかった。

取ったら死ぬようなモノを無防備に晒すなよ、解剖諦めなかったらヴラデイ死んでたじゃねーか。

「で、ヴラデイの目が、なんていったっけ？」

フォービトウン・パロール・ピユ

「停止世界の邪眼、です」

「兵藤先輩のが、」

ブリステッド・ギア  
「赤龍帝の籠手だぜっ」

「木場先輩のが、」

ソード・ブリス  
「魔剣創造、だね」

「……で、アジア先輩のが」

トワイライト・ヒーリング  
「聖母の微笑みです」

順繰りに本人たちが、ヴラデイは大人しめに、兵藤先輩は誇らしげに、木場先輩は悠然と、アジアはいないので塔城が代わりに答える。一通りの説明をしてもらったわけだが、色々とツツコミどころが。うん、なんていうか、さ……すっげえ芳ばしいよね。

直接英訳したわけではなさそうなルビの振り方と言い、性能が名前を聞いただけでは予測でき無さそうな範囲を孕んでいそうな命名と言い、……何考えてるの聖書の神とやら、って言いたい。

むしろ件の聖書の神がこの世界の主軸の創造神、ってことになるのかな。

『向こう』じゃ唯一無二の神は偉大なり教って東方で派生した我が国の改造派生された個人教義と比べると古参で三大教義の一角で儲数も大規模な古株なんだけど、神話って言うカテゴリで依り分けると人類史的には新参も良い処のペーパーのはずなのだけ。

神道だって実は紀元前から続いているモノをベースにしているそうだから、西暦で物事を図ると定規が合わないって言う。

他にも色々と疑問はある。

ヴラデイのフォービトウンなんちゃらの命名に入っているバロル神はケルトの魔神のはずだけど、まああつちは聖書勢力からの討伐や侵略が背景にある被害神話でもあるし、聖書の神が『元になった何かを道具の形で封印した』という筋は通る。ただ、バロルって破壊神だったはずなんだけどな。なんで性能が時止めになるんだろうな。時間に関係するならクロノスじゃね？

逸話にはクロウクルワツハという、元の世界じゃなんか「もにもに」してたスライム状ドラゴンくんを扱っていた、とかいうモノもあるんだし、魔術神と云いたいのならそつちの性能を備えるべきだったので

伝承生物操作

は……。

……でも、根源的にアレは鍛冶の神としての特徴故に単眼とされているはずだったのだけど。ドラゴンを扱っていたとかいう逸話だって「王としての優越性」を盛り込まただけであって、実際に使役した描写が無かったとか……。まあそれで云つたらそもそもバロール神の活躍描写そのものが大本の神話に無ゲフンゲフン。

木場先輩の魔剣創造とやらにも、言いたい。

そもそも、魔剣の定義ってこの世界可笑しくね？

向こうじゃ魔剣と言えば単に『魔力が盛られた剣』なのではなくて、『世界という法則に対して敵対する必然性を備えた剣』なのが常識だったのだけど。若しくは、「魔」と定められるほどに振るうことに代償が必要とされる剣。

例えに出すならグラムまたはバルムンクなんかはその代表だ。ドラゴンって言う「古い世界法則」の主軸であり「人の上位種」に対応して討伐する武器だし、持ち主に対して物言わぬ代償も要求しているし。

まあそれらは基本神話の例だから遠いとしても、一番近いと言えば明日菜のハマノツルギか？ 俺個人は見たことないけど。「魔法という法則」に対応する以上、アレも魔剣の一種になる。実際『姫御子』としての能力の延長線上だったしなあ。

というか、この世界って剣に込められたオーラの質とやらで判断してるよね？ 斬られたら怪我で、時には命を奪うモノは等しく武器だろ？ 振るう奴が主軸なのであって所詮剣は剣だよ？

で、兵藤先輩のが……ルビの方を意識すると、『倍化の歯車』ブリステッドギアになるんだらうけど、此れは多分、車とかで言う処の『ギアを上げる』とかいう慣用句から持ってきた命名だらう。段階変化形の強化道具、ってことになるのかな。

……そういう言葉の慣用句引用が何故『聖書の神』から出てきているのか。

これ、絶対名付けたのは最近だろ。

あと説明に付け加えたロンギヌスって、ナニ。

聖者殺し、ならわかるけど、説明上になんてか『神滅具』って言われたんだけど。

アレは槍を備えた処刑人の名前であって、武器そのものを指す言葉では無かったはずなんだが……。

以上のツツコミどころを言った処――、

「で、でも、烏丸だって持ってんだろ？」

トゥルー・ロンギヌス  
黄昏の聖槍

「もってねえよ」

押し黙った木場先輩はさておき、口答えして来た兵藤先輩に敬語も忘れて思わずツツコミを入れ直した。

もう一度言うけど持ってねえよ。

「あれ？ アザゼルのおっさんは烏丸は恐らくその使い手だろう、って言ってたけど……」

「誰だそれ。……いや、ていうか、槍とか使った覚えはないです」

言葉繋がり【聖槍】？って思ったから答えた。

清掃でも精巢でも政争でも正装でも星霜でも凄愴でもないよな、多分。

「烏丸くん、コカビエルを圧倒したアレは……」

「アレはどっちかというと鉾だし、……三叉鉾ってわかる？」

塔城の言ってるのは【帝釈廻天】のことだろう。きつと。

ポセイドンのアレが根源だけど、ギリシヤ神話が廃れた結果行き付いた果てが悪魔の所持武器代表になったアレだ。

――そうじゃん、悪魔の代表武器って言ったらアレじゃん！

こいつらの中にその使い手見た事ねえぞ!?

……まあ、淫蕩の印とかって意味合いの所謂シンボルマークだから、持ってなくても基本は構わないけどさ。悪魔のナニが三本あつて

女性を満足させる誘惑の印、っていう暗喩が隠れてるんだってよ。キングギ●ラみたいだな。

「じゃあ、烏丸の神器って神滅具じゃなかったのか。それであの威力って、やっぱすげえ鍛えてるんじゃないん」

兵藤先輩がなんか明後日の方向に納得してた。

個人的に鍛えてはいますけど、そもそも俺のアレは神器とやらでは無いです。

この世界由来のモノだから異世界人の俺に当て嵌まる法則ではないだろうし、敵の斃ころし方を知略で検算することはそも戦うことになった以上の【前提】だ。

【打ち合い】に【ならないこと】を図るのが実は必要な【戦いの基本】であるし、実際に武力衝突で事を収めようというのは七割がた負けている証拠であるし、『鍛えるということ』即ち勝つための前提』ではなく自己の研鑽生きたための成長を手前えの理屈で納得されるのって何気にすげえ腹立ちますのもうお前黙れ。

……落ち着け、クールになるんだ烏丸そら。

此処で云って通じたとしても己の胎を晒すだけのみつともない醜聞でしかないし、態々晒してやる義理も無い。

判るように教えることは優しい証拠だって誰かが言っていた。

優しくしてやる義理も無い相手に、そんな甘い顔をするのもないだろ。

「まあとにかく、云わんとすることはわかりました。それでヴラデイのバロなんとかを十全に扱えるだけの修行中である、と」

「うん、微妙に正解じゃないし、実は色々うろ覚えだよね烏丸くん」

気を立て直したらしき木場先輩に窘められてしまう。

そらシヨック。

▽  
▽  
▽

ボールを投げつけてそれを注目する、と同時に性能が発動するような集中を行えるショートカット。

要するに、感覚を一足飛びにイメージへ繋げて一律発動するための反復練習なのだろう。ペパーミントの魔術師がやったみたいな、そんな修行だ。ヴラデイがモノを掴むためには米のアイスクリームを差し入れるのが適切かもしれない。

そんな練習風景をぼんやり眺めつつ、なんでこの人らこんな遠回りなことしてるんだろう、と疑問が浮かぶ。

「塔城、神器って反復練習で制御できるものなの？」

「自己と一体となっているモノですから、やはりそうなのではないですか？」

神器を備えていない塔城がいったん脇に退いて、ヴラデイの修練に当たっているのは兵藤先輩と木場先輩の2人組である。

朱乃先輩とグレモリー先輩は明日のことで席を外し、元修道女3人組は先日のミカエルさんに呼ばれていて不在。

此処の処擦れ違いが多分に重なるが、遭っていたとしても結果碌でもないだろうから気には掛けないこととする。

話を戻すが。

塔城は俺の疑問に応えてくれそうな気配は見せるものの、やはり自分が備えていないモノの話なので明確な答えは出ない。

しかし、扱っているモノに意思が宿るとかいう話もふわっと伺ったわけだが、そもそもは道具である前提は違えていない筈。

扱うならば先ずは――、

「取扱説明書を読めば良いと思うのは、俺だけなのかな……」

そんな疑問が口をついて出たところで、修練に当たっていたお2人の



動きがピタリと止まった。

「……………え？」

息の合った先輩方が揃ってこちらへ顔を向ける。

ヴラデイは元々引き籠りであった所為なのか、ぜひゅーぜひゅーと息も絶え絶えにへばっておるご様子。骨格こそ男子だが見た目は美少女。無駄にエロい有様は下手をすればむしろ塔城より上位に当たるのではなからうか。

「怒りますよ。それより烏丸くん、取説とかあるんですか？」

「さあ？ 1かい測ってみないとわからんけど。ていうか、制御だけならもつと遣り易い方法もあるし、そもそも俺が介入するのもお門違いだよな」

さらりと心を読んだ塔城はさて置き、彼らとの距離感を思い出す。そうだよ、俺このあとバイトあるじゃん。

やや時間を無駄にしたような気分になりつつ、お疲れさまっしたー、と腰を上げた。

「ちよ、ちよつとまってくれ烏丸っ！ 制御できるってマジでか!」

「うお、なんすか先輩、俺この後バイトがあるんすけど」

「そつちより今はギヤスパーを優先してくれ！ アイツこのままじゃ引き籠りのままなんだよっ!!」

腰を上げたところで引っ掴まれた腕を振りほどきつつ、逃げないからとアツピール。

しかし、先輩の言い分は何気の後輩想いの真つ当なモノに当る。

てつきりこの先輩のことだから、時間停止した女生徒に何やかんやをヤル目的でヴラデイの修行を付けているのかと思ってた。

立派な目的があるようで密かに感心しつつ、むしろ思いつかなかつ

たのかと言いたい俺なりの制御法をサムズアップと共に教えることとした。

「目隠しして生活できるようにすれば万事解決」  
「出来るかつ!？」

即座に否定された、げせぬ。  
無理じゃねーよ、視覚情報遮断した美少女が高機動戦闘咬ました例だってあるんだし、可能可能。  
まあアレは漫画知識だけど。

「烏丸くん、流石にそれは……」  
「なんでつすか？ 目視で発動するなら見なければいいじゃないっすか」

「何トワネットだいそれは」

ミセスマリーは良い事言ったよね。  
結果は、悲しい、事件だったけどね……。

▽  
▽  
▽

そんな俺の提案に難を覚える御二方とは裏腹に、部内ではそれなりに役立ちそうだと解釈された目隠しアフター。

後日の三竦み陣営トップ会談では目隠しをしたヴラデイがグレモリー先輩に手を引かれて連れられて、其の様はまるで電波少年のよう。

そつちこそ問題では無かったものの、悪魔陣営の政治的背景の問題点が浮き彫りとなる会談が巻き起こるのであった。

そんな中で、襲撃して来た真魔王を名乗る男女3名に対峙した墮天使総督と名高いアザゼルさんの名言がこちら。

「これは黄金龍君・フアーブルを封じた、いわゆる人工神器って奴だ。差し詰め、『ダウン・フォール・ドラゴン・スピア墮天龍の閃光槍』と言った処か」

……神器とかに命名したの、アンタだろ。

いい年して黒歴史大量製造してるおっさんとか、なんかもう目も当てられないよ……！

☆「いやあ、激動の一日でしたね！」

銀糸の髪が暗がり揺れる。

窓から差し込む月明かりに晒される其れが幻想的な淫靡さを孕むのは、彼女の格好そのものに起因するであろう。

胸部の起伏に乏しく、平坦と言っても過言では無いくらい『ふくらみ』が覗えない姿は女兒としか言いようが無く、決して色気を醸すはずがないのに、女性としての貌を表立たせてこちらを見下ろす。

腰の上へと押し掛かり、こちらへと伸ばされる手は、愛おし気に俺の頬を撫ぜた。

「……烏丸くん、もう、いいですよね……？」

待つことなんて初めから思っても居ない癖に、衣服の全てを自ら剥ぎ取った生まれたままの姿の彼女は、同じように遮るものを除けられた俺の胸元へと寄り添いながら、荒い吐息で唇を這わせる。

舐められた首筋にぞくりと走ったのは、悪寒に近いほどの衝撃だった。

「ん……っ」

反り立つことも未だないそれを、彼女は未だ未貫通であつたと思しき秘所へと宛がい、ひと息に貫く。

その証拠に、暗がりから覗える結合部からは、鮮やかな流血が滲むように染み出していた。

しかし彼女は感じている筈の苦痛を微塵も覗わせることも無く、肉を割く感触もほんのわずかに、水気を孕んだ粘膜が潤滑油のように滑らせて最奥へと直ぐに届く。

浅く小さな彼女の膣は、もし俺がその意気であつたならば決して挿入<sup>は</sup>るはずがないくらいに狭窄で、どう考えても男性のそれを受け入れるようには出来ていない。

そんな未熟極まりない子供が、こうして男性を受け入れることに、一体何の覚悟をしていたのか。

しかし、そんな俺の懸念を他所に、彼女は実に幸せそうに嗤っている。

た。

「ん、はあ……っ、はいり、ましたあ……あっ」

暗がりの所為だろうか。

目に光は覗えること無く、うつすらと微笑むままに、自身の腰を上  
下へと動かす。

振ることも出来ず、されるがままに耐えるしかないこの身だが、堪  
えたままではいられない本能を蜂起させる獣の雌みたいな荒い息遣  
いは絶えず正面から襲い来る。

抱き着いている肢体は幼いながらも、しっかりと女性らしさを兼ね  
たしなやかさと滑らかさを自身の身へ触れる肌が伝導し、及ぶ感触は  
次第に雄としての本能を覚醒させていた。

「から、すま、くん……っ、きもち、いい、です、か……っ?」

止まらない上下運動は既に男への奉仕ではなく、彼女が満足するた  
めの自慰にも似た独り善がりでしかないのに。

この身が相応に興奮するのは仕方のないことだとも言いたいの  
か、俺の本能は僅かに鎌首を擡げる。

身を起こす蛇のように、膣中で動くそれに小さな悲鳴を上げた彼女  
は、それでも嬉しそうに自身の胎の下を覗っていた。

「っん、あ……、ふふっ、感じてるん、ですね……、んっ、嬉しい  
……っ、あっ」

目を閉じ、ぐちゅぐちゅと水音が部屋中へと響くそれを止めようと  
せず、断続的に喉から洩れる嬌声を隠すこともなく、彼女は自身の  
腰を自身のペースで上下させる。

小さく細やかに動く其れは、彼女の普段のそれを想起させるペー  
スの『運動』で。

自己満足を追求したかのような『咬合』<sup>セックス</sup>は幼い身が痛みで制止しよ  
うと云う素振りも微塵も見せず、むしろもつと欲しいと仕草は語る。

首筋へ抱き着き、肌蹴た胸に素肌を寄せて、絹糸が触るかのよう  
だった擦ったさを伴う『子供の肌』は、汗ばみ熱を帯びたことで刺激  
され、敏感になった小さな突起がふたつ、自己を主張する。

触れ合うたびに悦ぶような声を漏らし、触れて擦る淫靡な仕草が自

らを子供では無いと全身で主張していた。

其れは差し詰め獣のマーキングのような、実に積極的な求愛行為であった。

「あっあっあっ、からす、ま、くうん、いいのおっ、もっと、ほしいのおっ」

もう判っているだろうが、俺の上で腰を振っているのは塔城である。

ついでに言わせてもらおうと此処は俺の部屋で、俺は身動きが出来ないように両手をバンザイの形で麻紐で縛られていたりする。

魔力云々で束縛されれば障壁で無効化したり、力技で解くことも出来るのだが、何気に筋力は普通の人間程度しかない俺で、みんな忘れていたかもしれないけど実は魔力強化も拙い俺の弱点はこういう物理拘束だったりする。

要するに、小猫ちゃん大勝利！の瞬間である。

——何がどうしてこうなった……！

気分が乗って来て腰の上下運動も激しくなってきた塔城を眺めつつ、俺はちよつと現実逃避を始めるのであった。

▽  
▽  
▽

駒王学園で開かれた会談は、基本的に衆目に晒されることは無い極秘裏の会合かつ会議であった。

神の不在という前提を把握しつつ、実は種としての目標が違えることが無いはずなのに【潰し合い】を歴史的に繰り返してきた『実はとつくの昔に共存共栄出来ていても可笑しくねーんじゃねーのこイツら？』という、これまでに『自分たちだけ』の生存と繁栄だけを求めて来た三つの種族天使・悪魔・堕天使が、ようやく共同作業を始めようと一步を踏み出した議論の場こそがそれであった。

当然、事前に勢力それぞれでの外交官は顔を合わせておくべきであるだろうし、話を詰め合わせておいて然るべき事前会議があつていても可笑しくは無い。

——無いのだが、始まった『それ』では、どうにもそんな空気が微塵も感じなかった。

あれ？ 俺とかグレモリー眷属とかの『政治的な外様』が場に居るのに、専門の詰め合わせを堂々と取り交わしているよこいつら？

思わず顔馴染みのグレイファイアさんに目を向けて、斜になったような表情で色んなものを諦めた顔をされたのは記憶に新しい。……あつ（察し）。

グレモリー眷属の大多数はそんな政治的な話は専門外であるらしく、俺の向けている視線の意味に怪訝そうな顔をしていたが（ついでに兵藤先輩は微塵もこっちの視線に気づいていなかった。むしろ場の空気に吞まれていて別な意味で緊張していたフシもある）、外様中の外様である俺という全く関係するはずの無い人物に政治的な詳細を聴かれているのに一切の配慮が届いていないのは……ホント大丈夫なんだろうか、この『聖書陣営』。

情報を悪用する気は別にないけど、聞いた限りじゃ同盟上の穴が多分に在る。俺が人知れずに暗躍できる隙

……使っていいの？ 暗躍するよ？ 個人的な研究もするし、必要とあらば【聖書同盟】滅ぼす程度の案件も画策できるよ？

そして、この会議を開くこの段階では、未だに同盟を締結できていなかったという衝撃の事態。

——呑気か！

何もかもが着手が遅え！ もっと早めに足並み揃えなくちゃ、他の勢力に削り取られても可笑しくねえぞ！

前以てこの世界の神秘事情をようやく最近把握できた俺からしてみても、【常時神秘受肉が前提】という碌でもない世界法則が働いているこの世界線。

当然、受肉に伴う概念水準の低下というリスクは在れど、だからこそそれぞれの生死が至極当然のように法則に組み込まれることとなる。

生死が関わるということは、種としての繁栄と衰退も当然盛り込まれるわけで、だからこそ悪魔にもまた【出生率の低下】なんていう社

会背景が彼らを襲っていたわけである。

……それらの問題点は、他にも存在して然るべき神秘存在にも適応される。

聖書の勢力だけが実体化して、それ以外に適応されないのならば外敵こそいないこの『三竦み』はとつくに人間を喰い尽くしてこの地上の覇者になっていても可笑しくないからだ。天使勢力だけでその総てが賄えるとは、到底想定しきれない。

そんな他の神秘勢力、つまり『聖書以外の神話存在が別個に存在している』という前提が彼らの中にはあって然るべきなのである。

そんな勢力が、明らかに身内だけで蠱毒みたいに食い合っている奴らを放っておくか？

否。

最低でも、疲弊した頃を見計らって一挙に大挙されるか、中枢からの目が届かない外周からじわじわと罫り殺しにされるか、そんな策を既に凶られていても可笑しくない。

……あれ、聖書勢力、詰んでね？

そんな結論に達しそうになっていた会議中盤、同盟を組んで足並みを揃えるべき、と堕天使総督が遅ればせながら言い出していた時点に、襲撃があった。

情報漏れてんじやねーか。

それとも会議の場に情報遅漏れ役が潜んでいたか？

襲撃して来たのは悪魔陣営の「旧魔王」と呼ばれた三名の男女。

なんでか堕天使総督が筆頭になり対処をし、自らの汚点を晒したはずの魔王2人は静観。

大天使長もまた静観を決め込んでいるが、あつちはあつちでどうにもタヌキ臭い。

事態の背景を覗っている節もあるし、堕天使総督の動きを注視している？

どうにも天使側が一番『自分らのみ』の利点を、漁夫の如くに掻っ攫いそうな奸計を働かせている節がある。

三竦みの足並みが揃わなかった一番の原因って、天使陣営なんじや



ね？ 潔癖そうだしなあ……。

事態の収拾は意外と早くに片付いた。

3対1という異例の事態はさておき、墮天使総督の實力はそれなりにあつたらしく、何処かで見たとようなオーラを孕んだ「蛇」を呑み込んだ三名の男女がパワーアップしたようなものの、戦闘経験そのものには比例しないのは当然の理屈。

翻弄する墮天使総督の高機動戦闘は某ライダーの「クロックアップ」を彷彿とし、しっかりと戦線の拮抗を維持していた。

決め手になつたのは、グレモリー眷属のゼノヴィアとイリナ。序でに兵藤先輩。

先輩の持つ『赤龍帝の籠手』とやらは「能力の倍化」と「倍加するエネルギーの譲渡」という性能を持つらしい。

時間を負う毎に二倍となるのを繰り返すらしい性能はともかく、それを他人へ譲渡できるって理屈的に可笑しくねえか、と一瞬思ったモノの、どうにも神器という奴は『斯く在るべし』と存在を定められた概念的な部分が核として性能を保持する傾向にあるらしい。

……神秘が受肉した所為で下がった概念水準の補填がそれらで為されているのか？ 確かに下がるだけ下がっては同時に過去に起こっていた筈のパラダイムシフトが破棄される傾向になるだけだから、そこを解消するナニカはあつて然るべきだとは思っていたが……、ひよつとして神器に世界法則の主流が働いてる？ 因果が其処を中心に流転してるの？ 世界線の突破の為には神器総てを破棄する必要が出て来た。メンドクサイ。ナニこの嫌な懸念。

話を戻すが、要するに倍加した2人の持つ聖剣がそもそも悪魔には致命的な弱点として働く武器なので、それで斬りつけられたら一撃だったと。

そこでどうして魔王2人は働かなかつたのかを聞いてみたが、グレイフィアさん曰く『何事もクイーンは容易く動かざるが定石で、そもそも駒王学園の筆頭主力はグレモリーなので領域不可侵を慮った結果』だとか。

後は対外的な政治的配慮か？ 冥界最大戦力の明確な實力を披露

して三竦みに対処を図らせるわけには行かなかった、と。

うーん、こつちもタヌキ。まあ、この腹芸は魔王本人よりはグレイ  
ファイアさんの指示っぽいが。

軍事的思考なら正解かもしれないけど、そもそも自分らの尻拭いを別  
種族の筆頭に任せるってどうなんだろう。

この場合はどれが正解なのかねえ。

さて一撃の下に斬り伏せられた【旧魔王】らは、これで終わりかと  
全員が安堵した瞬間、碌でもない爆弾を放り投げて来た。

墮天使陣営に同行していた、終始白銀の鎧を着こんで素顔を晒さな  
かった【白龍皇】とかいう奴に助けを求めたのである。

なんでも、旧ルシファアの血を引く人間とのハーフで、強者との戦  
いを求めるが故に寝返った、とか。

……なんだろう、その割には旧魔王3名へ手を貸す素振りが全くな  
かったのだが。

しかし、件の鎧の言い分は確かに手を貸しているという本人からの  
言質で、墮天使総督がアチャーといった顔つきで顔を覆っている以外  
は他の会頭も鎧のを睨みつけている。

確かに件の鎧が裏切ったならば会談の場所が特定されたのも納得  
だが、其処は魔王側から洩れていたとしても可笑しくは無いと睨める  
し、どうにも墮天使総督の対応が所々に大仰に見えた。

こう、オーバーな演技で本筋を隠そうとしてる、感じがひしひしと。

既に死んだ【旧魔王派】を取り込んだテログループ【カオス・ブリゲート禍の団】を

名乗る彼らの最終目的は不明だが、どうやら聖書同盟どころか他の神  
話群を相手取っても勝てるかと踏んだ何某かを『神輿』に担ぎ今回の同  
盟へと異議を唱えに来ていたらしい。

そうでなければ、そもそも冥界側の旧体制として隅に追い遣られて  
いたらしき彼ら旧魔王派が実力勝負で乗り込んでくる、という自殺行為を図る  
はずもない。

実際、この世界全体の思想とは思いたくはないが、聖書陣営の彼ら  
は脳k……実力勝負な部分が多分に在る。

確かに世相を動かすに実力、明確には実績や実行力と言った部分の

意味での実力は必要不可欠だが、最終的に必要とされるはずの【武力】または【軍事力】で初めから事を成そうと云う辺りは確かにテロリストと呼べよう。

だが、それらを最終的に決定付けるのは『平時を迎えた世代』にどれだけの安定と安全を大多数へ与えられるか、という為政者ならではの實力である。

要するに、歴史の勝者を決定づけるのは全て後世の手に委ねられ、それは戦争で勝利したからと言って一口に得られる報酬とはイコールでは結びつくことは無い。ということに他ならない。

まあ、結局彼らのテロは失敗に終わり、彼らがどういう治世を熟そうとしていたのかは結局日の目を見ることも無かったわけだが。

しかしこうして考えると、墮天使陣営踏んだり蹴ったりだな。

総督が働いて、身内に裏切り者が出て、それを他の勢力にも知られたから自分らが優位に立っていた『神器に関する研究成果』も公開せざるを得なくなっている。

結局ヴァーリと言った件の鎧は孫悟空の後継者と名乗る青年に連れられて駒王より脱出を図り、聖書陣営はテロに対抗するという名目で正式な同盟を結ぶことが達成できたわけだが、どうにも引つかかる。

墮天使総督、働きすぎじゃね？

引つかかった疑問は会議終了後、件の総督本人によってグレイフィアさんも連れ立って事情を教えて貰えた。

事前に【禍の団】の情報を掴んでおり、そのトップも知っていた。そしてそれに対抗するためはもちろん、そもそも積んでいる聖書陣営の首をなんとか繋ぐためには同盟を結ぶ必要性があり、其のためには天使悪魔『どちらから』も信頼が薄い墮天使陣営はどちらにも敵視されるわけにもいかず、蝙蝠でありながらも両陣営の間を取り持つ役割を持つ必要があった。

そして、ヴァーリさんはテロ組織の活動を密かに連絡し尚且つ活動を内側より阻害する為のスパイとして潜り込む必要があり、旧ルシファーという特殊な血筋を持つが故にその役割は非常に適切で敵の

目を集め易くするために大々的にデビューする必要があったのだ。と脱出を図ったヴァーリさんご本人を交えて情報開示してもらえたわけである。

なんていうか、お疲れさまとしか言いようがない。

とんでもない苦勞人じゃないのか、この総督。

それを俺に伝えた理由が『先々どう動くかわからない人物だが、あの場で静観と状況の把握に努めていた姿勢から味方に取り込むべきと判断した』と直に教えられたわけだけど、まあ下手に討伐されるわけには行かないもんね。テロリストは見敵必殺！となる前で良かったよ。

グレイファイアさんも暗躍向きな立場でそういう資質を備えているから巻き込まれた口だろう、と思いきや、塔城の姉が其処に関わっているから便宜を図って欲しいというお願いが挟まっていた。悪魔陣営は悪魔陣営で色々と問題点を抱えているらしい。

ちなみに、ヴァーリさんは女性であった。

胸こそ薄い<sup>義親さん</sup>が、腰つきは確かに女性であった。

なるほど、ホントに撃ち落とされたら総督も目も当てられないわけだ。

▽  
▽  
▽

現実逃避の間に、塔城はすっかり蕩け切っており、にやんにやんと人の胸板に抱き着いてすりすりして居る。

日は流れてあの会談から早数日、終業式も終わってこれから夏休みに突入！の深夜へ突貫された結果が此れである。

鍛えた成果なのだろうか、彼女の侵入に気づくことなく寝こけていた俺に、跨っていた塔城はまさにニンジャみために「ドーモ、カラスマIIサン」とアイサツしてきたわけである。アイエエエエ！

「……まあ、満足したら帰るよな」

ネタに走るくらいには諦めた。

俺自身は感じていたモノの、全開へと達せぬように我慢を重ねているので、貫通してしまったことはさておき子供相手にこれ以上身を晒す気にはなれないのである。

何より、エカテリーナにガチで申し訳が立たない。

……俺が好き好んで正妻の彼女を抱いていないとお思いで？ 子供の身体を痛めつける趣味が無いから大事にしてんだ。察しろコラ。

「……そら？」

——と、其処で気づけば部屋の入り口にはオフィスの姿が……。えっ、なんで？

「……にや？」

塔城も気づいたらしく、顔を上げて部屋の入り口を凝視する。入室していた変則ゴスロリのオフィスの目を合わせて、

「……………」

「……………」

——なんだこの沈黙、俺は悪くない筈なのに変な寒気がする。

浮気相手と正妻が顔を合わせたような、そんな碌でもない空気が2人の間に走っているような錯覚すら覚える。

……どっちもどっちでもないけどな！

さて、無言で見つめ合うこと、数十秒ほど。

音も無く近づいたオフィスの差し出す手に、塔城もまた手を挙げた。

すわ交戦開始か、と成り行きを見守っていた俺の目の前で2人は――

「……オーフィス。無限の龍神」

「……小猫です。仙術が使えます」

——がっしりと、握手を交わした。

………こいつら、同盟を組みやがった……っ！

「……なるほど。夜這い？」

「はい。しかし、私が先にイってしまったので烏丸くんはまだ満足できてないはずですよ」

「む、それは仕方ない。そらは元々ロリは門外」

「ええ、それも知っていますけど、とりあえず跨ったら何とかなるかと思っていました。……この結果は予想外ですよ」

「お前ら俺の腰の上で談合すんな……！」

もうやだこのロリ共。

状況を正しく把握するオーフィスに、淡々と自分の成果を解説する塔城。

というか、塔城はいつの間にか仙術とか覚えた。

アレか、ちよつと聞きかじった【姉】とやらが何らかの伏線だったのか。

叙述トリックにもならないそんな雑な情報開示で、ドクシヤに通用すると思うなよ……!?

「では、此れを」

と、オーフィスが穫出したるは、ぴちぴちと蠢く黒いひも状のナニカで。

それを銜え、こちらへと顔を寄せるオーフィスの唇は、そのまま俺の唇をズギウウウウンと、ちよ、ま、舌をぐいぐい押し込んでっ

!?

——ゴクリ。

「——ぷは。これでよし」

「……！　なに、を、吞ませた……!？」

口移しで件の黒くてぴちぴちとした何かが押し込まれ、蠢きつつ喉の奥へと流れ込んで往く感触が胃の腑へ走る。

それには答えず、オーフィスは俺の拘束を早々に解いていた。

……え、このタイミングで？　早くね？

「解放して大丈夫なのですか？」

「ん。大丈夫。後押し出来たから」

「後押し……？」

2人の会話が腰の上で交わされるのを呆然と聞くが、しかし解放されたならば好都合。

なんとか振り切つて逃げきれ、れ、ば……。

………あ、ダメだ此れ。

「——塔城」

「え、からすm」

解放された手を彼女へ伸ばし、無防備なそれを引き寄せて唇へと繋がる。

無理矢理だが、先程までは彼女は決して自分からしようとしなかった其れを、男からのリードという形で奪つて見せる。

「っん、む、んんう、んむうーっ!？」

要するに、恋人のようなキス。

唇を奪い、口中へと舌を這わせて、蹂躪するように弄って快樂へと追い継ぐ。

抱き寄せた後の手は彼女の背中と腰へと回し、片手に収まる小ぶりの尻へと届かせる。

彼女の中で女性らしい躰というならば唯一であろう、その柔らかい桃のような瑞々しくも他人より薄い肉付きのソレを、俺は優しく弄んでいた。

「……ちよつとした指向へのベクトル変更。向くのが難しい情欲への意図も、体内からなら容易い」

くちゆくちゆと部屋に響く水音に混じって、オフィスの声音が愛おし気に耳に馴染む。

彼女も離れないというなら、小猫の次に可愛がってやってもいい。ひと先ず今は、この幼い肢体を、——思う様に貪りたかった。

「くくくつぷあ、か、らひゆま、くうん……い！」

「そら、って呼べよ、小猫」

「くくつ、ふあ、ひい……つ」

耳元へ囁く。

目元は完全に蕩けた彼女をぐるりと抱き締めて、ベッドの上で俺の下へと転がせた。

無防備に晒された肢体には肉付きなどほとんど無く、胸元は薄く、手足は細く、割れ目には毛も生えていない。

同い年と云うならば最も相応であろう先に味わせて貰った小尻の柔らかさとはかく、這わせた指に推し負けるくらいに華奢な太腿も、女性というには到底足りない。

しかし、今はその総てが愛おしかった。



「キレイだぞ、小猫……」

「そ、ら、くん……っ」

初めてまじまじと鑑賞させてもらったその未熟で幼い身体を褒めれば、小猫は恥ずかしそうに身を振る。

——ああ、もう我慢が利きそうにない。

「ひうつっ!」

小さく可愛らしい乳首へと吸い付き、くびれもない腰を愛撫する。自分よりもずっと熱い体温を、舌先と全身で直に味わい、そのたびに小猫の嬌声が部屋中へ響いた。

口は彼女の全部を舐め回すまで到底止まろうとせず、先程彼女自身の好意行為で開いた膣穴も、彼女が身を振って逃げようとすることも押し遣って、脚を大きく広げさせて全力でケアした。

それが満足した時には、小猫はベッドの上で痙攣するように息も絶え絶えで、しかし気を失っていないくてホツとした。

なんせ、本番はこれからだ。

「あ……う、あ……っ」

「小猫……、俺、お前の中で果てたいんだ……。いいよな……?」

「う……?」

さつきよりもずっと緩くなっている筈の膣穴を、破けないギリギリまで指先で広げて、俺の全開になった自身を宛がう。

見た感じでは穴よりもずっと太いのだが、先程も呑み込んでくれたのだから大丈夫だろう。

というか、これでお預けとか絶対我慢が出来る筈がない。

「いくぞ……っ」

「あ……っ? つひ、うぎゅいつ?」

——未熟で小さな膾穴へと、ひと息に押し入った。

▽  
▽  
▽

「あゝーっ！ あゝっ！ あゝあゝーっ!?」

「つくあつ、いいぞつ、最高だ小猫つ！ もつと！ もつとシタいつ！」

「にやあつ！ にやあー！ りやめえつ！ そこりやめえつ！」

「はっ！ はっ！ はっ！ 止まらなつ、とまつ、らないつ！」

「んあーっ！ いくっ！ いきゆうっ！」

「俺もおつ！ いっしよにいくう！」

「もっひよお……！ もっひよひようりやいい、そりやくうんう

……っ！」

「あゝー……！ 搾り、取られる……っ！」

「……そら、我もシタい」

「そらくんのせいしい、もつとお、ちようちあひ……」

「逝かれたメンバーを」天高く躍進する百鬼夜行な第  
四章【紹介するぜー！】 ※時系列上原作五巻相当  
「ぼくのなつやすみ」

夏季休暇はリアス部長の実家へとお邪魔する運びとなった。

元々眷属はその予定ではあったけど、それに来学期から着任するアザゼル先生がついてくるおまけつきだ。

それというのも、先の会談で発覚したテロ組織【禍カオス・ブリゲードの団】の脅威に備えるため。

旧魔王派のトップ3は撃退し亡くなったモノの、兵藤先輩のライブルという位置に付くであろう元墮天使陣営の【白龍皇】は件の組織へ寝返ったし、孫悟空の後継者とかいうモノも出てくれば、……どうにも聖書勢力以上の何かが備わっていても可笑しくないように思われる。

それに対処するために、一先ずはアザゼル先生の神セイクリッドギア器に関する知識を基にして、兵藤先輩の強化と修行に伴い悪魔陣営全体の力量を底上げしよう、という誘致であるとか。

現に、私の実姉であるスーパー猫又の黒歌姉さまも、今は其処に所属しているという話だった。

実際、悪魔陣営からは指名手配されているわけだから、逃亡犯が身を隠すには絶好の大組織なのかもしれない。

そのことを聞いたのは、【気】の使い方の初歩をレクチャーして貰った会談後の、つい最近のことだ。

その情報をどうしたものかと思ひ悩むが、おいそれと部長や他の眷属へ明かせる話題では無い。

今回の旅行で機会を見て、グレイファイア様に相談してみるつもりでもあった。

と、悪魔陣営全体が未曾有の危機に備える実情はさて置き、私が懸念していたのはもっと別の事であったりもする。

発情期である。

▽  
▽  
▽

「……あれ？　　そういえば烏丸はどうした？」

冥界へ通じる電車の中で、ふと気づいたらしいオカルト研究部顧問かつ引率のアザゼル先生が、至極当然のことを尋ねる感覚で言葉を漏らしていた。

私も気になってはいたのだが、『あの夜』以降そらくんは連絡にも出てくれない。

小猫さみしい。

「先生、烏丸は元々オカ研部員じゃないです」

「そうだったのか？　　じゃあ生徒会？」

「え、どうなんだろう。部長、知ってますか？」

「生徒会に所属している、という話はソーナからも聞いてないけど……」

すごい今更な気もする話が電車の中を飛び交う。

元シスター三人娘も夏休み前に会うことは叶わなかったとか漏れているのだけど、会ってどうする気だったのでしょうか。わたし、気になります。

「烏丸くんは夏休み中は旅行に出る、と言っていましたわね。元々冥界の事情には携わっていないのですし、彼なら例え何処かでテロ組織やそれに準ずる危機に遭遇したとしてもなんとか対処できる、と……」

——何故か朱乃さんが彼の事情を知っており、彼女へ電車中の視線が集束する。

そんな中、疑問の声を上げたのはアーシア先輩だった。

そういえば、彼女もなんでそらくんに近しいのか詳しい理由を知らなかった気がする。

なんで？ ねえなんで？

「あの、なんで朱乃お姉さまがそらくんの事情を……？」

「……えー、ほら、前回の会談ではサーゼクス様に連れられての参加でしたでしょう？ 私たちのような貴族配下の悪魔とは別の領域の繋がりが出来上がっております」

なんか微妙に遠回しに説明が始まったのですけど。

「ああ、他の上級悪魔とかの連中に無理に絡ませない配慮か。指示したのはルキフグスか？」

「ええ。脅威である彼と魔王様が交渉を交わせたからといって、彼本人を降せたと勘違いした別の貴族が彼への配慮も無く無理に話を通そうとしないとは限りませんもの。『彼との友誼は飽く迄魔王様ご本人とのモノ』という意味合いを設けるために、悪魔陣営と彼との交渉役は限定するというのがグレイフィア様からのお達しなのですわ」

「なるほど、それで【女王】同士で話を通せている、っていう寸法か」

「いえ、それじゃあまだ説明は終わってませんよ？」

何気に鋭い目のアーシア先輩が朱乃さんを睥睨。

誰もが理解した気になっていた其処へ、アーシア先輩はニッコリ笑い、更なる爆弾を投下した。

「どうして【今回の旅行】という【私事】について、朱乃さんはそらくんへ『話を通して』いたのですか？」

「それはもちろん、リアスが誘いたいと漏らしていたから声をかけたというだけですわ」

「えっ、私!？」

微妙に薄ら寒くなる笑顔で質疑を応答する2人とは打って変わって、突然原因として槍玉に挙げられたリアス部長は目に見えて狼狽えた。

無論、アーシア先輩が訊きたいのは其処では無くて、連絡手段の方なのだろうけど。

「リアスの配下<sup>女王</sup>として、主が求めることへ配慮するのは当然の証。未だに話を振る取っ掛かりも見出せないリアスに代わって、やきもきしながら『さ、誘ってみようかしら、でも断られたら……』とか呟いていたリアスの矜持を鑑みて私が泥を被った。今回のほただそれだけのことですよ」

「きつ、聞いていたの朱乃!!」　　というかそれって独断専行、

「いいえ、貴女を悲しませたくないという、ひと些事ばかりの【友情】です」

「いや、でも」

「【友情】ですよ」

殊更【友情】を前面に押し出して、自分の行為を正当化しようとしている朱乃さんが其処に居た。

傍から見たらバレバレなのだけど、朱乃さんは朱乃さんでそらくんへの何某かをリアス部長だけには隠し通そうとしているような気が無きにしても非ず。

ちなみに、連絡先云々に関しては単純に最近彼がグレイフィアさんから貰ったと宣っていたスマホが理由だったりする。

彼、どうやら戸籍が無くてケータイの類も得られなかったらしいのだが、それを報酬に前回の会談では悪魔側の主賓として出席したとか。

朱乃さんもその連絡先を教えて貰っていて、アーシア先輩他は未だだった、ということなのだろう、結局。

……私は着信拒否にされてるみたいだけど。  
それにしても、会談の報酬がケータイって、彼にしては色々契約の天秤が傾きつぱなしな気もするなあ……。

「……あー、なんだ、ドラゴンってのは力とか金とか、時には女とかも多く引き寄せるって聞いたが、イツセーの場合は微妙に違うんだな」

「云わんでください。ていうか、まだ負けじゃないっす……!」

電車の隅でアザゼル先生が兵藤先輩を慰めていた。

いや、もう確定かと。

▽  
▽  
▽

85件の不在着信がスマホに入っていたけど、もう見ないで破棄する方向で。

幼女コワイ。怖いよ幼女。いや、落語的な意味では無くてガチで。事の終わりになんであーいうことをしたのかと、塔城に訊いてみたところ、猫又という動物系妖怪ならではの事情が背景にあると自ら語られた。

要するに発情期である。

そもそも動物には時期的な発情期があり、それは年齢や個体の成熟度合いによって変動するが、生物である以上は逃れられない宿命のよなモノだ。

猫の場合、最低でも年に2回。

そこが悪魔に転生した元妖怪でも変動は無かったらしく、姉自身によつて近々来るんじゃないかね?と教えられていたらしい。

発情期が訪れることで起こる懸念とは、身体の疼きに由来する体調の不良化。

我慢すればいいとお思いの方がいらっしやるかもしれんが、実際動物は其れが出来ないから厄介なのだ。年中発情期の人間と比べるん

じやねーよそもそも前提が間違ってたよ。

抑えつけても隔離しても、抗えなくて子作りをするのが発情期。

ちなみに犬猫の場合は雌のみに訪れるそうで、雌から発せられるフェロモンに誘導された雄が本能に導かれるままに雌の身体を慰める役処を果たせられる。なんか今回の事情に近いな。なんとも忌々しい。

とにかく、その懸念を早々と解消するために塔城が起こしたのが、とりあえず男性に性的に慰めて貰ってバイオリズムを整える、とかいうぶつ飛んだ手段である。

きがくるつとるとしかいいようがない。

そもそも「見た目完全に小学生の癖して発情期来るとか、時期測定が間違ってたんだろ」と言えば「姉の事情で自分を抑制していましたが『仙術を習った経緯で【気】を取り扱う以上はその心象的な抑制も利かなくなる』って教わりました」とか応えてくる。

まあ、猫の妖怪で姉妹って時点で、普通に身体的な差が出てるのが一番あり得ねえって思っていたけどさ。

猫って基本、一匹の雌が雄を何匹も同時に囲って本能的に逆ハーを形成し、多様な子孫を残そうとするわけで。

姉妹、となればそれは、ほぼ同時に生まれた順番的な意味合いしか持たず、明確に言うなら双子から五つ子くらいの割合で生まれるのだよね。

それ以降の順序で生まれていっても、基本的に親の遺伝子が同列になることは無いから同じ胎から生まれたというだけで姉妹扱いをする考え方は普通に有り得ないんだわ。

つまり、参観に来ていた『あの姉』と塔城は「双子」ということになる。

……なるほど、成長不良で塔城はこの有様か。と憐憫の視線を向けたのは言うまでもない。

それにしても、幼女を孕ませることがそもそも間違いである、っていう倫理観と母体と生まれる子に携わるであろうリスクに関する事前知識があつたから、前後不覚にされた俺でも【精子自滅】を仕込ん



でいたから良いようなモノの、本当に妊娠していたらどうしていたのか。そう問うたところ、

「……もちろん産む気でしたけど？　そらくんなら何とかできましたよね？　産む方向で」

——と、おつそろしいことを平然と言い放ってきたのでイマコレ着信拒否である。

塔城がノリノリになって来たころにはなんとか正気へ回復出来ていたが、放置気味であった為に精力が有り余っている無限の龍神やたつぷりねつとりと相手していたにも拘らず発情期が来ていると自覚しつつあった猫又は全然余裕であり、自己嫌悪に浸る間もなく幼女2号を交えての第5か6回戦目に突入したわけだが……。

……今の俺に取れる子供に子供を産ます手段何ぞ、帝王切開か太らすかして骨盤開くかしか思いつかんわ。そもそも子供が子作りするという時点で性機能的にも可笑しいんだよ。見た目人間に近づいてるからって常時発情も可能な機能備えてないでキチンと身体を整えてから出直して来やがれ。具体的に言うなら最低でも金色のヤミちゃんくらい尻と太腿むつちりさせてから。

なんか最後本気で最低なこと口走った気もするが、そんな俺はこの夏ルーマニア。

ヴラデイのご実家が吸血鬼の坩堝だとかいう喜徳情報を覗いたので、ちよつとした調査と避暑に訪れたのである。

なんか冥界とやらにも誘われていたけど、夏休みにまであの人らと一緒にいる道理もないし。

俺の本分はそもそも研究ですし、世界線突破研究も行き詰ってるから、ちよつとしたリフレッシュも兼ねての吸血鬼研究に暇を飽かすぜ！　所謂一つの自由研究って感じ。

……え？　パスポート？　密入国ですが、何か？

「ちくちくいっとう、ちくちく」

「……ふむ。なんだろうな、こいつら」

ルーマニアの某所にある隠避国家とも称せる秘匿都市、その一角に認識障害を伴ってふらりと紛れ込み、丁度いい隠れ家を得てはや3日。

何故ばれたのか、俺は襲撃に遭っていた。

「しかし、コレ吸血鬼か？ なーんか別物って言うか、別種というか。むしろ吸血生物？」

襲撃と云うが、むしろ暗殺に近いくらい。

『吸血鬼は家の中へ家人の了承を得ずに侵入できない』という弱点というか逸話があり、ぶっちゃけるとこの世界の吸血鬼は能力的にも多様だが同時に数ある逸話からのそういう弱点も同時に引き継いでしまっているらしいのだ。

流れる水を渡れない、にんにくを嫌う、山査子の杭で心臓を衝かれればそもそも誰でも死にそうなものだが、やはりこの世界の吸血鬼は『そう』されなければ復活とかも可能なのだろうか。

あれ？ でもヴラディは悪魔に転生したんだよな？

そこで死んだらそれまでっぼいのだし、むしろ弱くなってるんじゃないのかそれって？

「つと、そっちは今はどうでもいいか。さあて、ナニガデルカナ？」

話を戻すが、そういう『弱点』があるにも拘らず、こうして室内へと侵入を果たして撃退されている以上、街中を闊歩する見た目は完全に人にしか見えないデイウオーカー共とは明らかな別種。

子供程度の体格で、実際子供なのかもしれない。皮膚は全体的に鱗

に覆われて、頭髮こそあるものの貌付きは犬と人を組み合わせたような鼻と口先が突き出された異形。手は鉤爪のように伸びて捻れて指先が鋭く尖り、後ろは中途半端に毛むくじやらかな猫みたいに歩くときは踵が地に付かない造型の脚が、破れた衣服より覗けていた。

未知の土地で見たことない吸血生物の秘密に迫る。か、——オラワクワクして来たぞっ！

逸る心を落ち着かせ、指思考を手元へ戻し、襲撃者の頭部を掴む。

術式展開、検索開始。

彼か彼女か知らないが、少なくとも表を出歩く吸血種らと比べても人の形を保っていない『此れら』より詳細を知るべく、記憶の閲覧を勝手にさせてもらうこととした。

だってどう考えても敵対して来たし、生物的に見ても改造したような形跡が残ってるし、こう、某「テイメイの錬金術師」が人を原料にして造った合成獣キメラっぽい感じで拙くも言葉も介したわけであるし。

……勘の良いガキは嫌いだよ。ってことなのかね？

そして記憶を閲覧すること、数分ほど。

チュパカブラモドキの脳裡より引き出した記憶は、少々俺の食指を動かせるモノでもあった。

「……セファイロト・グラール【幽世の聖杯】？」

▽  
▽  
▽

自称【聖杯研究】の第一人者、マリウスⅡツエペシユは困惑していた。

数日前より街中に突如現れた謎の魔力の持ち主、それを探るために送り出した強化した元ハーフヴァンパイアの実験体らが一向に帰還しなかった為だ。

元のヴァンパイアとしての性能を衰えさせることも無く、『他人の家に入り込めない』という隠密行動には何気に向かない自分たちの弱点を克服させた実験体だ。

見て呉れこそ変異したが、そもそもが【実験体】。

貴族らが持て余していた【家畜】との相の子であり、【聖杯】の持ち主であるヴァレリー・ツェペシユの話し相手に、という名目で彼女に触れさせた程度の存在価値も無い子供たちだ。

失つても痛手こそないが、情報が出ない事実は如何ともし難かつた。

元より【神器】についての研究を預けられた身として、腹違いの妹に特殊な『其れ』が宿ったことは実に喜ばしかった。

マリウス自身も『ツェペシユ』という名を冠することから判る通り、吸血鬼の種の中では特殊な立場、明確には王族に連なる者である。だが、それよりも彼自身が気に懸けているのは、【神セイクリッド・ギア器】という【家畜】の血が混じること、でハーフに宿ることが多々見られる特殊な異能。その研究の一つに尽きた。

ヴァレリーを誘導することによって、種族的に決して認められない同じ境遇の子供たちが強くなることを望んでいることを教え込み、彼女が気付かぬうちに強化・改造するように仕向ける。

それを繰り返すことで、ようやく最近になって生物としての成功例が生まれ始めたのだ。

隠密として繰り出した実験体たちはその先駆けだが、今後の実験ではより上位に、出来れば姿も美しいヴァンパイアの容姿を損なうことなく強化する方向へ傾ける。

そのためにも、こんなところで【失敗】を弾くわけにもいかない。

特に、【聖杯】の研究には既に助言まで貰っているのだ。

そこで『私事に実験体を使い潰してしまつた』などと口にするれば、自分の立場に取って代わられる恐れも覗えた。

そもそも、件の謎の魔力の持ち主こそがイレギュラーでもある。

場所こそわかつているのに、詳細を知ろうとすると何故か場所が不鮮明になってしまうという、どうにもこちらの認識を阻害しているような妙な術が仕込まれているのだ。

魔法使いらの術式の疑いがあるのだが、そもそも吸血鬼の領地へああして乗り込んで、特に何もせず居座っている時点でこちらと交渉

をしようというわけでは無いことは明確。魔法使いは基本的に研究者である以前に商人であり、自ら身動きの取れない場所へと乗り込むような短慮もそうそう起こすはずはない人種の筈だ。

しかし、現在王城へ預かりの身となっている【神器】についての助言もしている【客】の話では、『在野の魔法使いの術式にしては隠避性に特化しすぎており、それこそ別の【神器遣い】の可能性も高い』とのこと。

で、あれば、慎重になつても警戒しすぎということにはならない。貴族の周辺を固められる正規兵に任せることも考慮したが、そもそも正常な認識で捉えられる相手では無い。

結果として、実験の結果で種としての弱点を克服し、尚且つ異形としての知覚領域まで兼ね備えることに成功した【使い捨ての駒】を送り出す羽目に陥ったのである。

……その報告は未だ、だが。

「……いや、焦ったところで取れる策も無い、此処は一先ず、ヴァレリーに新たな実験体を造らせて……?」

気づけば、部屋の外が妙に騒がしい。

騒然とまではいかないが、小走りに駆けるような煩わしさを感じる。

気に掛かっていたところに、「失礼します」とノックの音が響いた。

「……こちらにも、いらっしやいませんか?」

「なんですか、騒々しい」

「いえ、その……」

マリウスの了承を得て入室して来たのは、王城仕えのメイドである。

入室し第一の声が歯切れも悪く、眉根を寄せたまま先を促せば、マリウスにとって予想もしてない言葉が飛び出してきたのであった。

「……その、ヴァレリーさまの姿が、衛兵の知らぬうちにお部屋に見られなく。王城内のどこにも、気づけば姿が……」

▽▽▽

【セフィロト・グラール幽世の聖杯】。

手元に在るこのアザゼル神先生器からの預かり関もの連によれば、生物の根幹、命とか魂とか言うモノに干渉することを可能とする神器であるとか。

ざっくり説明すれば、遺伝子工学の超過発展形を伴った特殊アイテム、とその使い手であろう。

現代人の概念上、本来ならば別種に扱われて然るべき【魂】と【命】が同列になっている部分を見過こしてはアカンと異論有るかもしれないが、そもそも俺たちの生きるこの位階が物質に依り構成されている以上、【命】と同等に【魂】もまた物質として扱われて然るべきであり、俺の知る限りではそれらを同等に扱うことに異論は無い。

というか、元より仏教伝来の考え方では魂もまた流転するマテリアルな現象の一端として扱われていた筈なのだが、どうにも復活の日とやらを信奉する宗教観が交じったお蔭か所為か、魂が個別に存在する人の芯であるとかいう信条が主流になっている気がする。

物質由来の考え方が、時折世間で見られる輪廻転生の観測面から、理屈として説明できるので説得力もまたあるのだが。

話が逸れたが、生物の遺伝子を弄れる、という俺がネギま世界で齧った技術の発展型らしい。

それを、その使い手を、ちよつと城まで行って捕まえて来た。

——おう、なんだか画面の向こうから白い目で見られてるような気がする。ちやうねん。

なんか軟禁状態だったしさー、チュパカブラモドキの記憶から見た感じでは本人は善意だったしさー、あんな異形にされて善意とかマジかと思っただけその後ろに誰裏方かがいそうな気配もあったしさー。

あと、使い方が色々と拙いから、正確に明確に十全に万全に、俺がもつと便利に扱うべきかな、と思つて。

別に、使い手がちよつと儂い系の深窓の令嬢だったから、とかそんなところに理由は無いよ？

摘まみ食いとかが、そういう意図はさらさら無いよ？

ホントだよ、そらくんウソツカナイ。

「……まあ。此処が貴方のおうちですね」

初めて城の外へ連れ出して貰えたらしく、年上なはずなのに妙に幼げなお嬢様ヴァレリーⅡツエペシユさんは、目をきらつきらと輝かせながら庶民の一軒家を物珍しそうに見まわしていた。

いや、本当に理由は別にあるんだ。

実は初めは使い手がどんな奴かな、と城へと忍び込んだ際、こちらも見つからないように認識阻害をかけていたのだけど。

『……あの、貴方はどちらさまなのでしよう……？』

——と、俺のかけた認識阻害を意図も容易く見破つて小首を傾げて見せたわけである。このブロンドヘアのお嬢様は。

俺のアレはネギま世界でもちうたんくらいのレベル相手でも結構過剰に通用するように、某青狸の『石ころ秘密道具帽子』を超過するレベルでの概念附加だ。

当然、悪用されないように術式の公開なんてしてないし、そもそも術式の大元が俺独自の技術由来だから模倣も難しい。

それを『見通す』……只者じゃない、とそう思うよな？

だが俺の予測では、実態はもつと違うものなんじゃないか？と思うわけだ。

「さて、ヴァレリーさん。ちよつといいか？」

「？ はい、なんでしよう、ソラさん？」

家へ戻って自身の認識障害を破棄し、この場所に掛けて置いた元来の結界内にて自身を解放。  
改めて、認識障害の大元になる「スタンド」を自身の横へと出現させる。

「俺の横に、何が見える?」

気分は某ハンター世界の念使いだよ。

概念に干渉できるスタンド、【インストール・ドット】。

此れの進化した言葉遣いを確立させた自分の身の内に潜ませる「ダイバー」でずっとやっていたわけだが、可能性がある以上は見せないわけにもいかない。

それというのも、此処に連れてくる間、ヴァレリーさんは俺に見えない何かと会話をしていた。

この世界が神秘受肉型の異世界であるから可能性から破棄していたのだが、其れが幽霊とかの類であった場合、この人——「スタンド遣い」としての素養を備えているんじゃないかね?

「……え? 何かあるのですか?」

——違った。

やだ、めがっさ恥ずい……!」

▽  
▽  
▽

「まだ見つからないのですか……!」

ヴァレリーの行方が分からなくなって早2日。

仮にも王族に連なる者の行方が不明とか、絶対的に在ってはならないことであるが、それ以前に自らの研究が頓挫している現状にマリウ



スは苛立ち、搜索の結果報告に参入した兵士へ憤りをぶつけていた。

「申し訳ございませんマリウス殿下、こちらも必死で搜索しているのですが……」

「本気で搜索しているのですか。彼女は、ヴァレリーは我々ヴァンパイアの未来の為に、非常に重要な存在なのです。その損失は、貴方たちのような者とは比較にならないほどなのですよ？ もしも、そこいらのハーフヴァンパイアと同列に扱っているような意識なのであれば、即刻その認識を改めるべきです」

「い、いえ、我々は決してそのような……!」

マリウスは王族とはいえ、その継承権は5位と下から数えた方が早い程度だ。

しかし、彼もまた王族に連なるゆえに、貴族としての気位を備えていると自負もしている。

それが一般兵に対するこの態度に如実に現れているのだが、發揮する場面は間違いなく此処では無く、彼の意識がやはり貴族としても王族としても相応しくないことを、彼自身が物語っていた。

憤慨をぶつけられても、一般兵には口答えする権利も備わっておらず、ただただ平伏するのみ。

そんなどう見ても時間の無駄であろう状況へ、タイミングよく口を挟むモノが居た。

「おーおー、荒れてるねえマリウスさん。聖杯のお姫様が居なくなつてご機嫌斜めかニヤ？」

「っ、……何の御用でしょうか、お客様？」

くすんだ銀の髪を持つ40代くらいの男性が、けらけらと嗤いながら入室していた。

彼は妙に豪華なローブを纏い、その有り様は一国の王のようでもある。

そしてその傍らには、彼とはまた違う白銀の髪色を持った20代くらいの男性の姿と、金と黒の入り混じった髪を持つオツドアイの男性が控えるように両脇を固めていた。

くすんだ銀の男は、云う。

「いやね？　あまりにも狼狽えっぷりが酷いからさあ、ちよつと手伝ってやろうかなーって思ったんだよねえ」

「手伝う？　搜索をですか？　申し訳ありませんが、お客様の手を煩わせるほどの問題では……」

「いやいや、俺たちも共同研究の出資者としてね？　お姫様がこのまま行方知れずのままってのは、見過ごせないんだわ」

マリウスよりもずっと余裕のある態度で、彼は応える。

そんな不敵な様子に、マリウスもまた目の前の男の器を、自覚無く己と比較し、知らず奥歯を噛み締める。

その様を目撃した兵士にとっては、実に居心地の悪い空間であった。

「つ……、しかし、どうやって捜すというのです？　城内からは彼女

の痕跡も何も不明のままです、既に2日も経っているというのに、今更貴方たちが出張ったところで何をできるのやら……」

「ご心配無用っ♪　ユーグリットくん、よろしくうー！」

「ええ、既に居場所は判明していますよ」

傍らにいた白銀の髪の男性に声を投げ、受けた彼もまた平然と情報を明かす。

そして、その開示された情報は、マリウスや兵士の彼にとって驚愕の内容であった。

「は、判明している!?　何処です、何処にヴァレリーは!？」

「マリウス殿下もご存知の筈では？　件の『屋敷』ですよ」

その『答え』に再度驚愕を露わにしつつも、やはりか、とマリウスは苦虫を噛むような表情へと替わる。

そもそもが、怪しいモノが堂々とあるのであれば、其処と事件とが繋がることは至極当然であつた為だ。

だが、

「……しかし、その根拠はあるのですか？ 『あそこ』は調査も行き届かない、完全に未開の土地ですよ？」

僅か4日ほど以前に存在を感知して以来、調査不明と云う事で【未開】認定されている件の屋敷、要するに『烏丸の屋敷』を知るからこそ、彼の興奮も直ぐに収まる。

事実、どうしようもない其処が怪しい、と云われたところで、説得力は依り不鮮明になつたと言つても過言では無い。

何より、怪しい場所と突如起こつた事件とを結びつけたとして、其処に話を持って来た彼らの意図が絡んでいないとは限らないのである。

そんな信用に値しない『共同研究者ら』を見据えていると、白銀の彼は嘆息し懐より『とある道具』を取り出していた。

「——では、此れで如何です？」

「……!? そ、それは……——【聖杯】!？」

取り出したのは、ヴァレリーが持っている筈の小さなカップ。

金に輝く聖遺物、【セフィロト・グラール幽世の聖杯】そのものであつた。

「そ、それをどうやって……!」

マリウスにとっては、ヴァレリー本人よりもずっと欲したモノだ。それをいずれ彼女自身から抜き取つて、自らの思うままに扱いたい

と、兼ねてより願っていた。  
その願いの結実が、目の前にある。

「彼女の持つ【聖杯】はどうかやら亜種のようにして、こうして分割した片割れを所持することが可能になっていました」

「それ、を、それを寄越さない！ この私のモノだ！ 早く!!」

「ええ、お渡ししますよ?」

「——な、に?」

思わず、口調も崩れて怒鳴っていたところに、白銀の彼、ユーグリットと呼ばれていた彼は、平然と応える。

思考が寸断されるように途切れて、相手が何を考えているのかを予測できなくなったところで、ユーグリットは更に言葉を重ねた。

「しかし、これではまだ未完成と言いますか、【聖杯】の持つ真価を發揮するには出力不足が否めません。やはり、完全に扱うには彼女自身の中に眠るモノも総て揃えないとダメなようですね」

「……そ、そうなのですか……」

「そして、これが元来彼女のモノである以上、分割された大元の聖杯の場所も、共鳴を促すことで判明します」

力なく応えるマリウスに重ねたユーグリットの言葉は、ようやく総てが繋がった。

つまり、

「つまり、例え認識を阻害されていたとしても、共鳴現象を辿って行けば追い込める、とそういうわけです。【未開】とされた件の屋敷であろうとね?」

話が繋がると同時に、自分たちの街に勝手に居座る不屈きモノへの制裁も兼ねることが出来る。

ユーグリットの弁は、要するにそういうことであつた。  
その事実を理解した時、マリウスは己の口の端が、愉悦に歪むのを  
自覚できてはいなかつたのである。

「殺しのライセンスを持つてる美少年キラーが似たようなことをしてた」

——次の瞬間には彼、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーは肉塊へと変貌していた。

要するに、完全無欠に絶命していたことが、誰の目にも明らかになつていたのである。

その行動を誰もが把握できていなかったわけでは無い。

むしろ烏丸が（この場の者の中では、ベッドの上で女性としての性的な悦楽の行使を悉く尽くされ全裸で放心しているヴァレリーを除いて、誰もがこの時点では彼の名を把握していなかったが）初動として鈍のようなモノを突き出して突貫して来た行動は、生物としてのポテンシャルが人間よりも上位に位置すると自負する吸血鬼や悪魔やドラゴンなんかの認識にはしっかりと把握されていた。

しかしそれでも、彼の起こした初動を認識させない攻撃——所謂【無拍子】とは、認識の外枠を捉えさせない技術の一端であり、結果として見えていても回避の選択を取る時間が無かったこともまた事実だった。

だが、それでもその場の者たちに油断が無かった、というのは過言に当る。

何故ならば、マリウスは【彼】のことを悪魔側の魔王に比例する者として認識していたし、件の彼・リゼヴィムには【セイクリッドギアキャンセラ神器無効化】というJoker切札が伏せられていたことをそれ以外の者が知っていたためである。

聖書の神が創造し人間種へと連綿と続くように設計されたはずなのに、神殺しとかいう超越機まで出現する始末の神セイクリッドギア器。

それを無効化する特性が『元神の子』であるルシファーのその子に受け継がれている事実は、血統が聖書の伝承通りならばアダムの最初の番つがいである【リリス】からの遺伝と想定できる。

何故ならば、神器に関する異能の発現は人間種のみに見出せる特徴であり、神の使いとその裏切り者である天使や悪魔や墮天使なんかには異能の発現は事例が無かった為だ。

その特性の発現が、リリスが神を裏切った所為かはたまた神に見捨てられた所為かは、根源的な理屈は想像するしかないが、リゼヴィムはその特性が危険視されたが故に、冥界に置いてはサーゼクス・グレモリーやアジユカ・アスタロトと並ぶ3人の「超越者」の一角として名を残していた。

——原作と比べて実にフライングな情報で恐縮だが。

時に、彼らが超越者として名を馳せた前提に、それぞれの特性に居並ぶ者が居なかった、という実に単純な理由がある。

これはシンプルが故に覆すことが困難で、だからこそ冥界は『強さこそが第一』として社会を形成されてきた。

此処には相応の弊害もまたあるのだがそこは今は置いておくとして（社会構造と共通理念が単純な「群れ」は強靱であるが、行動指針の優先の変更が困難である、という弊害。要するにワンマン経営なんかはトップが頓挫すると一挙に崩れる）、強靱さを超越者としての前提に置く冥界では、種族資質の極致・術式構成の多様性・神に對抗し得る武装類型特性という3つの柱こそが覆せるものではない、と認識して定めた。

しかしそれは、「それ以上」を発見し得なかったために決定付けられた【前提】であり、此処とは異なる世界より齎された法則に依る技術に置いては、一切の對抗策足り得なかったのである。

当然、それは烏丸の行使した【無拍子】とはまた別の———というか、ぶつちやけ烏丸の使った【鈍】って『帝釈廻天』だから重力魔法の具現化術式であって神器じゃねーよ。神器キャンセラーで對抗できるか間抜けめ。ということである。

「……………どういう、ことですか……………」

——話を戻そう。

眼前で起こった一方的で単純明快、そして一瞬で片が付いた虐殺劇に呆けていたのか銀髪の男性——ユーグリット・ルキフグスが呟く。彼もまた悪魔であり、リゼヴィムの『強さ』を誰よりも既知とする彼の部下である。

そして旧魔王派閥のそれぞれの筆頭が喪失されてより、【禍の団】に置いては悪魔社会を初めとした数多ある神話群へと敵対する【神の敵】の筆頭を掲げるべきはやはり「ルシファー」こそが相応しいと認められており、ユーグリット 彼 自身の実力があっても尚、リゼヴィムこそがカオスブリゲード【禍の団】の首魁と旗印に成り代わるべきだと認めていたのだ。それが、あつさりと死んだことが、やはり認められないのだろう。

「何故、何故………！ つ、貴方から、姉さんの匂いがする………?!」

——あ、これ違うわ。なんか酷く低俗な理由で憤慨してるっぽいわ。推論並べた作者俺の騙りに掛けた時間を返せ。この三人称視点もうやめていい？（呆れ）

▽  
▽  
▽

さて。

ヴァレリーの見ているモノがてつきりスタンド系列、要するにこの世界じやすつかり見なくなっていた幽霊とか、そっちの部類のモノかと思っていたのだが推論はハズレ。

神秘が完全に受肉してるから推測はついていたが、この世界に置いてのそういうオカルト関連は見事に空振りに終わる傾向にあるらしい。

要するに、命というモノは基本死んだらそれまでで、死後の世界というモノが用意されているように見えて限定された人種専用の第二の人生が施される場合とそれ以外がある、という実に巫山蹴た仕様ということだろう。



というか兵藤先輩やアーシアなんかの話を聞くに死んだ後で悪魔に転生させてもらったらしいのだが、当時のIFとして転生不可で終わっていたらその後の自我は一体どこへ消えていたのであるうかと、少し思うわけだ。

　　神話関連ならば死後の世界もきっちり用意されているのだが、きちんと働いているのなら『悪魔とかのその後』というモノも用意されていて然るべきだろうと思うわけで。

　　駒王に攻め込んで来た旧魔王派のお三方とか、きっちりぶつ殺してたよねえ。

　　その後、があるのならあそこまで煽った状態で死後再会したりするところ、凄い、気まづくない？

　　偉人とか社長さんとか、そういう人らが死んだ後々に評価されて、本当に一握りの『特別な人』のみが、実体を伴った第二の人生を用意されている。と見た方が理屈としてはしっくりくる。

　　多分、其処には前世において抱えていた葛藤や思想なんかの心内は評価の対象では無く、むしろ『何が出来るか』の実力主義。そう捉えると、社長や政治家や思想家なんかよりは、剣士とか術師とか殺し屋とかが選別されそうだ。これむしろ北欧系じゃね？　アイツらベオウルフ蒐集してるんじゃない？　悪魔側は目的としてレーティングなんかやらつていう娯楽が主流の目標として収集してるっぽいけど、それに対抗して天使側だって実力者を転生させる準備始めているのもあり得るよね？　酷い選民思想だよなあ。神々の黄昏がオンラインで始まった可笑しくないレベル。

　　長々と語ったが、そうするとヴァレリーの見ているものってなんじゃらほい？　となるのだ。

　　——ぶっちゃけ、アレは単なる幻影だと俺は思う。

　　現実を明確に認識できなくなっているのか、認識しすぎてしたくなくなっているのか。

　　人って言うのは、基本的に見たいモノしか見ようとしなない生き物だ。

　　現実を直視しきれなくなるほど壊れたのか、それとも聖杯を使用す

ることで得られた情報量の多さに本能的なズレを無意識に選択しているのかは不明だが、そんなことでは先々困るだろうに。

何せ、神器という奴は本人から取り出すと死ぬと来てる。

ならばわざわざ本人から取り出そうとせずに、きっちり本人に使わせるのが一番良い選択であろう。

その辺の細かい理屈は俺には明確に出来る程サンプル得ているわけでも無いので推論しか述べられないが、推論で人を殺せるのもまた理屈屋科学者としての側面だ。

そんな危ない橋を、人の命を天秤に掛けて渡るほど俺は人でなしでもない。

なので、ヴァレリーには神器を正しく扱う為の論理の刷新を施す一環として、早々に現実を直視してもらおうこととした。

——要するに、セックスだな。

……いや、真面目な話ですよ？

人が浮世から離れる一番の原因は、生きていくという実感を喪失することではないかと俺は思う。

三大欲求という根本的な生物的本能は、自律化という集団生活が成立する過程において婉曲化するように進化の結果として促された。

それを生の実感と捉えるわけではないが、肌で触れて愛でるという行為を幼少期に得られていない人間は、成長してからも人の愛し方を知ることが出来ないとも云われている。

触れる、ということは人の生活に置いて大切なことであり、何より『見えないモノのいる世界』に傾倒しかけているヴァレリーを回帰させるには、此れは本当に必要な行為なのだ。

要するに人助けだ。

いやー大変だなー。

俺ってばホント働き者だなー。

▽  
▽  
▽

ヴァレリー in the ベッドの上ヘルパンダイブを噛ましてその

翌日、我が家へ侵入者が入って来たのを見過ごすほど、俺の脳は茹だつてはいなかった。

というか、聖杯持つてる。なんで？

想定するに、所持してる聖杯は恐らくだがヴァレリーから取り出した一部のようなモノで、その共鳴を利用してこの場所を特定したっぽい。

そもそもこの場所には特製の認識阻害結界が敷かれており、人の知覚では到達することが出来ない。

だからこそ、聖杯の力で人としての認識力を外されて、生物的進化というよりは退化したっぽい魔改造ハーフらは到達できたわけだが。

拠点の穴を突破するティンダロスの猟犬みたいな存在に換えられて、それを幸福とするかどうかは判別しづらい処だが、それを促したヴァレリーの兄が件の侵入者らに同行してる。

記憶を覗いて把握できた事柄だけど、吸血鬼らつてこの改造行為を、自信を持って国政と云えるのかねえ。

国民を犠牲にして、何を得るつもりなのか。

国つてのは基本的に人の群れだから、群れの都合に沿わない方針を立てても支援されなくちゃ破綻も容易いんだけど。

というか、覗える限り一番大物っぽい40くらいのくすんだ銀髪のおっさん。

目を見て判るわ、アレは屑だ。

人を踏みにじること何の抵抗も持たない、殺しておかなくちゃいけないレベルの屑だ。

つーか、うちの父に雰囲気が激似過ぎて普通にムカつく。

▽  
▽  
▽

神話伝承の類型的に、邪龍として分類される一角・クロウクルワツハは、その総てを睥睨していた。

傍観していた、と言っても過言でなくくらいに、彼らの行動の一挙手一投足を見、捨てていたのである。

故に、油断していたリゼヴィムが目前で一撃の下に葬られたことも、其処へ突貫を掛けた烏丸がどういう意図で行動しているのかも、更にはその烏丸の移動によって漂った微かな体臭の中に見知った姉の匂いを感じてその理由も想定し激昂する変態もといユーグリツトの選択も、全てを把握できていた。

「……姉さん?」

ユーグリツトの台詞に誰の事かと首を傾げ、ベッドの上で放心しているヴァレリーへと視線を向ける烏丸。

ヴァレリーの髪は砂色のブロンドで、ユーグリツトは銀髪だ。

見るからに血縁関係に足り得ない容姿だが、『匂い』という単語から他の選択肢など思いつくはずも無かった。

「違う!!」

当然、ユーグリツトは否定する。

力強い否定だった。

当然である。

「姉の名はグレイフィア、私はユーグリツト・ルキフグスと云う、彼女の弟だ! 貴方から姉さんの残り香が漂っているのは、どういふことだ……!?! 姉とはどのような関係だ!?!」

若干、彼も微妙に動揺しているらしい。

口調が乱れないように心掛けているようだが、詰問したい内容があつても知りたくない事実をどうしても想定してしまい、言動は事実確認を明確に示唆しきれていない。

対して、烏丸は「弟さん? やべ」とたつた今一人殺したにも拘わらず、実に軽い様子でバツの悪そうな顔をしていた。

「……ユーグリット」

「なんですかクロウ、今は貴方に構っている時間は——」

「俺は、この件からは手を引かせてもらう」

事態が混迷を極めたところで、状況を見極めたクロウクルワツハの言がユーグリットへと向く。

その一言は、混乱する彼の思考を停止させるに、充分すぎる一言だった。

そもそも、【邪龍】と分類されてはいるが、クロウクルワツハは自らを『そう』だと定義しているわけではない。

神話的に多くの被害を出す、若しくは言葉や理屈が通用しない、という特徴を持ってして、彼のような龍は【邪龍】と推定される。

しかし、それで云えば聖書陣営の大戦と真ん中で喧嘩を始めた二天龍なんかも邪龍扱いされて然るべきだろうし、時間軸上丁度今頃、冥界でイツセーを追い回しているタンニーンなんかは悪魔に転生したわけだから本質的に邪龍だろう。

そしてそういう【邪龍】というカテゴリを形成するに至ったクロウクルワツハ自身も、伝承上ケルト神話が聖書の侵略に脅かされた結果衰退していったが、彼自身が件の聖書陣営と対峙したわけではない。

何せ、彼が実際に戦ったとされるのはバロル神の召喚に相俟った事例のみであり、バロルそのものも孫のルーに討伐されているので、聖書陣営の侵略とは時期が完全に異なる彼らが対峙した筈も無いのである。

そのクロウクルワツハが今回【禍の団】に協力した理由は、偏に強者との戦いと邂逅、此れに尽きた。

「思うに、アレは俺にとって何の意義も見出せない。戦う意味が、余りにも見えなさすぎる」

リゼヴィムを一撃の下に葬り去った少年に対して、クロウクルワツハの評価は実に低かった。

彼はあの一撃で、烏丸の本質を一分ではあるが、ほぼ完全に把握していたのだ。

「——つな、待ちなさい！ 貴方の望みは強者との戦闘でしょう……っ!? 彼はリゼヴィム様を斃した男ですよ!? 貴方ほどのドラゴンが、怖気づいたわけでもないでしょうに……!」

「言った筈だ、意義が無い。アレは、闘争を旨とする者の目では無い。むしろ、リゼヴィム寄りだ」

さらりと、烏丸自身が屑と認定したりゼヴィムと、烏丸は同等の扱いを受けて居た。

烏丸にとつては甚だ不本意且つ実に心外な評価だが、無理も無かつた。

格闘家が己の身体を鍛えることを日々の是とするのと同じように、烏丸イソラという人物にとつては理解しえない事象を明確にしようという姿勢は呼吸することであり、また社会の裏側へ暗躍を凶るという行為は先の安寧を得るためにも必要な選択である。

前者の根源こそ不明だが、後者に至っては魔法先生ネギま二次元の世界に転生を果たしたことで、自分だけでは無く依り周囲の顔見知り達が作者の思惑【物語の修正力】に晒されることを由としなかつたために、必要に駆られて得た選択である。

死ぬまで貫けば偽善も善に挿げ替えられることと同じように、それが脱げなくなつた現実的思考の苗床になつた経緯となる。

状況を見極め、結果を想定し、前提を捉えて盤上を砕く。

尤も、烏丸の場合は幾つか見通しが甘いこともあるので、全体的に見れば被害は小さいが幾つもの【負け】を享受していることが多い。その上やたらと頑強な精神的距離感を人間関係に構築する癖して、一度受け入れれば大抵の不利益も飲み乾せる度量が無駄にあるので、珍妙にアンバランスな人物像になるのだが。

この辺り、幼少期をエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルに師事したにも拘らず、構成と事象を改竄する魔改造気質に成長した点に

おいては、どうにも碌なオリ主らしくはない。

まあ凡百に埋もれるよりかは個性が憑いているので由としよう（諦め）。

話を戻すが、そういう烏丸がりゼヴィムを討伐した行為を、クロウクルワツハは明白に見据えていた。

格闘家が自己の鍛錬の結果として豪傑な勝利を挽ぎ取ったわけではなく、必要なのでその選択をしたのだと、羽虫を潰すこともまた命を奪うことだということすらも認識することも無いように、単純な行為の動作の結果として片を付けた。

そのことから理解に及んだのが、強いか弱いかという関係性を競合しようという認識も覗えさせないという、クロウクルワツハが捉えた烏丸の本質人物像の一部である。

彼は『強者を斃した』ということに、勝利の余韻も敗北する者へ掛ける憂慮も強者を攻略した達成感も弱者を貶めた愉悦も、何も感情の起伏を揺らすことは無い。

勝ち負けも優劣も、彼にとってはまるで価値の無い結果でしかなかった。

——故に、クロウクルワツハにとってもまた、戦うべき価値すら見出せない相手として認識されていた。

強者との戦いや自身の強さに対する探究、そして種族としての行く末を見届ける、という彼の本懐にとっては、烏丸は敵対すれば百害あって一利もない。味方にしたとしても現時点ではメリットが見当たらず、更に籠絡する方向性もまた不明瞭すぎる相手でしかない。

それらの事実を正確に見据えていたクロウクルワツハがユーグリットに断りを入れ、去って往こうとするその背後では。

グレイフィアさんの弟ってことは悪魔のお偉いさん？殺したあの屑もそっち寄りってこと？殺しちゃまずかったかなあ。吸血鬼との何らかの交流の一環として此処に来ていたのかなあ。でもあつちの男が口にした言い回しだと、どうにも正規の仕事に思えないのだけど。とりあえず、もう1人も報告されないように殺ってから考えるか。

と思考を加速度的に検算し、帝釈廻天をユーグリットに向けて構え直した烏丸の姿が其処に遭ったのだが。

——どちらにせよ、油断が明白になっていた悪魔らにとっては、実に悲劇な結果が待っていたのだと云わざるを得ない。

▽▽▽

「——ぶはあっ！」

暗い、墓所のような雰囲気すら覗える、巨大な<sup>実験用水槽</sup>フラスコが音を立てて割れ、中から培養液で濡れた銀髪の男性が這い出てくる。

意識が戻り、初めての呼吸をし、盛大に酸素を取り込みつつ吐く息は荒い。

身体を揺らし咳き込む彼に、フラスコの傍らに控えていた銀髪の少女が甲斐甲斐しくタオルを持ってきた。

——何処か、グレイフィア・ルキフグスに近しい外見に思えなくも、無い。

「っ、くそ、くそおっ！ あ、あのガキ、私を殺しやがった!! それも、羽虫を叩くようにあつさりど……っ！ こんな屈辱は初めてだ！ 畜生ッ!!!」

「あーひゃひゃひゃひゃっ！ なんだよユーグリットくんもやられちゃまったのかよ!? おいおい、過激な奴が出て来たにやー！」

激昂する銀髪の男性、「ユーグリット・ルキフグスの複製素体」に耳障りな哄笑で声をかけたのは銀の髪を持つ「少年」。

彼もまた、ユーグリットと同じ方法でこの場に存在<sup>助</sup>していた。

「~~~~っ、……ああ、リゼヴィム様。申し訳ございません、貴方の複製素体でも神器の力を無効化しますので、私のように成長促進までは促せませんでした……」



「いーぜいーぜ、死んだ後があるだけでも儲けモノだし？ むしろ若返っちゃっておっちゃん久々にハッスルしたくなってきたわ♪魔力も足りねーから身体の成長も儘ならねーけど、むしろ弱いって感覚が久しぶりで新鮮だわなwww」

それにしたって人の技術も馬鹿に出来ねーな、と少年の身となったりゼヴィムは続けて嗤う。

生命を0から生み出す能力こそないが、【幽世の聖杯】には烏丸が前述したとおり遺伝子を弄ることを可能とする能力が備わっている。

云わば、人の科学で言う処の遺伝子工学。

そしてそちらの、人側のテクノロジーを下地に模倣することに依り、聖杯をデメリットを無く使用できるようになっていたのが、ユーグリットの弾き出した聖杯研究の成果であった。

——そう、烏丸によって明白に明確に容赦も無く完全無欠に轢き潰された彼らが助かっているのも、聖杯の力を利用した『自身の複製』という技術に至ったお蔭である。

自らのスペアを用意することも候補にはあったが、【我】<sup>アイトマン</sup>には同一性質という概念がそもそも宿ってない為に、『魂をも複製する』という行為自体が聖杯では不可能だったための断念。

此れは未だ技術的にも解明されていない事柄だが、彼らが魂と認識する其れは意識と同等になっており、意識の移動もまた人の技術では理論程度しか追い付いていない。

死後『どうなるのか』は検証が足りず未知数のままであったが、期せずして『複製素体<sup>クローン</sup>への意識の回帰』という実験結果が齎された。

悪魔としての生物としての高ポテンシャルに伴った魂の波長と呼ぶべき代物が自らの幽体の移動、所謂【幽体離脱】を可能とすることが元より『意識の移動による復活』を予測付けていたわけだが、予め魔術コーティングで自身の召喚陣を秘密基地に敷いておいたこともまた功を奏したらしかった。

が、それとこれとは別問題であり、ユーグリットは自らを容赦なく殺した烏丸に対しての憤慨を抑えられそうにも無い。

「くそ、それにしても忌々しい……！ 姉さんの身体を抱いたのかあのガキ、……只では殺さん、姉さんの具合がどうだったのかをしつかり聞いてからゆっくりと鬻り殺しにしてやる……！」

「ユーグリットくんはホントおねーさん大好きっ子でちゅねー♪」  
「当然です。このような紛い物では、全然満たされませんからね」

云いつつ、傍らにいた少女の腰を掴み、衣服を引き裂く。

中学生くらいだろうか、為すがままな少女は未熟だが形のある乳房を晒し、未だ床から立ち上がらない胡坐を搔いたままのユーグリットの頭を抱え込み、機械人形がするかのようにならぬ表情のままに抱き締めていた。

「……匂いが足りない。もっと肉を食べなさい、あのガキの漂わせた姉さんの残り香の方がずっと強かった。雌の匂いをさせなくては、いずれ廃棄にしますよ」

「了解しました、ユーグリット様」

「それと、私のことはいつものように呼び捨てにしなさい。少しでも姉さんのようにするのはです」

「了解しましたユーグリット」

「——ああ、くそ、まだ全然だ……。やはり古いモノではクローニングの元にも成り得ないか……」

彼女は、聖杯の力でユーグリットの私物である「グレイファイアの髪（4・5世紀ほど以前の盗品）」から復元に成功した実験体であった。名前はまだない。

元々は現在の【禍の団】の頭目である無限の龍神ウロボロス・オーフィス、彼女の力を割いて別の素体へ押し込めて従えさせられないか、と始めた研究の成果だ。

しかし、髪は腐敗しないとはいえ、ユーグリットが散々『使った』結果ほとんど原形を留めておらず、足りない遺伝子は自身のモノを組み

合わせて作ったユーグリットとグレイファイアの遺伝子の相の子と呼ばれるモノになる。

が、自身の童貞を実の姉に捧げ受け入れられることを目標としているユーグリットにとっては完全に未熟な模造品であり、出来上がってからコレが控えている基地内では毎晩のように自慰を奉仕させるも満たされることはない。

オリジナルの肉体年齢と合わせて同系型・タイプ熟女型・幼女型・JK型・赤ん坊型・老女型・男性型と各種取り揃えて見るもどれも失敗作であり、そもそも完全な自我が芽生えた試しがない。

最低限メイドとして動ける同系・幼女・JK、そして眼前の少女型を除いて、大多数が既に廃棄済みであったが……やはり惜しむらくは、件の聖杯をマリウスへ返却したことが悔やまれる。

しかし、元々【神滅具】とは他の神器を組み合わせたような性能を持つ13の極点だ。

同じような力を持つ、謂わば廉価版分離型聖杯と呼んで然るべき神器は確実に何処かに存在するので、この解明した技術を使う機会だつて必ずあるはずだった。

「ま、おねーちゃんの偽物にくんかくんかする程度で治めとけよ？

あの小僧がどんななのかは推測を重ねるしかねーけど、クロウクルワツハの奴があの場合に居たんなら今頃片かたも着いてるぜ」

「……ああ、クロウなら脱ぬけましたよ。彼とは敵対する意義が無いそうです」

「——は？ マジか？」

彼女の浅い谷間に顔を埋めてぐりぐりとすることで、幾分か冷静になれたユーグリットの情報にリゼヴィムは唾然とする。

あの戦闘狂が戦わない、という選択をする件の小僧——烏丸に、更に警戒を重ねる評価を降しそうになる。

——寸前で、

「なんでも、彼はどちらかと云えばリゼヴィム様寄りの人間だそうですね。彼の弁では」

「……………なんだってそんな奴がサーゼクスくんの嫁さん抱いてんだ？ あ、いや、そう考えるとむしろ有りえるのか」

少女の胸をペロペロしつつ続けて出された情報で、素のテンションに落ち着いたりゼヴィムが呆れた声を出していた。

直ぐに納得もしたが、改めて考えると烏丸のやっつてゐることはホント酷かった。

「…………となると、傍観の方が面白くね？ 嫁さん寝取られた魔王様が面白おかしく復讐代行してくれね？」

「どうでしょうね、彼には他の女性の匂いもしましたし。…………まあ、最低限仕込みを済ませて置くべきでしょうね」

返却の前に先立って準備していた己らの複製素体に、聖杯のもう一つの性能である『魂に干渉する力』で製造——幽界が存在するという前提が現実ならば——復活した、戦力となるべき【邪龍の魂】が一つ、此処に在る。

今の【禍の団】の目標は全神話領域だ。

全てから悪と定められた者たちや、その神話に馴染めない食み出し者たちを蒐集し、グレードレッドを斃すという目的を偽として挙げつつ、オーフィスの力を横から翳め取り自らの陣営の強化を施さんとするモノばかりのならず者集団。

はつきり言えば、まとまりなどあってないようなモノばかり。

故に、自陣営の戦力を纏めることは間違っではない。

ユーグリットは、涎塗れにした少女の胸から顔を上げ、キリリと引き締まった顔で言った。

「…………英雄派に渡りをつけて見ましょう。神器所有者の中に、ひよつとすれば使えるモノがいるかもしれませぬ」

平時とは飽く迄一時のモノであり、次に来るべき闘争へ備える準備期間であることを、忘れてはならないのである。

「よくわかる戦術講座。そら先生にむわあーかせてえっ☆（鶏冠感）」

「……なんでお前が居るんだ？」

「あ、ども匙先輩。いや、なんですすかね。俺にも良くわからないです」

夏休み、グレモリー眷属が冥界へと向かったその一方で、我らがシトリー眷属も同じように会長のご実家にお邪魔していた。

それもこれも、俺たちのような若手悪魔を貴族のお偉いさんに紹介する目的があつたためだ。

しかし件のお披露目を先日済ませたところで、俺たちはその実力を示すために、グレモリー眷属とのレーティングゲームに興じることとなつてしまつていた。

そんなわけで、今日より勝つためのミーティングを詰めつつ修行を積もうとしていた矢先。

——何故か、シトリー家の貴族らしからぬこぢんまりとしたリビングに待機していたのが、今年より無駄に名を馳せつつある後輩・烏丸イソラ、その男子であつた。

「あつ！ か、烏丸くんっ!? ヤバい、先輩方急いで避難を！ 女子は全員体育館へっ!!」

「落ち着け仁村！ シトリー家に体育館はねえよっ!? てか、なんでそんな過剰反応してんだ」

「だって烏丸くんって年上の女子をいつも侍らせてて見境なしに手を出して妊娠させるって言う噂がありますっ」

「酷い風評被害を見た」

つて、噂かよ。そういえば仁村つて塔城さんとは隣のクラスだった

か。

なんでそんな兵藤みたいな悪評が蔓延ってんだ、あの後輩。

と、こちらの会話に間隙も空かさずツッコみつつ、斜になって顔を引き攣らせる烏丸。

なんだか背中が煤けていた。

「え、隣のクラスではそんな噂になってんの……？ アレはアーシア先輩やイリナ先輩やゼノヴィア先輩が勝手に勧誘しに来てるから起こってる対立であって、女子を妊娠させたことは流石にないっす……」

「安心しろ、噂に振り回されてるのは多分仁村だけだ。まあお前が変な立ち位置に居ることは否定しないが」

確か、今言った3人に聖剣とか聖十字とかを備えさせた製作者がコイツらしいんだよな。

そうなれば未だに天使側からのオフアールがあると噂もある元修道女トリプル娘を通じて、あの日会談に臨んだ天界側から間接的に未だ人間であるはずの烏丸を勧誘に来ていても可笑しくない。

会談の後で天界側からの譲歩の証として、件のグレモリー眷属の元修道女らは聖句や教会からの種族的な抵抗感を緩和させてもらった、とかっていう話だったし。

流石に強い光が悪魔の弱点であることは変化しないらしいが、自分たちの陣地に踏み込むことを許可される悪魔、っていうのも充分スゲエと思うんだ。

「……ひよっとして会長から何か頼まれたのか？ 次のレーティンゲームで勝機になるような何か、とか」

思わず口をついて出た思いつきだが、案外コイツが呼ばれた理由としては有り得そうな気もしてくる。

何故かコイツなら次元の狭間を突破して冥界へ来ることなんて単

独でも出来そうな感触が微妙に漂うけど、流石に勝手に乗り込んで来られるほどシトリー家のセキュリティは甘くない。

……無いよな？

話を戻すが、さつきも言ったが聖剣なんかを製作したのがそもそもコイツだ。

レーティングゲームの相手に聖剣使いが2人も居る時点で悪魔としては無理ゲーなのに、前回の「グレモリー眷属vsフェニックス3男眷属」で見たゲームバランス崩壊させる塔城さんが先陣切って突貫してくる恐怖仕様がまだ控えてる。

【駒王学園校舎】っていう入り組んだフィールドで縦横無尽に動いたあのトリツキーな高機動戦術美少女が居る限り、俺たちシトリー眷属には勝てる見込みが今のところ微塵も無いのである。

そんなわけで、せめてもの勝率上昇になれば、と淡い期待を込めて烏丸を見遣る。

「……次のレーティングゲーム？」

「つて、何も聞いてないのかよ。お前ホント何しに来たんだ」

「いや、無理やり連れてこられたので何とも……」

あ、やっぱり自分の足で来たのとは違うのか。

小首を傾げる烏丸に、わずかとはいえ期待していたので脱力せざるを得ない。

仕草が無駄に可愛いのがなあ……、コイツたっぱもあって雄臭いの、そういう処が無駄に後輩らしいんだよなあ……。

つか、コイツをこの場に連れて来られるのつて、会長以外だとひよつとしたら……。

「ひよつとして、お前を連れて来たのつてセラフオール様か……？」

「誰それ」

またしても、間を置かずに答えが出る……つておい。



「この前の会談にお前も出てたよな!? なんてわからねえんだよ!?」

「というか、俺としてはどう見ても異世界な此処に生徒会の先輩方がいらつしやる時点で普通に困惑してるんですが……はっ、まさかひよつとして、皆さんも悪魔関連の……っ!?」

「なんでそこまで情報遅いんだお前は!?」

戦慄の表情で口元を押さえる、実に今更な反応を見せる烏丸に呆れを通り越して驚愕する。

ちよつとー!? グレモリー先輩若しくは兵藤ー!? コイツにもうちよつと事情の説明とかしてあげてー!!

▽  
▽  
▽

「マジかよ、生徒会長まで悪魔かよ。もう終わったな駒王学園。失望しました支取先輩のファン辞めて風紀委員長の雲仙ちゃんを応援します」

「あっちの鉄球少女も風紀のナニを守ってるのかって感じだけだな。あと其処まで終わってねーよ駒王学園」

一通りの説明を終えると、烏丸のそんな科白で感想が吐かれる。

科白とは裏腹に其処まで辟易した様子は無いが、小声で「……またネタが潰された。(もう嫌だこの異世界)」って後半良く聴こえなかった何かを呟いていた。

それと、常に鉄球で手枷足枷嵌めてる系ロリの雲仙ちゃんを応援してるって、普段も塔城さんと仲良いみたいだし、お前ロリコンなんじゃねえのか。あ、こんなことツッコんだら塔城さんに怒られるな。自重するか。

「というか、なんだ、烏丸って悪魔関連苦手だったのか?」

「そんなことはないですが……よく考えてください、日本には日本の神話に連なる陣営が潜んでいるのに、異種族で経営母体を抑えられてる学園かつこしかも普通の人間の子供かつこ我が国の将来を担うであろう若者たちかつこことじも通っているかつこことじで果たして普通の人間をキチンと導けるものでしょうか。種族が違くと根本的な価値観も変化しません？」

「……なんか真面目に考えてたんだな。スマン」

「何に関する謝罪ですかねえ……!?!」

かつこかつこことじが多くて一瞬ゲシュタルト崩壊しそうになったが、意外にももつともな理由を挙げられて謝るしかない俺である。

謝ったら謝ったで青筋立てた烏丸が居たが。

決して、コイツふざけ半分な理由挙げて煙に巻きそうだな、とか思ったわけでは決していない。

「確かに種族は違いますが、其処と折り合いを付けようという働きも動き出しています。融和という意味はあるはずなので、せめて侵略とは捉われないようにそちらからも譲歩していただきたいものですね」

「いや、別に俺は一般人代表つてわけじゃないですから、意見の一つとして覚えて貰えれば……。あ、ども副会長」

「そうだな、お前は一般人じゃないよな。むしろ逸般人だよな。あ、真羅先輩おかえりなさい」

烏丸の科白に言っておかねばならないことを付け加えつつ、会話に参戦した真羅先輩にアイサツ。

別に悪気はないし、その後部屋へと入って来た会長にも早速問い質さねばな!

「会長！ コイツ俺ら生徒会のこと信用ならねえって言っていました！」

「話は聞いていたのでそういうことを言うのは辞めなさいサジ。彼だつて無理やり連れてこられたのですから」

「むしろ匙先輩なんで俺をいきなりdisりましたか」

スマン、会長に近づく男子は幾らけん制しても湧いてくるものだから、つい反射的に。

「改めまして、こうして話すのは初めてですね。駒王学園生徒会長の支取蒼那改めソーナ・シトリーです。椿姫の言つた通り、普通の学生相手にも不平がないように心がけていますので、今はそれで勘弁してもらえますか？」

「——ああ、さっきの。失望しました、つてのは冗句の一種なんでお気になさらず。様式美つて奴です。ともあれ、烏丸です。『そらくんつて呼んでね!』」

……ん、なんだろうな。最後の科白で、妙に偽悪的に嗤つた気がしたんだが。

気の所為かな。一瞬スゲエ怖気が。

「噂に名折れぬ魔力ですね……。本日は姉が突然連れて来てすみません。私も先ほど本人から聞かせられて驚いています」

「あー。まあ、元々用事もあったので、後で外出さえできれば問題は無いですよ。グレモリーさんちつて此処から近いんですか？」

「リアスに用事がありましたか」

さんち、つて。

烏丸の言い方だと、途端に冥界が日本の田舎臭くなるのだが……。

「まあそんなところです」

「わかりました、後で使いを出しましょう。あと失礼ですが、——どういう様式美ですか」

うん。俺も思った。

「俺のいた学校では通じてましたが？」

「突飛な様式美もあつたモノですネ……」

ローカルルール  
中学校かな。

コイツ、別に転校生、ってわけじゃなかったもんな。

そんな一見すれば、とりあえずけん制の必要は無そうな挨拶を無難に終える2人へ、会長の後ろで珍しく大人しかったお方が読んでた空気を放り投げて出張っていた。

「はいはい！ さつきも挨拶したけど改めて！ 魔王少女のセラフォル・レヴィアタンだよ☆ 『レヴィアたん♪』って呼んでね！」

——うん、云いたいことはわかるがこっち見んな。

視線をきつちりこっちへ向けて、云いたいことがある、と空気を読んでいるっぽい烏丸が無言で逸れて、なんとか直ぐに向き直せられる。

「……会談の時にもいましたね、そう言えば。えーと、魔王ってひよつとして役職なんですか？」

「えー？ なんだと思つてたのお？」

「いや、実力勝負な部分がある社会なので、てっきり旗印なのかと」

ん？

なんか齟齬があるな、なんだろう？

「サーゼクスさんとはどういうご関係で？」

「んん？ ……あー、あーあー！ なるほど！ 烏丸くんて【魔王】

が4人いるってこと知らないんだね！」

……あ、そういうことか。

「烏丸、今の冥界では、サーゼクス・ルシファー様、セラフォール・レヴィアタン様、アジュカ・ベルゼブブ様、ファルビウム・アスモデウス様と4人のトップが君臨してるんだ。お前が言うのは、アレだろ？ ゲーム的なラスボスが何人もいるのかとか、そういう意味での問いだろ？」

「いや、ボス系は何人いても構いはしませんが、まあ納得しました。4大魔王で支配地を分割してるんですね」

「違う、そうじゃない」

「どうやったたらキチンと説明できるのかなあ……!？」

「まあそつちの話はおいおいしていくとして。まずはゴメンねー、いきなり拉致っちゃって☆」

「謝罪の意図が全く感じ取れませんが、理由をとりあえず話して欲しいです」

一言多いけど、割と寛容だよなお前。

こんな魔王がトップクラスでゴメン、ゴメンよ烏丸……!」

「そらくんにソーナちゃんたちを強くして欲しくて呼んだんだ！リアスちゃんのところの小猫ちゃん、あの娘を鍛えたのもキミなんですよっ？」

「っってお前なのかよ!？」

グレモリー眷属強化の背景は、何もかもお前の仕業かよ!？」

「もうこれから何かあったら『大体烏丸の所為』って覚えるぞコンニャロウ……!」

「それを俺がするメリットは？」

「私がなんでも願いを叶えてあげちゃうぞ☆」

魔王相手に一手に交渉噛ませる烏丸もスゲエけど、それを即呑み込むセラフオール様もスゲエ……。

なんか、後輩が倍速で俺ら妹様の眷属より上位に立ちそうで怖いのだが……。

なんでも……、つて言葉を噛み締めつつ、思案していた烏丸がこちらをちらりと見た。

「——じゃあ、こういうのはどうですかね？　くくく……」

「ほ？　ふん、ふんふん……。ん！　おっけー！」

「じゃあ、交渉成立ってことで」

と、がつつり握手を交わす烏丸にセラフオール様……。つてええええええええええ！　ちよ、待って！

なんか俺らの行く末を勝手に決められた！

「か、烏丸あ?!　お前ナニ承諾してんの?!　あとお前セラフオール様に何をお願いしたア?!」

眷属一同が思うであろう疑問を、真っ先に問えば、ニツコリ笑顔でサムズアップをする烏丸が。

——答えになってねえ!?

「じゃ、とりあえず俺レーティングゲームのルールを知らないんで、そこから話詰めていきましようか」

ほ、ホントに大丈夫なのか……!?

▽  
▽  
▽

「——え、ギヤスパー？ あの子が此処にいるのですか？」

「「「「……。——ッ!?!」」」」

一通りのルールと相手のメンバーを聞いて、名前が挙がったところで口を挟んできたヴァレリーに全員の視線が向き、一瞬の間の後で2度見した全員が漏れなく驚愕の表情を露わにした。

そんなことより、レーティングゲームって男女差無しでやるのかよ。

ブツ殺死合とかって聞いていたから暗黒武術会かと思いきや、ガチ系の裏武闘殺陣なの？ ニンジャも出るのかな。ハチリユウを準備しておくか？

「あ、ダメだ。ルールにフィールド破壊が反則になる場合があるって書いてある」

「お前が今何を想定しかけたのかは怖いから聞かないでおくけどその前にちよつとこつちにも注目してくれるかなあ!? 誰!? この人誰え!?! 今の今まで居なかったよなア!?!」

ハハハ、そんなわけないジャマイカ。今までしつかりと俺の傍にいましたよ？ 認識阻害かけて黙っていただけですわ。

「とういかヴァレリー、ヴァレイと知り合いか何かなのか？」

「ええ、幼い頃に。あの子が国を離れてからずっと会ってませんし、そらさま、あの……」

「ん。じゃあ機会を見て会いに行くか」

世間は狭いね。

何かを懇願するかのような上目遣いの砂色ブロンドの美女に意図を汲んだ返事を返せば、途端に表情が明るくなる。

うむ。やはり美人は笑った顔が一番だよ。美人の笑顔を曇らせるは紳士にあるまじきこと、と彼の<sup>か</sup>タキシードなロリコン様も言っていたような気がするし。

「そつちだけで完結してないで説明してくれよ！ 説明責任を果たせよお！」

「匙先輩うるさい」

「俺が悪いの!?!」

突然ひとの姿が見えるようになる、なんて世間じゃざらに在る事でしょうが。

枯草の匂いがする神隠しの魔王様とか、俺のいたところにもそんな例の1つや2つや10や100。

こんなんで怯えてたらウチの世界出歩けねえよ？ トガノヨミコとかに出会う確率だってサド<sup>突</sup>ンデス<sup>然</sup>レベルだし。

そんな思いで色々思索を巡らせていたら、ソーナ会長から挙手。

「しかし烏丸くん、一先ず紹介してもらえませんかこちらも困ります。あとは客室の用意とか」

「あ、ベッドは一つで構いませんよ？」

「え、それは……」

ヴァレリーの続けた台詞で顔が赤くなる会長。

……ひよつとして悪魔とかって言ってもみんながみんな痴女ってわけじゃないのか？

グレモリー先輩がアレだから、てつきり。

これは益々俺の提示したお願いが欲しくなったな！ よし、頑張るか！

ともあれ、紹介が必要とのことなので簡単に。

ヴァンパイアハーフを使って聖杯実験に勤んでいた貴族（笑）らは、ヴァレリーの聖杯によって進化を果たした。



元々自分らを強化したい、とかいう目的があったらしいので、俺の理論を挟んでの結果は上々と云えるだろう。

彼らは、世間の煩わしい雑事にもう思惑を傾ける必要も亡く、モノを喰う必要も無く、全てのヴァンパイアの為になる最も栄誉ある生物としての上位へと変換された。

彼らは寄り添い大樹となり、日々人の血に等しい性質を持つ実を生らせることであらゆるヴァンパイアからの感謝と称賛と栄誉を一身に受ける存在に為れたのである。

クロザクロは言っていた、『一番上と下は同じ』と。  
至言であるね。

実に世の為人の為となってくれた実験の礎として、彼らのことは大々的にツエペシユの国中へと宣伝させてもらった。

聖杯の扱い方をヴァレリーにキチンと把握させるための、とつても『人の為になる』実験だ。称賛はあつて然るべき。

というか、根本的な科学理論という外付け知識があれば、遺伝子を弄る為に必要な部分だけの情報を取り込む、という知識の選別が可能なんだよな。

魂のどうこう、とかって話が全体に及ぶ必要も無い。

人間の脳はそういう取捨選択が出来ないわけじゃないのだから、読むべき部分を切り貼りできて当然だったんだよ。

お蔭様で、聖杯もコントロールが容易くなったのでこれからもっと実験可能。

明日はもーつと楽しくなるよねっ（ロコ●やん風）。

それより怖いのはヴァレリーだ。

あの日、うちに侵入して来たグレイフィアさんの弟その他をぬっころしたついでに、一緒にいたヴァレリーの兄に関する処分は彼女に一任したわけだが。

自分のことを便利な道具扱いした上で、同じようなハーフらを実験動物扱いしていたそいつを、ヴァレリーはとりあえず殺した。

変貌した元彼女の友人らは改造のし過ぎで脳すらも原型を喪つており、2度と元に戻せないことが理由の一つ。

元に戻すには聖杯の力を制限掛けずに起動し魂の深淵まで覗きこむ必要があるが、そんな真似をさせて折角正気に戻したのに元の木阿弥ではこちらとしてもやる瀬が無いし。

そして最も大事なもう一つの理由が、そもそも本来の形を把握することが難しい事であることに加え、彼ら彼女らが復活を本当に望んでいるのかというと『わからない』からだ。

命を扱うという事象は云わばエゴであり、それを吞める人物でない限りはエゴを押し付けさせるわけにもいかない。

しかしそんなヴァレリーでも許せないことは当然あるので、いくら肉親であろうとも其処は譲れなかった。

結果として、マリウス<sup>王</sup><sub>族</sub>の命で以て犠牲となったハーフラの無辜の魂を慰撫しよう。

そんな企画である。

その後で口にした台詞が、はいこちら。

『……どうしましょうそらさま。わたし、全然気が晴れません』

復讐、という程どろりとしたモノでは無い、からりと『仕返し』をやりたいという欲求だろう。

聖杯をしっかりと扱えるようにサポートして、こちらから命の扱い方をレクチャーしながらのマリウス殺害に及んだわけだが、折角なのでコツを掴むまで何度でも、とマリウスさんには何度か生き返って貰い命を弄る実験の礎に。

腹を割かれて電流を脚から流されるカエルみたいな扱いで、初めの方では恨み言とか助けてくれたらなんでも支払うとか色々口にしていた気がするが、最終的には自ら死を懇願するようになった彼は、今でもツエペシユの城にいるのです。

最終的に手脚斬り落とした芋虫みたいな姿で眼球を焼き潰し、顎を外して咀嚼も出来ない形に固定。自殺も出来ず意志だけはあつて、更に気狂いにも成れない程度に脳みそのストレス許容量も拡大してあるから、ヴァレリーみたいに正気<sup>現</sup>から<sup>実</sup>の脱却<sup>逃</sup>も不可能。もう生きることも辛かろうに。

まあどうしようもないけど。

『それ』の取り扱いはヴァレリーの友達の中での生き残りヴァンパイアハーフに頼んであるから、ヴァレリーが見聞を広げ終えて帰省するまでは処分を留めておいてくれるはずである。

ちなみに、これらのことを決定付けたのは大体ヴァレリーの意思。俺？ やり方をレクチャーした程度ですわよ。

「ツエペシユ、ということは、ヴァレリーさんは吸血鬼ですか。王族の名であったはずですが、何故烏丸くんと」

「まあ色々あります」

便利な言葉だね。『色々』。

さてそれはともかく、こつちとしても方針は決まったので、自己紹介をしていたヴァレリーを呼び戻す。

「ヴァレリー、ちょっと潜って来てくれる？」

【倉】に続く術式を開き、俺は入れないのでこの中でも適してる筈の彼女へメモを手渡す。

ヴァレリーちゃんはじめてのおつかい、のお時間です。

どーれみふぁーそーらーしー（ry）。

「中にいる奥さんに頼めば出してくれるはずだから」

「はい、わかりました」

折角だし、死蔵してるアイテム類を大盤振る舞い。

元々【スクロール】は精神修養の意味合いが強かったが、向こうに在るはずの【倉】に直に繋がる上に、【術式】の持つ実体化性能に基づいて幾つか持つてくることも可能らしいから。

俺は入れないのだけだね！ 外で術式の維持に努めなくちゃならないからね！

「なんかホントツツコミどころ多いんだけど……!? お前会長の実家で何遣らかす気だ!? そして奥さんってナニ!?!」

「いや、考えて見たら真つ当に自分を鍛えた塔城をなんとかしなくちゃ勝機が無いから、手っ取り早いアイテムでも備えさせようかなと。匙先輩を秘密結社張りに改造人間に仕立てようかというのも、経過実験見てる暇も無さそうですし?」

「さっぱりと俺を犠牲にしようとした!? というかその計画を取り止めにした理由が酷すぎる!」

「ただいま戻りましたー」

「速っ!?!」

【倉】の中は72倍速だからねえ。

いくつかのアイテムを持って戻ってきたヴァレリーに確認を取り、それぞれに不具合が無いかをチェック。

俺がグレモリー眷属にあげた聖剣とか十字架とかがヤバいというのなら、同じレベルのアイテム類を放出してやればいいじゃないの。とは言っても、結局のところそれを『使えて』も『使いこなせるか』という話とは別なので、その辺りは個人の裁量任せになるのだけど。しかし、今回ののは実戦というわけでは無く飽く迄ゲームだ。

先にチェックを掛けた方が勝てる。

チェスのルール上最強はQueenだがKingを取られた方が負けるんだから、何が強いとか弱いとかより、結局のところ『何を犠牲にするのか』というのが勝負の分かれ目なんだよねえ。

「……なあ、いい加減に教えてくれ。お前だけが策を練っていても、それに俺たちが従うっていうわけじゃ無いんだ。方針も指してくれない奴の話聞くほど、社会つてのは気安くは無いんだぞ……?」

何か根負けしたかのように、匙先輩が含めるようにそう言葉を紡ぐ。

ふむ? 俺としてはこの先輩方を従わせたいわけじゃ無くて、単に

報酬を得られるように取り計らってるだけなんだが。

だがまあ、先輩の言も間違ってるので、

「しゃーねーですな。匙先輩、俺がセラフオールさんから貰う予定の報酬を貴方だけに教えましょう」

「は……？ いや、それはお前の取り分なんだろう？ 俺が教えられたからと言って、どうなるわけでも……」

「まあまあ、いーからいーから」

▽▽▽

「——うおおおおおおおおおおおおおおっ!! 【禁手化】 ツツツ

!!!

『Prison Dragon Balance Breaker

!!!!!!!

!!「!!「!!「ナニいつ?」!!「!!」!!」

匙先輩って目つきもうちよつとキリツとしたら、まんま人吉デビル会長だよね。

髪型とか被りまくってるものね。

俺、最初この学園に通い始めた時、某西尾漫画のif世界に迷い込んだのかと思っただくらいなもの。

そんなデビル匙生徒会庶務先輩は実に男らしい雄叫びを上げ、この数週間で至った神器の超強化・【禁手化】へと変貌した。

それもこれも、滞在初日に差し上げた『己の限界を覗ける眼鏡』が功を奏したのなら云う事は無しだ。

「時間はねえ。が、これなら速攻で決められる……! 此れが俺の

バランズ・ブレイカー『禁手』・『黒曜邪焰の龍鎧』! 邪焰の力を舐めるなよ……っ

!

あれ、やっぱりコレ暗黒武術会なのかな。

別に三つ目が通ったわけではないが、思いがけない錯覚に二・三度目を瞬かせる。

「くっ、匙が禁手化だと……っ!!? 俺が一週間山ん中走り回っても至れなかったのに、お前どんだけ厳しい修業したんだ……!!」

対峙していた兵藤先輩が、驚愕の声を上げた一同の中で出した第一声がそれであった。

驚愕の意図も有りそうだが、夏休み冒頭を山籠もりで消費って、アంత酷い青春の無駄遣いしてないか。

「というか計算が合わない気がするのだが……、気の所為かな。」

「大丈夫っ! こっちには烏丸くんの造った聖剣があるものっ!

いくわよ、袖白雪っ!」

「そうだな、天竺叢雲っ、力を示せっ!」

と、躍りかかるは聖剣使いの2人。

しかし、何気に責任が俺に乗ってきそうだからそういう名乗りは辞めない?

あと技名とか剣銘叫んで強くなれるのはジャンプだけです。

俺の剣にオサレは搭載されてません。

「——邪王焰呪縛」

「っ!!」

【黒い龍脈】状態だった時とは違う、陽炎のような不可視に近い性質の『ゆらぎ』が匙先輩の身体から伸びていた。

範囲も測りづらいところが勝機に繋がったのだろう。

自らを拘束してくるその実態を掴まえきれず、見る間に2人は拘束されていった。

此処で身体をむちむちと主張するような拘束の仕方をしない辺り、匙先輩はホント紳士だと思う。

『何故其処でもつとエロくしないっ！ あの坊主はホントわかつちよらん！』『ちよつと黙ってくださいオーデイン様』

……なんか、観客席側から聴こえたが気の所為だろう。

「……………！ な……………！」

「なに、これ……………！ 力が、抜けてく……………!？」

「禁手化したことで不可視になったことに加えて、龍脈ライオンの力は健在だ。体力や魔力を吸い取って俺の力の倍化に役立てる。——兵藤、ぼやつと見てないでかかって来いよ。同じドラゴン系神器使い同士、勝負をしようぜ」

「……………ぐううっ！」

兵藤先輩が自身の力を高めていることにも気づいていたのだろう。しかし匙先輩がつけえ。

やはり、此れは修行前に教えた『俺の報酬の中身』が功を奏したのかな？

「俺はこの戦いに勝って————なんとしても、会長の【大阪弁魚嫌いキャラ】付けをした【ネコミミ系アイドルデビュー】する姿を目に焼き付けるんだ……………ッ！」

「え、なんだそれ俺も見てえ！」

「……………は!? なんですかそれ!?」……………

——あ、其処でバラすなよ。

初耳の会長以下眷属の皆様も、声を揃えて驚いていた。

此れが他のメンバーのモチベーション低下に繋がらないと良いんだけど。

ホント、匙先輩は詰めが甘いなあ。

☆「男女の仲って奴は肉体関係のみに留まらせてはいけないのではないかと（ry）」

汗で湿った身体は程よく火照り、たつた今まで酷使していたということを行拂とさせる。

その肢体の程よい肉付きは男の情欲を獣のように誘い、掴まえた腰は手の平から伝わる熱が自身の脈動と連なるように震えていた。

そうして繋がった結合部を、腹の奥へと届かせるように突き上げる。

「ひああん……っー」

膣内は決して離さないと懇願するように窄まって、己の形が分かるくらいにピタリと食らい付いていた。

真正面から抱き合ったイリナは上半身を仰け反らせるも、その脚は甲虫がするかのように俺の腰へと絡みつき、背中へ届かせようと廻した腕は其処まで届かずに肩を掴まえている。

抱き抱えられた彼女は突き上げられるたびに豊満な乳房を上下へ揺らして、たぶつたぶつと震えている乳房と一緒に可愛い声を漏らしていた。

「あつ、あうつ、んあつ、らめえつ、しよ、こおつ、しよこつ、らめえつ」

俺の貌を直視出来ないくらい恥ずかしいのか目を開こうとせず、快樂の嬌声を上げ続ける彼女は場所柄、叫びたい衝動を押し殺す。

身体の線を隠そうともしない黒いレオタードみたいな『其れ』が、今では胸部なんかの恥部をも隠していないというのに、それを懸念するよりも今は別の『こと』の方が気にかかっているらしい。

場所はグレモリー邸の、倉庫の一室。

無理も無いが、そう思うのならば先ずは俺へとモーションを掛けるのを止めるべきであったのでは、と老婆心ながらに思うのである。

▽  
▽  
▽



一週間後へ迫ったと小耳に挟んだ暗黒武闘会改め裏武闘殺陣。

要するに俺が送った初見封殺コンボや、受けるダメージを半減する結界系アイテムや、装備すると膂力が倍になる牛の角、笛を吹くと何処からともなく現れて駆け抜けて逝く犬耳ナースの群れを呼び出せる犬笛など、ネタ半分で提供したアイテムのお披露目も一週間後となるわけである。

基本的にどれもネタ、要するに遊び半分で制作し扱いに困っていた代物ばかりなので大放しさせてもらったが、其れに准える修行編が始まるうにもシトリー眷属と呼べる彼女らからの警戒心は微妙に解けなくて、居心地悪い俺は先に要件を済ませようとシトリー領から出奔と相成らさせていただったのであった。

いや、匙先輩を某ローマの第一位宜しく『これよりM O 手術を開始する!』って聖杯の力借りて魔改造するのも吝かでも無かったのだが、流石に今の立ち位置が把握しきれてないヴァレリーを公に晒すのもどうかと思ったので自重させてもらったのだけど。

というか、会長の家にある体育館みたいなところで体操着姿の役員さんらとか、見るだけって普通にムラムラくる。

生脚だよ? ブルマだよ?

うちの学校指定の体操着しか持ってないの? と、男子匙先輩が混じっているのに気負う様子が無い彼女らが、普通に心配になってくる。

ハーレムだなあ、やったね匙先輩!

襲い来る衝動に託けてヴァレリーといちゃいちゃしようかとも思ったけど、……普通にヴァレリーって良い娘なんだよなあ……。手を出すのが憚られるレベルで、モノを知らないのが凄い心配になっってくる……。

それに、彼女がこうして国の外へ出ていられる理由に、『見聞を広げるため』という半ば無理矢理吸血鬼らから筆り取った前提が敷かれてくるわけだから、呑気に連れ回しているだけじゃ其処をクリアできないってことで、祖国に残されてる他のハーフヴァンパイアらの行く末が暗礁に乗り上げる。

帰る場所がある奴は其処へ収まるべきなんだ。  
って、岩崎月光だつて言っていた。

「そんなわけで、色々とお話を通すためにもやって参りました」  
「……どういふわけですの……？」

呆れた顔つきで姫島先輩が、なんとかツツコミを絞り出していた。  
見聞云々より前に、俺の立ち位置を確保すべきだよ。っていう意  
図である。

「グレイフィアさんご在宅？」

「真つ先にそちらへ向かわれるのが色々アレなのですが、とりあ  
えず本日は魔王様も帰宅する予定は無さそうですわね。当然、御付き  
となっているグレイフィア様も」

「ありや、残念」

通しておくべき話もあったのだけど。

弟さんのこととかさ。

「しゃーない、出直しますか。お邪魔しまさ——」

「まあまあお待ちを。なんならリアスにも顔を見せて行っては如何  
？ きつと喜びますわ」

「……えー？ あの痴女臭いから苦手なんだけど……」

「言い方……っ」

思わず本音が出たら窘められてしまった。

そうですね。それを言ったら姫島先輩も似たようなモノですもの  
ね。

▽  
▽  
▽

「ひくうっ!?!」

擦りむいたと言っていた太腿の後ろを脚で撫ぞつてしまったが、今の悲鳴はそれとは別の衝撃から来た声であろう。

初めは敏感だと応じていたが、推し留める気はない。

それに、最奥に開けた子宮の入り口が叩かれたことで、ゼノヴィアの貌も歓喜に蕩けていた。

「くっあつ、あ、ああくく……っ」

自身を押し入れた膣穴は初物でもないのにぎゅちぎゅちと締め付けて、その快感を離したくない、と身体が応える。

此処に来てからずっと身体を鍛えていた、と言っていたことが原因に当るのか。

彼女の肢体は余計な贅肉など一切無く、二の腕や腹筋なども摘まむことも出来ないくらいに引き締まっていた。

だということに、乳房も太腿もそこらの女子高生よりずっと豊満にあるという、男子高校生が味わうには実に贅沢な身体。

それを後ろから覆い被さり、四つん這いに屈んだことでぶら下がった乳房を両の手で抱えながら、俺は彼女の腰へと自身を幾度となく潜り込ませていた。

「——あつ、あつ!・んうっ!・んひうっ!」

そうした反応が返ること数十分、ぐりぐりと俺が良く知るゼノヴィアの膣の中の【弱い処】を執拗に攻めてやれば、吐き出す嬌声も随分と濁ってくる。

「おっおっおっ!・おっおっ!・おっうっ!?!」

叩きつけることで断続して響く嬌声は、人のモノというよりはずつと動物的だ。

その雌豚のような声を頭の片隅の何処か冷静な部分で聴くと共に、ゼノヴィアの具合の良さに堪えるのも難しいと雄の欲望が必死で叫ぶ。

「ほらっ、出すぞっ、何処に欲しいっ!」

「あ、っあ、っ、な、が、あ、っ、な、が、に、だ、じ、で、え、っ!!」

懇願する彼女の、初めのキツイ締め付けも窄まった、緩く弛んだ下

の口へ。

容赦のない俺の灼熱の濁流が、びゆるびゆるつと絞り出される衝撃で、ゼノヴィアはより一層その身体を仰け反らせるのであった。

「あゝあゝあゝーっ!! ふあゝあゝあゝあゝーっ!!  
!!!」

▽  
▽  
▽

「ヴァ、ヴァレリー……っ!? なんで……っ!?」

「まあ、ギヤスパー。大きくな……可愛くなつたわね?」

「なんで言い直したのっ!?」

さもありません。

小柄且つ駒王の女子制服に身を包んでいる男の娘では、【成長した高校生男子】と言い表すには些か違和感が過ぎた。

そんなヴァレイだが、目隠ししているのにどうやってヴァレリーの存在に気づけたのだろうか。

謎は尽きない。

「烏丸くんの提案からずっとギヤスパーはあの通りの生活を勧めているのだけど、意外と馴染むみたいね」

「マジか。才能あるんだなあヴァレイめ」

凡才の身なればこそ、嫉妬するのも吝かでも無し。

確かに俺が提示した肉体改造だけど、感覚というか五感を把握するのに、俺だって此処まで短期じゃ無理だったぞ。

ああまったく、妬ましい……。

「……嫉妬してるの? 貴方でもそういうときがあるのね……」

「そりゃあ俺だって普通で一介の男子高校生ですからねえ」

「……普通?」

そこで疑問符を浮かべないでほしいのだが。

再会を涙ぐむヴラディを何処か微笑まし気に眺めつつ、グレモリー先輩は俺の肩へと身体を寄せる。

「大丈夫よ。あの娘にどんな想いを抱いていたって、私は貴方のことを支えてあげるから……」

……ん？

「あの、なんか勘違いしてませんか？」

「え？」

というか、なんでこの人がそんな科白を口に出来るのか。

何？ 正妻面？

俺の奥さんはエカテリーナであってアンタじゃねえよ。  
ていうか、そもそもに【嫉妬】の部分で違えている感。

ヴァレリーに近い男子が居るのなら、俺は早々にお役御免できるから寧ろバツチコイなのだけど？

あ、聖杯実験の際にはちゃんと集まってね。

「それでヴァレリー、どうして此処に？」

「ええ、そらさまに祖国での騒動を事前に防いでいただいて、そのお礼も兼ねて仕えることにしたの。世間知らずな私が出来ることと云ったら、これくらいしかないから……」

「そ、そうなんだ……？」

……可笑しい、俺がヴァレリーの面倒を見るのが決定事項になつてる。

其処でもっと自己アピールしろヴラディ！ お前の幼馴染を手元に引き寄せろっ！

「……烏丸くん、あなたルーマニアで何をしてきたの？」

ヴァレリーの科白から何らかの裏事情でも読み取ったのか、はたまた彼女とヴァレディが幼馴染な為、彼の出身地を把握しているが故にその結論に至ったのか、グレモリー先輩は呆れたような貌でこつちを見ている。

人助けですけどお？ 心外だよ。

▽  
▽  
▽

「ふむっ……ん、ぐっ、ちゅぶっ、じゅぽっじゅぽっ」

卑猥な音を出しながら、エプロン姿のアジアが俺の股間の逸物を銜えて頭を動かす。

舌先を窄めて、歯を立てることも無く、喉の奥へと届かせるくらいに勢いつけて吸引するその様は、まさに『ご奉仕』と呼ぶに相応しい。教え込んで日も浅いというのに、予習復習がしっかりとされているのか、はたまた性奴隷として優秀なのか……。

此れだと性奴隷として、というよりは肉便器として、と言い直す方が適切な気もしてくるが。

ところでその格好久しぶりだね。無駄に似合うよね。エロくて。

「上手くなったなアジア、気持ちいいぞ」

「ふ、ゆみゅっ、んむう、ぢゆるぢゆるっ」

頭を撫でてやると、嬉しそうに吸い付きも激しく応える。

逸物には此処に来るまでにまぐわったイリナやゼノヴィアの性器の味も混じっていると思われるが、其処に不満も露わにしないとはどういう心境の変化なのか。

まあ、従順になるというのなら異は唱えやしない。

「良くきれいにしてくれ、この次は塔城を相手にするからな」

「……っ、ふ、むぐう……」

おや、勢いが止んだ。

げせぬ。

▽  
▽  
▽

「そうだ。鳥丸くん、みんなにも顔を見せて行ってね？ 特に小猫とか、ずっと沈んでいるし」

と、グレモリー先輩が面倒見のいいお姉さんみたいな科白を口にした。

驚きで見直す。え、偽物？

「なんでそんな目を向けてるのか心外なのだけど……。眷属は家族同然なのだし、モチベーションを上げようって言うのは当然のことよ。というか、あなた連絡手段を持っているのに小猫のこと着信拒否してるでしょ」

「ええまあ」

「悪びれもしない……!?! と、とにかく、それでやる気が出ないみたいな小猫とか、仲がいい元聖女組とか、早い内に話を合わせておくのは当然だと思うのよ。あなたたちに何があったのかまでは聞くのも野暮だと思うから聞かないけれど、心配に思う家族をどうにかできる人になんとかして欲しい、と思うのは駄目なことかしら?。」

「……まあ、ダメでは無いですよね」

元より、人には向き不向き、というものがある。

そこを弁えることが出来ないモノが多いために、世の中は分不相応なキャラが蔓延っているのだと俺は思う。

だが、前々から付き合いのあるグレモリー先輩の立ち位置と、今回の彼女の距離感がどうにも掴めにくい。

なんだ？ 何を狙っている？

穿ちすぎかなあ……。

「そんなわけで、朱乃、烏丸くんを案内してもらえるかしら？ 私はギヤスパーとヴァレリーさんを相手しているから」

「了解しましたわ」

▽▽▽

「ん、つまり、リアスは、はあんつ、烏丸くんの立場を慮った上で、身を引いている、という状況になっているのかと、あんつ」

「身を引く、と云われても、そもそもモーションかけてたっけ？」

「あ、あれほどわかりやすかったのに……ひうつ」

困った時の姫 グレモリー翻訳機 烏先輩。

以前に要求されていた子作りに通じる男女の妙を交えながらの、豪邸廊下の物陰にての尋問である。

豊富な乳房や意外にも細身の尻なんかをマッサージしつつ、グレリンガルな解釈をご相伴してみるととっても今更な事実を教えて貰っていた。

「でも悪魔って言うくらいなんだから、異性に粉を掛けるくらい通常運行なんでは？ 元シスターのアーシアだって、今じやすつかりセックスの虜だし」

「それは烏丸くんだからはうっ、んっ、わ、わたしだってえっ、処女なんですからあつ、ああつ」

うん、其れは知ってる。

ていうか、そうなることやっぱりあの先輩も処女なのか。

通りで、男子の心の機微の取り方とかも、下手くそなわけだ。

「ていうか、なんで今更身を引くとかって話に。煩わしいモノが無くなつて問題は無いけど」

「か、烏丸くんは、なぜそうやって人を遠ざけようとするのですの？



一般的な男性なら、リアスのような美人に懸想を寄せられることは受け入れられこそすれ、忌避するものでも……ひいんっ!？」

「——聞かれたことにだけ応えてくれますか？」

愛着を沸かせないようにだよ、言わせんなこんな偽悪表現。

気づかれるのも癪だが、苛気も湧いてしまったので先端を捻る。

摘まんだ乳首がぷくつと敏感に膨れるような反発を覚えたのだが、この人マゾっ気もあつたのだね。

「お、おそらくですが、先日の新世代同士での顔合わせが発端かと……、んっ、他の同世代らが貴族らしい志を備えているのに、自分は此れで良いのか、と思いついたのでは……、あんっ」

「はあ、自分でそう思うようになったのなら立派だとは思うけど……」

「一部には到底立派とは言えない者も居て、それが反面教師として自覚を促したのかも知れませんか……んううっ」

その眷属らがこうして男と姦淫に耽る、とかつて何の冗談だ。

というか、本当に自覚できたのならさつきも相応に律するものなんじゃないか？

わからん……、興味を向ける気は特にないが、見なければ見ないで変な方向に本人の意図が可笑しなベクトルで傾く気がついているという一抹の懸念があるし……。

「ま、一応は理解できたし、これ以上気に懸けても仕方ない、か。出来る限りはモチベーション上げるのも吝かでもないし、顔見世くらいはしておきますよ」

「……んっ」

と、彼女の身体から手を離せば、力が抜けたのか姫島先輩はその場にくたりと腰を落とす。

肌蹴た衣服を直そうともせず、立ち去る俺を呆然と見送っていた。

「……………え？」

▽▽▽

「で、元気じゃねーか」

「わーいそらくんだあ、はすはす」

何人かのグレモリー眷属女子らと顔を合わせて、ぶっちゃけ後回しにしていた塔城にも顔を出しに来たところ、キャラ崩壊待ったナシの塔城にクンカクンカされてる俺である。

今迄の話の流れ上成った経緯でしかないが、俺の役割が慰安婦みたいで笑えない。

倉庫とか庭先とか炊事場とかで、それぞれが要求するままにさせて来たのだが、この流れのままに塔城を相手取るほどトチ狂ってはいない。

一晩思う様に交わったからと言って、彼女の肢体が未熟なのは間違いが無いのだ。

だから股間に手を伸ばすそれを、寸での処でインターセプトする。

「今更だけど、お前ら男性経験がろくに無いんだよな？ それなのに一回身体赦したらもう直結って、倫理観可笑しくないか」

種族が悪魔だからと言って、彼女らがその概念を受諾していないのは最早明白で、お蔭で『悪魔なのに理知と気品を尊ぶ』という矛盾した性質を全体的に社会性の一環として備えているようにも覗える。

しかし、そんな処女臭え彼女らなのに、たった一晩で籬を外れたというのも事実。

もう少し自分を大事にしろよ。

ドクシャ側はぐだぐだうるっせえんだよとっつと喰っちゃまえよ

！って憤るかもしれないけど、やっぱほら、俺って塔城みたいな小学生体型に素面で欲情出来る程業は深くねえんすよ。

「……アーシア先輩とちゅっちゅしてたのでしよう？ 此処で相手  
がもう一人増えても構わくないですか？」

「してねえよ」

してねえよ。

大事なことなので二回言った。

アーシアはご奉仕したがっていたからさせただけで、「今日は」セツクスはお預けのままだし。

「……むう、確かに雄の匂いがしません。……なんというバナラ  
ビーンズ臭」

「やっぱ嗅覚スゲエなお前」

さすがはどーぶつ。

……計画通り。

「今日は元より陣中見舞だ。性的な意味合い無く抱くくらいならし  
てやるから、それで勘弁しろよ」

「——は、それは要するに恋人みたいな扱いと云う事ですか……!?  
た、確かに心躍りますが……そらくん、あなた本物ですか？」

「失礼にも程があるだろ」

この娘俺のことどう思ってたんだろう（思春期感）。

「まあ、着拒してたお詫びだとも思っとけ」

「ああ、それなら納得ですね」

云うが速いか、塔城はそのまま俺の胸板に身体を預け、匂いを嗅ぐ

ように擦り寄ってくる。

されるがままに、俺はそんな彼女の髪を、さらさらと手櫛で解くように優しく撫でることで応えていた。

……くくく、其処もアーシアのご奉仕で掃除済みよ。

イリナやゼノヴィアの匂いなど微塵も残っていない、察せられることも無い。

——苦節15年、遂にロリに勝てる日がやって来たというわけだ……！

「——とでもいうと思いましたか？」

「え」

▽▽▽

下半身を強制的に露出させられ身動きの取れなくなった俺の上に、部屋着から一転、下着姿となった塔城が跨っている。

部屋は灯りを落とし薄暗くなっているので覗え難いが、彼女もまた下半身が心許無い程度にまで露出しており、身を隠す衣裳は肩から掛けていると言っても過言では無い程度のネグリジエのような下着——それもブラですらない仕様のヤツのみだ。

検めて云うが俺の上へと、そんな姿で跨った塔城は、嬉しそうに身を声音を震わせていた。

「ふにゃあ……！ そらくんのおち●ぽお、おっきい……っ！」

あの日一晩かけて形も馴染んだはずの膺は、「若さ」という回復力がその狭窄さを回帰させたらしい。

ぎつちぎちに締め付けてくる塔城の猫穴まみあなは、それでも押し返そうとせずに俺の逸物をずぶずぶと沈ませる。

ぎちぎちチャンピオンがこんなところに居ようとは。猫タヌキなのに猫とはこれ如何に。

そんな塔城に対して、俺が云う事は一つである。

「仙術ウ……ッ！」

——糞がア！ 男子一人捕える為だけに部屋に罠張るとか正気じゃねえぞオ！

いや、元々は自部屋に侵入して来た外敵から身を守るための捕縛結界セムなのかもしれんけど、それをお前俺に使うって何なの？ 塔城小猫は烏丸くんのことをどうしたいわけ？

……ヤってること見れば一目瞭然ですけどねえ……！

「落ち着くんだ塔城！ お前みたいな幼い体ていでやって良い事じゃない！ 身体は大事にしろ！」

「もう何回もやっちゃったじゃあないですかあ。んっ、それにい、それからとは同じ年ですよ？ にやあっ」

身体を上下に揺さぶりながら、甘い声音が鼓膜を震わせる。

浮かべるその微笑みも実に蠱惑的で、背筋を快感のような衝撃が走ることを自覚できていた。

細い太腿は力なんて微塵も感じないほど華奢なのに、女子としての魅力魅力を醸す程度には肉付きも良く、それが自分の上に跨っているという時点で股間が熱くなることを推し留めることも難しい。

上下に揺すれば体重も共に掛かるわけだが、それもまた同級生とは思えないくらいに軽く、俺に押し掛けられる衝撃のたびに思うのは、その都度微かに触れる小ぶりの尻の柔らかさだ。

——それがまた、エカテリーナ程度の自重を想起させ、俺の罪悪感がギリギリ痛む。ホントマジでゴメン。

「んあっ、そらくんだってえっ、すごいっ、げんきじゃないですかあっ、あんっ」

騎乗位となっていた塔城はいつの間にか胸板へと上体も押し掛けて、それでも腰を蠢かせるのを止めない。

俺の股間を封じて已まない塔城の膺は、まるで別の生き物が捕食しているかのように、目の前の幼い少女とは断然結びつきそうにない感触で活辣と蠢かせているのだ。

女子コエー。

「むしろお前が元気ならもつと別の奴狙えよ……。兵藤先輩とか、俺が居なければ適当だったんじゃないの？」

最早彼女がこうして動くのは、猫的性質として仕方のないことだと諦めた。

それならば、せめて俺に限定しなくてもいいのでは、と塔城だけでは無く他の娘にも思うわけだが。

例えばもつと別の世界線とかなら、あの先輩がホントにハーレム形成するようなモノだって、何百何千というパターンの中に数十例程度はあったのではなからうか、と。

「あの先輩はないですね。童貞臭いですし、女性の胸ばかりが優先っぽいので」

「俺だってロリコンじゃねえよ。というか、一瞬で素に戻るのやめてくれない?」

「にやあん、そらくんのお●んぽはいつまでもおつきいからしゅきい♪」

スタミナ切れが中々無いから持続力には自信があるのですぞ、ではなく。

蕩けた貌から一瞬で素に戻っていた塔城は、次の瞬間には再び蠱惑的な蕩けた貌付きとなつて俺の唇を舌先で舐めていた。

女子コエー……、人間不信になりそうですわ……。

「——そらくん、に、小猫ちゃん……?」

ふと、部屋の入り口から声が響く。

というかアーシアの声だった。

灯りが差し込んだのも一瞬で、すぐに戸は閉じられたのだろう。

が、セオリーなら、部屋の入り口で俺たちの情事を除いてしまえば然自失——となる世界線もあつたのではなからうか。

その行動の迅速さに、やや疑問符が浮かんだ。

「にやあ、アーシアせんぱい、ごめんなさい、ガマンできませんでしたあ」

煽る様な物言いいー!

俺の口を、それこそ動物のように舐め回していた塔城は、アーシアが入室したことに気づいて、部屋の入口の方へと顔を向けて応えていた。

つか、独占欲の塊であるアーシアに、仲間内とはいえそんなこと  
良く言えるねこの娘。

——と、思っていたのだが。

「……もう。ずるいです小猫ちゃんてば。……順番ですよ？」

「はーい、にやあ♪」

「……………あれ？ いつの間にか話がついてる？」

俺、またスタンド攻撃喰らったの……………？

女子が怖いと心底思った。

そんな夏の日の一幕であった。

「そらくん、勝手に終わらせちゃダメですよ」

「いや、もうメに入りたい」

こんな話はもう辞めようよお！ ハイサイ！ ヤメヤメ！

☆「…………そろそろ俺も転生特典系の特殊能力欲しいなあ。必殺技として役立てられそうなやつ…………」

「これ、何本に見える？」

「さ、ん…………ぼん…………」

「ちよつと前まで何をしてた？」

「悪魔、たちと、戦って…………やられて…………」

「自分の名前は云えるか？」

「…………ミツ、テルト…………」

「おーけい、上出来だ。是非ともそのまま生きてくれ」

記憶に乱れはないし、自我もはつきりとしてる。

生体反応的には経過を看ないと定着してるかもあやふやだが、魂そのものが人外であるから強度自体は上々の筈だ。

その辺りは『経験的に』周知している。

とある教会の地下にて用意した、デカイフラスコのような容器から解放された濡れ濡<sup>そぼ</sup>った肢体の金髪少女。

癖っ気の髪は背中くらいまであり、それが肌に張り付き風呂上がりのような艶めかしさの発露を——微塵も覗えさせないのは女性として肉体的に未熟な所為、だけではないのだろう。

あまりにも呆然自失とし過ぎていて、彼女からは『羞恥を自覚する』という【意識】が未だに回帰させられていないようにも覗える。

そんな彼女にいくつかの質問を重ね、サルベージ前に読み取った【天網】<sup>記憶骨子</sup>との齟齬が無いことを確認しつつも、意識面での補填が未だに拙いのは、前例的にもやっぱり『こういう仕様』としか言いようがないのかねえー。

そこに【生前の自覚】を促すとなると、やっぱ肉体言語(意味深)に頼るしかないのかなー。

何はともあれ、此れで【死者の復活】も難なくクリア。



墮天使少女ミツテルトたん、復ッ活！

▽▽▽

支取会長とグレモリー先輩の勝負の行方？ 描写しなくても良いよね？

会長のアイドルプロデュースはお姉さんのセラフオルーさんがノリノリであったし、匙先輩の魂の咆哮を聞き届けたのかサーゼクスさんまでノリ気になってた。

政治的には色々問題ありきな人に見えたけど、民衆の為に惜し気なく心血を注ぐ辺りは『良い魔王』なのだろう。

腹芸を覚えていない感じではあるけど、人間的には好感が持てるのだし、其処が支持率にも繋がるのかもしれない。

そんな魔王様までやる気になっていて所謂『魔王からは逃げられない！』という奴で、会長が脱する隙など一ミリも残されていないのは明白だ。

そして会長のメルヘンデビュー☆を心待ちにしつつ、俺とヴァレリーは先立って駒王町へと戻って来ていた。

いや、グレイファイアさんに弟さんのことを報告した時、変な反応が出た所為でもあるのだけど。

なんでも、グレイファイアさんのご実家のルキフグス家は既に断絶しているらしく、弟さんの生死すらも不明のままであったとか。

そこへ飛び込んで来た俺からの報告と、『ルキフグス』が代々『魔王に仕える一族』であるとかいう自負から生じる、共にいた『男の正体』を疑問視するグレイファイアさんの洞察。

それを俺が撃破した、とさざりと告げると呆気にとられた顔をしていたが、ともあれ、男の正体については予測もつきやすいらしい。

旧魔王ルシファアの血統、そして、聖書に記された『暁の明星』の息子とされる、悪魔の歴史から見ても警戒に値する男、名を『リゼヴェイム』。

多分だけど、死んでないよな、その屑。

いやさ、ヴァレリーから聖杯抜き取っていて、それを使って俺の居場所まで辿り着いた奴らだよ？

それ以前に聖杯を抜き取っていたのなら、相応に色々使い回しているって見ても過言じゃないよね？

例えば、自分のコピー、とか？

となると予測に予測を重ねて、警戒に値する防衛力を構築しても不足に当らずも遠からず。

矢荷成荘の中だけでは不十分な実験場の確保をグレイファイアさんにも申請し、ヴァレリーの真価を如何なく発揮できそうな場所を目当てにして冒頭に至る。

要塞兼実験場を、聖杯で好き勝手出来るモルモット死者らがなんか埋没してそうな『町外

れの教会』を目安に、設備も揃えたわけである。

グレイファイアさんに最初に確認とった記録によれば、なんか此処で春先にグレモリー眷属らとか兵藤先輩とかが墮天使一部と一戦交えた場所らしいぜ？

死体の一部が残ってればもつと楽だったのだが、検索するに塵一つとして痕跡が無い廃教会。

しょうがないにやあ、と聖杯を最大展開させることによりImmortal Record土地の記録を蜂起させ、この場で喪失したと思われる【意識】の喚起を一斉に引き起こす。

聖杯を通じて出張る情報量の多さに関しては、ヴァレリーが俺とアストラルコードで繋がっている為フィルターを掛けることが可能だし、肉体の再生に関しては予め【倉】から発掘しておいた『ホムンクルス製造』に使用した幾つかの容器から流用できる。

……なんだろう、こつちの世界に来てもやっつてることが幼少期と変わらないんだけど。

ややノスタルジックな気分になりつつ、Dance Macabre【死者の舞踊】染みて来た教会地下で死者共の選別作業に移る。

とは言うものの『蘇らせた奴ならなんでも受け付けるよ！』というわけではない個人的な理屈に依る理由なのだが。

いや、ヴァレリーひとり程度なら問題は無いんだけどね、吸血鬼ら

からそこその支援も貰ってるし。

でも数知れずに蘇生させまくって、その全部を面倒見れるほど生活に余裕は無いんだよね。

かといって保健所に持っていくわけにもいかないし。

復活させた二十数名のうち、大多数は人間だったりするし。

つかグレモリー先輩ら殺し過ぎwww 大量殺人の証拠が出揃っちゃったよお、ふええwww

巫山蹴るのはこのくらいにして、実際生前が只の人間だったのが大多数なので、完全な意識の喪失が為されている所為で『ある程度』まで肉体を復活させても意識の回帰が追いつかなかった奴らはそのまま廃棄逝きだし、意識反応が出て記憶を読み取って執着や怨念が強い奴らでは、配下手数に据えるには心許が無さすぎる。

獅子身中の虫を飼う趣味なんて無いし。

そんな中から、上手い事使えそうだったのがミッテルトたんのみであつた。

廃棄逝き以外？ 人外だし、なんかの材料に使えるかなあ、って具エネルギー体例探してただけど、結局脳潰して教会に敷いた結界に繋がる魔力源として流用しておいた。

俺が居ない時に侵入されるのも嫌だから、王国結界……は解析されている恐れもあるから普通に聖域系の、悪魔とかに有効な奴を常時発動型にしといたわけで。

イリナとかの話だと俺の拙い聖別でも『こうかはばつぐんだ！』らしいし、同じレベルの侵入阻止させとけば問題無いよね。

建物が元々持つてる聖属性を復刻させただけの処置だから天界側にも気取られないし、許可なく入って来た奴は問答無用で身動き取れなくなる程度に捕縛するだけだし、ちよつとばかしステンドグラスがご立派に輝いてるけど許容範囲内だよな。

よし、此処を「かくされし きんだんの せいいき」と名付けよう。  
ここには昔、少女の像があつたんだって……。

「つーわけで、今からミッテルトたんをペろペろするから、ヴァレ

リーはしばらく時間潰して来ておいてくれ」

「いっそ清々しいですね……!?!」

意識蘇生の手順はヴァレリーだって通った道なので、隠す理由も無くに堂々と告げて置く。

つらいわー、今から大変な仕事しなくちゃいけないくて気が重いわー。

でも幼い少女をボケ老人みたいにしておくのも問題だしー、張り切ってマツサージ（意味深）しなくっちゃー。

そういう心積もりで説明したのに、ヴァレリーは何故かジト目で見える。解せぬ。

「……そらさん、言っておきますけど『ああいう行為』が男女のアレコレ、っていう知識くらいは私にもありますからね?」

「なん、だと……?」

てつきり世間知らずで、蝶よ花よと箱入りに育てられた生娘かと思っていたのに……!?!

あ、いや、生娘だったのは間違いなかったけど。

「性知識くらい人並みに備えています。驚き過ぎですよ」

考えて見ればヴァレリーって大学生くらいの見た目に見えるし、マリウスとかいうメガネに精神使い潰される前は常人並みの感性は備えていた筈だから、そんな下地があっても可笑しくは無いのか。

……まあ、この先別に彼女を騙くらかして引き留めるほどの意義も特に無いし、彼女が自分から離れるというのならそれはそれで問題無、

「あの、それで、ですね、よろしければ……見学していても、構いませんか……?」

——なん、だと……!?

▽▽▽

肉付きも薄く、未成熟な彼女の肢体を、そらさんは無遠慮に撫ぜる。胸を、その先端をこりこりと摘まむ仕草は焦れつつくて、その間隙にお腹や太腿なんかへと手を這わせる行為を交互に重ねて逝く様は、私にシタように随分と手慣れたようにも見えた。

呆然としていたミツテルトさんは、時折吐息のような声を漏らすだけであったが、次第にそのリズムはペースを上げてゆく。

「ん……っ、はあ、……だめ、え……、そこ、はあ……んいい……!」  
決して反応が薄いわけではなく、受け答えも相応に出来る。

自意識が完全に回帰していない仕様、とそらさんが把握したとおりに、聖杯を通じた私にもそれくらいは見通せるのだ。

云わば、低血圧の子が起き掛けで朦朧としているような、そんな状態。

「あ、うんっ、や、ひうつ、んあっ、らめえ……っ!」

そんな状態であったミツテルトさんは、そらさんの愛撫で反応も次第にペースを上げて逝き、遂には弾むような声音で悦楽の嬌声を上げた。

そらさんの手は何時の間にか彼女の太腿の内側へも伸びており、敏感な部分を撫でられたことで身体も跳ねるような反応をする。

擦っただけでは済みそうにない、『その先』を受け入れる気が万全にしか見えない恍惚に蕩けた表情で、まだ回帰しているとは全然言えないミツテルトさんは、呆然と天井を見上げていた。

——そして、そんな様子の全貌を余すところなくRecする私。

「……面白いか?」

「はい、とっつても♪」

記録で記念で将来の参考です♪

ヴァンパイアの王族として囚われの身であった私に、そらさんは決

して表立っては云えないような行為をした。

しかし、そのことで私は自己を取り戻し、そのままでは失われる恐れすらもあったヴァンパイア社会全体の将来を繋ぎ止めてくれたのも事実だ。

『行為』の内容が、観方によつては雄の欲望に塗れた代物であったとしても、『その先』に控えた采配で救済を示していただいたことは間違いないようがない。

……それに実際不快では無かったし、気持ち良かったし、ヴァンパイア社会の中では引き取り手すらも不明瞭であった私のハジメテを、不本意では無い形で卒業できたことは、王族としては駄目なのだろうが女性としては不満も無い。

ならば、そらさんよりも『年上である』私が彼に伝えてあげべきことは、上手に彼の相手を務めることではなからうか。

それこそが彼へと捧げるべき私からの対償と備えることであると、私ヴァレリー・ツエペシユは貴族としての礼儀を持って愚考するのです。

……まあ、うだうだ考えるより感じるのが大事なのも事実。

要するにそらさんの手練手管で腰砕けにさせられるよりも、きちんと応えられる女性として嗜みを持ちたい。

それだけが理由で理屈で前提ですな。

茹で上がった貌で天井を見上げ、上向きとなったことで喉の通りも良くなりなんとか気道を確保できたのは、きっと生物としての本能的な仕草に依るものなのでしょう。

絶え絶えな吐息で口呼吸を、ロングブレスで重ねるミツテルトさんへ、そらさんは追撃の手を止めませんでした。

「敏感だなあ……、久しぶりの肉体で反応が張り過ぎてるのかね。

——うむ、此処も大洪水」

実は衣服も纏っておらず、髪も解かれたままの、ゆるふわうえーぶな金髪をした彼女。

そんなミツテルトさんを背中から抱えているそらさんが、今迄触れていなかった股間をくぱあ……と撫ぞります。

無毛の秘所が肉襞を曝け出し、ピンク色の綺麗で小さな穴からはとろとろの粘膜が溢れ出て、受け入れる準備も万端のようでした。

尚、この場所はステンドグラスからの光も眩しい教会本堂。

一種神々しいような、神秘的な光景が目には焼き付きますね。

「上手く起きてくれると、助かるんだけどなあ……」

仕方ないよね、と言いながら、そらさんは彼女の身体を自分に向けてさせて、反り立った逸物を細い太腿の合間へと侵入させてゆきます。

対面座位、という奴ですね。

私は気づいた時には後ろから犯されてました。その後はキチンと正面からでしたが。

じゅぷ、じゅぷ、とゆつくりと身体が沈み込む水音が、静寂に包まれた聖堂内へと響きます。

うつすらとした意識のままのミッテルトさんは、それでもまだ起きる様子を見せません。

そらさんの身体が進むその都度、声が漏れるような反応を見せてはいるのですが。

というか、何故ひと息に進ませないのか。

「きつつ……い……小柄だとは見てわかるけど、此処まで狭いか……!?!」

あー……。

まあ、肉体は基本一新させた状態で形成されてる筈ですから、やはり幼い躰での復活ではそーなりますよね。

でも此処で止めるのは無しです。

頑張れ！ 頑張れ烏丸イソラ！

「よ、し、とどい、たあ……っ」

「——ひっ、ぐう……っ!?!」

やったあ！ ミッテルトさんの処女、貫通です！

無駄な達成感に感動する私を他所に、膣穴の膜が裂かれた痛みで回路がようやく繋がったのか。

小さな悲鳴を上げたミッテルトさんが、目を瞬かせながらそらさんを見上げていました。

「な、に、え……っ？ だれえ……っ!？」

「あー、やっと起きたか。おはようミツテルト。寝覚めはどう？」  
さて、これで私たちが閲覧した通りなら、彼女の反応も予想通りの筈ですが。

上手く行つてると良いですねえ。

▽▽▽

「は……、はあ!？」

お、上々な反応。

俺を人間と見て侮ったのか、狭い秘所をぶち抜いた状態だというのに、威嚇するように見上げてくる金髪少女。

意識蘇生に関しては、混じり物無しに再生できていると見ていいかもね。

「ちよ、ちよっとお？ なんなのお、アンタは……!?! 人間の癖に、このミツテルト様で童貞卒業とか、ふざけたことシテくれちゃつてえ……っ!」

童貞ちやうわ。

しかし、彼女は記憶の部分で俺を知らないのだし、先ず貶めるような科白でアドバンテージを得ようというのも納得の仕様。

威嚇というか、煽つてるといふか。

「まあまあ、気持ち良くしてやるから。難しいことは後でな」

「はあ!?! ぜんっぜん気持ち良くないんだけどお!?! むしろキモイんで早いとこ抜いてくれないっ!?!」

うっわー、口悪い。

まあそれを見越しての再生だから、其処は良いけどね。

「え？ 気持ちイイだろ？ 狭いけど、こんなに濡らしてるくせに」  
「はっ、どーせ寝てる間にローションとか塗りたいくったんじゃんぎいっ!?!」

ぐりい、と抉るように挿し込めば、苛立っていた表情が悦楽に歪む。  
此れを『細くする』なんてことはできやしないが、狭い膣中なかを拡げ



ようとするギリギリの大きさに膨張を保ち、濡れた穴の全方向の肉壁を擦る『痒い処にまで届く』仕様だ。

種族的なアドバンテージを持っていると疑いもしなかったと思われる、上位にいると自負していた筈の余裕の笑みは一瞬で崩落し、ミッテルトは歯を食い縛ったような悲鳴を上げた。

「こっ……の……っ！ いきなり動く、とか……っ！ アン、夕、女の、子の、扱いつ、知らないっのお……っ!? んっあっひうっ!」  
が、抗議の声は然程も続かず、すぐに腰の動きに合わせて嬌声を上げる。

ようやく解ほぐしたお蔭で蕩けるくらいに緩まったが、未だ狭い膣から伝わる快感に身体はしっかりと反応しているらしい。

痛みで歪んでいた、と自分でも思っていた筈の彼女の顔つきは――

「あっ、んいつ、ひんっ、んああっ」

「おいおい、気持ち良くないんじゃないのか？ お前の貌、すげえ悦んでるようにしか見えないぞ……?」

――雌としての喜びを覚えた艶めかしい歓喜の貌、所謂、アへ顔という奴へと変わり果てていた。

「……っ!? んいつ、んむううっ!」

上げていた嬌声を抑えるように、彼女自身の手が自分で己の口を塞ぐ。

それを遮るように、俺はより深く、心なしかペース早めに腰を動かす。

見開いた眼は信じられないようなモノを見るように愕然とし、自分でもその快樂に溺れることを受け入れられていないようにも覗えた。

「こんなに感じるのが不思議か？ まあ、記憶からしてみれば未経験ってわけでもないんだろ？ すぐに熟れるのだって、無理も無いと思うけどなあ」

「――っ！――あっ！――うっ！――」

段々と形に余裕が出て来た膣内の壁に沿うように、俺の自身も余すところを失くそうと膨張を示す。

逃げ場なんてない快樂の奔流に、ミツテルトは悦に染まることに必死で抵抗していた。

見下していた筈の人間に犯されるだけならばまだしも、更に『こういう面』で下へと廻ることが我慢ならないのだろう。

それでこそ俺が選別した女性であるし、遣り甲斐があるというモノだ。

——そして、最終確認に至るべくスパートをかけた。

「——あつ、あーっ！ んあつ、あああああつ！」

我慢も利かなくなつた彼女は、手で自信を抑えることも出来ないくらいに快感に吞まれ、絶頂に至ることを絶叫で曝け出す。

——と同時に、彼女の背に隠れていた翼が、大きくその全貌を明らかとした。

——純白に輝く、神秘的な両翼が。

▽  
▽  
▽

「——は？ なにこれ……なんでえ!？」

語彙が酷く低迷なミツテルトたんが驚愕の表情を露わにする。

まあ、墮天使が天使ヘランクアップしたことを自分で体験すれば、相応に驚愕するのも仕方がない……のか？

ちなみにそう驚くに至つたのは、彼女を満足させて自分もそこそこ中に出してヴァレリーのハンディカムの中身も充実した数時間後のこと。

これが、聖杯の力だ……！（キリッ）

「無駄にドヤ顔決めてないで説明しなさいよお!! なんでアタシが天使にというかエッチしたのに堕ちてないってどういうことなのお!？」

「仕様だ」

「果たしてよお！ 説明責任を果たしてよお!？」

いや、だって、弱点が多いらしい悪魔側に沿えるよりは弱点らしい弱点が訊くに少ない天使の方がお得でしょ？

悪魔と堕天使の違いとかって、ぶつちやけ良く知らんのだけど、今のところ警戒すべきが旧魔王っていう立場なんだから、弱点少な目に控えさせるのは常識じゃねえかな。

あと簡単に落ちないのはアレだ、そういう精神仕様のミッテルトを選んだ俺の功績？

ある意味彼女自身の勲等なのだし、むしろ誇って良いんじゃないかね？

「上手く行きましたね。種族変更」

「だなあ。聖杯って万能だな」

「其処は発想力だと思えますけど……」

ヴァレリーとからからと笑い合う。

因みに、ミッテルトを復活させたという過程に至っては、エッチの後で実例交えて説明済みである。

選別漏れの『行く末』を曝け出しておけば、そうそう反抗しようとはしない筈だよな？

尚、逃げ出したとしても逃げる『先』が無いことも自覚できていると思うので、その辺は気に懸けてない。

「ていうかなんでアタシなのよ……！ レイナーレさまやカワラーナはあんな扱いだし……！ ま、まあ、エッチは気持ち良かったけど……、か、簡単に落ちたりしないんだからね……！」

色々と葛藤が激しいようだが、まあその調子で頑張ってくれ。

敵方に捕まったとしても、ミッテルトならば媚を売ってまで命乞いしよう、とはしない筈だ。

そういう矜持を持つてる奴だと閲覧できたから、俺は彼女を選別し

ただし。

そう、彼女を復活させた理由には、しっかりと俺の目的に沿うキャラを選別したという前提も備えられる。

第一に、気位の高さ。

堕天使で人間種を見下している、という前提こそ在れど、全体的に選民思想が蔓延った世界線なのだし種族として脆弱な人間が下になるのはある意味当然だ。

見下される側からすれば堪ったものではないが、そういう上下関係を基より構築するのが社会生物としての常。

一万年以上進化を続けてもそこから脱却できない己らを呪え。

問題は其処では無く、彼女が見るからに上位に位置する相手と対峙したとしても、自己のスタンスを崩そうとしないキャラであるという、勝ち気な部分を評価する。

相手の実力を見通せないのでは、という疑問も浮かびそうだが、これから矯正して逝けばなんとかなるのではないかな。

ともあれ、【土地の記録】から喚起したグレモリー先輩との対決シーンを閲覧し、俺は彼女を候補に入れた。

第二に、執着心の低さ。

【記録】から察するに、堕天使の作戦に参加していた彼女であるが、その活動の様相からして『目標』を持っているように見えなかった。

作戦行動をするうえで、なんとしても任務をこなさなければいけない、という気概は評価されて然るべきモノではあるが、あまり目標を狭めれば視野狭窄に陥るリスクを伴う。

俺が欲しいのは云われたことを何としてでも熟す、という【部下】では無く、適度に目的を果たして余裕を持って動ける、フットワークの軽さを兼ね備えた【手駒<sup>人材</sup>】だ。

そいつ自身に野望や目的があっても良い。

土壇場での裏切りを想定しないわけではないが、そうならないように囲い込む、というのも手の使い処だろう。

前の方でも言ったが、獅子身中の虫は飼う気こそない。

が【獣そのもの】を飼い慣らせずして策など練れるか、と付け加え

ておく。

それに作戦という奴は、あまり根詰めても上手く廻らないのが世の常だ。

予測の付き難いフラットな余裕を持たせないと、予想外の事態が起こった場合に寸詰まりになるものである。

……それでも予想から外れる事態には、中々余裕を持って対処できているとは云い難いが……。

そして別の堕天使のように恨みの念に苛まれているわけでは無い、という部分もまた【執着】の項目に当たる。

高すぎる矜持も無い執着心も薄いミツテルトは、選別して復活させるには実に最適な人材であったと言える。

そして第三に、幼児体型。

此れこそが俺が決定打にした最大の理由であり、今回拠点を作る理屈を兼ねた目的のひとつだ。

どうにも、俺の中には『幼い外見の女性』には控え目な対処を取ろう、という意識が潜在的に刷り込まれている様に思える。

嫌悪では無いが、穢したり傷つけたりしよう、という行為を為すには抵抗感や罪悪感がどうしたって湧くのだ。

それを何とか払拭し、最低限、相手が女性として身を差し出すというのなら、キチンと女性として相手をできるようにしておくきたい。

そうして——塔城やオフィスヘリベンジを果たす……！

旧魔王？ そんなことより今はロリが怖い。

今後アドバンテージを取られないためにも、ミツテルトたんで経験を積み、快樂堕ちさせてやる……！

そんな決意を新たに、グレイフィアさんへ建前として用意していた拠点確保も並行して行うべく、俺は次の手を想起するのであった。

「深淵を覗くとき、深淵もまたお前を見ている」

「せ、先輩！ コートの傍に目がギラついた野獣が居ます!？」

「こら兵藤！ こっち見てんじやないわよ！」

「いやあ！ 視線で穢されるう！」

「うるせえ！ 部活なのにテニスウェア着てる癖して見られたくないとかって意味わかんねえよ！ 良いだろ別に見たって！ 減るもんじや無しに！」

いや、減ると思いますよ。

主に先輩に対する評価とか、信頼とか、尊厳とか、扱いの差とか。悲鳴を上げて身を守る仕草をしつつ罵る女子テニス部員に対してそんなツツコミを入れてた兵藤先輩に、きつと届かないであろう心中からのツツコミを冷静に入れる。

というか、いつの間に帰ってたんだこの人ら。

時は未だ夏休み、用事があって学園へと赴いていた俺の目に映ったのは、冥界より駒王町へ戻って来ていたらしいグレモリー先輩と兵藤先輩が2人だけでテニス部へと足を運ぶ姿であった。

テニス部は夏季休暇でも練習がある、という理屈で納得はできるが、オカルト研究部ってそもそも正式な部活として扱われて然るべきなのかも疑問なのに、彼らがテニス部へ赴く理由が思い当たらない。そんな胡乱気な視線で傍観していたら、最初に悲鳴を上げた一年生がこっちに気づいて声を上げていた。

「あつ、烏丸くん助けてくださいっ！ 兵藤先輩に犯されちゃううっ！」

「ちよつとそこの後輩ちゃあん!? 謂れのない風評被害を撒き散らすの止めてくれるう!？」

誰かと思ったら同じクラスの岡崎さんだった。

つかテニス部だったんだな、あの前髪ぱつっん。  
ウエアから覗く太腿が適度に肉付も良いのに、やたら白くて魅力的である。

ところで兵藤先輩に対する風評は強ち間違いでもないと思うのは俺だけだろうか。

岡崎さんにツツコミを入れつつも、先輩のその視線はきっちりと彼女のスカート部分へと収まっていた。

▽▽▽

「何してんすか、てか帰って来てたんすね」

「おお烏丸、頼む！ お前の説得で俺を擁護してくれ！ 謂れのな  
い評価で俺の居場所がテニス部にねえ！」

「割と自業自得だと思えますけど……」

なんで一年生は誰も彼も俺に辛辣なの!?

小猫ちゃんといい、烏丸といい、もつと先輩を立てても良くね!?

俺の幼いころの夏の思い出を語った後くらいから、ギヤスパーでさえも俺のことを微妙に冷ややかに扱うしさあ!?

「烏丸くんも帰っていたのね。私たちは、ちよつと個人的な用でテニス部にお邪魔しているところよ」

「個人的？ 夏休みに？」

「ん、まあ私の夏の宿題、と言った処かしらね。本当は休み前に提出するはずだったのだけど、コカビエルとか駒王協定とかでござたござして延期しちゃってて」

自分の不備だけど其処を茶目つ気たつぷりに、しかし堂々としてい  
るリアス部長が可愛いから俺のことなんて問題無いよねっ！

部長カワイイ！ カーワイーイーっ！

「やっぱリソーナに負けた時に、アイドルデビューを心待ちにしているわ、って煽るのが不味かったかしら」

「確実にそれですね」

「お蔭で提出期限も絞られちゃったわ」

うん、その煽りがある意味原因で、眷属らに若干呆れられちゃった我らがご主人様は単独で伝手を辿ってきている。という経緯だ。

俺はいざという時の為の護衛！ 兼、擬似デートのお相手候補です！

……妄想っばい？ 自覚してるから色々予防線張ってるんじゃないかよオツ！

「で、課題って何なんです？」

「人間界に置ける魔物や妖怪の生態調査、ってところかしら。レポートに早めに纏めないといけないから、眷属のみんなにもちよつと無理言って別々に行動して貰っているのだけだ」

「……なんか、最終日に夏休みの宿題を親兄弟に手伝ってもらおう子供、みたいな扱いつすね、グレモリー先輩……」

「……」

憐憫の目が烏丸から向けられ、リアス部長は無言で目を逸らしていた。

其処が良いんじゃないか！ 子供っばい部長の可愛さはそこがいいんじゃないか！

アダルティな外見とミスマッチな子供っばい中身！ お前はそういうギャップ萌えを理解できてねえ！

「まあ、兵藤先輩と二人つきり、っていう理屈は分かりましたけど。つか、なんでテニス部？ 購買とかじゃないんですか？」

「此処の部長は代々続く魔物使いの家系なのよ。購買は良く分からないけど……」



と烏丸が、遠巻きに状況を理解できてないテニス部員らに代わり要件を聞き届けていると、ザカパツザカパツと校庭の土踏む蹄の音が。駒王学園で馬？ と音の方へと顔を向ければ、栗毛を縦ロールに巻いたテニス部部长の安倍清芽先輩が——世紀末覇者の風格漂う巨躯の馬に首なし騎士が跨って、それに伴う形で騎乗しつつ高笑いしながら現れた!? なんっじゃそりゃあ!?

「オホホホ！ 御機嫌ようグレモリーさん！ テニス部へようこそ！ 歓迎しますわ！」

「御機嫌よう清芽さん。校内に魔物を連れ込むのは違反行為よ？」

「こちらは我がテニス部マスコットのノーヘッド本田君とその騎馬ですわ！ 先日頸椎ヘルニアで首が入院したデユラハンのスミス君を我が家で引き取る際、せっかくなのでバイトとして雇ったんです！ マスコットなら問題在りませんわよね？」

無いわけねえでしょ!?

「マスコットなら問題ないかしら……」

無いわけねえです!?

丸め込まれないでくださいリアス部長オ!?

▽  
▽  
▽

「つーわけで、俺の代わりにテニスに興じててください」

「……なんで俺が」

「……バラシマスヨ？」

小声で囁かれる脅しにチックショウ、とウエアを着つつラケットを振るう。

体験入部の筈なのに。桐生に連れられなかったらこんなことにはならなかったのに……！

「それにしても、ラギちゃんがキミと知り合いだとは思わなかったわ」

「むしろ俺のことを何処で知ったんです？ えーと、桐生？先輩は」

「改めて、桐生藍華でっす☆ アーシアちゃんと同じクラスだよロシクウ！」

「ああ……、アーシア先輩からでも聞いたんですね……」

「いんや、前に小猫ちゃんと居たところを見たの。付き合ってたんだよね？」

「いいえ？」

「え？」

「え？」

背後では烏丸と桐生がのほほんとそんな会話をしている一方で、俺は何故かオカ研のテニス勝負の一役を担うことに。

向こうからしてみたらむしろ敵対してる立場だが？

しかし、リアスグレモリーも兵藤一誠も、俺のことに気づいた様子は無かった。

「しかし、スメラギも意外と良い身体してたんだ……。胸は惜しいが。もうちよつと、こう、ボリユームが欲しい」

「そういうことを口にするのは止しなさい、イツセー。余計なお世話だと思わよ？」

「う、うつす、スンマセン」

本当に余計過ぎる……むしろ気づけよ。

俺は『<sup>スメラギ</sup>皇<sup>ハル</sup>白流』という判り易い<sup>安直</sup>名前<sup>な</sup>で堂々と未だ駒王に通っているというのに、悪魔陣営が俺のことに気づいた様子は本気で無い。

今は墮天使に所属する身であるが、こんなに緩いからこそ抜ける奴

も多いのだ、と本気で苦言を呈したくなってくる。

そして俺の相手はラミア。

……オイコラ。

「よろしくお願いします」

「隠れろよ魔物娘……!?!」  
モンスター

よくよく見れば、部長と名乗った安倍先輩の背後に控えているのは、ハーピーにデユラハンに雪男に幼女と完全にモンスターで構成されてる軍団だ。

一般テニス部員も居るのに、なんて堂々としてる……!!

「むしろ烏丸、お前が相手しても問題無かったんじゃないのか?!  
テニスもう関係ないだろコレ!?!」

「いやあ、スポーツはどうも苦手で」

「……あれ? でも中学じゃサッカー部だったって……」

「万年補欠。俺が遣るとロツクマ●サッカーみたいになるからね」

「どういうことですか……」

コートから怒鳴れば、彼の背後にいた前髪を眉上で切り揃えた少女とそんな会話をする烏丸。

戦闘面は人外だと思っていたのだが、意外と身体能力面は凡才らしい。

いや、スポーツのみで培われる何某かが苦手なのか……?

「とりあえずスメラギ! 頼むぜ一勝!」

「なんで貴女がやることになったのかはよくわからないけどお願いね!」

……とりあえず、グレモリー眷属はなんか不幸になれ。

ちよつと小さなことでもいいから、箆笥の角に小指ぶつけるとか、

ビデオ予約失敗するとか。

▽▽▽

都合よくヴァーリちゃんがやって来てくれて助かった。

先輩方がなんでかテニス勝負をする羽目になったけど、頭数の足りなさで急遽俺も混じる羽目に成り掛けたしな。

間接的に無関係ではないヴァーリちゃんという眼鏡っ子(仮)に役目を押し遣り、俺は本来の用事へと出かけることに。

勝負メンバーに何故か雪女と称してイエティが交じっていたけど……可笑しいな、購買に居るリツカちゃんは雪女系では無かったの？  
さて当初の目的。

以前に来たテロリストの蘇生である。

そもそも、『記憶を検索する』にしたって記憶という奴は脳内に伝達を繰り返される電気信号である、という前提がある。

アーティファクト  
魔本を使った擬似サイコメトリーで読み取れるのは精々が行動の記録<sup>record</sup>程度の代物で、事前にそいつらが何を思っていて何を目的として何を考えていたか、という詳細な部分を読み解くには死の事前行動から予測するか、脳を初めに再生させなくてはならないのだ。

【再生】に能っても、【聖杯】には『既に在るモノ』しか弄ることが出来ないという性質しか兼ねておらず、神器自体がこの世界における概念具である以上、その役目を逸脱させるには不備が出る。

そして前にも言った通り、『人間を再生させる場合』塵のようになつてしまった状態からの再生は怨念や執念が絡まない限りは不可能レベルであり、そういう奴を選別して復活させたところで個人的用事に役立つとは云い難い。

何かを『創造する』神器があれば、話は速いのかもしいけれどねえ。

で、そんな目的を添えているそもそもの理由は、これまたやはり防衛の為である。

一般的に、防衛と訊いて先に思い浮かべる手段とは何であろうか？

堅牢な砦を造るか、自身の実力を底上げして戦いに備える？

俺としては、何が襲ってくるかもわからないのに、そんな全方向へ警戒するような暇な真似はする気はない。

答えは『探して狩る』に決まってるだろう。

夏の間を片を付ける。

こんなことに掛ける時間は俺には無いんだよ。

とりあえず、リゼヴィムとやらがサーゼクスさんとはまた別の「ルシファー」であるというのならば、アイツも「旧魔王」即ち「禍の団」に所属する一派の可能性が高い。

お誂え向きに、そんな奴らが三棘み同盟の会合時に乗り込んで来ていたし、復活させればいい情報を零してくれるかもしれない。

やっぱり尋問するなら女性が良いよね。

名前は……覚えてないけど、其れっぽい魂の残滓を保管し持って帰れば、陣地である【教会】で「ふっかつのぎしき」だ。

その後は、……ファリスと洋ナシとアイアンメイデンでも準備しようかな。

それにしたって、安倍先輩はもう少し控えられなかったのだろうか……。

三年は女子だけで紛れられるからといっても、あんな自己主張激しい「魔物使いです！」と全身で露わにしてる人そうそういねえぞ。

いや、逆に紛れたくないからああやって自己主張してるのか？

というか、よくよく聞くと魔物使いなのにイエティ以外は借りて来た娘、って時点で世界観可笑しいな。

何？ 魔物使いってそこらに在中してるのがデフォルトなの？ それともこの世界って『モン娘』だったの？

「——ウボアアアアアアッ!？」

用事を済ませてそんな風に呑気にコートへ戻って来てみれば、——  
ひょうどうくんふつとんだ!

俺が居ないのにロック●ンサッカーになるとは。

いやはや、まいったねこりや。

「生きてます?」

「……」

返事が無い。

シカパネ  
屍のようだ。

「てつきり普通にテニスするのかと思ってたんですが……」

「わ、私もそのつもりでしたわよ? でもあの子は手加減が出来なくて……」

と、安倍先輩の弁。

コートを覗けばシングルでの勝負だったらしく、兵藤先輩と対峙していたのは——ボケエーっとした顔つきのふわふわプラチナブロンドの幼女……?」

「こずえちやーん! がんばれー!」

「お願いこずえちやん! そのまま兵藤を亡き者にして!」

「かつとばせー! こ・ず・え!」

「ふわあく……」

テニス部女子一同からの熱いエールに、あくびのような応えで返すゆるふわ幼女。

兵藤先輩への不憫な扱いに、思わず目頭も熱くなるね……。

「で、ヴァーリちゃんはどうしたの。そんなところで蹲って」

「……ヴァーリちゃん云うな……」

会談の一件以来、どうしてもこの人には真つ当な相手をしづらい。コートの外側で困惑する安倍先輩の脇の方で、落ち込んだように体

育座りしているヴァーリちゃんに疑問符を投げかける。

「なんだあの幼女は……、何処へ打ち込んでも返してくるし、打つ球の一球一球が重すぎる……！ こっそり【半減】を使ったのに打ち返さきれないなんて、普通じゃない……！」

「……アレ？ ヴァーリちゃんはラミア娘と戦ってませんでした？」

「勝ち抜き戦だそうだ……」

ああ、グレモリーチーム人少ないもんね。

納得していると、コートの上で起き上がる兵藤先輩の、熱い魂の絶叫が響いていた。

「ぐ、つがあ……っ！ くそお、負けねえぞ……！！ 俺が負けたら、リアス部長が出るしかねえ……！ あんな規格外の相手なんぞ、俺のあるじ様にさせて堪るかよオ……ッ！」

なんと立派な志。

それを普段拾分の壱程度でも零せておければ、もっと学内での評価は上がっていたかもしれないのに（憐憫）。

「……っ！ イッセー……！」

おや？ グレモリー先輩の様子が……？

惚れた？ アレで惚れちゃった？ トウUNKしちゃった？

頬を赤らめつつ兵藤先輩へと熱い眼差しを向けるグレモリー先輩の、脳が心配になってくるレベルである。

そんなグレモリー先輩はさて置き、兵藤先輩が仰け反るように立ち上がり、

「負け、て、られねえ……！ かかって来いやアアアア！！」

と、吠えた。  
が、相手側からの反応は微妙に薄い。  
というか……、

「……………ふわあく……………」

随分と長寛で消閑的な、間延びした空気を途切れさせる様子はない。

というか、あの子も安倍先輩関連ってことはやっぱり魔物娘系？  
なんていう種族なのかねえ。

つーか……。

「なんか、俺のこと見てね……………」

「ああ、見てるな……………」

じー、つと彼女の視線はこつちに定まったままである。

何？ ロリータホイホイが発動してるの？

あの子、塔城より幼い感じに見えるのだけど。

流星にああいう子を取り扱うのは無理ですよ？

「……………みつけた……………ふわあ」

からん、とラケットをその場へ抛り、とてとてとこちらへ近づいてくる幼女。

おいヴァーリちゃん、構えるな。

戦闘態勢になるのは先ず意味合い違うと思うよ？

「きよめく、かえるく……………」

「へ？」



どうやら安倍先輩への用事であったらしく、それだけ告げると忽然と姿を消していた。

残されたのは突然の帰宅宣言に呆気にとられた安倍先輩、そして吠えて漢を見せたのにコートに取り残された兵藤先輩。

自由だな、おい。

「……………えっと、試合放棄で兵藤選手の勝ちです」

審判役をやった岡崎さんが声を上げたが、それ以外は何とも言えない空気で締めりも悪かった。

つうか、あの子が帰る直前、呟いた言葉が意味深すぎてフラグっぽい。

それを回収するのが俺ではありませんように……！

尚、この後の試合は雪女（自称）のクリステイとか言うイエティと兵藤先輩がテニヌをしていたが、結果はオールカットです。

「女性の絶頂時の感度をそのまま男性に与えるとショック死する位なんだってさ」

「ごめんくださいーい」

「はーい、って……」

冥界から駒王町へ戻ってきて数日後、リアス部長のレポート作成も無事に済み、何時もの日常へと慣れた頃。

夜中は悪魔としてのお仕事を再開したものの、未だ夏休みは明けないので昼日中が手の空いていることを実感しつつ、そんな状態為ればこそ気付いたとある事実に個人的な時間を割こうと、照り付ける日差しに苦戦しつつ街中へと出かける私。

その狙いを察して阻止しようと、憑いて来たゼノヴィアさんイリナさんコンビと共に、私たち3人はとある廃教会へと赴いていました。ホントは以前にも覗った下宿先へ先に顔を出したのですが、夏の間は一度戻って来て以降姿を見せていないそうです。

改めて、糸の切れた凧みたいな人だなあ、とシミジミ思います。

此処まで語ればもう判ることでしょうが、覗った先はそらくんの下で、狙っているのは無論男女のアレです。

それにしても、彼のような人が教会を根城にするとは……。

「なんだ、アーシアじゃん」

「……ミツテルト、さん……?」

何処かで見た場所だなー、と思っていたらまさかの懐かしの方が顔を覗かせました。

朱乃さん経由で聴いた情報では、此処はそらくんの別宅になっている、と覗っていたのですが……。

「まさか、ミッテルトさんもそらくんと……!? は、破廉恥ですつ、このような場所ですつ！」

「ヴェツ!? な、つちよ、ナニ想像してんのアンタ!? そんな娘だったっけ!」

だってそらくん幼い子でも大丈夫ですし修道女ふえちですしミッテルトさんだって恰好はフリフリのゴシックなロリータファッションですけどこの場なら妙にマツチしてますもん!

これは絶対食べられてますね……っ!

「うわあ、ちよつと見ない間に酷い思考回路が出来上がってる……。どうしたのさ、何がアンタをそんなにしたわけ……?」

がくがく揺すって問い詰めれば何処か唾然とした表情で、ミッテルトさんが胡乱気な視線を私へ向けます。

釈然としません。元は墮天使である貴女の方が、ずっと明け透けだったでは無いですか。

「釈然としないのはこっちだつっの……。つーか、他に云う事あるんじゃないのかな……」

「……?」

「……あー、ま、いいか。アーシアの言ってることも、強ち間違ってるわけじゃ無いしね」

やっぱり食べられて……! !

「い、一応言つとくけど、まだ数回寝た程度で『そういう相手だ』って勘違いしないでよね。アイツとは、別にそんなじゃねーし。ていうか、好き好んで相手したくないし」

「ナニ当たり前のことを言ってるんだ彼女は?」

「そうよね。それだけで射止められるのならもつと話は早く済んで

るし」

と、ミツテルトさんの弁にゼノヴィアさんとイリナさんの声が重なりました。

彼女がツンデレしてるうちがチャンスですね、急いでそらくんの元へ向かいましょう。

「……え、なに、アンタらまさか、」

「そんなことよりミツテルトさん、そらくんは御在宅ですか？ 朱乃さんからこちらにいらっしやると覗ったのですが」

「いや、そんなことよりこっちの質問に、」

むしろ貴女の話の方が『そんなこと』ですので、そういう意図を込めて笑顔を向けます。

笑顔とは、元来攻撃的な代物なのだと、最近本で読みました。

「そらさんなら、お出かけしてますよ？」

と、会話に混じって来たのは、確かヴァレリーさん。

ギヤスパー君の幼馴染の方でしたっけ。

ガラガラと鉄製の牛を台車に乗せて、奥から運んできているところでした。

「お、おいヴァレリーさん……？ それまさか、」

「お出かけですか？」

「はい、今日は戻らないと仰ってました」

何処か怯んだ様相のゼノヴィアさんを押し退けて、聞くべきことを尋ねる方針です。

何故だかミツテルトさんまで引き攣った顔をしています、あまり気にしてもしょうがない事でしょうから敢えて突っ込むような真似

はしません。

「何処に行くのか、とかは……」

「覗っけていませんねえ。何かご相談でもありましたか？」

むう、と思わず悩みます。

このまま街へと繰り出して彼を探すのも手ですが、行き当たりばつたりで見つけられるほど楽とは思えません。

変装も兼ねて本日はキャップ帽・タンクトップ・薄手のパーカー・ホットパンツとボーイッシュな様相ですが、そらくんの気分を寄せるためにしている折角の生脚を他の男性へ見せたいなどという趣味は有りませんし……。

……そういえば、ヴァレリーさんって吸血鬼の貴族だと伺いましたっけ。

「あの、出来ればご相談に乗って貰いたいのですが、宜しいでしょうか？」

「まあ、私にですか？」

頷けば、吸血鬼に神父の真似事が出来るかしら、と談話室を開けようという立ち回りを始めるヴァレリーさん。

妙にノリノリでした。そこまでしてただかなくとも良いのです  
が……。

牡牛の置物をミッテルトさんへと預け私と対峙するヴァレリーさんとはまた別に、無駄な懐かしさを匂わせる教会内を「大聖堂のようだ」と呑気に見学を始めるゼノヴィアさんらを放ってお話の始まりです。

ミカエルさんの計らいで私たち3人は『せいなるちから』への忌避感を大幅に削減して貰っていますから呑気になれますが、そらくんの用意する【聖別】とかは【聖書勢力】から受ける力とは別次元な気がします。

いえ、気分は悪くは無いのですが、こう、圧倒されると言いますか。

「それでアーシアさん、私に相談事とは一体何ですか？」

思考が逸れる私を他所に、何処かのほほんとした空気を纏ったままヴァレリーさんが尋ねて来ます。

私は、この夏冥界で得てしまった『余計な悩み』を解決すべく、貴族としての意見を彼女へ問いかけるのでした。

「あの、以前に私が助けた貴族のお坊ちゃんがお礼にと求婚して来たのですが、後腐れの無いお断りの仕方ってご存知ないですか？」

え？ リアス部長に尋ねればいいのではって？

……そらくんのことか芋づる式にバレるのは避けたいです。

▽  
▽  
▽

矢荷成荘に引つ越しの連絡でも入れるべきだろうか。

夏の間を片を付ける心積もりであったが、本日齎される情報によっては拠点移動も考慮する必要があるのでは、と悪魔の情報収集能力に関する信頼感はやや希薄である。

それというのも、先日折角復活させたカテレアとかいう旧魔王派の女悪魔を程よく尋問した結果、碌な情報を持っていないと云う事をよく確認できたお蔭である。

彼女の『上』が情報の大事さを理解していたのか、はたまた彼女自身が『情報』を重視していないのか、どっちかの理由が前提に在ったのだろうか、とにかく彼女は役に立たなかった。

中の針先が全部丸いツンデレなアイアンメイデンとか、低温でじっくり蒸すフアラリスの牡牛とか、胎の中でくぱあする洋ナシなクスコとかを色々試し、そのたびに駄目になる肉体を移り変えての新しい複製体で幾度と尋問したのに、得られたのは複製限界に依る劣化促進の

可能性の発露に、『どれだけ遣れば壊れないか』という【尋問】の限界把握という無駄知識だけである。

「もう●ささないでください」と裸土下座で懇願するようになるまで苛め尽してしまっても出てくる情報が拙すぎて、ホントコイツ役に立たねえ、と屠殺場へ繰り出される豚を見るような目を向けてしまった。

此れで今日の出てくる情報の程度が低いと、ホント悪魔という種族そのものに見切りをつける必要性も出てくるから、グレイフィアさんはマジで頑張っしてほしい。

ちなみにカテレアは、情報も素体としての技能も低スペックであったのだが、だからこそその【強化用素体】として選抜<sup>エントリー</sup>。

この弱いが忠誠心だけはMaxに成り上がった魔王女子(笑)を、改造と調整で『俺が』何処まで成長させることが出来るのか、という実験の為の強化用素体である。

折角復活させたのだし、無駄にはしない。

まあ役立たずから家畜へ無駄ランクアップを果たした喪女はさておき、本日街中へ繰り出したのはグレイフィアさんとの待ち合わせの為だ。

情報の遣り取りなど誰に見られるかわかったモノでは無く、特に偏執性が高そうな弟さんが見張るならば冥界側が濃厚では？とグレイフィアさんが一計を案じ、このような運びとなった。

それで人間界の、人が行き交う雑踏の中での秘密の会合、と相成ったわけだが。

「……目的が透けて見えるようだ」

指定された場所が、数メートル先へ行けば何度かお世話になってるラブホが覗える歓楽街の入り口付近。

そこらの地主は駒王町でよく見られる魔王名義のモノでは無く、櫻井グループという以前にも見た記憶のある他名義のだという念の入り様からも、サーゼクスさんにバレナイヨウニ、という意図が有り有

りに見えるのだ。

まあ、名義なんてのは直ぐに判るモノではないが、ホラ、前に修道女ガールズと4pしたプール付きホテルが中心地にあるのよ。

魔王の息のかかった場所でない時点で、魔王にも秘密の会合を画策した時点で、グレイフィアさんエ……、つてなるよね。

「あれかなー、朱乃さんと子作りを未だにしてないのがバレたのかなー」

彼女は彼女で、無駄に俺に対して好意的になってる部分もあるし、一回でも抱くとずるずると依存してきそうの手を出し難い部分だね。

……おい誰だ今俺のこと屑って言った奴。石橋を叩いて渡らない選択、つても男女の機微にはあつて然るべきでしょうが。

ていうか、旧ルシファーとかいうカテゴリーなんだし、ヴァーリちゃんに尋ねれば一発だったのではないかな。

と、今更過ぎる情報源を思い出していたその時、

「——えあ？　烏丸……？」

ん？　と名を呼ぶ声に振り返れば、其処には「やべ」と小声で目を逸らす兵藤先輩の姿が。

……足の向きからして、行き先が同じ可能性が大。

お相手がいるのか、この人？　アーシアかな？　と、一緒に同行していると思しき、同じように目を逸らした金髪の美少女へと注視する。

……アーシアじゃなかった。ていうか、何処かで見たような人を連れてるな。そこはかとなく既視感が……？

「デートっすか、兵藤先輩」

「他人の振りしてんのに声かけんなよ……！」



そこは最初に気づいたそちらの責かと。  
まあ改めて声をかけ直した俺も悪いっすけどね。

「いやあ、珍しいモノを見たからつい。ナンパ、とは違いそうですね」

「ま、まあな。つかよく見抜けるな」

「いや、先輩がナンパで女子捕まえる姿が想像つかなくて連想できませんでした」

「酷くね!？」

初見で見抜けたのも先輩の日頃の行いのお蔭である。

この人を筆頭に学園で噂の御三方は、美少女に対するがつつき方が凄くて雰囲気だけでオーラが違うんだよねえ。

童貞臭に重ねて非モテ臭が濃厚、って感じで。

街へナンパに繰り出しても、容易く連敗するのが見て取れそうというか。

失礼でしたね。スンマセン。

ともあれお相手の女性は清楚という言葉が良く似合う美少女で、まるで男子の理想をそのまま具現化した様な出で立ちの人。

肩口まで伸ばした金髪に白いワンピースに白い罈広帽を装備しており、その雰囲気は避暑地へ赴いた良い処のお嬢様のよう。

しかし、やはり【違和感】が己の観察力に付き纏う。

初めて会った筈の清楚な雰囲気漂う美少女だというのに、既視感が澱のように自身の思考にこびり付き、彼女に対して若干の不仕付けな視線を向けざるを得なくなってしまう。

というのも、いつもおっぱい！おっぱい！とグレモリー先輩という特級爆乳に常に目を執着を向け屍鬼のように這い寄っておられる割には、連れておられる彼女の胸部装甲はグレードが高くは無い。低くも無いのだが。

良くて精々がアーシアを一回り膨らませたくらいで、出ることは出ているのだが良くてEかFといったところか。

……俺に大小貴賤を問う趣味は無いのだが、喰い出の良い相手なんか周囲にいると特に意味も無く比較してしまうなあ……。

だが、改めて疑問も湧くことは確かなのだ。

ガラケーで数字キーの4から5を軽くプッシュ<sup>連打</sup>ユさせるグレモリー先輩を差し置いて、休日にこの人が他の美少女と『こんな処』をうろついている。

当然、その目的は……。

「じゃ、じゃあ俺たちそろそろ行くからな！」

「あ、はい。邪魔してすみませんでした」

と、美少女と連れ立って、『ホテル街の方へ』とそそくさと消えてゆく兵藤先輩。

俺の推察はビンゴだったらしく、その行動の目的はガチでアレだったらしい。

うーむ、ますます違和感が深まってゆく。

【謎】とまで言うほどでもないが、何処で出会ったのかと疑問視するよりも、先輩の行動の方にこそ不可解さの比重は際立つ。

「お待ちせしました、烏丸さん」

しかし、違和感を解消することは不可能に終わる。

兵藤先輩らが去っていった方向へと視線を向け小首を傾げていた俺へ、背後から声を掛けられた為だ。

待ち合わせであるから元より【それ】を放って場を移動することなど出来はしなかったのだが、後ろ髪を引かれることを意識して振り払いつつ、声に対応すべくその方向へと身体を向けた。

……それにしてもかかる声が己の既知のモノとは随分と異なっている。

アレ？ グレイファイアさんと違う？

と、この振り返る一瞬で思考を巡らせつつも、其処に居たのは、

「グレイフィアの代わりに来ました。ヴェネラナ、といます」

栗色の髪をした、にこにここと微笑むほんわかしたお姉さんであった。

その美女度合いにうつすら漂うフェロモンなんかはグレイフィアさんとはまた違ったベクトルで天元突破していらっしやるが、普通に初対面のお相手でありこんな処で出会っていい良いのかという、……先程とはまた別種の疑問符が脳裡を占める。

つか、……『代わり』？ え、どういうこと？

▽  
▽  
▽

「さ、さつきはびっくりしたね」

「だな。まさかあそこで烏丸に遭うとは……」

連れ立った美少女と忌憚のない会話を交わす。

こういうデート染みた真似は生涯これで通算3度目だが、たった3度なのにハプニングしか起こって無くて俺の命運に一抹の懸念を感じざるを得ない。

だがこれでまだマシな方で、1度目は命を失ったし2度目はアースアを連れていかれた。

知り合いに会う、程度のハプニングであるならまだラブコメっぽいしどんと来いだった。

「烏丸くん、部長とかに言っちゃうかな……」

「いや、アイツもこんなところに居たってことを吹聴するような趣味なんてないだろ。待ち合わせっぱかったし、多分平気じゃね？

………ハッ!? その相手が部長だったら付け入る隙もねえってことになるのか……!? せ、せめて小猫ちゃん辺りで、いやそれも許せねえ……! ど、どうすれば……!?

「……落ち着いてよイツセーくん」

会話の途中で嫌な想像に突き動かされ、道端で懊悩する俺を彼女――祐斗は腕に抱き着いて気を寄せた。

ぐい、と引つ張ると同時に、ふにっとした柔らかな感触が露出した二の腕から感じる。

……リアス部長よりも小ぶりであるはずなのに見た目以上に柔らかくて、突き放せず思わず身体がギシリと硬直した。

ああ、やつぱりおっぱいは2つあるのだから、バストというより複数形でバスツと呼ぶのが正解なんだな……。

「烏丸くんのごことで悩んでも仕方ないと思うよ？ 今日折角とれたお休みなんだし、他人のことは他人のこと、僕たちの時間を大事にしようよ」

にこ、つと微笑む姿は完全に美少女で、アザゼル先生の性転換銃で性別だけを変えた元男子高校生とはとても思えない。

というか、俺の好みにどストライク過ぎる……！！

これからすることを脇に置いて、コイツと今までの関係を果たして続けられるか俺……!?!

そもそも、始まりは俺の夏休みの思い出が余りにも酷いと思ったことだ。

冥界ではドラゴンに1週間追い回されて、その先のレーティングゲームではどうしようもない敗北を喫し、冥界より帰ってからは幼女と雪ゴリラにテニスでボコボコ（物理的）にされた。

同級生の中でも早い奴は童貞も捨てているというのに、女子が普通の男子高校生よりも多量に周囲に居て俺の夏の思い出これで良いのか!?! いいや、良いわけがない！（反語）

しかし、そんな女子たちに思い出を造らせてください、等と土下座しようものならそのままボコボコにされるのがオチだという、童貞でも容易く想定可能な未来予測。

そんな俺に祐斗が提示してくれた案は、明後日の方向へ随分ぶっ飛んだ話であった。

『普通の女の子にお願いできないのなら、僕が女の子の代わりになって相手しようか？』

正確には、いつか俺が普通に女子と付き合えるようになった時の為に、自ら練習台として様々な『やり方』を学ぶのはどうか？ という提案だ。

初めは渋っていた俺だが、祐斗がこの姿で自宅へと現れたら躊躇はいつの間にか消えていた。

……まあ、今になってまた躊躇いが起き上がってきているわけだが。

烏丸と遭遇する、という想定外のトラブルが自分を冷静にさせたのかも知れない。

「……今更だけど、よくあんな提案が出来たなお前……」

「まあ、何事も経験だよな。それにさつきも言ったけど、今日は部活もお休みだつて部長からも言質は貰っているし、夜もじっくり時間を取れるから丁度いいかなつて……」

「よ、夜も……」

ごくり、と喉が鳴る。

回想時には想像もつかなかった、美少女のやる気な発言に生唾も呑み込まざるを得ないつす……！

そんな俺の反応に祐斗は、何故か虚を突かれたような顔をしていたが、自分で発したその言葉の意味にようやく気付いたのか慌てたように、

「——あ、ち、違う！ そんなやる気な発言とかじゃなくって、初めでは痛いって言うから身体を休めるような時間を取れるよねっという意味で！」

訂正を掛けたが、それよりも俺はもつと別の言葉に気が向いた。

「え、あ、初めて、なんすか」

「あ、当たり前だよ!? こんなことイツセーくんが相手じゃなきやしようなんて想像もしてないし!」

「お、おう……」

真っ赤になって言い募るその可愛らしさに加え、俺専用発言とも取れる美少女の宣言に、さつきまでとはまた違った意味合いの動悸が著しい……!

やべえ、興奮して来た……!

お、落ち着け、素数を数えろ、祐斗は男子祐斗は男子祐斗は男子……!

——しかし、そんな俺の興奮を想定するよりも、祐斗もまた自分の発言の意味を理解したらしく、恥ずかし気に口元をもによらせ紅顔し俯きながらも更に身体を密着させて、ぼそりと呟いた。

「~~~~つ! ……………や、やさしくしてね……?」

——そうだよ、元男とかそんなことは関係ないよね。

それに密着するおっぱいも気持ちいいし、祐斗自身、練習だって言ってたじゃないか。

いつの間にか到着していたラブホテルの入り口に侵入しつつ、俺は【彼女】を抱き寄せて未だ固まったような声音で応えていた。

「よ、よろしくおねがいします……」

☆「亜麻色の長い髪を風が優しく包む…ドライヤーかな？」

——1日前、冥界某研究所にて——

昨日、我が弟であるユーグリット・ルキフグスの生存とリゼヴィム・リヴァン・ルシファーとの共謀暗躍が烏丸くんからの報告として挙がった情報を元手に、彼本人から『事態を解決に導くために自分が動くので出来る限りの情報を欲しい』と依頼されて早数日。

リゼヴィムという脅威に値する存在への彼の警戒と嗅覚が鋭いのは実にありがたいことですし、旧魔王派が揃ってテロリストに与していたという事実を鑑みるに、彼らもまた暗躍していれば何かしらの危機の種と成り得るのは予想に容易いことです。

それらを片付けると明言し、其れがまた出来そうだという実力を兼ねた烏丸くんの要求に応えることも吝かではありませんが、……実際、こちらが取れる手段もまた拙いのはどうにかできないものか、と溜め息も洩れます。

……さて、どうしましょうか。

烏丸くんに調査を頼まれたというのに、実際上がつて来た情報の拙さに自分たちの陣営の行動力に呆れ返ってしまいます。

とは言っても、烏丸くんが要求して来た情報は『旧ルシファーにルキフグス』という、冥界にとつても触れるに憚られることであるのも事実。

正式な調査機関に依頼するには私事に近いですし、それを交わすためのこちらからの取引材料も『アレ』である以上はサーゼクスにも公に出来ませんから、この情報搜索にも伸ばせる手は足りないのが現状です。

そんな状態で集まった情報は、先程も言った通り随分と拙い代物。

私個人の過去に連なるモノも羅列しておきましたが、それが『今に』

役に立つのかと問われると手不足感は否めません。

……一応は彼個人が『縁を持った』と認識しておられるので彼が自ら前線へと赴いて戴いているようですが、事を明かしてしまえば冥界の事情に巻き込んだ形ですから、彼へ引き渡せる報酬と一切釣り合いがとれていませんね……。

この上で私がまた身を差し出す、と言った処で、果たして納得してくださいるでしょうか……。

「——あら、ここに居たのね。グレイファイアさん、ちよつといいかしら？」

「っ？ お、奥様？ 何故このような場所へ、といえますか、どうやっていらっしやったのですか……？」

この部屋へと突然顔を出した彼女、ヴェネラナ・グレモリー様の姿に思わず身構えてしまいました。

尚この場所は、表向きは冥界の病院ですが実際は彼の齎した【術式】を解析するために、個人的に用意した研究所に連なります。

元は貴族のお嬢様であるグレモリー家の奥様が、いくらフットワークの軽い方だとしても易々と入って来られる場所ではないのですが……。

「方法は色々とありますが、そこはやっぱり『どうして？』と尋ねるべきでしょうね。ミリキャスちゃんから、グレイファイアさんは此処のところ休暇を取ると必ず此処へ足を運ぶと聞いていたものだから」

「……？ それは、理由になっていないのでは……？」

「あら、理由にはなるわよ。だって此処は【産婦人科】でしょう？」

——あ。

思わぬ盲点に目が点になるのを自覚します。

確かに、自らの恥部を晒すことを前提としているので研究スタッフは女性オンリーで賄わせていますが、それ以上に此処の研究目的は冥



界の出生率を上げることです。

術式解析・改良の協力者として、不妊の女性悪魔を雇用していたのが致命的でしたか……。

「やつぱり、サーゼクスとの2人目が出来たって云う事なのかしら？ ミリキヤスちゃんがお兄ちゃんになるのね？」

「いえ、奥様。そういう話ではありません」

下手に期待を持たせるのも後々大変ですし、今のうちに誤解は解いておかないと。

烏丸くんのことを伏せつつ、大まかな事情を説明すること数分後。少々気落ちした様子の奥様に、若干心苦しくなりつつも、なんとか誤解を解くことには成功しました。

「——そう……、研究目的だったのね」

「ええ。個人的に出資している案件ですので、冥界の未来こそ案じていますがサーゼクスにはまだ報告していません。成果が出ないことには協力を申し出るのも心苦しいですし、元より男性には理解を求め辛いモノですから」

「そうね……、確かに『産むこと』を経験できない男性には、理解し辛いでしょうね」

「彼が動こうとすれば、間違いなく『私情を挟む事だ』などと他の上級悪魔の方々に詰められて、必要のない摩擦を生みかねませんし」

「ああ……」

納得されたのか、奥様は困ったような表情で溜め息を吐きました。

「ごめんなさいね、グレイフィアさん。あの子が力不足なばかりに、貴女に此処まで働かせて……」

「いえ、好きでやっていることですので」

「いいえ。最近こちらへ来ることが多い、とミリキヤスちゃんから

も聞いているのよ？ さつきも悩んでいたでしょう？ 他にも請け負っている仕事があるのではないの？」

「……どうやら部屋へ入られる前にも様子を覗かれていたようです。まだまだ、私も修行が足りませんね。」

「いえ、こちらは私事に近いことですので……」

「どちらにしても働き過ぎじゃないの。まったくもう、グレイフィアさん、少しは休むことも覚えないと駄目よ？」

と、奥様は仰られますが、この『私事』を蔑ろにしては冥界の未来が危ういのです。

しかしそれを口にするのも難しいので、私は曖昧に頷いて黙すことに。

それで大概を察していただけたのか、奥様は嘆息と共に手近な椅子へと腰かけました。

「……ああ、納得はしておられないのですね。」

「それで、どのような仕事があるのかしら？ 貴女が暗躍の真似事をするくらいなのだから、サーゼクスにも伝えられない事情があるのでしょうか……」

「奥様、世には奥様と云えども踏み込むには容易くない領域というモノが在られますので……」

「あら、私に為せない事があると、そう言いたいのかしら？」

自分が片付ける気満々の奥様に、何と言っても無駄だと悟ります。

確かに、グレモリー家では名実共に未だに最強の座に君臨する奥様なれば、魑魅魍魎の跋扈する悪魔社会の裏側すらも解決へ導けるでしょうが……、今回の事はそもそもが烏丸くん絡む案件ですし。

「……下手な魑魅魍魎に関わらせるよりもずっと危うい気がするのよ、私だけでしょか……？」

「申し訳ありませんが奥様、この件だけは他に預けるわけには参りません。どうかお控えください」

脳裡に過ぎつた一抹の懸念はさておき、実際彼と関わる以上【男女の事】は避けては通れない話です。

それを自らの姑へと寄越すなどという恥知らずな真似までは、流石に私とて出来る筈がありません。

——そう思い頭を下げて口を噤んだというのに、

「——ねえグレイフィアさん、私が何も知らないまま【その話】を指している、本当に貴女はそう思っているの？」

聞いたことも無い蠱惑的な声音が耳朶へと響き、思わず顔を上げると其処には、

「烏丸くん、っていうのね。私が替わってあげるから、貴女はゆつくりとお休みなさい？」

獣の雌が獲物を狙っているような、そんな貌を覗かせたヴェネラナ奥様が、いつの間にかくすねられていた私の端末を弄びながら優しい声をかけてきていました。

……これが果たしてどのような結果を生むのかは、もう私にはどうしようもない事なのでしょう。

というか奥様？ 本当に真面目な話も含められているのですが、奥様の目的は明らかに違いますよね？

▽  
▽  
▽

雲上に乗るかのように肌触りが柔らかなキングサイズのベッドには、真新しいシーツが皺一つ縫らせないほどにピツシリと敷かれてい

た。

それだけでホテルの品格を充分に語っていた、乱すのも烏澁がましく思わせる降り積もった新雪の原のような其処へと、自然な動作で寝転んだのはヴェネラナ・グレモリーだ。

そんな彼女の恰好は、着ていたキャミソールを胸の下へと摺り下ろされて、スカートも無造作に捲り上がっている。

リアス・グレモリーの母として相応しいくらいの大きさを誇る乳房は、摺り下ろされた衣服の肩口から覗くように顕わとなっており、立ち姿ならば服の上で主張する位置でぷるりと零れるそれは、重力に従って微かに潰れるように小柄な彼女の身体から両側へ食み出す形で雪崩れていた。

それでもまだその柔らかさは失おうとせず、例えるならば焼き立てのメレンゲオムレツのようにふわりとした存在感を、彼女の荒い呼吸と共に震えることで主張する。

その度にビクンビクンと小刻みに揺れるのは、艶やかな桃色を未だ喪わないぷつくらとした先端の乳首からも良く見て取れた。

薄手の、黒レースの下着は太腿の辺りへと摺り落ちていて、その先に在るスカートで隠されるべき恥部は愛液を零している。

薄つすらと生い茂る陰毛に覆われた其処は「盛り」のついた雌の匂いを諸共に溢れさせていて、貞淑であったはずの貴族の妻は男性自身を身体で要求するケダモノへと既に転身を終えている。

頬は紅潮し目元は蕩み、小さく呼吸を刻む唇は蜜を帯びたように甘い言葉で少年を誘った。

「烏丸、くん……、きて、くれる……？」

誘われた少年……と呼ぶには些か臺に立っている彼、烏丸イソラは、そんな彼女の様子が見慣れたものであるかのように今迄の描写を大して視界にも留めず、しかしその間に準備も済ませていたのか、自らの衣服を取っ払っての立ち姿でヴェネラナへと向かい合った。

白い髪に褐色の肌、『鍛えた』というよりは良く引き締まっている、無駄な贅肉など何処にも無い細身の躰。

黒曜のような肢体は腰も細く縊れも覗えて、見る者が見れば何気に

垂涎でもある。

ヴェネラナはその一瞥で、一瞬だけごくりと喉を慣らした。それに気づかない様子の烏丸の、逸物もまた程よく反り立つ。

そこまで把握して、形容された雰囲気を壊さないように、生娘でもない彼女は慌てないようにガツつかないように、自然な動作で自らの秘所を己の指先で小さめに拵げた。

先ほどまで、まるで強姦に遭った女性のような姿でベッドに寝転んでいたというのに、淑女とはとても思えない心内情況であった。

睦言を交わそうとはせずに覆い被さって来た彼を、興奮を隠せない貌でヴェネラナは受け入れる。

己で拵げていた膣穴は子を2人も生み落としたのだが、それでも狭く小さく見えるのは悪魔としての種族故か、はたまた産んだことが十何年も以前の話故か。

ともあれ、見た目通りに狭かった其処へと侵入してくる烏丸のソレに、何よりも敏感に悦んだのは先ずヴェネラナであった。

「ん、あ、つはあああん……っ」

叫ぶ程では無いが、膣壁を摺り摺りと愛液を絡ませつつ挿入はっていく硬く脈打つ異物は、久方振りの快感を彼女へ伝えた。

まるで処女の頃に味わった『ハジメテ』のような快感が、ヴェネラナの膣から子宮へそして背筋へ脳へと電流のように走る。

自身の肉壁を押し広げる感触に疼いていた子宮は応えるように震えたことも自覚し、閉経に至ったのではないかとまで匂わせ始めていた己の不安をも完全に払拭していた。

同時に、烏丸もまた、その膣の狭さに顔を顰めた。

ぎゅぎゅうつと攻めつけるように絞る穴が奥へ奥へと啜え込み、挿入いれただけで出してしまいそうになったことを推し留めた所為だ。

中程まで挿入いってゆく頃には、くう、と苦悶の聲が知れず喉から洩れる。

当然、互いの吐息が届くほどに近かったヴェネラナにも、それは届いた。

自分で気持ち良くなってもらっていると気づいた快感と雌の悦び

がその一瞬で迸り、ヴェネラナを更に若かった頃へと思い出させる。脚を緩く拵げ、腕を彼へと伸ばし、ヴェネラナは優しく微笑んだ。

「烏丸くん、イイのよ、好きにシても……」

「……っ」

——マツチポンプである。

頬を優しく撫でられたことで、神経を逆撫でされたような快感を背筋へと走らせた烏丸は、初めて性体験をする子供みたいに己の欲望をヴェネラナへと吐き出してしまっていた。

さて、此処で思い出してほしい。

烏丸には『自害せよ精子共』と、どこぞの外道な神父のように命じられる術式が備わっている。

それは避妊にも繋がり、同じように便利な魔法の云々で性病をも封じられるために、烏丸自身は避妊具というモノを必要としていない。元より、苦学生であった彼はそちらを購入しておくという思考そのものが備わっておらず、むしろこっちの術式を使えば安く片付けられるという事実に取り添って、チ●コにマジカルな伏線を孕ませて毎回事へと及ぶ。

それは、卵子への着床率を大幅に引き下げる代わりに、伝わる者へ多量に快感を味合わせる性質の悪い「麻薬」のような効果を副作用として備えていた。

——デフォルトで。

「——っあ、あああああああああああああああああああああ  
あツツツ!!!?」

中程から迸った白濁液は普通とはその性質が全く違う代物で、激しい熱と快楽を伴って鉄砲水のようにビュクビュクとヴェネラナの膣内を疾駆する。

それはまるで劇薬に浸されたかのような衝撃を彼女へと与え、受け止めるつもりだった淑女は初めて絶頂を味わったような快感に悲鳴を上げて仰け反った。

そして烏丸もまた初めてでは無く、中途半端な位置で自分が良くなることを元来良しとしないのは本能的なモノなのか、ヴェネラナを抱

くように、彼女の最初の要求に応えるように身体を密着させていた。そのお蔭でヴェネラナの反動は依り深く、逃げ場も無く、伸ばした腕で抱き返す余裕も無く、密着したことで更に深く抉るような挿入に放射のコンボは繋がり——欲望の吐露の途中からは、子宮へ直接その快感は迸ることになる。

「—————ッ！　　—————ッッ！！？」  
「—————ッッ！！？」

声にもならない悲鳴。

最早悦びとか言つてられないくらいの衝撃に、ヴェネラナの身体は烏丸の下で跳ねるようにのた打ち回る。

それを抑えるように抱き締め続ける烏丸にもまた余裕は無く、彼女の必死の叫びは音にもなっていないので、暫く伸ばした腕がもかく様に宙へと痙攣をしていたのだが、——それも次第に収まっていた。

当然、収まっていたのは烏丸の射精も同時であり、烏丸が呼吸を落ち着かせる頃には——、

……焼けるような快感に子宮も脳も犯され捲くつて、廃人一步手前で白目を剥いたヴェネラナが、其処に居た。

▽  
▽  
▽

あつ、あつ、これ凄いつ、ずっとご無沙汰だった『あの人』のよりずっとおつきいっ。

かたくて、ふとくて、子宮の入り口までぐりぐりしてるっ。

だめっ、タマゴ降りてきちゃうっ、こどもつくりたいって、おなか  
がさけんじゃってるうっ。

リアスの眷属の小猫ちゃんと同じくらい、って聞いていたのに、グレイファイアさんに代わって会いに来た子は凄い【イイ子】だった。

私を見た目はリアスより若く見えている筈なのに、大人の女性をエスコートするような態度を初見で選択した配慮も良いけれど、何より良かったのは身体の相性。

若い子、というだけで初めから食べる気でグレイファイアさんにも話

を持ちかけたのに、繋がって十数分でもう手放したくなくなってしまうていた。

これはグレイフィアさんが私へ廻したまらないのも頷ける。

私の身体は魔力で見た目を調節していると思われがちだけど、実はそこまで便利な身体を得ているわけではない。

歳を負った悪魔は見た目を弄れる、と多くの人は誤解しているけれど、それならばずっと若々しい外見を選ぶ上級悪魔がもっとたくさんいて当たり前。

今の悪魔社会の上役らは、大概が老人の見た目を擁していて不満しかなかった。

威厳がどうのと口にする前に、社会の発展を促すのはいつだって若い力であることを把握しているのだから、自らが率先して若くなり働けばずっとより良くなるはずなのに。

正確には、本人の心の持ちように応じて魔力が変質し、肉体の若々しさを保とうとする性質を備えているらしい。

私程度ならこの年代を維持できていられるけれど、もつと深く生きた悪魔なんかは精神が若くとも老けて見える方もいるので、それなりに老化する肉体であることは間違いが無いのだろうけれど。

私はよくリアスの姉か妹かと間違われる。

そうなるのもこの情欲を持って余している所為でもある。

何せ、あの人は私がリアスを産んでからすっかり老けてしまった。

私がいくら誘っても、娘が出来た時点でその先を求めなくなってしまうった。

息子が魔王になったことも相俟っているのかもしれないけど、その割には貴族社会にリアスを放り込もうと下手な親心を勝手に配慮している始末。

それだから碌でもない見合い相手を見つけてしまう。

あの時は本当に呆れた。

娘の生き様を男親が定めようとしても上手く行くはずがないのは、私と結婚した時点で充分理解できたと思っていたのに。

そう言い切れるくらいに、私もまた他人より『お転婆』と揶揄され



たモノである。

そんな若さもまた失うことはなく、むしろ結婚してからも肉体系年齢相応に男性を求めているのに、あの人は貴族としての立場を重視してばかりで……。

私の事を本当に理解しているのか、まったくもって怪しいモノだった。

グレイフィアさんは彼との逢瀬を恥じている様子だけど、悪魔とは本来己の欲望に忠実なモノだ。

情欲に身を任せてこうして抱かれることをずっと欲している筈なのに、それを敢えて遠ざけようなどとまだまだ未熟。

その上で彼を利用し悪魔社会に生かすのだ、と理由を用意して繋がりを保とうとしている。

この子を落としたいというのなら、先ずは自らが堕ちなくては。

この姑の手管をよく見ておくと云いわ、グレイフィアさん♪

▽  
▽  
▽

身長は明らかに俺よりも低く、下手をすればグレモリー先輩より年下に見える美少女。

無意識に先輩を比較してしまったが、髪色こそ違えど見た目が似ている所為でもあった。

だが、その態度というか雰囲気は、俺たちのような高校生よりもずっと大人びたモノで。

だからこそ大学生くらいかなあ、と連想してしまった俺は、とりあえず『おねーさん』とエスコートする形で連れ立った。

ヴェネラナと名乗った彼女を連れて、グレイフィアさんの名義で予約してあった妙にお高いホテルの一室は貸し切り。

汗を流す時間すら惜しいのか風呂にも目を向けず、入室早々に俺を誘うヴェネラナさんのキャミソールを後ろから抱くような形で取り外せば、着ている形でも良く分かっていた豊満な乳房が大きく顕わとなって主張した。

衣服を剥ぎ取ったその手を取られ、誘われるままに顛わとなった柔肌を包ませるように触れさせる。

その手つきは完全に雄を誘うケダモノで、だがそれにもまた抵抗感も抱いてない俺は、触れさせられた乳房を抱くように揉みしだいた。

それからはまあ、互いに初めてでもないことが良く覗えたので、流れるように下着を摺り下ろしたり、入り口を指で宥めたりと愛撫を繰り返して、ベッドの上へ。

だが余りにも良い名器のお蔭で、少々恥ずかしい姿を晒してしまっただ。尤も、それはお互いにだが。

失神したヴェネラナを介抱してしばらくすれば復活したが、何処か呆然とした様子で俺を見上げていたのが普通に可愛かった。

その介抱の合間にも思っていたのだが、彼女は要するに元々男好きなのだろう。

実に悪魔らしいその素質を紛糾する気は俺には無く、だからこそグレイフィアさんの代わりに来た、というのも領ける。

そんな彼女はオチていたにも関わらず、起きて直ぐに俺の息子へと手を伸ばしてきた。

行動は完全に痴女なのだが、仕草がそれでも淑女然としたものを喪わせない雰囲気であり、高級なソープ嬢を彷彿とさせたのが結構そそられる。

いや、行ったことないから知らないけど。

そんなスキモノ彼女の感度が高いのは嬉しいし、純粹に男好きであるからやればやるほど悦んで応えてくれる。

全身が柔らかくて抱き心地が良くて、更に云わずとも要求したい体位でも自分から幾らでも傳いてくれるのだから不満なんてない。

そんなヴェネラナが上になり、反った俺の【自身】を決して不快にさせない位置でギシギシと、大きな乳房を揺すって跳ねている頃になって、嬌声と共にこんな声を漏らしていた。

「あつ、あつ、これ凄いつつ、ずっとご無沙汰だった『あの人』のより

ずっとおつきいっ！

かたくて、ふとくて、子宮の入り口までぐりぐりしてるっ！

だめっ、タマゴ降りてきちゃうっ、こどもつくりたいって、おなかがさけんじやってるうっ！」

……ふむ、ちよつと推察してみようか。

【ご無沙汰】「あの人」と云うキーワードから、既に『お相手』がいる状態で長らくセックスレス。

というか、そうすると普通に考えれば、ヴェネラナってひよつとして人妻？

そっかー、人妻かー。

てことは、グレモリー先輩に似ているってことは、あの人のお母さんってことか。

グレイフィアさんからしたら姑だろうし、その繋がりやって来たと。納得したわ。

また人妻かよ。

安心して発散できるセ●レを得られたと思ったらまた地雷って、何なの？ 悪魔ってこんな奴しかいないの？

グレイフィアさんと比べるとヴェネラナさんの男好きっぷりのお蔭で罪悪感は随分薄いけど、事後にてやつちまった感はそうそう亡くなりにはしない。

っーか、俺わざと選出してるわけじゃないっすからね？

お相手が多種多様だと嬉しいのは男の本能だからね？

己から寝取りに推進するほど自棄な人生選ぶって、普通に破滅主義じゃねーかフザケンナ。

彼女の嬌声に及び腰になってしまったことを態度で察したのか、弾ませていた腰つきを控え目に、ヴェネラナさんは穏やかな声音で身を振る。

目線を合わせて、渴望するような口調で俺の手を取っていた。

「……んっ、烏丸くん？ もつとシテ……？」

押し掛かりぶるんぶるんと躍動していた自分の胸を抑えさせるようにマツサージ（意味深）を交わしつつ、なんだか自分に嵌って居そうな雰囲気醸す彼女（人妻）を見上げ乍ら、内心でめっさ引き攣るオレガイタ。

これ、やっぱ俺が悪いのかなア（自問）……？

「地上高く投げられたは良いけど拾いに行くのが面倒な賽」

「今日からお世話になりますっ」

「いや、こちらこそ」

ややテンション高めで修道服を着たアシアが、につこり笑って頭を下げた。

対する俺は若干の懸念を覚えつつも、彼女がこの教会に来てくれることに不満は無い。

その理由は何より、うちのメン<sup>我</sup>バー<sup>家</sup>には家事が満足に出来る人材が不充分であつた為である。

「助かりますアシアさん、キッチンを用意したはいいモノの、私では使い方がわからなくて」

↑ヴァレリー：備考、王族

「ご飯なんてコンビニで買っちゃえばいいじゃん」

↑ミッテルト：備考、元根無し草

「そんな庶民派な魔王聞いたこともないわね」

↑カテレア：備考、一応貴族筋

「貴女本人は魔王ではないでしょ」

↑ディオドラ：備考、元お坊ちゃん

と、俺も含めて無駄に膨れ上がった人材の処理をしているうちに、気が付けば教会在住メンバーの中には家事にあからさまな不備を抱えた者しか残らなかつた。

基本的に身の回りの世話は御付きの者にさせていた吸血鬼や元悪魔の貴族筋はともかく、根無し草であつたらしいミッテルトならばサバイバルくらいには期待していたのだが、金さえあれば生きていける

現代日本では0円生活に勤しむより手軽なconvenience storeさえ見つければ空腹を覚える必要も無かったようだ。

そしてディオドラの眷属らは現在、教会に所属するはずの元聖女という立場から足を洗って、場末の明朗会計なお店へと出向して貰っている。

時間こそ空けばこちらへ戻ることも可能だろうが、歓楽街は夜間業務なので昼夜逆転の生活はお互いに不備が合わさり、基本的に彼女らの生活拠点は歓楽街<sup>其処</sup>から外れることは無い。

そして活動資金面の一部を担って貰っている以上、更に家事という労働へと甘えてしまっただけでは雇用主側の観点としてはガチで申し訳が立たねえ。

そんなわけで急遽人材募集に託けようとした矢先に、アジアの兵藤家よりの出奔が目についたのであった。

しかし、その理由がまた酷い。

「兵藤先輩に寝込みを襲われるとは……、むしろ今までなんで無かったのか」

「残念そうに言ってやるなよ。……アジアに言ったらマジで怒るからな」

ヴァレリーに連れられてキッチンへと向かう彼女の後姿を見て呟いていたところを、ミッテルトに窘められる。

何処かのダークネスなピンク髪妹姫みたいな口調且つジト目で似た内容を繰り返したのも、きつとアジアの事を慮っての事なのだろう。

以前墮天使だった頃、此処の教会でアジアから神器を抜き取る算段をしていた罪悪感がそうさせるのだろうか。

ミッテルトたんマジツンデレ。

大事なことなんですネ、判ります。

「いや、赤龍帝の成りそこない君に穢されるようなことにならなく

て、僕としては結構有り難いけどね」

「……そういえばアナタ、彼女に以前助けてもらったとかいう話だったわね」

「というか、マッチポンプの一端なんだけどね」

へら、と嗤ってディオドラが云う。

そういえばコイツを拾った時に記憶も閲覧したが、アーシアが教会を追放される切欠になったんだっただけか。

でも神器って確か聖書の神が大元を造ったとかって聞き齧った覚えがあるんだけど、その効能上で悪魔も治療しているのに異端として追放する教会も考えが足りないよなあ。

まあ今更どうでもいいけど、アーシア色んな奴に狙われ過ぎイ……ッ。

あれだな、薄幸の美少女って奴だな。

今となつては、アーシア個人も特に気にした様子も無さそうだったけれど。

「今はご主人様の女<sup>メ</sup>なのだから、摘まみ食いとかが考えたら駄目よ」  
「ご安心を、もうそういう気にもならないよ。それに、こんな形<sup>ナリ</sup>だしね」

と自身の小振りな胸をふにと持ち上げて、ディオドラは自嘲するように云う。

変化する前から容姿に大幅な変化こそ見られはしないが、今の彼は性別が完全に逆転していた。

金髪で悪魔の特徴携えた中学生くらいの成長度だし、ディオドラ・アスタロト改めアスタ・ロットテたんでも呼ぶべきだろうか（電撃感）。

▽  
▽  
▽

私に還りなさいと云わんばかりの母性をあからさまとしたヴェネ

ラナビッチさんの腹上ダンス教室から三日ほど。

この三日間妙にことが起こったのだが、その筆頭はやはりディオドラを捕縛したことだろうか。

というのも、そうなった経緯は割と相手側の過失に当る。

記憶を閲覧して判った経緯なのだが、どうにもディオドラはアシアを自身の眷属として引き入れる為に、冥界にグレモリー眷属の滞在時から声をかけていたらしい。

その理由は自身の趣味の延長線上で、聖女から悪魔に転向した美少女を味わいたい、と中々に悪辣。

引き入れる表向きの理屈としては嫁に迎え入れたいと口にしていたらしいが、内心では性奴隷以上の価値を見出していなかったらしい。

——スマン、それ俺が先に味わったわ。

そのこと自体は察知していなかったようだが、兵藤家へ調査を向けたところアシアがウチの教会へ来ていたところを遠隔的に把握し、更に教会に居るヴァレリーやミツテルト、他にも同道していたイリナやゼノヴィアという美少女が集まる場に興味を覚え、アシアのついでに他の修道女らも鹵獲できやしないかと画策し、眷属を引き連れて侵入して来たのである。

……いや、まあ修道女の恰好はヴァレリーのは趣味だし、ミツテルトは基本ゴスロリだからそれっぽく見えるだけで勘違い甚だししいし、イリナにゼノヴィアは……良く知らんが、結局どれも『勘違い』が先行していた、っていう解釈で合ってるのかな。

まあ、どれも終わった話だったし、俺が本格的に状況に着手したのは彼の捕縛後の話だ。

朝帰りで教会へ顔出ししたら知らん美少年&修道女らが床に突っ伏している、って普通にびっくりしたわ。

教会の結界に阻まれて失神したらしいから「悪魔なんだー」とは連想も容易かったけれど、俺を狙っていきそうなりゼヴィム関連では無くてアシア狙いの方面から此処に繋がるとは。

捕虜の尋問のつもりで記憶の閲覧したはいいいけど、関係なさ過ぎて



ガチで小首を捻ったね。

でもまあ、表層意識や直前記憶読んだだけでも聖女フェチの外道なのは間違いないかつたし、このまま解放すればグレモリー眷属へのちよつかいが俺まで飛び火しそうだったから、ことが起こる前に事態を解決して逝くスタイル。

彼の眷属の中に在った『彼に無理矢理手籠めにされてボロボロになっていた記憶』のみを取り出して、彼の中へとドボン。

悪魔になった元聖女っていう、彼の趣味の延長線上に当る娘達だったから色々配慮したわけだけど。

しかし、教会認定【聖女】を易々と鹵獲して逝くディオドラの変態性癖の執着力が凄いのは兎も角、世界各地から集めたとはいえ『彼』の年齢上で蒐集し切れるとか可笑しくないか？

これは教会側との癒着すらも疑わせるレベルですねぇ……。

教会側も一枚岩では無いという暗喩か。ユダが品切れにならない時点で人の業の深さが芳ばしいわ。

実際、悪魔歴は誰もがピンキリで転向して数十年〜数百年も経っているらしいから、既に悪魔として（というか彼の玩具として）生きる諦観みたいなモノが見え隠れていたが、折角マシな身体を持つてんだし、以前に見た改造されて戻れなくなつてしまった半吸血鬼の子達みたいに早々に死に逝く必要もあるまいて。

いやあ、【聖杯】って、ホント便利ですよ。

無いものは作れない、のがやや難点だが。

あとは眷属女子らも悪魔から（肉体的にちよつと強靱な）人間へと改造して、記憶を切つて繋げて洗脳ゲフン自意識を確立させる方面で頭の中を洗い直して、助けた『俺に』資金面で自ら幫助させるように促して駒王町内へと解放。

そんな彼女らを虐げた記憶を『体験』し続けるディオドラ君がこれ以上『悪さ』を出来ないように、悪魔から悪魔の特徴を維持しただけの人間モドキへと転向させて性別も変える。

これはよく思う持論から連想したじつk仕置きなのだが、性的犯罪の容疑者に対する求刑は自分のやったことを本気で改めさせるくら

いの刑罰が必要じゃないかなって。

今度は自分が追いかけられる立場になったら、彼らはどういう心理になれるのだろうね？と、そういう意図である。

やったねデイオドラちゃん！ 家族を増やせるよ！

まあ彼の場合、そういう性的犯罪とはまた違う趣向みたいだけど。

悪魔としての肉体を放棄させたのは、そもそもこの教会が結界に覆われている所為でもある。

アジアを筆頭とする元修道女かしまし三人娘らはミカエルさんから許可を貰っているので平気そうだったが、他の悪魔が聖別施設に対峙する場合、視界に収めただけでも忌避感や弱い精神ダメージを受ける傾向にあるのだという。

我が家はその点についてはそんな仕様は一切無く、外から見ただけでは何にも影響を与えないような配慮を施してある。

だからこそ、脚を踏み込めば予想外にダメージが来るというトラップ仕様なのだが、お蔭でデイオドラが捕まったという背景もあるから実験的には成功だ。

もし此処にリゼヴィム並びに協力している悪魔らが踏み込んできた場合、一網打尽に出来る、という結果を願せたわけだし。

……悪魔以外の協力者とかって居たりしないよな？

旧魔王はリゼヴィムを除いて全滅だが、かと言って他の神話陣営から疎まれていると思しき聖書派閥出身のテロリストが、そうそう援助を受けられるとは………いや、逆に聖書派閥が疎まれているから『敵の敵は味方』理論が動くのか？

人間を悪魔化したり、神器使いとやらを割と力づくで自陣に引き入れたり、聞けばはぐれ悪魔とかいうモノまで制御しきれてないのが今の冥界の現状らしいし。

テロリストが生まれるべく生まれた、つて歴史の流れが傾いている気がしないでもない。

話を戻そう。

結果的にまともな悪魔が残らなかった我が家であるが、実際に悪魔であることのメリットが何気に少ない。

寿命が延びるとか肉体が頑丈になるとか云われた気もするが、同じようなスペックの異種族である天使や墮天使らは悪魔の最大の弱点である【光】に耐性以前の適性があることを考えると……悪魔のこの低スペックよ。

かと言つてミツテルトたんみたいに天使化するとしても、アレにはアレで俺の知らない弱点が何処かに潜んでいる可能性も捨てきれない。

先走つて換えたミツテルトだつて、ミカエルさん辺りを参考にオーラの属性を傾けた調整でしかないし、元墮天使だったからこそ変化を促せたつていう下地があるから換えられたわけだし。

そう考えて、カテレアを複製させた時点でパツと見には判別し辛い人間モドキに転向させて、ディオドラもまた似た種族へと変えたのだが。

……今更だけど、人とも悪魔とも呼べなくなったコイツ<sup>ふたり</sup>らを何と呼べばいいかな……。

羽も尻尾も出し入れできなくなったけど、人との相違点というよりは悪魔であつた頃の名残でしかない。

身体が人間より頑丈で、弱点に当つていた【聖なる力】を純粋にエネルギーとして対処できる程度の耐性を維持させたお蔭で、なんかもう神話存在だったとかいう概念背景をダストボックスへポイした現状だ。

例えるならば他星系の異人種みたいなの……もうデビ●ーク星人でいいか（適当）。

ともあれ、諸々の事情から元眷属である彼女らも改造は済み、彼女らを悪魔と化した【悪魔の駒<sup>イービル・ピース</sup>】が変化した身体から排斥されたので、丁度ひとセット分余つてしまった。

……あれ？ Kingが無いな。ディオドラからも検出されなかったし。……チェスの駒を基にしたつていう触れ込みはデマだったのかな……？

代わりに彼だけは何処かで見たとような【蛇】を持っていたわけだが、……どうしようこの無駄アイテム一式。

悪魔化や天使化は【聖杯】で弄れるから、余った此れらは割と相応に要らない子であるし。

……頃合いを見て墮天使陣営へ匿名で寄付しておこう。

以前の駒王襲撃の際にもアザゼル先生が割と働いていたし、前身は研究者らしい所為か『面白アイテムがあればそれでいい人』みたいなイメージがどうしたって抜けない人だし、働きに対するそれなりの報酬としてなら理由にもなるだろうし。

中古ショップに持って行こうにも、対戦できないチエスなんぞ銭にも変わらんし。

【蛇】も瓶詰にして【駒】諸共袋詰めにして、教会の適当なところに放置する方針を決めた頃に、TSさせたディオドラちゃんがレイプ目で起床していた。

悪魔の少年に無理矢理犯されて屈辱を味わう、という記憶を、記憶の持ち主らの主観と共に夢として体験し終えた結果がそれである。

男性の精神で男性に犯されるとかって、もう悪夢でしかないよね……（震え声）

生きる気力も尽き果てた感じで、虚ろになった彼女が自身の立ち位置と遣ったことへの反省、そして己の現状を全部把握できるようになるまで、随分と時間がかかってしまった。

同じ実験生りもとい元悪魔仲間としてカテレアをリハビリ要員に沿え、三日経った今でも時折その記憶に悩まされてフラッシュバックに苛まれていると報告があるが、それ以上悪くならないというなら問題は無い。

放逐しても問題無い程度まで生存基盤を維持できる姿勢を確立させたら、頃合いを見て野に帰そう。

尚、カテレアの先の先もそんな感じである。

なんだか野生の雀を拾ったような既視感を覚えるが、ぶつちやけ先々はこの世界からも逃亡する予定なので先見を見出しているだけ有り難いと思つて欲しいなあ。

え？ アーシアとか？

……ホント、どうしようかねえ……？

▽  
▽  
▽

……アーシアが、家から出て行ってしまいました……。

いや、夜這い掛けた俺が悪いよ？

悪いけどさ、もう少し俺に対して好意を持ってきていたのだと、思っていたんだけどね……。

俺の勘違いだったみたいだぜっ☆

独り善がりだった俺って奴あ、本当に滑稽だったなあ！

ぬあーはっはっはっはっは！ くははははははは！ あっひやひやひやひやひやひや！

………いや、ガチで反省はしてます。マジです。

女体化祐斗と一線を越えたことは、俺に自信みたいなモノを植え付けてくれた。

しかし、やはり関係を持った相手は男で、童貞こそ捨てることは出来たモノの、その後を欲するとなると役割をそのまま当て嵌めるわけには行かないのだ。

佑斗には男性としての生活もあるし、それにいくら可愛くたってアイツが男であった頃のことを、お互いに忘れられるはずもない。

……いや、一晩下に組み敷いて、精力の尽き果てるまで正面から抱き合った記憶があるのも事実だから、説得力に欠けるかもしれない……。

……柔らかかったし、気持ち良かったなあ、アイツの身体……。

悪魔の精力って無尽蔵だよね……。

と、とにかく、女性の身体の良さと『やり方』って奴を実践訓練で学習出来た俺は、今度こそ本気で彼女を作ろうと、一番近いアーシアから試すことにしたんだ。

家族を彼女へ、とかつてのも駄目な話かもしれないけど、そもそもアーシアとこの先もっと深い関係になりたいっていう想いだってある。

学んだやり方でアーシアへ迫る意気込みで、寝惚けた状態なら意識

も曖昧なはずで、俺に対して普段覗える壁みたいなモノも緩んでいるんじゃないかって言う腹積もりで。

……マジで普段はつんけんしてる感じなんです。

ま、まあ俺にしてみればアーシアの貴重なツンデレはご褒美ですけどね！

……結果？

聞くまでも無いだろ？

——失敗に終わったさあ……！

最近少しづつ大きくなってきたアーシアのおっぱいにパジャマの上から手を伸ばし、柔らかさを堪能しつつズボンを脱がし、つるつるのお股に感激していざ参ろうとしたところで、覚醒アーシアに悲鳴と一緒に蹴っ飛ばされたさ！

悪魔の防御力がいくら凄くても、防げない部分だつてあるんだ……っ！

自分の腰をトントンしてる間に、悲鳴を聞きつけて起きた両親に目撃されてぶん殴られました！

自分たちの娘みたいに思ってる子を襲う奴が居たら、息子でも容赦しないのは当然みたいです！

その後の家族会議で、そもそも俺には彼女がいるんじゃないかという話が上がリ（どうやら家へ顔出した女体化祐斗のことを言っているらしい）、彼女が居るのに我慢を利かせられなかった発情期息子、というレッテルも容易く貼られた。

間違つてないけど大いに間違つてる！ 彼女じゃねえ！ けど言えねえ！

くそ、俺にも部長みたいな催眠術を使えば……！

そんな俺とアーシアをこの先一つ屋根の下に同居させるのも危うく感じた両親に、すわ勘当かと家を追い出される寸前であつた俺へと、アーシアが自ら距離を置こうと『とりあえず夏休みの間だけ』と去つていったわけです！

無論、それをホイホイと承諾するほど、ウチの両親のアーシア大好きっぷりは低くは非ず、アーシアが帰ってくるまで我が家の土を踏ま

せはせん！と俺も一緒に追い出されました！

説得しろとの事らしいですが、アーシアからはっーんと袖にされてるので難易度がルナティックですね！

「……それで私のところに来たわけね……」

「う、うつす、スイマセン部長……」

責め立てられ問い質されて、一部始終を説明し終え、深いため息を吐く部長に申し訳ない気持ちでいっぱいのイツセーです……。

いや、流石に祐斗とのこととかアーシアを襲ったとかって部分は言っていないぜ？ 男同士の事を女子に云う事程愚かなことは無い、つて俺でもわかるからな？

アーシアに関しては、俺の配慮が足りなくて怒らせてしまった、つて感じで。

「アーシアが烏丸くんに気持ちを向けているのは知っていたけど、イツセーとの仲が進展していなかったのも原因だったのかしら……。そこを今更、しかも無理矢理に手出ししちやっただから、悪魔であつても受け入れるには難しいと思うわ」

「れ、冷静に分析しないでください。あと、今更でなかったら問題無かつたんですかね……？」

「いや、そこまでは私でも良く分からないけど……」

ですよね。

部長だつて人の恋路を語れるほど、経験豊富ってわけじゃないっすもんね。

「……なんで微妙に上から目線なのよ」

「えっ。あ、いえいえ！ お気になさらず！」

あつぶねえ！ く、口に出てないよな!?

一足お先に大人になった俺からの個人的な意見でしかないっすけど、流石に不敬すぎるし！

何かを察したらしいリアス部長にジト目を向けられつつ、気にしない方針なのか再度の溜め息。

——ふむ、そんなことより腕組みで強調されるおっぱいも素晴らしいですな……。

「……ああ、何時ものイツセーね。——さて、朱乃からの報告だけど、アーシアは烏丸くんの家にお邪魔になってるらしいわ」

「な、なににい!? くっそおあの間男！ 弱ってるアーシアの心に付け込んでポイント稼ぐつもりか!？」

「貴方が言えたことじゃないでしょ……」

部長が何か呟いたけど、今はそれも気にならない！

アーシアはなあ、教会から追放されたり、堕天使に命を狙われたり、貴族悪魔から求婚されたりと苦労の連続なんだぞお！

そんなアーシアを、………傷つけたのは俺です！ ホントマジスンマセンでしたアツ!!!

「ほら、とりあえず落ち着きなさいイツセー。烏丸くんの家には今はヴァレリーさんだっけ居るのだし、イツセーが思う様な事にはならないわよ」

「う、うう……、じゃ、じゃあ信じて送り出したアーシアがアへ顔ダブルピースでRECされる、みたいな展開は無いつすよね……?」

「貴方どういう推理でそれを導き出したのよ」

部長からの目線が冷たくなった。

可笑しい、俺は至極真面にアーシアのことを心配してるのに。

「というか、貴方今日は躁鬱の気が激しすぎるわよ……? アーシアの説得は私も手伝ってあげるし、ご両親にも一緒に説明してあげる



から、今日はもうお休みなさい?」

「ま、マジですか? 部長に頼っちゃってもいいんすか……?」

「あら、貴方の主様は、可愛い眷属あるじの苦悩も分かち合おうとしない心の狭い女だとても云うつもり?」

そう言つて、部長はドヤ顔で微笑んだ。

……う、うおーっ!! 部長うう!! イツショーついていきま  
すううッ!!!

「とりあえず、今日は私の家に泊めてあげるわ。ベッドは……ひと  
つしかないけど、構わないわよね?」

……っ!?

っ、つまり、そういうことですか!?

いいんすね!? ホイホイ乗っかっちゃっても良いんすね!?

男イツセー、今日こそは頑張りますっ!!

▽  
▽  
▽

「……ようこそ、お会いしたかったですよ、【英雄派】の皆さん」

「……ふん。白々しいな、ルキフグスのはぐれが」

とあるホテルレストランの一角にて、私たち——所謂【旧魔王派】と呼べる生き残りの面子代表として、この私ユーグリットとある一団と会合を果たしていました。

彼らは一様に自身に満ち溢れた顔つきをしています。全員が人間。

一見すれば自信過剰で貧弱な向こう見ずばかりですが、実際そうであつたとしても実力を備えているのも事実です。

「そんな彼らは、名を【英雄派】。

【禍の団】にて現在、最も戦力を蓄えている一団でした。

「手厳しいですね。私たちはとある神器使いを紹介してもらいたいだけなのですが」

「ああ、【生死覆す万象の杖】ロッド・オブ・アスクレピオスに【托卵促す怪物の滴】エキドナ・ドロップだったか？  
……確かに使い手はこちらに居るが」

そう、彼らに要求するのはそれだけです。

ようやく見つけた【聖杯】に通じる神器ですからね、下手に使い潰される前に回収しておかなくては。

しかし、彼らはこちらの意図を想像しきれないらしく、韓服のような青年が困惑したように尋ねてきました。

「なんでまたこんな神器を欲しがる？ 名前こそ大仰だが、【杖】は実際に死者を蘇らせるような効能も備わってない治癒能力程度だし、【滴】しずくは正直言って【魔獣創造】の下位互換だ。お前たちにメリットがあるとは、到底思えない」

「さて。其処までは教える意味など無いと思われませんが？」

「是非とも聞いておきたいのだがな。何せお前たち【旧魔王派】は、そろって俺たちの傘下に下るとかいう話だそうじゃないか。部下となるのなら、それを纏められなくては上司として示しがつかない」

【英雄派】 頭目、確か『曹操』と云いましたか。

こちらが彼に示した条件は、旧魔王に手を貸した派閥内の悪魔らを戦力として引き渡すこと。

もう一つはこちらが掴んだ『情報』です。

しかし、それで飽き足らず己の分を弁えずに、更に欲するモノを追いかけるその姿勢……。

いやあ、やはり人間は下手な悪魔よりも業が深い。

「ご安心を、ちよつとした研究ですよ。成果が出ればキチンと開示します」

「フン。……まあ、お仲間をこっちに引き渡している以上、お前らだけが逃れる術なんてないだろうがな……」

仲間？ はて、彼らは自分たちに都合のいい蜜を吸いたいが為に引つ付いて来た寄生虫のようなモノですからねえ。

戦力として使える『今の』【旧魔王派】は、精々が【駒】に為れば上等の類ですよ。

【旧魔王派】に取次いでいたアスタロト家の次期当主が消息を絶つたお蔭で、彼らの目論見であったレーティングゲームに託けての襲撃計画は水泡に帰していますし。

彼らも別の手を用意しなくては、この先【旧魔王派】の生き残りがどれほど残れるかも不明瞭でしょうからねえ。

元よりスポンサーの宛ても数少ないこの世界で、最大派閥の聖書陣営から更に裏切った彼らを、好き好んで自陣に引き入れようなどという酔狂なモノは居る筈ありません。

まったく、テロリストというのは潰しの利かない職種です。

「そして、こちらが我々が掴んだ『情報』です。苦労しましたが、是非有効に活用してください」

そうして、彼らの前に事前に伝えて置いた、ターゲットの写真の数々を広げる。

白い髪に、浅黒い肌、——駒王学園の制服が妙に似合わない男子学生、烏丸イソラの姿が其処にはあった。

……………全部カメラ目線でピースまでしていますが……………。

「これが例の彼……………おい、此れ本当に隠し撮りなのか？全部目が合ってるぞ？」

「そのようですよ？ 現在の住居は添付の資料に載っている通りです」

——完全に罨でしようけどね。

彼本人には私が直接手を下したいところですが、【私】のストックが備えられない今、簡単に姿を現しては初見のリゼヴィム様のような目に遭わせられるのは明白です。

悪魔に迎合するわけではなく『個の立場を維持し続けている人間』として、【英雄派】も目を付けているようですし。

彼らが何処まで出来るのか、お手並み拝見と逝きましようかねえ。

「先ずはボコろう。話はそれからだ」

只今時刻は深夜の四時。

明け方頃という奇襲を仕掛けるには丁度良い、昼日中を生きる者にとっては【起き掛け】と云える時間帯だ。

駒王町の一角にある某教会を雑木林より遠目に眺め、【英雄派】を名乗る数名の男女が日も照らさぬ闇の中に静かに犇めいていた。

「——では、ゲオルクが【霧】で教会を支配し次第、ヘラクレスとジャンヌは中に居る者たちを人質に取れ。俺たちはその間、ゲオルクの警護を中心として臨機応変に対応する」

「オーケーだ、曹操。だがなあ、俺としては件の烏丸とかいう奴と直に勝負してみたかったぜ」

「ヘラクレス、何回も言うが、今回のこれは戦闘が目的なんじゃない。飽く迄も『話し合い』だ」

『曹操』と呼ばれた漢服の青年は、不敵な笑みを浮かべつつ筋骨隆々の大男を諫める。

諫められた大男、ヘラクレスと呼ばれた彼もまた、曹操の言い分を何処か軽く捉えた態度だ。

その彼らに共通している意識は【余裕】そして【慢心】。

『自分たちは特別な生まれを背景に持ち、特別な力を持っていて、この世界を変えるに足る目的を達成する為に集っている』。

そうした意識が根底にあるのが、【英雄派】と名乗る神話系テロリスト・【禍の団】の一派である。

彼らは主要メンバーが皆、神話に名を遺す【英雄】の直系の子孫または生まれ変わりであると自負しており、それぞれが人の血に発現する【神器】セイクリッド・ギアを所持しており、それ故に【驕り】も止むことは無い。

この場を集めたのは、リーダーである曹操を初めとした、その主要メンバーである。

その目的とは、『烏丸イソラの確保』。

人の身でありながら悪魔に手を貸す一方で、その交流は決して共依存というわけでは無いリベラルな様相。

ならば、他に【禍の団】に手を貸している【魔術師】のように、自分たちの陣営へと引き入れることも可能なのではないか。

そうトチ狂った思考を発症してしまったことが、今回の発端であった。

「再三三云うが、彼は人間で、あの教会には他にも少女たちが居て、同居のような形で寝食を共にしている。そんな彼女らは要するに彼にとつてのアキレス腱足り得るだろう、というのが俺たちの意見だ。そういう【弱点】を先に抑えてしまえば、ルキフグスの奴に提示された情報にあつた『容赦がない』という部分を抑制できる。そうした上で話し合いに持つてゆくのが今回のベストな形、というわけだ。もつとも、ゲオルクの【霧】の前にはどんな頑強な守りでさえ意味を為さないからな。そのことを彼が知れば、俺たちを意識せざるを得なくなるはずさ」

作戦の要となる『ゲオルク・ファウスト』なる少年は魔術師だが、そうである以前に神器所持者である前提が備わっている。

彼は神器の中でも特に強力な【神滅具】ロンギヌスと分類されるソレをその身に収めていた。

名を【絶霧】デイモンシヨン・ロストと呼ぶ空間系最高峰の神器はあらゆる結界を透過し、望む場所へ自在に空間を繋げることが出来るという。

故に奇襲にはもってこいであり、だからこそ彼らは慢心が抜けることが無かつたのである。

「無論、こちらがイニシアチブを確保するまでは多少の戦闘も有りえるだろうが……、なに、俺たちは英雄になるんだ。この程度の【交渉】を乗り切れないカリスマが、足りないわけがないさ」

本来、Charismaという言葉には『神から賜った超自然的な力』という意味合いしか含まれておらず、彼が口にした其れはしかし『人が人を惹きつけるのに必要な脚光性』とでも変換されているのかもしれない。

しかし、だ。

人が人を動かすためには確かに人目を惹きつけるモノは必要であるが、それを成功させるため第一に必要な部分とは『対象が要求を呑むくらい愚鈍』なことであり、第二が『従属に足る対価を示せるかどうか』である。

決して違えていけない優先順位は【自身】より【相手】だ。

自信に満ち溢れて失敗を想像もしていない彼らが、果たして件のカリスマとやらを魅せられるのか、という点についてはあらゆる条件の二の次ではない。

この時点で、心内より彼らを照らす光明は、錯覚としか言いようがないのは明白である。

「しかし、知れば知るほどライトノベルの主人公みたいな奴だな、彼は」

「なんだ？ 曹操はそういうモノも読むのか？」

「【表】の同級生から勧められていてね。ジークも読むと良い。ファンタジー系は特に、神器のイメージ修行には役に立つんだ」

ジークと呼ばれた白髪の青年の揶揄するような言葉に、曹操は冗句のように応える。

作戦前に軽口で緊張を解きほぐす意図があるのかもしれないが、彼らの態度はどう弁えても緊張なんて見当たらない。

【人間】を相手に『どういう権利を行使するべきかも不明瞭』な女性を人質に取って云う事を聞かせよう、という倫理的に見てもアウトサイダーな作戦を、その冗句はまるで日常的一幕のように取り扱っている象徴のようだった。

「よし、では行くぞ。ゲオルク、【霧】を頼む」

作戦に加担する全員がリーダーの冗句に一頻り笑った後、曹操は学  
生服にローブ姿の少年へと指示を出す。

云われるが速いか、ゲオルク・ファウストは集中し、辺りへ朝靄と  
はまた違う【霧】が不自然に発生し始める。

雑木林と教会とを覆うように満たされたその霧の中で、漸く彼が口  
を開いた。

「――よし、教会内の空間を繋げたよ。曹操、準備は  
……………」

しかし、その続きが語られることは無く、沈黙だけが霧の中に響く。  
不審に思った曹操は眉を顰め、背後にいる彼へと振り返りそれを見  
た。

「――？ ゲオルク？ どうし――……は？」

ゲオルク・ファウストの胸から生えている、何か結晶のような光源  
を掴まえる誰かの腕を。

「――かふ」

呼吸を漏らすような断末魔だった。

一息だけ最期に漏れたそれだけで少年の瞳孔は開き切り、彼の身体  
からずるりと生えてくる其れを、全員が息を吞んで括目していた。

「なるほど、お前らが襲撃犯か」

浅黒い肌、白い髪、睨<sup>ねめ</sup>つけるような鋭い視線の主は、少年の身体を  
蛹から羽化する蟬のように抜き出て着地する。



抜け殻のように力なく、ゲオルクは土の上へと放逐されていた。  
そして。

「——っ！ 全員警戒を、」

——ゴキヤメキグリユブヂイ

咄嗟に叫んだその瞬間、曹操には油断は無かった。

唐突に現れたターゲットを囲むために、己の神器であり神滅具・  
トゥルー・ロンギヌス【黄昏の聖槍】を掴み構えたほどだ。

だが、——掴んだその腕は鈍く響く音と共に、肩口からごっそりと  
抉り取られていた。

響いた音は、骨と肉が千切り削がれた衝撃音だ。

不思議と痛みは感じず、疑問に思うその瞬間は、無駄にスローに感  
じた。

そして本当の痛みは、彼の視界に正面から最後に収まった、烏丸イ  
ソラのお膝から齎されたのである。

▽  
▽  
▽

開幕シャイニングウィザードで槍持った人を沈めて頭を踏みつけ、  
完全に気絶していることを確認しつつ周囲を睨む。

とりあえず帝釈廻天で槍毎抉り取ったが、なんか丈夫だなこの人、  
よく死んでないよ。

というか、この世界って大抵の人らが丈夫な気がする。  
漫画みたいだね！

「そ、曹操!? テメエ！ 其処を退きやがれツツツ!!」

半裸で筋肉の大男が吠える。

どこことな〜く第五次運命夜の狂戦士を連想してしまっただが、なんで

だろうか。

「どうか、開幕で帝釈廻天を使ったのは兎も角、現在抜き取った神器の核を片手に持つてる状態だから両手が塞がってヤバくね？」

「もう片方はショートカットの為に【魔本】を開いた状態だし。」

「あれだね、ダンチヨーみたいな【盗賊の掟】発動中の状態。」

「魔法の発動体である本が無いと戦闘態勢に移れない、っていう弱点が。」

「グリードアイランドのようにバインダーを空中に維持できれば良かったのにい。」

「っ、待てへラクレス！ 不用意に動くな！」

「お、白髪仲間？ 元氣ー？ 俺は頗る寝不足なんだが。」

「というか、室内に霧が立ち込めるとかいう状況なら誰だって不審に気づくわ。」

「変な魔力波長も感知出来たし、だから霧に逆探知掛けて状況の大元を掌握出来ただけだ。」

「大男を諫める白髪という言葉に、なるほど警戒は正しかった、と納得の俺。」

「無論、対処は済んでいる。」

「ショートカットで帝釈廻天をとりあえず333本、切りのいい数字で大男という判り易い標的の周囲にいつでも顕現可能状態。」

「あとは舌先三寸、『言い顕す』だけで良い。」

「『ざっくばらんに逝きましょう』」

「キーワードは何でも良いんだけど、ね。」

「此処で『僕は悪くない』とか言っても説得力ないしい。」

「まあ白髪の云う事にはへラクレスとか呼ばれてたみたいだし、此れくらいやれば死ぬでしょ。」

「十二の試練先輩お疲れさまっしたー！」

▽  
▽  
▽

嘲る様な台詞が烏丸の口から洩れたと同時に、巨漢の周辺に両端が歪な三叉鉾が多数出現した。

それはヘラクレスを覆い見えなくするほどの武器の群れで、神器を發揮する間もなく彼をヤマアラシのように変える。

此処で重要なのは飽く迄『ように』であって、本物のヤマアラシみたいにその『針の山』が『山の主』を守るために存在するわけでは無いという点だ。

逆刀山剣樹みたいになった巨漢はその姿が幻であったかのように挽き播り潰され、断末魔も上げること無くこの世から姿を消した。

元より、烏丸の使った「帝釈廻天」とは重力魔法の具現化術なので物理効果はどうしようもないほどに凶悪だが、数を發揮した時点でそんな副次作用なんて当然意味も無い。

何も此処までしなくても、と其れを知るモノに取って実にオーバーキルな様相は、唯一正気で正面より目撃したジークフリートの眼前に妙にゆっくりと把握されていた。

ある意味、走馬灯にも似た瞬間であったのかもしれない。

「……………」

仲間が呆気なく、何一つ行動を起こす前に塵ちりにされたことを唯一認識し、それでもジークフリートは絶句するしかない。

未だ踏みつけられたままの曹操は生きてはいるようだが、片腕をも挽ぎ取られてしまっただけでは復帰も当然できやしない。

と、其処でもう一人生き残りが居たことも思い出した彼は、咄嗟に件の少女へと視線を向けていた。

「——っひ、い、いやあああああああああああ  
!!!!!!?????」

そんな少女は、仲間のその姿を目撃して悲鳴を上げ、――取るモノも取らずに恐慌に駆られて走り出していた。

次は己が遣られるという恐怖に駆られた少女は、みっともなく泣きながら転ぶように必死の遁走を図る。

その様は余りにも憐れで、仮にも英雄の末裔であると豪語していた姿は最早どこにもない。

そんな様相に何かを思ったのか、はたまた何も思う処も無かったのか。

烏丸は逃げ去るジャンヌ・ダルクと言った筈の少女の名を知ること無く、彼女の逃走を見送っていた。

「……あー、ちなみに此処に来てるのはお前らだけ？」

「……まあ、な」

なんとなく、気まずい空気を互いに感じ取った2人の口調は重い。

先に口火を切った烏丸の方は、実はその時に漂った僅かな臭気から口取りが重かったわけだが、その点については少女の最後の名誉となるだろうから口にすることを憚っていた。

「じゃあ敵前逃亡を俺が咎めるわけにもいかないな。で、お前ら何の用？　つーか誰？」

あつけらかんと、こんな状況を作り出してから口にするこじやないだろうとジークは思ったが、そもそも襲撃を画策していたのはこちらであるので突っ込まれるわけには行かなかった。

英雄と呼ばれることは望まれても、だからこそこんな場所で死ぬことを良しとするほど覚悟は決まっではない。

所詮其処が彼らの限界であるのだが、命を捨てるよりかはずっとマシな選択であることは間違いないようが無かった。

どちらにしろ、彼の命運は風前の灯火なのだが。

「わ、我々は【禍カオスの団ブリゲード】の【英雄派】、だ。リーダーは、その、其の彼だ」

未だ踏みつけられたままの曹操を指して、とりあえず自分の灯火を確保する。

曹操は依り危険に晒されている状況だが、五体満足な自分こそ欠けることは許されない、と内心が自己肯定を促していた。

「烏丸イソラ、今日はキミに協力を申し出に来た」

「こんな朝っぱらからあ？」

其処を突っ込まれることは流石に嫌だが、せめて会話を成立させないと【先】どころか【今】も危うい。

ジークはその点を問引いて、見目の良い【状況】から説得に掛かる。

「わ、我々の目的は聖書陣営の悪魔らの横暴を許さないことに在る！ 奴らが世界に何を犯しているのかを知れば、同じ人間として許せることでは無いはずだ！ 我々の仲間となつて、悪魔らの驚異より人の生活を守ろうじゃないか、烏丸、さん！」

呼び捨てにするよりは、と悪魔以上の驚異に晒されているとしか思えないジークはプレッシャーの中、ほぼ無意識に近い心情のまま烏丸の呼び方に敬称を付けていた。

割ともう負けている感じがしないでもない。

「……ふーん」

そしてとりあえず件の集団の目的を耳にした烏丸は、色々と予測を重ねる。

今は特に云う事も無いので生返事だが、内心では色々とシミュレーションを重ねても居た。

結論としては、どうでもよかった。

悪魔の脅威に対抗することを目的として『英雄』を自ら名乗っている部分とか。

因果関係は見出せそうだけど其処に横槍を入れるのも割と大きなお世話っぽい処とか。

悪魔だけに対抗するつもりならテログループに混じる意味ってないだろう、とか。

『英雄』という割には此処にいた奴ら全員小物っぽいなあ、と思った処とか。

そんな色々をひっくるめて、どうでもよかった。

しかし、件の【禍の団】に所属していると云う事は、当然横の繋がりに在る事を予測する。

そして、自分の情報もまた其処から窺い知れたから、こうやって『三顧の礼』の如く会いに来たのだろう。

そう連想し、寝起きを襲撃されたと実感して少々虫の居所も宜しくない烏丸は、生返事より一転、

「手を貸すのはお断りだけど、命は助けてやろうか？」

猛禽のような笑みを浮かべて、白髪青年を見据えていた。

既にイニシアチブは握っているのだ、という部分までも自覚していた彼に、死角はとつくに割と無い。

▽  
▽  
▽

曇天が日差しを遮り、午後からは雨が降ると予報では告げていた正午過ぎ。

パアン！と、乾いた音が室内に響いた。

肌を打ったその音源は紛うことなく兵藤一誠の頬で、その証拠に彼は呆気を取られたような貌で僅かに赤く腫れている。

振るつたのはリアス・グレモリーで、彼女は平手を振り抜いた姿勢

のそのままにイツセーを睨みつけていた。

手首のスナップが利いた小気味の良い鞭打ビシタであったが、それを打つた張本人の心中は窓から見える空模様のように決して晴れやかとは云い難い。

軽度とはいえ害したのは彼女の方であるのに自分がずっと傷ついたような感情で、頬を叩いた少年を涙を堪えるような貌のままに睨みつけて震えている。

むしろ、これは『これ以上の何か』を起こさないように必死で堪えている、というのが正解かもしれない。

時間にすればほんの数秒だが、互いにとつては永遠にも思えそうな苦々しい時間を堪えきれなくなったのは少女の方が先であった。

「……っ、頭を、冷やしてくるわ……」

踵を返し上着を羽織り、ほぼ着の身着のまま外へと逃げるように進んでゆくリアス。

それを止めようと手を伸ばすも、かける言葉も見つけられないイツセーが呆然としたまま見送る。

その気配だけでも届いたのか、戸を開けて出でて閉める直前に、振り返ることなく言葉だけを残した。

「……私が帰る前に、出て行ってちょうだい」

ボタン、と静かに閉められたはずの扉の音は、イツセーの耳には酷く冷たく重く響いていた。

伸ばしたはずの手は、彼の気力が尽きるかのようにへたりと床へ落とされる。

完全に見捨てられたことを把握した少年は、四つん這いになったような姿勢で愕然となった。

「あらあら、フラれちゃいましたね」

一部始終を見終えた共に室内に居た少女が、揶揄するようにふたりの様相を嘲る科白を吐いた。

その顔は冷静沈着で実際の処は決してそういう感情で吐かれた言葉では無かったのだが、イツセーにとっては許せる言葉では無かった。

氣力を失った筈の少年が、火を点けたかのように顔を上げて彼女、——真羅椿姫へと掴みかかる。

「つアンタがつ！ アンタのせいでえっ!!」

「は。止めてくれませんか、私の所為にするなんて」

しかしそれをひらりと躲し、少年の怒号を鼻で嗤う。

その顔は終始静かで、イツセーをただ見据えたまま。

芥を見るような視線のままに、椿姫はリアスにも見せた一枚の写真を再び手に取った。

「私はただ、兵藤君が何故か女性化した木場君とホテルへ入っていたところを彼女へ尋ねただけです。生徒の性事情に乱れがあるとなれば、生徒会としても見過ごすわけには行きませんからね」

最後の理由は如何にもとってつけたようなそれらしいものであったが、その行為は明らかにイツセーを貶める為に充てたことは有り有りとして覗えていた。

写真にはイツセーと女性となった木場の『まさにその瞬間』が捉えられており、よほどのかまととでない限りはどんな者にでも『その先』が把握できる場面であることは明白だ。

椿姫は、たまたまその写真を手に入れてしまったので事態の真相を把握するために来た、と言って先ほどの部屋へと乗り込んで来たのである。

写真の人物の片割れは女性であることが明瞭であるものの、見目か



らして完全に木場かまたは親戚かとしか思えぬ姿であるのだし、生徒会の面々は木場に親類縁者が居ないことを既に把握していたりもする。

生徒会全員がこの写真の存在を知っているかどうかまではイツセーには判別できないが、それ以上に隠すべきは自分の主人であるのだと云う事に、この事態になるまでまったく予測しきれていなかったのだ。

そして、そのことを知ったりアスはイツセーを赦すわけには行かなかった。

何故ならば、ほんの半日前の深夜に、彼女がイツセーへと身体を赦していた為だ。

『そういう関係』になっていればこそ、イツセーとしてもリアスの怒りのほどは判る。

判るが故に、自分たち眷属の裏切りをどう言い繕えば良いのかが判別が利かなかった。

その結果、夜露を凌がせて貰った一宿一飯の恩すら返上することも出来ず、彼は再び放逐されることとなった。

リアスが戻ってくるのが何時になるのかも知ることも出来ず、イツセーはただ力なく、椿姫の宣告にぐうの音も吐けずに項垂れるのであった。

▽  
▽  
▽

【杖】を持つ少年・クレオと【滴】を持つ少女・ネフレアは、【3番】と命じられた銀髪の少女に連れられて悪魔領の一角、首都ルシファードとかいう場所へと赴いていた。

英雄派と名乗り集る人の群れに、ちよつと教義が過剰な宗教施設より移籍したクレオにとっては悪魔に囲まれることはぞつとしなない話であるのだが、『身の安全だけは銀髪の少女が守る』と彼女の親かと思しき男性に教えられたので、やや怯えつつも話に従っている。

件の宗教施設在籍時代から顔見知りであったジークという青年が

既に集団の顔利きとなつている事情も、彼の居心地を辛うじて肯定する前提であるかもしれない。

しかし、元より自分は孤児の身だからこそ死ぬような事態になつたら逃げるしかない、とは覚悟しているモノの、「集団」というモノにあまり良い思い出がないクレオ。

囲われるのも追い立てられるのも共に御免である彼は、怯えの中にもげんなりとした感情を抱えていた。

それは最早、すっかりお馴染みとなつた但し彼独自の、精神状態のデフォルトでもあつた。

それに対してネフレアは、悪魔というモノに対して絶妙に高い興味を持つていた。

元々国家規模の財政破綻によつて都市ごと職を失つた両親らに連れられていた彼女は、生まれつきある「変な力」を使うことに抵抗を持つていなかった。

終始『何か』に追い立てられる生活に晒され続けた幼心は、頑強に洗練され彼女の価値観ノークォーターに容赦をしないという概念を植え付けるに至つた。

それゆえに彼女は『生きる為には他者を害してでも自分を保たなければならぬ状況はいくらでもある』という感情をフラットに芯に備えており、そんな場面に遭遇する度に此の「力」は上手く働いてくれた。

そんな「力」を色々試した結果として、故郷である一つの街が呑まれ人の住める地域にならなくなつてしまつたが、そういう「結果」が出た頃には彼女は「生きる目的」を見出していたので、彼女はそれに従つてこの『世界の裏側』へ足を踏み入れたわけである。

因みに、彼女の持つ神器【エキドナトロップ】は『触れたモノを好きな生物へと変貌させる』性質を持つ物質を精製する神器である。

この力は果たして悪魔にも効くのだろうか。

興味を抱いた翡翠色の眼差しを、周囲を行き交う民衆へ無邪気に向ける。

彼女の先行きへの指針は、その一点へとフルスロットルを噛まして

いた。

「やあやあ、おふたりさん。遠いところをわざわざご苦労さま」

そんな中、んちや！とテンション高めの少年が、明確には『三人』の前へと姿を現した。

云うまでも無いが、銀髪の少女とはユーグリットとグレイファイアの遺伝子を混ぜて造った失敗作のうちの一体である。

自我が薄く、生物としても不完全なメイド服を着た中学生くらいの少女は、活動限界期間は精々が一年だと試算も出ている。

ユーグリットの研究施設に納まっている残りの3体も含めて、限界を越えれば【自死】するのが決定付けられた使い捨てメイドである。そんなことも把握している少年は、名をリゼヴィムといった。

「ユーグリット君から聞いてないかもしれないけど、此処でキミらの持つてる神器の【拡張】を施すから。もつと明確に力を発現できるように、つていう俺たちからのプレゼントだけ」

名乗った少年の正体を把握できないままに、ふたりは導かれるままにルシファードの路地裏へと縫うように進む。

現在の冥界に置いて、【禍の団】の存在は詳細まで表沙汰とはなっていない。

確かに聖書陣営の同盟締結の場へ乱入してきたことは事実として明かされているが、そのメンバーが【旧魔王】であったことなど明白にされるわけには行かない冥界最大のスキヤンダルだ。

現魔王派にとっては「古い」と政治の場より除け者とされていても、かつて冥界を興した旧家の血筋。

また民にとっては自分たちの同胞であることに変わり無く、それらが牙を剥いたなどという事実を現魔王としても公開するわけにもいかないのである。

だからこそ、旧魔王筆頭である【リゼヴィム】に協力する表側の『悪

魔』なら未だに存在する。

それがよほどの問題行動でない限り、リゼヴィムは冥界の何処へでも隠遁可能な立場であるのだ。

「此処は特にそつちの娘、ネフレアちゃんだっけ？ キミの神器の拡張に手助けできるはずっしょ」

口調が曖昧なままだが、その内容は如何にも危うい。

確かに神器を自らの望むままに変貌させられるというのなら、この先において何より役立つことになるだろう。

だが、そのような技術を悪魔が所持しているということは、【英雄派】として活動している自分たちにとっては如何にもマイナスな要因足り得るのではないか？

「な、なあ、それ俺たちが知っちゃって良い話だったのか？ 神器の成長とか、一応俺たちは悪魔にとっては敵なんだろう？」

声を潜めるように、クレオは問う。

聖書陣営が同盟を組み、三竦みであった者たちが協力し合ってゆく指針が出来ていたとしても、此処に来たふたりは人間で、しかも所属している団体は基本的に冥界にとっては敵対組織だ。

英雄派とかいう話以前にばれたりしたら決して無事では済ませられないと云う事を、彼だけが必死で気に懸けていた。

「ああ、だいじょぶだいじょぶー。其処の研究所は神器や最近の冥界の技術にはなんら関わりも無いからよー」

「……ホッ」

アジユカ・ベルゼブブの手によって【イービル・ピース悪魔の駒】が開発されるより以前、悪魔の元には眷属を強化する手段が酷く限られていた。

基本的には種族的に上位に位置する怪物や能力の高い術師などを

契約によつて従属させる方式であつたのだが、それは悪魔の軍備を維持することには繋がつても悪魔を増やすことには直結し得ない。

更にはそんな眷属ばかりを得られるわけでも無い、実力が足りない者も当然存在したわけである。

そんな者たちの為、とばかりは言えないが、眷属を【改造】するという『手段』が当時の悪魔たちの種族繁栄の為の選択だつた。

その手段の名を、【グレイテスト・オリオン】。

神器より以前にあつた、今は廃れた悪魔らの持つていた改造手段。

人の魂をエネルギーとして使うが為に『魂の蒐集』が盛んに行われ、悪魔が悪魔として最も恐れられた時代の代名詞でもあつた技術の一端である。

「此処はそんな廃れた技術を未だに研究しているところだな、巷に未だ逃げ惑う『はぐれ悪魔』って呼ばれる怪物どもの生みの親でもある。悪魔の駒を与えられない程度の奴らが眷属として自分の下僕を集めたい時には、まだ鼻屑にされてるらしいぜ？」

「……マジか。つーか、此処をぶつ壊せば英雄派の名を上げられるチャンスじゃないのか……？」

粗方の事情を説明された後、クレオがぼつりと漏らしていた。

実際、かつてクレオたちのいた組織にも教会からの通達が届いていた討伐依頼などの協力要請の対象は、理性を失くし無差別に人を襲うという『異形の悪魔』らだ。

エクソシスト側としてはそれらを【悪魔】と断ずるのに異論などなかったであろうが、人の形をしている悪魔が居る一方で明らかに異形であるそれらを本当に同等と扱って良いものかという葛藤だって、クレオの中にもあつたのだ。

事実、自分たちを此処まで護衛してくれた銀髪の少女も【悪魔】だ。

例えば【禍の団】から外れて再び以前のような仕事に就いたとしても、その討伐対象として【彼女】を討てと命じられたとして、それを実行に移せるはずがないとクレオは良く把握できていた。

そんな葛藤を知ってか知らずか、リゼヴィムは下品に嗤う。

「いひやひや！ むーりだって！ 此処は天下のルシファードだぜ？ 如何に問題のある研究だからと言って、役に立っているのも事実だ。現魔王だって首都を荒らされてたら出張ってくるっての！ それに、こんな施設は一つで済むはずがねーしな！」

どうやらクレオの予想以上に、悪魔繁栄の弊害は根が深そうであった。

それはさておき、説明の合間にネフレアは、既に職員らに連れられ実験レポートなんかを閲覧させてもらいに行っている。

研究結果は害悪そのものだが、「改造」という点に置いては彼女に役に立つことは間違いが無い。

それと比べると、自分の【杖】は果たしてどうやって強くしてやればよいのだろうか、と途方に暮れるクレオである。

手持ち無沙汰な現状に、以前の仕事を連想したことで久方振りに思い出したフリードくんは果たして元気になっているだろうか、と益体も無いことが脳裡へと過ぎっていた。

そんな折、

「——リゼヴィム様、ユーグリット様が死にました」

「——……マジで？」

唐突に。

控えていた少女が口を開いたかと思えば、そんな言葉を漏らす。

それを疑うまでも無く、事実を事実として捉えたりゼヴィムに肯定するべくか、少女が報告を続けた。

「はい。私の同位体である5号・7号・18号が同時に消滅した模様です。自己保全権利を行使すべく侵食阻止の為にアストラルラインをカットしましたが、齎された情報は研究所諸共の消滅が最後でした。

サーゼクス・ルシファアの【滅殺の魔弾】に近しい性質だったが、威力・範囲共に規格外に思えます。少なくとも、ユーグリット様の知覚領域の遙か外側から、狙撃に似た形で勧告無く放たれたかと」

「……あの甘ちゃんの手サーゼクス坊やが、仮にも小姑に当たるユーグリットにそこまで容赦が無いかね……？」

「尚、放射された波動は魂をも侵食する属性が付与されていた模様で、」

「ああ、わかっているわかってる。念のためにまた復活するような事態になった場合、ユーグリットからの連携が取れる符丁も決めてあったんだ。それが未だにこっちに無いってことは、本格的に死んだってことだわな。……あつぶねえな、こいつらが別行動の時良かったぜ……」

リゼヴィムの科白に不穏な背景を感じつつ、クレオには口を挟む間も無い。

言葉の端はクレオやネフレアの生存を危ぶんでいるようにも聴こえるが、その内心ではまた別の理由が前提に在るようで未だに警戒を薄めさせないでいた。

「よし、クレオ君。ネフレアちゃんを早く呼びに行ってくれ、急いで逃げるぞ」

「に、逃げる？ 何から？」

「話は後だ。こうなつてはもう起死回生の手はキミにしかない。キミの持つ【生死覆す万象の杖】ロッド・オブ・アスクレピオスが邪龍復活のカギだ」

そう言つて不敵に嗤う。

何やら不穏な単語が最後に混じっていた気がするが、彼らの功績は英雄派の為になると曹操からも既に云い含まれているクレオには、その行く末を留めるだけの権利は無い。

そこはかかない不安を抱えながらも、呑み込もうとする虚のような目を持つその少年から逃れる手段など、彼には想定することすら叶う

ことは無かったのだった。



☆「美少女を悲しませるなって幼馴染が言ってた」

さて襲撃者から情報を得て、少なくとも俺を狙っていると思わしき奴を【無月（モドキ）】で塵にした日の雨天の午後。

無月とは名ばかりの、毒属性魔法の凝縮侵食系広範囲拡散型放射……要するに【腐食の月】みたいな……アレだ、ドクシヤが知るところでは前の世界線でエヴァ姉相手に最初の方の模擬戦で使って躲されたなんちゃって魔法だ。

え？ 説明がメタい？ 何をいまさら。

相手が少なくともユーグリットとかいうグレイファイアさん（悪魔政府）からも逃亡を続ける男なのだし、確かに殺したはずの相手がジークらに情報を与えた人物と特徴が合致したのだから、また復活される恐れだってある。

そうされない為には、魂にも影響を与える攻撃で滅ぼすのが确实だ。

帝釈廻天も充分【死体蹴り】に匹敵するけど、この世界の奴らってかなり頑丈だからね。

ネギま世界みたいに、『大気に魔力』ならぬ『大気にプロテイン』が現実であつても納得できるレベル。

ありったけの夢を詰め込んで探しに逝こうぜ、ひとつなぎの秘宝を！と倒置法で勧誘されるのも遠くない未来だと推測する。

前の処の魔女さんから預かったこともある【概念具<sup>アイテム</sup>】をホイホイ使えれば楽だったのだけど、こっちの世界にはこっちの世界なりの法則があるしそもそも手元に件の概念具も既に無いし、俺なりに法則<sup>いっつもの方法</sup>の穴を突く方式で試行錯誤した結果でもある。

……情報提供者<sup>ジークその他</sup>はどうしたかって？

無論、ちゃんと帰したさ。肉体は遺っていた少年くんだけはきっちり蘇らせてな。

襲撃してきた代償として、バーサーカーみたいな奴の復活の見送りと结界系神器の核を戴いたけどな。

本題に戻るが。

物質世界に存在が反映されている以上、万象合切色即是空、隅から隅に至るまで物質であることに間違いはない。

ならば魂だって物質の一部だということは、以前にも何処かで語った気がする。

つまり微生物レベル以上での酵素系分解を發揮し得れば、物質である以上の数十g程度と認識されている情報質量ですらも破壊し得るのではないかな、と推論付けた。

此れが概念と云う認識範囲の膨張で全体像を把握しきれない情報質量だったりした場合、概念干渉の値に律するのでマジで破壊不可に繋がるのだけど、相手が肉を持った人間大の何某かならやって殺れないことは無い。

道具レベルの【附加】ならともかくな、主体が何処に逝きつくかも不明瞭な【破壊】までは俺の力量じゃまだ無理っぽいし。

斬月と、ひとつになることだ……！ と、黒崎さんごっこをやって教えてもらった研究所を発破し、後顧の憂いをようやく亡くしたと意気揚々と駒王へ舞い戻ったその帰り道でのことである。

——雨に打たれてとぼとぼと歩く、なんだかドラマのワンシーンを再現しているように意気消沈とした赤髪の美少女が視界に入った。

……つか、グレモリー先輩じゃね？

▽  
▽  
▽

……温めのシャワーを頭から浴びながら、私は雨で冷えたこの身体をよく洗う。

暑中の雨は適度に自分の頭を醒ましたけれど、自分の行動で心頭に発した怒りの程は未だ燻ったままだった。

そう、私は怒っているのだ。

それは、昨夜私が身体を赦したイツセーが、事前に祐斗と関係を持っていた——という部分に、では無い。

『私自身が』易々と処女を捧げたという、その事実を憤りを感じ得な

いのだ。

そもそも、私は悪魔だ。

悪魔は貞操観念が人間よりも低いのかと思われがちだが、昨今は人間社会と付き合ううちに程よい貞淑さを維持するような社会通念を備え始めているはずだ。

そういった考え方の例に漏れず、私だって年頃の女の子並みには自らのハジメテをもっと喜ばしいシチュエーションで喪失したい、程度の感性は持っているのだ。

しかし、先程も言ったが私は悪魔だ。

それも貴族位に位置する、将来悪魔社会を牽引する立場に納まるべき女だ。

悪魔の社会とは、文化を保持し、種の繁栄を支持し、従えるべき者たちを発展させることに主題を置かなくてはならない。

そういう事実を、私は先日行われた若手悪魔たちの会合にてようやく理解できたのだ。

——そんな立場の女が、人間の男鳥丸くんへ好意を持っている等という事實は、あつてはならないことだ。

冥界に彼が顔を出した時には動揺したけれど、そもそも彼が私に靡かない時点で、そこいらの男子高校生と同じような感性を持っていない時点で、私に勝ち目はない。

成就しても不毛な恋。

そんなものが明確に成立する前に、私はこの気持ちに区切りを付けないではならないと、自らを律することに決めていた。

その矢先に、テニスの勝負にて見せられたイツセーの男らしい覚悟。

そして、抛るべきところを喪つて途方に暮れている母性本能を擦る彼の懇願に、私は簡単に騙されて——。

……ただ痛く、イツセーが自らの欲望の捌け口としていただけの性行を、初めてなのだから、と受け入れてしまった。

その事実が、何よりも私の心を憤らせていた。

「――グレモリー先輩、着替え買ってきましたよ」

ガラス越しに、烏丸くんの声がかくぐもって届いたことにハッと気づく。

街中で偶然会ってしまい若干の気まずさを覚えたモノの、私の様子を見て「そのままでは如何かと」と手近なところへ連れ込まれてしまったのが経緯でもある。

此処がどういう目的に使われている場所なのか、も理解できるけれど、彼が今寢床としている教会へ悪魔を連れ込むことを考慮されたのかもしれない。

……それとも本来の目的なのかしら……。

まあ、それでもいいと何処かで思っている私が居るのだけれど。

……けれど、彼が気遣うその表情には、イツセーみたいにそういう下卑た思惑など覗えないようにも見受けられていた。

「え、ええ、ありがとう。ごめんなさいね、こんなことにつきあわせて……」

「いえ、まあ、通りがかりの縁みたいなの奴ですよ」

掛ける言葉を濁すような物言いに、烏丸くんなりの優しさを感じてしまう。

偶然会った時の様相も私は『あんな』だったことだし、何かあったのでは、と心配されているのかもしれない。

まったく、こんなタイピングで会うなんて、これじゃあ諦める筈だったモノも諦めきれなくなっして、ま、う……。

………あら？ これってひよつとして、チャンスというやつでは……？

バスルームから離れてゆく彼を、私は思いついてしまった計略に身を任せるべく、キレイに流した身体にバスタオルを添えて、よろけるような足取りで追っていた。

▽  
▽  
▽

「——烏丸くん……、少し、いいかしら……？」

と、湯で上気したグレモリー先輩が、濡れた身体に構うことなくバスルームからふらついて出てくる。

手にしたバスタオルはほとんど身体を隠しておらず、豊満な乳房やくびれた腰、陶器のように滑らかな素肌の太腿なんかを惜しげも無く露わにしている。

しかし、その表情はいつもの自信ありげな様相とは打って変わって儂げで、普段見え隠れしている安っぽい娼婦のような雰囲気では無く、まるで男性に乱暴されたばかりの年相応の少女を目の当たりにしている気持ちにさせられる。

彼女がそんな様子では、流石に俺も生唾を呑み込むわけにもいかず、倒れそうな足取りを支えるべくふらついたその身体を抱き止めるように受け止めた。

弾みで掴まえたその肩は、今にも折れそうな程にか細い。

「ご、ごめんなさい、まだ、身体に力が入らなくて……」

「……どうしたっていうんです？ 先輩らしくないっすね……」

「……私らしい私って、なにかしら……」

嫌な予感が拭えないので、俺も発言が普段の軽口を控えさせられてしまうのだが、そんな俺の言葉尻を取って、グレモリー先輩は問うように、というよりは自問するように顔を伏せていた。

そんな様子に問うべき言葉も見つけられず、抱き止めたままの姿勢で固まる。

「……………」

「……………」

そうしたままの、長い沈黙の後に、先輩がぽつりとようやく言葉を重ねた。

「私、ね……イツセーと、寝たの……」

「……あー、はい。それは、えーと……」

なんだろうか、おふたりはそれなりに近い関係であったのだし、祝福すべき言葉を投げかけるべきなのだろうけど、雰囲気はなんか180度違う気がする。

「……というか、あれ？ 兵藤先輩って、確かこの間ホテル街へ女連れで……。」

「けど、イツセーはハジメテなんかじゃなくて、他にも、いて……」  
「…………あー……」

……おい、バレてんじやねえつすよ兵藤先輩。

そんな俺の呆れたような嘆息に、察せられてしまったのかグレモリー先輩が俺の胸の中から顔を上げる。

「……知ってたの……?」

「いえ、ちよつと見かけただけですけど……」

「そう……」

再び顔を伏せる先輩。

逃げ場がねえ、どうしよう。

「私は、眷属としても可愛がつているイツセーだから……、あの子がどうしてもって懇願するから……、痛いのも我慢して、処女まで捧げたのに……。……ねえ、烏丸くん……」

再び顔を上げるグレモリー先輩。

その顔は微笑みを浮かべているが、目に光が一切無かった。

「こうして眷属の為に身体を削るのが、私らしい私みたい……。なんか、おかしいわよね……。？」

ハイライトさん、仕事して。

▽  
▽  
▽

「……んっ、い、っは、あ……っ」

彼女の身で濡れた服は取っ払い、お互いに隠すものも無い生まれたままの姿を晒し合った状態で。

グレモリー先輩の身体を後ろから抱き、胸の下を通す指先が先輩の秘所をくちゅくちゅと弄る。

もう片方の腕は抱くように、彼女の豊満な乳房を抱えウエストをぐりりと廻している。

此処に至るまでには乳首や膣口などの判り易い性感帯などは避け手足・背中・太腿・脇の下・尻と順序良く、女性特有の敏感な薄絹のような柔肌を、時間をかけて触れるか触れないかの境界線を行き交うように全身を愛撫していた。

乳首も先端を率先して触れるのでは無く、その周辺の乳房を全体的に優しくスローペースで、今も下乳の辺りを抱えるような具合で、時折摘まむ程度の手つきが一番いい。

そして今弄っているGスポットと呼ばれる場所は、膣口に入れて直ぐ上の指を曲げて届くくらいの位置にあたる。

徹底的に最奥まで届かせない愛撫だが、グレモリー先輩は先程より小刻みに何度も身を振らせている。

擦ったいのか程好いのか、吐息に似たか細い嬌声を漏らす彼女のその秘所は、彼女自身の粘膜でとろりと湿っていた。

「か、らすま、くん、も、もう、わたしい……」

弄る事十数分と言った処だが、準備は万端のようだ。

首を傾げるような姿勢でこちらへ懇願する先輩に、俺は微笑んで頷いた。

どうしてこんなことになっているかというのと、眷属に手酷く裏切られて今にも自殺しそうな雰囲気先輩を放っておけるわけも無い、という一点に集約する。

よくよく聞けば、兵藤先輩はグレモリー先輩に対して、彼女の言うように自分が気持ち良くなるためだけのセックスを強要したのだとか。

とはいえ彼女には未だ痴漢撃退の呪いがあるから、本来ならそんな行為に恭順するはずもない。

先輩自身が受け入れてしまったという部分も問題なのだが、其処でこんなことが男女の機微というならもうしたくない、などと言い出したのが普通に惜しまれるのだ。

云うまでも無いが、グレモリー先輩は美人で美少女だ。

スタイルも良いし、世の男どもはこの身体を抱くためならいくらでも積み込むだろうし、幾らでも身を削るだろう。

俺は元よりそんな「高級食材」を欲するほど身の程知らずなわけでも無いし、手ごろに戴ける美少女（アジア等）を知ってるからそこまでの対価を支払う気など毛頭ない。

だが、それとこれとは、別だ。

こんな美少女が若い身空で干物女の第一歩へとジョブチェンジしようというのを、見す見す見逃しては勿体無い。

セックスとは気持ちいいモノである、ということ教え込まなくては、この人の将来的にも非常に心苦しい。

というか、仕掛けた痴漢撃退の術式がやたらと頑強に根強く残っているから、このまま見過ごすとホントガチで子孫が残る可能性がねえ！

しかも貴族籍だよな？

巡り巡って俺の所為、ってことになったら目も当てられねえわ。

いろんな意味でな！



今回、必要なことは『性行為を教え込む』という点だ。

ヴェネラナさんみたいに若いツバメを囲えとまでは云わないが（偏見）、グレイフィアさん並には雌としての欲求を備えさせないとそもそも悪魔としてどうかと思うし。

そんなわけで本日の課題としては、スローセックスで取り込ませていただく。

絶頂は少なめを目指して、身体に負担を強くない方向で。

コレも総て、彼女がセックスを敬遠しないようにするための志向誘導である。

それには先輩が自立的に行為へ臨むことが必要不可欠であり、そのためにも現状鳴りを潜め欠けている彼女本来の積極性を是非とも発揮し直して貰いたいわけで。

というか、女子○の雑誌ってそういう方向性で制作されている節が覗えるのだけど？　こう、「セックスは愉しい！」みたいなコンセプト。

いや、最初見た時は「正気かコイツら」って思ったけどさ、実際本来の先輩の志向とも実に相応しいくらいのコンセプトなんじゃないかなーって。

ほら、悪魔って自分が上になるのを好みそうじゃない？（偏見）

「ん、準備は良いみたいすね」

緩く、くぱあ、と広げられる膣穴を指先の感触で解し終えて、ベッドの上へと寝転ぶ先輩の正面へ回り込む。

今更だが、この場はいつも使わせてもらっているラブホの一室だ。

先輩悪魔だし、教会に連れて帰るわけにもいかないし。

「じゃ、覆うように上になって」

「……………うん……………」

やや意識が朦朧としている気配すら覗える先輩が、幼児みたいに頷いてこちらへ向き直る。

股座を弄られた弊害か、昨夜受けた破瓜の痛みの弊害か、グレモリー先輩はふらつきながら膝立ちとなって、ベッドの上へ仰向けにな

る俺の上へと跨る。

秘所と肉棒がぴたりと寄り添い、いつでも挿入できる姿勢になっていた。

「ん……っ、は、い、ったあ……っ!?」

ぎゅちい、とやや肉を押し退けたような感触が肉棒越しに伝わった。

腰を落とした先輩は呼吸も荒く、仰け反る様な姿勢になってふるふると自らを震わせている。

そのたびに、ぴんと上を衝く乳首の先が、大きな乳房ごとぶるんとはずんだ。

「ああ、ちよつと大きかったすかね。ほら、そんな離れてないで」  
「……っ、……っ、ふっ……、お……っ、あ……っ！」

上体を起こし、背を反っていた先輩を正面から抱くような姿勢へと。

いわゆる対面座位。

女子が一番『気持ちイイ』と思える姿勢なんだってサ（小並感）。

落とし挿入れ込んだ勢いは反動が凄すぎたのか、目を見開いて呼吸も危なげな先輩を、引き寄せ抱き締め背を撫でる。

子宮にまで届いたような感触を味わっているだろう彼女の視線は何かを映しているかも定かでは無く、瞳孔の開いたようなその様は痛みのフラッシュバックが思考を蝕んでいる様相すらも覗えさせていた。

「大丈夫ですよー。ちよつと違和感があるっただけですよー。痛くしませんからねー」

子供をあやす様に、抱き締めて背中を撫でて、暗示させるように言葉を紡いで気持ちを落ち着かせる。

過呼吸気味だった様は、ゆつくりと治まって行つた。

「……落ち着きました？」

「……っ、っ、う、うん、も、う……へいき、よ……っ？」

やせ我慢にしか見えないが、微笑むその様は花が綻ぶように儂げにも映る。

ううむ、やっぱり美少女なんだなあ。

「じゃ、ゆっくりと動きますからね」

「え……っ！ んあつ、ああつ……！ な、なに、これえ……っ!」  
そりゃあ破瓜も済ませていたら後はちよつと押し退けるだけで済む。

というか、俺のつてやっぱ兵藤先輩より大きかったのだろうか。

まあそんな胡乱な情報は兎も角、膣<sup>ナカ</sup>中で少し自身を反らせるだけで、先輩は小刻みに痙攣していった。

繋がったままの膣中を反動が出ないように蠢かせるそのたびに、腕の中に身を寄せた先輩が、ぴくりぴくりと身を振らせる。

Gスポットと呼べる部分に擦れるときなんかは、声にならない嬌声が掠れたように喉から洩れるが、彼女が一番好きなのは子宮口をトンと叩く方らしい。

こうしてるとやっぱヴェネラナさんと親子なんだな、つてくらいそっち方面の嗜好は似ていた。

身を振るたびに、胸板へ擦りつけられた乳房が潰れる。

ぷくつと小粒な先端は自己主張が激しく、顔を埋めて噛みつきたくなる誘惑が幾度となく俺を襲った。

だから、というわけではないが。

本日はいつものセックスとは趣向を変えようかと思ってみた。

それはイタズラ心が芽生えたのかもしれない。

それ以外にも探究心があったのも否定しきれない。

俺は今日は、ノーマガンテで往<sup>おっばい</sup>こうかと思う。

正面から抱いているので男の夢<sup>おっばい</sup>には手が届かないのだが、スローセックスとはそういう欲望を曝け出すガン突きとは違う。

「あつ、あつ、ふあつ、んうつ、あつ、ふあつ？」

ギシッギシッとベッドのスプリングが遅いテンポで軋む音に合わせるように、目は蕩けて口も半開き、断続して胎に響いているであろう絶頂の小波に漏れていた嬌声は、それまで触れなかった頭部を撫でられたことで疑問符へと替わった。

「あつ、ふつ、あつ、んつ、ふああつ！」

が、その瞬間には優しい刺激が快感へと昇華される。

絶頂が飽和している、とでもいうべきか、弄られ続けたグレモリー先輩の全身は、今だけ何処を触れても性感帯になっているかのように反応する。

まさに絶頂の確変。

此処まで来たら、自分が気持ち良くなるための手順も身についている頃だろう。

そしてそうなった以上、俺の身体の持つ特性上どうしたって不要になつてくるものがある。

察しの良いドクシヤの方々ならばもうお分かりだろう、そう、【催淫】のステである。

ではおさらい。

俺は時間さえあれば魔力を際限なく自分の中で精製できる体質を備えており、その飽和に託けてステータス調整を無理矢理に行うことで精子の着床とかを未然に防ぐことが出来る。

但し、イメージ上で弄られるステはシーソーみたいな原理がどうしたって働き、一方を下げればもう一方が上昇する、という副作用が発生する。

これまでは無精子症に近いレベルで避妊効果を促していたが、その反動として女性へ快感を促す【催淫】効果が極限まで上昇している、という現状だ。

今のグレモリー先輩の状態でそういう媚薬みたいな精子を受け入れれば、本気で俺から離れられなくなってしまうだろう。

今日は彼女に『セックスを教える』という目的があるのだから、俺だけに引っ付くような娼婦を作る気は更々ない。

つうか、聞き齧った悪魔の寿命的な問題上、上限に差異が出る人間の男に傾倒する貴族籍つて色々とアウトだ。

そんなわけで【催淫】ステを限界まで下げて、【回数】も装填数という名の屹立現象勃に繋がるし、【総量】もあまり多過ぎると膣に浸み込むことで動物的なマーキング効果を促す恐れもあるから、これらにも制限を掛ける。

……『ぶっかけ』にすればいいんじゃないか、という意見に対する答えが此れだ。

【匂い】って奴は根本的に動物の本能に良く働きかける代物で、雪そせごうとしても実は無意識レベルで影響を促すものなのだ。

動物的マーキングと言ったのも科学由来が根拠に備わっているから控えるべきであって、それ以上に男性からの其れは征服欲の充足と同時に女性に備わっている被支配欲求をも促してしまう。

要するに、身体に判り易く証を示すことで、女性が男性に対して離れる気を喪失させる効果が覗えてしまう。

……まあ、普通はそこまでではつきりと効果が出るのではなく、プラシボレベルでの影響力だから、結局のところ俺がそうする気が無い、って程度の理由になるのだけれど。

結果として【命数】と【繁殖】のステが振り切ってしまうのだが、此れで妊娠しても兵藤先輩というサクリファイイスが既に場に出現しているから責任逃れも容易いだろうげっへっへ。

「かつ、からすまつ、くうんっ、もうっ、もうだめえっ、がまんできないっ」

コアラみたいに抱き着いたグレモリー先輩が、イキ狂ったように蕩けた貌で懇願する。

フィニッシュを決めて欲しいと、そう願っているのだ。

それがどういふモノなのかは本能が教えてくれているのだろう。

断続する嬌声に混じりながら、息も絶え絶えにしがみつく腕の力も強くなり、爪を立てるように俺の肌に跡を残す。

セックスとは共同作業であり、お互いの身体へ何らかの証を刻み込むことである。

「あっ！ あっ、あっ、あっ、んああああああっっっ!!!」

はーい、それじゃあおやすりだしますよー。

今日覚えたことはしつかりと後で役立ててくださいねー。  
なんつって。

【番☆外☆編】「アスファルトの街抜け出してキミとアバンチュールなんちゃって」

武蔵小杉くん吹っ飛んだ！

おいおいまたかよ、という意見が飛び交う中、ビーチバレーに興じていた私も手を止める。

「手加減しなよ〜烏丸くん」

「いや、したよ？ したはずなんだけどなあ……」

からからと笑いつつ顔面が雪崩れた武蔵小杉くん本人はどうでもいい様子で、ギャル系の樋笠さんがそらくんを軽く諫める。

吹っ飛ばした元凶である褐色白髪の新マツチヨな彼は、手加減という概念を置き忘れたかのように己の手をじっと見ていた。じゅるり。現在私たちは夏休みを利用し、クラスメイトと共に海水浴に赴いている。

男子はクラス内でのサッカー部員の面子にそらくんを加えた総勢6名。

女子は以前にカラオケに誘われたクラス内でのいわゆる『キレイ処』を私含めて6人。

場所は駒王町からやや離れた公共海水浴場、所謂『砂の黒い』砂浜だ。

本日はクラスメイトとの交流を盾にグレモリー眷属とは別行動。アーシア先輩やリアス部長の割り込みを恐れることなく、日帰りだけどじつくりとそらくんを狙わせて戴く。

……え、ギャーくん？ ホラ、真夏の太陽が照り付ける太平洋とか吸血鬼にとっては害でしかないですし……（メソラシ）

「ま、武蔵小杉はいーや。ジャンプの時、胸ガン見してたしね」

「……そいや揺れてたな。というか、遊びで跳躍するなよ……」  
「目指せ砂浜の妖精！」

目の横ピースで樋笠さんは云う。

こんな極東の雑然とした海岸で褒め称えられることがそれほどま  
でに誇らしいか。

そんな彼女の格好は魅せつけることを目的として憚らぬ、フリルの  
付いたピンクの水玉ビキニで見る者からすれば何処か下着っぽい。

揺れたと自称したサイズもリアス部長のIというカップ数には及  
ばないがFという……私やアジア先輩と比べると充分に【女子】と  
しての戦闘力は高レベルである。

ふるんとはずんだそれを着地後に直しているところを、目を奪われ  
た武蔵小杉くんがそらくんのパスで撃沈したというのが先ほどのダ  
イジェストだ。

寡間に自業自得が芳ばしい。

茶の混じった濃いめの赤

ちなみに私の格好は、上がアンバーレッドのビキニはさて置き、下  
はホットパンツ履きのパーカー羽織りで、女子としての可愛さよりは  
ややスポーティな装いとなってしまった感がある。

元よりクラスメイトに見られることを考慮している所為か思い  
切った格好は選べなかつたが、よくよく考えればそらくんも同行する  
のだしボーイッシュなタイプは避けるべきだったかもしれない。

ちなみに、上着と下を脱いだら脱いだで若干過剰の場違い感を彷彿  
とさせる。

上下赤のビキニとなるだけだが、それはそれで何処のジュニドルか  
と疑わせるような【いかがわしさ】を個人的に思ってしまった下穿き  
である。

まさか胸が無いことでそんな弊害が生まれるとは……。

少女趣味に需要がある時代が生んだ、思い掛けない悪辣的解釈では  
ないかと密かに思う。

……だから別に胸肉が無いことで苦に思っ居たりはし  
ない。そもそもそういう方面に需要があるからこそ、私もそらくんと

肉体関係を結べたという実績があるのだし。

「男子って中々度し難いですよね」

「烏丸くん、はずむ樋笠のを見てたのはキミ意外だし、存分にやっちゃつていいと思うよー」

冷めた視線を送るテニス部の岡崎さんに、追従するように気楽な声を投げかけるはバスケット部の寺神戸さん。

基本健全な男子相応の反応を持っているクラスメイトの中で、例外的に平然と落ち着いた対応を取れることが彼の無駄なモテの秘訣なのかもしれない。

いや、そらくんの場合は女子にそういう視線を向けられないのではなくて、普段見慣れているからTPOを弁えるだけの自制力ではないかと思っただけ。

そういう背景が在る事を知らぬ寺神戸カッさんは、勘違いのままに靡くような目を向けている。

「ともあれ、ボールが割れてないんならまだ平気な範疇だよな。いくぞオマエラ、首級クビの貯蔵は充分か……！」

「顔面狙い宣言?！」  
「ストップだ烏丸！ ビーチバレーはそういうゲームと違う……！」

しかし現状のそらくんは遊ぶ気満々のご様子。

体育祭の悪夢を彷彿とさせる暗笑を浮かべ、指をワキワキと蠢かせつつルパンダイブを敢行する。

そらくんの戦いはこれからだ……——ッ！

……ところで今の科白はなんらかのパロディなのだろうか？

▽  
▽  
▽



「そらくん、随分楽しんでましたね……」

「まーな。こんなに遊んだのはどれくらいぶりだろう……」

「……そんな遠い目をするくらい暇の無い人生だったのですか？」

確か彼も私と同じ15だったはずなのだけど。

「去年は八代や瀬戸や種子島と、海を眺める機会に恵まれても遊ぶ程では無かったし……。適度な人ごみに紛れる日常なんてのが随分と遠い受験生やつてたからなあ……」

「麻帆良中学、でしたっけ？ どれだけ生徒に優しくないのでか」

聞き覚えの無い学校だが、日本は広いのだし何処かにはあるのだろうくらいの感想で聞き流していた。

だが、彼の転校前の学校のブラック仕様は本当に義務教育の範疇なのだろうか、とやや不安を掻き立てられる。

「さて、それで俺だけを呼んだ理由は？」

「おや、いわなくちゃわかりませんか？」

現在私たちは海の家にいるクラスのみなどと離れ、人気のない岩場へと連れ立ってきている。

もうこれだけで判るだろうに、そらくんは敢えて惚けるような口調で私を見下ろしていた。

「……今日ぐらい我慢できなかったのか？」

「むしろ今日だからこそ抑えきれないんですけどー……」

上目遣いで瞳を潤ませて、彼の胸へとしな垂れかかる。

胸部装甲は紙のように薄いのが、逆説的に『だからこそ』ある微かなふくらみの触れるか触れないかという感触を、際どく行き来する誘惑はクラスメイトらでは生み出しきれないであろう。

ぶつちやけ、私の勝てる要素なんてのは自らの身体に幼さが残るが故の【背徳感】ではないかと計算しているのだが、どうか。

「……仕方ねーなー」

「……フイーツシユ」

釣れましたよ姉さま！

草葉の陰でお見守り下さい！

▽  
▽  
▽

上下赤のビキニ、という人目を気に懸げざるを得ない恰好は、相応のスタイルを自負できる女性が着て初めて意味を為す際物だ。

それを、胸の起伏に乏しく、線も細く四肢も頼りない、幼いと言いやうのない『子供』が着ている現状は、目の当たりにはならないのではと見る者に思わせる程度の背徳感を醸し出す。

それは奇しくも小猫が思い至った『ジュニアアイドルの撮影』なんかに通じそうな『いかがわしさ』を、目の当たりにした烏丸にも思い浮かばせた。

だが、そう見えて既に幾度か身体を重ねた間柄でもある。

コイツは同い年コイツは同い年……、と自分に言い聞かせながら、烏丸は全く豊満とは云い難い、小振り但未成熟なふくらみへと両の手を添えた。

「アツ、ン……」

一丁前に色気付いた声音を漏らす小猫に、思いがけず優しい手つきをしていたことを自覚する烏丸。

このまま水着を剥ぎ取ることも考慮しかけたが、それで下手をして流されてしまつては帰ることも出来ない。

此処は海辺なのだ、剥いだ水着を放置するというシチュエーションが脳裏に浮かばないわけがない。

岩場の陰となつている小さな砂浜で、小柄な彼女を後ろから抱いた

姿勢のまま、烏丸は無理のない方向を脳内でシミュレートしていた。

「あつ、そ、らくんつ、んつ、ふあつ、あつ」

もにゆもにゆ、と微かな柔らかさが返ってくる、中々乳房とは云い難い平らかな柔肌を水着の隙間から弄ぶ。

猫の化生である小猫は既に蕩け切っており、普段は隠している筈の耳としつぽというあざとい特徴を晒したまま、快感のリズムに声音を弾ませていた。

ちなみに以前この描写を見事に抜け落としていたのだが、もう今更なので敢えて触れないでほしいと切に願う。

「んっ、にやつ、あつ、にゃあんっんっんむうっ」

男の身体にすっぽりと収まっている小柄な少女が小さな胸を弄られながらも、寄せられた顔へ唇を添えて流されるように合わせる。

ぴちやぴちやと海辺とはまた意趣の違う水音を響かせながら、首を捻る様な姿勢なのに小猫は、幸せそうに口中を弄る舌先を貪っていた。

そして、それに合わせて小猫自身の手が、自然と自分の股間へと伸びている。

欲するようにすべく自然と役から空いた両の手を、発情した雌が蠢く醜悪な姿だ。

その様は肢体こそ幼くとも、彼女に抱かせていた子供のようないメージを払拭させる。

自分で慰めて準備を興す本能に基づいたケダモノの情欲は、火照るその身の熱すらも手放すまいと律する抑制心をも拗らせる。

そうして【さかり】の付いた雌猫が、疼く身体を自ら雄へ差し出すべく動く。

そんな『熟成』されて逝く少女の浅ましさが、酷く『あからさま』となっていた。

見上げる小猫の目が、喜色に塗れた好き者の其れへと換わっている。

瞳孔にハート型の好色が浮かんだような幻想を見下ろした烏丸は、それでも彼女をいじましくも愛おし気に覗っていた。

「んっ、そらくん……、じゅんび、できましたよ……っ！」  
前へと備えた小猫の股間の手が水着をずらし、慰撫で濡れそぼつ膺口をくぱあと広げる。

そこまではこの姿勢では見えないのだが、口を離れた時に微笑みつつ見上げられれば烏丸の逸物もいきり立たざるを得なくなる。

おう、と簡素に応えて、彼女の身体をひよいと持ち上げた。

それは見た目通り、実に軽い。

「あんっ」

身動きひとつで軽々と向きは変わり、互いを抱き合う形へとアクロバティックな体勢変動を促す。

添えられていた手は弾むような仕草で手放されて、烏丸の首筋へと回す様に添えられた。

「あふっ、んうっ、だいしゅきい」

そして襲うように小猫が吸い付いてくる。

回避する気はなかったが、正面から向き直されたことが何かの琴線を刺激したらしく、小猫からのキスが、舌先が再び烏丸の口中へと侵入していた。

肉欲とも情欲とも取れる雄の唇を責め求める小猫は、時折目を閉じ舌先の感触を味わうような仕草を魅せつつ、幾度と烏丸の唇へと食らいつきその本能を惜しげも無く晒していた。

この猫娘、攻め役として優秀過ぎである。

「んっぶ、ちゅ、んむうっ、しゅきい、だいしゅきい」

しかもそれは狙ってやっているようには思えぬほど激しい求愛で、此処まで求められれば烏丸としても相手がいくら幼い容姿で己の趣味に中々沿わないとしても、さすがに応えないわけにもいかなかった。

抱き抱える手を背中から下へと伸ばし、小猫の尻へと這わせる。

「んひゅうっ……っ？」

一瞬、触れられたことで身を振らせた小猫だったが、それを受け入れる気もようがあるようで、ほんの少し声音に怪訝が交じった程度で、その後には喜色しか続かない。

変わらず唇を離さない小猫の尻肉を、空いた両の手で烏丸はくにと優しく撫でるように弄んだ。

「んっ、んっ、んあっ、あっふっ、ひゃうっ、んうっ」

時折離れる唇から、歓ぶような悦楽の声が悲鳴みたいに漏れていた。

小猫の小振りな尻には贅肉なんてものはほとんどついておらず、つるんと沁る様な柔肌が水着から零れることもなく収まっている。

その水着の隙間へと指先を這わせ、烏丸は女兒の敏感な部分を手慰むように弄んでいるわけだが、そう聞くと途端に犯罪臭が漂い始める。今更かもしれない。

「んあっ、あっ、おっ、んおっ、っほ、あひい……っ」

無遠慮に弄る指先は、少女の開け拡げるには憚られる大事な部分を余すことなく虐げて、先程彼女自身の手で拡げられた割れ目を求肥のように容易く分け入っていた。

その頃には小猫も自ら唇を求める浅ましさも鳴りを潜めるが、焦点の合わない目は空を見上げ烏丸へ抱き着く腕にも力が籠る。

声にならない嬌声は壊れた玩具みたいに断続的に喉から洩れて、それでも離れない密着した肢体のささやかな柔らかさが、水着越しに烏丸の胸板へびたびたと伝わっていた。

が、その辺りの感触には烏丸自身、いまいちな感想しか抱けないのは仕様が無い。

求められるのはそういった残念な感触では無く、現状指が分け入っている肉襞の窮屈な膺穴だった。

「……っは、あ、あ、ひい、っ……んああ、っ、あ、っ、あ、っ……っ」

弄られることが限界に達したのか、小猫がひととき大きく啼いて腰を浮かす。

その様子に蠢かせていた指を引き抜くと、へたり、とそのまま腹の上へと力なく依り掛かる少女が出来上がっていた。

首に腕を回す抱き着いた姿勢のまま、時折びくりびくりと痙攣のようにその身を振らせる。



故に、小猫は遂に堪え切れず悲鳴を上げていた。

「あゝっ！ にゝやあゝっ！ んゝあっ！ にゝやうゝううっ  
！」

奥まで挿入で、入り口まで抜いて、もう一度奥まで。

そうした衝撃の連続した行為は、セックスというには余りにも乱暴  
で。

此れまでとは違う、自分を『労わる』様な愛撫とは一切方向性の替  
わった、玩具を苛めるような自慰にも似た性行。

男性が、自分だけが気持ち良くなるために動く、酷く独善とした此  
れは、もうセックスとは呼べなかった。

だが、

「あゝっ！ んゝひっ！ おゝっ！ んゝおおっ！」

既にケダモノであった小猫は、再び善がり狂う。

悲鳴でしかなかった声は『出し入れ』される次第に喜色が塗れ、痛  
ましかつたはずの胎は好きな雄の『やりたいこと』を自然と肯定する  
だけの受け皿として、快感で振れた脳が感覚を造り替える。

怯えが交じり始めたはずの目は再び熱で蕩けて、烏丸を愛おし気に  
見詰める発情した少女のそれへと直ぐに戻っていた。

いや、これまで以上に『求められている』と誤変換を興した脳から  
して、其れまで以上にその視線には熱意が籠っていたかもしれない。  
悲鳴を上げていた筈の少女の声音に、悦楽の嬌声が交じり始めたこ  
とに気づき、烏丸はその少女の目を見返してしまった。

「んお……っ！ だ、ひてえ……！ せいしっ、わたしにいつ、  
ちようらいっ！」

気づいた時には、もう一度烏丸の首筋へと腕を廻していた。

ついに抱き着くことに成功した小猫は、されるがまま腰を上下に弄  
ばれる姿勢のまま、纏れた舌で『その先』を懇願する。

今その衝撃を受ければ『どうなるか』なんて考えぬままに――。

「っん、ひっ、あっあっあっあっ、んおっ、んおおー！ んほおお  
おおおおおっっっ!!!」

もう限界だったのか、それとも要求に応えたのか。

噴出する火山のように膨らんだと錯覚させた肉棒の先端から、そこそマグマのようにドロドロの熱い精液が小猫の子宮へと叩きつけられた。

その総てを受け止めるには小猫の膣では全くキャパが足りず、その勢いのまま突き刺さった肉棒の横から食み出るように噴出してくる。

当然、その衝撃は今までの比では無い。

だが、善がり狂った小猫はその衝撃の全てを『快感』として受け入れて――、

「……………つあ、は……、あへえ……っ」

——力なくだらり、と四肢の全てが投げ出されたように放心した小猫が、抱き着くことも出来ずに烏丸の首筋から離される。

腰を掴まえられたままの少女の肢体は、白目を剥いたまま口元もだらしく半開きで、繋がっていた腰からは白濁に染め上げられた粘液がごぼりごぼりと吹き出し自然に落とされるのみ。

ずれた水着からピンク色の乳首の先端や、陰毛も生えていない股が外気に晒されているが、それを直すような余裕も彼女には残されていない。

そうなった彼女を見下ろして、烏丸はやや満足げな表情で……。

「――よし、一回戦行くか」

「……………ふえっ……!?!」

抱き寄せて、再び弄び始めるのであった。

「――あっ！ まってだめ、いまむりいいっ!?!」

▽  
▽  
▽

んほおおお、たねちゆけしゆごいのおおお……!!

といった感じで乱れに乱された計5回の中出し祭り。

そらくんが案外キチクだと云う事がわかってしまった野外の後は、すっかり夕日の海辺です。

日が沈みかけている情景はノスタルジーを彷彿とさせるくらい口マンチックだけど、正直腰が痛くて立てないのでそれどころじゃあり



ません。

思わず脳内口調が普段遣いになるくらい、今の私色々不機嫌です。

「……殺す気ですか、そらくん」

「はっはっは、下剋上成功つてところだな」

「悪びれもしない……!?! オンナノコの身体は脆弱なんですからね……!」

「そのゼイジャクとやらで俺を押し倒してきたのは何時の話だったかな」

え、何の話ですか？ 小猫ちゃんわかんない。

「まあこうしておんぶくらいはしてやるから、それで水に流せ。海だけに!」

「全然巧くないですよ。というか、こうして貰えなかったら帰る事すら難しいのでホント反省してくれませんかね」

「水着が流されないように配慮までした俺になんとという上から視線」

「その点は有り難いですが……あ」

と、此処で重大な事実を思い出してしまった。

そらくんの意外と逞しい背中に密着していることよりも、今の今まで忘れていたとある事実に気づいてしまった。

そんな私の様子に怪訝を抱いたのか、そらくんが振り返る様な素振りで見つてくる。

「どした?」

「……そらくん、私、大変なことを思い出してしまったのですが……」

「え、なに、此処に来てシリアス?」

「私、水泳の練習に付き合ってもらっていません……！」

約束までしたのに、海に入ることなく海水浴が終わってしまった……！

そんな重要事項を夕日の沈む海を見乍ら口にしたとき、そらくんもまた絶句したような感情が、その態度に顕わとなっていた。

そんな気がする。

その後は、また来ればいいじゃん、などという取りとめの無い会話で口約束を取り付けたり、クラスメイトらが先に帰っていたり、夏休み明けの学園でどのような噂が蔓延るのかをワクワクしたりと、実に多彩に終わった海水浴。

宿泊には至りませんでした。が、そらくんとはまた随分と距離が縮んだような気がします。

これでこの先出番が少なくても安心ですよね！

「後顧の憂いも無いはずなのに、この寒気はナニ…?」

「キヤツ!?!」

ぴらり、とスカートの丈が短いメイド服の裾を捲られて、太腿からお尻に当たる部分を撫ぞられたことを実感します。

咄嗟の事で驚いてしまいましたが、しかしその感触は決して不快では無く、女性として見て貰えているという部分を知らせてくれるには充分過ぎる触れ合いでした。

悲鳴に似た声を上げつつも、その手を出した人が誰なのかを知る私は、自分でもわかるちよつと困ったような笑顔で応えます。

「もう、お掃除中ですよ、そらくん?」

「はは、悪い。見ててちよつとシタくなっちゃったからさ」

「んっ、あんっ」

彼のお尻を揉みしだく手つきに身を振らせ、箒を手にしたままです。甘い声が自分の喉から洩れました。

そのまま自然な仕草で手は胸に廻り、私の小振りなおっぱいを隠している鎖骨下からお腹の上までの白い薄手の部分を、ぐいつと引つ張って露わにしています。

そんな彼に私は依り掛かり、されるがままに顔を後ろへと傾けました。

「そらくん、いつも言ってるじゃないですかあ。先ずはキスから、つて」

「ん、そうだったよな。じゃあアーシア……」

応えてくれる彼に、目を閉じたまま自然な仕草で接吻を……、

▽  
▽  
▽

「——っという夢を見たんです」

「それを私たちに告げられましたも……」

「アーシア、アンタどんな趣味してんのよ……」

昨夜の淫夢を皆さんに語ったところ、ヴァレリーさんは困り顔で、ミッテルトさんはやや引き攣ったような表情で何とも言えない評価を下してくれました。

残るテレアさんとロツテちゃんも似たような顔ですが、問題は其処では無いのです。

「趣味がどうこうでは無く、此処からが重要なんです。そらくんはなんで私にエッチなことをしてくれないんでしょう」

「知るかあ！」

ミッテルトさん、ちよつとトーン落としてください。いきなり叫ばれるとびっくりします。

「えーと……、アーシア、ちゃん？ 元とはいえキミ、シスターじゃなかったっけ？ なんかすっごい爛れてるのはボクの気の所為？」

「爛れてるとは何ですか、私は純粋にそらくんとイチヤイチャしたいだけです」

「爛れてるよ充分……！」

ロツテちゃんが絞り出すような声で頭を抱えてしまいます。

ところで、彼女何処かで見えたような容姿なんですよね。

でも見覚えがあるはずなのに慣れない、というか……。

ツインテールが似合わないと思ってしまうのも、理由のひとつなのでしょう。普通に可愛い娘なのですけど。

「そら様もその辺りは配慮しているのではないの？　ア－シア、貴女元々此処に来た理由が理由でしょう？」

「それを慰めて貰うという名目で体験の上書をですね……」

「やだ、この娘凄い姑息……！」

色黒メガネのお姉さんテレアさんに姑息認定されてしまいました。恋する乙女は何時だつて勝負時なんです！

此処に来ることを堂々と表立てたときに、勝負下着だつてキチンと用意したんです。

男の人が脱がしやすいフロントが紐のぱんつだつて持っています！

「覚悟だつて完了してるのに、そらくんは朝帰りばかりで全然エッチしてくれません……。お蔭でフラストレーションが溜まってあんな淫夢を……」

「淫夢云うな」

もうちよつとオブラートに包め、とミツテルトさんに窘められます。

それでもエッチしたいんですけど。

そらくんと蒸し暑い畳敷きの部屋でラブラブエッチしたいんですけど。

あーあ、ここが彼の住んでるアパートだったらなあ……。……。

「……あの、ア－シアちゃん、それそらさんに直接頼めばいいんじゃないんですか？」

「え、やだヴァレリーさんはしたくないですよ。男の人にそんなお願いできません……！」

「アタシらはいいいのかオイ」

如何にしてそらくんに手を出させるのか、それが重要です。

正面から攻めても中々に難攻不落、そんなイメージが彼にはあるん

ですよねえ……。

そうして本日もまた朝帰りのそらくんを出迎えて、1日が始まりま  
す。

今日は昨日とは打って変わって晴れるみたいですね。

さあて、どうやって彼をその気にさせましょうかねえ……。

▽  
▽  
▽

「マジかあ……？ まだ足りないってのかあ……」

頭を抱えて銀髪の少年が項垂れる。

此処まで付き合ってくれたドクシヤにはお察しの通り、リゼヴィム  
並びにクレオとネフレア一味が、ヴォ●デモートの弱点を探すポツ  
●ーズ（複数形）宜しくひとまとまりとなって山中にてキャンプに興  
じていた。

少年少女計4名の目前には、焚き火に炙られる『異形の怪物』の四  
肢を挽ぎ捌かれて早贄のようにされた姿が。

大体銀髪少女のグレイフィアモドキちゃん改めエレクトラちゃん  
（クレオ命名）が10分かけずに屠殺してくれたわけだが、変異を齎し  
たネフレアの【エキドナ・ドロップ托卵促す怪物の滴】で『野こうなった』大元がそ<sub>野</sub>こ<sub>棲</sub>らの  
蛙だったという事実の方がずっと思い悩ませる理由である。

人間並みに肥大した腕とか指とかが垣間見える膜張ったその『肉』  
は、果たして食しても大丈夫な代物と呼んで宜しいのであるうか、と。  
そして、リゼヴィムが懊悩しているのは、そのような凡俗な事態と  
はまた別件の理由である。

「まさか神器だけで足りねえとはなあ……」

これまで彼らの行動指針を執り図っていたユーグリットが死んだ  
ことにより、『目的』への解析技術は大幅に遅延することはリゼヴィム  
にも予測は出来ていた。

その上で、これまで纏めていた理論を基に『ひとまず』の試行を試みたところ、致命的な点が見つかってしまったのだ。

「リゼヴィム、他に伝手とかないのか？ ユーグリットさんの他の研究所とか、」

「いやあ、死んだ奴の研究所程危険な場所はねえぜ？ それを俺たちが『どう扱っていいのか』を理解できそうにない以上は、放置が適当さね。あとユーグリットくんを殺した奴が調べに来てないとも限らねえ」

「……ああ、確かに鉢合わせるのは嫌だな」

程よく焼けた手足を噛み千切るネフレアを尻目に、色んな意味で辟易とした感情を隠せそうにも無いクレオが一緒になって項垂れる。

元々、自分たちの目的は『邪龍という戦力を備えさせて英雄派並びに【禍の団】<sup>カオス・ブリゲード</sup>の戦力補充』とリゼヴィムからは耳にしているクレオ。テロリスト一派の行く末がどうなるかとあまり知ったこっちゃない彼であるが、自分の行く末だけでもなんとか確保したい将来設計であるので、出来ることなら『自分の戦力強化』に繋げたいという野心も備えていたりする。

だが、それを為そうとする前に、思いがけずに待ったがかかった。元々、リゼヴィムとユーグリットの目的は【聖杯】を使って戦力の強化を図り、近い将来に冥界現政権の盤上を引っ繰り返そうという野心でもって形成していたものである。

それも只の戦力では無い、『戦略的にも覆すことが不可能なレベル』の圧倒的な実力差を伴った戦力だ。

悪魔が悪魔らしく生きられない為、という理由を建前としてはいるが、結局のところは誰も彼もがサーゼクスを筆頭とした現魔王の率いる政権に見限られたことが面白くないのだ。

だから、先立って味方とすべき『冥界の住民』<sup>民</sup>を一切気に懸けない、テロリスト<sup>禍</sup>へと旧魔王派は転じてしまっていたのであろう。

その【我が俣】筆頭であるリゼヴィムもまた、己の我を通すための

ステータスとして判り易い【龍】、それも誰もが従えることが出来なかった【邪龍】というカテゴリーの怪物を戦力として備える。そういう予定を立てていたわけである。

しかし、

「【ドラゴン・ゲート】じゃあ契約した相手しか呼べそうにないし、貰っていたアジ・ダハーカ本体には下手な接触も難しい。【アヴェスタ】の連中も他の神話群同様、自分たちの『行く末』って奴を最後まで予定してやがるからにやあ」

「【龍】ってやつらはやっぱりそこらの怪物とランクが違うんだなあ。ネフレアが『改造』の神器を持っていても、俺が『身体を補える』性能を示しても、『因子』って奴？ それが足りないみたいだ」

先立って同盟を組めたと思っていた筈の【最強の邪龍】【クロウクルワツハ】には既に見限られてしまっていた。

その彼の伝手で得られていた、【封印されし三つ首の邪龍】の『因子』はユーグリットが所持していたので、最早この世には無いのだろう。【本体】を探そうにも、『そうするだけの戦力』が足りない現状では明らかに不可能である。

さてその上で、彼らが『戦力』として邪龍を造ろうとした際、其の為の材料が明らかに足りないことに行き着いてしまった。

要するに、『魂がこの場に無い』のだ。

「【オ里昂<sup>冥界</sup>】の研究結果でも無理かあ」

「むしろそっちが裏付けになっちまった。技術の大元がどうなっていたかは知らないけど、好き勝手に弄る以前の『素体』がどうしたって必要な実験らしかったし。……かといって、楽に接触できるドラゴンとか知らねえよ……」

技術には原点がある。

冥界で且つてあった『眷属改造の技術』である【グレイテストオリ



オン」もまたその例に漏れず、発想なり発見なり発明なり、他人から要求を得るだけに相応しい『技術の上限』があったはずなのだ。

しかし、其処にまで至ることが出来ず、妥協を重ねて使い易い再現し易い方向へと、研究の指標水準が低下してゆくこともまた珍しくない。

ちなみに、彼らが言っている『龍の因子』として実はトウワイス・クリティカル「龍の手」という十把一絡げレベルの低性能神器の所持者がカオス・ブリゲード「禍の団」内の『英雄派』内に居たりするのだが、その点に関しては見事にスルーされているご様子。

実際のところ、彼らは数が多くある時点で他のドラゴン種とはまた別種の因子を備えており、ドラゴニユートとリザードマンくらいの差異があるのでは、と筆者は見るのだがどうか。

「よっし、そんならなんか神話勢が緩い日本でさがそうぜ！ 八首の龍とかっているらしいじゃん？」

「お言葉ですが、八岐大蛇は龍では無く蛇です。どちらかと云えば九頭竜が宜しいかと。まああちらはあちらで祀られておりますが」

「あ、じゃあ駄目だ。流石に祀られてるモノを引っ張り出すには目立ちすぎる」

空気を換える意味合いで声を張ったりゼヴィムだったが、エレクトラに駄目出しを喰らい、更に付け加えられたトリビアがクレオに待ったをかけていた。

実のところ、原作ではその『悪目立ちする行為』を英雄派が率先して執り（未来予知）、更に日本神話勢が一切反応を見せなかった体たらくという『実績』も既にあるのだが（悪魔の仕事）、その辺りの事情を知らないクレオ君にとってはその選択は常識としては実に一般的なモノの観方でもあった。

お蔭様で、この世界線上に置いてのバタフライエフェクトが起こったことは作者との秘密だぞ、みんな！

「討伐されて封印もされてないくらい放置された過去がある、となるとやっぱり『邪龍』が筆頭になるのよな。中国の邪龍は沢山いるぞー、キョウコウとかー、ソウリユウとかー。ちなみにインドのヴリトラって奴はアジダハーカと団体だ！」

「あれ？ そうなの？」

「ちなみに中華系も今は帝釈天が見張ってるってもっぱらの噂だぜ。仕事しすぎだよインドラちんー、柴又ならわかんだけどなー」

「……あれ？ タイシヤクテンって、確か『英雄派』のスポンサーじゃなかったっけ？」

とりゼヴィムの講釈の中で、流石に悪魔側へと漏らすわけには行かない情報を持っていたクレオが心の中で疑問符を掲げる。

仏法に帰依した帝釈天がインドではインドラという雷神であった事実は良く知られており、其れゆえかは知らないがこの世界では中華系の色んな分野に手を伸ばしているらしい。

しかし闘将神仏である彼が十指に入る実力者として数えられることは認められるとしても、出身と起源が似通って古いがその実績には不安しかない梵天が入ることは何故なのか。いやインド神話上最高神らしいから含まれても問題はなさそうだが、それ持つてくるくらいなら立川在住のお兄さん☆らを導入した方がずつとマシでは無いのだろうか。等と、老婆心ながら余計なお世話を働かせて戴く。

ちなみに帝釈天は確かに原作でもこちらでも英雄派を裏から支持しているが、其れも此れも全て聖書の陣営が目障りである弊害なので仕方がない。表立って言えないのも嫌がらせ改め策のひとつなのだろう。きつと。

「……うっし、北欧行こう！ 実はルーラヴァーダもちよいと睨み利かせてるけど、オーデインのジツサマもこえーけど、討伐されたけど放置されてる上に封印してる奴も今のところ見当たらないドラゴンに心当たりがある！」

「なんで最初にその二柱の名前挙げた……！ 不安しか湧かない

わ、ホントに大丈夫か……!？」

「あそこにはロキつつう奴もいるからな、神話群の隙は幾らでもある」

ついでにフエンリルでも都合つけて貰おうぜー、と呑気なことを話しつつ、程よく焼けた怪物の手足を齧る。

地球へ赴く前のサ●ヤ人宜しく、野趣溢れる肉の味付けには塩気が少々足りなかった。

▽  
▽  
▽

さて、一方こちらはリゼヴィムらの会話内にも出て来た、十把一絡げの大して希少価値も無い神器を備えた人物の棲み処である。

そんな十把一絡げ以下略のジークフリートくんは、なんとか生き延びた方がいいが大幅な戦力低下に頭を抱えて唸っていた。

「……結局、生き逃れたのは3人だけか……」

「……なんで生き逃れられたのだろうねえ、僕らは……」

遠い目で、死んだはずのゲオルク・ファウストが空を見上げる。

デイメンション・ロスト

【絶霧】の神器を奪われ死したのであるが、命までは要らん、と【聖杯】で蘇生させられたのが真相である。命を采配したはずなのに、理由が随分と軽いのは気の所為では無い。流石烏丸。さすから！

「腕はどうだ、曹操？」

「……問題は無い、みたいだ」

同じく、肩口からごっそりと槍と腕を諸共に抉り取られた漢服の青年が、割と平然とした様子で応えていた。

しかし、問題はその『平然としていられる事実』であり、被害が甚大なはずなのに後遺症も無いぐらいの蘇生を施されて、更に奪われて

も可笑しくなかった【黄昏の聖槍】トウル・ロンギヌスも奪われることなく放置されたという事実。

一番被害を蒙っていても可笑しくなかったはずのリーダーが一番無傷である点が、今回の襲撃の『最大の致命点』を露わとしているのは間違いが無かった。

まあ、結局烏丸を襲撃した事実がそもそもの致命傷っぽいが。

「整理するぞ。ジャンヌは逃走、俺たちに会いに来ない点から見ても、もう【禍の団】カオス・ブリゲードは抜けたと思っただ方が良からう。抜けられて痛手を蒙ったのは確かだが、報復に動かすだけの戦力も余裕も無い。とりあえず、次に会った時には敵と見做すだけで良いと思う」

「異議なし。まあ、彼女だつてこういう世界で生きてる以上は甘えもないだろうしね。それでももう一度仲間に、とか口にしてきた時には容赦する必要はないと思うよ」

シビアだが重要なことを摩り合わせるゲオルクとジーク。

曹操は異論を備えている節も見受けられるが、現状の発言権は『一回瀕死に成った』以上彼には無い。

それというのも、彼の『甘い見通し』の所為で『そういう事態』があったのだから、彼は決定権を備えられない【現状お飾りの頭目】という立場に甘んじるしかないのだろう。

負け犬の遠吠え、とはよく慣用句に顕わとなるが実際の処、負けた時には次に勝つまで鳴くことも許可されないのが世の常である。

「ヘラクレスは死亡。流石にアイツが自分から意図して殺した奴までは復活は許されていなかった。……蘇生の可能性がある時点で異常だな。悪魔転生でもないのに……」

「遺品とかは無いの？」

「……肉片も残さずに微塵にされたんだぞ……？」

「ごめん……」

青い顔でその時の状況を思い返すジークに、同じように俯くゲオルク。

それにしたってなんであそこまでやる必要が、とはジークの内心であった。

「と、いうわけで。現状禁手に至っている使い手を戦力として見れば、……俺と曹操くらいしか居ない。レオナルドも近いのだが、まだかかるだろうし……ヤバいな、このままじゃ旧魔王派に発言権を持つていかれるぞ」

自分たちの身を守るためとはいえ、旧魔王派の主力であったユーグリットの居場所を烏丸へ伝えてしまった事実は実に痛い。

旧魔王に連れられてテロリストに与した多数の悪魔であるが、彼らは旧魔王という冥界を手中にするだけの正当性があつたことに惹かれて戦力として加担していた。

しかし、旧魔王が軒並み鴨撃ちとされて、唯一のリゼヴィムは行方が知れず、生き残りを率いていたユーグリットも死亡。

それでも現魔王派閥に戻ろうとすれば冥界で居場所が無いのは確定だろうし、このままテロリストとして敢行するほか逝き手は無い。……『勝ち目』とすらも言えないのが、実に憐れだ。

そんな彼らであるが、英雄派と連携を取った点は首の皮で繋がっていることとほぼ同意でしか無かった。

だが、其処で起こった英雄派の裏切りとも呼べる『ユーグリットの死』。

加えて、『戦力の低下』は彼らへの抑止力足り得ない事実にも繋が

る。  
いや、先に挙げられたレオナルドの神器である【アナイレインション・メーカー魔獣創造】を  
使えば、名の通り戦力足る『魔獣』を数多く輩出できるだろう。

しかしそれが直接戦力になるからと言って、本当に思う通りに動くとは限らない。

何より、使い手であるレオナルド本人はまだ子供であり、戦力の運

用を明確に采配出来るかと云えば無理としか思えず、そんな彼を旧魔王派の者たちが一端の将と同等と見るかどうかなどは一目瞭然であった。戦争は（指示できる人の）数だよ兄貴！ まあ質も大事なのだ。

カオス・ブリゲード【禍の団】全体の主力が減っている現状では、数に合わせて戦略を立てるだけの実力が無いことと一緒にである。

表立って討伐すべき対象を『聖書陣営』としているお蔭で、まだ他神話勢よりスポンサーが在るので生き延びられているのだが、このままではその陰ながらの援助すらも打ち切られる予感がひしひしとしていた。

「……いつそヘクセン・ナハトにも援助を申し出ようか……？」

「え、嫌だぞ俺は」

「選り好みしていられる立場か、曹操」

ゲオルクの言に、真つ先に否定の意を示す曹操であったが、ジークのにもべもない言葉で一蹴される。

説明しよう！ 【魔女の夜】とは!?

Wikiでググっても碌な情報が出てこない、はぐれ魔法使いの集団のことである！

ゲオルクも元は別の魔術師集団に属していたが、こうしてはぐれた立場に居る以上は彼らと同等。故に、数を揃えようと云うのならば依り相応の集団を選別しなくては話も持って逝けないという事情なのだろう。

「絶対嫌だ……。あの紫BBAを頼るとか、絶対に弱みを握られる……！」  
俺の事を見る目が異常なんだぞ、食肉植物に捕まった羽虫を見る目と同じように恍惚とした貌で眺めてくる……！」

「き、気に入られてるんだよきつと」

「声震えてるじゃないか……！」

そんな【魔女の夜】の現首領であるヴァルブルガに碌なイメージを持つていない曹操が、声を震わせ必死で拒否する。

しかし現実是非情であり、彼らにこれ以外に生き延びる道が今のところ提示されていないのは事実でもある。

「曹操、諦めろ」

「嫌だあー……っ！」

都市伝説扱いされた首領魔女……、一体ナニモノなのだ……！

——尚、烏丸は【魔女】という言葉にトラウマに近い忌避感を抱いているので、名乗った時点で今迄のどの『やられ役』よりもずっと手酷い最期を迎えること間違いなしである。具体的に言うならば『容赦も手加減もせず』に『正面から堂々』と『動かなくなる』まで『死ななくなる』まで『延々』と『殺し続け』られる。逃げてー、ヴァルブルガさん今すぐ逃げてえー！

▽  
▽  
▽

少々覚束無い足取りで、リアス・グレモリーは一晩明けてようやく自分の部屋へと戻ってこることが出来た。

いや、戻る事だけは簡単に出来たのだが、戻りたくなかった、と云う方が明確かもしれない。

途中で買った真新しい服を自然な動作で脱ぎ去り、そう言えば下着を着ることを忘れていた、と服の直ぐ下が素肌であった事実を改めて思い至る。

だが、誰も残っていない自室で全裸となり、服と一緒に購入した<sup>フレアブレス</sup>除臭剤を一頻りベッドの上へと吹きかけると、エアコンを最大にして件のベッドへと座り込み、ようやく人心地付くことが出来た。

そうして、——余韻に浸る。

「~~~~っ、ふ、ふふっ、んふふっ」

身を抱いて貰った感触を、彼の腕が撫ぜた肌の火照りを、雄の胸板に締め付けられた自身の膨らみに移った残り香を。

記憶に刻まれたそれらを思い起こすたびに、自然と頬が緩む。

自分が、ずっと求めていた相手に愛して貰ったという事実にも、何もかもが柵が全てどうでもよくなってしまったような、そんな多幸感が彼女の脳を支配する。

要するに、恋が実って浮かれていたわけである。この女は。

「はぁんっ、あぁ、もうっ、大好きっ！」

そして、リアスにはそれ以上に悦ぶべき、確信があった。

イツセーがその若い衝動に任せて押し付けるように腰を振ったのに対して、烏丸の場合は浸み込むように一体となった感触を味わえた。

痛みに対する、それ以上の快感。

更に、イツセーの時には胎に届いていなかった絶頂が、烏丸の時には子宮の奥にまで届き脳髄をも痺れさせたという実感。

ひよっとすれば、妊娠したかもしれない。

それも、イツセーの痕跡を掻き消すようなあの衝撃が在ればこそその確信だった。

だが、ドロドロに自身を掻き巻く雌の歓びとは別に、逆に理性的な女としてのリアスが脳の奥で警鐘を鳴らす。

このままで良いのか、と。

自分の事情を片付けない限り、彼の証をそのまま残すことなど絶対に出来ない、と。

暫くベッドの上でゴロゴロと余韻に浸っていたリアスであったが、徐に起き上がるとケータイを手に取った。

短縮ダイヤルで、一番信頼できる『彼女』へ。

「――あ、もしもし朱乃？ イツセーは？ ……、そう、祐斗に預け



たのね。丁度いいわ、相談に乗ってくれるかしら？」

胎を撫でながら、リアスは聖母も斯くやとも取れる母性溢れる笑みを浮かべる。

だがそれは同時に女として何かを決意した、または、目標を狙い撃つかのような狩猟人種特有の鋭意な哄笑。

リアス・グレモリーの躍進は、今から始まる――。

☆「よーしお兄さんがんばつちやうぞお」

「——くん、そらくん、起きてくださーい……」

微睡みの中、身体を揺するささやかな振動と幼子のような声音が己を苛む。

それは決して不快に感じるものでは無く、しかしそれでも、納まっている眠りの誘惑に浸ったままでいたいという欲望が、どうしたって俺の意識を水底へと引き摺り込むのだ。

睡魔とはよく言ったモノで、中々起動を良しとさせない欲求は確かに、魔性のモノに類似性が高い。

端的に言うなら、朝方眠くて仕方がないのは誰しも同じ。はいロンパ。

「アーシア、そんなんじや起きないでしょ。見てな」

……ミツテルトの声？

「起きなくつちや、イタズラしちやう、ぞつ」

「つこ!？」

脇い!?

嬉々としたミツテルトの呼びかけと共に、脇腹をぎゅるりと抉り込むようなレバロー。

イタズラってレベルじゃねえ、コイツ確実に殺す気だ……!!

「ま、こんなんでも簡単にやれないんだけどねえ」

「ダメージゼロでも痛くないわけじゃねえんだぞ……!?!」

魔力強化が出来ない代わりか、俺は素で人より若干肉体補強が高

い。

修行の成果とも呼べるけど、筋肉の密度が女子程度の攻撃だと内臓まで衝撃を伝ええないという無駄性能。それでも鞭打なら普通に痛いし、そもそも死なない人間ってわけでもないから最低限配慮くらいは欲しいでござる。

五感を意図的にカットできるとはいえ、無効にまで引き上げるのは危機意識の観点から『やりたくない』って意識の方が強いし……。

と、文句を抱えたまま顔を上げて見れば、バニーガール姿のふたりが目飛び込んだ。

——バニーである。

「……え、なに此処、天国？」

「ゲ、なんか烏丸の反応が好印象過ぎてキモイ」

「やったあ！」

もう一度言うが、顰めた貌のミッテルトに、俺の反応に歓びの声を上げ小さく飛び跳ねたアシアもバニーである。

ミッテルトはウサ耳やレオタードなんかの基本色は黄色で、白い燕尾服に蝶ネクタイを付け網タイツにハイヒールも穿いた結構本格仕様の格好だ。

胸部装甲の薄さや手足の特に太腿の細さがバニーガール特有のむっちりとした魅力を感じさせないが、それはそれで若さを推し出す活発さが彼女特有の魅力を惜しげも無く披露しているように見える。うん、改めて俺口りもイケるな。

対してアシアはピンク系でウサ耳とレオタードオンリー。

タイツと靴も履かず素足を晒したまま燕尾服も着ておらず、胸元肩口二の腕鎖骨に生脚晒して無防備さが凄い。

それでいて胸元はぴっちりとしたバニースーツの効果なのか、胸が押し上げられていてポリユミー。

見た目ならばミッテルトよりもずっと『ある』。というか、最初に会った時よりもちよつと育ってる感じがしなくも無い。やだ、著しい

娘……ッ。

そんなアーシアが、ぴよこんと俺のベッドの上へと跳び乗ってきていた。

「えへへ、それじゃあそらくん、朝のご奉仕しますね?」

「待て。毎朝させてるみたいなニュアンスで、」

「つう、わあ……、おつきい……」

止める間もなく、俺の股間に顔を埋めてくる富んだ痴女が此処に居た。

舌先で裏筋を舐め沿って、亀頭へ口付けして鈴口を窄んだ口で啜えるアーシアさん。

ふええ、テクニックが上達してるよお……。

「うわ………どんだけ期待してんのよ、アンタ……」

「違うし、これは単なる生理現象だし」

朝勃ちでおつきくなった俺の息子を愛おしそうにハムハムするアーシアはともかく、ミッテルトは引く仕草で見下している。

だけど、その目がガッツリ視線を動かさないのは何でなのかなあ?

つうか説明して? 朝から何のサービスだ。

「ミッテルトさんミッテルトさん、イツセーさんのより太くて長いですよ」

「それアタシに云われても困るんだけど………つかどうやるの?」

「こうして裏側からですね……、歯を立てないように、舌を伸ばして……」

「ほほう……」

可笑しい、文脈の前後が繋がってない。

ほほうじゃねーよ、参戦するのかよミッテルトさん。

正統派ロリバニーさんと明け透けエロバニーさんが揃って俺の股間に顔を埋め始める。

アジアが兵藤先輩のをいつ見たのかは察したが、男の子を比べるとか止めてあげてください。

あとバニーは視覚で愉しみたいなあ。いいよねウサギさん、お兄さん大好きいいい！

「あ、もう始めちゃってました？」

「……緑も良いなあ」

「あ、ありがとうございます……」

はにかむような声音で恥ずかしがるような仕草で、俺の第一声に身を振らせるヴァレリーが部屋へと入って来た。

こちらも正統派だが、ミツテルトとの違いはそこに肉があるところ。

日本の食事がお気に召したのか、食生活がアジアの手によって改善されたのか、程よく肉付きが良くなってきたヴァレリーの胸と太腿がバニーさんらしさを適度に加速させる。

彼女も細い方だが、彼女の場合は幽閉紛いの日常が成長不全を引き起こしていた感がどうしたって否めない。

中世なんかの出来の悪いタイプの王族なんかは、見栄を張るのに体調なんて二の次だ、とかいうのは平然とあつたらしいし、貴族文化を外間重視で眺めている異種族系社会集団なんかがいるのも事実だし、吸血鬼の文化もその辺り微妙に信用がならないんだよなあ。

まあ、其処から抜けたから今更か。

今はとりあえず、ヴァレリーのバニーを目の保養にしておこう。

「で、なんでまたそんな恰好？」

第一声で思いっきり内心が漏れたのはさておき、尽きない疑問にとりあえず応えて欲しい。

ヴァレリーの砂色ブロンドヘアに緑のウサ耳は似合ってなくも無いが、とりあえず彼女の少々跳ねるような癖っ気の髪ではネコミミの方が映えそうなのは気の所為だろうか、という部分も一先ずスルーだ。

実はあまり大きくない年上のお姉さん、という微妙にニツチな彼女は、アジアと比べてワンカップ程度しか上では無い胸の前で手を併せつつ、覗う様な目線をこちらへと向けていた。

「えーと、ですね、そらさんはここのところ、ずっと朝帰りでは無いですか」

「まあ、うん。色々やる事があってね……」

あれ、おかしいな。

別段悪いことをしてきたわけではないのだけど、なんか心苦しいぞ。

見上げる視線のヴァレリーから、微妙に目線だけが横滑る。不思議。

「はい。それでお疲れのそらさんを労おうとこの通り、元聖女の皆様の働いているお仕事先からサイズの合う衣裳を流してもらいました。コンパニオン、というのですよね？」

「うん、コンパニオンは性的なことをしてくれる出張サービスと違うけどな」

「あ。あの方たちのお仕事先はキッチンと健全なお仕事らしいので、廻して戴いたこの衣裳も清潔なモノですからご安心してくださいね」

と、笑顔で妙に気の利いた科白を口にするヴァレリー。

うん。お前、其処の処もきっちり把握してるね？

『疲れを労う』が『性的サービス』で決定されてるね？

使い古して廻されてきたのかどうかは知らんが、どこぞの脂ぎったおっさんの体液で薄汚れた衣裳では無いというのなら問題は無いけ

どきあ。

……公衆便所、つて響きでいきり立つほど薄汚れてるわけじゃ無いしね、俺も。

「ロツテとテレアは？」

「辞退して貰いました。丁度良い割合でご奉仕すべきかと」

「割合」

「そらさんつて、とりあえず私<sup>女性</sup>たちを気持ち良くさせよう、つて心持ちでセックスしますよね？ 疲れず気分よく、と考えたら、一先ず1:3で持て成して丁度なのでは、と思ひまして」

アーシア（グレモリー眷属）の手前晒せない本名を振<sup>もじ</sup>ったデビルーク星人（仮）の居場所を問えば、にっこにこと先程から変わらぬ笑顔で応えるヴァレリー。

……無駄に俺の事把握されてる。

裏打ちの無い笑顔に何やら空恐ろしい気配を垣間見た気がするわ……。

▽  
▽  
▽

ふっふっふっ！と鼻息荒く、少年が少女に跨って止め処なく腰を打ち付ける。

突き上げる度にたぶんだぶんと揺れる、少女の胸元の程好いふくらみが少年の腰つきを依り強く奮起させ、付け根から千切れるんじゃないかと思わせんばかりへと、乳房の躍動は激しくなつてゆく。

やや乱暴にも見えるその行為を受ける少女は一切の衣服を剥ぎ取られたまま、苦悶に似た顔つきで少年の強引なそれを受け入れていた。

あっあっあっ、とりズムに襲われるままに声を上げているが、その目は堪えるように閉じたまま、時折身を振<sup>よじ</sup>る様な声を上げてもいる。

その様は、少年を飽きさせないように自身に縛りつけている、雌螳螂のような連想を傍目を感じさせても居る。

「くおっ、いくっ、またいくぞっ、祐斗おっ！」

「んあっ、きてっ、いいよおっ、イツセーくうんっ！」

ネタばらしが早い、このふたりはグレモリー眷属のホモカップルである。

祐斗が美少女へと女体化して無駄に育った巨乳をイツセーへ晒している、その点を除けば真相が随分と酷いのだが、傍目にはトランスセックスをこよなく愛する変態志向の方々の為にもご用意されたちよいとしたお楽しみ描写なのだが、裏方の詳細はこの辺で割愛とする。

祐斗の腰を掴まえて、子宮に届けと云わんばかりに膣内出しを囓ます兵藤イツセー。

相手が本来男性である、という事実は、彼の中には既に無いのかもしれない。

あと避妊とか。

セミロングの金髪巨乳美少女に変貌した祐斗が、ベッドの Springs が軋むのもお構いなしに自分へ押し掛かる親友を優しく抱き返す。

此れでもう何度目かも判らないセックスだが、祐斗の思惑通りに順調に自身から離れられなくなっているようだ、とイツセーに見えない内心でほくそ笑んでいた。

自分の部屋へと転がり込んで来た彼が、リアスの元からも追い出された経緯は兎に角聞いたが、其処で「それなら、部長が離れられないようなテクニクを身に附けたらいいんじゃないかな」と【練習台】を申し出たことはチェックメイトにも似た感覚であった。

実際の処、イツセーのセックスは完全に独り善がり、自分が気持ち良くなったらこの通り直ぐに動かなくなる。

其処を指摘することも無く、祐斗は乱暴で強引な種付けを平気で受け入れていた。

元より悪魔は着床率が悪い。

其処でもしも自分が懐妊したとしても、それはそれでイツセーが絶



対に離れられなくなることに繋がるのだから、とされるがままの祐斗である。

そこで、もう復活したのかガバツとイツセーが起き上がった。

「祐斗、ちよつと考えたんだけど、こーういふのってどうかな」

「え、なにを、」

『Boost!』

「そしてえー!」

『Transfer!』

佑斗が止める間もなく、赤龍帝の籠手を顕現させたイツセーが倍化を行使し、その力を自身の股間へと譲渡した。

近年稀に見る最低の神器使用、実例であった。

「おお、どうだ祐斗、俺のムスコは……」

「……すつごく、おつきいです……」

今出したばかりだというのに、ギンギンに勃起しているイツセーのイツセー。

それもこれも、祐斗の美少女スタイルが魅力的過ぎる所為かもしれない。

若しくは、ドラゴンとしての絶倫的な資質がイツセーにも備わり始めたのか。

こんなところで修行の成果が表れるとは、其の修行に付き合った流石のタンニーン龍王も咽び啼く。

長さ太さは「倍化」の「譲渡」で見事に普段の式倍になり、目測で縦に14cm横に6cm程。

ぶら下がっている玉袋はパンパンに膨らんでおり、先走る汁は今にも暴発しそうだと自己主張する。

比較対象が祐斗には自分以外居ないので、硬く反り勃ったソレが意識的に誇張して認識されてしまったていた。

「こ、コレで突いたらどうなっちゃうのかな、どうなっちゃうのかな!?」

「い、イツセーくん、とりあえず落ち着いて、逃げないから、ね」  
逃げる気はないが、これまでで充分に拡がっていた祐斗の膣内を更

に無理に押し退けようとする行為だ。

今までも快感というよりは痛みの方がずっと割合が多かったのに、更に痛くなる予感しかせずに及び腰にならざるを得ない祐斗。

要求され胸で挟むこともシテいたこともあり、見た目だけならば普段の倍になっているソレを男子の感性が残っているまままで受け止められるとはとても覗えない。

しかし鼻息荒く、初めてマスターベーションを覚えたニホンザルのように、イツセーの頭にはもうセックスしか残ってない。

結局この後も無茶苦茶セックスした――。

▽  
▽  
▽

「――というわけで、イツセーに責任を取らせようかと思って」

「……リアス、あなたって人は……」

能天気、というよりはとてつもなく低俗な策を弄したりアス・グレモリーに、私ワタクシ姫島朱乃は頭痛が酷くなるのを実感していました。

兵藤くんにも問題はありますけど、この子の言っていることの重大さがどれほどのモノか、この娘自身理解しきれてないのではないかしら、と不安になります。

――リアス曰く、兵藤君をグレモリー家の入り婿、つまり自分の旦那に据えよう、と。

この子が好き好んだ相手と寄り添えるのならば、私としても異論なく祝福できます。

けれど、兵藤君をそうして無理矢理自分の家格に組み込もうというその策の、本当の目的が……。

「……『その子』が自分の子では無い、と後になって知った時の彼に、何と云うつもりですの……？」

「あら、イツセーには祐斗がいるのだし、大丈夫じゃないかしら？」

リアスの胎を指して進言する忠告を、さらりと流す彼女。

ああ、この子は自分を裏切った兵藤君を赦す気はなく、『自分の幸せ』を例え性別に不備が在ろうと推し進める佑斗君も切り捨てることも無く、強欲に纏めてしまおうとしている。

そのために必要な『モノ』と、なるべくして得た『モノ』が同一であった為に、彼女が此処まで堕ちてしまったことが実に見るに堪えなかった。

その話になったそもそもの始まりは、リアスが妊娠したかもしれない、などと戯言をほざいたことでした。

しかも、烏丸くんの子を。

どういう経緯でそうなったのかも一応聞いたが、それにしたって自覚するまで早すぎるのでは、とも思います。

想像妊娠だと疑っても許されるレベルの妄言ですが、彼女は出来たことを確信していましたわ。

知つての通り、悪魔は着床率が随分と低く、子供が出来るのは喜ばしいことです。

しかし、それを為したのが【魔王の妹】で【貴族の娘】、しかも相手が【人間】であるという事実は、流星に見過ごすことが出来ない前提でもありました。

根本的に、神や悪魔なんかは人間の事を見下しています。

流星に天使は表立って『そういう目』を露わにしたりはしませんが、良い目を向けていない事もまた事実。

そんな状況下で、人間との相の子を好意的な立場で育成できるかと問えば、不可能と呼ぶ方がしつくりと来ます。

……そういえば、現白龍皇もまた人間と悪魔のハーフだと耳にした記憶が……。

彼を見るに（あの鎧では中身の性別など不明ですが、おそらくは『彼』でしょう）テロリストにまで与したご様子ですし、やはり正体を知られてどんな未来が待っているのか、想像に難くありませんわね。

話を戻しますが、そんな冥界での悪魔の貴族たちの意識状況では、リアスが人間と結婚するということは生物学的なレベルで有りえない

事象だと認識されるでしょう。

その点を例えば烏丸くんへと抗議した結果、滅びるのが冥界の方っぽい懸念はさて置きまして、どの側面からも認知されない事実なのは確かですわ。

そんな状況で、着床率が頗る悪い悪魔のそれも貴族の娘に懐妊の兆しが顕れる、という事実は父親がどうであれ社会としては喜ばしい事。

その事実を逆手にとって、リアスはその【子】を墮胎させようという意見を予め排除するためにも、子の父親は『一応は悪魔』である自分の眷属の兵藤君だ、と正式に『家』へと知らせを出そうとしていたのです。

……改めて鑑みると本当に碌でもない案ですわね。

「イツセーには寝込みを襲われて、この『子』には罪なんてないから産んで育てる。そういうシナリオで宜しくね？」

「……………決定事項、ですの？」

「だって、そうでもしないとこの子を守れやしないわ。それに、イツセーにはきつちり行為に及んだという実績もあるのだし、あの子をこの先繋いでおくには此れが一番じゃないかしら？」

そういえば忘れそうになっていましたけれど、兵藤君は【赤龍帝】というドラゴンの封じられている存在でしたわよね。

ドラゴンの因果が数々の事件を引き寄せている感がありますけれど、先の事件の数々が彼を強く育てることはほとんどありませんでした。

一朝一夕に強くなるのがどのような人物にも難しいことだといえ、今年悪魔に転生したばかりの彼がこの先強くなれないまま、と見るには流石に無理がありますし。

そんな彼を悪魔として確保できたことは、社会としては僥倖な事実となった筈。

長い目で成長を待つこともまた、兵藤君をグレモリーに繋ぐ意味合

いに含まれているのかもしれない。

しかし、此処で問題が一つ。

「生まれてくる子にも依りますけれど、成長すればいくらなんでも見た目で判つてしまう可能性がありますわよ……？」

「そうなったときの為に朱乃にも声をかけたんじゃないの。最低でも、イツセーが父親だ、っていう証言だけでも問題無いわ。大事なものは第三者に当る立場の声が在る事だから」

「勉強しなさいとは言つたけれど、こんな計画を立証するためにしろと云つたつもりはありませんわよ……！」

本当の問題は、無論そこでは無く。

——子供を作れとグレイファイア様から命じられているのが、他でもない私だという事実です……！

此処でリアスが懐妊したことがグレイファイア様に発覚すれば、私は何をしていいのか、と責め立てられること間違いないですわ……！

「リアス、とりあえず、その通達はもう少し時間を置いてから報告しましょう。余りにも早すぎると、流石に本当に着床しているのかどうか疑わしいですわ」

「そうかしら。私は今なんだかすつぱいものが食べたいのだけど」

「気が早いにも程がありますわよ」

これは、なんとしても私が妊娠しないとイケませんわね……！

いい加減、烏丸くんにも本気になって貰わないと……！

というか、私普通に男子からの人気も高いはずなのに、どうして彼は振り向かないのですか!?

そつちの趣味ですか!?

ロリでコンのお人ですか!?

リアスを抱いた以上は、ホント今度こそ抱いて貰いますわよ……つ!?

☆「考えて見れば遠慮なんてする必要なかった」

「なんか呼ばれたので、いつかい帰ることになりました」

朝食の席で、アーシアが言い出したそんな言葉に一同の時間がやや止まる。

そうか。

騒動が無いことは嫌では無いが、静かならば静かで微妙に疑わしい矢荷成荘。様子見も兼ねて、俺も一回帰宅した方が良くかもしれん。

「……え、大丈夫なの、アーシアちゃん？」

「まあ、ひとまずは。お父様やお母様にお願いされてしまいましたし、戻らざるを得ないのが本当の処なのですが」

ロツテの疑問に苦笑染みた微笑みで返すアーシア。

実際の処、兵藤先輩にどうこうされた辛さから逃げた、というより、この娘『犯人の親御さん』と同居することに当たっての居辛さから逃れて来た、つてというのが真相だからなあ。

内情把握何ぞ容易い。そうでなけりやバニーに扮してご奉仕とかせんだらうよ。

バニー三昧の休日から明けて二日目の事。

グレモリー側でも話が着いたのか、直接教会に足を運ぶわけにもいかなかったであろうご本人らの姿は無くも、使い魔かと思われる蝙蝠が運んできた手紙で招集令を降されたようである。

わざわざ夏の日中に蝙蝠飛ばさずとも、単純に電報でも打てば良いのではと思うのは俺だけだろうか。

「イツセーさんのご両親にはリアス部長が魔術で話をつけたそうです、でイツセーさんですが、……なにか、こう、暫くはエツチなことを考えられないような被害？を受けているらしく、大丈夫だとか」

「ナニがあつたのよ」

「わかりません。部長からの手紙にも、『股間を抑えて死にそうな顔になって』としか。お医者様に見せるそうなので、本当に未知の事態が起こったみたいですよ」

後から知ったが、未熟な状態で【倍加】とかの神器使用を変なところに行使したらしく、その反動で強化した箇所が激痛と収縮と熱とかを伴つてのたうち回っていたらしい。

一体何処に使用したんですかねえ……。

要領を得ないアジアの返答に同じく小首を捻っているミッテルトだが、こんな平然とした様子のロリ系ギャルが一昨日にはバニーで添い寝までしていたのだから、世の中何が起こるかわかったモノでは無いことは確かである。

尚、ごわごわして寝難かつたらしく、夜中の内に寝惚けて脱ぎ散らかされたバニースーツは計3着。

全裸少女3名に重ねられて眠ることは我が家の簡易ベッドには荷が重すぎたのか、昨日拉げてご臨終となり遊ばれた。500キロまで大丈夫とかつて話だったのに、アウトレットはホント信用ならない（偏見）。

「とりあえず、ご両親に顔を出してあちらの懸念を解消してよいかと。流石にイツセイさんを勘当させたままというのも、ちよつと心苦しいですよ」

「常識的に考えりやそうされても仕方ない事やらかしたんだし、ほつときやいいのよアジアは」

「いえ、ご家族と一緒に暮らせないのは、やっぱり寂しいですよ」

ミッテルトの言葉にそう返すアジア。

こうしていると普通にイイ子なのに、なんで夜はああなんだろう  
か。

「なので、そらくんともこれから一緒に暮らしたいので、ちゃんとお話してきます。やっぱり家族は一緒にが一番ですよね」

「え、それ俺にも適用されるの?」

思わず口にしていたら、ミッテルトに唇を見るような目で見下された。俺の内心も察せられているらしい。

他の奴は半笑いだが、呆れていると言っても過言では無いかもしれない。

「烏丸、アンタもうほんと責任とんなさいよ」

「金は払ったけど」

「そうじゃなくて。つーか、ここまでアシアに好かれててナニが嫌だったの? アタシが云うのもなんだけど、こんなイイ子そうそう居ないわよ?」

「嫌とかそういう問題じゃなくて、俺根本的にしばらくしたら元の所に帰るしなあ……」

「その時はついていきますから大丈夫ですよ」

えー……、と口を挟んでくる科白に覇気のない声が思わず漏れる。拒否られてもぐいぐい来るアシアにさらりと亭主関白宣言に似た何かを明言されてしまうのだが、やはり辟易とした気分は晴れそうにもない。

駒王町以外の土地程度の認識かもしれないが、ぶっちゃけ異世界までついてこれるのかこの娘? という点もさることながら、地元嫁さんがいる俺にとっては危ういことこの上ない未来予測に本気ダツシユを取らざるを得なくなりそう。

……マジでついてこられたら俺の死しか覗えない。特に嫁さんからの目で俺のところがしぬ。まああの人はそのようになるのも仕方ないとは思うけれどさあ。

逆に愛人状態の皆様知られたら包囲網が完成する。今でも充分過剰なのに、これ以上取り囲まれればどんな絶倫でも枯れるんじゃない



いかと。もう2・3人削れても良いんじゃないかなあ。

……つーかあれ？ アーシアに俺、嫁さんいること言ってたかったつけ……？

「とりあえず、アーシア。兵藤先輩が疲労だか病気だかで弱ってるって話なんだから、更に気を削るような事を告げるのは止めてやれよ。襲うくらい好かれてるんだし、そんな弱つてるところで衝撃の告白されたら、それこそ今後その家族にお世話になれなくなるだろ」  
「アーシアが兵藤家に寄生してるみたいな言い方止めなさいよアンタ」

ん？ いや、其処のご家族がアーシアの事を実の娘みたいに可愛がってるって聞いたから、嫁入りまでは面倒見せて貰うのが孝行になるんじゃないかな、って思ったんだけど。

云い方悪かったかな。家族の問題に関してはどうにも予測が正しく立たん。真つ当な付き合いとは無縁だったからなあ。

ところで、アーシアの元のご両親って今どこで何してんだろいな。

▽  
▽  
▽

結局、割と重要そうな問題は先送りとなり、久方振りの帰宅で悲しみが止まらない。

帰ってみたら人気自在ならず、主要メンバーが大家さんのご実家に揃って旅行に出た後だと、居残りの長老に話を伺った。盆休みか何かだろうか。

抱いていた懸念は不発に終わって晴れやかになっても良いはずなのに、いざ立てた予測が外れるとチョイと寂しい気持ちになる。

ノスタルジックな感傷を抱きつつも、その脚で新しいベッドでも見つけようかと出直そうとしたところで、姫島先輩に出くわした。

その脚で現在ラブホである。  
どうしてそうなった。

「似合うかしら……？」

「似合わないことは無いと思いますけど……」

果たしてお似合いですよ、と言って良いものか。

現在、姫島先輩の恰好は、青いラメのビニール生地でセパレートな上下のミニスカート。スカートから覗く太腿は白く眩しく、小さ目のネクタイを大きく開いた胸襟で寄せられている谷間で挟み、申し訳程度に頭の上には帽子を乗せている。

所謂、ミニスカポリス、と言って過言では無い恰好であった。

「罪状、烏丸くんはアーシアちゃんと付き合っているにも拘らず、リアスにも手を出したことにより【二股】が適用されることになります。逮捕しちやいますわよ？」

「罪状適当過ぎい……」

本当はそれどころじゃないのだけど。軽く見積もっても8股くらいになるんですけど。

そうか、この人の中ではまだその辺りなのか。

……塔城については把握してないのか？

指で拳銃を作り、撃つような仕草をウインクして見せる姫島先輩。意外とノリノリな先輩に、職業貴賤の観点とかちよいと浮かびかけた白ける話題を振ることは無く、それでも聞かなくちやいけない事を問わなくてはならない。

「で、今日は何なんすか？　こんなところまで連れ込んで」

さてはエロイことをする気ね！　少女漫画みたいに！

髪の毛に芋けんぴついてるぎます、とかやられて一日で本能寺が立っちやうのかしら。

「ですから言った通り、逮捕しちゃいますわ。リアスにも手を出されているのですし、私もいい加減に待つてるだけではいられなくなってきましたの」

そう言つてミニスカを捲り上げる先輩。

着替えのシーンを覗いていないので今知つたのだが、つるり、とした彼女のパイ●ンがやや間抜けに覗えてしまった。

……いや、本気なのは判つたけど、なんでそこで無毛なのを自信満々に晒せるわけですか……？

▽  
▽  
▽

冥界産の毛根から死滅させるなどと云う謳い文句の除毛液を使用したらしく、剃ると頭わとなりそうなぶつぶつの鳥肌も覗かせない滑らかな素股が俺の肉棒の上へと跨っている。

毛の無いことを忌避する人が日本人には割と多いらしいが、衛生面の観点からも個人的に悪い事とは思つてはいない。が、そこを好ましいと思う日本人は、特に幼女嗜好の気を疑われるらしい。甚だ遺憾である。

さておき。そんな仕様へ変貌を遂げた彼女が、こちらからはチラチラとしか覗えないようにスカートを穿いたままとはいえ、痴女を彷彿とさせるような恰好で腰を上下するのである。

これは何かありましたねえ……。

先輩の名誉の為に言つておくが、この人は恰好がアレだったり上司がアレだったり性癖に種族的トラウマを匂わせてアレな形に歪ませていたりと色々アレだが、基本的なところでは男女間の倫理をそれなりに備えたお人である。

だからこそ、其処へ一歩踏み出すことで起こるであろう事実予測に破滅願望的な被虐趣味が垣間見えてしまい、グレモリー眷属に必須で常備されているのかと疑わしくもある【残念さ】が浮き彫りになるのだ。

悪い人では無いんだよ、悪い人では。でもそれさえなけりやとつくの昔に普通にそこの男子と付き合つて、清い交際を作つていても可笑しくないと思うのに。実に残念な方々だ。

そんな彼女がこうして俺を誘う様な恰好、実際本番が始まるカウンtdownも振り切つた状況、に踏み切つているのには、やはり理由があるのだと思う。

あれかね、グレイフィアさん辺りに急かされてるのかね。

俺の子を、というより、『悪魔を孕ませられる術式』を確保するため彼女に下された命令なのだろうが、実際の処グレイフィアさんが其処まであからさまに俺の事を話しているとは思えない。

その辺りの事情を語るとすれば、芋づる式に情事にまで明かす必要も出てくるだろうし、冥界のトップの恥部になりそうな事情を『いち眷属悪魔』にまで語っているようなポカを、あの人が遣らかすとは思えないのだ。

……まあ、実際其処まで細かく考える必要は正直俺にはあんまり無いんだけど。

上着は脱ぎ捨てられ、姫島先輩の豊満な乳房を隠すモノは一切無く、申し訳程度に首に掛けた短めのネクタイが両側に聳える山のようなそれに挟まれてその身を隠すのみである。役処が実質逆だ。

グレイフィアさん、ヴェネラナさん、グレモリー先輩と『大盛りの方々』のをこれまで拝見させてもらったが、『若さ』と比例すると姫島先輩の『それ』は断トツ足り得る。

大きさがメーター越えであることもさることながら、形の良さと張り、柔らかさに美麗さと、同じく若いグレモリー先輩のモノにも引けを取らない。

彼女が腰を上下させるたびに、僅かな振動だというのにたぶつたぶつと、皿に盛り立てのプリンのように小さく弾むのである。

そう動くことが恥ずかしいのか、はたまた激しく動かれることが自重による痛みを伴ってしまうのか、むしろ前者的な理由を匂わせるような表情で、動きたびに身じろいで苦悶を漏らす。

こんな状況で『お預け』と自粛できるほど枯れてるつもりはねえっ

す。

「……っ、あ」

自負するわけではないが、馬にも後れぬ逸物は長さだけでも7寸強。

無理に貫けば胎を潰して子宮口までをもこじ開け得る。それも想像に難くなかったのだろう、反り上がっている俺の息子を凝視して、素股から一步を踏み出せそうにない姫島先輩が其処に……、……あ、これ違うな。期待した目で凝視してるわ。——この変態<sup>ド</sup>め……っ。

清楚とは何の話だったのか。

そんなことを思いもしたが、抑えつけていても鎌首を擡げる大蛇の如く、悪徳と淫蕩の象徴とも替えられる馬並みの極太を、白魚のような指先が恐々と撫でつける仕草は、やはり何処か経験の無さを覗わせる。

一応彼女が云うには彼女も初物なので、そうして清いモノを穢しているような行動を熾させることに新雪を踏み荒らすような踏破に似た性的興奮も連想してしまうのだが、やはり此処に至るまでに『摘まんだ』事実が尾を引いているのだろう。

ぶつちやけ、姫島先輩をこれから犯すという事実には、罪悪感なんて微塵も無かった。

今でこそあれだが、アーシアと初めて事を起こそうって時には、一応の申し訳なさだって持ってたのよ本当よ？

「で、どうしたいんです？ 俺は抵抗しないから、好きにやって良いですよ」

「……くっ」

『殺せ！』とか『72言ってるんだ』とか、明後日の方へ思考が逸れるのは俺だけなのだろう。

口では俺に強いられている風を装っていますけど、肉棒へ添えられた手は離すことは無いご様子。

自ら腰を浮かせて秘所に宛がい、鈴口とをぴたりと密着させていた。

「し、仕方ないですわよね、これは上から命じられたことですもの、

リアスにもアーシアちゃんにも、決して裏切る行為ではないのですわ」

「そうですねー。仕方ないですねー」

「……余裕ぶってるのも今のうちですわよ」

はいはい、そういうのいいつすから。

ジト目を向けているつもりかもしれないが、俺と見合ったその目線はこれからの破瓜を待ち望んでいることがよく覗えるくらい口元を特ににまにまとさせて、嗤うことを抑えているようにしか見えなかった。

「ん、く……っ、ふ……っ」

そうして腰を落とし、ゆっくりと肉壁を分け入って行く。

予め準備は既に終えていたのか、秘所は粘つく滴で濡れていた。

それでも、今迄無理に開かれることの無かった膣穴は、剛毅なケダモノに易々と初めての挿入を赦すことをしない。

それは彼女の性癖とはまた違う、命としての本能なのだろう。痛みを自ら受け入れようとする馬鹿は、思考を備えた生き物にしか成り得ない。

息遣いも荒くなり、それ以上進ませればもう戻れない、と身体が悲鳴を上げていることを動悸が全力で知らせている。

しかし、

「ーっ、ふっ、……ふっ、ん……あはっ♪」

膜に触れたところで、姫島朱乃は喜色に満ちた貌を晒し、

「~~~~~っつっつ!!!」

——そのままひと息に腰を落として、ブチブチブチイ! と伝導する肉を割く衝撃に、白目を剥かんばかりの顔つきで悦んだ。

その実況をするならば、それまで震えていただけの双丘が勢いと同じ時にフリーフォールを果たし、ぶるうんという擬音が覗えそうな激しさで歪に弾み、腰を落とした後もたゆったゆつと跳ねていた。ほとんど無重力おっぱい。——悪魔ってすっぱえな!

「~~~~~っ、~~~~~っ、あ……っふう……っ」

痛みが快感に変わる被虐趣味の真骨頂なのか、アへ顔になるにもう

僅か、と云わんばかりの目の剥き具合。

悲鳴を上げないように、ではなく、快感の声を早々に上げないようにという、ある種の抵抗にも思われ。

……もう隠す必要も無いんじゃないかなあ……。

「……動いてあげましようか？」

「ーっ、い、いいえ、大丈夫ですわ、烏丸くんの手は、煩わせませんもの」

先輩のやりたいようにさせていたわけだが、正直この人何をどこまで進めたいのかがちよつと良く分からない。

俺を下に置きたいのか、それとも本能に身を任せて苛めて欲しいのか。

年上としてのリードでも見せつけたいのかと初めは思ったが、単に妊娠したいだけなら先輩自身が何かする必要ってあんまりないんだよなあ。

……ひよつとして、自分でもやりたいことが整理ついてないんじゃないのか……？

▽  
▽  
▽

「……これは、もう絶望的かもしれませんねえ」

「そ、そんな……っ!？」

四つん這い且つ尻を突き出した形で、冥界から来た医者に局部と肛門を晒すイツセー。

玉袋と竿が萎びた芋茎か干し柿かのように縮んでいるそれを暫く触診した後に、スカートフェイスの彼はしみじみと云った。

同席した祐斗はその答えに絶句するも、今も尚痛みと熱とで苦しんでいるイツセーには受け応える気力が無い。

現に、触診の為に医療用手袋着用のもので揉まれるたびに、ひぎいんほおなどという気色の悪い悲鳴を上げていただけで、男性にされている事実抗議の1つも上げることが出来なかった。

「なんとか、なんとか助けて貰えないのですか!? イッセーくんの  
イツセーくんを、もう一度元気に……っ!」

「へ、へへ、絶望的か……っ」

「! イッセーくん! 気が付いたの!?!」

「傍で騒がれてちや、おちおち寝ても居られねえぜ……っ」

四つん這いの姿勢のまま、声音にだけは力の籠った少年がケツを  
振る。

起き上がろうとしているのかもしれないが、正直居た堪れなかつ  
た。

「センセイ、本当に無理なのか……っ、おれの息子は、もう立てない  
のか……っ!?!」

「ああ、勘違いしないでください。熱が引けばこの異常な収縮も治  
まるかと。何らかの術式の反動なのでしょうが、それが収まれば勃起  
だつてすぐに」

「そ、それじゃあナニが……っ」

「ただ、一般にも知れていることなのですが、睾丸は正常な精子を作  
る過程の冷却の為に体外にある内臓です。それが此処まで熱を帯び  
ているとなると、この先子種を作ることが出来るかどうか……」

そんな……、と絶望的な答えに声に力も入らない祐斗。

そこまで同性に想われるとは、良い友人を持った少年だ、とスカ―  
フェイスの医者は内心で良いモノを見たような目で彼らを眺めた。

それは、羨望にも似た眼差しであったかもしれない。

「なんだ、だったら平気じゃねえか……」

「っ、イツセーくん!! この先子供を作れないって云われてるんだ  
よ!?! 何が平気だっというんだ!?!」

「立つことが出来るなら、負けじゃねえ……っ!」



ぐいーんっ、と膝立ちだった少年が両の脚を真っ直ぐに立ち上がった。

顔はベッドへ埋めたままなので姿勢的には前屈だ。芋茎みたいな竿がへによんと揺れる。

「熱<sup>性</sup>い魂<sup>欲</sup>が消えたつて言われたわけじゃねえ……っ！ 俺の心に燃える情熱が、デカい浪漫<sup>おっばい</sup>を求める意思があるのなら、俺は何度だつて立ち<sup>勃</sup>上がれるんだ……っ！ それは、決して無意味な戦<sup>勃</sup>い<sup>起</sup>じゃねえんだよお……っ!!」

「イツセーくん……っ」

なんて熱い心を持った少年なのだろう。

医者には彼に充てられたのか、忘れかけていた熱いモノへの何かを、この胸にもう一度滾らせられたような錯覚を覚える。

そんな彼を救ってやれなくて、何が医者だというのか。

「……、一つだけ、完全回復への手段があるかもしれない」

「っ！ そ、それはなんですか!? 教えてください、センセイッ！」

医者 of 言葉に掴みかからんばかりに詰め寄るのは付き添っていた少年の方で、患者の彼は医者 of 言葉をじっと待つ。

ただの眷属悪魔に教えるには酷く伝手の少ない手段であるから、医者は初め手段として検討していなかった。

だが、こうして落ち着いているのならば、例え教えても下手に動くようなことにはならない筈だ。

そう判断し、一つ一つ、必要な手順を指折り伝えようとする。

「まず、キャッシュユで30<sup>三</sup>, 000<sup>千</sup>, 000<sup>万</sup>。紹介料と購入料とし

て、これが確実に必要になってくる。それをキミに払えるか？」

「っ」

「……払います」

佑斗は息を呑んだが、イツセーは静かに応えた。

誰よりも回復を望んでいるのは、間違いなく本人だということを、此処に来てようやく彼はハッキリと口にしたのだ。

医療行為には、此れが本当に必要なことなのだ、患者自身が先ず望む事こそが必須となる。

そして、本当に回復することを望むために明確な代償を払えるのか、という事実確認。

それで終わるわけでは無い、全ては此処からなのだ。

医者が医者として働くためにも、患者の望みを強く明確に指標として据えなくては、何もかもが始まらない。

「どうやってでも払います、何年かかっても払います、だから、俺に、立ち上がる為の力をくれ……っ！」

「……その言葉が聞きたかった」

医者は手を差し伸べる。

先に口にした『強がり』だけじゃない、本当に『未来』を望んだ声に応えなくて、医者としていられるわけがない。

その手を掴——めないイツセーは、とりあえず自身のオイナリサンを差し出して握手に応えた。

此処に、契約は成立した。

「では行こうか。——フェニックス家へ」

▽  
▽  
▽

「ひっ、はっ、あっ、んあっ、あひいつ、んひいっ！」

跨ってばるんばるんと揺れていた乳房は簡易な下克上に伴って、既に俺の下で上下に揺すられている。

上になつていた筈の姫島先輩を組み敷いて、腰に絡みついて離さない脚の間に自身を押し入り、俺が動きたびに彼女は悦楽の声を幾度と上げる。

その貌は苦悶とはまた違う快樂に歪み、その手は犬みたいな降伏を顕わとするかのように彼女の顔の横に諸手共に軽く握った形で甲が地を向いていた。

その身体が揺すれるたびに、メーター越えのJカップという自己申告魔乳が、搗き立ての餅みたいにたわわに震える。

それすらも気持ちイイのだと云わんばかりに、姫島朱乃は一切の拒絶の行動を取ろうとしなかった。

「はっ、あっ、ああっ、からすまつ、くうんっ、もっとお、もっとはげしくうっ！」

しっかりと目を合わせて笑いながら紅潮として嬉しそうに、もっともっとと欲しがるそれは、とても初体験とは思えないほどに淫蕩に耽っている。

しかしてそれは、もっと痛くして欲しいのか、はたまた今の此れが気持ちイイからシテ欲しいのか。

それを判別する指標は残念ながら無い。

それでも俺が動くことを止めないのは、偏に彼女の身体が魅力的なことに他ならなかった。

「んひいつ、んおっ、ああーっあっあっあっ！」

卑猥な声を上げ乍ら、俺の動きに連動して無防備に晒された乳房がたぷんたぷんと激しく揺れる。

その動きは激しくて、正直かなり痛いのではと覗えるのだが、それでも彼女は恍惚とした笑みを浮かべることを止めやしない。

やはり痛みを快感へ変換する何某かの回路でも脳内に形成しているのだろうか。本音を言ってしまうえば変態だろうが、美女と云うのは例え変質的な性癖でも大抵の男性に受け入れられるのだから得なモノである。

こんなに変態だというのに、女性としての肉体の魅力は留まることを知らない。

膺は初物らしくきゆうきゆうに締め付けて、でこぼこの内臓が反り立った亀頭と擦り合い、神経を擽る様な快感を直に教えてくれる。

掴む腰は程よく締めまり、視覚ですつきりと見せながらも、すべすべの肌と肉付きの良さが相俟った太腿が、擦りつける腰付きを更に誘惑する。

そして何度も云うようであるが、爆乳を越える魔乳と呼ぶレベルのたわわな乳房だ。

張りとからかさの両立に加え、豊満な乳肉に埋もれないピンと勃った桃色の乳首が、好きにして欲しいとプルプル震えながら主張する。

別に巨乳フェチというわけでも無いのだが、思わずしゃぶりつきたくなるそれは悪魔らしく蠱惑的な母性の誘惑だ。実際何度か味見させてもらった。

「はひいっ、もつとすつてえ、みるくでるまでえ、ちゅばちゅばしてええ」

幾度目かの授乳に、姫島先輩が歓びの声を上げる。

つまり、そういうことが出来るようになるまで、今回は止めないで欲しいという要求なのだ。

嬉しそうに身体を振りながら、両の手は一切の行動を取ろうとしない。

未だに顔の横へ、諸手を上げる招き猫のような姿勢のまま、姫島朱乃はその身を全て晒していた。

▽  
▽  
▽

結局私は、私自身の事が一番判っていなかったのでしょうね。

頭の片隅では悦んではいけないと理解している筈の烏丸くんとの情事を、この身体は嬉々として受け入れてしまっている。

彼の熱い肉棒が私の中を擦りつけるたびに、私の身体は抗えようのない快感に仰け反ってケダモノのような声を上げる。

その瞬間には理性なんてものは微塵も喪失してしまっているのに、それでも快樂の波に吞まれてはいけないと警鐘を鳴らす残滓が私の

全てを掻き乱すのです。

親友を裏切っている心苦しさに、後輩の想い人を誘惑していたことに対する罪過の意識、そしてそのふたりを平然と騙している彼の裏事情を把握してしまっているながらも、口出しできない事実が、まるで自分の身体そのものに綱引きの綱が雁字搦めになっているかのように、自らの方向性を曖昧とさせます。

そうして、自身の決定権すらをも掻き乱されている中で、雌として逞しい雄に抱かれていることに対する生物としての本能（悦び）に更に引き裂かれ、遂には自分のやるべきことすらもわからなくなっている。

——それが本当の私を起こすことに繋がるのは、思ってもみませんでした。

「んひいっ！ もつとお、もつとせいしちようらあいいっ！」

それは血に依るモノなのか、はたまた幼い頃に翻弄された自らの運命に端を発する心情（トラウマ）に附けられた疵の所為なのか、お腹の中を無理矢理に割り入って来られる異物感が、処女膜を貫通する痛みを伴ったことを初めとするこの行為すらも、私は歓びに替えて受け入れてしまっていました。

先に要求していたとはいえ、彼が勝手に吐き出す熱い精液を子宮に注がれているこの現状すらも、背筋を走る快感が私の貌をどろどろに溶かし、だらしのない欲望に泥酔してこのまま溺れてしまいそうになっている。

初めの時には、世の男性の大多数が求めて已まないであろうこの身体を以てすれば、烏丸くんなんて下級生の男の子は、直ぐに虜に出来ると、そう思っていたのに。

今では私の方が、彼の差し出してくる【雄】に夢中になってしまっている。

グレイフィア様に云われて始めた、悪魔社会との架け橋の為の人身御供でしたけど。

その結果に彼の子を孕む、それも悪くないと思いは始めている私が既に居ます。

無論、着床し難い悪魔としての種族の特性上、この一回で全てが終

わる筈もないので、これからも彼とは何度も身体を重ねることになる  
のでしよう。

その未来を思い描いて、私の身体はより激しく悲鳴を上げる。

それが歓びの声であることは、最早疑いようもない事実になります  
わね。

▽  
▽  
▽

そうして何度目かの射精も終わる。

子宮へ叩きつけるように、絶対に孕ませるつもりで出し切ったそれ  
は、上手く行っていれば着床も始まっている頃だろう。

無論、こんな状態で媚薬効果を引き下げておかなければ、今のアー  
シア以上の淫乱中毒雌豚になる可能性があったので、結果として命中  
率がシーソー理論で爆上がりである。

孕ませツクスヨロコンデー！な、某居酒屋をも凌駕する受け入れ態  
勢にはドン引きだが、いい加減身の回りを整理してとつとつ次の話に  
移りたいので、もうこの人はこれで良いんじゃないかって気にもなっ  
てくるし。

幾度目かの絶叫と一緒に絶頂を迎えた姫島先輩は、白目を剥いた状  
態でアへ顔晒して轟沈している。

こんな様を見せつけられれば百年の恋も冷めるレベルだろうが、ま  
あ俺この人の事なんとも思っていないし。

とりあえず、やつと黙らせることが出来たので、しばらくは平穏な  
生活に戻れるかもしれない。

夏休みもそろそろ中頃、いい加減研究の方にも目を向けないと、時  
間がもつたいないよなあ。

「別に忘れていたわけじゃ無いんだ。ホントなんだ」

「——それじゃあイックにやあーっ！ 前川ソーニャで『ネツチュウ Showにはキをつけて☆』！ 特に前列のお客様方っ、掛け声の上げ過ぎにはご注意にゃん♪」

「「「「「ソーニャちゃあああああああんんん!!!」」」」」

ノリノリのリズムで曲が始まり、ステージにてネコを模した付け耳と尻尾でデコった美少女が輝く笑顔で手拍子を始める。

彼女の呼び掛けの通り、前列にて陣取った蛍光ピンクの半被で揃えた男性集団が特に目立つ。

美少女の注意喚起にテンションMaxなファン一同が、野太い声を全力で張り上げていた。

そんな一部熱狂的なファンがいることにも笑顔を崩さず、観る者に応えようとするまさに輝くような笑顔のままに、手を振り脚を振りポーズを決めて歌い始める。

街頭ライブのステージを見上げられる仮設会場では人の行き来が滞り、行き交おうとしていた群衆もその美少女の頑張りに足を止める。

これを機に彼女のファンになることが、ほぼ必然と予想される。

そんな人々の見上げる其れはまさに『輝く星アイドルを見上げる』ような、キラキラとした憧れを向ける者たちにも元気が湧き上がってくるような眼差しであった。

斯く云う俺も、そんな彼女の華やかな姿を見上げる群衆のひとりにしかなれていない。

その華やかで懸命なステージに充てられたかのように、呆然と彼女を見上げることしか出来やしなかったのである。

ていうか、支取会長だよね。

『恋に浮かれた彼の視線、』『キミが好きだよって』く

「アイラブユー!!!」

おお、前列の方々もすげえ揃えて声張ってる。

紛うことなきアイドル稼業。

さつき普通に会長と目が合ったのだけど、それでも笑顔崩さずにステージ続けているんだから最早プロだよ。

「……ソーナ会長？　なぜ、あんなことに……？」

同行していた姫島先輩が呆然とした様子で、変わり果てた会長の艶姿を見上げていた。

個人的にはエッチして終了、で良かったと思ったのだが、ラブホを出た時刻は日もカンカンと射す夏の午後。

日光に弱い悪魔の特性上、体力を使い切ってやや弱っている今の状態では帰宅も儘ならない、と注文を受けて逆同伴と相成ったわけだが、その果てに余った時間で街中デートにシャレ込まれた事実が如何ともし難い。

確信犯ポイ姫島先輩であったが、予想外の事態に遭遇しては流石に自分を支えきれないようである。

そんな彼女を腕に抱き着かせつつ、以前の話を思い出す。

そういえば、俺が注文したんだっただか、支取会長のネコミミ関西弁アイドルデビュー。

今の彼女を見るに、関西弁の部分はどうなってるか窺い知れないが、妹をプロデュースするという魔王様の目的はしっかりと確定した模様。

その所業はまさに有言実行。

すげーや魔王様、プロ根性をしっかりと備えさせて最早人格矯正レベルにまで匹敵してそんなキャラ改変促してのアイドルデビューやで。

セラフオールさんマジばねえっす。



「右端いつ！ 声出てねえぞお！」

「うつす、スイマセン団長っ」

「もつと腕をふれえ！ 全力で会長、じゃなくてソーニヤちゃんを応援するんだあっ!!」

「「「「イエッサー、団長!!」」」」

あ、匙先輩だ。

間奏の合間に団員と思われる者らに叱責を飛ばす姿を見つける。

科白から察するに、応援団を設立したかと思われる。

いや、ファンクラブと変換していいのかね？

今更だが半被には、『前川ソーニヤを応援する団』としっかり名称が縫い付けてあるけど。

尚、ステージ上の会長は普段使いの眼鏡をかけておらず裸眼。

逆に匙先輩は俺のあげたアイテムで眼鏡族になっており、お互いささやかなイメージチェンジで身元バレを避けている様子でもある。

その理屈は分かるのだが、会長の今の芸名の『前川』って何処からやって来たんだよ（驚愕）。

微妙な疑問が解かれる日は、果たして来るのだろうかと不安になってしまう俺がいた。

▽  
▽  
▽

「よおー、邪魔してるぜ烏丸」

「邪魔してんならお帰り下さいませー」

「なんだよ連れねえなあ」

嘘嘘冗談、別に無下にする理由も無いっすよ。

こちらに割と本気でどう扱おうとも思っていない旨があることを理解したのか、帰宅した教会にて待ち構えていたアザゼルさんは少々口元を引き攣らせたような貌で苦笑していた。

というか、ホントになんで居るのアザゼルさん。呼んでませんけど

？

「いや、まあ俺にも大した目的も無かったんだがよ、ここにきてチョコイと趣旨が替わったわ。……お前色々遣るんならせめて説明の一つくらい言つとけよ!？」

「え、何怒ってんですか。俺何かしました？」

「何かっつーか何もしてねえって思ってる方が可笑しくねえかな……!？」

急に怒ったように絶叫する墮天使のおっさんに困惑しか湧かない。もう夕方に差し掛かっている時刻なのに元気だなあ。

ああ、この人も闇属性っぽいから悪魔みたいに夜の方が元気なのかしら。光属性と思しき天使から派生した墮天使って闇と光の両属性を備えていそうでサイキョーに見えるよね。どうでもいいけど。

「先ずアイツ！ ミッテルト！ ウチの一員がなんで天使化してお前のところに居るんだよ!？」 問い質したらお前の仕業だつて簡単に<sup>ゲロツ</sup>告白したが、その技術は天界からも明かされてねえ秘中の秘だぞ!？」

指さす先には未成熟JK系金髪天使が「おかえりー」と手を振っていた。

丁度いいや、このベッド部屋に運んでおいてくれ。と術式で収納していたキングサイズを手渡す。

「次にアイツ！ カテレア・レヴィアタンだよな!？」 なんて生きてんだなんでお前のごころに居るんだなんでメイド服を満更でもない様子で着こなしてんだ答えろコラアツ!!」

うわちよおもつ、と後ろから手を貸した褐色眼鏡メイドに添えられて、部屋まで往く姿を見送った。

見覚えの無い恰好をしていたが、アレも多分夜の蝶なお姉さま方の

仕送りの品であろう。

ヴァレリーの仕入れモノが意外にも豊富なラインナップで、今からちよつと楽しみでもある。

「最後にアイツ、女体化してるけど、明らかにアスタロト家の次期当主だよな……!?!? お前とどういう関係なのか、詳しく教えてもらいたいんだが……!?!?」

絶叫したアザゼルさんが息を切らした様子で絞り出すような声をしていた。

ロツテの姿は見えなかったけど、悪魔の貴族と癒着紛いの疑惑が覗えていち種族の頭としては不安が先立っているのかもしれない。

墮天使のまとめ役とかやりたくねー、って前に云つてた気がしたのだが、それでもこうして先を見越して不安解消に努めようとしている様からも社畜精神を最早晴らせない気配すら疑える。

思わず憐みの目を向けて、井形を作りコブシを振り上げているおっさんに説明を始める俺なのであった。

——少年説明中。

説明終了——。

「……………なるほど、夏休みの初期に吸血鬼領で『禍の団』の奴らの暗躍を知ってそれを殲滅し情報収集の為にカテレアを復活させディオドラ・アスタロトが奴らの一員であることを知って諸共に寝返らせた上でユーグリット・ルキフグスにリゼヴィムを討伐し今に至る、と……」

掻い摘んだ説明を終えると、確認の為に口に出したおっさんが頭を抱える。

もつと明確に云うと、それに女性を7・8人くらい絡ませてようやく俺の夏休みである。

我ながら爛れた夏を送ってる。

そんなおっさんと俺に、お茶が入りましたよー、と天然入ったヴァレリーがひよつこりのご登場。

いっしょに持ってきてくれた茶を呑むに、そういえばアーシアの姿が無いのだからこれを淹れたのもヴァレリーなのだろう。

王族とは思えないくらい給仕に違和感が無くなってきたのは、果たして良い傾向と見て宜しいのだろうか。

「お前どんだけ濃い夏休み過ごしてんだよ……!? リゼヴィムつて、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーだろ？ ヴァーリの爺さんだろ？ ラスボスレベルのアイツがテロリストに与してたつてのもアレだけど、既に討伐してるって、ヴァーリが聞いたらなんて云うか……！」

妙に大仰なフルネームのキャラだが、向こうが戦闘意志を示す前に斃せたんだからもうそれで良くない？

もつとも、二度目に無月モドキブツパしに行つたときには確認してないから、ひよつとしたら件のリゼヴィムとやらはまだ生きてる可能性もあるけど。

俺が遣らかしていた天使化とかいう天界側が独占したがってるっぽい技術の疑似が出来てしまったように、人の手に出来ることなんてのは多岐に渡る。

特にその辺りを攻略する鍵として【神器】なんてモノが蔓延ってる世界線。その一角として今こちらの【手元】にあるヴァレリーだが、【聖杯】に類似した性能の『何か』が見つからないとも限らない話だ。

技術や能力の独占なんてのは意外にも端から絶対的な決め事なんかでは無く、自分が出れることは他人にも出来る、と考えておいた方が実はすんなり対応も出来るものであったりする。

その辺りも教えておいた方がいいかも知れん。

そもそも、そう考えたからこそユーグリットの生存を予め疑えていたわけであるのだし。

「で、そこのお嬢さんが吸血鬼のお姫様ってか。【聖杯】の使い手がハーフヴァンパイアとはなあ、まあ【バロールの目】も出てるのだけ有りえない事とは思わんけどよ」

「使い方についてはお借りした資料にあったので参考になりましたよ。お礼に土産でも包みますんで、後で持ってってください」

「……お前の【土産】とか、なんか嫌な予感しかしないんだが」

失礼な人である。

『チエスの駒』に『瓶詰の蛇』が何が嫌なモノかと。

「つーか【聖杯】に関するリスクも無しに扱えるって、それだけでメチャクチャチートじゃねーか。なんなのお前？ そのまま世界征服とか目指してるわけ？」

「そんなこったないですが」

技術を扱える程度で世界が征服出来たら、【コズモ・エンテレケイア完全なる世界】だってもう少しマシに動かせていただろうに。

技術は技術、上限もキャパも可能と不可能の差配だってある。

『何でもできる』ことが『何でも叶う』ことのイコールでは結びつかないのが現実って奴だよ。

ふええ、この総督はもうちよつとマシに見えたけど、やっぱり『脳筋この世界のひと』の筋っぽいよお。

脳内でそんなことを思ってるとは恐らく露知らず、墮天使総督は溜め息を吐くと口調を変えた。

「ま、後になって問題になりそうな事態を解決して貰えたんなら、これ以上俺からは云う事はねえな。表立って発表すれば冥界側にスゲエダメージ逝きそうだが、その分だとサーゼクスにも教えてないんだろ？」

「云う必要ありますか？」

「……俺が云う事でもないかもしれんけど、お前ドライだなあ」

アザゼルさんにとっては、俺は冥界の魔王様預かりとでも思われるんだろっか。

別段世話になったかと云えばグレイフィアさんにスマホと教会の維持権貰った程度だし、その釣り合いだってそこそこに取れてるつもりではある。

過剰に引き出しを作って下手な借りで身動きが取れなくなるよりは、悠々生活するためにも無駄な荷を背負うつもりはないのです。

それにグレイフィアさんには個人的にもお世話になったことだし（意味深）、流石にこれ以上貰うのも悪いかなーって（のワの）。

「あちらの社会の話に外様が関わっても良い事ないっすよ。向こうは割と好きに踏み込んで来ている様子ですけどね」

「うん、俺個人としては言い訳にしかならんだろうけどゴメン。これ以上云わんわ」

今日の昼の事とか、と思いついてたらアザゼルさん的には色々後ろ暗い部分があるのか、人間社会に手出し踏み出し掻き回してる異種族代表の一角として普通に謝られる。

悪い人では無いんだろっけどなあ。

支取会長のアイドル活動略してアイカツはまだ可愛い方であるけど、悪魔らは基本的に召喚と契約によって人間の願いを叶えるという名目で既に『こちらの社会』を侵食していたりする。

墮天使もどつかで何かしてるのかもしれないけど、今のところ俺個人には被害は無いので知ったことでは無い。

しかし、既に荒らされてる猟場に口出しする気はないけれど、踏み込まれたくないから踏み込む気はないだけであって、それは決して反撃を想定してないわけでは無い。

雌伏の時って大事よね。

なんか怖い思考になりかけてるので一端カット。

別に無理してヘイト値上げるつもりもないので、こういった話題は

避けた方が賢明でもある。

実際、サーゼクスさんが悪魔社会をどう導いていこうとしているのかなんて知ったことでもないし、それを何とかするための前提がそもそも社会基盤に在りそうにないから今みたいな事態になっているのだろうし。

世の中なんでこうなった、なんてことをよく口にする人は居るのだろうけど、そう口にする奴つてのは基本的に酸いも甘いも味わった回顧しつつある大人の皆さま。そう口にしてている前提として社会を組み敷いて来た筈のご本人がいらつしやるならば、『そうなった社会』を作ったのはそもそも口にしてるご本人自身でもあろうに。

社会を汲むのは間違いないで生きる人らの意図と意志。

『自分たちが生き易い社会』を目指すためならば先ずは『自分』の身を削ぐことが必須であり、何らかの犠牲を孕むことを覚悟できない者では作ることが出来ないのでは、と逆説的に論じて見る。

まあ、相応の鋳型が備えられてないのに真似モノの社会を維持しようとしている時点で、そこから生きる方々に覚悟とやらが見当たらないのは御愛嬌なのかもしれないけど。

……ぶっちゃけ、長命種の社会な癖して短命種人間の真似事してる時点で、色々創造性が足りてないんだよなあ。どうしてあんなってしまったのかしら冥界。

って、カット出来てねえ。思考を換えよう。

「そういえば、今日はなんでまた来たんで？ 胡乱な話をするためでもないでしょうし」

「胡乱で。……まあ、烏丸自身には正直あまり関わりの無い話だけだな」

正直、テロに狙われる社会について論じているほど、不毛で不相応で不仕付けな話題もない。

頑張れ大人たち。

そういえば、此処は教会なのにアザゼルさんは平気そうでもある。

そうか、墮天使つて一応天使に分類するから、此処の結界に落とされることも無いわけか。

考えて見たら前に襲撃して来た一団も、一時的に置いていた時にも平気そうであったし、『人間』にも結界は利き難いと。

……いかなな、セキュリティが微妙に甘い。

一応、拠点というか研究所で工房でもある場所なのだし、もう少しセコムを強化すべきか。

「お前にはまだ伝えてなかったことだがな、二学期から俺も駒王の教師になることになったんだ。アザゼル先生って呼んでも良いぞ」

「……教員免許持ってたんすか？」

「聞くのが真っ先にそれかよ」

いや、前の処では教員資格が怪しい子供が先生やってたものだし。何気に1年見ていない彼を脳裡に浮かべつつ、駒王という悪魔の領分で教鞭をとる羽目になった墮天使の総督に視線を向ける。

「しかしなんでまた。……ヴァーリさんの様子見ですか？」

「それもあるが違う。墮天使と冥界との融和の為だよ。技術交換も良いがそれより必要なのは人材を充てることだ。悪魔の方だってセラフォールが外交官やってるらしいからなあ。人間の社会にだってあるだろ、そういうの」

「ああ、なるほど」

「教え甲斐のねえ奴だな……」

セラフォールさんがアイドルプロデューサーだけでなく外交官までやっていたというのは驚きだが、むしろそれをやっていたからこそこっちの社会で支取会長のアイドルデビューが成功した可能性が微粒子レベルで存在。

というか、さざりと理解してしまったことを惜しまれるとは此れ如何に。



普通に納得の貌を晒すと、胡乱な目を向けられてしまった。げせぬ。

要は、棲み分けをしていたところの国が、それぞれのルールを摩り合わせる為の下準備とでもいうべきか。

3 竦みという殺し合い前提の狭量国家間でいきなり仲良くしましようぜ、とやることほど無謀なことは無い。

異なる社会観の者らを違えるのは言葉の壁なんかでは無く、根本的には感情である。

そんな異なる3つの社会が協立してゆくためには足並みを揃えることは必須であり、その『最初の摩り合わせ』として『簡単に危機に陥れ難い人材』をそれぞれの社会に引き合わせているのだろう。

危機を前提として踏まえることこそ問題ではあるが、元々が喉元に刃先突き付け合わせていた間柄なのだし、現状が人質交換の体になくなってなくても今はそれでも構っていられない。

踏んではいけない一線を見極める為にも境界線ボーダーラインの定義はしっかりと把握しておかなくてはならないが、『三竦み陣営』にとつての『敵』が明確に頭角を露わにし出している以上、分化交流だけに時間を掛けている暇もない筈であろうし。

そのために先ず『教師』という体制なのは、多分本当に教えるべき立場の者に教養を積ませる必要性がある為なのだろう。

特に、兵藤先輩とか。

あのひと最近悪魔になったばかりな上に、ついこの間まで呑気な高校生であったことだし、一番社会進出が遅れて居そうな感じがどうしたって否めない。

「といっても、2年なんでしょう？ 1年の俺には関係ないような」

「お前が高1つてことが疑わしいのはさておき、オカルト研究部の顧問にも当る。後々齟齬が無いようにな、ちよいと報告に来たのが今日の目的だ。目的だった、んだけどなあ……」

余計な情報を抱いてしまつて胃が痛いようでもある。

なんかすみません。  
でも疑わしいとはなんだ失礼な。

「もう少しで休みも終わるが、ヴァーリの話だと何があったのやらあつちの組織は未だに足並みが揃ってないらしいからな。このままなら二学期早々に火花を散らされるような事態にはならんはずだ。というか、なって欲しくない。だからお前も、あんまり騒動の種を積むんじやねーぞ烏丸」

「心外なんすけど」

「妥当だよ」

心外なんすけど？

問題起こすとしたら俺よりは兵藤先輩とかの方が有り得そうなんだけどなあ、さつきも思った通りに。

はっちゃけキャラの多量な2年勢の中でも、特に有名な時点でお察しな先輩だし。

というか、俺はオカ研に所属しているわけではないのに目を点けられるってなんだ。

帰還の為の研究しかやってねーぞ、マジで。

後のは精々お遊び程度ですわ。

▽  
▽  
▽

そんな会話が あつたのが既に1週間前。

夏休みも遂に終わり、新学期として今から全校集会苦行が始まるわけだが、学生にとつての苦行というよりは苦労性の校長先生にとつての苦行と変換した方が良いかもしれぬ。

教頭がDSで、時折校長にヒデエ無茶振りをするんだよな。

まあそれはさておき、全校集会前に軽いホームルームのスタート。

休みも明けて久方振りに顔を合わせた俺たちの前には、見知らぬ女子が4人ほど並んでいた。

転校生と云う奴である。

「麻帆良学園から来ました、神楽坂明日菜です。そらの愛人です」  
「麻帆良学園から来ました、大河内アキラです。烏丸くんの愛人2号です」

「麻帆良学園から来た、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル。そらの嫁だ」

——烏丸イソラは逃げ出した！

お前らがいるのはとりあえず問題は無いけど開口一番の自己紹介で何っーもん口にしてんだオマエラ!?

残るひとりの金髪クロワツサンなお嬢様系転校生がスゲエ陰薄くなっつてんじやんかよ！

ヤメタゲテヨオ！ キヤパなんてとつくに臨界振り切ってたんだからねえ!?

【内政チートという名の】理想と現実が交錯する謝肉祭的な第五章【蹂躪劇】 ※時系列上原作六巻相当  
「知ってた」

まあ、大体わかっていたことではある。

「ほお、この学校の部室棟にはシャワー室まで備え付けられてるのか。見た目は旧校舎なのに、随分と金のかかった設備だな」

「ていうか、麻帆<sup>まほ</sup>良<sup>りょう</sup>の高等部でもこんな怪しい部活が活動を認められてたりしないのに、部室を貰えている現状が有りえなさすぎるわね。催眠術でも使ってるのかしら此処の部長さん」

「烏丸くん、縄きつくくない？」

駒王学園二学期の始業式が始まり、みんなが体育館に鮪詰めとなっているであろう現在、俺は麻帆良三人娘に捕えられて才力研部室にて尋問を受けていた。

アキラたん、そう聞くくらいなら簀巻き解いて。

なんでもエヴァ曰く、

「さて、部屋も確保できたことだし、随分と雌の匂いを纏わりつかせているそらの言い分でも聴くとしようか」

——と。

……あれえ、エヴァさん今人間じゃなかったっけ……？ 嗅覚が鋭すぎて軍用犬の疑いすら匂わすレベルう。

「まあどうせ新しいハーレムでしょ？ 何人入ったの？ もう子供も出来ちゃった？」

「せめて週一でローテできるくらいには留めて欲しいなあ、無理かも

しれないけど」

「お前ら寛容すぎるだろう」

ホントだよ。

そしてそう先走って予測立てられると俺が逆さ吊りされてる意味が本気で判らなくなる。

ところでこの姿勢に覚えがあり過ぎるのだけど、デジヤブ？

あとアキラたん、そのローテーションだと流石に俺でも枯れるから。

「で、何人に手を出したんだ？」

明日菜&アキラさんの寛容さはさておき、微笑んでいるのに目が笑ってないエヴァ様の視線から目を逸らしつつ（罪悪感）、答えなくちやいけない空気のままに脳内で数えてみる。

えーと、アーシアゼノヴィアイリナ塔城ヴァレリーミツテルトグレ  
モリー姫島……、

「し、7、8人、かな？」

「嘘つけ、二桁往ってるだろ」

馬鹿な！ 何故バレた!?

「別に、お前が普通に男である以上、女を抱くなどは云う気はないさ。だが、此れだけは約束してもらおう」

「はい」

「抱け。私も」

「……………はい」

「返事が小さいー」

「はいいー」

麻帆良に居た頃から拒否っていたけど、流石にこと此処に及んではエカテリーナも見過ごせはしなかった模様。

思考からも外していたグレイフィアさんヴェネラさんオーフィスなんかまで明確に看破され、彼女の嗅覚にガチの戦慄を覚えざるを得ない。

結局力技で約束させられてしまったので、近いうちにエヴァとのベッドシーンである。

やったねそらくん！ これで幼女は4人目だよ！（白目）

ほんとに彼女の未熟な身体を慮って避けていたにも拘らず、色んな因果は絡み纏って性的な意味での身動きが取れないくらい雁字搦めである。

畜生、だから逃げたのに。

まあ『魔王様からは逃げられない』っていうのは常識だから仕方ないけど、「闇の福音」とかいふ厨二ネームがあるからなエヴァ様も。イコールで魔王と同体と見ても間違いはない（過言）

修業時代の名残というよりは完全に実力としてこの有様な俺はさっておき、ふと視線をずらせば部室の入り口に塔城とヴラデイの姿があった。

「あ、始業式もう終わったんか。どした、目を丸くして」

「——そのまま訊くんですか……!?!」

あれ、何故か驚愕されてる。げせぬ。

「今更だけど部室借りてるぞ、人が来なさそうなところが思いつかなくてさ」

「思い返せば、烏丸くんって結構部室を私物化してるよね……」

「いやちよつとツツコミ入れましょうよ……っ！ なんて烏丸くんもギャーくんも平然と続けるのですか……!?!」

妙に猛ってる塔城はさておき、こうして断りだけでも入れて置けば

後々問題にはならないだろう。

そんな姑息思考がお気に召さなかったのか、物語の定石セオリーは新しい風を吹かせてくれる。

「……何事?!」

入り口にはグレモリー先輩を初めとした、オカ研の面子が揃い踏みであった。

ちっ、逃げ遅れたか。

▽▽▽

「まず、知らない子もいることだし自己紹介から始めましょうか」

「れ、レイヴェル・フェニックスと申します。お恥ずかしながら、ライザー・フェニックスの『僧侶』ヴァインヨツプを務めていましたわ」

グレモリー先輩の先駆けに、最初に応えたのは金髪クロワツサンのお嬢様であった。

おお、麻帆良三人娘のインパクトで薄れていたが、ウチのクラスに入って来た転校生ではなからうか。

なに? また悪魔関連なの? いい加減にしてよ。

「で、誰?」

「え、さあ」

「すまん、私も判らない」

そう口々にするのは俺・イリナちゃん・ゼノヴィアちゃんの三名。教えてくれ、ライザーって誰。

「イリナさんとゼノヴィアさんはさておき、なんで烏丸くんは覚えてないので……。以前にこの部屋で貴方が十字架でのた打ち回ら

せたホスト崩れです」

「小猫様の紹介に悪意しか伺えられませんわ……!?!」

「そんな奴いたっけ」

「そしてこちらは微塵も覚えてない……!?!」

わりとガチで思い出せない。

そんなことより、のた打ち回るの語源は蒐場ぬたばという獣の泥浴場の事で、泥に塗れて転げまわることから来ているらしいね。関係ないですかそうですか。

「まあライザーはどうでもいいわ。彼女は留学という形で冥界から出て来たのだけど、あなたたちに注意してほしいことは特にないわ。強いて挙げるなら、仲良くしてあげてね特に一年の子たち」

「え、注意して云われにや仲良くできん様な子なの?」

「ホラ、小猫ちゃんは基本的に狩猟する側だから……」

「心外なんですけど?」

グレモリー先輩の紹介の仕方の方が微妙に手酷い感じが芳ばしいが、槍玉に挙げられた俺たちは聴こえる程度の声で囁き合う。

その脇で、リアルタイムで『おめーの席ねーから』と新人イジメ喰らってるクロワツサンが頭を下げた。

「リアス様の紹介の仕方の方が微妙に手酷いのですが、どうか緩めに受け入れていただければと……。此処を逃すと渋々実家へ戻らなくてはならなくなりますの」

微妙にメンタル強い娘だなあ、と思いつつ、何故実家に戻りたくないのかが窺い知れぬ。

そんな俺の疑問には、横に来たアーシアが答えてくれた。

「なんでも、今フェニックス家にはイツセーさんが出向してるみたい



です。治療の為、だとか……」

「ああ、居ないと思ったら」

その付き添いだろうか、木場先輩の姿も無い。

新学期に間に合わなかったご様子だが、出来ることなら兵藤先輩には特に紹介したくない身内がサプライズで押し掛けて来られたモノだし、結果としてはオーライとしておこう。

そして遠回しに先輩に近づかれたく無さそうな感情が垣間見えているクロワツサンの思惑に、やや滂沱が止まらない。

兵藤先輩、アンタこの子に何したんすか」

「口に出てますよそらくん」

「え、マジで?」

「此処一週間ほど、屋敷の娘たちへのモーションが酷くて酷くて……。留学の件が無ければ今頃あの男のモノを銜えさせられていても可笑しくありませんでしたわ」

「……うん、この話止めようか!」

「そ、そうですね!」

アーシアに注意されたと思ったらクロワツサンの答えが中々笑えそうになかった。

現状、この場の女子連中と色々やらかしている身としては本気で笑い飛ばせそうにない。

「で、そちらの子たちなのだけど……」

そしてここにきて、同席しているエヴァたち麻帆良三人娘に視線が向く。

差し出された紅茶を優雅に呑む様は紅魔館の運命的な緋色を彷彿とさせるが、残念ながらPAD長の姿は今はない。

「ああ、私たちの事は気にするな。そもそも見つかったし、少ししたら帰るさ」

「そういうわけにもいかんだろ……」

いつの間にか参加していたアザゼル先生が、悩まし気に抱えていた頭を上げてエヴァ様の言にツツコミを入れる。

グレモリー先輩方の後くらいにクロワツサンを引き連れて此処へ来たのだが、その寸前では俺が降ろされる云々のドタバタ中でコメデイみたいな空気であった。

なので、この世界の面子と彼女たちとの間には、隔絶した認識の差異があるのは間違いが無い。

隠す気こそ大して無いが、其処に気付いてもらわない事にはこちらから提示した情報だけで信じて貰うことも出来無いことは容易に予測付くので、やはりわざわざ身バレを促す必要も無かったりする。

さて、なんて語ればいいのか。

「お前らは烏丸で慣れてるかもしれないがな、其処のふたりはハッキリ言って異常な存在だぞ。内包している魔力の質が明らかに可笑しいわ」

と、アザゼル先生が指すのはエヴァに明日菜。気づくの早いな。

まあ、向こうの世界でも普通にトップシークレットレベルのキャラだし、法則性がやや異なる世界に混じっても悪目立ちするものなのかもしれない。

「? どういうことなの?」

「まず、烏丸でも普通に異常なんだがな、人間の身のままで俺たちを凌駕するまでの魔力を内包しているっていうのは『魔法使い』連中の文化からしても有りえないことだ。それと同格かそれ以上の魔力、なんてモノを抱えている時点で、その奴が常識的な存在じゃないことは

明らかだ」

グレモリー先輩の問いに、エヴァを指しながら答えるアザゼル先生。

はちみつ授業の始まりである。

「はつきりと計測できればいいんだが、うちのスカウターで出て来た結果は【計測不能】だ。魔王や天使長の居場所を捉える為に設計されたつてのに、それ以上つてマジで何モンだよ」

「なんかワクワクする単語が飛び出てきましたね」

スカウターとな？

これは『馬鹿な、スカウターの故障じゃないのか？』という御決りのあのセリフを使う機会が、俺にも巡つて来たと云う事か。

「此処には悪魔の魔力を把握しきれねえ奴もいるからな、必要は発明の母つて奴だ」

「それよりアザゼルの言った理由の方が気にかかるわ。同盟を結んでおきながらなんでそんなモノを作る必要があるのよ」

「部長、今は抑えて」

後で教えますから、と年下塔城に宥められる年グレモリー先輩上の図が其処にあつた。

実際、この人こう見えて堕天使のトップなんだし、同盟を組んだとしてもいや、だからこそ隣国へ対して警戒を抱くのは間違いじゃ無いはずだが。

裏切り、つていうのは約定があつて初めて意味を為す概念だからね。国民部下の主義と矜持と尊厳とを押し通し、生命と財産と将来とを保障するのが国主トップの仕事なんだから、其の為には時に切り捨てるべき部分を見極めることは間違つてない。

特にそういう『他所の国』つてのは同盟を組んだとしても『最大の

敵国』という警戒に値する部分に変動は無いのだし、得られるべき情報を追求してゆくのは必要な開発にも繋がるし。

「もつとも、此れでも烏丸のは把握しきれねえがな。魔力の高さとかじゃなくて、普通に上限下限の変動が激しい上に隠蔽性も高いから、今のところ全然解析が追いつかねえ。お前本当に人間か？」

「失礼な」

内心見直していたのだが、先生からの俺への評価は辛辣である。どうしてそうなったのか。

「そしてそつちの鈴付きツインテールは更に異常だ。魔力測定結果が出ているが、マイナス値を表すってどういうことだよ」

「……は？」

姫島先輩とグレモリー先輩の呆気にとられた声が重なった。

魔力に関することには彼女らおふたりが寡言でもあるのか、おふたり以外は特に反応した様子はない。

しかし、マイナス値を指し示すのが明日菜ねえ。もしかしてあれかな、黄昏の姫御子っていう設定がブイブイ鳴らしてた影響かも。

並行世界という名の異世界へ渡ったことにより、期せずして有力な計測結果を得られそうである。

「性質として見るならサーゼクスの『滅びの魔力』に近いかもしれんが、人間がそんなもん抱えていたら制御しきれずに自壊する。……おい烏丸、正直に答えろ。コイツらは、いや、お前らは一体『何処』から来た？」

おや、気づいたのかな？

「な、なにを言い出すの、アザゼル？」

「考えてみりやそれ以外にはねえ。この世界は見る者によつちや突然変わってゆくようにも見えてるのかもしれないけどな、烏丸みたいに突出した【異常】がこうして表沙汰になるには、前段階ってやつがどうしたって存在する。特に『魔法使い』連中の文化上、コイツみたいなのは【異常】がこれまで誰の目にも触れてなかったってのもあり得ねえ話なんだ。それこそ、『突然降って湧いた』のでもない限りはな。もしも『隠れ里』のようなところでひっそり研究を続けていたとしても、この地上に俺たちみたいなのは【人外】が跋扈している以上、本当に隠れきることなんて絶対にねえ」

あんまり人のこと異常異常連呼するのはヤメテ欲しいなあ。

あと、アキラたんのことも思い出して挙げてください……。

「で、でも、神器とかでは？ これまで見つからなかった神器が、こうして新しく見つかった、とか……！」

全員が俺たちに注目している中、アーシアがフォローするように口を挟んできた。

魔女裁判のようだったし、似たような経験を持つ彼女だからこそ見とられなかったのかもしれない。

俺としては、先生の意見も聞いておきたいから静聴して続きを促していたところなのだけど。

「確かに、その可能性もあり得るだろうけどな」

「そ、それならそらくんのことを尋問するような真似は、」

「だが、どれだけ万能で不可能がないように見えても、神器は飽くまで【聖書の神】が創り出した前提がある。それはこの世界の法則を覆しているように見えても、飽くまでも『神器そのものの領分』を超える結果までは示したりはしない。そこを覆せば自己矛盾に陥るからな、いくら持ち主が望んだとしても、自滅するような結果を齎せるかよ」

「え、ええと……っ！」

「あー、例えばだな、アシアの神器は回復用だが、反転して相手を害する結果を導き出すことも不可能じゃないんだ。だが、『もともと歩けない人間』を『歩けるように改竄する』ような『回復の仕方』まで導き出せない。そうしたらもはや別の神器になる。ここまではいいか?」

「あ、はい、なんとか……」

「烏丸はその前提を割と軽く覆している、現状『あり得ない結果』を輩出し続けている第一人者だ。悪魔を人へ堕天使を天使へ、本来不可逆なはずの【転生】を、烏丸はこの夏にさらりとやらかしていやがった。お前のレポートを読んだがな、元々の性質を完全に書き換える人体改竄って、悪魔ですら【駒】を使わないと出来ないような真似を、相応の神器を介したとしても、一介の魔法使いが出来るはずねえだろ」

最後の科白は俺へと向けられていた。

アザゼル先生の睨むようなそれと同時に向けられる、色んな箇所からの怪訝な視線。

あれ、可笑しいな、麻帆良三人娘からも似た視線が来てる。

「そんなことあないと思いますが」

「教会側の人工聖剣使いの話でも思い出したか? アレは因子の摘出っていう要因ファクターがあって初めて出せた結果だし、お前みたいに種族の枠を易々とはみ出るような真似までやった奴は今のところ見たことねえ。加えてこの間はスルーしたが、お前他人の神器を外側から使えたら」

人口政権使いつてなんぞや。

というかなに? 何かおかしいことでも?

「何がおかしいのかわかってねえってツラしてるがな……神器は飽くまでも個人のモノであって共有することは出来ねえんだよ! 誰かの神器を自分が使おうとするなら、それは奪う以外に方法はねえ!

取り出さずに他人に使用法を伝えるだけならまだしも、遠隔して自分の思う形に使ってやった結果じゃねえかあのレポート！」

遂に怒り心頭に達したのか、怒鳴るような口調でアザゼル先生が猛りだす。

うーん、俺からしてみれば、ホムンクルスらとユニゾンするみたいな感覚でシンクロ発動を促せたのだが。

ジョグレス進化がティマー2人必要、みたいな感じでやったのがそんなに不味かったのか。

「そして何よりも、此れまでの聖別でも例を見ない、下手な聖域を凌駕するレベルでの属性付与だ。あんな真似をする奴が他にも居たらとつくの昔に教会側が悪魔も堕天使も刈り尽して、聖書陣営の成立なんて今頃話題にも挙がってねえよ……」

「ああ……、そういえばそんな真似もできていたな……」

「忘れてたわね……」

ゼノヴィアちゃんとイリナちゃんが遠い目で呟いていた。

此処に至ってはアザゼル先生も疲れた顔で。何やら認めたくない現実と葛藤しているようにも感じる。

戦わなきや、現実と。

「以上のことから踏まえても、コイツらが普通に神器使いだって説には異論がある。つーわけで烏丸、吐け、色々。隠してる事とかあるんじゃないかねえのか？」

先にも思ったが、別段隠している意図など微塵もない。

だがそもそも、俺の答えで満足してくれるかどうか。

そんな一瞬の逡巡の隙を突いて、先ほどから黙っていたエヴァが口を開いた。

「別段隠す必要もあるまい。私たちは異世界の住人だよ」

尊大な態度を崩さぬままに、ダーク・エヴァンジェル【闇の福音】が言い放つ。

そちらに全員の視線が向くが、彼女は意にも介さずにこちらへと目を向けた。

「で、そら。帰る準備はもうできてるんだろうな。半年も遊んでいたんだ、もういいだろう」

「ん、時間の経過一緒なの？ 超リンに来てもらえていれば……」

「下手な時間矛盾など止めて置け。大体、タイムパラドクスがそもそも無いと明言したのはお前と長谷川だろうに」

カシオペアでこっちに来る前の時間軸へ……、と画策してみた内心をあつさりと暴露される。

まあそうだけどね。

休学扱いなのが少々痛いなあ、単位とか。

「いや、いやいやいやいやまてまてまてー！」

「なんだ、騒がしいな」

ちよつとまってちよつとまっておじようさーん、とアザゼル先生が……、いや、これそんなチャライ雰囲気じゃねーわ。

「い、異世界？ マジで言ってるのか？」

「先ほどから悪魔だの天使だの口にしてるのだし、そのくらいは受け入れる。言っておくがな、そらみたいなのがこっちでの平常と思うなよ」

「そのフォローはおかしくね？」

エカテリーナのフォローの方向性の有様に、ちよつと泣けてくる。異常じゃねーよ。俺が異常なんじゃなくて、俺以上のバケモノが闇



歩してるあの世界が異常なんだよ。

「た、確かに、もう全く違う文化系列から混じってきたと思えば納得の理由だが、そんなあつきりと話して大丈夫なのか……？ もつとこう、なにかあるんじゃないのか……!?!」

「お前らの葛藤なんぞ知るか。もういいだろう、いくぞぞら」  
「ういーす」

さて、そろそろ構築していた理論でも明かす時が来たのか。  
世界境界線突破を目指して、大して重くもない腰を浮かす。

「」「ちよ、ちよつと待つて!」「」「」

——とそこへ俺の腕を足を服の裾をと、この部屋の女子全員ががっしと捕まえる。

あ、全員じゃねーな。金髪クロワツサンと麻帆良組がやや遠い。

「帰るって、そんな急に、」

「いくらなんでも唐突な、」

「もう少し此処にいても、」

「聞きたいことも山ほどありますし、」

「……わたしも行つていいですか?」

「連れてってください!」

引き留める声がグレモリー先輩に姫島先輩、躊躇いがちなのがイリナちゃん、ゼノヴィアちゃん、同行を求めるのが塔城にアーシア。

六者六様と云うよりは三者三様、しかしまあ、俺の意見は変わりない。  
い。

「でもまあ、嫁さんの意見だし聞かないわけにいかねーからね」

へらりと笑って、さらば駒王。さよならだけが人生さ！

——ギユ

「行かないで、ください……！」

……ヴラデイ？

裾を改めて捕まえられ、涙目のようになって見上げてくる男の娘に  
思わず狼狽える。

なんだコイツ、この中で一番ヒロインやってるじゃねえか。俺いつ  
の間にコイツの好感度上げてたん？

くっ、だが、俺には行かなくてはならない理由がある……！

「スマン、いくら俺でも、いつ滅びるかわからん世界には定住したくは  
ないんだ」

「——おいちよつと待てホント待てええええ!!!」

アザゼル先生まで引き留めにかかってきた。

やめてよー、別れがっらくなるじゃないのよー。

☆「もうわかかってんだろ？キンクリだよキンクリ」

月並みな感想だが、彼女の白い肌が晒されるさまを前にするとやはりその美麗さには息を呑む。

しかし、胸の膨らみには乏しく、腰の括れも然程も目立たず。

女性として見るにはあまりにも未熟だが、その人形のような容姿にも相俟って少女然とした嫁さんの魅力は幼さという点に目を瞑れば実に垂涎といえよう。

もしくは、己にロリっ子と弄り合うことまじぐに耐性がついたのかもしれない。

ウロボロスドラゴンⅡサンとか元墮天使幼女Ⅱサンとかに感謝の念を送る。ネコミミモード？知らない子ですね。

「……ずいぶん慣れた手つきで服を脱がす」

「先に食われてから何人抱いたと思ってるんだ」

ジト目で見上げてくる彼女に、何も誇らしくない経験を適度に零す。

前々から思っていたが、俺は嘘を吐く人間の気持ちがいまいちわからん。

隠すほど大層なモノを抱えた人間がこの地上に果たしてどれだけいるのかと、意図して必死に隠すことの滑稽さを思えば自分もそうなりたいとは思えないためでもある。

悪意を向けられればそう働くことも吝かではないのだが、別段害意も含みもない相手に己を鎖すことの狭窄さは随分と生き辛そうにか思えなかった。

「少しは悪びれるよ貴様」

「まあ、練習量が多かったとでも思ってくれ」

「あれ、コイツ何気に私より悪党じゃないか？」

今更気づいたのか、闇ダーク・エヴァンジェルの福音様は着ていたゴスロリ系のキャミソールを脱がせられると、それでも俺の胸元へと後ろ背に収まる。

ベッドの上へと腰かけた俺のもとへと、人間椅子のように扱うこと

が彼女のお気に入りであった。

「……ん、そら、あたってるぞ」

「キティがやわこいのが悪い」

下着越しに軽く伸し掛かる彼女の柔尻が、わざとそうしているかのように、俺の逸物を腰つきでくにくにと反らせている。

振り返るように見上げてくる彼女の視線には既に苛むような色は伺えず、しかし良く見知った姉としての師匠としての俺をイジめる気が満々の挑発的な好色を帯びている。

……まあ、ここでされるがままにならないのが経験故のなんとやら。

「うひっ!？」

エカテリーナの平らな胸へと、お返しとばかりに指先を添える。

色気の無い悲鳴を上げた彼女の桃色の先端を、くにくにとイジメ返してあげることとした。

「や、ちよっ、そら……っ、……ん、……っあ、……っふう、……んっ」  
抗議の声も上がりかけたが、されるがままに声を漏らす。

期待しているのは丸わかりで、揉むか触れるかの境界線をギリギリで行き交う状態を繰り返せば、次第に先端が固く主張し始めてくるのがわかる。

それにしても、これで本当に成長しているのだろうか。

自己申告では、この会っていなかった半年の間に少々背も伸びたと聞いていたのだが。

どう考えても二桁届いているかどうか不明な立ち位置の肉体年齢で、こんな女兒を抱くことはやはり罪悪感のほうが勝ってきそうである。更色々殊更不安に陥りそうである。

まあ、辞めないが。

「そ、らあ……っ、あ、まり、ちくび、ばっかり、いじるなあ……っ」  
「ん、じゃあちよっつと顔、こっち向けて」

「えあ、んむ……っ」

首を傾けるように蕩けた声を上げていたエヴァの唇に、噛みつくように顔を寄せる。

舌先を口中へ這い回らせて、上あごから咽喉の奥まで舐り尽す。

彼女が吸血鬼になった経緯は知らんが、600年生きてりや男女関係が何処かで発生していてもおかしくはない。

ナギⅡサンにも一時期アレな感情を持っていた彼女であるし、すでに初物を散らしていたとしても俺に何かを言う権利は無いことも確かだ。

だけど、現状外観が幼女であるわけだし、慣らすことが間違いであるわけではないと思うんだよね。

つーわけで、とろつとろに蕩けるまで愛撫し尽す。

安心しろエカテリーナ、俺は人間筋肉弛緩剤の達人だ！（イミフ。

▽  
▽  
▽

この世界の終焉の理由と理屈と原因を推測と計測で出た答えを語った後に、とりあえずエカテリーナを初めとする御三方は一旦この世界に留まることとなった。

その上での彼女たちの住居問題だが、俺の部屋に来るにしては明らかに居住人数がオーバーしているので行き場がなく、駒王からも近いマンションを数部屋借りることで話が収まっていた。

いや、なんか色々飛んだけど、ほんとにこんな感じで話がついていた。

グレモリー先輩の実家の名義で用意されてるらしい件のマンションは、先輩に続いてイリナちゃんやゼノヴィアちゃんも部屋を借りているらしく、いつそのこと俺も一緒に来ないかとまで誘われた。

ちよつと前までなら出張サービスを学生に勧める怪しい部活なイメージであったから、『それ用』の蛸部屋疑惑が浮かんでいただろうけれど、その疑惑も晴れた今中々に信頼できる立場に収まってくれて一安心。

さすがに同級生をそういう仕事に送らせるような心根までは備えていない。

そして非常に心苦しいが、引っ越しの件は謹んでお断りさせていた

だいた。

実際、矢荷成荘はデフォで備わっている次元の狭間を研究・検証できる丁度いい物件なので、あそこから引越す案は今のところは無いのである。

世界が終わる理由は、大きく挙げて二つほどの自壊原因が隠れている。

ひとつは観測者側の矛盾点の追及による存在否定、もうひとつは世界の支柱不在による自己崩壊だ。

というか、実質原因はひとつのようにも思えてくる。

概念存在がはっちゃけ過ぎてるのだ、この世界は。

ネギま世界でも人々の共通認識なんか由来する鬼号・神変・仏身・怪魔、あれらは世界に滞在する魔力を利用することで実体化していたわけだが、それらの『本体』は飽くまでも世界そのものの外廓や人の認識由来の根源の最奥なんかにはしか実存を許されていない。

元魔法使いの与り知らぬ埒外の事態では、ご本人様とやらが己の歴史に納得いかずにはっちゃけてた事態もあつたらしいが、その辺りは魔女さんが調整を入れたらしいから置いておくとして。

そうやって認識外の世界から「支柱」としての役割を備えるのが、概念存在として実存を許される彼らの存在意義だ。

彼らの受肉は飽くまで一時的なモノに過ぎず、その領分を超えてしまふと間違いなく一つの文化と世界の崩壊を意味する。

何故ならば、世界を維持するために必要なのは第一がそこに住まう人々の世界に対する「認識」であり、その「認識」を支えるための基盤となるのが「概念」という名の根源認識に由来するためだ。

そしてそれらが喪失し世界が崩壊することは、魔力という實在エネルギーそのものの喪失と比べると二の次さんの次でしかなく、ネギま世界においての『魔法世界の崩壊』なんてのは結局何の危機でも何でもなかったことを意味するわけである。

それらは世界が維持されるためにというよりは、其処に生きる者たちが平穏を得るためという前提にしかなくておらず、ぶっちゃけ人が滅んでも『その次』が絶対的にあり得ないわけでもないのだから杞憂

でしかなかつたり例えば『火の鳥』みたいな進化の果てとか。

閑話休題<sup>話を戻そう</sup>

それでも何処かで支柱としての役割を備えるモノが居るのなら問題は無いのだが、第一に歴史の礎としてそうなって然るべき者らの生死が自由になつてゐる以上、はつきり言つてこの世界の先はもう……。

ところで『世界維持』つていう単語が出たところで、アザゼル先生が何やら天界に思い当たるモノがあるとか言い出してた。

人々の信仰を集積することによつて何かを維持しているらしいが、それがこの話につながるかどうかは興味深いが今のところはどうでもいい。

だつて俺にはそこはどうすることもできないのだもの。

天界がなんらかの最終装置としての権利を独占していたとしても、それは飽くまで『この世界の話』であつて俺が介入すべき問題ではなさそうだし。

ちなみに、同じく概念存在として分類されるはずの精霊妖魔の類だが、ネギま世界では人の身に近くなりすぎてゐるらしく、柱としての役割を備えられることもなく実存が見逃されてゐると見た。

言うまでもなく、せつちゃんや小太郎やエヴァなんかのことである。

あとは魔族かな。あいつらもなんか魔法世界に似たところに本拠地構えてるから、こつちで召喚される色々とこつちやにされてる節があるんだよね。何気にこつち寄りの癖して。

しかも各々が召喚に応じてカツコついたり雰囲気出したりと遊びすぎてるから、余計にそれっぽく見える。

あいつら種族全体的に邪気眼系中二病だよ。間違いない。

さて、話を戻そう。

そうして挙げた世界崩壊の理由と理屈と原因と解明方法を答えてみたところ、アザゼル先生は普通に頭を抱えた。

まあそうだよねえ。

第一に犠牲として封印すべきなのがドラゴンだから、兵藤先輩や

ヴァーリさんの中から引っこ抜いて次元の狭間に押し込めるのが一番手っ取り早いし。あとは、他にもいるって言うドラゴン系神器持ちとか？ まさか本物のドラゴンまで生きてるってわけないだろうし。

基本的に、歴史から見てもドラゴンは討伐されることが人の領域を確保する最初的手段であった。

この解決策はそれを準えているだけだが、割とこれが本当に必要なこともある。

というか、存在そのものがリソース食いすぎなんだよ神話の怪物って。

世界の維持のためには尊い犠牲になってもらわにゃ困る。

例えるならば、くだんの神話それぞれで英雄が怪物退治に乗り出すことで文明の進歩と人類圏の確保が為されるわけで、神話の怪物としての代表格に当たるドラゴンなんかは真っ先に討伐されなくては現社会の維持は夢のまた夢だ。どっかにいねーかな、現代に蘇った英雄の血を引くやつとか。

だけでも、さつきも言ったようにこの解明方法ではNGを食らう。わかつてはいたけどね。いいけどさ、率先してやりたいことでもないし。

というか、俺たちが元の世界へ帰るためには、次元の狭間に地続きで航路を確保せにゃならん。

俺がこの世界へ来た経緯をエヴァたちに聞いたのだけど、彼女らも又聞きだから色々曖昧だが、どうにも元の世界というよりは新しく用意した魔法世界でのごたごたで航路上での事故が原因らしい。

この世界でいう処の次元の狭間に相当する箇所で、落盤みたいな事故に遭い俺が遭難。

地続きで多重連結世界間を接続している【航路】だけど、その実は多次元宇宙からの浸食影響をもろに受ける存在法則の異常な箇所だ。ダンジョンとしての体が在れども、長く籠っていると己の存在にすら揺らぎが出るとまで謂われる地域。そんなところで遭難したとしたら、確実に死んだほうがマシな目に合う。

というか、其処から此処にいるってことは、俺普通に一回存在が分



解されて別宇宙に飛ばされてるってことになる。

そのうえでこの世界にこうして存在してるってことは、此処が概念存在の受肉世界ってことを考慮すると、……自力で今の形に直ってる？ あれ、俺人間だよな？ あ、転生者か。転生神の力ってスゲー！（思考放棄）

話を戻そう（切実）。

行方不明となった俺だが、彼女らの持つ仮契約カードバックティオーで生存だけは分かっていたらしい。

というか、まだ持ってたのかよ、返せよ特に明日菜。

そこで居場所を探すべく、『こずえ』とかいう人物に「魔女」経由で依頼をして、先日ようやく存在している次元を突き止められて此処に来たとか。

まあ麻帆良祭で世界樹の魔力を無断使用したとはいえ、別世界のシュテルンを召喚したお人だから今更不思議もないが、手段よりは人脈の方に疑問が浮かぶ。

というか、あの人自身は別に俺が何処でどうしてようが感知してないわけね。逆に安心したわ。

さて、改めて、俺たちがもう一度『安全に』世界を渡るためには、やはり航路の確定は必須の問題だ。

そのためにも、次元の狭間の奥底に壁のように居座っている、たぶんこの世界における「支柱」の役割を担っていきそうな神話時代レベルの怪物に、風穴を開けなくちゃならなくなる。

開けること自体は出来なくはない。

こちらら異世界で経験積んだ魔法使いだ、力量差が目に見えて隔絶しているところの最強程度、ちよつとばかし歯を食いしばれよ、とでも云うようにブレイクできる。

でもそうすると、この世界の崩壊は加速度的に進行する。

帰らないという選択肢はない。

向こうじゃこんな俺のことを心配してくれてる奴らもいるし、何よりこつちに来ちまった三人をきちんと帰さなくちゃいけない。

それに、「世界の支柱」の問題が片付いても、また別の消滅理由が解

決したわけではない。

世界俯瞰観測者らによる、一方的な認識破棄。

いわゆる、『読者アンケート』というやつだが。

……まあ、こっちは気にするだけ無駄だろう。死ぬときは死ぬ話でしかないし。

どちらにしろ、問題を孕んでいる異世界の地で消え行くよりは、勝手知ったるマイホームで心穏やかに逝きたいという我儘なのだし。

回想はこんなもんでいいだろうか。

そろそろエヴァも食べごろになってきているはずである。

▽  
▽  
▽

回想晴らして、此処はとあるマンションの一室。

手淫でくっちやくちやに蕩けた淫蕩吸血鬼(元)が、ベッドの上で顔を赤らめ呼吸も荒く、その手足を力なく投げ出して意識も朦朧としていた。

グレモリー先輩も此処に自室を備えているというのだが、そうなる現実彼女らを監視目的で一か所にまとめたことにもなる。

または、俺に対する人質とか。

でもまあ、悪いことに自ら進んで使うような心持を備えた人たちではあるまい。

色々とやらかしていて俺が碌な心証を彼女らに抱いていないとお思いのようだが、実際彼女たちのことは結構良い方向に評価しているのだ。

そこで共通している彼女たちへの評価が、良い子たちばかりであるということ。

ネギまの世界でもそんな子ばかりで、だからこそ逆レイプ食らつても文句も言いつらかったわけだが、事実、ここいらの世界で共通項でも備わっているのか、彼女たちの企みの果てに陥れられることはあっても、その結果で俺が本格的に破滅する懸念なんて微塵もないのだ。ネギま世界なら俺は基本被害者としての立場だから分けるとして

も、この世界じゃやったことは強姦が大半だ。

だというのに、彼女たちは俺のことを『そうしたところ』へ突き出すこともなく、ほぼ許すような態度でその関係を続けようとすり寄って来さえする。

……これを良い子と云わず何と云えばいいのか。

そんな子たちが麻帆良娘らに何かをしようとすることは、確実に俺への被害や叛意に通じることを理解しているだろうから手も出さなはず、とちよつとした信頼を抱いていたりもするわけだ。

……まあ、実際下手な手を出したら俺がどうするか、を詳細まで把握できないさそうだからな。

アザゼル先生をはじめとした合同の監視体制作ってるようだし、ほんと安心して放置していられる。

事実、下手に手を出したとしても人質として扱える可能性以前に返り討ちに遭う方に思考が傾いていそうだし、現状を正しく認識できる人たちが背景にいるというだけでも結構安心なのだ。

そんなわけで、エヴァにはひとまず帰ってから(事を片付けてから)にしよう、と連絡に来たところで、こうしてとっ捕まった俺だ。

学校も始まったばかりだというのに、明日もあるというのに、半年のブランクは我慢が利かなくなかったらしい。

ソラニウムという謎の栄養素を補給したいと云っていたのだが、その謎栄養素は明日菜やこのかやゆーなが口にしていた覚えがある。

というか、なんでこの3人だけが俺を連れ戻しにやってきたのだろう。

普通に疑問が湧いたので、後で聞くことに決めていた。

……今は普通に思考が働かなそうだしねえ。

「で、もう色々と敏感になっちゃって結構ギリギリなご様子だけど、どうするの？ 続ける？」

よろりと起き上がってくるエヴァの頬へと手を伸ばしつつ、猫みたいにすり寄ってされるがままに肌を晒す彼女に提案一つ。

ベッドの上をにじり寄るように俺の腰元へと手を出してくる彼女は、なんとか気を取り戻そうと雰囲気を変えたいらしい。

「ふ、ふふ……、半年見ない間に、ずいぶんとキチク度が上昇しおつて……。……私は又聞きでしかないが、お前の父親とやらに似てきたんじゃないか？」  
「ぐふ……っ！」

——酷い風評被害を受けた——……。

烏丸は心にクリティカルダメージを食らった。

に、似てねーし、俺、妻と子供を実験動物に回そうとするようなキチクに似てるはずねーし……！

「まあそこは冗談だ。しかし、リアスたちの話を聞くところに、随分と色々と手を出していたようだな」

「あー、まあ、場の雰囲気になされたのもあったけどね。あとは向こうの魅力の度合い」  
「乳か」

身も蓋も無いけど、うん。

女性としては実に食べごろなモノばかりが出揃っているからね、この世界。

ギャルゲーかエロゲーが前身なんじゃねーの？

「とういか、全員の話聞いたの？」

「うむ。自分以外に手を出されていたことをようやく知ったりリアスが随分と愕然としていた。色々葛藤もしていたが」

まあ、俺の子種を孕んでいそうなのって、たぶんグレモリー先輩が第一候補だしねえ。次点が姫島先輩。

バイオリズムの関係上、一回自分のステを改定するとはばらくは元

に戻らなかったり。

アーシアみたいに性欲に魔魅させないようという配慮のほずだったのだが、彼女たち自身の避妊法に懸けるしかないという事後承諾になってしまった。でもまあ、悪魔らにだってそういう手段くらいあるはずだし、俺が懸念することでもないか。

あ、いや。確か姫島先輩は元々孕みたがっていたから、余計に問題は無いのか？

実際、こつちの世界に俺の子を遺すということは『縁を繋げる』ことにも精通するはずだろうし、航路とはまた別種の世界間接続の余剰を構築することにもなる。

……わざわざ俺が言わなくても、アザゼル先生辺りが既に解析していそうだなあ。こつちの説明で色々と思いついた風な人だったし。

「……あれらと比べると、実際貧相なのは自覚しているが」

「いやいや、比べるには色々段階が違う。第一成長途中にあるキティが、そう自分を卑下することもないでしょ」

肉付きなんて無いようにしか見えないのに、女性の肌は随分と柔らかい。

それは子供の体格のエヴァでも変化はなく、落ち込みかけた彼女を抱き寄せるとふわりと腕の中に納まった彼女の柔肌が、低反発の感触と汗なんかの体液で湿った香しさが鼻腔を擦った。

手放したくない、と本能が犇めいているのが自覚できる。

だから、そのまま口にする。

「この世界で抱いたどの女よりも、エカテリーナの方がずっと魅力的だ。あいつらを捨ててでもお前に逢いたいって、ずっと思っていたから帰る手段を探っていたんだから」

「……。う、うれしいが、虜にした女を簡単に捨てるって宣言する辺りは、やはり父親似なんじゃないのか？」

せやから。

やーめーてーよー……。

「エヴァさん、照れ隠しに俺のマインドにダイレクトアタック掛けるのやめてくれない……っ？」

「う、うるさいっ」

項垂れる俺からは伺えないのだが、彼女が俺を批難しつつも照れていることは確実であった。

▽  
▽  
▽

「う、わ……、でかい、な……」

ギンギンにそそり立った我が逸物を眼前に、エカテリーナはごくりと喉を鳴らした。

特に騙す気もないというのに、俺が彼女にその気を持っているという証拠を見せてみると言われた結果がこれである。

ゴスロリチックなキャミソールも取っ払って、黒いレースの下一枚いわゆる「ぱんついっちよう」になった彼女が、何らかの雰囲気を作ろうとしていることが伺えた。

女子ってそういうところあるわよな。

「んむ……」

「うお……っ！」

異論もないのだが、彼女が何やらあわよくば手を加えようかという腹積もりをしていたのは結構明白で、その前提が崩落したにも拘らず、エカテリーナは俺の逸物へその柔らかい唇を添えてきていた。

龟头を舐るその快感に、思わず背筋を衝撃が駆け抜ける。

「キ、ティさん？ そんな、いきなり……っ、き、汚いと思わないのか……っ？」

「つむ、はむ……っ、お前が女子にどういう幻想を抱いているのかは追及しないが、こういうことをしたがる女だっているんだ、……っちゅ、そ

れに、お前だつて私の此処、舐めたい、つて思つたりするだろ……？」  
自分の下着に指先を突っ込んで、自ら手淫を熟しつつ誘うような目で見上げてくるキティは、舌先で先端を舐めながら挑発するように言った。

思いますけども、先ほどまで俺と噛み合っていたその唇で男のモノを銜えている様を見下ろすというのは、こう精神的に色々とクルものがある。

ぞくぞくとした支配欲に似た何かが喉の奥から込み上げてくる錯覚を自制しつつ、俺は俺で彼女にもっと別のことをさせたいと思つていた。

「ん……っ、エヴァ、下、もう脱いじやえよ……っ」

「っぶあ、んん？ 我慢できなくなったのか？ 私のテクも捨てたもんじやないだろ」

「そこで誇らしげなのは男子的にはどーかと……」

俺は苦笑気味にエヴァはドヤ顔で、忌憚の無い会話を交わしつつも、彼女の手つきははずりずりと最後の一枚も剥いで取り去る。

しかし彼女は奉仕を取り止めようという気はなさそうで、下半身をもつるりと露出させながらも唇は俺の龟头から離れようとしなない。

だが一瞬の隙を突き、湿った咽喉が艶めかしく男性自身を興奮させるシチュを鋼の精神で押し留め、股間前で蹲っている彼女の脇を両手で掴み、引っ手繰るように持ち上げる。

幼くも主張する女性らしさと呼べる柔らかさが手のひらへ伝わることを覚えつつ、抱き上げた彼女はされるがままにベッドに座る俺の膝上へとフォークリフトに乗るかのように座り込んだ。

要するに「だいしゆきほーるど」へとシフトアップを果たしたわけだ。

「そろそろ、こういうことがしたくならない？」

「あ……っ」

無毛の陰部を正面から隠すように、幼い胎はらに沿うような形で勃起した逸物が充てられている。

挿入いれするためには、少し彼女に腰を浮かしてもらふことになる。

抱き合った姿勢のまま、持ち上げたときは躊躇ったような顔をした彼女であったが、俺を正面に見据えると照れたように顎を引き、自らの顔をこちらへと寄せてきていた。

「あむっ」

——そのまま、俺の首筋へと噛みついた。

「……………キティさん？」

「あむ…………、こ、このみゃま、ひてひゅれ」

ネギま世界に蔓延った造物主の影響を取っ払った効果で、同じく吸血鬼へと転化する術式の影響をも循環排斥された彼女は吸血鬼から人へと戻った。そんな裏設定がある。

てつきりその後遺症としての甘噛みなのかとも思いかけたが、なんのことはない、単純に照れ隠しで正面から俺を見ることができないだけのようだった。

ずり、と音が鳴るわけじゃないが、腰を浮かせた彼女の胎の前に沿わせられた男性自身が、滑るように膣穴の入口へと急接近しているところであつた。

正常位では潰してしまうかも、と思つたからこそその姿勢選択であつたが、彼女の功を奏している模様である。

「んじゃ、いくぞー」

「む、ん…………つ、ふみゆう…………つー」

ずぶ、じゅぶ、にゅぶつ、と狭い肉襞を押し退けて、侵入を果たすことの快感。

窮屈な膣穴を半ば強引に力ずくで開拓する肉棒は、明らかに年齢不相応な巨軀にて侵攻を続けているのだと、その感触が明白に教えてくれている。

「ん…………つ、ふ…………つ、うむう…………つ、ふ、うみい…………つ」

しかしその気持ち良さは今までの初物との比にもならない。

ぴたりと鎖されていた細小の膣穴は、程よく高い子供の体温をそのままに、ぬるま湯で洗うかのような快感を教えてくれるのだ。

また柔らかい肉襞が、他を知らないと物語っていたような膣穴が、自分の形を覚えてくれるようにその形へと成ってゆくさまをありあ



りと示す。

無論、彼女がほぐし切っていたと自負していたはずの膣穴は、エヴァ自身の潤滑液で充分に開いていた。

だがそれでも、

「つあ、あー、あつ、んあつ、あーつ、あーつ、あーつ」

肉体の未熟さは成熟した精神では中々に補正も難しく、性交するにはまったくもって未発達な状態でしているのだ、と全身で叫んでいた。

それを押し退けてでもやらねばならないと、要求していたのは他にもない彼女自身だ。

要求していたし、欲しがっていた。

噛みつくことで自制を促していたであろう何らかの箍は外れ、エカテリーナは膣中を往く異物感に陶醉したような喘ぎ声を漏らす。

気づいた時には逸物の根元に届かぬところで、こつん、と最奥へと先端が届いていた。

「これいじょうは、つむり、だな……っ」

「くくっ、くくはっ、あ……っ」

鎖され窄んだ子宮口が脈動を刻みながらも、そこはまだ準備ができていない、と訴えているのがわかった。

侵入が留まったことで感覚が静止をかけたのか、呼吸を整えるように抱き着いたエヴァが身を震わせる。

しばらくはこのままかな、と経験則が俺の中で囁く。

しかしそれとは裏腹に、彼女は俺の耳元に、擦るような声音で囁いてきた。

「う、ういて、いい、ぞ……っっ」

ぞく、と神経が逆撫でられるような感覚。

改めて見直した彼女の貌はいっしか、淫靡に嗤う雌のそれへと変貌を果たしていたのであった。

▽  
▽  
▽

二桁に届くかどうかともわからない年頃の少女に、大人と呼んでも差し支えの無い体格の褐色肌の少年が押し掛かっている。

少女の肌は陶磁のように滑らかで、解きほぐされた金の長い髪は女神も羨むほどの艶やかさを見せる。

そんな少女の白い脚は少年の腰に絡みつくように伸びており、少年の腕が彼女を離すまいとベッドへと押し付けつつも、その背中と後頭部を支えるように抱えてその腰を前後する。

だが少年は、明らかに未成熟な彼女の膺を、決して乱暴には扱おうとはしていなかった。

その証拠に、少女は彼の名を艶めかしい声音で何度も呼び、返事を返すように少年の腰が沈むも、ふたりの結合部に覗ける褐色の肌は明らかに根元までの侵入を果たしていない。

しかし天井から伺えられればそれは、まさに「種付けプレス」などとも呼べる体勢で性交を果たす、実にケダモノ然としたセックスであった。

「そ、らあつ……！ もつとつ、もつとおくまでえつ！」

「が、まんしろよつ、キティ……つ！ これ以上押したらつ、裂けちやうだろ……つ！」

「んあつ、あつ、はひいつ！ あうつ、あつ、ふみゆうつ！」

少女の嬌声は返事にはなっていない。

そして、彼女の腕は少年の背にまで届いていなかった。

体格に差があるために、少年の身体を抱こうとすると動いてもらえないことに気づいてしまったためだ。

それをしたがっている素振りも見せつつも、少女の手は胸の前で手持無沙汰に留まっており、肉付きの無い胸元の、しかし桃色の先端が喪失されない魅力を醸すようにその手によって見え隠れしている。

時折ちらりと覗くそれがピンと主張している時点で年相応とは言い難い反応であろうが、これはこれで幼女趣味の紳士が大歓喜するシチュでもあった。

少年は残念ながらそのマイノリティには属していなかったが。

「んい……つ！ ひゃあう……つ！」

だが、そうしてちらちらと見え隠れする様は、彼の性的興奮を酷く刺激したらしい。

氣づけばちゅばちゅばとその平らな胸を、桃の先端を吸うように少年が嘸みついていた。

「そつ、そらあつ、だめえつ、まだ出ないい……つ」

出れば良いのか。

少女の悲鳴は決して嫌そうなものではなく、むしろだからこそいいのだと肯定するようで、少年を酷く甘やかすような発言にも聞き取れた。

流石は一時期とはいえ、姉として彼と付き合ってきた元エターナル幼女であった。

「ん、ぷは、おいしいよおねえちゃん……つ」

「はう……つ」

体を屈めてまで食らいついたりちゅばちゅばに続く、今まで呼んだことのない『おねえちゃん』という呼び方。

少女は見事にノックアウトし、それまで淫靡であった雰囲気が一転していた。

手持無沙汰だった手のひらで、自分の顔を隠すように覆う。

欲しがっていた声音は鳴りを潜めて、代わりに少年の腰を動かす粘膜を掻き混ぜる水音が部屋中に響く。

感情を擽るような快感が彼女の中を駆け巡り、その為かは知らないが少女の喘ぎ声は更に激しく部屋中へと響いていった。

鎖されていたはずの未熟な胎の蓋はその快感で開ききっており、子供を孕む準備ができていると主張するように、彼女の感度を急浮上させる。

それはそうした経験に疎い彼女にとっては驚きでもあったが、雌の本能はその咄嗟の状況でもしつかりと起き上がり、彼女の口調を普段とは全く違うモノへと造り替えるのであった。

「っふあつ!? ふああああつ! らめえつ、くるつ、きちやうううつ!  
! いくのおつ、わたし、いつちやうううつ!」

「ああ、いいぞつ、いけつ、いっしょにいけつ!」

「あつあつあつ！ んんっ、んっ！ あつ、あああああああ  
あつっっ!!」

膣中に欲しがっていた彼女に応えるべく、少年もまたタイミングを  
合わせて、彼女が叫ぶ瞬間に絶頂を果たす。

熱い精液が、噴出するマグマのように彼女の膣内へと注がれた。

開いた蓋のその先へと、盛り付いたケダモノがそうしているよう  
に、奥へ奥へと止め処なく注がれてゆく。

幼い体を孕ませるとか、彼女と抱き合う以前までは決して届かせよ  
うとしなかったはずの決定打を、彼女の身体へと刻み付けるように少  
年は、全力の欲望を少女の膣中へと吐き出していた。

「あつ、あつ、あ……っ」

その瞬間だけは少女も手を伸ばし、少年の背中へと抱くように廻  
す。

それは完全に本能に身を任せた仕草で、自然に沿わせられる『愛』と  
やらが補う側面でもあるのだろう。

『ひとの摂理』から外れて600余年、少女はようやく『ひと』に戻  
れた。

『その先』が『幸せ』であるかどうかは、結局のところはふたり次第  
なのであった。

「世界が滅亡する理由を懇切丁寧に説明したら長いから3行でと却下された。何を言ってるのかと思いきや他の面子もそんな感じだった。疎外感とかイジメとかじゃねーもつとうすら寒い狂気的なモノを感じたぜ」

「ロリコン……」「愛人……」「ていうか3股どころじゃないよね……」「俺の知ってる限り候補が7人いるぞ……」

ドーモ、朝から針の筵むしろ たむろに屯たむろさせられている烏丸です。わかつてはいたけど、クラスでの俺の評価が低空飛行にもほどがある。むしろ撃墜？

始業式早々キティの爆弾発言で席捲した噂はかなりの方向へと被弾して逝ったらしく、翌日に当たる今朝から連れ立って登校したところを見せつけてしまったのが致命傷なのか風評回復は不可能の様子。

クラス中からの視線で評判を集め捲まつてるぜ、ヒューウー！

「……やべーな、俺このままじゃ二学期はボツチ確定じゃねーのか？」  
ハッと気づいた驚愕の事実には、体育の時間とかがかなり憂鬱である。

こんな風評被害で、二人組作ってー、とか言われたら取り残される感が大。

烏丸イソラの憂鬱。冒頭やり直さなくちゃダメ？ サンタクロー  
スとか語って美少女のクラスメイトに日常を引ひつ掻き回されて『ヤレヤレだぜ』ってやらなくちゃダメ？

……ああ、割と普段からそうだったわ。俺もスタンド使いだしね。

帽子とか学ランとか借りに行かなくちや。

「お前は麻帆良のころからそんな感じだったじゃないか。……とか、本当にこっちで友人作れてるか？　ちゃんとやれてるか？」

「違うからね？　俺麻帆良なら友達いたからね？　因幡とか因幡とか、あと因幡とか」

「白兔シロウサだけじゃないか。元ルームメイトはどうした」

隣の席に居着いたキティに親戚のおばちゃん張りに心配されるが心配ご無用。

下手な風評さえなければ、生活だって結構楽しくやってるのです。

そう答えたら、ハハハ云いおるわこやつ、と鼻で笑い飛ばされる。俺の怒りが有頂天。

え？　大柴くん？　いつか俺のことをスタンドで半殺しにしたオタクな友人なんて覚えがないなあ。

「やっぱり元のところでもそんな感じだったのですか……。まあ予想はついてました」

「違うもん！　ほんとに友達いたんだもん！　嘘じゃないもん……！」

「所沢の幼女張りに喚くな。その否定の仕方だとお前の友人イマジナリーフレンドになるけど良いのか」

とつとこそ沢の森の精霊ま（ハム助に非ず）。

ええやん。麻帆良だつて所沢にあつたんだし。

そーいえば森の精霊で思い出したが、いつかのオコジヨは果たして何処へ消えたんだろう。

反対隣の白髪幼女こと塔城にツツコミを受けて反論すれば、ネタがわかっているキティたんが即座にツツコミを入れてくれた。

いいよねえ、こういうネタが通用する生活。

ログハウスで一緒にジ●リ鑑賞したのを思い出すわあ。

「というか、けっこう平然としてますよね。事実無根と言いたい難い噂が学園中を蔓延っていますがいいますか?」

「否定しない辺りさすが噂の助長役だよな」

「そんな……、照れます」

「仲良いわねアンタら……」

俺の頭頂点ぐりぐりにイヤンイヤンと身を捻る塔城の遣り取りを見てか、俺の前席に着いた明日菜が呆れた声を上げた。

なお後ろの席には再会からもお馴染みに物静かなアキラたん。背後を取られてる。というか包囲網が完成してる。

二期期となつて席替えをしたところ、くじではなく好きな人と組んで、が早々に働いたために席順がこんな感じになっていた。

これは新手的のスタンド攻撃にちまいない。

決して、以前の席順が思い出せなくて辻褄合わせの理由を持ってきたとか、そんなわけはないはずだ。

「まあ色々あるけど、ずっとこのままってわけじゃない。そのうちなんとかなるし、むしろ利用できる」

「利用ですか?」

「ほら、キティも明日菜もアキラたんも、美少女じゃん?」

「わたしは?」

「え、なに聞こえない」

塔城幼女が説明に口を挟むが無視。

間違つた内容が蔓延っている気もするが昨夜は彼女相手にハッスルしてしまったのでロリコンと言われても言い訳の仕様もねえ。

だがこの噂が蔓延っているお陰で、学園内の男子または女好きの女子からのモーションは無いと見て間違いはない。

俺の所有モノという認識がある状況で口出しするような空気の読めない奴はさすがにいないだろうし、それでも手を出してくるといふならよっぽどのモノ好きか俺の敵だ。

わかりやすい敵役は、この無駄にスパゲティな人間関係になった俺の生活上のストレス解消に実にちょうどいいのである。

加えて、俺にこの状況からモーション掛けようっていう奴もモノ好きか敵かで楽な判定ができるからなー。

その『敵探し』の部分を伏せて語ると、

「……あたしらモノ好き扱いつすかー」

「うーん……、確かに反論の仕様もないですけど……」

塔城の前で明日菜の隣の樋笠さんとキティの後ろでアキラさんの隣の岡崎さんが揃って乾いた笑みを浮かべていた。

そいえばいたね。友達甲斐のある女子友が。

俺にこんな噂が出ているにも関わらず離れたりしない距離感がスバラしい。アタシたちズツ友ダヨ……！！

なお、ギヤスパーは塔城の後ろの席でアイマスク中である。

ほんとにそれで見えてんのか。

▽  
▽  
▽

マスター  
師匠と烏丸くんが今朝一緒の部屋から出てきたことから、サクヤハオタノシミデシタネ状態ですべてを察し、少々歩きづらそうに烏丸くんの腕にしがみ付くような師匠を眺めつつ登校した私たち。

グレモリー家謹製のマンションは防音設備も完璧で、リアルタイムに乱入することは叶わなかったがお腹に残る異物感からか足元が覚束ない師匠を見るに、やはりloniは流石に堪えたのでは、と心配になってしまう反面その顔から伺える幸福感は実に共感しやすいものであった。わかります。

ところで、今更ながら私の師匠は彼女本人ではないのだが思わずマスターと呼んでしまう。

変な顔を一瞬されるも、大体烏丸くんの所為と理解したのかすぐに納得の表情をしてくださったエヴァンジェリンさんである。



この以心伝心っぷりよ。

さて、昨日は世界崩壊の理屈について訥々と説明されたわけだけど、正直どうにもならないのでは、というのが私の感想だ。

話を伺うに、この世界が生まれたこと自体に問題があるようにしか思えない。

烏丸くんたちの出身が異世界であるからこそ、異世界という此処とは違う世界の実存が確認されたからこそ、彼の話には信憑性が高まっている。

アザゼル先生が反論をせずにな得したというのが第一だが、私も含めて彼の話の詳細を理解できたのは先生だけなのではなからうか。概念存在、とやらに当たる私たちの実存そのものを否定された気がしないでもないが、事態解消のために私たちを直に討伐するような手段を彼が選択しようとしていないことから、危機感よりは困惑の方が比重は大きい。

いまいち危機感を連想できないのは、偏に烏丸くんにやる気がないことが原因ではないかとも思われるのだけど。

かといって本当に世界を救うのだとすると、たぶん真っ先に狙われるのは兵藤先輩だ。

『概念存在』を『神話存在』と置き換えて説明し直され、それに匹敵する神器持ちが一番役に立つ。と世界救済というよりは家計の遣り繰りにも似たニュアンスでモノを語られた気がするが、それで排除されるのではさすがの変態先輩でも納得してくれはしないだろう。

それもこれも【世界の支柱】が己の役目を全うしようとしなからだろうが、とやる気がなさそうに語られましても、その話の信憑性そのものは彼と同郷の方々であっても小首を捻るモノであったことだし。

なお、彼の世界では【12の人王】とやらが【支柱】の役割を担っているらしい。

それも彼女たちの中では初耳であった。語れば語るほど信憑性が薄まってゆく。それでいいのか烏丸イソラ。

誰も彼もが初耳すぎて、加えてご本人にもやる気がなさ過ぎて、行

動の指針がいまいち掴めなくなっていた状況の中、師匠は云う。

『こいつはこんなんでも、向こうの世界で格別に当たる【魔女】に携わる者でもある。私たちにとっては初耳でも世界の在り様を把握する者たちの中では真実で常識であるのだろう。そんな理解力があるくせに言葉も説得力も足りないコイツだが、ついでに言うと言決断力と行動力が無駄にあるんだ。やろうとしたことはやり遂げるし、その下準備も欠かさない。……結果として魔法使いつていう一つの種族の文化と文明が向こうの世界ではキレイに刈り取られた。お前たちも要望があるなら言っておけよ。果たそうとする目標のためなら大体の犠牲を孕んでも事を為す莫迦の所業は、傍目から見えて爽快でも本人たちにとっては災害そのものだからな』

『どんな世界から来たんだよお前ら怖えよ』

アザゼル先生の言葉がみんなの心情を端的に物語っていた。

続けられたフォローでは、流石に烏丸くんも愛着の湧いた相手にはそれなりに手心も加える、と教えてもらえたが、何より本人が竹を割ったようにからりとした性格であるために、面倒くさいことは適当に済ませようという気が隠されもしていなかった。

交渉の末に、最低限でも人命を犠牲に入れない方法で世界の自壊を防ぐ方法を要求したわけだが……。

「……尊厳も順守してもらおうでしたかね」

「えー。これ以上手間をかけるってんなら関わんねーよ、俺は」

伝授された方法の下準備を終えて、部内のそこかしこから烏丸くんへジト目が向く。

リアス部長やヴァーリさんの目も厳しかったが、割と師匠の視線の方が中々鋭かった。

それでも納得してもらうしかない、とアザゼル先生の説得も相俟ってこの事態へと成ったのだが、素直にそれぞれの神話の主神を次元の狭間へ幽閉した方がずっと手早かったのでは、と少々思ったりもする。噂だけど、ギリシヤはどこもかしこもアレな人たちばかりだし、

北欧のお爺ちゃんなんか結構なスケベ根性が根強かつたらしいし。あー、でもインドは難しいのかしら。さいきよーらしいし。

「くそ……、こんな屈辱、久しぶりに味わったぞ……！」

「スマン、ヴァーリ、耐えてくれ。これは流石に秘匿するから」

「あつたりまえ当然至極だろ……！」

実は駒王に通っていたらしいヴァーリさん（女性だった。驚きだった）に低姿勢で謝りとおすアザゼル先生。

私たちにバラされたが、カオス・フリゲート禍の団のスパイ役を担っていたらしい。

そしてそれを見抜けなかったリアス部長。……悪魔の矜持とはいったい……。

「で、これ何か名前でもつけるんですの？」

「意外とノリノリだったわね、朱乃……」

「リアス、この程度を犠牲と呼ぶくらいなら初めから諦めた方がマシよ？」

一仕事終えて何故か艶々としている朱乃さんに、呆れた声を上げるリアス部長。

朱乃さんはこの夏で何か成長したような気がする。何かあったのだろうか。

「そうだな、シンデレラガールズとでも呼んでおくか」

「おい」

アイドルマスター

「偶像崇拜に繋がるわけだし、ちようど良いだろ」

「……ご本家が聞いたら怒るぞ……」

「聞かないことだからへーき」

師匠が何故か烏丸くんに怖い目を向けていたけど、ネーミングに何

か問題でもあるのだろうか。

聞くべきか聞かざるべきか迷い悩む中、世界救済の下準備は着々と進んでいった。

▽  
▽  
▽

おっす俺イツセー！ 俺と契約してセフレになってよ！ ただし美少女限定な！

治療ついでにハーレム王を目指す者としてフェニックス家にお世話になってきたんだけど、アレだな、ライザーのやつは意外に気が合ったな。

考えてみりや俺の先を行ってる先輩でもあったんだし、泊りがけついでに色々と話も聞いてきたんだ。

女の子の口説き方とかは参考にならなかつたけど、体験談なんかは為になったぜ。

いつか部長やアーシアで試したいプレイとかな！

「あれ、イツセー久しぶりだな」

「随分長めに休んでたみたいだけど、体の調子は良いのか？」

「おお、松田！ 元浜！ おう！ 色々あつたけど万全だぜっ！」

脳内彼女らから下着を剥ぎ取ったり舐めたりと妄想を膨らませているところへ、懐かしの級友たちの姿が。

俺だけ夏休みが一週間超過しちゃったけど、部長は学校側へ上手く説明してくれていたみたいだ。

そーいえば、泊まり初めのころは同居していたレイヴエルだけど実は高1だったらしい。

俺より先にフェニックス家を出発し、駒王へ行くと転校してきたらしい。

ふっ、もてる男はつらいぜ。

可愛い後輩がまたできるのはどんと来いだけど、そんなに俺と付き

合いたいのかい小鳥ちゃん？

フェニックス家で顔を合わせていた時もずっと笑顔で、たまに偶然を装って着替えや入浴にブッキングしちまった年下系金髪美少女だ。その時だって笑顔で対応された。

アレは俺に惚れてるな。間違いないぜっ！

さすがにレイヴェルの部屋までは侵入しなかった（つーかできなかった）けど、元より実家で初体験とかムードのかけらも無いことをするような野暮さは持ち合わせてないからな。学内で会う時が楽しみだなー！

「つーか、なんでアーシアちゃんと一緒に来なかったんだ？ 今日も別々っぽいし」

「そうだぞイツセー！ お陰で話しかける機会がなかっただろうが！

美少女との朝の会話を亡くさせるとは友達甲斐の無い奴めー！

「俺の需要そこだけかよっ!? 俺抜きで話しかけられずにいたヘタレの癖して偉そうにしてんじゃねー！」

「ヘタレじゃない！ お前っていう理由がないと『あれ、このひとなんでこつちにきたんだらう、キモイ……』とか思われたりするかもしれないだろーが！

「アーシアはそんな子じゃねーよ!? つーかヘタレそのものだろーが！」

元浜の絶叫に俺の叫びが相俟って教室内へとこだまする。

幸いにも、この会話はまだ教室内に姿が見えないアーシアに聞かれることは無さそうだ。

ついでに言うと、アーシア共々元修道女組が揃って居なかったし。

つーか、俺だつてアーシアと久しぶりにいつしよに登校したかったよ！ けど、用事があるらしいから早めに出ちまったんだよ！ また無理に引き留めて空気悪くなりたくなかったんだもん仕方ないじゃねーかアアア!!

「おめーら落ち着けよ。それと元浜、今日は会話がなくてラッキーかもしれないぜ？」

松田の目がにやりと歪む。

ロリコンである元浜にはロリ系とも言えそうなアーシアと朝の会話ができないことが悔やまれているらしいが、松田にとってはまたどうにかなるだろう、という推測で目先の『良いモノ』を得ようとする傾向にある。

さすがは元写真真部。被写体を探すことに掛けては右に出る者はない、と意味深に豪語するだけの胆力を備えているだけのことはある。

「そ、その顔をするときは、新しい【お宝】を発見した時のモノ……！」

まさか、マツダIIサン！」

「括目しろイツセー、此れこそが至高の一品だ……ッ！」

その言葉と共に差し出されたスマホ、そしてそこに映る動画は………、

——軽快なサウンドが流れ出し、リズムに合わせて少女がくるりとターンする。

振り返ったその少女は何処かで見たとような目に鮮やかな真紅の髪で、髪色に合わせたのか赤い水着を、いや、見栄えを計算しているのか、その赤は髪色と比べてももつと薄い。

例えるならばローズレッドと呼べそうな色合いのビキニを纏った少女は、よりはつきりと主張される大きな乳房を惜し気も無く見せつける。

ブラで隠されているというのに乳房の下半分がはみ出そうなそのポリウームを、両腕で挟むような形で主張している。



その姿でさらに釘付けとなった。  
そしてハートを狙い撃つような仕草とウインク。  
曲はサビへと移ってゆく。

『~~~~っ~~~~っ~~~~』

両腕で乳房を挟み、片手を上げてイエイと跳ねる。

それだけでも視覚の暴力なのに、ゆつくりとスキップするダンスに  
続けて、前屈みとなって開いた手のひらを横に振れば、一緒になって  
たわんだ乳房もふりふりと揺れる。

揺れたそれを隠すでもなく、少女たちは自ら見て欲しいように指さし、  
たぶたぶと小刻みに持ち上げる仕草。

指でハートを形作り、前屈みから直した姿勢でなおも押し上げるように  
胸元へと寄せる。

おおきな彼女たちのそれがはみ出るように、よりはつきりと形を変えていた。

それでひと段落、また同じように両腕で乳房を寄せて、片手を上げて  
イエイと跳ねる。

揺らした乳房を寄せ直すような視聴者の視線を腕だけで抱き寄せる  
仕草の後、囁くような格好で前屈みとなって曲は終わる。

そのときの口元には、喜色に満ちた感情ではつきりところ示していた。

『——スケベ♪』

「——はっ……!」

一曲分しつかりと魅入ってしまった、終わった後にようやく我に返る。

な、なんか自分が遠いところに辿り着いていたような、自分とは違う『誰か』が後ろの方から状況を報告していたような、変な感覚を味わってた……!



それくらい衝撃的で、これ以上ない『お宝』じゃねーか……っ！

「ま、松田ア！ これ、これ何処で手に入れたんだっ!? もしこれつきりってんなら売ってくれっ！ 言い値を払うっ!!」

「ははっ、やっぱイッサーなら食いつくよなあ。安心しろよ、手に入れる方法ならちゃんと教えてやつから。まあその前に、とりあえず鼻血を拭け」

云われて、どばどばと己の鼻からリビドーが溢れていることに気づいた。

だが、悪い気はしない。

だってひっさしぶりだろ、此処まで腹にクモるモノはよお……ッ！

「とりあえず、これは公式の動画だ。とあるサイトに登録して、彼女たちのグループリンクに進めば誰でも保存できる。ただ視聴期間が限られてるらしいからな、サイトの登録料はそれほど高くないが、月額で支払う必要がある。まあアップデートはこまめにやるらしいから動画を落としたりそれで終了、ってわけでもないし。より素晴らしい動画を順次更新していつてくれる出来栄だし、高い買い物とは思わないがな」

云われたサイトを自分のスマホで探し出し、其処に映し出されるメニューバーを、先ほどの少女たちのプロフィールを目を皿のようにして読み進める。

ふむふむ、赤い髪の子は『アリス』ちゃん、銀髪は『ヴィオラ』ちゃん、黒髪の子は『早苗』ちゃんか。やっぱどこかで見たとような覚えがある子たちだなー、親近感湧くわー。……っっておおっ！ スリーサイズ載ってるじゃん!? アリスちゃんも数字的にすげえけど早苗ちゃんが100センチオーバー!? やっぱなー！ でかいと思ってたんだ！

「でもやつぱり俺はアリスちゃんだな！ センターだし、一番目立ってるし。なによりエロカワイイし巨乳だし！」

「いやいや、早苗ちゃんの方が良いに決まってるだろー？ ヤマトナデシコ、って感じだし、一番でっかいのが彼女だぜ？」

「お前からちっぱいの魅力がわかってないな！ 恥ずかしそうに踊るヴィオラちゃんが一番に決まってるだろうが！」

「は？ ちっぱいっつーか、あれは板だろ」

「あ？ 今なんつった？」

一瞬でメンチを切り合う松田と元浜。

おいおい、朝から喧嘩はやめろよ、みんな違ってみんないいじゃないか！

そう止めようとしたところで、

「——おい」

「二——え？ がぶっ（ふぎいつ）（ひでぶう）!?!」

背後から三人同時に殴り飛ばされた!?

下手人は皇白流。いつの間にか背後に来ていたクラスの眼鏡女子が、無言で顔面パンチを繰り出してきていた。

つーか朝とはいえ悪魔の身体能力に匹敵するコブシの威力って

……!

「朝から低能な会話はヤメロ、殴りたいのか」

「もう殴ってるからア！ いいじゃねーかよ！ モテない俺達にはこれくらいの娯楽があつたつてエー！」

「だいいちスメラギ！ お前には直接関係ないんだからいいじゃないか！」

「そーだそーだ！ ヴィオラちゃんに匹敵しない眼鏡ちっぱいは黙ってろ！」

「――よしクロス」

ヒイツ!? 元浜の言葉でハイライトがオフに!?

今まで味わったことの無いくらいの威圧感が俺たち三人に襲い掛かる……!?

やめてー! 悪いのは元浜よー!

コカビエル以上の命の危機をとばっちりで受けたその日は、一日中回復できなかつた。

▽  
▽  
▽

「で、この微妙にいかがわしい動画が、いったい何の役に立つの?」

アザゼル先生という専門家の反対がなかったために押し切る事が出来たが、如何にも矢面に立たされていたグレモリー先輩が非常に苛立った声を上げている。

局部は最低限守り切つたし、撮影の最中に水着が外れた動画は別枠で置いてある。ついでに全力の認識障害が施されているので顔見知りにも気づくことが出来ない完全防備仕様だというのに、彼女を筆頭に女性陣には不評らしかつた。

かつての世界から提供された動画の撮影と専用サイトの作成を終了し、改めて全員に向き直る。

「嫌がるのもわからなくはないけど、これが一番手っ取り早いんすよ」  
「この明らかなセクハラ動画が?」

先輩はまだ納得がいかない様子。

まあキティの話じゃ俺言葉が足りてないらしいからな、かといって滔々と説明しても理解してもらえないのはどうかと思うのだけど。なんで話を通じないのがままだのかしら。そらくんマジご不満。

というか、グレモリー先輩の心情にはまた別の何かが混じってる気

がする。ひよつとして子作り問題？ グレイファイアさんあたりから説得してもらおうか……ああいや、こういうのは感情の話だからなあ。誰かに説得されてすぐに納得できるんなら、この人ももうちよつと要領よく生きてるはずだろうし。

大きなお世話ですね、そうですね。

「世界の支柱として必要なのは強さじゃなく不滅性、だから概念存在がそれには一番相応しくて、それらが次々受肉してる現状は危ういといしか言いようがない。これくらいは理解できましたよね？」

「そうなの？」

理解してください。

眉唾にしか聞こえない所為で信用得てない感じがするけど、その辺り含めて大体が先輩自身の気の捉え様に携わってくる話なのでスルーを心掛け話を続ける。

「まかり間違つて討伐されるような奴じゃそもそも意味がないし、『世界』というものが『認識』の副産物である以上、人々の思念の流動に呑まれるような希薄さじゃ話にならない。必要なのは『御旗』で、実存じゃないんです」

12の人王は概念存在の柱としての役割を補助するような役割だから、あつちの世界での『支柱』は明確には彼らとは言い難いのだね。

なんであんなめんどくさい造りになってんだろ、誰がああしたんだろうな、あの世界。

「さてそんな御旗として、これまでも人類がやってきた方法を踏襲したのが今回のこちら。いわゆる「偶像崇拜」です。適度なエロスで男子のリビドーを驚掴みにし、そのあふれ出る思念性欲からもたらされる魔力がよりよく使い回せられるようなシステムを今回は構築。人外

の皆さんは詳細をそもそもはつきりと捉えて居なさそうですがね、魔  
力つてのは造るモノです。人以外に備わってるだけの力の根源とか  
そういうモノではないんです」

使い回した魔力を直に支柱、というか次元の狭間そのものへ働かせ  
るのが今回の目的。

世界が茫漠かつ漠然としてるのだから、その外殻を補強するわけ  
だ。

そうすることで【航路】もより確固として維持されて、無茶に次元  
に穴を開けても即崩壊するようなことには繋がらない。

先輩たちという【偶像】が存在し、それを支援する人々がいる限り、  
このシステムは半永久的に動き続ける。

一億人が10円づつ支払えば戦車が買えるように、ただの絵画であ  
るはずのモナ・リザが人々の意識によってフォークロア<sup>魂</sup>を得たりした  
ように、人の思念は莫迦にできない。

人の数が動けば相応に世界も変動できる。

やべーな俺、今回も働き過ぎじゃね？

「魔力が必要ならそれこそ私たちにそれを補填するように頼めば  
……、」

「ノルマみたいに大多数の神族魔族にやらせるよりも、人が自分から  
やろうとすることの方が成功率はいいんすよ。人をやる気にさせる  
ことが大事だつてことです」

それに先輩が云うその方法だと、初めはやる気になっていたとして  
も絶対に後々回転率は悪くなる。

停止せずとも、人の意図で動かした場合間違はなく鈍重になる。  
そんな不安定さで支柱の代わりを務めさせられますかい。

「……話は分かったが、それに俺が関わる理由はなんなんだ？」

と、横で聞いていた同じく納得のいつてない顔をしたヴァーリさんが口を出す。

彼女にも同じように水着を着てもらい踊ってもらったけど、その胸部装甲から明らかな差が目に見えて不憫であった。

実際、彼女は撮影中もずっとやりたく無さそうだったしなあ。

「……数合わせの色合わせですかね？ 他の面子は別の纏まりで推すつもりなので、少しだけ都合が悪かったというか」

「ほお」

「あ、新しいメンバーの都合がいたらいつでも代わってもらっても構いませんよ？」

こちらもやる気の問題だというならば嫌々やつてもらわなくても構わない。

グレイファイアさん辺りに頼もう。

銀髪だし、ヴァーリさんと違って胸でかいし、この面子ならばより稼げる！

「よしわかった。——死ねエゲス野郎オ！」

「ぐへえーっ!？」

なんで殴られたの俺エ!？

「これからのことを考えるためにもいつかいつか今までのことを振り返るべきだと思う」

「4姉妹かいぎー♪」

「姉妹じゃねーでしょーが」

「まあフィンキということだ」

何処かの中華系ビブリア書ホリック中三姉妹みたいなことを口走り、そんなヴァレリーにツツコミを入れるのはミッテルト。

それをまあまあと執り成すのはディオドラ・アスタロト改めアスタ・ロツテ。元々『聖女』と類別される敬虔な少女らを肉体的にも精神的にも貶めたり墮としたりすることを趣味としていた鬼畜少年だが、烏丸の手によってTSさせられて責め落とした少女らの記憶を追体験した所為か今ではすっかり角が取れた中学生くらいの体格を持つ中世的な美少女である。心が折れた、とも云う。

なお、4と銘打った割にこの場教には彼女らの3人しか姿は無かつた。

「夏休みが終わってしまってそら様もご多忙のご様子ですし、以前に提案されていた通り自己判断でこの先を切り切りましょー」

「考えてみたら、夏休みの宿題みたいなノリで大体の暗躍を叩き折られたんだよね僕ら……」

ヴァレリーの科白に想起するように、ロツテは妙に具体的な解釈でげんなりと云い得ていた。

元々禍カオス・ブリゲードの団に通じていたことも相俟って、実害が伴った実に身に積まされる言い分である。

そんな彼女はさておき、はい、とミッテルトが顔の横へあまりやる気の感じられなさそうに小さく手を挙げる。

「それは知ってるけど、具体的にどうすんの？」

「れっつ、平和への架け橋♪」

「……可笑しいな、何も影の無い科白のはずなのに、そら様に云われたみたいにつつすらと怖い内容を孕んでる風にしか聴こえない」

ヴァレリーの科白に追憶が連鎖でもしたのか、ロツテは眩きつつ背筋にうすら寒いモノが走るのを実感していた。

そもそも、烏丸にとって『この世界』で起こることなどは完全に二の次であった。

彼の目的は己のいた世界へ帰ることが主題であり、それ以外に手を出している理由は暇つぶしか趣味か、どちらにしる場当たりのモノではない。

しかしそこは彼個人の生き方からくる事前準備を須らく行う本領発揮が全力稼働し、彼よりも場当たり感の強い事前準備の足りない者たちが『積み重ねの足りなさ』が前提となつて失敗や敗北へとつながっている。

前提条件が釣り合えば勝てない敵ではないのが『烏丸イソラ』というキチガイである。

これまで常勝無敗に見えていたのは、単純に敵方の努力不足でしかなかった。

そんな『世界』に対して、その想像を如何無く発揮した烏丸は基本的に容赦をしない。

確かに二の次ではないが、だからこそ其処で抗おうとする者たちを積極的に排したりはしようと思わず、むしろ『其処で生きているのだから』とこそ本人らにこそ責任を贖ってもらうべきだと手間を拡げるのが烏丸である。

その世界に遺されるヴァレリーを筆頭とした『彼に通じた者たち』の為に何かかを、と彼は『指標』として色々手をかけていた。

具体的に言うならば——、実行力や覚悟の足りない国家やテロリストの次の行動を必要なモノたちへと掌握させる準備、であった。



「それではミッテルトさんは天界へ。絶霧があるからシステムとやらの掌握もできますよね？」

「おーけー、なんで自分でこの神器使わないのかと思ってたけど、まあアイツは無くて問題ないのか」

某英雄派から命を奪うことなく拝借した空間系最高とされる神器・ディメンション・ロスト

絶霧を改造したロザリオを首から引っ提げて、復活の際に天使化も施された元墮天使少女のミッテルトが納得の貌でヴァレリーの指示に従う。

現状あまり戦力を前面に押し出していない天界であるが、だからこそ戦力と地力の未把握は『その先』を想起するに結構危うい。

呑気に同盟を組んだ某魔王は想像もしてないのかもしれないが、そうやって『仲間内と見做し掛けた隣国』こそが自国にとっては『最大の敵』だ。背中を刺される覚悟もなしに多種族と易々と手を組めるのなら、これまで小競り合いを続けていた長い年月は重なっているはずもない。

そして、ヴァレリーにとって悪魔の陣営とは、幼馴染が現在世話になっている気心の知れた隣人である。

そんな方々が易々と滅亡してゆくことを見過ごすほど、ヴァレリーは薄情な娘ではなかった。

「ロツテさんは連絡係を。テレアさんの様子は如何ですか？」

続けざまに、この場にいない残る一人の名を呼べば、己の蟬谷を揉みつつロツテが唸るように応える。

「んー、順調かなあ。なーんか、色々と画策してるっぽい」

「ではそれを下地に次の手を考えましょう。他神話の動きも見られればよろしいのですけど……」

「あ、なんか冥府……ギリシャのハーデス辺りが英雄派のスポンサー

みたいだよ?」

「え、そうなのですか?」

「うん。英雄派に寝返った悪魔派閥を使って冥界を攻め落とすみたいな計画を練ってたみたい」

「なるほど……」

彼女たちでは本来知り得ぬことが明ら様となっている。

その事実になんら疑問も挟まず、ヴァレリーは告げた。

「それでは、そら様に最後にお問い合わせすることは決まりましたね」

「うーん、僕が云うのもなんだけど、彼に頼り過ぎな気が……」

「直に戦っていたかどうかというわけでもないですし、平気ですよきつと」

この瞬間、カオス・ブリゲード禍の団の顛末は決定されたも同然であった。

▽  
▽  
▽

一方、元禍カオス・ブリゲードの団旧魔王派のカテレア・レヴィアタン改めテレアは、復活後もそのままの容姿なことも相俟って容易く組織への侵入を成功させていた。

「おかえりなさいませカテレア様! ご帰還を心よりお待ちしております  
ました!」

「ええ。帰って早々、頭の痛い事態になっているようだけれどね」

冥界からすれば旧魔王などと揶揄され、新たに擁立された4大魔王に敵うのは血筋だけ、と陰で云われている者たちの一角である女性である。

だが逆に言えば、血筋は確かに正当な魔王のそれなのだ。

それだけを芯に添え、果てには悪魔としての格の高潔さを今の冥界

にも通じるように、貴族らしさを追求していた彼女の容姿は、その血統ゆえかかなり良い。

焦げ茶色の髪に褐色の肌、そして蒼い瞳に豊満な乳房などが主張する姿は何処か埃エジプト系の淫靡さを見る者へと思ひ描かせる。

だが、髪型は小奇麗に纏めてあるし、インテリ系を思い起こさせる眼鏡は彼女自身のイメージを秘書か何かへと通じさせてしまう。

それは「王」としてのカリスマ性には到底及ばず、また自ら女性としての魅力を閉じ込めている風に見えなくなかった。

そんな彼女であったが、烏丸の手による転生を果たした際、ファッション外見は随分と変更された。

纏めてあった髪はその長さのままに解け、時折肌に張り付くように揺れて肢体を覆う。

かけていた眼鏡は既に無く、垂れ目気味であった瞳に直接見通されれば得も言えぬ艶やかさで誘われているかのような錯覚を覚える。

組織より発つて行った前と比べると、まるで傾国の美女のような妖艶さが彼女には備わっており、部下たちは感じなかったはずのカリスマ性に身震いし、改めて彼女に仕えることを至上の喜びへと転じさせていた。

最も、それは一度完全なる敗北を味わった上で、さらにその後復活させられるも、大して意味の無い拷問の数々に心が折れた弊害でもあるので、彼女自身にとっては有り難い話では決していないのであるが。

「私たちが発つた後の顛末は把握したわ。それにしたって、リゼヴィム様は何も言わなかったの？」

烏丸の手により悪魔以上の何かに造り替えられている彼女たち（ロツテとテレア）に、さらに空間系神器を改造し複製し内蔵させることで発現に成功した『通信能力』により、ふたりの連携と連絡は誰に知られることも無く距離も関係なしに密に繋がっている。

同時に、烏丸という『なんか神話存在でも話が通じそうにない規格外』の被害に遭ったもの同士、という連帯感が相乗効果を発揮してい

そうでもあるが、その話は今はおいておく。

その諸々はさておき、これまでに聞いた旧魔王派の表看板3名が離脱したその後をリアルタイムでロツテへと教えていた彼女は、現<sup>ログアウト</sup>状世界にとつて冥界にとつて、一番の害となりそうな集団の梟行きを問いかける。

話に応える部下たちも、まさか現魔王政権のセラフオールなどに一番に反抗していた彼女が別角度からの新参陣営に寝返っているとは微塵も思わず、乞われるがまま全てを話していた。

「不明です。が、どうにも英雄派子飼いの神器使いを連れて国外へと向かった模様でして……。ユーグリット様が死亡したことも相俟つて、戦力を確保しているという言い訳も通用しませんでした。我ら悪魔派の大多数は旗印が無いままですので、このままでは『傾き』ます……」

「そう。不便ね」

旧魔王改め真魔王と旗印を掲げていたりゼヴィムを初めとする四人の血族、シャルバ・ベルゼブブ、クルゼレイ・アスモデウス、そしてカテレア・レヴィアタン。彼らに率いられた悪魔だけの派閥は根本的に数が足りない。

そもそもが新体制の冥界に馴染めない者たちや、冥界にとって必要な混乱を招くために排他されていた者たち、または『今の魔王』の下では自分が旨い蜜を吸えない者たちが中心となっており、基本的に自分本位であるがために主にリゼヴィムに連れられた者たちを除いて旧魔王に忠義を誓う者たちは驚くほどに少ない。

それは、駒王協定を結ぶ場へ襲撃した際に彼らが引き連れてきたのが『悪魔』よりも『魔法使い』らが多勢であったことにもよくわかる話だろう。当時烏丸の主観では【語り】が足りなかったが、協定の場への襲撃は『その外側から』もしつかりとあった。根本的にある種族としての脅力<sup>壁</sup>を対人経験技術と聖剣と【倍化】で乗り切られた3名の魔王はさておき、それ以外の外的要因を排除したのがアザゼルだった

のはもはや笑い話に近い結末であるのだが。

外側の概要を把握しきれなかった烏丸の話はさておき、元より【魔王の威光】よりも【主観と気分】が行動の指針であつた悪魔陣営らは、上手い話にすぐ飛び乗る傾向が強い。それをなんとか纏めていたのが、実力者でありカリスマでもあるリゼヴィムそしてユーグリットなどの旧魔王派の生き残りだ。

これ以上の抑制が効かないと成れば、僅かであれど『多勢』に成り得る悪魔らは最大多数の生き残りでもある【英雄派】に上手く使い潰される未来しかないであろう。

なお、テレアが不便と云つたのはリゼヴィムが生き残つて消息不明な事実に関してである。

烏丸の『なんでもやれそう感』があれば見つけて狩ることも容易いかもしれないが、さすがに経験の深い実力者に本気で潜伏されると探すことは容易ではない。

そしてリゼヴィムは今の魔王たちにとつても実力者相応であり、討伐しても残党が烏合の衆になり得るかが賭けである事実に関しては、テレアにとつても懸念と云わざるを得なかつた。

息を吐くとそれに、と彼女は付け加える。

「英雄派は魔女ヘクセンナハトの夜にも当たりをつけているみたいだし、以前に大多数を使い潰しにしてしまった私たちからすれば、逆に下に置かれる先しか見えないでしょうね」

烏丸には完全に未知の話であるのだが、この世界の魔法において使用とされる『魔力』は【悪魔の力】が根源でしかなかつたりする。己の魔力を呼び水に実存しない精霊を顕現させる【ネギま世界】とは、そこが相違点となつていた。

自ら悪魔や人外へと転じた魔法使いを除いて、『魔力』を行使するのは悪魔のみだ。

似た力を行使することで神族などに逃えられている者たちも確かにいるのだが、それよりは化生に当たる者の力を借りて術に転じる者

を『魔法使い』と呼ぶ。

彼らは基本的に悪魔との契約で力を借りて術を行使するのだが、それもやはり知識の研鑽無くしては成功しえない。

先に述べた魔法使いの大量喪失は旧魔王派にとって確実に痛手であり、残った悪魔らは魔力貯蔵庫<sup>タング</sup>として使い回されることが予測されていた。

「そしてもう一つ、未確定の情報があります」

「何かしら」

「神器に関してです」

報告者の言葉に怪訝を覚える。

悪魔陣営にとって神器は未だ不明な領域が多分に在り、そもそもが人が中心となって得られる力でもある。

自分たちに扱えない力の情報を寄越されても、喜ぶのは神器研究者か烏丸くらいだ。

「冥府のハーデスから齎された情報のようでした、英雄派の幾人かが禁手化に至ろうと画策しています。齎された情報は禁手化への近道、かと」

「——ふうん」

なんでも無さそうに答えるが、今のテレアにはそれを精査する余裕はない。

とりあえずその情報だけをロツテへ送り、自分たちの今後のために指示だけを置くことにした。

「ひとまず、私はもう一度『潜る』わ。あとは好きにしなさい」

「……は!? よ、よろしいのですか!?!」

「云ったところで、今更通じやしないわ」

報告者が慌てたように引き留めにかかるが、テレアは取り継ごうとはしない。

完全に折れた今では、自分に最も足りないものが人を引く魅力であることをよく理解しているのだ。

イメチェンした今の姿が男性にとつてかなり魅力的に見えることを自覚していない彼女だが、それでも人心掌握には至れないと経験していたがために、『今回は』失敗せずに済みそうである。

「戦力も勝機も確かに惜しいけれど、今動くことの方が愚策よ。正しく甘露を得るためには、ハーデスと対立する方がずっとマシ」

「……っ、それは、敵対するということではありませんか……!？」

「そう聞こえなかったの？ この組織にいつまでも執着する気はないのよ」

カオス・ブリゲード  
実質、冥府が英雄派の背後に控えている以上、スポンサー且つ禍の団の舵取りを決定づけている者が浮き彫りになっている。

それぞれの派閥でやろうとしていることがちぐはぐでバラバラなテロリストであるが、旗印は現状大多数がお飾りでしかない以上、多勢を決めるのは『目的』を添えてしまった『誰か』へと転ずる。

出来るならば二重スパイでも、と動かされていたがハーデスの目的が分かった以上恭順しては悪手になる。

その事実が気が付き、テレアの矛先はようやく決定した。

「旧魔王派の大多数がいつまで『動いてくれるか』わからない。英雄派にステツプアップのチャンス<sup>兵</sup>を溢して、魔法<sup>器</sup>使いの数を確保して、さらには【蛇】だって余ってるはずだわ。冥界が『穴』を見せれば、一息に始まるわよ」

「何が、ですか……?？」

予測はつきそうなものだが、明確な『それ』を知らない報告者は予測の裏切りを期待した。

しかし、それとは裏腹に、ひどく冷徹な声でテレアは告げる。

「――戦争よ」

▽  
▽  
▽

一方そのころ裏で割と冥界の先が危うい現状で、我らが主人公はと  
いうと。

「よし、じゃあイリナちゃんは黄色系の衣装で進めるか。膨張色で普通は避けるんだけど、キミの場合細かいから充分グラマラスに見える。脱がせる楽しみを客層に楽しんでもらおう」

「あつあつあつ、んっ、ひゃあんっ」

ちよつと真面目な顔つきで、黄色系のビキニで着飾ったイリナを後ろから突き上げつつ、次のお披露目に関して色々と『話し合い』に興じていた。

ツインテールのオレンジヘアが壁に手を付き腰を突き上げて、パンパンと突かれるたびにまさに特大オレンジのような二つの果実が豪勢に揺れる。

その姿は素晴らしいのだがお前もうちよつとシリアス持続させろよ、と天の声にツツコミを入れられそうな場面転換であった。



☆「しばらく物語から離れていたサブキャラが再登場すると、なんかワクワクするよね」

何故か知らんがこう、ティンときた、つてやつだろうか？

夏が終わる前にイリナちゃんに『夏の●嬢さん』を歌わせておきたかった。

なんでだろうか。ひとまず彼女には闇に吞まれよ！つて言つといだから大丈夫（すつ呆け）。

さてそんな衣装合わせを終えて夜半の話である。

今俺の目の前には、ちよつとした異常事態が鎮座していたりする。

「……塔城、ナニコレ」

「ヨロシクオネガイシマスカラスマクン、ホントマジデ……」

あつれー、なんか小猫ちゃんのSAN値が減ってんだけどなんでー？

どう見ても異常事態なのはこつちだろうに。

と、視線を向けた先にいるのは、

「——っはああうっ、小猫様あっ♪ まだですかあっ、はやくっ、はやくワタクシめに御褒美をおっ♪」

全裸で亀甲縛りで目隠しで耳も塞がれて、発情しつつ艶っぽく身悶えるフェニックス家のご令嬢のお姿であった。

おかしい、彼女は常識人だと思っていたのに（白目）。

「……何がどうしてこうなったんだ」

「ナンデシヨウネモウワタシニモワカリマセン……」

いい加減戻ってこい塔城。

▽  
▽  
▽

正直、SMなんかを筆頭とした変態的で倒錯的なplay<sup>行</sup>には、自分の初体験が逆レであったことも相俟ってなのか少々忌避的な感情が働いていると云っても過言ではないかもしれない。

しかし、目の前で無防備に肌を晒して、そしてそれが元来美少女でスタイルも悪くない同年代であるという現状を目の当たりにしてしまふと、……こう、ぐつとくるものがあるよね。

さてこんな夜中に緊縛中のレイヴェルを引つ提げて現れた小猫の目的はというと、彼女を『どのような方法でもいいから』真つ当な道へ戻してほしい、という常識を疑うようなもの。

彼女は俺の前科を大体把握しているはずであり、女性に対しては基本優しく気を使うつもりではあるが貞操に関しては頓着しない俺に、よりにもよってその依頼は正気なのかと問いたくなってしまう。

というのもそもそも、塔城の依頼に相成った事態そのものが頭の痛い話であったのだとか。

曰く、初めから小猫<sup>自分</sup>狙いでグレモリーに関係を持ってきた節が。

曰く、どうにも最初に対峙したレーティングゲームの対ライザー戦で無双して以来ネジの飛んだ視線を向けられる。

曰く、というかレズ娘に夜這い掛けられそうになったから正気之道へ引き戻してやってほしい。

やだー、モテモテ（死語）じゃない小猫ちゃんてばー。

………うん、一部俺の責任もある、のかな………？

非常に認めたくないが、小猫を強化した一件が此処まで後を引くことになろうとは、あの時の自分は思いもしなんだら。

ていうか、レズに目覚めた小娘を男性相手に引き戻せと云われてもねー。

夏休み最後の方にフェニックス家に突貫噛ました兵藤先輩の所業も理由に当たるんじゃないかなー、と思ったりもするのだけど。目

の前にある事実こそが優先事項ですか。そうですね。

ひとまずは、自分のやり方でしかモノは片付けられないわけで。

小猫にも許可はもらっているのだが、ぶっちゃけ新しいクラスメイトにそんな真似して俺の今後の学校生活どうなっちゃうのよ、と言いたくもある。

「ぐだぐだ言っていないで、とつとと突っ込んでアヘアヘ云わせてくださいよ」

「案もなしに云い方も酷いなお前。仮にも女子がそれはどうなのよ」

「こちとら同性に夜這い掛けられた身ですので。烏丸くんならその場合ブチ切れますよね？」

何が国だよク●ニしろオラア！ と云わんがばかりの小猫さんがフェニックス家ご令嬢のレイプをお望みである。改めて考えなおすとマジで酷い。

でも小猫の言い分もわかるだけに、反論する材料がどうしたって足りなくなる。

……女子と男子はまた別なんじゃないかなー、と言いたくもあるけど、流石に女子になったことも無いのでこの言い分では否定にも届かないか……。

「つつても、ただ弄るだけで堕ちるほど女子つても簡単じゃねーでしょ。You、おとなしく百合っちゃいなYo」

「面倒くさくなっているだけですよね？ アーシア先輩を寝取った烏丸くんが云つても説得力無いですよ」

あれは、ほら、兵藤先輩がそもそもアーシアに対してぞんざい過ぎたのが原因じゃね？

美少女と同居しておきながらグレモリー先輩に夢中だったのなら、気が離れても文句言えないと思う。

うん、『俺は悪くない』。

「とにかく、とつと抱いちゃってください。とりあえずえっちい描写があれば読者だって納得するんですから」

「そーゆー第四の壁壊すようなこと云うなよ」

「世界崩壊を謳っていた人に云われても」

などとメタい遣り取りを交わす間も、視界の端では亀甲に女性を晒した美少女がイヤンイヤンと身を振っている。

なんてシニールな部屋なのか。

「——でわ、それをどうにかする理由があればいい」

え——。

▽  
▽  
▽

レイヴェルは目の前で曝け出されるその光景に、冷水を浴びせられたかのように青褪めて往く己を自覚していた。

心地の良い熱病に浮かされていたかのようにであつたかつての自負は微塵も残っておらず、今ではただこの場から離れなくてはならない、と自身の中に培われた貴人としての理性に急かされている。

しかし、それと同時に本能が、其処から目を離したくはない、と暗い欲求と同時に理性を抑えつけるのだ。

そうした二律背反が彼女の挙動を抑制させているのだが、どちらにしろ荒縄で拘束されたその身が自由になることなど今夜は決してないのであろう、ということにまではその思考が及びはしなかった。

「あつあつあーっ、いくつ、いくつー！」

ギシギシとベッドのスプリングが激しく悲鳴を上げているが、それ以上に恍惚とした声を上げている少女がレイヴェルの目にははつきりと映っている。

長い黒髪で、手足も腰も細く短く、肉付きなんかは一切伺えない、ま

るで子供のようにスレンダーな少女だ。

しかし唯一その身に纏っているガーターベルトに似た黒いレースのホルセットのみという装飾で、後ろから伺えば少女と相手の結合部がはつきりと覗けるくらい頭わとなっていて下着も付けていない淫靡さが、彼女の今交わしている動きと相俟ってどうしても子供とは思えない、いや思いたくはなかった。

体格を見てしまえばどうしても一桁代の少女にも拘わらず、だが。

「見えていますか、レイヴェル？」

「……っ、小猫、さま……！」

自由になった耳目に、己が憧れた少女の声音が背後から響く。

レイヴェルは首だけを動かして、自分よりもずっと幼い見た目の彼女の姿をようやく認識した。

彼女が小猫に憧れた経緯は言うまでもなく、愚兄の引き起こした婚約騒動が引き金である。

貴族の親同士が勝手に決めた約定を破棄するために、愚兄に宛てがわれたリアス・グレモリーは悪魔たちの間で人気と注目度の高いレーティングゲームという、チェスに準えた戦力で勝敗を決する優雅なのか粗雑なのか一律では判別の付かない遊戯<sup>ゲーム</sup>で自分たちの行く末へと立ち向かった。

気づけば娯楽の類が衰退し切った悪魔社会の間では根強い人気があるゲームだが、実際のところは武力拮抗で勝負が決まるので、人間が知る『貴族の遊戯』とはどうにも認識し難いルールが詭えられている。

リアスが宛てがわれたレイヴェル<sup>♀</sup>の愚兄であるライザー・フェニックスは、そのゲームで上位に当たる実力者として名を馳せており、当初よりこの勝負はリアスにはどうしたって勝率の見えない、分の悪い話どころか彼女の自己を顧みない実に『貴族らしい話』で全ては終わるはずであったのだ。

それを覆したのが彼女、「飛び跳ねる金華猫」こと塔城小猫であった。

黄金に輝き聖なる力を発揮しつつも、悪魔である自らを焼くことが

ない凄まじい鎧を纏って闘うその姿は勇ましく優雅で、愚兄の駒として参戦しておりながらも、当初は少々野蛮だとさえ認識していたレーティングゲームで初めて、レイヴェルは戦う少女に『憧れ』を抱いた。抱き続けた憧れが、愚兄の情けない姿を見ることに反比例して膨張を続け、ほんのわずかな期間で憧憬は慕情に転化した。

一番傍で見る男性の情けない姿に辟易し、小猫の勇姿を思い浮かべることにより女性優位に傾いていったことが最大の理由かもしれない。

そしてそれを加速させたのは、他でもない兵藤一誠だった。

悪魔社会でも類を見ない闇医者 of 画期的な治療法をフェニックス家が休心され、患者として客として、彼を実家が受け入れたのが運の尽き。

客であるということと初めのうちは見過ごせていたセクハラ染み た彼曰く『癒しを求める男子の本能』とやらも、数が積もれば害ではない。

貞操の危機を感じたレイヴェルは、それよりも己の恋慕をどうか届 けたい、と恋に準じた何処かのグレモリーのように単身人間界へ、小 猫の元へとやってきたのである。

そこで新たに見たものは、小猫がどうしたって恋い焦がれていると しか思えない、やや不審な男子。

更に焦燥に駆られたレイヴェルは、ついに夜這いという愚行に手を 出し、――反撃されて今に至る。

彼女が憧れた白い美少女は拘束されたレイヴェルの背後から、胸も 下もつるりと晒した品の無い目を疑う淫靡な恰好で姿を現していた。

「つな、なんて恰好でいられますの……っ!?!」

自分の姿も棚に上げて、レイヴェルは恫喝する。

貴族の子女として、明らかに人前には見せられそうにない姿をした 彼女を、憧れているからこそ見過ごすことは出来なかった。

「これ、けっこう便利なんですよ。シたくなったらすぐに跨がれます し、全裸で誘うよりもずっと食いついてくれます」

小猫の言う通り、それは全裸ではない。

紐を編み込むような形状で絹と思しき白いコルセットは彼女の腰

回りのみを拘束し、ガーターで吊るしたハイソックスに二の腕から指の先までを覆うハンドソックスも白。色合いのみなら彼女の外見と沿わせようという意図が伺え、実に可憐だ。

だが、身に着けているのは、それだけ。

あとは首輪を模したような白いチョーカーが申し訳程度に首元を飾っているが、つんと立った桃色の乳首や白い肌が艶やかなスレンダーの胎、陰毛が微塵も伺えないつるりとした局部もまた、女性として隠すべき大事なところは悉くが顕わとなっている、実に淫靡な肢体が其処に晒されていた。

そんな子供の体型で遣れば一層犯罪臭が止め処ない恰好を晒しながらも、小猫は悠然と微笑んでいた。

「お、お願いです小猫さま、そんな、自分を安く売するような真似は止めてください。私が出来ることなら、なんでもいたしますから……!」  
「おや、レイヴェルは元々夜這いまでして私と交わりたかったのでは？ もう一度、前を見てくださいよ。貴女が欲しがっていた行為のお手本のような光景が、見事にあそこにありますよ」

その言葉に、視線だけがもう一度前を向く。  
褐色肌が伺える男性が抱く黒髪の少女は、彼の腰の上に跨って獣のように嬌声を上げている。

愚兄が自分の眷属らと『このようなこと』を繰り返していた事実は既に知っている。

だが、それをアリアリと目の前で見せつけられるようなことなど、いち貴族の令嬢としてはあつてはならない話であるし、兄妹としてもその程度の倫理を超える様な真似をするほど救いようのない兄でもなかった。

だからレイヴェルにとってこの光景は知識として知る以上の姿であり、未知を知ろうという本能が恐らくは自らを衝き動かしていることを知りながらも、それを眼前に据えたままでは居てはならない、という恐怖から頭を振った。

「あ、あのようなことを求めたなど、そんなことを私は欲してはいません！ 私が求めているのはもつと純粹な、」

「まあどちらにしろ、私は貴女とそうなるつもりはないのですけどね」  
言い募るレイヴェルを切り捨て、小猫は彼女から離れる。

見捨てられたことを呆然と見送り、しかし尚も縫ろうと彼女の感情は『何か』を探して脳を働かせる。

しかし、それが見つかることは決してなかった。

「貴女の『次』は私ですから。いつでも好きに自分を解き放つてくれても良いんですよ？」

見捨てた、にしては優雅に微笑む小猫の言葉に、レイヴェルの脳は計算を辞めていた。

意味が分からず、彼女の離れて行く様を呆然と見送り、

——知らぬうちに自身に伸びていた、男性の武骨な手が身体を弄ることを許してしまっていた。

「——ッ!?! な、あ、ひっ、いやあっ!?!」

レイヴェルのか細い悲鳴が室内へ響く。

気づけば、黒髪の少女を抱いていた彼はその行為をいつしか終えており、次の標的として自分を選んでいたらしい。

そのことに慌てた頭で気づきながらも、拘束されている現状を改めて思い知り、逃げ場がないことを自覚する。

必死で身を振るが、男の手はレイヴェルの小振りな乳房を愛撫しながら、荒縄の隙間に頭わになっっている肌の幾ばくかを指先が蠢いて往く。

毛虫の這うような嫌悪を咄嗟に覚え、レイヴェルは尚も悲鳴を上げ続けた。

「いやあっ! 小猫さまあ! 小猫さま助けてえっ! 男はいやつ、男に初めてを奪われるなんて絶対にいやあっ!」

無論、助けの手は来ない。

褐色の男の愛撫は続いて往く……。

▽  
▽  
▽

「おっおっおっんほおっ! ちんぽおっ、ちんぽきもちいいっ!」



はい、どろっどろに蕩けた焼き鳥娘の一丁上がりー。

レズ属性とはなんだったのか、30分くらいで完堕ちしたレイヴェルは烏丸くんの下に組み伏せられ、貴族○にあるまじき悲鳴を上げて悦んでいます。

なんとというハッピーエンド。

あれが演技ならスゴイですけど、彼女の拘束ってもう解けちゃって、子宮口以外は自由にできるんですよねえ。

脚も烏丸くんの腰に絡みついちゃってますし、もう自ら妊娠したがつてます。

彼の肉棒は何某かの媚薬成分でも誘発してるのでしょうか……？

「——ん、小猫、そろそろ我の出演」

「いえ、次は私だって云ったじゃないですか。オフィスはその次です」

「？ レイヴェル、まだ？」

「ですね。まあ初めてですし、こんなもんでは」

いやー、ほんとオフィスのサイミンジツって便利ですよね。

もう私たち、正気を亡くした烏丸くんを美味しく頂き隊を名乗っても良いのではないだろうか。

となると、やはり麻帆良組の彼女たちも取り込むべきですかね。

まあ暗躍はさせておき、今夜はとにかくセックスセックス♪

「んああああっ！ あひいーいーっっっ!!!」

☆「友人が教室の窓の外を見上げながら「馬鹿な、まだ早すぎる…！」と口遊んだので、俺はとりあえず動画に撮って拡散することに決めた夏のある日」

「あ……っ？」

ずぶり、とレイヴェルの膣口に沈み込んだその異物は、しかし彼女に然程の衝撃を齎すものではなかった。

それまでに体中の到る箇所を、大凡性感帯と呼ぶに差し障りの無い程度にまで混ぜ解され蕩け切った彼女にとっては、処女膜の貫通など今更痛みを訴えるほどもなかったであろう。

レイヴェルは茹ったように回らない脳みそのお陰で、自らが忌み嫌っていた男性という生き物にハジメテ処女を今強引に奪われたという事実

に、未だ判別が至ってはいないのであった。

「……っ、あ、……んっ？　っう……っ」  
ふっふっふ、と肢体を貪ることに夢中な男性の荒い息遣いと湿った音が、熱気の籠った室内で静かに反響する。

荒縄で亀甲縛りに晒されていたはずの彼女だが、若いその身体にはうつすらと赤い痣が残るだけで、それもふたりの間で交わされる熱の影響か、次第に白い肌へと還元されてゆく。

熱を生むほど彼女を揺さぶる腰つきは激しく、年相応と呼んで然るべき小振りだが形のある乳房が、男性の衝動に合わせて踊るように跳ねていた。

だが今のレイヴェルにはそれも正気へ戻すほどの衝撃ではない様子で、男が腰を打ち付けるその行為に彼女はほとんど抵抗を顕わにしようとはせず、まるで白痴に苛まれたかのようなその表情はしかし少女の魅力をまた違う角度から教えてくれているようでもある。

普段は両側へ渦のように巻かれている金糸の髪も、少女の意識に準えられてか力無く解けている。

それは、その男性に身を任せることを彼女が完全に了承し切ってい

るような、そんな証明のようにも思っていた。

「……っ、っほ、あつ、……あつ、ひ、んう……っ」

しかし麻痺していたその感覚も次第に彼女本来の値へと戻りつつあり、レイヴェルは段々と恍惚の声を喉が自然に奏でるようになってゆく。

これは彼女が『再生』の特性を司る「フェニックス」であることも要因の一つであるが、それまでに彼女の身体を開発していた男性が、彼女の性感帯を程よく知りつつあることも理由に当たる。

男性の逸物はレイヴェルの膣内を隙間無く穿り回し、彼女が正気に戻るであろうレベルに匹敵する感度を想起させる性技で以て、尚も彼女の身体を開発しつつあった。

「は、あ、あつ、んっ、はあんっ、んっあつ、あ……う？」

そして正気に戻りつつあった彼女が、今己を慰めている存在が何者なのかを把握し直したのか、喘ぎ声になっていた声音に疑問が混じる。

その瞬間、男性はレイヴェルの膣奥を力強く押し上げていた。

「——っは、あつ、ぎい……っ！」

それまで以上の衝撃が、しかし彼女には快感として脳髄にまで伝播する。

思わず漏れた悲鳴とは裏腹に、その瞬間自身に申し掛かる男性の身体をしがみ付くように抱きしめ返していたのがその証拠であった。

「あっあっあっあつ、んあっんっんっ、ああんっ、あんっ、そこおっ、もっど、もっどおっ！」

快楽をより感じたいのか目を閉じたままのレイヴェルは、誰に慰められているのかを既知としないまま、自分を組み伏せる男性に甘えた声を上げ続ける。

自分の奥深くを隙間無く擦り上げるこのキモチイイモノが何であるかをうっすらと頭の何処かでは理解しつつあるのだが、既に一度蕩けてしまった脳では、理性のある貴人へとこの状態から回帰することは不可能である。

求めれば求めただけ際限なく充足感を与えてくれる誰かに溶ける

ように墮とされてゆく少女は、悲鳴に似た嬌声を何度も上げながら歓喜の悦楽を貪ってゆく。

それは鎖乍ら、耽る夜へと微睡むように溶けて往く様にも伺えていた――。

――つていう記憶が、俺の中にあるんだ。

……やべえよ、何がやべえつて俺の高校生活が基本的にやべえ。

こんななんつても俺個人が別段気にしていないことが問題なのかもしれないけれども、逆に周囲の外堀をズンドコ埋められているような気がしないでもない。

そしてその事実が後々に色んな意味での自縄自縛を醸し出しそう  
でインガオホー。

……女性関係だらしなすぎじゃねーかな烏丸くん？

おーけい、ひとまずレイヴェルさんが嫌そうじゃないつてことは朗報だ。

最終的に済し崩しに即墮ち2こまみたいな話になった気がしないでもないけれど、嫌じゃない、という言葉質さえ取れて居たら問題は無い。

オカ研内の女子が悉く摘み食われてる気もするけれど、元より男子にリビドーを刺激しそうなスタイルの子ばかりなのも前提にあるから倫理面はともかく個人的な後ろ暗さも特には無い。

というか、一線超えたら人間大体のところはそのまま突き進むんだよね。

元は敬虔な修道女の3人だつて、実は処女で耳年魔だったお姉さま方だつて、こつちの世界で云う処のネギ君が自然発生させていたセクハラ空間だつて、大元を辿れば原理は一緒。

大事なのは適応力。

特に女子は根本的に凶太い改め芯が強い娘ばかりだから、ケアさえ間違えなきゃたぶん平気。

……というか、あれこれ言いつつ一番気にしてんのはたぶん俺だな、これ。

これ以上女子食ってどうしようというのだけ。

そんな反省を顧みつつ、本日の俺は休日を頂いて個人行動中。ヴァレリーらが頑張ったお陰で何気に嵩張った情報を紐解きつつ、知り合いのいないカフエテラスで優雅に読書に明け暮れていた。

なんか冥界で戦争始まりそうとかカテレアあたりから連絡来たけど、敵方の大元がハデスってマジ？

あのひと確かに聖闘●星矢だとラスボスやってたけれど、基本神話を紐解けばギリシャでは一番『まとも』な神ではなかったのかしら。それとも、そのまともな神様さえ怒るような真似を此れまでの聖書陣営が遣らかしていたのかね。

ていうか、冥府と冥界の違いって何。

……ひよつとしてこれが原因か？ 元々ハデスさんの管轄だったところに陣取った悪魔らの凶太さが逆鱗に触れた？ 推測でしかないけど、そもそも『悪魔の世界』であるなら『魔界』とでも名乗っておけばよからうもんだものなあ。ハデスの怒りが有頂天になるのも、それなら納得だわ。

さてさて、ふうん、カオスなんちやらの悪魔派閥を人間爆弾に換え、て冥界へ神風アタックやらせる気か。

其処を突いて英雄派閥の神聖系で攪乱しつつ、……あ？ 魔法使い派閥？ マジで？

「ヘクセンナハト魔女の夜、ねえ……。随分ときな臭い名前を持ってきたじゃないか……」

ちよつと見過ごせない名前だなあ。

さわらすこの世界でどうなのかは知らないけど、俺の知る限りじゃ魔女は非敵対の代名詞だ。

例えば、俺がまかり間違って敵対してしまったとしたら、話を聞かず、逃げの選択をせず、戦う意図を持たず、正面から堂々と、影すら見えなくなるまでに絨毯爆撃を繰り返す必要しかない。

話すことなかれ戦うことなかれ逃げることなかれ絶望することな

かれ希望を抱くことなかれ、ありとあらゆるネガティブとアクティブに反射してくる【鏡】こそが魔女の本質だ。

油断も緊張も抱かない、平坦で機械的にフラットな精神を抱えていないと、ようやく対峙することすらできない。

心積もり、という対人性能を持つている時点で、大体の魔法使いや英雄を凌駕するから機械で対峙するしか道は無く、ついでに言うところが本当に通用するかどうかも疑わしい。

やだなあ、この時点でもう関わりたくない。

でもヴァレリーには既に手を貸してほしいって打診されてるし。打診されてるって言い方も変だけど。

まあ、局面に陥ったら何かしらやってみるか。

本格的にやばい相手が出てくる状況になつたらそれこそ負け確定だけど、負けるのは慣れてるし『そうなる』一步前くらいには状況も読めるのが本領だし、よっぽどの事態にならない限りは問題は無い。

というか、何より相手側が計画を煮詰めてくれているみたいだから、こつちは逆にフレキシブルな立ち位置も平気で取れるっていうのが本音だけだね。

あんまり根詰めると破綻するのが計画ってなものよ、気楽に逝こうケセラセラ。

「——っ、はなして、ください……!」

お?

自分の中で先行きへの葛藤を終えたところで、周囲が、というか店の外が騒然としている。

何やら女性に男性が絡んで、拒否られているご様子が、って……。

お、おう、マジか、あんな人おるんか、現実に。

そう俺が狼狽するのも無理はない。

俺の目に移ってきたその人とは、例えるならば団地妻へ引っ越し蕎麦と称してキモチヨクナルオクスリがふんだんに使われたそいつをご馳走し薬ギメセックスでとことん陥落させそうなタイプのボブと

かサムとか呼ばれていそうな黒人のスキンヘッドなデブマッチョであつた。

偏見が過ぎるだろうか。

でもアレを見た瞬間、俺の中には件の彼と対峙している銀髪美女の  
アヘ顔ダブルピースが脳裏に浮かんだ。

うん、今日も正常にとち狂つてるわな、俺！

……ほんと、マジで休み取ろう。

▽  
▽  
▽

「ご、ご迷惑をおかけしました……」

と、俺の目の前でひたすらに謝り倒しているのは、先ほどボブ(仮)さんに絡まれていた銀髪のお姉さん。

俺の中に浮かんでいたイメージはどうやら杞憂だったらしく、話してみると彼は迷子になっていたお姉さんに親切心を顕わにしたところ誤解を受けたのが事の次第であつたそーな。

まあ威圧感あるひとだったのは仕方ないとしても、このおねーさんも男性に対する免疫がなかったようなのも原因ではないのではと。

ふむ、しかし改めてみると美人だな。

化粧つ気が無いにもかかわらず、その素材は飾り立てることも必要がないくらいに美麗である。

彼女はそれを自ら把握しているというようには見えず、単純に着飾る経験が乏しいのでは、と伺える。

いくなれば、スーパーモデルの原石足り得る田舎娘。

うむ、云い得て妙だね。

「そ、それであのう、駒王学園とはどのように行けばよいのでしょうか？」

……なんだよまた悪魔関連かよ。

まあこんな美女が人間だと云う方がずっと疑わしいけどさあ。

『助けた』ほどではないが、手を貸した礼を提示しようという申告に差し出がましくも追加の貸付。

ぶっちゃけこのひと人を見る目がねーな。

こんな極東の地方都市で危機感抱けという方が無理があろうが、外国人装うのならば心の片隅に苦手意識持っている男性相手に『少し会話が出来た程度』で更に弱みを見せるモノではないよ。

これから罫に嵌める俺が思うことではないかも知れないけれどさ。

▽  
▽  
▽

「……あ、あおう、こ、この水着は流石に小さすぎなのでは……？」

——十数分後、行きつけのラウンジバー系屋内プールにて白いマイクロビキニに身を包んだ銀髪美女の姿が！

フハハハハハハハ！ やべー、ちよろい、ちよろ過ぎるよこのおねーさん！

あまりにも眼福な光景に内心笑いが止まりませんわ。

道中で聞いた話を纏めると、おねーさんの名はロスヴァイセさんという戦乙女ヴァルキリーのひとり。

冥界というか、ようやく纏まった聖書陣営の後ろ盾となるべく動き出したオーデインの付き人として駒王町まで足を運んだそうなの。

オーデインという爺様の今回の来日目的は、魔王の妹として美人と名高いリアス先輩と顔を合わせることに。

以前のレーティングゲームも覗いたらしいが、そのときには特に顔を合わすことなく、冥界で多少の話だけで帰っていたのだからか。

そして爺様曰く、『どうせ悪魔に手を貸すならば若くて可愛い子の方がずっとやる気が出るわい』という身も蓋も無い助平根性全開の理由で、ロスヴァイセさんの同行を振り切り単身駒王学園へと乗り込んでいったらしい。

それでいいのか北欧の主神。



ハデスでも思ったけど、この世界の神秘存在って悉くがなんかアレだなあ。残念というか、第一想定以上に下劣というか。美しき魔闘家鈴木理論が通用しないレベルで俗物ばかりな気がする。

まあ多神教の神族が色々アレなのは今に始まったことではないし、その程度ならたぶん想定内だろうきつと（震え声）。

さてそんな爺様に置いて行かれたロスヴァイセさんが、何故に単機でセクハラ水着着て俺と顔つき合わせているかというところ。

まあ口八丁手八丁、具体的に言うならば田舎から上京して来た純朴系JCを読者モデルと称して連れ込むキャッチミたいな真似で、今の有様である。

戦乙女に就職（？）しているというにも拘らず、19歳という未成年で売り込むには最良の年頃。

何より、美人であること以上に目を引くのは、抜群のスタイルを誇れるほどの二ツ山だ。

マイクロビキニからはみ出すポリウレームの、透き通るような肌色の魅惑的な乳肉は、ヴァーリさんを押して退けて新たな「胸の谷間に埋まらせ隊」の新メンバーに加えてもいい。

—というか、それ目的でこうして勧誘したわけだし。

よしお仕事開始！

宣材写真撮る感覚でロスヴァイセさんの具合も確かめよう。

あと最近俺がロリばかり跨ってきたから食指の針をまだマシンな方向へ傾けたい（小声）。

▽  
▽  
▽

助けていただいた、と云うにはやや大袈裟ですが、勝手もわからぬ異国の街中で手を貸していただいた方が聖書陣営に携わりのある魔法使いの一人であった事実は、おそらく偶然ではないのでしょうか。

なんだかんだである耄碌<sup>ジジイ</sup>爺もといオーデイン様は森羅万象を見通す魔眼を所持し居ていますし、ひよつとすれば私と彼とに縁を繋ぐためにわざと私を振り切ったのでは、とも推測できます。

……出会いの無い女職場ヴァルキリーに年頃の男性を与えろとか大きなお世話  
としか言いようがありませんが、なんだかんだで現状某テロリストと  
最前線で対峙できるという実力者であるという事実を含む諸々の鼻  
屑目を差し引いたとしても、この烏丸という少年は優良物件と伺えま  
した。

出会いの希薄さという私の人生的男性経験における不足さを補わ  
れ、こちらが委縮してしまうことを何でもないように払われて、気づ  
けば壁も無い気安い会話が出来るように。

私の言いたいことを理解してくれて、私が抱えている不満を受け止  
めてくれる年に見合わぬ度量の広さ。

そして、今の仕事辛いのならばと、新しい道へと誘致する希少と  
も呼べるほどの手広さ。

決して今の戦乙女という立場に見切りをつけたというわけでもな  
いが、オーデインの御付きとヴァルキリーの中でも優秀な人材が選ば  
れる立場が、耄碌爺のお目付け役にしかなくなっていない現状からすれ  
ば、実に誘われ甲斐のあり過ぎる誘惑にもなっています。

結局私は、とりあえず話だけならば、と彼の誘いに乗り――、

——ちよつと今、後悔し掛けています。

「ん、あつ、くうううつつ?!」

同年代の子たちが恋人を作り、私たちがそういう経験をしていても  
可笑しくない年頃である事実は理解していました。

しかし、今日初めて会った男性と水着姿で、しかもこんな広い場所  
で後ろから、というややアブノーマルな経験で『初めて』を失うこと  
になるうとは、ヴァルキリーになった当初には思いもしなかった現実  
です。

わずかにずらされた水着の隙間に彼の脈打つペニスが入り込み、一  
度も男性を受け入れたことの無い秘所の肉襞を隙間なく押し入りま  
す。

小さすぎるブラも力強い彼の衝動で既にならずれて、恥ずかしいくらい  
に大きな乳房がこぼれて頭わになっていますが、それを直す余裕も私  
にはありませんでした。

「あつ！ あーっ！ んあーっ！」

初めては痛い、と聞いていたのですが、此処に至るまで彼の愛撫が私の緊張を解してくれていたお陰でしょう。

膣の中を子宮を潰さんがばかりに力強く押し付けられているペニスの衝撃は胎の中を満遍なく送り、それまでのマッサージで痛みよりも快楽をずっと感じるように改竄された私の身体にとっては、すべてが愛おしく思わせる衝動です。

喉から勝手に吐き出される悲鳴に似た嬌声が、自身をもっと激しく求めてくれることを自覚し、尚も声を荒げていました。

さて、後悔している、と云いましたが、これは間違っていない。何故ならば彼に提示された新たな仕事とは『アイドル』と呼べるもの。

そして私が聞きかじった日本におけるアイドルの第一条件は『恋愛御法度』というモノだからです。

つまり、こうして彼と子作りに励んでしまっている現状からすれば、今からアイドルへ転向することほど無謀な事実はない、という結果を導き出せます。

……そげな結果ばなっちよるんなら、戦乙女もやめれんとつと……？

と、とりあえず、どげんしょつか。

寿退社目指そうにも、烏丸くんばまだ学生いうちよつと……。

あーも、なしてこんなイイ男とフツーに恋愛できんかなー！

それもこれも爺のせいだわ。

あんの眇目爺、見つけたらとりあえずぶん殴っちゃる！

「にやうっ!? かっ、からすまくんっ、そこば、なめんとつてえっ、あつ、あーっ！」

▽  
▽  
▽

田舎娘と思っていたが、謎方言が飛び出したことでその地方が何処なのか本気で行方不明になった件について。

体位を換えつついんぐりもんぐり、今では豊満な彼女の胸に正面から埋まってたぶたぶと弄びつつまた中へ。

知り合う女子らの受け入れ態勢が抜群な割合を俺が懸念する一方で熱い体液は彼女の中へと送り、よりいやらしく蕩けた声を上げるロスヴァイセちゃん嬉しそうに俺のことを抱きしめ返していた。

「っは、はー、んもお、からすまくん、ぜんぜんとまらんねえ。おとこのひとつで、みんなこげにでよつと？」

「つぶあ、んー、いや、違うかな。比較したことは無いけど、俺はまあ、燃料があるからね」

呼吸を抑えられるほどのもちもち柔っぱいに埋もれる前に顔を上げ、愛おしい気な謎方言を解釈する俺。

熊本弁に比べればわかりやすい言語である。

「ねんりよう？」

「うん、まあ、スケベ心？」

ほんととは体質的に転換できるエネルギー源を抱えているわけだが、男子としてそう云っておく。

実際、ロスヴァイセちゃんみたいな美人でエロいお姉さんと出来る時点で、このやる気が鰻登りになるのは生理的にも仕方ないことだと思えますまる。

なお女性もまた自分がそういった男子の感性を刺激することを告白されるといふ事実は、いわゆる相手の自尊心を大いに盛り立てる結果へと導き出されるわけで、まあ要するに褒められて嬉しくなるのはどんな人でも一緒ということだ。

そして、そういうことを云われたと、自分を魅力的だと云われたことを自覚したのか、ロスヴァイセちゃんはより嬉しそうに俺の身体を抱きしめる。

「くくっ、っん、うん、しよやったからすまくん、もくっとお姉さんに甘えてもええかんね？」

「ほほう、ではお言葉に甘えて。おねえちゃくんっ」

「ああんっ、また元気になったあっ♪」

バカップルみたいにプールサイドでいちやいちやと重なり合う俺たち。

より詳しく言うと、むしろもつと元気にその気になっているロスヴァイセちゃんは、お次は俺の上へと跨ってお馬さんプレイをご所望のようである。

うん、戦乙女だものね。

次に会う時には鎧姿でするのも良いかも知れない。

「アアーン!? 誰だテメエ!? 人間の屑に知り合いはいねーぞ!」

「本音を言うと、戦争なんてやりたくも無いんだけどねえ」

ゲオルク・ファウストがそう独り言ちた瞬間、それまで書類仕事に忙殺されていたジークフリートの手元がぴたりと止まった。

彼らの組織活動は基本的に素人が想像するレベルの「日曜朝テレビ番組の正義の味方と敵対する悪の組織」と大差ない運営方針であり、部下という名目の同盟者であるはぐれ悪魔や神器使いに仕事という名のテロリズムを要請するときは直に命じての直轄運営だ。

それなのに役所でもないのに書類仕事に忙殺されている現状は、ぶっちゃけ彼ら個々人の思考の確立方であり、理論立てて部下に命じるために一度『作戦と目的と追求する結果』を立て直すためのカンペ作りでしかなかったりする。

それまではまるで大学のサークル活動にでも興じるかのように立案も方針も中途半端で、武勇と狂奔の鼓舞だけを先走らせる『煽るだけ』の指示しかしていなかった彼らだが、一度明確に『どうしようもない負け』を覚えた後はようやく己らの在り方を見直し始めたらしい。

何がいけなかったのか、何をすればよかったのか、を見直すためにも、今の思考確立方を話し合って『やってみている』最中である。

もう遅い可能性もあるが。

そんなジークは自分たちが現在、冥府側に指示支持されていることも理解できているし、既にゲオルクの言い分も理解できているので言葉にせず、再び書類仕事へと思考を戻す。

だが、同じように書類を見直していた手を止めた曹操は、少々呆然としながら年若い少年魔法士へと言葉を投げた。

「ちよ、ちよつとまでゲオルク、それは今更すぎないか」

疑問というより詰問のような口調なのは、今回の為に彼自身もそれなりに手間と犠牲を支払った後だった所為でもある。

今回の『冥界への戦争』を始めるための頭数を揃えるためとして、彼が率先して動かざるを得なくなった経緯があるのだが、その際の「魔女の夜」という魔法使い集団の頭目であるヴァルブルガという装飾過多な年齢不詳ゴスロリ魔女に生贄、ゲフン、まあ色々と色付きの接待で持て成した過去があるのだ詳しくは割愛（早口）。

「だってさあ、根本的に僕たちには戦力が足りてないんだよ。はぐれ悪魔を突貫させるのみならず、僕ら英雄派まで捨て石にされることが決定されているのに、どうやってやる気を出せというのかな」

旧魔王派と一応は銘打っていても、それらを採り仕切る頭が現状居ない今では、冥界側からすれば単純に敵で害悪で、例え彼らの租が家を持っていたとしてもその繋がり<sup>勘</sup>を断つ<sup>断</sup>くらいには見捨てられた者たちである。

ゲオルクを初めとして、一応は主流となっている英雄派の中では、彼らをはぐれと呼ぶことに今では躊躇もしなくなっていた。

そんな彼らが「禍<sup>カオス・ブリゲード</sup>の団」の纏まり<sup>神風アタック</sup>からもいつはぐれるかも分からないからこそこうして突貫要員へ<sup>神風アタック</sup>采配されているわけだが、その前にリゼヴィムだけでも戻って来れたらその指図を受けることなく反旗を翻す……こともないかもしれない。

なんやかんやでもリゼヴィムもまた基本は快樂主義なので、使い潰される悪魔らを憐れむことも無いかもしれないことが懸念されていた。

まあ、今更誰かにどうこうできるといふのなら、こんな事態にこそなっていないが。

「そ、んなことはないだろう。俺たちには弱点らしい弱点がないが、逆

に冥界側の弱点ははつきりとしている。其処を突くための  
【紫炎祭主インシネレート・アンセムによる磔台】を引き入れることに成功したのだから、あとは  
蹂躪するだけだ」

「……曹操さあ、自分でも完勝できないどころか、負ける可能性の方が  
高いつて自覚してるでしょ？ 言葉に覇気がないよ？」

「……」

そしてその過剰かもしれない妄想に似た予測は、建てた時点で8割  
当たる。

それを誰もが思い描けるからこそ、それは既に妄想どころではない  
確固たる未来として待ち構えられているのである。

明確な負けを味わったからこそ、彼らに植え付けられた推測は覆す  
ことが不可避足り得ているのであった。

ゲオルクに言い切られて黙ってしまった曹操には、云われるとおりに  
思い描ける先行きが明るいモノではないことを完全に理解してい  
る。

それでも彼らが進まねばならないのは、一度上げてしまった御旗を  
卸すことがもう出来ないからであり、逃げることもまた出来ない為で  
ある。

『全体としての負け』が未だないからこそ【禍カオス・ブリゲードの団】はまだ形を  
保っており、集団であるために膨張した『蜂起する気概』をその方向  
以外に逸らせないために、解散させるためには相応の理由が要る。

無責任に集団そのものを放棄する選択もあるが、それに属していた  
過去は解消するにも手間がかかる。

その手間の合間に放棄したはずの集団が行動を興せば、自身へ舞い  
込む火の粉は避けられそうにもない。

なお、『そのために集合した団体』へ明確に『別の方向性を示唆』す  
るためには、集団そのものを確固として纏める人材や方針とそれを取  
り巻く環境の『全て』が揃わねば換えられそうにもない。

間違っても、例えば街そのものが『明らかに』社会的に排他される  
べき人種と癒着しているかのような社会性を備えた公共設計は表沙



汰に出来るモノではなく、それを取り巻く環境は根本的にその社会の内枠で生活する人々のためにこそあるべきものなので、安寧と安心を『大多数』の為に考慮しない公共設計が成り立ってしまう世界とは優しいモノなどでは決してない狂氣的な代物である。

歴史を紐解けば確かにそういう世界がかつてあったことも事実であるが、未だ進歩の途中である社会構築が周到されていない人類発展途上にそれを興すことは人民の安寧を配慮するべき方向性としては明らかに間違った傾き方であると云わざるを得ない。

要するに、どこぞの小野寺ONDRさんのハイライトが真つ当に仕事をしなくなるような過程と決着を起こしておいてどのへんがハッピーエンド足り得るのかよう！と云いたいわけで。

——話が逸れた。

曹操の言う通り、冥界側、要するに悪魔には明確な弱点がある。

其処を追求したかのような神器の【インシネレート・アンセム紫炎祭主による礫台】は確かに強力だが、そこを摺り抜けるやり方が決まないと切り切れるものもないのだ。

そもそもテロの本質とは、少なくとも『英雄』になろうと彼らが抱いた心中に残響のように燦る闘争と競争に拠る自己発言の場などではなく、無差別かつ広範囲に渡って引き起こされる恐慌と不安の過剰飽和による集団生活の崩壊促進である。

【インシネレート・アンセム紫炎祭主による礫台】のスペックが上々であったとしても、それを扱うのはそもそも個人でしかないし、その性能も本来は集団へ向けて執り行える質とは言い難い。

これが例えば彼らの仲間であったヘラクレスの神器バリアント・デトネイション【巨人の悪戯】が禁手になっていた『全身からミサイル状の突起物を生やして撃ち出す能力』即ち『ミサイルを過剰に生成し得る能力』を備えた【デトネイション・マイティ・コメット超人による悪意の波動】であれば実に明確に役立てられていたのであろうが、なんとも間の悪い人材であらうことか。

「大体、弱点がないんじゃないやなくて、そこまで突出するような経験を備えていない、って程度だよ僕らは。だからこうして仲間をふたりも失っ

て、戦略的主要神器のひとつも奪われて、のうのうと生かされて使い潰される。力が無い奴は結局この世界じゃ自由に振る舞うこともできやしないのに、首を突っ込んだのが間違いだったよねえ」

「……そうしなくては生きていけなかった世界だ、今更いすべきことじゃない」

「そうかなあ。少なくとも、ジークは元々教会側のエリートなんだから、おとなしくそっちの言うことを肅々と聞いておけば今こうしている必要もなかったんじゃないの？」

ゲオルクが語る通り、ジークは元々教会で育てられ鍛えられた。

孤児院出身の彼は教会以外に拠る処も無く、神秘が完全受肉しているこの世の中で物理的な悪魔祓い<sup>エクソシスト</sup>を敢行するべく戦士として育成を果たされた。

元々神器を持っていたことも相俟ってなのか、教会の者にしては珍しい意志ある魔剣を所持するに至ったのが彼である。

その点は、フリードと出身を同じくする教育機関の出であることも理由かもしれない。

まともな育成機関が今のところ見当たらない、教会の闇は深い。

「それでもやってしまったことは覆せないだろう。それに俺はエリートというよりはサンプル、あっちだとしても使い潰されていたのがオチだ」

「そうかなあ」

「……ゲオルク、何が云いたい？」

口を挟んできたジークに何とも言い難い顔で、ゲオルクはそのまま言葉を続けた。

「ジャンヌの今の所属が分かった。——天界だ」

▽  
▽  
▽

「——ミカエルは甘い」

熾天使の一角に、『神の炎』『楽園の管理人』『ケルベロス地獄を見張るもの』と数々の二つ名を馳せる者が居た。

彼の名はウリエル、天界を取り仕切る4柱の【熾天使】セラフイムのひとりでありながら、原作ではほとんどその設定が練られていない男である。

「確かに、天使の数が増えない現状で、『天使化』の手段が得られたこととは喜ぶべきことだ。だが、そのために悪魔や墮天使と仲良くする必要など、一切無い」

「おっしやる通りです、ウリエルさま」

彼に追隨するのはテオドロ・レグレンツイ、未だ幼い身でありながら、司教枢機卿という教皇に次ぐ最高位の位階を得ている黒髪の少年である。

烏丸が以前ツツコミを入れた部分が如何なくスルーされている、ト小学生男子ンデモ設定のSDでもあった。

「ゆえに、我らはこうして戦力を拡げる。聖書派閥などと呼ばれるからには、それを信奉しない者は須らく異端である。異端者は排除せよ、汝らはそう教えを受けて、これまで育ってきたはずだ。——そうだな？」

「「はい、ウリエル様」」

「——それでいいのだ」

テオドロと声を合わせたのは、フリード・セルゼン、そしてジャンヌ。

少年のすぐ後ろ両脇を守りながら控えるように傅き、一度教会から離反した身でありながらその場にいるのは、すべてウリエルの独断による采配だ。

だが、根本的に天界は戦力が足りていない。

それを埋めるべく、元墮天使派の殺人狂神父や、どうにも後ろ暗いところが伺える教会から出奔したはずの神器使いだとしても、その罪を雪ぐならば、とミカエルは許可を下した。

おそらくは此れもまた天界トップである彼の策の一角であろうが、そこを見通せないウリエルもまた経験が不足している。

これは、先頭を往くものとそれに続くものとの、些細ではあるが大きな差となるのだが、それを指摘できるものはこの場にはいなかった。

「一週間後、冥界で悪魔どもの遊戯の一つであるレーティングゲームの観戦が我らにも認められた。『御使フレイヴ・セントい』の構成の参考に、と現ルシファーより直々に通達が届いたわけだが、汝らにはそれに参加してもらう」

現在のレーティングゲームは、冥界の次代を担うとされる6家がトーナメントを組んでいる。

グレモリー対シトリーはシトリーが勝ち抜き、アガレス対バアルではバアルが勝ち抜いた。

残っていたのはアスタロト対グラシヤラボラスだが、アスタロトの次期当主は謎の失踪を遂げ、グラシヤラボラスの次期当主候補はそれ以前の会合でバアル家次期当主に心を折られゲーム放棄。

よって、次の勝負はシトリー対バアルとなる。

「あのーう、お言葉ですがウリエル様？ 俺様達は悪魔とかぶっ殺したがってるやつら筆頭ですぜ？ そんな危険人物たちを冥界側が受け入れますかねえ？」

「どうなろうとも構わぬし、汝らにただ黙している、とも命じはしない。好きに動いていいのだ」

どうしようもない命の危機、をはつきりと知ったフリードが口をは

さんだ理由は、当然その大元が冥界に関わっているのではと懸念したことが理由に当たる。

しかし、それをウリエルは意にも介せず、どのようにしてもいいと断じてしまった。

それを聞いて手元の聖剣を握り直したのはテオドロである。

同じくどうしようもない命の危機を知っていたジャンヌも想像がついたのか、思いつきり顔が引き攣っていた。

「汝らのような明らかな『悪魔の敵』を送ることは、天界が胸襟を開いた何よりの証明にもなる。というのがミカエルの言い分だ。しかし、汝らまでそれに追従する意義など持たなくて良い。飽く迄も奴らに反抗の意志を見出させないように、奴らの隙を突くように、適度に中を引つ掻き回してやるが良い」

「はい、ウリエルさま」

にたあ、とひとり少年だけが嗤っていた。

自分が良いように悪魔たちを翻弄する様子でも思い描いているのかもしれないが、何かしらの言いようのない悪寒が他の二人にはしつかりときていた。

それを思うと、ちよつと笑っていられなかった。

▽  
▽  
▽

各陣営が色々と冥界での騒動を画策していた丁度そのころ、駒王町では――、

「頼む烏丸っ！ いかいだけだっ！ いかいだけでいいから、その子とえっちささせてくださいっ!!」

とてつもなく考えなしな発言で街中で土下座も辞さない勢いのイツセーが、大河内アキラを指名して懇願していた。

そしてそれに対して烏丸は、——意地汚く餌へ群がる畜生を見下す  
目で己の先輩を見下ろしていた（過重表現）。  
マジで死ぬ5秒前かも知れない。

☆「えーと、媚薬に荒縄、ピンクローターにアイマスク、ビデオカメラとマイクロビキニ、よし、準備オツケー！」

おつす、俺イツセー！

セイクリッド・ギア  
神 器で己の限界を突破することに挑戦した代償も、「フェニックスの涙」というポーションみたいな薬で取り戻すことに成功した俺たち！

駒王町に戻って最初に目にしたのは、爆乳をぶるんぶるん弾ませて踊る新しいアイドルたちだった！

クラスメイトの貧乳に【検閲削除】な目に遭わされるも、熱意とやる気で復活を果たした俺は迸る情熱を奮起させるため、俺の復活にまで付き合ってくれた祐斗との友情を確かめるべく夜の街へと繰り出すのであった！

——つーか、俺が再起してからなんだかオカ研の他のみんなが集まり悪いというか……。

本音を言うとりアスとまた合体したいなー、なんて思ってたのに。まだ怒ってんのかなー。

朱乃さんのお乳様やゼノヴィア&イリナの教会コンビの無防備おっぱい、アーシア&小猫ちゃんちゃんの成長途上っぱいにレイヴェルも新追加してるはずだから目の保養したかったのだけど……。

アーシアとは未だに顔合わせも縁に済ませられず、次の集合日を聞こうにも今まで俺に付きっ切りだった祐斗も未だ折合わせがつけられないって言うし……。

はあく、アーシア成分が足りないなあ。

そんなことを思いながら夜の駒王町を連れ立ってゆく俺と少女化祐斗だったんだが、モデルみたいな美女を連れた烏丸とまたもや偶然鉢合わせちゃった！

ポニーテールの長身美人で、バストサイズは恐らくゼノヴィアと同

じかそれ以上！

バレ―選手みたいに健康的なエロさを主張するおっぱいは素晴らしい、目を見張るものがあるぜ……！

クソツ、こんな美人と付き合ってたのかよ烏丸ア！ いいなあ！  
俺もこーゆうモデル美女を組み伏せてえっ！

一抹の羨ましさを抱きつつ、流石に鉢合わせも二度目なのでお互いに気づかなかったふりをして離れようとしたところ、くだんの美女の声がかすかに耳に届いていた。

……ッ！ アーシアと同じ声、だと……!?

ほぼ衝動的に頼み込み、祐斗と交換することで彼女の方からOKをもらえた。

だってアーシアと同じ声だぞっ!？ そのうえでモデル体型の巨乳美女とか、男子ならば誰でも頼みたいレベル！

俺のビッグマグナムであの声であんあん鳴かせられるかと思うと、今から勃起が止まらんぜ！

そうしてホテルへと足を運ぶ中、路地を曲がったところでミニスカポリスへと変貌を果たした彼女にはもう辛抱堪らん！

どうしていきなりコスプレしてるのかとか細かいことは良いんだよ！ 滲み出る色気には応えなくっちゃ男が廃る！

そんな彼女へと俺は、勢いよく背後から飛び掛かるのであった。

▽  
▽  
▽

背後から抱き着きに来た先輩を肘で迎撃、良いモノが鳩尾へと入った模様なのでそのまま静脈注射で意識を刈り取る。

ほんとはゆーなから借りてきたアーティファクトで拘束してからゆっくりと段階踏むつもりだったけど、身の危険を感じてしまったのだし正当防衛だから仕方がない。

入れる【お薬】は烏丸くんの工房から拝借してきたチートな調合品である。

なんでも、入れると本人にとって都合のいい夢を見させて、前後の



記憶をあやふやにして後遺症も残さないのだとか。

いわゆる『悪夢は見たかよ?』という代物だ。

それにしても、アーティファクトを発動するたびにコスプレする仕様は如何なものか。まあ烏丸くんの好みなら悪くは無いけど。

この先輩が私をご指名したとき、烏丸くんは割と有無を言わずにその頭蓋を潰そうとしていた。

それはそれで独占欲発揮されたみたいで嬉しいけれども、学校の先輩ならばその選択は悪手になる。

烏丸くんは只でさえ居辛い性質で社会をうろついているわけだから、私が前へ出ることによってそれを緩和されるというならば自らを惜しむ気は無い。

無論ただ犠牲になる気はないから、こうして今回みたいに初めから合法ドラッグで鎮圧する気だったわけだけど。

そもそも烏丸くんの「味」を知ってしまった今では、それ以外に流される恐れなんて杞憂過ぎる気もするし。

ただ今回は、この先輩が自ら墓穴を掘ってくれたから、それに私が乗ることにしたに過ぎない。

今回の記憶を失う以上、この人がまた同じ轍を踏んでちよつかいを掛けてくる『次回』がないように、この人に付き添っていた『彼女』に釘差しをするチャンスを自ら差し出してくれたわけだから。

▽  
▽  
▽

曲名は『生殺し』というアップテンポなアイドルソングで、ダンサー兼歌手は元修道女トリオでアーシア・ゼノヴィア・イリナの3人。

全員漏れなくビキニ姿で上から覗いて三角の形に positioning から然程外れないように並び立ち、特に乳房を主張して揺らするように踊ってもらった。

両脇のゼノヴィアとイリナは巨乳の部類なので言うまでもないが、アーシアもまた成長途上とはいっても充分に形が整った膨らみを主張しているので問題は無い。

実に柔らかそうな3人分の白い肌が選り取り見取りな映像を撮り終えて、音源を元の世界より用意してくれたアキラさんに労いの意味を含め、給金代わりとして彼女の要求に応えようとしたら兵藤先輩に鉢合わせた俺である。

しかもアキラをご指名でスワッピングしようぜ、などと提案してきたので、土下座つたその頭を踏み砕こうかと心の闇が吹き出しそうになった。

——それを念話で留めたのは他でもないアキラたんなのだが。

兵藤先輩を鎮圧できる手段としてゆるやかなからアーティファクトを借りてきたという話も聞き、渋る俺へはことが終了次第随時連絡するから、とこちらに『やってほしいこと』を詰め直して先輩と連れ立って行った。

残されたのは俺と、夏休み中にも見かけた先輩の彼女と思しき清楚系金髪の育ちの良さそうな女子。

勝手に交換されたわけだが、それであなたはいいのか本当に、と倒置法で問うてしまう。

え？ 彼が元気ならそれでいい？ ああ、なんか先輩夏休みの終わりにかけては超過で入院扱いだったとかって話でしたね。でもこれからされることを考えたら元気とは言い難いのでは。

そんなことを思っていたら鎮圧終了の連絡が来る。

それにしただってアキラたんの、この世界に来る前の準備が周到すぎる。

見も知らぬ世界に来るのだから色々用意するのは当然ですか。そうですね。

では俺も俺で後始末に取り掛かろう。

兵藤先輩がこれから再び死亡フラグを踏まないために、先輩の彼女へじつくりと『お話』をしなくては。

とは言っても釘挿し程度の話である。

別にアキラが自ら同行すると口にしたときにちよつと、ほんのちよつとだけイラツとしたからその澱を吐き出そうとか、そんな意図は大して無い。

とりあえず、先立つて行く予定だったホテルまでついてきてもらえる？

▽▽▽

部屋に響くは悦びに塗れた嬌声。

細身だが筋肉質な男性の身体に覆い被されて、くしゃくしゃに乱れたベッドの上でされるがままに両脚を広げたあられもない姿で嬉しそうな悲鳴を上げ続けて居るのはアーシアちゃんのようなだった。

その両脇には、身体に力が入らないかのように纏れて横たわるゼノヴィアとイリナさんの姿が。

むしろベッドがくしゃくしゃに乱れているのは、そうして4人で交わって掻き乱した結果なのだと、自然と腑に落ちる。

「あっ！あっ！あっ！そらくんううっ！またなかにいつ！なかにくだしあいつっ！」

ひととき大きな嬌声がアーシアちゃんの口から迸り、その内容のあまりにも淫靡さに絶句した。

イツセー君が未だご執心である彼女は、完全に烏丸くんの虜となっ  
てしまっているらしい。

「おっお、っふおっほお、お、お、くくく……っつ♪」

……相手の男性がより深く腰を落としたことを脚と両腕で絡め抱き締めるように受け入れるその姿は、完全に肉欲に堕ちた牝のそれだ。

獣のような声を上げて彼の全てを受け止めて声音で分かるほどに嬉しそうなその様相には、普段見られる敬虔なシスター然とした態度はひとかけらも残ってはいない。

アーシアちゃんが彼に心を向けていたのは知っていたけど、此処まで本当に悪魔みたいに悦楽の泉に沈み込んでいるとは、まったくもって一切想像がつかなかった。

それらの全てが僕が、木場祐斗が意識を取り戻したときに目の当たりにした、最初の光景である。

烏丸くんの連れられた彼女を連れて行く代わりに僕を差し出した点について、イツセー君は結果的に烏丸くんを騙すことになるとは微塵も思っていないかったのだろうか。

もしかすればわかっただろうか。そう、僕にはいざとなったらアザゼル先生に施された性転換銃で元の性別に戻ればいい、という逃げ道が残されているのだから。

しかし、恐らくその逃げ道はもう途絶えていることだろう。性転換銃に時間制限は無く、一度撃たれたらもう一度撃たれないと元には戻れない。また転換にはインターバルが携わり、変身後は最低でも半日時間を置かないと安全に元の性別に戻るかが不明瞭であるのだとか。

今日は元々イツセー君を慰める目的で放課後に変身を施したから、最低でも明日の朝までは元に戻れない計算になる。

それに、例えば元に戻れたり正体をばらせたとしても、結果として烏丸くんを騙すことを暴露するわけだから、明日のイツセー君の命は風前の灯火となるだろう。

……さて、絶対に正体をばらせないことが判明したところで、僕がどうしてこうなっているのかを思い起こしてみることにする。

元より烏丸くんもまた目的があったのか、イツセー君と行ったときよりも色々と豪華なホテルへと連れ込まれた。

彼女の代わりに僕が相手をするようになるのかな、と一応は男性経験を備えている僕は諦観の面持ちで逆らわずに追従する。

——しかし其処で僕に待っていたのは、少々予測とは違う展開であった。

まずお風呂へ連れ込まれた。

イツセー君とのデートの為に用意した服はすべて脱がされて、彼自身の手で全身をたつぷりの泡で優しく洗われた。

僕が自分で洗うと断りを入れようとしても、有無を言わずに彼の手は全身を蠢いていた。

その手つきがまた卑猥に巧妙で、イツセー君とシタときには感じた

ことの無い衝撃のような感覚で腰が砕けた。

彼が言うには絶頂したらしいけど、イツセー君とのエッチの時にはこんな感覚は一切なかった。

痛くて苦しくて、でも彼が気持ちよさそうだからとされるがままになつて。

初めて女の子みたいな声が漏れるように出て、乳首やお尻や膣穴なんてほとんど触られていなかったのに、すべてキレイにされる頃には自分で立つこともままならなくなつてしまつていた。

お風呂場から抱き上げられて連れ出され、そうしてついに烏丸くんにされてしまうのかと思つていたのだが、部屋に待つていたのはイツセー君命名の教会トリオであるアーシアちゃんイリナさんゼノヴィアの3人だった。

しかも、全員が乳首と性器だけを隠……そうとして隠れていない、紐みたいないわゆるマイクロビキニと呼ばれる、とてつもなくインモラルな恰好で待機していた。

普段と打つて変わつて非常識な姿で現れた彼女たちに混乱する僕を他所に、烏丸くんたちは僕を拘束。

両手小指を繋がせる指錠で後ろ手に椅子に座らせて、ピンクの楕円に丸く小さな機械を両乳首とクリトリスに触れるか触れないかの位置に固定するようにテープで貼りつけて、耳栓とアイマスクを『簡単に』取り付けられた。

此処で彼らの重要なのは、恐らくこの視覚と聴覚を遮断する『気がない』程度の拘束だ。

これらは僕が頭を振るえば簡単にズレて落ちる被せ方であり、それから大体の設置を終えて放置。

振動する機械はお風呂で敏感になつた僕には充分すぎる凶器であり、このアイマスクと耳栓が外れ落ちるまで僕は再びずっと女の子みたいな悲鳴を断続的に上げていた。

我慢は利かず、耐えることもできず、男であつたときには容易かつたかもしれない小さく断続的な衝撃の結果はご覧のとおり。

どれほどの時間耐えられたのか知らないが、クリアになつた視界の

先では烏丸くんが彼女たちに押し掛かり、その身体をケダモノのように貪っているところであった。

——そして僕も、この身体の火照りを、自分の手だけで落ち着かせられるとは到底思えない。

▽  
▽  
▽

——……部屋の照明の関係だろうか、少々画質の荒い薄暗い映像には、何も身に着けていない金髪の少女が恥ずかしそうに椅子に座っていた。

髪の長さは背中ほどまでで、細身なのに乳房は豊満で、顔つきは清楚さが前面に押し出ているにも関わらずそこに混在する色気は隠すことも出来ない。

そんな彼女が気恥ずかしそうに身を振るのは、後ろから彼女の頭わになっっている乳房をゆっくりと揉みしだく誰かがいる所為だ。

その薄暗い所為で詳細を伺えない『誰か』は、彼女の耳元で何かを囁いていた。

「……っ、い、イツセー君？　僕、今から彼とえっちなことしちゃう、から、……み、見て、ね」

微笑む彼女だったが、揉まれていた胸を形が変わるように捻られる。

「んいっ!?　えう……、せ、科白が違う、って、む、むりだよ、そんなこといえない……っ、う、うん、わかった、もう反抗しないから……っ」

良い子だ、というくぐもった声が聞こえ、『誰か』が彼女へと顔を寄せた。

が、それを彼女は咄嗟に押し退ける。

「や、やだっ！　それだけはだめっ！　こ、こっち、こっちならすきにしないでいいからっ！」

『誰か』は彼女へ口づけをしようとしたらしいが、彼女なりに拘りがあるのだろう。

清楚であつたはずの彼女の雰囲気は損なわれていないのに、彼女は自らの股を下品にも指さしていた。

——画面は変わる。

「……えっ、なに、それ……、イツセイ君のと、全然違う……?」

ベッドの上へと押し倒されたのか、仰向けになつて自分の下腹部の辺りを凝視する彼女。

脚を抱えられるように開かされて、手は自身の顔の横へ。

白いふたつのふくらみには桃色の先端が主張するだけで、果実のように瑞々しいそれは重力に逆らわずに自重で潰れて、彼女の胸から零れるようにもつちりと佇んでいる。

だがそんな自分の全てを撮られているにも関わらず、彼女の意識は画面に向かない。

あり得ない事態を目の当たりにして、どうすればいいのか混乱しているようであつた。

「え、や、ま、まっつて、むりむり、そんなのはいらな、い、ぎょう……?!」

一瞬、白目を剥くように彼女の顔が仰け反り、拒絶するかのよう自らの胎へと伸ばされた腕はもがく様に宙を押し、逃れようと身を振る全ては無為に押し流される。

「……っ、っは、か……っ、ひぎい……っ?!」

自ら差し出していた膣穴を貫かれた衝撃は、彼女をまるで処女であつたかのように匂わせた。

画面に映る彼女の貌は、呼吸もままならないように大口を開けて舌を伸ばし、涙目になつて音にならない悲鳴を必死で上げているようでもある。

関係ないわけではないが、その身体を襲う衝撃の影響で、彼女の豊かな乳房は幾度となくプルンプルンと擬音がつくくらいにたわんではずんだ。

——場面は変わる。

「あゝっ!あゝっ!あゝっ!あゝっ!あゝっ!あゝっ!あゝっ!」

彼女は声を上げている。

身体を揺すられて、乳房を震わされて、膣穴を辱められて。

白く剥いた眼で、舌を出して、その腕はいつの間にか彼女を貶めている『誰か』へと伸ばされて、『誰か』の首筋へと抱き着いている。

「いいっ！いいっ！よお！おぢんぼお！もっどおまっん」  
「ごぐぢやぐぢやじでえっ！」

濁音に塗れた下品な嬌声が、涙と涎と鼻水でどろどろになった彼女の貌が、ゴム鞠のように跳ねる乳房が、胎の形がわかるくらいにごつごつと押し上げられてはつきりと変わってゆく様が、画面の全てを埋め尽くす。

これが悲鳴であったならば、これを見ている『誰か』イッセー君に救いはあつたのかもしれないが、彼女のそれは明らかに全て悦びを顕わにする嬌声であった。

——場面が変わる——。

「……、え、なにい……？ん、うん、わかったあ……」

彼女の消沈したような声が聞こえた。

かと思つたらすぐに彼女の姿が現れ、そこには股から白い粘液を惜し気も無く零している放心した彼女が椅子に座り、大股を開いた下品な笑顔で両手を顔の横へと持ってきていた。

「いつせーくんみてるう？ぼくすっごいおっきなおちんぽでえ、おもいつきりたねつけされちやつたあ。いつせーくんのよりずーっとずーーっとおっきかったのお、きもちよかつたよお？」

顔の横に持ち上げた両手をブイサインの形にして笑う。

その眼には色がなく、どこを見ているのかも定かではないほど濁っていた。

そんな彼女は、『誰か』に再び囁かれたことに気づいて、その顔に更に喜色を滲ませる。

「えへへえ、これからもーっつとシテくれるんだってえ、いつせーくんよりもげんきだよねえ………たすk」

——一瞬その顔が正気に戻ったように悲壮に歪んだが——、

——画面が変わる——。



「おちんぽさいこうですっ！ おちんぽさいこうですっ！ もつと  
もつと！ せいしくださいっ！」

スクワットののような姿勢で身体を上下する彼女が、ローアングルから映し出された。

乳房を幾度となく揺すり、笑顔の彼女は『誰か』に自ら跨り、屹立した肉棒を自分の膣穴で銜え込む。

その太腿には『正』の文字がはつきりと3つほど描かれており、4つめは3画面で――、

――画面は……。

「はい……はい……ごしゅじんさまのこだねではらみます……はい……いっせーくんの子として……はい……」

何も身に着けていない彼女が土下座の姿勢で、『誰か』に向けてくぐもった声で返事を、

――映像は、未だ誰の目にも映っていない。

番☆外☆編 「涙の数だけ、とはよく聞けけれど、強くなれなくてもいいから優しくしてほしいです」

「おっ前大将だろ!! 大将首だろ!! なあそうだろう!! 首だ首首! 首い、置いてけえツツツ!!」

「うるせえ白血球野郎! ヘモグロビン舐めんな! いつそ骨髓ごと抜いてやろうかアアツ!!」

時は中秋、麻帆良の学生が血気逸る大体育祭の季節。

我らが白組騎馬武者筆頭織村一夏ことワンサマー級長は、何処その妖怪を思い起こさせる宣言で以て先人切つて突貫して逝く。その様まさに鬼島津。<sup>グイシューマンズ</sup> あんなにはつちやける子ではなかったと思うのだけれど、やはり先日せっちゃんに告白して見事玉砕したのが原因なのか。ダメだよお、あの子レズだから(直球)。

対する紅組は我らがエース、赤莫迦改め愛の深い男椿史郎。何故にあんな返しになったのかと云えば、先の先輩のクラスでの狂奔が理由とのこと。『何故紅白で分けるのか』『白黒つけるのなら黒組でも良いのでは』という議論から『血液に関係が?』と話は弾み、モチベーションを上げるために『健康気にせず白血球殺せ!』という結論が出たのだと経緯を耳にする。そんな血液が体内流れて居たら嫌<sup>ヤ</sup>だなあ。どっちもどっちでどうしてそうなったのかと問いたい気分だが、楽しそうだしまあいいか、と放置。

やはり麻帆良は魔窟であるようだ。そんな遣り取りを見渡して、俺こと烏丸ソラはのんびり平淡にしみじみ呟いた。

「……なにやら随分と久しぶりな気がする。夏休みが無駄に長く感じた所為かなあ、魔法界滅ぼしてもう一カ月経ってるんだけど」

地球側のごたごたというよりは、地球に残った元魔法使いの後始末もあらかた終えて、本来ならば真つ先に矢面に晒されても可笑しくない麻帆良学園は比較的軒並み平和な方でもある。

世界に六人しかいない魔術師とやらを管理する「オズ」、純粋科学の最高峰である頭脳集団シンクタンク「アトランダム」、悪徳の都「ロアナプラ」に地上を統べていても可笑しくなかった財閥系列会社組織「HCL I」と表側の名立たる者たちも然ることながら、十二の人王の爪の先である「キルシエ」「黒服の都市伝説」「イスカリオテのユダ」などの裏組織ですら、麻帆良には手出しをしなかった。

これは恐らく生徒を慮った、というよりも、元々『魔法使いそのもの』が世界からのほみ出し者であったためなのだろう。

騒いでいたのはマスコミや直に痛手やら謀略などの嘴を挟んでいた政府関係者程度で、そこらへんも世間での生徒への配慮という点を突っ込まれるようになるのと冷水を浴びせられたかのように大人しくなっていた。

特に政府側は『後始末』の幾つかに「魔女」が携わっていることを知るや否や手を引いていった者が多かったように思えてくるのだが、そこはきつと身の程を知ったという理屈で片付けられる。

そんな中俺はというと、生まれの時点から魔法使いに色々と人生狂わされていた身としては思う処があるべきなのであろうが、ぶつちやけこうまで何も出来なくなった、というか元より何か役に立っていたのか、と言われんがばかりの扱いになっていては、今更自分の愚痴をぶつけても大人げないのではと思いはじめてくる。

ちうたんはどうなのかは知らないが、俺は盛大な気分転換と研究結果のお披露目を存分にやらかした身なので、後顧の憂いなどは別段抱いていない。

魔法使いだけを優遇するような思想で生きていた者らを除けば、それ以前より真摯な姿勢で生きていた方々は相応に、むしろ肩の荷が下りたと云わんばかりに晴れやかに伺えたのは俺の目の錯覚であったのだろうか。

元魔法使いも悲喜交々。

神の存在を知ってる我が身としては、生き辛くなった方々はそんな思想捨てて仏身にでも帰依すれば良からうモノなのに、と忠告するべきかと思いかけてしまう。しないけどね。

「さて、お次は借り物競走か。準備しなきや」

———そういえば、原作では此処でネギ君が全校生徒に追いかけられたのであったつけ。

でも今の彼はイギリスへ帰っちゃったし、そこまで大事になって目立つような先生も高畑先生くらいだけど、今もあの人は出張中だ。

全校巻き込んだ大掛かりな競走になると例年通りならば騒がれそうであるけど、今年はそういった目玉もないはずだから細やかにポイント稼いで——、

『———さあーあ始まりました麻帆良学園全校規模の大目玉、借り・物・競・走ッ！ 司会は私朝倉和美、』

『それと、喧嘩番長・豪徳寺薫でお送りするぜ』

『そしてえ、本日の賞金首はこの人だあッ！』（立体映像に写真付きテロップ、ドン☆）

———……は？

『烏丸そらッッ!! お前だお前！ 麻帆良学園の負完全！ 所沢の這い寄る混沌！ そして麻帆良武道祭ベスト4に入りつつも、自ら辞退した『勝ちを手にしらない勝利者』！ しかしそれは本当に彼の真価なのか!? という意見が、本日この方より齎されましたあッ！』

『それをはつきりとさせるために、推薦させてもらった。あの日、俺はお前に負けたが、お前ならきつと優勝できると信じていた。それをあっさり手放したことに何かしらの理由を、俺が欲しいんだ！ お前が負けていないという姿を、俺たちに見せてくれ！』

『はい！ そんな一方的によくわからん理屈で選出された烏丸くん

すが、彼の身体もしくはは身に着けているモノを確保できた方にはきつちりポイントプレゼントッ！ もーちーろーんー、本人を拘束できた方はMVP扱いということで金一封もついてくる！ 食券長者になりたい方は、今すぐ彼をげっちゅうー！』

「あーさーくーらーあぁあぁ!!！」

あと豪徳寺先輩、何してくれてんですか!?

一転して狙われる立場になった俺、全力の鬼ごっこが開始された瞬間であった。

▽  
▽  
▽

襲い来る生徒を躲し、投げ返し、宙を舞い、復興した街並みの屋根の上を跳ねるように駆け抜ける。

パルクール部がしつこいが流石に壁を走り駆け上がるほどではないので、三角蹴りの要領で何とかマンXみたいに未来感を醸しつつステージクリア。

実情はちよつと校舎の壁を駆け上がったただだが。むしろIup発見したら確保しておきたい。

「残機も増えるし無茶も出来る。自分を採る、ってよくわからんけど」

ゲーム特有の謎理論は追及するだけ白けるものだよね、と初めからその精神を備えて置けばネギ君にも色々と苦勞を買わせずに済んだのではなからうか、などといったIFを思う。

思うが、今はとにかく両親と故郷をようやく取り戻せたごく普通の天才少年だ。

魔法の才能という喪失することになった対価はさておき、培った経験はきつと齡10弱の彼の将来を保証してくれることだろう。

苦勞は買ってでもしろとはよく言うのだし、彼の今が

H A P P Y E N D  
めでたしめでたしで済んでいるならば云うことはないのではなからうか。

と、自己補填が終わったところで周囲を見渡す。

……やべえ、気づけば全方向から取り囲まれてる。

走ってるうちに追い込まれていたらしい。

以前と比べて麻帆良の私有地は半減しており、学都として復興が追いついた街並みを除けば世界樹付近は結構更地のままだ。逃げるならば街並みの中、という判断は向こうにもわかりやすかったと思われる。

うーむ、大ピンチ？

「ま、仕方がないか。かかってこい野郎ども、返り討ちにしてやらあ！」

「じゃあ遠慮なく」

——え。

▽  
▽  
▽

後ろから気配も無く現れたアキラさんに羽交い絞めにされたと思ったら引き擦り込まれ、気が付けば見覚えのある部屋。……女子寮？

ああ、アキラさんのアーティファクトやね。そーいえば返してもらってなかった。

「えーと、助けてもらった、と思ってるの？」

「そうだね。気にしなくていいよ、お代は今から貰うから」

と、アデアットを止めバニーから体操服へと戻りつつ、俺を捕まえたまま囁くアキラたん。

……あの、背中にやわっこいモノが当たってるのですが……（照れ。

「あててるんだよ」

心を読まれた。

今更だけど麻帆良の女子サトリ率多すぎい、それとも俺がサトラレなのだろうか。

とにかく、相変わらずパーソナルスペースを容赦なく詰めてくるなあ、と思う。

さすがは物語上のメインヒロインを飾る一角、男子にとっては実に理想的な方々のままのようだ。

いや、こうして目の当たりになっている以上、未だに漫画の中なんだけ、などと嘯く気はないのですけどね。

やっぱり大元の世界構成自体に神の<sup>作者</sup>見えざる手が携わっているのかもなあ、と疑いを抱いてしまいますわ。

魔法界滅ぼすくらいまではつちやけて、それまでの経緯でネギ以外の何かがこの世界そのものに大きく関わっていることは分かったけれど、それでもこの世界で生き抜く上で全部を全部割り切ったというわけじゃない。

贅沢を云っているように聞こえるかもしれないけど、俺に物語上のメインヒロイン集団に惚れられたとかハーレムを作りたいとか、そういう欲求は別段ない。

男子としては美少女らと関係を持って嬉しくないとは言わないが、実際のところは色々<sup>と</sup>他から寄って集って策を積まれた感が諄い。

此処まで積み上げた信頼、……と呼ぶには些かアレな関係性は、果たして本当に俺自身の手で築き上げたものであったのだろうか、みたいな思春期染みた懸念がしこりの様に後ろ髪を引くのだ。

実際どれもこれも俺としては差し迫った何某かに対処できる己の手の届く範囲なんかを改めて思い知るためにやった行動の結果だ、それがたまたま色々なことを片付ける結果を引き出せたというだけで、全部が全部自分だけの思惑通りに行ったなどとは思いません。

世の中は大抵人の思惑通りには動きやしない、縦しんば上手くいったと誰かがほくそ笑んだとしても、それもまた他の誰かが振り翳す手で覆される可能性を持つ砂上の楼閣だ。

だからこそ、彼女らがこうして距離を詰めてくることは、俺が好かれていた結果に結び付いているのか、と疑惑が蔓延る。

……まあ疑問には思っても役得は甘んじて受けますけど。でもこうして甘受する程度が関の山だよ、女性として『見ること』にはやはり心情的な一線があるし。

それでも男子だからアキラに抱きしめられて、全身を密着されていて、思春期であるからこそ気恥ずかしさもややもやとした欲求が鎌首を擡げる。

良い身体してるけど未成年、と踏み込む気がないからこそ己に必死で言い聞かせる俺がいた。

落ち着けえー、お前の出番は無いぞー……！

「……………じゅるり」

「——!？」

ちよつと!?! この子いま舌なめずりしたんだけど!?!

今そこにある危機を感じ取ったときには、もう遅かった。

▽  
▽  
▽

身長はアキラも結構あるが、烏丸と比べればそれほどの差異は無い。  
い。

むしろほんのわずかに烏丸の方が長身なのだが、同年代での精神的な成熟さが其処には表れているとでもいうのか、アキラにとっては結構容易く烏丸のことを羽交い絞めに出来ていた。

その抱き方は後ろから胸へと手を回す完全密着型で、中学生としては充分豊満な乳房がつぶれるように烏丸の背中を圧迫していた。

体操着越しではあるが、たわわな二ツ山のふくらみの先端が烏丸イ



ソラの理性を削る。

押し付けられたそれは、まだ義務教育を修了していない年代の若々しすぎる身体を持つ男子の性を、翻弄するには充分すぎる凶器となっていた。

そういった事情無しに、アキラの膂力は密やかに麻帆良でも上位に位置する。

一度原作でもクラスの女子を何の補助もなしにポンポン投げたこともあったが、そんな隠れ設定を烏丸相手には如何なく発揮するのがアキラの本領である。

そして、今回こそそれは留まるべき事で合ったのかもしれない。

アキラは烏丸に『雄』を感じていた。

普段のノリで拘束してみたはいいモノの、学園都市中を跳び回ったことで程よく掻いた汗の匂いが、彼の首筋や体操服からむわりと漂う。

それがフェロモンである、と云わんばかりの、女性を本能的に雌足らしめる潤滑剤。

しっとりとした汗ばんだ肌は上気した体温が相俟って、男性にはどニツチ且つマイノリティ的な魅力とさせていた。

そんな烏丸に対して元々興味以上の感情を抱いているアキラは、今何気に色んな意味で狙われている烏丸との程よいバランスが取られている関係を『崩すかどうか』を内心で天秤にかける。

クラス内でも無駄に株があり、全員とは言わないが色々とキレイ処にモーションを掛けられているのが烏丸の現状であり、彼自身はあまり進める気がないという点も、他と比べてリードしている元エターナルロリータさえどうにかできれば別の子たちも抑えることも無くなるだろう。

しかしそうになると、そのバランスを崩すということは今の関係から良くも悪くも進まなくてはならない。

それが前進か後退か、どうなるのかは彼の心情で大体決まってしまう。

此処で普段大人しめを地で行く女子中学生としては留まることを

選択すべきであつたのだろうが、彼女にも備わつていた理性を押し退けたのは、他でもない彼自身のこの状態であつた。

——要するに、男子としてのエロさに理性が負けたアキラは、その欲望のままに彼の身体を貪つた。

前々から密やかに濁されていたものの、直に躰わとすると本当に酷い真相である。

▽  
▽  
▽

「だいじょうぶだよ、天井のシミを数えているうちに終わるって聞かし」

『……一瞬のうちに態勢を組み替えられて、正面から俺を押し倒してハアハアと息が荒いアキラが、そんなことを口にしていた。男女逆じゃない此れ……!?!』と混乱する烏丸を他所に、たどたどしい手つきで少年の身体へ抱き着き、その香しさを堪能する女子中学生。

文章にしてみても色々とアウトな絵面であつた。

「ちよ、落ち着けアキラ、そういうのは俺早いと思うな……ッ!」

云いつつ無理やりに剥がさないのは、まず間違いなく彼女の力が強い所為もあるが、そもそも烏丸自身も身体能力の面では強靱ではないことも理由に当たる。

常人と比較すれば十分に凌駕できるはずだが、麻帆良に集うスペシャリストたちに比べると最後の一线で一步及ばない。

そんな達人と上級者の境くらいに居る少年が、実はスペシャリスト揃いの麻帆良女子3—Aに対抗できるかどうかと云えば土台無理な話であつたことが、何気に誰もが気づいていない純然たる事実であつた。

「暴れんな……暴れんなよお……」

「口調変わってる……!?! だ、誰か—— 助けて—— 此処に痴女がいます——!」

恥も外聞も今は苦渋、と呑みこんだ烏丸の判断は迅速だった。

が、体操服の下から手を入れて、背中を舐めるように撫でまわすア

キラは静かに答える。

「そんなに騒いでも、今は体育祭の真っ最中だよ？ ……女子寮に人がいるはずないじゃない」

「さ、最初からそのつもりで……!?」

「ううん、違うけど。でも我慢したくないんだ、ごめんね、ほんとごめんねー」

完全に棒読みで、謝罪の気持ちなど一切込めずに烏丸の身体を逃さないアキラ。

どちらにしろ、これでクラスの女子には見えようのないカンフルが行き渡ることになるだろう。

しかし、今はそんなことよりもエッチしかねえ、と下手な野獣より欲望に忠実となったアキラは、仮契約時以上に濃厚な口づけで烏丸の唇を奪っていた。

「んむっ、ちゅ、ちゅぱ、ちゅっ」

舌を押し込め、口中を弄り、相手の粘液を貪るように押し掛かるアキラ。

彼女は決してその道のプロなどではないのだが、留まることを止めた年頃の少女の舌使いは貞淑さを一時捨てていた。

舌で未だ女体知らぬ烏丸の神経を奪う一方、その下ではずるずると少女の手つきが少年の薄布を剥ぎ取ってゆく。

ちゅぽん、と唇を離れたときには力の抜けたように放心した烏丸が床に仰向けとなっており、煽られて反り返った彼の逸物が雄々しく頭わとなっていた。

「……んむ、ふう……、準備は良いみたい、だね」

目撃するのは初であるが、それに生娘の様に恥ずかしく割と今更でしかない。

そんな心内のままアキラは、自分もまた着ていた体操服を脱ぎ払った。

ズボンはずっとだけ惜しむ素振りを見せつつ摺り降ろし、汗とまあ女性ならではのちよっとした粘液でしっとりとはぞ濡れた薄布の下着が頭わになる。

上は捲るように晒し、年頃としては充分以上に豊満な86センチのDカップがブラからも零れて外気へ触れる。

ほんの少しだけ火照った彼女の様相には羞恥を慮っているようにも伺えるのだが、実際のところは今から始めることに興奮して意識が高揚としているケダモノのような実情であった。

「じゃ、挿入れるね……」

自らの下着のクロッチ部分をずらし、膣口の辺りへと烏丸の反り立った逸物を充てる。

自分の身体に入ってゆく異物感に背筋を震わせながら、短い声を刻むように漏らしつつゆっくりと腰を落とし、少年を銜えた暁にはその逞しさにぶるりと改めて全身が震えた。

「あ……っは、あ……、すごい、おつきいい……、っ……!」

「ア、キラあ……ッ」

苛む様な声を上げる少年だが、少女にとってはその仕草すらも愛おしかった。

腰を抑えつけるように跨って、彼を見下ろしながらうつすらと微笑む。

「いい、よ……、わたしが、んっ、ぜんぶ、してあげる、からね……あっ」  
宣言し、小さく腰を浮かす。

すぐに落し、自分たちの結合部が水音のようなモノを響かせることを自覚した。

互いの粘膜が擦れて、それが快感に直結しているのだと本能が語る。

刻むように、断続的に上下させることで、少女は少年に必死に縋っていた。

「あっ、あっ、あっ、からっすま、くんっ、きもちっ、いいっ? あっ、あっ、あっ」

アキラの身体は烏丸を覆ったように被さったままだが、後ろから見られればその尻は盛った犬の様に上下している。

それに連動して、押し掛かったアキラの胸元にあるふくらみが水風船のように柔らかくたわみ跳ねていたが、それを目の当たりにできる

のはひとりしかない。

男女の肌と肌が濃密に鬩ぎ合う姿は誰に憚ることも出来そうにもなく、されるがままになってしまった烏丸もまたチクシヨウと口の中で小さく呟きつつも、その眼はアキラの胸元へと吸い込まれていた。こんな事態になっても、雄の本能は仕事を忘れることは無いらしい。

「んっ、あっ、……？ あ、」

そしてその視線に気づき、アキラは悠然とより頭わに体操服を捲り上げ、

「……吸う？」

自らの豊かな乳房を持ち上げて、桜色の先端を烏丸へと突きつけた。

——これは、魔法世界という巨大な組織を壊滅に追いやった少年が、それでも勝つことが出来なかった少女たちとの奮闘を描いた、とても小さな敗北の記録である——。

……ぷるりと瑞々しい青い果実は、甘酸っぱい汗の味がしたという。

「やべえ、今回俺出る必要がねえ」

「イツセー、第二弾を、見たか……？」

元浜が机に肘をつき両手を重ね口元を隠したポーズで、何処か厳かな様子で静かに問う。

その脇では松田が後ろ手に組み直立不動、何やら一過言必要そうな組み合わせを体現しているのだけど、それがなんなのかは俺にはよくわからなかった。

それよりも、理解していることが一つある。

「ああ、見たぜ。——今回も最高でした……ッ！」

「だよな！ 前のグループとは全く違う組み合わせだけど、新メンバー全員美少女って普通にやばいよな！」

「もー、比率が飽和しすぎていてあそこのプロダクションへの期待値が上がりっぱなしなんですけどー!？」

途端にポーズを取り止め、話題へ取り掛かる俺たち男の子。

下手なカツコつけなんて意味がねえ、やっぱ男は中身だぜ！

俺たちの話題の中心は他でもない、美少女たちの華麗なダンスで世の男子の股間を驚掴みにした某アイドルサイト【エスアイナインジーシーSi9GG】で新たに配信された第二弾の動画のことだ。

第一弾の『胸の谷間に埋ませ隊』が気づけば爆乳美少女ばかりになっていて、最初期に居た不遇枠の娘を応援していた一部の男子例えば元浜とかがその入れ替わりには憤慨したものだ、某ペタン娘と入れ替わりで参入した北欧系銀髪美少女の【ロジーナ】ちゃんて大多数のちっばい好きも陥落したという噂だ。

元を正せば名称からして爆乳を揃える予定だったのだろうから、むしろ彼女が参戦したことは大正義としか言いようがない！

実際、彼女が混じって赤・黒・銀の爆乳トリオが踊る様は興奮のし

過ぎでまた入院するかと思うほどだったからな！

そんなサイトの第二弾――。

グループ名は『ビキニ♡<sup>ハート</sup>シスターズ』曲名は『生殺し』、と第一弾よりも軽快且つ更にアツプテンポな曲調で……まあ見た方が早いかな。こんな感じだった。←

先立ってデビューした爆乳トリオと同じように、今回も3人で組まれたユニットで、並び方は前と同じようにひとり前を前に推し出して後ろ両脇を固める、というスタイル。

両脇の子は、片方が活発そうな金髪ツインテールの娘【リイナ】ちゃん、もう片方がメツシユの入った青髪ショートカットの【ヴィオーナ】ちゃん。

こちらは髪の色と同じビキニを身に着けて、身体を動かすたびにぽよんぽよんと暴れるいわゆる『巨乳』の類に分類されるだろう。

そして中央に位置する、いわゆるセンターの役割を充てられたのは、金髪のロングストレートヘアが正統派美少女と云っても過言ではない魅力を振りまいた【アリシア】ちゃん。

彼女は両脇を固めるふたりと比べると、明らかに肉付きは足りなかった。

しかし、それは決して第一弾初期のあの娘のような物足りなさを彷彿とさせるような意味合いは無く、これから成長すると充分に窺わせるほどの豊満さ。

そんな彼女が他のふたりに負けないくらい女子の象徴すなわちおっぱいをたゆんだゆんとたわませていたわけだが、これは見るにワンサイズ小さめのビキニを着けているのだと判断できる。

そうすることで胸の形がよりくつきりと強調され、脇ふたりと比べるとポリウム不足が否めない彼女でも、センターとして見る側に満足を届けてくれたのだ。

水色の生地に細かいフリルがあしらわれた、まるで下着のような装いも目を引く要因となる。

そんな彼女たちだが、第一弾が全力で男子のリビドーに真っ向勝負

を賭けているのに対して、比較すると少々大人しめの組み合わせだと云わざるを得ない。

恰好や振り付けこそ、確かに大元側事務所が売りとするタイプだ、がしかし、纏まって見ると所作にもやや清楚系が混じっており、彼女たちの『頑張り』を目撃する男子たちにはセンターの可憐さも相俟って、それを見ることに色々と罪悪感のようなモノが湧いた。

特にリイナちゃんの方は第二弾が出る少し前に『お試し動画』として、本物のアイドルみたいに黄色いふりふりの衣装を着て『夏のお嬢さん』という曲を歌っている。

しかし——思えば、きつとあれが前哨だったのだろう。

カワイイ系で狙ったはずのアイドルがまるでAVに出た、と云わんばかりの雰囲気——。

これは、男子たちの罪悪感をより逆撫でて、一種のカリギュラ効果のような性的興奮を覚えさせていた。

さて、そのダンスの全貌だが。

まずある程度の前奏の直後、センターのアリシアちゃんが大きく手を振り上げて「おっぱーい♪」と叫び——（以下略）。

——おわかりいただけただけであろうか……。

清楚なはずの少女が見せた、ある意味下品なタイプのダンスバトル——。

歌詞の中身もまた……、三角ビキニが流されたり、鯨が潮を嘔くという暗喩に、貝殻じやはみ出しちゃうといった誘惑、そして見えそいで見えない生殺し……。

まさに曲名に恥じない、いくい動画でした……ッ！

「……アリシアちゃんマジやべえな、あんな清楚系なのにメチャクチャエロいお仕事を頑張る……って……」

「ああ、天使だな……。リイナちゃんもエロ可愛かったけど……」

「同意だ。……ヴィオーナちゃんも負けてないけどな」



動画を思い起こし、噛み締め乍ら感慨に耽る。

ひよつとしたら年下だったんじゃないか、と思わせるくらい幼い容姿と魅力を醸し出していた彼女に、デビューしたての豊乳系ジュニアアイドルを発見したかのような感動が蘇る……！ うっ………ふう。

ふふふ、おにーさん恥ずかしながら、ちよつと先走ってしまったよ。ともあれ、これからも応援せざるを得ないな！

両脇の娘たちだって例外じゃない、エロいのは正義！

「時にイツセー、気づいたか？ このサイトの名前、Si9GGってやつ」

「ああ、なんかの頭文字見てーだけど、なんだろうな？」

「最後のGGはわからんけど、半分はなんとなくわかる」

「マジか？」

「……セクシーアイドル9人、とかじゃないのか……？」

——マジか……ッ!?

今まで見たいな娘が、まだ3人隠してある、ってことか……ッ!?

これは、ますます目が離せない！

これからも応援せざるを得ないなア！

「——おい其処の変態三人、もういいか？ 体育祭の役員決め、早めに済ませたいんだけど？」

「二うつつすメラギさん、今から行くのでコブシだけはご勘弁」

何はともあれ、2週間後に控えた体育祭。

スメラギ様が殺気立つ前に、気持ちを切り替えていかないとな！

さあ、油断せずに行こう——。

▽  
▽  
▽

——ふむ、体育祭とな。

「……あれ？ 前回やらなかったっけ……？」

「何言ってるんですか、夏休み前にやったのは球技大会ですよ？」

「いや、そつちじゃなくて、……あれえ？」

ロングホームルームで出された議題を前にして、ちよつと小首を捻る。

なんだろうか、少し前にトラウマに近い何らかが通過していったよ  
うな、そんな感覚。

「とはいえ、私たちが決めるのはどの競技に誰を出すか、ただだそうです。体育祭の実行委員は二年勢から選ぶとか……」

「あ？ そうなのか？」

そうになると、本日お休みのレイヴェルにも悪い話じゃないか。

先日のアへ顔ダブルピースが尾を引いているのか、彼女は一向に登校——すなわち、俺の前に姿を現そうとしていない。

気まずいのも理解はできるが、転校早々お休みが重なるって留学生としてはちよつとどうなのかと。

なんでや！ レイヴェルさん嫌そうじゃなかったやんけ！

それとこれとは話が別ですね、そうですね。

「それじゃあ決めちゃうヨー、まずは今回の目玉だとか評判の『三人四脚』！ これは男子だけだからネー」

と、進行役を務めるアインツエ・クルシニコフさん(ロシア国籍)が、やや片言系の語感で弁を振るう。

どこかで見えたかと思いきや、以前にカラオケで同席した眼鏡の子であつた。

キャラが違う。

夏休みの間に何があつたし。  
それはさておき、彼女の言い分にちよい疑問が浮かぶ。

「三人四脚、って言葉の通りなら3人要るよな？ なに？ 男子だけで組まされるの？」

なにその地獄遊戯。

俺と同じ疑問にぶち当たったのか、他の男子からもさわさわと疑惑の声が湧く。

「ハイ静粛にー、心配しなくても、お相手は3年のお姉さま方ネー。上手く筆降ろししてもらえや男子ドモー」

言い方。

色々と不安になるアインツエさんの進行に思わず口を挟み、詳細を聞いたところ元は2年のとあるクラスから提案された競技らしい。

組み合わせは当日の籤でランダムに、3年のおねー様方との交流を謀図った様子だが、途中で生徒会や先生方の細工が施され、申請当初の大義名分通りもはや顔なじみの2年ではなく割と新参の1年に狙いを定められたとか。

……どうにも誰か変態先輩さんの顔が脳裏に浮かぶ。

特に3年にはグレモリー&姫島先輩という二大巨艦が居並んでい  
るし、某発案者が狙い撃ちにしていた可能性が。

まあ、現状は失敗の様子だが。

そして途端に上がる男子どもの拳手の嵐。

吹き荒れてるナアー。

「烏丸くんは立候補しないの？ 揺れる特大おっぱいに合法的に挟まれるチャンスだよ？」

「俺のことなんだと思ってるの？」

樋笠さんが身を乗り出して問うてくる。

男子のリビドーとしては正常な反応であろうが、ぶっちゃけわざわざその様子を衆人環視の元見られるとかどんな羞恥プレイやねんとか。

かといって、此処で拳手をしないのは同性愛疑惑を齎しそうであるが。

「烏丸くんはそんな心配はないですけど……」

「それはそれで不安になる」

心を読んだ岡崎さんに、普段の様子を暗に言われてるようで心にくる。

まあどうせ当たりはしない。

拳手多すぎて流石にこの場での選抜じゃんけん大会になってるし。

見てろ、俺が負けるときは一瞬だぞ……!?

▽  
▽  
▽

「——は、悪魔どもも脳が浮かれちまつてんのかねえ？」

手元にある一通の便箋を弄びつつ、精悍な顔立ちの男性が悪辣さを隠そうともせず口遊ぶ。

男の名は帝釈天、世界最強十指の上位に数えられており、仏教世界を牽引するモノ<sup>神</sup>である。

実のところ、仏教世界のみでモノを語れば、彼は筆頭というわけではない。

仏教世界は内在する神仏の数が膨大且つ位階が上がるほどにその掌握性が高騰してゆくのだが、それ故に解脱し涅槃へと辿り着いた神仏は物理的な下位世界への強制力を喪失することになる。

宇宙が膨張し中心地から果てまでの距離が広大になることと同義になるといふべきか、解脱即ち物欲を切り離し悟りを開いた開祖など

は、その神性や超越性が遙かな高みに在りながらも物理法則の世界への介入を認識から外すことに至るのである。

結果として、高位から見ればパシリのような帝釈天が下段という名のまとめ役に残った、という状況だ。

実績を鑑みれば仏教世界を支える人民からの信任も厚く、ヴリトラ退治の立役者としてインド神話出身という前身も相俟って実力も相当と見做されているのだが、仏教世界のみで見ると中堅の立場から脱却できないまま長年存在し続けた、云わば永年地方課長といった立場の男である。柴又にも帝釈天があるしね。

そんな彼だが、その日は久しぶりに笑えた。

否、嗤えた。

彼へと厚顔無恥な招待を送り付けた、悪魔らの所業のお陰である。

「レーティングゲームの見学会、ね。アレか、自分たちの陣営が纏まったから外からも見に来い、っていう余裕か？——莫迦が。本気でそう思ってるなら救いようのねえ大馬鹿だ」

彼は知っている。

駒王協定と自称する聖書陣営の足並みの取れなさを。

その陣営の外側にある明確な敵意を。

三竦みが執り行われている土地の根本的な支配者を。

そして、様々なモノから零れ堕ちた吹き溜まりを、陰から操ろうという者の悪辣さを。

己もそうであるからこそその、分かり易過ぎる岡目八目——。

「禍カオスブリゲードの団をただのテロリストとしか認識していねえ。全神話に喧嘩売っていると明言している奴らが、今も未だ生き残っている理由を考えたことがあるのかねえ。——俺みたいな後ろ盾がいるからに決まってるじゃん」

ハーデスが突貫命令を下したことを知りつつ、彼もまた【手駒】英雄ら

の生死までは気にも留めない。

帝釈天にとつては、英雄の残滓も吹き溜まり以上の価値は無かった。

「当然、天界も一枚岩じゃねえからなあ、更に北欧はロキが居る。――  
ま、掻き回すなら今だよな」

今回集められた『招待』の中に、様々な悪意が一緒くたにされている事実を果たして冥界は把握しているのだろうか。

恐らくは、初手で自分たちの恥部である旧魔王を排除できたことで浮かれているのであろうが、それでも甘いと言わざるを得ない。

裏事情の全てを知る彼にとつては、冥界は盛大な地雷を踏み続けて居るようにはか思えなかった。

そして、その彼ですら気づけていない地雷が在ることを、彼は未だ知らない――。

▽  
▽  
▽

前回までのあらすじ！

邪竜を求めて三千里、北欧目指して旅に出たりゼヴィム一行。

封印されし邪竜に心当たりがある、と到達したその土地デンマークで待ち構えていたものとは――!?

みんなも邪竜ゲットじゃぞい！

「うっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ！ やっべー！ マジで死ぬかと思つた！ ただの封印地の癖して足を踏み入れる隙間もない毒の沼地つて正気じゃねーわ！ こりゃあべオウルフも相打つわけだ！」  
「嬉しいのかりゼヴィム？ すっごい笑つてるけど？」

一步踏み込んだ瞬間に靴の裏が音を立てて焼けるという謎の現象を前にして、慌てて飛び退くクレオとは対照的にメチャクチャ高笑い

して少年をドン引きさせるコ●ン系。

元はさん付けもしていた少年であったが、此れまでの旅路で思う処があったのか既に呼び捨てで扱われている見た目は子供の中身おっさんであった。

そんな彼らが捜しに来た邪竜というのが、名をグレンデルとリゼヴィムは云うのだが。

「……ていうか、ベオウルフって竜退治してたの？ 私詳しくないんだけど」

「してるぞ。リゼヴィムの云う通り、相討ちだけどな」

たった今足元が危機なクレオ少年を力技で引っ張り上げた、意外なパワーキャラのネフレアが小首を傾げる。

それに答えられる面子が居るとは断言できなかったが、助けたばかりのクレオが地味に説明を始めていた。

直接の戦闘力が足りないので別方面を補おうといろいろ勉強中であるらしい。

「てか、ベオウルフってどんな英雄だっけ。うちに居た？」

そしてネフレアの続く更なる疑問。

身も蓋も無いが、英雄として名立たる確かな面子（自称）が揃って居る『英雄派』において、名を上げていない者は結局埋没するしかないのである。

当のベオウルフの子孫である本人は埋没どころか、サーゼクスの眷属に『兵士』として契約しているわけだが。

「えーと、フルンティングってわかるか？ アレの使い手だったんだけど……」

「……ジークフリートが持ってなかったっけ」

「そりゃデイルヴィングだ。あっちは来歴不明なモノだから割愛する

ぞ」

ジークは原作上5本の魔剣を所持している。

グラム、バルムンク、ノートウング、デイルヴィング、ダインスレイブと名前ばかりは豪華な顔ぶれなのだが、前3本は来歴が完全に同じものであり単に別の呼び名であるだけの偽物の可能性がやたらと高く、ダインスレイブなんかは『所持者に勝利を齎さない』という呪いが付いて纏う曰く憑きだ。

原作で小物の噛ませキャラであつた要因は、完全に所持していた剣にあるのでは、と筆者は思う。

なお、デイルヴィングと呼ばれる剣に関しては、北欧の魔剣「ティルフィング」とブリテンの秘宝「デイルンウイン」という二つの来歴があつてどちらのことを指しているのか本気で不明な点が多い。

破壊力ならば後者なのだが、それならば魔剣ではなく聖剣扱いになるのでジークが所持するには些かの外れにもなるので前者が適当だが、さて――。

そんな話はさておき、クレオきゆんのはちみつ授業は続く。

「ベオウルフが振るつた剣でも特に有名なのがそれだ。剣身は毒の枝を煮立たせて焼きを入れ、戦場の血糊で鍛えたつていう製造（わく）由来（く）を持つ割に、所持者を戦いにおいていかなる災難からも守る、という守護が憑く。正確には貸し与えられたもので、グレンデルつていう怪物を退治する際にデンマークの重臣から信頼の証として与えられたらしい」

「それが竜を退治した、つてわけね」

「いや、グレンデルの母親と対峙した段階で全く敵わず、其処からは別の剣を使つて戦つている」

じゃあ今の説明何だったんだよ、とネフレアは思った。

「ベオウルフの最後はさつきも言ったように邪竜との相討ちだ。その



際使っていた剣もグレンデルの母親を斃した【巨人の剣】ではなく、ネイリングという愛剣だ。グレンデルとの戦いから既に50年経つての竜退治だそうだから、寄る年波つてのも相討ちの理由になりそうだけだな」

「巨人の剣とやらを体力不足で使えなかった、ってことね」

「いや、巨人の剣はグレンデルの母親の体液で融解したらしい」

つくづく予想を裏切る仕様だ。

それを英雄譚と呼ぶには、色々とカッコ悪い部分が多い気がする。

まあ叙事詩が恰好憑かないことなんて結構あるし、その点に関しては英雄派一同も目を瞑っている体が無くもなさそうではある。

「さて。今回呼び出すつもりだったのは、その最後にベオウルフと相討ちになった邪竜だと思うのだけど……」

歯切れの悪くクレオが言い淀む。

疑問符を掲げたネフレアには答えず、少年はリゼヴィムへと向き直った。

「……なあ、俺が調べた限りじゃ、その邪竜に名前なんて無いぞ？ 流石に強いのは分かるけど、名前も知らない奴を呼び出せってのはちよつと難しいんだけど……」

【ロッド・オブ・アスクレピオス生死覆す万象の杖】は医療の神の名を冠する割に、その本質は『医療』とはまた別ベクトルに偏った『再生』を促す。

アスクレピオスとは古代ギリシャの医者の名で、死者すら蘇らせる名医であることから後に【医療の神】の座へと収められた。

しかし、概念存在が受肉している世界で在れど、死者復活の逸話まで残されているモノを同じく『復活』を最後の審判として原典に掲げる聖書の神が許すはずがない。

ゆえに、アスクレピオスを初めとした数々の【復活神話】を備えた

神々は、自らの神話の正当性を目論んだ聖書の神によって、密やかに神器へと封印された背景が存在する。

当然、あまりにもそれぞれの神話に影響が出そうな【神】<sup>存在</sup>などは見逃されているのだが、そもそも72柱を初めとした悪魔らも原典<sup>プロトコル</sup>を紐解けば別の神話の主神の場合もある。

しかし、そういうモノたちはむしろ己の原典には素知らぬ振りで、大概が現状しか見えていないようにしか思えない事実が存在した。

その事実から、この世界の概念存在は受肉しているがゆえに不滅ではなく、竜種のような根本的に生命力に溢れた存在以外は、『封印』の段階でその意識も廃絶の憂き目に遭っているのではないかと推測される。

この【生死覆す万象の杖】は、恐らくはそういう類のモノだ。

そもそも、技術が求められる【医療】を、下地無しに扱えるとかどんな発展性だ、としか言いようがない。オペオペの実だろうか。

さて、その【杖】に備わっている能力は、多少なりの成長が見られるために現状2つ。

ひとつは本人の自己治癒能力の活性化。

ひとつは『再生』の逸話に則った『死者』の召喚。

原作のアーシアの様に『反転』という効果も備えているので、実際は4つに当たるのかもしれないが。

どちらにしろ、肉体の完全復活は伴っていないのだが、そこはネフレアの【托卵<sup>エキドナ</sup>促<sup>ナド</sup>す怪物の滴<sup>ドロップ</sup>】が存在する。

聖杯成れば全て一手で収束できたのだが、無いモノを強請つても仕様が無いのが現実である。

「ああ、知ってる。だがまあ、なんとかなるさあ。名前がないなら付けちゃえばいいじゃない」

「なんだそのアントワネット理論……」

胡乱な目を向けるクレオだったが、リゼヴィムの出した案は至極『まとも』であった。

——それは、『逸話』の収束。

神話の時代ならば、怪物退治というモノは幾つあつても不自然ではなかった。

ゆえに、英雄譚は戦場の数がやたらと多い。

だが、それが近代へと向かえば向かうほど、人民を脅かす存在の出現は控えめになってゆく。

それもそのはずで、過去より土地それぞれに根付いていた者たちを討伐すれば、その血統が遺されていない限り『次の怪物』が出てくることは実に稀であるからだ。

怪物と云えど生き物にカテゴライズされるこの世界では、異世界からの侵略者というコズミックホラーが背景にでも無い限りは、無限に戦い続ける話が成立するはずがない。

そこでリゼヴィムは、後年になって出現した『邪竜』を『怪物の子孫』として統合させた。

【邪竜・グレンデル】の誕生した瞬間である。

「——ま、封印解けなくちやまず復活できないんだけどね！」

「ダメじゃねえか」

結局今回は無駄足に終わってしまう。

なんとも締まらない話であった。

☆「」

会場を見下ろせるように、と用意されたものの、客を招待するにはやや手狭な部屋。

明かりは会場側に向けた一面のガラス壁からしか差し込まず、部屋の中に用意されているのは貴賓席ではなく豪華な造りのダブルベッドだった。

そのベッドの上に、色黒で白髪頭の少年・烏丸イソラが肢体を隠そうともせず、ふたりの女性を向き合わせるようにして傳かせていた。

片方は銀髪で普段の仕事着であるメイドのヘッドドレスを乗せたそのまま、しかし身体を隠す肝心のメイド服は胸の辺りを大きく開かれて、豊満な両の乳房を惜し気も無く晒し出している。

名をグレイフィア・ルキフグス。

魔王の奥方でありメイドであり一児の母である彼女は、自らの意志で少年の前にその熟れた肢体を晒していた。

もう片方は亜麻色の髪をした大人しめの美女で、こちらはグレイフィアとは打って変わって何も身に着けていない。

豊満な乳房は細い身体には不釣り合いなほどもっちりとしており、それでも自重に負けず垂れすぎないゆきつとした存在感を顕わしている。

先に述べたように細い身体で、ウエストは括れて無駄な贅肉など微塵も見られていないのに、尻や腰つきには肉感に溢れていて自然と男の見る目を性的に誘う。

そして曝け出された白い肌にはシミひとつなく張りがあり、十代だと云っても通用しそうな若さを醸し出していた。

これでこの場の誰よりも年を負った大悪魔なのだから恐るべき話だ。

彼女の名をヴェネラナ・グレモリー。

グレイフィアの旦那であるサーゼクス・ルシファアの實の母であり、さらに高校生の娘をもうひとり持つ二児の母。

そして冥界の上級貴族の奥方でもある、爵位こそないが貴族社会に充分影響を及ぼせる立場の女傑でもあった。

一目だとしても人間のモノとは思えないそそり立つ逸物を前に、グレイフィアはなるべく意識しないように努めていたのだが、唾をごくりと呑み込む音を喉が自然と鳴らしていた。

そのことに遅れて自覚しながらも、決して下品にはならないよう淑女の様に控えめな手つきで、そそり立つ亀頭ヘシルクのように滑らかな指先を沿わせ、自らの豊満な乳房をそれに押し付ける。

その彼女の対面では姑に当たるヴェネラナがグレイフィアと同じように、豊満な乳房で一本の逸物を抑えつけるような仕草を見せていた。

特大の果実のような重量感、それなのにマシユマロのような柔らかさを兼ねてふたり分、合わせて四つになった白玉が、ひとつの肉竿の鑄型の様に変形する。

それを受けた少年の口からは、感触を愉しむような喘ぎ声が絞り出すように漏れていた。

一方で、たわみ形を変える乳房を自らの意図で目の当たりにし、グレイフィアはいつそう息が荒くなってゆく。

互いを向き合った形でひとりの男性に奉仕をするなどと、彼女の結婚当初では考えられない行為であったが、すでにこうして事に及んでいるので今更な話だ。

「(それに奥さまはあの通り、これからのことに随分と期待したご様子ですし……)」

義母娘<sup>おやこ</sup>で奉仕する少年への一線など、とうの昔に越えている。

社交においても他に中々類を見ない豊満さを備えた自分たちの乳房で、挟んで擦る肉棒に幾度と服従させられたかつてを思い起こし、グレイフィアは再び喉を鳴らした。

今夜はこれからまた彼に抱かれるのだということに期待している自分を、最早今更貞淑であろうなどと思い返したりはしない【魔王の嫁】が此処に居た。

▽  
▽  
▽

ほんとうに酷い話だった。

初めは、そう、リアスと朱乃が子を宿した、という報告を受けたことだった。

朱乃は元々そう命じていたからなるべくしてなったと納得できたが、次代のグレモリーを担うべきリアスが妊娠するとはどういう経緯なのか、と片方に命じておきながら我ながら酷く言い掛かりに近いことを口にはしているとは思っていた。

しかし、いざそうなったと言うリアスを前にすると、その子供を無事に産むためにも色々と計画を立てていると聞かされると、なまってしまったものは仕方がない、と納得するほかは無かったのだ。

問題は、元々実験に近いサンプルの回収とほぼ同義の酷い認識で取り扱おうとしていた朱乃に対する申し訳の無さが少しばかり心に残り、それならば、といつの間にか話を聞いていたヴェネラオさまと一緒に、烏丸くんを相手に私たちが『子を求める』という立場を目標として彼を呼ぶ羽目になってしまったのである。

そうなると、その丁度良いタイミングは、近日に迫ったレーティンゲームしかない。

例え魔王と懇意にさせてもらっている者であろうと、実情は人間の少年である彼を冥界へそうそう呼べるわけではない。

しかし、サーゼクスが方々へ観戦招待を送り出したおかげで、それに紛らせるように彼の招待もまたその中へと組み込ませること自体は問題なく行えたのだ。

問題が浮き彫りになったのはその後だった。

▽  
▽  
▽

我慢の利かなかった方はヴェネラナだ。

自分たちの眼前で脈打つそれに視線は釘付けとなっており、グレイフィアが気づいた時には彼女が先に烏丸を押し倒し、そそり立つ肉棒

を自らの秘所へと宛がっていた。

グレイフィアは一度彼を発散させて、それからでも遅くはないと考えていたのだが、彼女よりも年を食い独身時代が遠いヴェネラナにとってはその『一番搾り』こそが、熟れた身体が最も欲しているモノ精液なのだろう。

未だ肉体年齢には成熟とは言い難いヴェネラナだが、だからこそ『そういう方面』には同年代の悪魔らよりもずっと貪欲だ。

若い頃にお転婆だったという噂が未だ残り、実際証拠こそ残っていないが『そういう方向で』でも『お転婆』だった彼女の、使い込まれた割にはずつと狭く小さな秘所が少年のそそり立つ肉棒を、鶏卵を呑む蛇のように形を変えて?みこんだ。

「~~~~つ、あ……つ、つふ、ううう~~~~……つ」  
貪欲であつたヴェネラナの顔が、破瓜を捧げるおとめ処女のように苦痛を浮かべる。

しかしそれも一瞬のことで、すぐに喜色へ変わった彼女は添えていた手をそのまま彼の脚へと降ろし、ゆつくりと根元まで腰を沈み込ませた。

耐えたような身代の震えは、弓の様に反つた身体が乳房を小刻みに揺すつたことで顕わとなる。

だが、その一瞬の『休憩』も彼女には用意されていなかった。

「っ!? つあ、はあっ! いひいんっ!」

ぐつ、と子宮口へ押し付けられる感触があつたかと思いきや、そのまま捻じるように入れられて押し広げられる衝撃が彼女を襲つた。

気づけば太腿は少年の手が抑えつけており、一層逃げ場のないことを悟る。

「~~~~つ! あ、あっ! あっ! んあっ! あひつ、ひういっ!」

覚悟はしていたが、最初からクライマックスだと云わんばかりに、突き上げられる衝撃はそのまま脳髄にまで届くほどに強烈に響いていた。

少年の腰がロデオの様に暴れて、ガクンガクンとヴェネラナの身体が支えを失つた振り子のように跳ねまわる。

しかし堕ちたくないのではなく、少年の腰の上から落ちたくない  
と、そのしがみつく手だけはしっかりと彼の脚を掴んだままなので、  
むしろ跳ね回るのは彼女の乳房だ。

ばるんばるんと風船が弾むように、桃色の先端が白い果実が挽げそ  
うなくらいに暴れまわる。

ヴェネラナの顔つきもまた悦んでいるのか苦しんでいるのか、判別  
がつかないくらいにぐしゃぐしゃに歪み白目まで剥き始め、壊れそう  
になると彼女が自覚し始めるその寸前、まるで狙ったかのように少年  
の腰つきはぴたりと収まっていた。

「くっくっ、くっくっ、……っ、っは、はあああ……っ」

息をすることを思い出したように、長く深く吐き出した呼気と共に、  
しがみ付いていたことで頭わとなっていた緊張が解けて、弛緩し  
た身体がその手を離す。

それを支えるように、彼女の腰を捕まえたのは少年の両の手であつ  
た。

「……え？ あ、ふあ、ひあっ!？」

一度、押し込まれたはずの感触が抜けたと感じた彼女に、続けて来  
るより深い衝撃。

彼女の腰を捕まえた少年は、より一層彼女を好き放題できる捕まえ  
方をしていたのである。

まるで玩具のように、特大の肉人形を弄ぶように、一度持ち上がった  
ヴェネラナの身体を、寸舜で再度落し込む。

その上下運動は、彼女の膣内に隙間をわずかにだが空けて、同じよ  
うに隙間を埋める作用を繰り返させた。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ はひいっ！ あひいっ！ ん  
あっんああっ！」

形の変わる胎が浮き彫りになるほどの衝撃に、一層大きく彼女の身  
体は少年の上で激しく弾む。

それは最初にヴェネラナが目論んだ自ら欲した肉欲の解放とは全  
く違う過程なのだが、しかしその激しさは彼女の欲望をむしろ大きく  
満たし始める。



蕩けていた目線は天井を仰ぎ、しかしその見つめる先は定まらない  
ホワイトアウトした虚空の先。

肉欲で塗れた脳髄は喉から漏れる悲鳴に共鳴し、どんどん歪に壊れ  
て往く。

それを嬉しがる感情は歯止めをかけず、ヴェネラナは少年の子を身  
体が欲しているのだということを、此処に来てようやく自覚してい  
たのだ。

▽  
▽  
▽

結果として、冥界はテロリストによる攻撃を受けた。

旧魔王派へと寝返っていた、全体で見ればわずかだが見過ごすこと  
が出来ない数の、現体制に叛意を抱えた者たちが特攻を仕掛け、英雄  
派と名乗る聖なる武器を備えた神器使いたちがレーティングゲーム  
の会場へと攻め入ってきたのだ。

『穴』を作ったのは招待した冥府の役人、即ち死神の幾人かで、彼ら  
が聖書陣営に敵意を抱いていることは必要以上に明らかとなった。

その不備を煽る天界側の少年枢機卿が勝手に命令を下して引き連  
れてきた聖剣使いを投下しようとしたが、より酷いことになったのは  
その後だ。

静観を決め込んでいた中華系神話代表も、いざとなれば手を貸すと  
言質だけはもらっていた北欧の主神も、その登場に全員が息を呑ん  
だ。

——烏丸くんが、「カーリー」を召喚したのだ。

▽  
▽  
▽

抜き取ると溢れるほどに腔内<sup>ナカ</sup>に出された性の証、水飴か何かのよう  
にどろりとした粘液を改めて目の当たりにして、グレイフィアは今ま  
で行われていたケダモノの祭典をようやく現実だったのだと理解し  
た。

事がひととおり済んだヴェネラナはぐったりとしてベッドの上へ仰向けになつており、弛緩し切つた身体に力が入らないのか意識も曖昧なまま放逐されている。

悲鳴のようだった喘ぎ声すら、今では漏れることも無く静かになつており、汗ばんだ肌は身体が情事を思い起こすかのように時折跳ねるように震わせている。

明からさまに強姦<sup>レイプ</sup>に匹敵するほど乱暴な扱いを受けたというのに、そんなヴェネラナの顔つきは酷く嬉しそうに蕩け切っていた。

そして自分も『そうなるのだ』と、グレイフィアは呆然とした頭のまま、自身へ掴みかかつてくる少年を受け入れてしまっていた。

貪るようなキスをされた。

口中を舌が蹂躪し、旦那にもされたことのないお互いの粘膜を交わらせる接吻で、舌の裏や喉の奥まで弄られた。

それだけで元より曖昧だった思考は茹だるように裏返り、押し倒された身体は衣服を着ていることすら億劫に思えてくる。

雌であることを思い起こされた火照つた身体はしかしそのままに、脱衣で中断することすら惜しむように少年の背中を抱きしめ返した。

片手は乳房と先端を器用に触り、もう片方は濡れ始めた膣穴を優しく愛撫する。

元よりその気だったので、下着は既に穿いていない。

スカートの下より曝け出されたそれを指先で確認した少年は、嬉しそうに彼女の『答え』を受け入れた。

身体を離すことが惜しまれた。

だから密着したそのままに、衣服が皺だらけになることも構わずに交わりは始まった。

乳房は互いの身体で歪に拉げ、胸板で擦れる先端が一層グレイフィアの情欲を掻き立てていた。

それが元から少年のモノであつたかのように、彼自身の鋳型になつたグレイフィアの膣穴は悦びの声を上げながらきゆうきゆうと締め付ける。

しかしそれとは裏腹に、大きく拡がった膣内<sup>アナ</sup>は子宮口までぱっくり

と口を開け、少年の乱暴な精子をいつでも受け入れられるように欲しがり続けて居る。

その自覚をしながらも、グレイフィアの心には未だサーゼクスがいた。

それが逆に欲望を燃え上がらせていた。

もしもすべての準備が行き渡らず、この場に誰かが押し入って来てもしたら全てが終わりだ。

その在り得そうな事実を予想しただけで、彼女の身体は氷柱を差し込まれたかのように震え上がる。

そしてその身体を、今温めているのが他でもない少年なのだ。

部屋中へと響き渡る粘膜の交わる粘ついた水音と、肉穴を穿られる泥に沈められたかのような感触。

嬌声となつて漏れる自分の声が、声にも悲鳴にもならず嬉しそうに男の衝動を求め続ける。

その全てが、グレイフィアをただの雌だと証明していた。



『黒き者』『血を貪る者』『破壊の女神』。

一説によればインド神話勢最強の主神【シヴァ】の奥方という噂まである隠れた最強十指に通じる女傑を、「きてー、なんか強いのかきてー」という詠唱とも思えそうにない科白で呼び出したことで、彼に対する『どうにかなりそう』感はもはや微塵もいいところでした。

彼曰く、「ほんとは戦争遣らかそうって奴らに自分から白兵戦とかわざわざ答えてやる意味なんてないけど、テロリストでなくとも人間てのは要するに自分が納得したい生き物なんだよな。だから、ぐうの音も言わせない実力差つてやつをきちんとして露にすることって大事なんだと思う」とのこと。

例えば冥界を襲うのなら、ミサイルか何かのような遠距離から攻撃できる機会があつて、それに聖なる力を載せて予告も無しに一度に数百発も放たれていたら国防という点では完全に負けていたそうです。

サーゼクスは確かに無慈悲且つ最強の性能を誇りますが、「個人の才能では数の力には到底及ばない、出来る範囲なんて限られている」とも。

……それをひっくり返す手札を、サラリと出す辺り烏丸くんは相変わらず業腹ですが。

世界最強の十指である、ウロボロスドラゴンを筆頭とした超越者すらも超えた規格外。

その一角でも更に上位に数えられるインド神話の主神であるシヴァの奥方とされるカーリーは、一説によればシヴァより強いとされます。

なんでも神話によれば、悪鬼を討伐するのに夢中で、旦那を踏みつけてからようやく我を取り戻した、とか。

十指最強を下におけるとか、どんな鬼嫁ですか。

実際、数で推してきたカオスブリゲードは、突出しすぎた『個の力』で一掃されました。

その手引きをした死神諸共……。

何故この場に彼女がいたのか、と静観していた面々に問い詰められました。インド神話からも招待していた、で押し切りました。

ええ、烏丸くんが召喚したなどと言っても信じないでしょうから。

▽  
▽  
▽

銀髪のメイドが四つん這いになり、獣のように後ろから責められている。

スカートを捲り上げられた彼女の白く熟れた尻肉は突かれるたびに瑞々しく震えて、下着は穿いていないがガーターが残ることで一層の淫靡さを顕わとしている。

両手で腰を掴まれて、パンパンと部屋中へ響くくらいの肌を打つ打音を響かせて、少年の肉棒は彼女の膣穴を執拗に擦り立てた。

これを知る読者なら見知っているであろうが、グレイフィアと云えばもうすっかりお馴染み、背後からの鬼突きである。

それまでの経緯<sup>フレイ</sup>で力も入らないのか、四つん這いというよりは肘立ちが出来ずに尻を突き上げる姿勢にしかなくておらず、ベッドに顔を埋めた彼女からはくぐもった嬌声くらいしか聴こえやしなかった。

確認していないが、先ほどまでの正常位で完全に孕まされたとは思えないほどの大量の精液を注がれているというのに、少年のそれはより押し込もうというくらいの激しい突き。

子宮がパンパンに膨らむくらい胎へと満たされたことを感覚で知れたなら、グレイファイアは今頃これまでと同じように幾度となく失神を繰り返していたことだろう。

だが今回のこれは感度という点においては酷く稚拙で、その代わりに『命中率』はかなり抑えが利かなくなっていたりする。

しかし、それまでの開発ですっかり少年専用<sup>カオス・ブリゲード</sup>に身体が馴染んでしまっていたグレイファイアにとっては、それも今更感じないわけがないほどの快楽を与えるモノ。

今もなお胎に形が浮き彫りになるほどの抜き差しを繰り返されている銀髪メイドは、思考も碌に働かないほどの享楽を、まるで底なし沼に蕩けてしまっているかのほどまでに感じていた。

——と、そんな折である。

「ふっふっふっ、っん？　なんか鳴ってね？」

先に気づいたのは少年で、云われてようやく、部屋に連絡用のベルが着信を告げていることに遅れて気づく。

しかし、それを先に取ったのは、

「——はあいもしもしい？　あら、サーゼクス。どうしたの？」

冥界の最高権力者を呼び捨てに出来る者などそうはいない。

魔王の母であるヴェネラナが、音声オンリーのそれを手にして連絡を受けていた。

『何故あなたがそこにいるんですか……？　グレイファイアはいますか。今のことで話しておくべきことがあるはずなので』

窓の外では剣を振るったカーリーの一撃で、逃げ惑う禍<sup>カオス・ブリゲード</sup>の団の一角が上下に両断されていた。

その余波で反対側の貴賓席が両断され、小学生くらいの男の子が痛

痛い泣き叫ぶ声が声高に響く。

何故こんな場所に子供が、と少年も疑問に思うも、観客としていたのなら相応に何かしらの立場とかがあるのだからから無視しても平気か、とグレイフィアの身体を堪能する方へと意識を戻す。

音が無線の向こうに届かない程度の配慮を持ちつつ、膾内を舐るように擦っていた。

「~~~~っ!!? つ、~~~~っ!!」

グレイフィアもまた、自分の嬌声が届きでもしたら全てが終わることを思い出し、蝟みたいな顔になって感じながらも必死で顔をベッドへ埋める。

アへ顔ならぬ、んほお顔という奴だった。

「サーゼクス、あなた魔王でしょ? 奥さんに聞かないと事を済ませられないわけでもないでしょ?」

『それはそうですが、呼んだ覚えのないインド神話の方が何故この場に居るのか、くらいは相談した方がいいと思うのですよ……。一応、貴賓の一角という風には帝釈天様やオーデイン様には伝えておりますが……』

「それならそれでいいのではないの? グレイフィアさんは今少々都合が悪そうなのだけど……」

『? っ、そういえば、彼女は今なにを? 確か『彼』を他の神話から隠すために動いていると聞いたはずですが、それほどまでに手が離せないものですか?』

息子の振る舞い方に苦言に似た言い方になってしまいうヴェネラナに、疑問の声を重ねるサーゼクス。

彼女もまた嘘を吐くことのリスクを自覚しているのだろう。

流石に家族である相手には、言い難いことを重ねることの不自然さが際立つであろうと漠然と思っている彼女は、サーゼクス相手には誤魔化しは通用しないのだろうと嘘を吐くことを極力避けようとしていた。

そんな絶体絶命とも云えるタイミングで、グレイフィアは受話器を鮮やかに手に取った。

「——はい、私です」

『ああ、グレイフィア。すまないね、急に呼び出したりして』

「いえ、こちらもようやくひと段落ついたところです」

嘘である。

会話を聞いて対応しなければどちらにしろ終わることを把握し対応したものの、彼女の膣穴には少年の肉棒が未だに挟まったままだ。

体位はいつの間にか正常位に組み換え直し、そんな様子を見下ろす少年の顔にはそれでも平然を装うグレイフィアへ何某かの愉悦に似た感情が浮かんでいた。

「それで、何が聞きたいのですか？」

『とりあえずは、あの『彼女』だね。やっぱり『彼』の伝手なのかい？』  
「はい、その点につきましましては確認も取れています。そちらで無理のないように対応するのが無難かと」

会話の合間にグレイフィアの唇が舐られる。

片手は乳房を揉みしだき、もう片方で太腿を大きく開脚させられて胎を執拗に突き上げられ続ける。

そのまま堕ちて逝こうとする感情を、彼女は必至で抑えつけていた。

『やはりそれが無難か……。それと、『彼』はどうしてる？ 本当は私  
が相手をしたかったのだけど、そんな暇もなくてね』

「くっつあ、……大丈夫です。奥さまも一緒に対応していただいていますので、こちらに不備はありません。私たちの対応で十分に満足いただけているご様子ですし、魔王様は熟すべき仕事を優先してください  
さい」

真実は、それと気づかれないように采配を施したグレイフィアの思惑通りでしかない。

絶妙なタイミングで受け答えへと解放されている彼女は、何事もなかったようにサーゼクスの言葉に応える。

応えた後は直ぐに、自分から口元を彼の傍へと傾けていた。

『……グレイフィア、いつもすまないね』

「っん、なんですか？ 突然」

『いや、キミには今日だけじゃなく、色々な役目を割り振ってしまった  
いると思つてね。冥界が各神話に交流を持つても大丈夫だと大々的  
に見せるには、今日のレーティングゲームさえ乗り切ればきつと道は  
開けるはずだ。その後は少しばかり休みを取つて、温泉にでも行かな  
いか？ 久しぶりに、ミリキャスも預かつてもらつてふたりきりで  
ね』

彼なりに、ずっと仕事詰めであつたことがそれなりのストレスだつ  
たのだろう。

そして、本来ならば魔王の妻などという立場はもつと気楽で、自分  
の眷属や冥界の政治などに口出しさせずに子供や家族のことにだけ  
腐心させたい、そんな希望をサーゼクスは抱いていたに違いない。

それは妻を持つ男性ならば誰でも思い描くことで、そうすることが  
女性の気持ちを満たせることだと、ささやかな願望を抱いて内助の功  
を押し付ける。

それもまた間違いではないのであろうが、女性とは人とは、いつの  
世ももつと満たされたいと果ての無い欲望に明け暮れる生き物であ  
る。

現に、サーゼクスが男子の願望を晒している通話の向こうでは、グ  
レイフィアは少年の執拗な子宮口への責めにだらしなく恍惚に塗れ  
た表情を晒していた。

「そ、そうでひゅね、わたしも、いひたいでしゅ……」

『……グレイフィア？ 呂律が回っていないようだけど、大丈夫かい  
？ やっぱり仕事を頑張り過ぎなんじゃないかな……』

絶頂へ逝きそうで逝けないタイミングでの寸止めに、図らずも本音  
が漏れていた。

逸る感情をなんとか抑え、改めて声に張りを出させる。

「……すみません、あなたとの休暇に気持ち先走つてしまったみた  
いで……。そうですね、今回の全てを乗り切れたら、一度ゆつくりと  
しましょう。それくらいの余暇は持てるはずですから」

『そつそうかい？ よし、それじゃあ私もまた頑張るよ。ちようど、天  
界側の貴賓席でも何かあつたみたいだしね』



「武運を」

そうして通信は途切れて、それを確認したグレイファイアは通信機を即座に床下へと放り出していった。

「……お待たせして申し訳ございません。どうぞ、存分に孕ませてください」

蕩ける様な恍惚とした微笑を浮かべて、自らの両脚を膾穴を改めて拡げて見せる仕草で少年を待つ。

尤も、それはほとんどポーズだけで、彼女の秘所には既に彼の逸物が深々と嵌り込んでいたのだが。

「その後はまた私わたくしにお相手してくれる？ ふたりのエッチを見てたらまた濡れてきちゃったの」

グレイファイアに覆い被さる少年に、ヴェネラナが押し掛かるようにして耳元で囁く。

彼の肌にヴェネラナの柔肌がぴたりと貼りつき、図らずも女体でサンドイッチを作るような構図になったことを自然と悟る。

窓の外では未だ暴虐が繰り広げられていることとは対照的に、この部屋には酷く緩慢で幸福な空間が作られつつあるのであった。

▽  
▽  
▽

冥府側の被害はレーティングゲームの会場と、本日開催されるはずだったバアル対シトリの試合のみ。

余波で多少の怪我を負った天界の使者がいた様子ですが、フェニックスの涙を施すことでことは済みました。

これが色々と交渉事に長けていそうな海千山千の猛者であれば言質だけでこちらの領分を侵してきそうな話ですが、その場に居合わせるのがそれほどでもない子供であったことも幸いしたのでしよう。

彼は泣き叫ぶだけ泣いた後、すっかり恐ろしくなったのか大した要求もせずに天界へと帰って行きました。

御付きの方々が烏丸くんを見て若干引いていたようにも思えましたが、烏丸くんの方はまったく身に覚えがないらしいので恐らく問題

はありません。

彼の存在を他の神話に極力隠すようにしようという意見を述べたのは確かに私ですが、その実はお察しの通り彼に関する女性関係を誰にも悟らせないようにするためです。

そのために一緒に呼んだリアスらとは席も離しましたが、少し目を離した隙にまさかテロリストへ立ち向かってゆくとは思いませんでした。

それは差乍ら中学生が授業中に妄想するかの如く、自身を強靱な何かと錯覚していたのか、リアスの兵士である兵藤君が真つ先に突撃を噛まして女神の余波で吹っ飛ばされていました。

命に別状は無さそうですが、何故あんな猪突猛進を誰も止められなかったのが不可解です。

そうしてその回収にと全壊した会場へ赴いた際、『それ』は現れたのです――。

「俺悪くないよね？って訊いたら大体のひとに「主犯です」って言われる。解せない」

我がことながら、けっこうこの世界に馴染んできたと思うのだが。今回も先輩方が使っている召喚魔法、それを利用して『場』に使える概念存在を呼び出すっていう、いわゆるソシヤゲガチャみたいなランダム性能を付け加えたのだけど。

……俺は幼女に呪われてるのか？

ランダムだから高火力且つ高配率の神域采配さえ備えればどんな奴でも充分かと思っていたのに、出てきた神は浅黒い肌で腕四本の小学校高学年くらいの少女系。

幼女と言うまでもないけど、此処まで召喚関連で年下系ばかりが出現率高いと俺に何かしらの問題が憑いていることを懸念してしまう。

あ、アジアは違ったか、忘れそうになるけどあの娘年上だったわ。

俺が今回のことに対処した理由としては、まあ基本的に俺個人が冥界とは根本的に足並みをそろえていないから、というモノが第一に挙げられる。

ギヤスパー関連でヴァレリーに冥界に被害が出ないように、と頼まれたことも手を貸した理由の一つだが、直接出張ることの冥界に関わる他神話との連携の拙さを素人なりに考慮してみると、やはり俺が直に顔出しすることには俺の周囲への影響が懸念され過ぎるわけだから。

そんなわけで間接的に、理不尽なちやぶ台返しが出来るキャラを呼び出し、冥界への責任追及を回避するためにも彼らには『明白な被害者』でいてもらい、冥界が貴賓として招致した他勢力への目眩ましも兼ねて、召喚した破壊神系少女には敵勢力と一緒に施設をある程度ひっくり返していただいた。

なあに、それで働いた代償としては美人妻をふたり分堪能させても

らったのだから、対価としてはむしろ貰い過ぎな帰来まである。

何やら色々と画策をしていたっぽい仏教とか天界とか、あと今回手引きをした冥府とかの冥界の粗捜しをしていそうな諸々の嫌厭勢力らが口出ししそうな雰囲気だったが、それもこれも今回の手筈で大体が黙らざるを得なくなつたんじゃないかな、と思われるね。

……まあ、少々見通しは良くなり過ぎたかもしれないけどねー  
……。

「見通しというか、風通しが頗る良くなりましたね。物理的に」

「何か細々と忠告をしてきたと思つたら、しっかりと『向補のこう』にも手を伸ばしていたのね、烏丸くんは……」

観客として招致されていた塔城やグレモリー先輩が、更地というか荒野となつた元会場を睥睨しつつ遠い目で云う。

他にも一緒に来ていた面子はいるのだが、木場先輩は何故か病室送りになつた兵藤先輩の付き添いで不在で、それ以外の女子やアザゼル先生なんかは世界の終わりみたいな光景で呆然自失中だ。

いや、あんな適当な召喚でインド系破壊神を呼べるとは、流石の俺でも予想外。

麻帆良組？ 護衛役であるウチの教会女子らと一緒に駒王町で待機中です。

「いちおう言つときますけど、テロつてのは社会状況に対する民衆の不満でもありますからね。熾させない、つていう選択肢は却下します」

ガス抜きも兼ねてるから、被害さえ考慮しなけりや自己破産じやなくて自己発散程度ならテロの一つや二つやつてもらつても気にしない。

それで痛い目見るのは大体自分なのだし。

子供は風の子。元気が一番！

「いや、その理屈はおかしい」

正気に還ったアザゼル先生がこちらの言い分にツツコミを入れた。  
ふむ？

「とはいいまでも、人間感情の生き物なのは明白ですし、己の感情の発露を妨げるモノを退かせようというのもまた感情ですし、理性や理知といった言葉を使ったとしても、結局は個人の好き嫌いが根本にありますし、誰彼構わず殴りたいと言うモノを抑え込んだとしても、他の何処かで発散することまで抑えられるわけでもないですし」

「かといってテロリスト擁護は違うだろ……」

「もちろん、殴りかかる奴が殴られないわけじゃないですからねえ、擁護してるわけじゃないですよ。そんな安穩とした考えで以て自分がやりたがる以上はやり返されることは当然でしょうし、その程度の想像力も養えていないのなら自爆で死なせた方が楽なのでは？」

「それで被害に充てられる奴らにはいい迷惑だろうが……」

「人間いつかは死にます。大体嘆いてるのは生き遺された遺族なんかですから、死んだ本人がどう思ってるのかを知らない以上、言葉を繋げられるのは俺たち生きてる奴の仕事です」

そしてそういう『言葉』は大概碌でもないのだから、あとは野となれ山となれ。

もうそれでいいじゃない。

やられてむかついたからやり返す、でき。

「あと先生には口出しされたくはないんですけど」

「あー、まあスマンって。俺だって墮天使の一部とはいえ背負ってるもんですよ。こんな冥界の外側が敵だらけな状況で、仲間として立つてこの危うさを、他の奴らにまで背負わせるわけにはいかなかったんだよ」

「仕事してるんならイイですけどね、文句ってわけじゃないですし。実務担当は大変ですよね」

「俺も担がれるだけの神輿になりたかったよ……。なりたくてなれたとしても、性に合わないんだらうけどな」

【働く魔王】系の墮天使総督が乾いた笑いでぬかしおる。

そしてそんな俺たちの会話でいち早く気付いたのか、朱乃さんが詰りめ寄ってきた。

「ちよ、ちよつとまってください、墮天使は今回の一件、起こることを予測してたのですか？」

その言葉で、他の子たちも先生へと目を向ける。

驚きを抱いたものばかりで、それだけこの人がそれなりにオカ研では顧問としての支持を得ていたのだらうということが予測されてなんだかほっこりとする俺。

まあ、一応はカリスマ提督らしいから納得の人心掌握だけど。

「というか、スメラギ先輩が白龍皇って奴らしいっすけど。知らなかったんすか？」

「「「「「は？」」」」」」

「ちよ、おま、ばらすなよ!？」

スメラギ<sup>皇</sup>ハル<sup>白流</sup>というあからさまな当て字からして怪しいとも思わなかったのだらうか。

顔見知りであるグレモリー眷属女子一同が、異口同音に驚愕の声を上げた。

あ、同じクラスの兵藤先輩だけ除け者だ。誰か後で教えておいてください。

「というか、秘密にしてたんすか」

「スパイなんだから当たり前だろうが」

「今回のことで手綱を冥府サイドから握られている面子は軒並み捕縛済み（デッド&アライブ）ですし、残っているのは誘導可能な零細勢力ですし、そもそも横の連携が取れてい無さそうな組織でしたし、というか改めて見たら派閥多すぎだなカオブリ……今のうちに暴露しておいた方がダメージは少ないんじゃないっすか？」

「……考えてみりゃそうなるか？」

何故か発揮されたカテレアの無駄カリスマが生き残った悪魔らへ行き届いているらしい。

この分なら、行方不明中だと噂のリゼヴィムとやらが戻ってくる前に組織そのものを切り崩すのも時間の問題かと思われる。

あ、そういえば。

「塔城、お前のおねーさんに関わる冥界側の指名手配は取り下げられたらしいぞ。グレイファイアさんが言ってた」

「え、あ、そうですか」

「なんかあっさりしてんな……」

「……今そういえば指名手配されていたなー、と思い出したところです……最近ちよくちよく顔見せに来ていましたし」

……ああ、そういえば仙術キャットにはお世話になったな、忌々しい。

無駄な敗北の記憶を噛み締めつつ、やや呆れ顔のグレモリー先輩が口を出す。

「グレイファイアがそんな簡単に取り下げるとは思えないのだけど……」

「まあ、俺のバイト代みたいなものっすね。そっちの提督も把握してることですし、残すはおねーさんを付け狙っていたっていう冥界側で口うるさい被害者側の遺族ですけど、そっちも問題の証拠が出張つ

てきたらしいのであとは首を落とすだけだとか」

「ああ、それはグレイフィアらしいわね」

ナニソレ逆に怖い。

一方で、お前は何のバイトをしてたのだ、という視線が波打つようにジト目で勘のよろしいアーシア辺りから向けられている。

冥界の将来を担う種付けですけど何か？（白目）

「ところで、兵藤先輩はいつたい何故被害者に」

いい加減気になっていたので質問してみる。

他の女子らがいつこうに語ろうとしないのでアザゼル先生へ聞いてみた。

教えてー←提督ウー→。

「お前の疑問の投げかけ方に何故だかイラツとさせられるな。呼び方とか」

空耳です。

「まあいいや。イツセーはなあ、うん、ほら、これまで大した活躍も出てないだろ？」

「活躍って、なんかライトノベルみたいな意味合いで言葉選びますね」「メタなことを言うのはよせ。それでだな、将来的に上級悪魔になってハーレムを作る、っていうのがアイツの夢なんだそうだわ」

「はあ」

思わずそらくん生返事。

ハーレムねえ。

男の夢かも知れんけど、実際出来上がると、逃げ場なんてねえけどな。



「悪魔として押し上がるには、今のパツとしない評価じやなんともならない。そんなわけで、今回の敵を何人か倒そうとして手柄を求めた結果、カーリーの余波で吹っ飛ばされた。ちよつとした脳震盪で済んだのは、神器で倍加を施していたお陰だろうな」

「はあ。なんか申し訳ないことしたつすかね」

「そこは人の話を聞く暇もなく突貫してつたアイツの自業自得だから気にすんな。流石にカーリー召喚はどうかと思っただけどよ」

ボクの隣に暗黒破壊神がいます、つてか。

あんなにヒヤッハーするとは思ってもよらなんだ。

「後の被害は？」

「一応味方として天界側に瓦礫で生き埋めになった子供が一人。まあ、子供と云っても割かし偉い奴だから気にすんな。自己責任を取って然るべき立場の奴、つて意味だから」

「じゃあ安心ですね」

後で顔出しはしておこう。

確かミカエルさんとかには俺の存在バレてるし。

他の神話は知らんけど。

「敵側は、悪魔が反現政府派と軍属主義、旧魔王派が見当たらないが、そっちは数も足りてないんだろ。特攻し掛けて来て大体が人間爆弾みたいに炸裂済みだ。その後で英雄派、それもカーリーの剣舞でほぼ塵だ。何人か虫の息だった奴を捕縛してたから、後で回復させて尋問にでも掛けるんじゃないやねえかな。で、魔法使いや魔女とかも軒並みミンチだが、……ああ、そういやお前は異世界出身だから感傷も無いか」

あれ、なんか気に掛けられた素振りがあつた気がするけどちよいと失礼な理由で呆れ直られた気がする。

アザゼル先生の中の俺に対する配慮という奴が上昇下降を繰り返して過ぎてシーソーゲームより敏速。

「つてちよい待って下さい。魔女がミンチ?」

「おう。そりゃあ破壊神相手ならそうなるよ。魔女つつたつて魔法を使える女つてただけだもん、人間じゃひとたまりもねえ」

お、おう、そうか、普通はそうなのか。

俺の世界ではアレだったから、てつきりこつちでも中々アレな奴らかと。

色々と手段は考えていたのだけど、用意した初手だけで済んでホツとしていいやら残念でならないのやら。

……とりあえず、出番の無かった補填術式の幾つかは解消しよう。

「……なんだろうな、いま世界が救われたかのような気分になった」

「どういう錯覚ですか」

「うん、錯覚だろうけどな、錯覚……だよな?」

何か歯切れの悪いアザゼル先生に思わずジト目を向けてしまう。

何を言ってるんだこのひとは。

「ともあれ、今回の一件で明確に糸を引いていた冥府側への補償は免れないだろうしな、組織そのものの切り崩しも時間の問題だ。トップまであと一息つてところだろうから、やり方はさておき結果は上々だ。よくやった烏丸」

と、賞賛をもらうものの、え? あそこのトップつてリゼヴィムなんたらじゃなかったの?

ルシファアーとか言ってたからてつきりアイツが牽引してるのかと思っていたのだけど、考えてみれば本当に組織引っ張れるやつがあん

な簡単に死ぬわけはないだろうし。

今生きてるのもスペアみたいだし、第二第三のリゼヴィムが出張ってくるよりもっと上っぽい何かが裏に居ると推測も出来るのかも  
しれない。

しかし、改めて思う。

「アレだけ纏まりのない集団を組織として引き連れてる奴っているんですか？」

少々気になったので、多分俺の知らない情報も持っていそうな先生に質問を試みることにした。

実際、あいつらの連携の拙さが今回の敗因かと思われるし。派閥多いよーカオブリー。

教えてくださいW i k i z e l 先生！

「そこまでは流石のお前でも知り得なかつたみたいだな。まあ、俺もヴァーリの伝手でようやく把握できたところだ。トップはいる、それも、この世界じゃ比肩し得る者が居ないくらいの【最強種】がな」

おお、なんか範馬の血筋とかそういう感じの科白廻しにw k w k してくる……！！

それは——、と問いかけたところで、中空より威圧のようなモノを感じ、中二のように空を見上げた。

「……あれは」

「は、戦場の空気に誘き寄せられて出張ってきたか。次元の狭間を泳ぐ龍——【真なる赤龍神帝・グレートレッド】!!」

何度か見たことある次元の狭間を泳いでいたでかいトカゲ！

別段何かを邪魔することも無くて見逃してたけど、え、あれ何か関係してるの？

矢荷成荘の奥地を探索するとたまに見かける程度の原生生物かと思っていたのだが……。

「——グレートレッド、久しい」

見上げるばかりであった面々が、その声に全員振り返る。

オーフェイスが居た。

以前に『それはどうかと』とツツコミを入れた痴女っぽい隠す布地の少ないゴスロリではなく、普段着であるピンクのジャージで何やら意味深に佇んでいる。

お前、コンビニに行くみたいなの恰好で何してんの？

「……っ！ ヴァーリから聞いてもしやと思っていたが、やっぱりお前が関わっていやがったな——ていうか、なんだその恰好はやる気ないな!？」

そのままの空気と一緒に振り返ったアザゼル先生でもツツコミを入れざるを得なかった。

そんな先生には答えることなく、ジャージオーフェイスは片手を上げる。

「小猫おひさー」

「おひさですおーちゃん。来てましたか」

「うん。見学」

「ゆツツツツツる!？」

もうちよつと空気読めよシリアスな場面だろオ!?!と先生は、幼女ふたりに続けて叫んでいた。

多分、シリアスなのアザゼル先生だけだと思いますけど……。

幼女ふたりの遣り取りに入れてた力が変な方向へ突き抜けていったのだろう、先生のツツコミは正直いまいちだと思う。

で、オーフィスがなんかしたんすかね？

▽▽▽

「なツツツんで此処でインドが出てくる……ッ!? 悪魔こいつらにアレらを牽引するだけの交渉力はねえだろ!」

冥界の施設がどう滅ぼされようと個人としては問題はないが、そのために出張ってきた勢力がアレではおちおち黙つてもいられない。

東方大陸間神話でも1・2を争うほどの破壊の女神の暴虐の限りで、恐らくは当初予定していたテロリズムよりもずっと酷い惨状となったゲーム会場を前にして、帝釈天はしかし己の目を未だに信じ切れずにいた。

周囲に人気は無い。

わざわざ人のいない場所を探して、そうしての絶叫。

そうして、叫ばずにはいられないほどに、彼は焦燥に駆られていた。

「しかもなんで生き残ってる……! 英雄を目指していたんだろう、死ねよ! 潔く戦場で死ねればそれで本望なのが英雄だろう!? お前らが捕まえられたら、俺にまで搜索の手が及ぶだろうが!」

幾人かの捕虜生き残りが連行された、との報告も、貴賓であった彼の元には届けられた。

それはサーゼクスの少なくない被害を齎された彼らに対して隠すところはない、という自分たちの健全さのアピールでしかないのだが、裏で繋がっていた冥府に帝釈天にとっては間違いのない『致命傷』。

しかも英雄派の何人かには悪魔に明確なダメージを与える聖なる武器を所持している者も含まれている以上、初めより殺傷を目的とした性能を自由にしていた事実はアザゼルのような『潜入目的』を理由として霞ませる。

事が露見したとしても、相手が冥界程度なら舌先三寸・矛先二尺で事実を反らし脅しをかけて済んでいたことだろう。

しかし、十指の上位を占める実力者が三柱も居座るヒンドウの神々が、『もしも』その矛先をこちらへ向けてきたとしたらそれはまた別だ。

帝釈天は元はインドラと呼ばれる雷神で、出身はそちらにこそあるが今は中華系神話を束ねる実力者。

口を出される謂われはないが、それでも全神話に喧嘩を売ったテロリストの片棒を担いでいたとなつては、みすみす見逃してくれる保証は何処にも無かった。

「……っ！ くそ、くそお！ ちくしようっ！ 負けてんじゃねえよ！ 死ねよ！ みんな死んじまえッ!!」

己で己を鼓舞する言葉すら見つからず、椅子を蹴飛ばし悪態を晒す。

完全に詰んでいることを自覚した帝釈天<sup>実力者</sup>が、それでもどうにもならない事実<sup>に</sup>直面した瞬間でもあった。

「死なねえぞ、俺はまだ死ねねえしやられねえ、なんとしても逃げきつてやる……っ！」

幸いにも、帝釈天の居住として日本にも居場所<sup>神社</sup>はある。

もしもインドが攻めてきたとしても、かつての己がそうであったように基本大雑把な範囲攻撃を主とする彼らには明確な暗殺のような真似は出来はしまい。

そう判断しての、遮蔽物が大量にある日本に紛れて隠れようという、実力者の割に小物臭い選択を彼は図る。

尤も、本当のところはインド神話なんて彼らの事情に一切頓着していない、帝釈天の深読みで選択<sup>と</sup>られた喜劇でしかなかつたのであるが（笑）。

☆「ドツキドキな駒王学園体育祭！が開催するってよ  
（白目）」

——全校男子の目に、夢のような光景が広がっていた。

たぱんたぱんと激しく上下に揺れるのは、純白の体操着に包まれた規格外の双丘。

走るほどに暴れるリアスと朱乃の今にも爆発しそうな膨らみは、他にも走者がいる『競走中である』という事実を一切無視し、生唾呑み込む男子の視線をひときわ釘付けにして競技は進む。

ついでに言うのと走るふたりの体操着は汗で貼りつき、その下の彼女たちの髪色に備わったような高校生とは思えない難しいアダルトな下着がうつすらと透けて見え、会場の興奮度は鰻登りになる一方でもあった。

実のところ、悪魔の膂力や体力はかなりのモノなので、体育祭で駆けたからと言って疲れるような代謝を備えてはいない。

それでもふたりがしつとりと汗ばんでいる理由には、その間に挟まれている男子が原因でもあった。

「ほら、もつとくつつかないと走れないでしょ？ もつと腰に手を回して?。」

リアスが溶けるような声音で、少年に寄りかかり甘えるように微笑む。

拍子で押し付けられた胸部は、走行中ということも相俟って揺れながら彼の胸に擦れてたわんでいた。

体操服越しに届く柔らかな感触もまた暴力的だが、同じように体操服を身に纏うことで無防備となった晒された肌が無造作に触れ合う太腿も充分に危険だ。

リアスと朱乃の生脚が、露出した太腿が、ハーフパンツ姿の少年の

脚へ今にも絡まんばかりに密着していた。

尚、この学園の女子用体操着は「ブルマ」がデフォルトになっている。

一時期廃止されたのだが、理事長の娘に当たるとある教師が強権を発動させて復活させたという話なのだからなんとも業の深い所業であろうか。

と、そこで反対側の脚が突然に制止する。

咄嗟のことでバランスを崩し、並んでいた三人は繋がれた足首を連動されて、そのままに纏れこんだ。

「きやつ、あーん、ころんじやいましたわあ。烏丸くん、怪我はありません？」

少年の、ああもうめんどくせ、烏丸の上へと豊満な乳房を押し付けるように押し掛かった朱乃が、それすらも愉しむ声音で問いかける。棒読みで。

そして、その問いに答えることは彼にはできなかった。

「痛た……、朱乃、気をつけなくちゃダメじゃないの。烏丸くん、平気？」

その下に纏れ込んだリアスの天然エアバッグの谷間に、少年の顔はすっぽりと収まっていたために。

まさに、ラヴコメ……っ！

計略さえ上手くいけば俺があの場合所に挟まっていたのにいいい！と、その光景を目の当たりにした本家ラヴコメ主人公（笑）が血涙を流していたが、知ったことではない。

某リトさんみたいなラッキースケベ（故意っぽい）に晒されて、男子の嫉妬心もまたボルテージを上げつつある三人四脚であった。





「まったく、もうちよつと上手いやり方もあったでしょう。お陰で俺たち最下位ですよ」

「あつあつあつ、ごっつ、ごめんなさいっそらくんっ、でもっ、あなたとつつながっていられるのがっ、たのしくってえっ」

「それならこっちのほうが愉しいでしょ？ ほら、あんまり声出したら見つかつちやいますよっ？」

「ああんっ！ それならもつとやさしくしてえっ！」

競技の後、転んだ先輩を送るという理由で以て保健室まで来たわけだけど、別に誰が怪我したというわけでもないので問題はない。

最近養護教諭として配属されたロスヴァイセ先生は俺たちの事情なんて把握しているし、グレモリー先輩の本音を知らない兵藤先輩は騎馬戦に向かっているとのこと。

そんなわけで、転んで土だらけになった俺たちは姫島先輩の丸洗い魔法で濡れネズミになった結果、服を乾かす間、水気で冷えた身体を温めるために先ほど以上に密着し重ね合わせていた。

何やら思い出深いとも言い難い保健室のベッドの上で、曝け出されたりアスの膣穴を執拗に責める。

正常位で揺すられる豊満な乳房は、突き上げられるたびに暴れまわる。

よく見ているとその質量に伴って円を描くように乳首の位置は周回しており、仰向けになっているために自重で拡がるプリンのような形に潰れそうであった柔肉は男子の欲求をもつともつとと駆り立てていた。

「そらくん、わたくしも、もつとほしいですわあ……」

熱に浮かされた声で、姫島先輩もまた一切の衣服を身に纏わずにしな垂れかかる。

グレモリー先輩よりも大きなその乳房は、垂れそうにも見えている

というのに魅力が損なわれることはない。

男と交わったことでよりその魅力が熟されたというべきか、その魅せ方を己でも知るように、豊満なそれを先端も隠さないようにと片腕で囲むように持ち上げて見せつけていた。

「んっんっ、朱乃っ、またおおきくっ、なったんじやないのっ?」

「まあ、そうかしら? ひよっとしたらデキちゃったせいかもしれないませんわね?」

「わたしもっ、そうなのっ、かもっ、さいきんぶらがきつくってえ、あっんっ」

嬉しそうな声を上げながら、まるで世間話でもするかのようにその話題を上げるお二方。

確率的には在り得るのだが、だからといって俺にどうしろと言われない時点でそれをどうにかする権利は俺には無い。

男女の事情は両方の意見を備えるべきだと思うわけだからね。

先日もグレイフィアさんに何か言われるかもと向かったのだが、その結果がアレなのはどうしてなのかとしか言いようがない。

求められたので応えましたが、今更ながら俺が遺す爪痕が結構深い気がするのです。

「あー、じゃあ止めますか? 安定していない時期にこんな身体を酷使するのは、」

「だめえっやめないでえっ! わたしのあかちゃんのおへやにもっともっとおちんぽちようだあいっ!」

と、身体を離れさせようと振った瞬間に抱き着いて、腰もまた脚でもって放さないようにと絡み付く。

エロ漫画みたいな科白を宣うなあ、なんだこの先輩えっろい。

「ええそうですわ。あと少ししたら、あなたも帰ってしまわれるので

しよう？ それまで少しでもいいからあなたの熱を覚えておきたいの。お願い、そらくん」

先ほどのように俺を挟み込み、背中に姫島先輩、下にグレモリー先輩と柔らかなサンドイッチに包まれる。

そのまま背中側では胸で洗うように擦り付け始めるので、姫島先輩のこりこりつとした先端の感触がまたダイレクトに肌を伝う。

仕事しようよ大和撫子……、あ、してる結果がこれなのか。

▽▽▽

「くそお……っ！ 赤組に勝てねえ……っ！」

強面スカーフェイスの伊達先生率いる、これまたごつい外見の面子が揃い踏みな赤組だが、その上巨人と見紛うほどの留学生ジャン安藤の強靱さは騎馬戦で最も猛威を振るう。

あれ一騎で、というかアイツひとりで他の参加者が蹴散らされてるんですけどオ!?

この競技選択ミスじゃねーのか!? 反則だろアレ!?

「勝ッ……ッ！ コレデ勝ツテ、僕ヲ認メナカッタ春日部センセイニ僕ヲクラスカラ追い出シタコト後悔サセルンダ……ッ！」

原動力あの先生かい！

ほんとうくな事しねえあのマイペース先生！

負けてられるか！ これで負けたらチーム全員に冬休みの宿題五割り増し、全校舎内のワックス掛け、地元ボランテニアへの強制参加などなどの「いばらのムチ」が待っているんだからな！

優勝賞品の体育祭の跡片付け免除と冬休みの宿題三割減と比べてほんと割に合わないけど、あの教頭なら言ったことは何を以てしても確実に実行する……ッ！

こ、此処は神器を使つてでも勝つべき場面だ！

「松田！ 元浜！ 逃げてでも追いつかれて蹴散らされる！ 正面から行くぞ！ 全力で押し出せエツ!!」

「正気かイツセー!?! 怪我じゃスマネエぞ!?!」

「行ける！ 俺を信じろオ！」

何の因果か俺たち三人が土台になり、正面の俺が後ろふたりの親友へと檄を飛ばす。

上に乗っている奴はクラスでも小柄な男子でとりあえずモブ、これが美少女ならやる気も起きるのに、戦場の雰囲気<sup>（トウキョウキ）</sup>に吞まれ今では怯えているばかりで俺たちへの指示も飛ばせない。

しかしそれらが功を奏し、タダの神輿であるコイツならいくらでも無茶できるってなものよ……!!

「いや、此処は無茶でも行くべきだ。そしてもし怪我をしても、保健室のロスヴァイセちゃんに優しく看護してもらえるのなら惜しくはない……!」

「っ！ なるほどそういうことか！ 冴えてるなイツセー!」

そういう事じゃないんだけど!?

あーでもそれもいいかもなあ、あのグレイファイアさんみたいな銀髪爆乳とかに近づけるのならやる気だつて漲ってくるぜ……!!

こつそりと顕現させた<sup>（ブラスレット・ギア）</sup>赤龍帝の籠手でカウントスタートし、突撃する。

俺たちの戦いは、これからだ……ッ!

▽  
▽  
▽

『——あら、イツセー? 騎馬戦は終わったの? え? ええ、ごめんなさいね、私たち見れなかったの。丁度立て込んで』

激闘を終えて、未だ姿が見当たらない部長に電話してみたところ難なく繋がった。

マジか、俺の活躍見られなかったのか……。

まさかの勝利を手にしたために、保健室へ向かうことは許可されなかった。

先生方のロスヴァイセちゃんへのガードが固すぎる。というか、俺たちの評価が悪すぎる気がするんですけどまだ改善されませんか？

「立て込んでたって、けっこう時間経ってますよ？ ていうか、朱乃さんも其処に居ます？ 後ろの方でエロい声聴こえるんですけど……」  
『ああ、聴こえちやつてる？ ちよつとマツサージしてもらってるの。ほら、さつきも転んでたの見てたでしょ？ 次の競技には間に合わせるから大丈夫よ』

そういう問題とは違うと思いますが……。

電話の後ろの方からは『あつ』『んうっ』『いやあん』と朱乃さんのエロい声が鮮明に聴こえてくる。

やべえ、変な妄想が先走って俺の体操服がテントをおっ建てちゃうぜ。

ま、まあ部長がいつしよに居てそんなに平然としていられるわけはないし、それも杞憂だろうけどな。

「え、えーっと、お昼とかどうします？ 良ければ一緒に、」

「イッサー！ ロスヴァイセちゃんがチアリーダーやるつてよ！」  
「マジか!？」

応援合戦に教師陣も加わっての急ぎよ参加か!? ……教頭ならやるな！ やるなああのドS様！

『それじゃあまたねイツセー、お昼は好きな人と楽しみなさい?』  
「つて、あー! 部長つ? もしもし? もしもーし!」

くっ、断られた……。

つーか、このままだと俺、結局いつもの男子三人での食事になるんですけど……。

花が無い。むさいなあ……。

この間の冥界への襲撃も良いとこ見せられなかったし、気が付いたら大体のことに決着がついていて禍カオス・ブリゲードの団の脅威が去った、と言われても実感がわかない。

こういうのつて、少年漫画ならもつと俺みたいな特殊な運命に呑み込まれた奴が主役張れるんじゃないの? そんなで解決するのも主人公が、みたいなき。

悪魔に転生して、何か人生が上手く転がっていくみたいな錯覚してたけど、やっぱり現実は甘くないってことなのかなあ……。

まあ、童貞は卒業できたし、それだけは上手くいってるんだろうけど。

とりあえず、チアリーダーの応援合戦にはうちの教会トリオだけじゃなく、隣のクラスの柗月・黒木・佐貫さん、強面クラスの紅一点・赤名さんなどと麗し処がわんさか出る。

それだけじゃなく、上級生からは当然部長と朱乃さんが、下級生からは小猫ちゃんにレイヴェルまで出るらしい。

小猫ちゃんのちっぴいは相変わらずだけど、今朝ちらりと見つけた体操着姿のレイヴェルは少し見ない間におっぱいが成長していて、それとも着やせするタイプだったのだろうか、丸く形が見て取れるほどに体操着を押し上げていた。

脅威胸囲の成長が著しい1年生女子の中でも、結構な上位に食い込んでいると見たね!

そんな美少女たちがチアを務める体育祭なんてそこらでも中々ないだろうからな! たっぷりと目の保養に勤しませてもらおうかなー!

まったく、駒王学園は最高だぜ！

▽▽▽

「ん、ちゅっ、あっ、んむうつ……」

暗い室内にぴちやぴちやと、獣が水を啜るような、男女がお互いの口元を舐り合う音が響く。

音の主は良く知る少女で、抱き上げられた彼女は金糸のような髪を撫でつける少年に応えるように、尻を突き出す姿勢で跨って自らの欲望を満たしていた。

そんな男女の生々しい情事を、少々離れた場所で組み伏せられた少年は、絶望に苛まれた貌で見上げていた。

「やめろお……！ やめてくれよアーシアあ……！ なんて、なんてそんなことをしてるんだよお……！」

半日前までは意気揚々としていた高校生・兵藤一誠、原作主人公のイツセーそのひとである。

体育祭も終了し、結果発表となったのが一時間前。

赤・青・黄組の点数は同数で、白黒つけるための沙汰を下す羽目となったのは審判の代表としてなのか沼井校長。

危機を察知した校長は地震の前触れを捉える鼠のように逃亡を果たし、見つけたチームが優勝と宣言した教頭先生の下知によって捜索は県外にまで及ぶ羽目となった。

そんな学校が実質空となった最中、イツセーはアーシアに呼び出されてひとり体育倉庫へ。

現在は色々と感情的に不安定な間柄となっているとはいえ、同居している美少女に人気の無い場所へと呼び出されるという状況から鑑みても、年頃の男子として性欲リビドーが先走り意気揚々としていたイツセーを待っていたのは、入った途端に何者かに押さえつけられての拘束。

数時間前まで目の保養にしていたチアリーダーの恰好をしたままの美少女は、高揚としていた少年がいつか妄想した男女の情事を、やりにもよって自分とではなく別の男と行為に及ぶことを見せつけていた。

「んぶあ、ごめんなさいイツセーさん。イツセーさんには、この街に来た時とか、私が墮天使に命を奪われたときとかに助けてもらいましたし、本当に感謝しているんです。それは、返ししようもない恩ですから、イツセーさんは私にとつて、とても掛け替えのないひとなんです」

「あ、アーシア……！　じゃあ、すぐに離れて、」

「——でも、私やっぱりそらくんのが好きなんです」

花が綻ぶような、しかし熱に浮かされた淫靡な貌で、アーシアは振り返ることなく烏丸イソラを正面に捉えたまま言葉にする。

告白したアーシアのその手は烏丸の股間に添えられていて、何よりもそれを欲しているのだ、ということをやイツセーへと伝える。

男女のことなども知らないと思っていた、穢れを知らないと錯覚していた彼女の行為に、イツセーは思わず抵抗しようとする力が抜けそうになることを自覚する。

それくらい目を見開いて、愕然とした貌を晒していた。

力は抜けても疑問は消えない。

気力の無い声は張り上げられることもなく、イツセーは己の心の内を吐き出し始める。

「お、おれのうちへきたときに、おれのことを好きになってくれたんだ、って思ってたのに……」

「間違ってはいませんね。でも、イツセーさんはリアス部長の方が好きでしょう？」

身勝手だと自分でも分かる物言いが出たが、それを凌駕する言い方で切り返される。



それは比べられることではない。

しかし、それはイツセーがそもそも多くの女性へと目を向けてしまう浮気的な雄の性<sup>サガ</sup>を明け透けに晒しているための言動の結果であり、さらには悪魔という種族が『そういうモノ』を造ることを良しと増長させる因果からの帰結である。

元が聖職者であるアーシアにとって男女はひと<sup>1</sup>つ<sup>対</sup>いであつて然るべきモノなので、イツセーの言動はやはり目に余っていたのだろうが。

今となつてはそれも過ぎ去つた話なので、アーシアがイツセーへと靡かない理由にはならないが。

それでも自らが好意を示していなかったという証明になっていることを突きつけられて、イツセーはなおさらに言葉を失つた。

喪失した語彙の果てで、尚も絞り出されるのは本音しかない。

短いスカートを後ろ手に弄られ下着をずらされている姿を正面に据えて、目を逸らせずに少年は言葉を探す。

「あ、アーシアのことだつて好きだ、なのに、なんで、こんな、」

「だって、そらくんは気持ち良くシテくれますから」

撫で付けていた白魚のような指の隙間から、いきり立つ逸物が顔を覗かせる。

烏丸の自身は、明らかにイツセーのモノよりも御立派であった。

それを、アーシアは自らの秘所へと宛がう。

その姿を改めて目の当たりにして、イツセーから失われていた気力は瞬間的に沸騰した。

「っ、や、やめっ——」

「っあ、はあっん……っ！」

制止を促す少年の声にも躊躇せず、腰を落としたアーシアの肉壺が粘つく音を上げて男性自身を呑みこんで逝く姿を眼前に晒される。

嬉しそうな嬌声を上げた少女は彼にとって見たことも無い姿で、本当に同じ人物なのかと疑いを抱いていた。

いや、それは頭の片隅で浮かぶ小さな可能性の話であって、それすらも目前の光景が否定を囁く。

「お、お前が、お前がアーシアを変えたんだろお！ 催眠術か何かを使って、そんな風にしたんだ！ そうでなけりや、アーシアがそんなことをするはずがないんだあ！」

だからこそ猶更認めたくないイツセーは、慣れたように身体を重ねて獣が舐めるような口づけで奉仕するアーシアではなく、それを甘んじて受けている烏丸へと矛先を変えるのであった。

▽  
▽  
▽

催眠術ねえ、……使えたらもつと楽に色々出来たんだろうけどなあ。

こんな状況になってしまっているが、あくまでも主導は俺ではなくアーシアだ。

姫島先輩が先ほど言ったように、俺がそろそろ帰るのでその前に兵藤先輩にきつちりと釘を刺しておきたかったらしい。

なお帰らないという選択肢はない。

正直帰りたくない理由もあつたりするが、帰りたい理由もまたあるのでやらなくちゃダメだ。

『向こう』と時系列が同じらしいからね、せっかく進学したのに半年サボって留年、とか目も当てられないし。

気分は夏休みの宿題が最終日に残っていたことを発見した小学生。やりたくないけど、やらなくちゃ始まらないよね、という話だ。後は、こっちのサブカルやっぱ薄いし。

濃厚な本家へ早いとこ舞い戻りたい。ぶつちやけカラオケ行きたい。

それにしても、実際別箇にお相手がいるはずの先輩の寝取られ感がスゴイなあ。

この人にはアキラに対して色目使われたことで少々苛立ちも覚えちゃいるが、別にそこまで気に掛けるつもりもなかったのだけど。

何度も言うようだけど、結局のところ俺は近いうちに元の世界へ帰る身だし、実際に迷惑被ったアキラが報復はきつちりと果たしたのだから俺が口出しするのも何か女々しいと思っていたし。

しかし結果的に報復してみたいな、ざまあ感がわずかに燻るのは、やっぱり申し訳なさよりも思う処が少しはある所為なのかもしれないが。

というか、このひとはこのひとできちんとお相手がいるのに、なんで其処までしてアシアを自分に向けさせたいのかね。

アレか、ハーレムが夢だとかいう話の所為か？

「イツセー君、あんまり騒がないでくれるかな。烏丸くんだって、キミに悪いことをしようっていうわけでもないんだし」

と、其処でようやく兵藤先輩を拘束していた木場先輩が口を開いた。

どういう体勢スタイルで固定しているのかは把握できんが、ふたりの現状は兵藤先輩を床へ押し留めるように這い蹲らせての背中からの密着だ。男にやられたら正直後ろの穴を懸念するような真似なのだが、そうではないことを俺は知っており、背に伝わる感触で兵藤先輩も気づいた様子である。

「っ祐斗!?! おま、いや、この感触は……、っ!?! なんで女のままなんだ!?!」

木場先輩は現在男装しているが、その中身は女性のまま。

TSした際に何故か伸びた髪はぱつぱりと切り、胸は『さらし』で抑えつけたのだとか。

体操着が男子用のままだが、むしろ普段から男である木場先輩がブルマを用意できていたらファンが発狂するわ。

男装美少女としてこの先やっていくのかしら。

「ちよつと身体が元に戻れない事情を抱えちやってね。でもこの先女として生きてゆく覚悟はできているから大丈夫だよ」

「なんだそれ……、っていうか、なんでお前が俺を止めるんだよっ！

むしろ止めるのは烏丸だろっ！ アーシアがあんなことになってるのにつー！」

「アーシアちゃんは嫌がっていないけど？」

くだんの彼女は初めの意向は何処へやら、俺の正面に跨って、チア服を捲ってはだけさせた胸元をノーブラで揺らしながら抱き着き腰を上下させている。

其処には獣みたいな情欲しか伺えず、己の胎を穿る快感に酔い痴れながら発情した雌犬の如くぺろぺろと、俺の唇へと舐めるようなキスを繰り返す。

もう兵藤先輩のことなんて微塵も気に掛けてないのは丸わかりであつた。

「そ、そんなことはないっ！ あいつだ！ 烏丸が催眠術か何かでアーシアを唆したんだっ！ そうでなけりゃ、アーシアみたいな子があんな、あんなことするはずがないんだあつ！」

目の前でやってるのに、同じようなことを繰り返して必死で認めようとしてないご様子。

うーむ、女性だつて『そういうこと』を欲するくらいの性欲が備わっているのだから、俺としては意外でも何でもないのだけど。

そういえばアーシアって元々修道女だったらしいし、その辺のイメージが先輩の中には抜け切れていないのかねえ。

そんな感じでまぐわいつつ、兵藤先輩の言い分にどう説得したモノ

かなと他人ごとみたいにして思考を馳せていたところ、木場先輩がため息をひとつ。

「アーシアちゃんは、烏丸くんと会ったときからずっとあんな感じだよ。気づいていなかったのはイツセー君だけさ」

「……………は、はあ……………」

兵藤先輩にはきつちりと爆弾発言に聴こえただろう。

俺がオカ研に顔出しをしたのは半年くらい前だから、その間ずっと己に隠れて付き合っていたことになるのだから。

まあ、別に先輩に許可を求める配慮つもりなんて無いから、このひとが口出ししても言い掛かりにしかないのだけでも。

「それをキミにもわかる形で教えたい、って言いだしたのは他でもないアーシアちゃんだよ。こうしてぐうの音も出せない証拠を見せてもらったのだから、いい加減アーシアちゃんのご事は諦めようよ」

「な、に言っつて、ゆうとは、俺のこと、応援する、って……………」

「うん、前はそう言っつてたけどさ、そうも言っつてられないことになっつちやっつたからね。お互いが納得できる形にしようっつてことだよ」

返事が遅れて、思考も恐らくは覚束ないのであろう。

そんな先輩に、優しく諭すように、しかし非常な現実を突きつける木場先輩。

なにを、と彼女の言いたいことがわからずに尚も問い詰める先輩に、木場先輩はうつすらと微笑を向けた。

「僕ね、赤ちゃん出来ちゃったみたい」

ひゅ、と組み伏せられた先輩が息を呑むさまが、こっちにも伝わった。

まーねえ、俺も先輩に勧められたから堪能させてもらったのだけ

ど、それを勧められるってことは先輩が『その前に』お手付きをしていた、ということにもなるわけだし。

出来たのがどちらの子かは知らないが、出来ちゃったのだから【一番い】を確保したいと欲するのは正しい理由だろう。

その勧めた事実を、先輩が覚えているかどうかはさておいて。

「安心して、これからもイツセー君の相手は務められるし、キミの性欲を満たす為にいくらでもしてほしいことをしてあげる。その代わりに、他の女の子に手を出すのは認めないけどね」

やったね先輩、美少女の嫁さんが出来たよ！

しかもどんなことでも聞いてくれるっていうなら、旦那冥利に尽きるってものだね！

ようこそ墓場こちらへ。

「話は終わったか？ では、そろそろ私も混ざっていいかな」

「アーシアばかりずるいわよ、私たちだって出番がほしいのにつ」

「いい機会ですから、変態先輩にも女子の良さは胸ばかりではないことも知っておいてもらいましょうか。無論見学だけです」

「お姉さま、羞恥心というものを何処へ……？」

「は、は？ つはあああ!？」

と、先輩が驚くのも無理はないかと。

ぞろぞろと何処からか出てきたのは、チア服を着こなして健康的な色気を振りまくゼノヴィア・イリナ・塔城・レイヴェルの美少女4人。何処かメタいことを口にするイリナや堂々と上を脱ぎ去って巨乳をはずませるコスチュームプレイはそうじゃねえよと言いたくなるゼノヴィアはさておき、見られて燃えるような変態欲求を言葉の端からちらつかせる塔城へお姉さま呼びをするレイヴェルは久しぶりに顔を見たと思ったら何故かこの状況に乗り気である。

そこそこ無理に食っちゃった身だから嫌われていると思っていた

のだが、そういうわけでもなさそうだ。  
やっぱり女子って結構凶太いよね。

「そ、それは俺のハーレムだぞお!? お前が、やっぱりお前が全部悪いんだろおおお!!?」

驚く先輩へと配慮も見せず、俺という標的へと群がり始める美少女たち。

その光景に、萎えかけた気力を振り絞ったのか、今一度声を張る兵藤先輩。

そんな彼に、ちよつと言いたいことはひとつだけである。

「先輩、女の子はモノじゃねえつすよ」

「——っふ、ふざっけんなああああああああ!!?」

うん、説得力はないつすね。

ごめんねー。

「次回、【放課後のラグナロク】。みんな絶対見てくれよな！」

「イツセーくん、それじゃあ僕は部活に行くね？」

「あんまり危ないことはするなよ？ あ、グレモリー先輩にもよろしく言っと思ってくれ」

先日彼女の懐妊を知り、何しろ初めてのことで差配を知らないイツセーは、男装の美少女である木場祐奈の行動を思わず咎める。

対外的には己の彼女だと表沙汰に出来難い彼女の名も『祐斗』と普段は呼ぶことで関係は暈されたままだが、その気遣いや『祐斗』の間関係に対応が過剰になる時が見舞われることも多々あった。

お陰で学内では微妙に距離の近いふたりの関係も邪推され、『木場×兵藤』または『兵藤×木場』という腐海的計算式が蔓延っている中で、当人としては否定も肯定もし難くなんだかなあと諦めているのが現状だ。

そんなイツセーの心配をよそに、祐奈は平気そうに笑いながらも、そうして心配してもらえることを嬉しく思っていた。

例え、その身に身籠った子が彼の子ではない可能性の方が圧倒的であろうとも。

笑顔の裏で泥に塗れたような感情を抱いていた彼女に気づくことなく、イツセーは教室へと戻る。

帰宅部である彼は本日はひとりで帰ろうとしており、己の荷物を取りに一度戻るためだ。

本当はそのまま行くはずだったのだが、親友の松田と元浜が何かの用事なのか己の荷物を人質に見立てて捕えており、それを引き取りに向かう手筈であった。

「戻ったかイツセー。見ろ！ 例のサイト、新曲と新メンバーを発表



したぞ！」

「うむ、ついにロリっ子が来たな！　心なしか両脇の子もロリっぽい、最高だな！」

「いやいや、こっちの子はけっこう胸も大きいぜ？　イツセー好みじゃねえのかな、それともこっちのボーイツシユな方がタイプか？」

差し出すスマホに映るのは、アイドル衣装の「ミツテルト」を中心に「レイヴェル」並びに「祐奈」で構成されたユニット。

映し出された彼女たちの正体はこれまで同様認識障害がめっさ仕事をしており、それがたつた今会っていた相手だとしても誰にも気づかれることはなかった。

何気にメンバーから外されている節が見られるギヤスパー（男子）はさておいて、そんな垂涎の映像を突き出されてもイツセーは慌てずに否定する。

「わり、俺、そういうのやめたんだ」

「二つは、はあああああああ!？」

驚き過ぎだが、そうなるのも無理はなかった。

どういことだ、お前偽物か、と問い詰められるエロの申し子とまで呼ばれた原作主人公。

そんな彼は教室内に未だ残っている、修道女トリオと呼ばれる三人組へと何の気なしに目を向ける。

元シスターとは思えないスタイル抜群の美女・ゼノヴィア。

幼馴染だが、気づけば疎遠になっていた金髪の美少女・イリナ。

年下に見間違えられがちな小柄な少女・ロツテ。

何故か胸が締め付けられる違和感を姦しいその光景に覚えつつ、尚も言われ続けるイツセーは曖昧に笑って教室を後にする。

何かから逃げるように、——追憶の残滓を思い出さないように。



「……まったく、アジアにも困ったものね」  
「仕方ありませんわ。あの子はどうしたって彼を忘れられないのでしょうし」

リアスの手元には【僧侶】<sup>ピシヨップ</sup>と【戦車】<sup>ルーク</sup>の駒と、指輪型の神器【聖母の微笑】<sup>トワイライト・ヒーリング</sup>がひとつ。

どちらもアジアから【聖杯】によって取り出されて、一時的に彼女に預けられているモノだ。

本来ならばそれで死んでしまう筈の仕様は某規格外の異世界人の謎技術によって無視<sup>スルー</sup>され、彼曰く別世界で存在するための概念主幹を補うとのことで、むしろそれらは邪魔になるのだとか。

この世界ではそれなりに貴重で重要な品々だというのに、烏丸にとっては最後まで『この世界』の価値観は通用しなかったらしい。

そんな見たことも無い世界へと足取り軽く旅立ってしまった妹分らを思い返して、仕方ないなあと溜息を吐く。

そう、旅立ったのはアジアだけではなく、いつの間にか麻帆良娘らを懐柔できていたのか小猫もまた同行し異世界旅行へと乗り出してしまっていた。

眷属がふたりも自分の与り知らぬ場所へ赴いてしまったために、役どころを埋めるために烏丸の眷属をヴァレリーの案で採用したのは良い提案であったが、それと立ち代るように問題がひとつ。

小猫はさておき、微妙にこの世界に影響を齎した烏丸の存在を、少なくとも表向きの世界では隠ぺいするために認識阻害を掛けた結果、とある少年にもその影響は効果を及ぼしていた。

「お待たせしました。部長、イツセー君はやっぱりアジアちゃんのことをきちんと認識できていませんね」

「そう。まあそうでしょうね、イツセーにとっては本当に重要な記憶でしようから」

己の心を守るかの如く、イツセーは防衛本能なのか、駒王町に掛けられた認識阻害に連れられて、烏丸のことと一緒にアーシアや悪魔に関する事柄を明白に認識でき難くなっていた。

記憶の封印は悪魔として生きたわずかな期間を霞ませて、彼の中では妄想に似た何かから抜け出せたように以前よりもずっと平穏な風いだ心持で日々を送らせていた。

一種の燃え尽き症候群にも似たそれは、イツセーをただの悪魔以下のほぼ人間と同程度にまで貶めており、しかしそもそもが戦う意味をこの先得られるのかと云えばそういうわけでもないと予測も出来るので、彼の現状は放置されているわけである。

どちらにしろ悪魔の生は長い。

この程度の袋小路なら、迷走したとしても解消を即座に促さないのも悪魔社会としての在り方の一つである。

それは弊害と、呼ぶほどのモノでもなかった。

「というか、そらくんだって二度と来ないと云ったわけでもないのだし、アーシアも慌てて追いかけても良いモノだと思っけれど……」

「立場の問題もあるでしょうね。リアスや私はさておき、アーシアちゃんや小猫はまだ悪魔としては未熟も良いところでしたし、行きたい所へ向かう気持ちを抑えられるものではありませんわ」

『責任の自覚』がまだそれほど備えられているわけでもない『成り立って』の少女たちに、元来自由に欲を満たそうとすることを主義とさせる悪魔が口出しできる道理もない。

イツセーの話は終わり、と言わんばかりにふたりは話題を変えていた。

わかってはいたが、そこまであからさまにされると笑うしかない祐斗である。

「イツセー君は、結局そのまま放置なのですか？」

「ええ、そうね。記憶が戻ればグレモリーで困うけど、戻らないのであっても祐斗が監視して頂戴。私とのことを妄想で片付けるほどアーシアのことが、悪魔としての生が衝撃だったのなら無理に手を出すつもりもないわ」

「祐斗くんには手間を掛けさせるようですよけれど、よろしく願いますわね？」

改めて話だけでも詰めておく必要はあるので、方針の確認のためにも祐斗は問う。

結局のところ悪魔社会のことへ触れようとしないままならば、記憶を思い出したとしても、もしも思い出せないフリをしているだけだとしても、イツセーの扱いは『それ以上』になることはない。

その理由は何よりも、グレモリーの姫に手を出したという過去に由来するので、眷属である祐斗も口出しは出来ないしする気も無い。

そんなことをして自分の剣の師匠も含まれている魔王の眷属に、無駄な波風を立たせようなどというつもりもないのだから。

「幸いにも、実家の方はグレイフィアとお母様の懐妊という好事が確認されたお陰で、私の子の『父親が誰か』なんていう問題には目を瞑ってもらえているわ。お母様とグレイフィアが『こちら』へと回ってくれたこともあるのでしようけどね」

「というか、祐斗くんはそれで平気ですか？ 兵藤君は、お世辞にも女性の扱いに長けているとは言い難いかと思われるのですけど」

朱乃の問いは、恐らくは最後通牒だ。

実際は立場が上からの命令に近い行動方針であるのだが、それで祐斗が断りを入れれば仲間内での情けは深いグレモリーである、代わりの誰かを其処へ宛がってくれるだろう。

しかし、祐斗はそれにN oと答える。

「いいえ、彼は僕にとっての大事な親友です。どのような処分であれ、

僕が最後まで相手をしますよ」

男子としての人生から女性へと転じ、望まない相手の子供を出産することが決定されていたとしても、祐斗はイツセーから離れることを良しとはしなかった。

ただわずかに望むのならば、この胎の子の実情を彼本人には知られることは決してありませんように、と少しばかりの希望を抱いて、木場祐斗は暗く微笑む。

トクン、と自分のモノではない心音が、其処から響く幻を聴きながら――。

▽   ▽   ▽

「えっと、兵藤一誠くんですよ。好きです！ 私と付き合ってくださいー！」

校門を出て、突然に現れた美少女にイツセーは狼狽を隠せなかった。

自分の噂は知っているし、祐奈という美少女と隠れて付き合っているとはいえ己の容姿が人並みであることも把握している。

そのうえで、自分に堂々と告白してくる黒髪の美少女への対応ではなく、その光景に既視感デジャヴを感じている自分にだ。

言葉の勢いのままに頭を下げた彼女は、そんな狼狽える自分に対して返事を求めている。

だが、その前に自分が先走ったことを自覚したのか、慌てたように顔を上げた。

「っあ、ああっ！　じ、自己紹介が未だでしたね！　わ、わたし『天野夕麻』つていいいます！　で、出来ればすぐにお返事をして欲しいのですけれど……！」

狼狽えた様子は見るからに可愛くて、祐奈という彼女が居なければ即OKを応えていたくらいだ。

しかし、イツセーはその名を途切れるように口にして、その容姿を改めて認識して――、

「――あ、あ、あああああ？ ああああああああああああああああああああああああああああああ？  
あああああああああああ」

――盛大に、名状し難い頭痛に襲われてのた打ち回った。

「――あらあ？ こんなに反応してくれるなんて、思いもしなかったわあ。よつぽど酷い目を見たみたいね、イツセーくん？」

その彼を見据えて一転、貌を歪めて嘲るように見下ろす『天野夕麻』。

そうして今一步近づこうとした彼女を遮るように、白い翼の少女が割り込んでいた。

「アンタ、誰だ」

顔見知りの筈の少女・ミッテルトが、黒髪の少女へと詰問する。

手には神器「絶デイメンション霧ロスト」を変則使用することで顕現させた霧状の槍。

最終的に結界創造を得意とするこの神滅具は、要するに空間系の上位神器である。

そのことについて把握した烏丸は霧の状態を使用者の望む形に固定して、触れることで対象を次元的に寸断・乖離することを可能とする方法を編み出し、近接・遠距離・中距離と自由に対応可能な武器として使えるようにミッテルトの手にそのまま預けたままであった。

そんな一見重要そうに見えてそうでもないこと閑話休題はさておいて。

監視対象足り得るイツセーは、祐奈が見ていない間もその居場所が

知覚されないわけではない。

それ以前に、彼に身体を赦している祐奈も纏めて監視できるように、空間系神器を使えるミツテルトがその立場に選抜されていたことは言うまでもない。

接触が遅れたが、明らかに見過ごせない状況に武器を構えて割り込むことは、非常時判断としては充分に合格レベルの対応である。

「天野夕麻でーっす☆ って、名乗ったわよね私。あんたこそ誰え？

私、イツセーくんにご用事があるのだけれどお？」

「ふざっけんな！ アンタがなんでその身体と名前を使ってるのかわからないけどね、その本人はとある教会の地下でカワラーナといっしよに今も結界維持のための燃料として使い潰されている最中だっちゅーのツ！ 明らか敵が、のこのこと駒王学園まで出向いてきたんだ。どうなるかはわかってんでしようねツ！」

さらっとかつての仲間の現状が暴露されたが、それをどうにか出来る手段はミツテルトには無い。

確かに、空間系上級神器さらに亜種仕様可能な代物というキチガイ装備を手軽に抛られた時には『下剋上』という言葉が浮かびかけたが、それに対処を知らない相手が其処まで気楽にしているわけがない。

それに自分自身を烏丸以外の陣営に匿ってくれそうな身寄りなど思いも付かず、逃げたとしても逃げ切れるものでもないことは確か。

ヴァレリーに頼めば、半分潰れて自我も怪しくなっている魔力タンクの墮天使も健全体に治してくれるかもしれないが、そうなったときに言い出しそうなことを予測できてしまえばおいそれと治すことに責任なんて持てやしないのだ。

烏丸がいつ舞い戻るのかも把握できない以上、ミツテルトはある意味平和に生きていられるレイナーレやカワラーナの墓守としてこの地に留まる所存であった。

「はあん、何回やつても完全復活が出来ないってのはそういうこと。同一人物の複製は聖書の神でもご法度、てなわけね。なるほどなるほど」

「……その言い分、【聖杯】、いや似た性能の神器でも使ったわけ？ 烏丸の予測当たってんじゃん……」

【聖杯】は死んだモノを復活させられる、という正直『原典』を漁ってもどうしてそうなるのかが理解できない性能を秘めた神器だが、それでも大前提としての生命が、いや意思が存在するための法則ルールは覆せない。

これが『GANTZ』のように生命尺度の低劣な世界ならば、物質としてのルールのみ<sup>コピ</sup>に則って同一存在の重複という完全なる複製を引き起こせるのだが、概念存在の受肉が出来るような低位相の世界でも、そのような【地獄】の法則は通用しない。

烏丸が生まれ落ち、魔女が跋扈し、多層の概念が折り重なったどこぞの【異常世界】は現状無理矢理に位相を引き上げられているお陰で下位からの干渉を遮断できるわけだが、それより下位に当たる『この世界』でも最低限度の概念支柱という壁役、要するに世界の柱たる神が跋扈しておるために地獄相当の法則は通用せず、同じ個体であつても意識が両立するようなバグ異常は通用しない結果になっていた。

そんなことが可能なのは、ゲームのようにステータスなどが自身に表示される本物の下位世界程度である。

まあ要するに、この『レイナーレ』は躰が同じでも中身が違う、ということなのだろう。

では、何者なのか。

「いやあー、こっちは『イツセーくん』の情報だけなら手に入るわけで、命をやり取りしたとはいえ一度は籠絡できたらしいじゃないの、この子は。それで使わせてもらったのだけど、やっぱりただの墮天使は脆弱よねえ。ま、それでもなんとかなるかと思うけど」

「いったい誰なのよ、アンタは……!?!」



神器を充てれば一撃で葬れる。

しかし、それをやるにはまだ早い。

復活してからこちら慎重を旨とするようになったミツテルトは、充分に情報を拾ってからでも倒すのは遅くない、とそう思っていた。

しかし、その気配が穂先を惑わせる。

なにか、そう、烏丸に似た何かの気配が、彼女からひしひしと伝わってくるのだ。

それが、殺しても死なない可能性まで秘めているとなつては、討ちようにも討てやしなかつた。

それを知るのか、『レイナーレ』は嗤う。

片目を歪めて吊り上げて、上弦の月のように弧を描く口元が嘲る声を張つてのけた。

「お初にお目にかかります、邪龍【ゴルイニシチエ】と言いますワ。以後、お見知りおきを♪」

それが【卑劣龍】と呼ばれる『悪』との、戦いの幕開けであつたことを知る者は未だいない。

【原作時系列?】超絶ルナティックストーリーモード  
!オリ主不在の第六章! 【奴などとうに用済みよ…】  
「通算61話目でキリもいいけどたぶん読者が求める  
ものとは違うんだよなあ…」

「——ッ」

ガバアツと上体を起こし、自らを抑えつけるように覆っていたシーツを跳ね除けた。

まるで水底へ引き摺り込まれ溺死し掛けたかのように、その彼は起き抜けなのに動悸が激しい。

目を大きく見開き、自分の中の『ナニか』を反芻している様は、性質の悪い霊媒のような何かに脅かされている精神疾患の患者を彷彿とさせていた。

しかしその様を把握しながらも、先ずはと声をかける彼女からすれば、ひとまず無事に起きたことを安堵とするらしい。

「……良かった、起きたんだね、イツセーくん」

「……………祐奈?」

斜陽も過ぎ去った日暮れの保健室で、傍らで待っていた金髪の少女。

それだけを絵にすれば酷く美しいものなのだろうが、事態を穿てばそうした感情だけで片付けて良いものでもない。

知る人ぞ知る話だが、木場祐奈と改名を果たした彼女は、この兵藤一誠の監視役なのだから。

「ミッテルトさんから連絡を受けた時は驚いたよ。何があったのか、教えてくれるかな?」

【ナニ】と遭遇したかは聞き及んでいる。

事実、それへの対抗策を練る為に、ミッテルトを初めとした烏丸陣営と呼ばれる少女たちは足早に拠点へと集まっていた。

しかし、イツセーには幸か不幸か、負い目がある。

彼にとつては実に非情な現実と遭遇したがために彼が陥った、記憶の改竄という『負い目』。

それを知る祐奈には、探るような質問の仕方でも事態を測る必要があった。

彼に掛かった状態が、どのような切っ掛けで綻び始めるのかが見極められないがために。

「……………」

祐奈を見る、イツセーの目は酷く暗い。

それは彼女を見ているようで見ていない、自分の中の何かを組み立てなおして、問うべきことを測る目だと、経験則から彼女もまた把握できていた。

そうして数分後、漏らすような声で、イツセーは問いかける。

「……………なあ、アーシアは、何処にいるんだ……………」

その言葉は、平穩の終わりを意味していた。

▽  
▽  
▽

起き抜けの俺の質問に表情を強張らせ、詳しい話とやらをするためにある場所へと導こうとする祐奈。

その間ずっと質問を繰り返しても、『詳しい話』をするべき相手が先にいる、と言うばかりで聞く耳を持つとうとしない。

駆け込むように其処へと連れられた俺は、挨拶よりも憑いて回る疑問が先走る。

「部長っ！ アーシアはっ、アーシアはいったい何処につっ!」

「落ち着きなさいイツセー、アーシアは無事よ。少なくとも、あの子自身が望んだ居場所にいることを咎める謂れは私たちには無いわ」

「そうは言いますが部長!?! 最後に見た光景が体育用具室でのハーレムエッチじゃ落ち着けないのですか!?!」

弄ばれる小ぶりなピンクの先端に、入り混じってゆく同世代&後輩おっぱい!

常軌を逸した光景から、たとえずっと時間が過ぎ去っていようと

も、俺のハーレムを侵略していった後輩烏丸には目にももの見せてやらねば気が済まぬわあッ！

「だから、それもあの子の選択ということよ。フラれたのだからもう諦めたら？」

「男にはそれですませない時があるんすよおお……ッ！」

男の子の負けん気ってやつを、女は一切わかってくれねえッ！

「それはさておきイツセー君、先ずは口にするべき言葉があるのでなくてはな？」

はっ、とあらあらうふふ的なオーラを発揮する朱乃さん（より正確には同時に目に映った冬用制服越しにも主張される爆乳のオーラ）に気付き、冷水を浴びせられたかのように落ち着いた俺は改めて現実を鑑みる。

適乳ではあるが金髪美少女の祐奈はセフレに残っており、ナイスバディかつナイスおっぱいの部長とは既に身体を交えた仲。

さらによりド迫力おっぱいの持ち主である大和撫子朱乃さんが今もこの場にいるということは、さては恐らく手出しされていない証拠では？

そこらのグラビアアイドルも裸足で逃げ出す美女が現状3人も居残っている状況で、確かに美少女ではあつたけれどちよつとばかりハーレム要員が減つたとしても、これでも充分に世間様からすればエロス密度は飽和していると言っても過言ではない。

——確かに、落ち着いて考えれば勝ち組のままだったわ、俺。

ついでに言えば、どんな風に寝取られたところで烏丸は人間だし、アジアを初めとした美少女たちはみんな悪魔なんかの亜人系だ。

根本的に寿命の問題がある以上、あいつがくたばった後なら何の邪魔者も入らないしな（暗笑）。

「部長っ、朱乃さんっ、ご心配かけて申し訳ございませんっ！ 男イツセー！ ただいま帰還いたしましたおっぱいっ！」

「貴方それが通常運転で問題ないの……？」

オカ研を代表する二大おっぱいに敬意を払ったはずなのだが、何故か呆れたような声を掛けられてしまった。解せぬ。

さておき、久しぶりに踏み入ったオカ研の部室は、俺が知るよりもずっと閑散とした場所となっていた。

アーシアが気付けばこの町からも姿を消していたのは今になって気付いた事実だが、小猫ちゃんの姿は何処に？

というか、教会組のゼノヴィアとイリナはなんでいないんだよ。

あいつらも一応はグレモリー眷属で合ってるよね？

と、その二人と言えば、

「それで、アーシアたちはどういうことになってるんです？ 俺のクラスにいたロットとかいう子も関係してるんですよね？」

連想して思い出した見知らぬロリツ子のこととも問いかける。

入れ替わるようにあの場所に組み込まれた美少女なのだから、あれが関係ないと言われたら余計に恐ろしい事態だ。

先ほどのことでもないが、レイナーレの時のように催眠術を使われてるとしたら……。

「記憶のほうは戻っているみたいね。それじゃあ改めて、今の状況を教えるわ」

せっかくカオスブリゲードの問題も片付いたっていうのに、もつと恐ろしい危機が町へ迫っているのだとしたら、と想像を働かせていた俺に、部長は向き直る。

真面目な雰囲気思わず息を飲むが、どんな問題だって乗り越えて見せるぜ。

だって俺には、ハーレム王になるっていう夢があるんだからなッ！

▽      ▽      ▽

……………えー、教えられた情報が多すぎてちよつと混乱してるイツセーです……。

整理しなおして箇条書きにしてみると、以下こんな感じだった。

・ 烏丸は用事があると駒王から去っていった

・ アーシアと小猫ちゃんもそれについていった

・ 詳しい事情を方々へ語るわけにもいかないの、ひとまずホーム

ステイ中という体

・更に詳細を語れない人間の社会相手にはお馴染み悪魔式催眠術が入ってもらった烏丸の眷属に当たるとはらしい

・あと『烏丸の眷属』という者たちは何人か駒王町で待機してるとか。先ほどレイナーレとの間に割って入った女の子もそれにあたる

……居なくなってから影響及ぼすのか。なんつーか、迷惑な奴だなあ。

というか、奴の手付きが町内にいるのか。

……そのうち保護しなくちゃな（意味深）。

ゼノヴィアとイリナは烏丸の眷属とは違うが、今日は天使側へと話を持ち掛けているらしい。

なんでも、復活したレイナーレ（？）に関して何か重大な事情が絡んでいるらしく、聖書陣営総出で当たらなくてはならなさそうな問題だと部長は判断したそうだ。

そして何よりも俺を困惑させたのは烏丸に関する話などではなく、俺自身に纏わる今後の事情。

「——というわけで、イツセーは今後上級魔族になることが第一条件だから。頑張つてね」

男子を魅了する微笑みと弾んだ語尾で部長に言われ、茫然と問い返すことしか考えが及ばない俺。

ぶつちやけ烏丸他人のことに構ってる余裕なんてなかったらしい。

「……えーと、初めからそのつもりでしたけど、期限とかが加わるんで……?」

「期限はないけどお兄様とかの機嫌が悪くなるわね。何せ、貴方は可愛い妹を孕ませた憎い間男になるわけだから」

妙にご機嫌に仰られますけどお兄様って要するに魔王様ですよね!?

俺のお舅さんが魔王様、とかいう一文が浮かびますけど微塵も誇れるところがねえ！むしろ文字列から殺気が滲み出ている様は何え

るよお！

さておき、部長が妊娠した。

父親は身体を許したのが俺であると俺自身も自覚しているの確定であり、その辺の事情もサーゼクス様やご実家の方へと筒抜けのようだった。

子供が出来難いという種族特性を顧みると充分すぎるほど喜ばしいことであるのだが、その相手が俺のような悪魔としての実績もない若造である事実は誰の目から見ても負い目というか、不満の対象に当たると。

同時に部長のご実家でヴェネラナさんやグレイファイアさんの妊娠が発覚していなかったら、その別口の慶事がフォローに当たっていなかったら真つ先に俺の命がなかったのだと教えられた。

今更ですけど、悪魔社会って命の取り扱いけっこう軽いつすよね!!? ちなみに、アーシアの喪失で抜け殻になっていた俺が復帰できなかったら、その事実は俺自身に伏せられたままで、折を見て接触が図られるはずだったのだとか。

悪魔の自覚もなかった状態で記憶を弄られる点の恐ろしさを考慮されたらしいけど、肉体的には寿命の問題上長い目で把握し切れるからどの点を鑑みても俺の現状は恩情に守られているのだろう。

それはわかったけど、……俺、祐奈とも関係持つてるのだけど、それはいいんすか？

「祐斗は戸籍上は男性だから問題はないわね。どちらにしろ、貴方がグレモリーうちに婿入りしたら部下に当たるわけだし」

配下の愛人美少女との淫靡な関係、ってやつすか。

うん、悪くないな！

しかしなんとというか、部長や魔王様には色々と見透かされているらしい。

やっぱ悪魔ってすげえんだな。

そして、上級悪魔という『将来』は長いけれど、逆に言えば達成すれば部長を正式に俺の嫁に充てられるという事実。

降って沸いたこのチャンス、モノにしないバカはいない！

いや、それはともあれ、あんまり待たせるのも悪いだろうしな。

部長にフオロー含めてご機嫌取りでもしておこうか。

そう考えて、俺は部長の横に座り直し、彼女の肩を抱いて某焼き鳥みたいにキリつとした顔を作ってみた。

「――リアス」

「どんと、たっちみー」

笑顔のまま拒否られた。

え、ええ〜……？

「……いやおかしくないっすか!? 俺、一応は将来の旦那っすよね!」  
ソファを転げ落とされて、抗議の声を上げる。

そんな俺に触れてくるのは、部長ではなくて祐奈であった。

「その辺りはグレモリーに関わる男性陣一同からのご通達なんだよね。イツセーくんが正しく上級悪魔として認められるまでは、肉体的な接触の一切を禁じる、って」

「そんなあ!」

予想以上にグレモリー家がお怒りですね!

……大事な娘を傷物にしたのだから当然ですね!

そしてそんな俺に跨ってくる祐奈。

こ、このシチュデジャヴすぎる!」

やめろー! 何をするだあー!」

「そんなわけで、イツセーには行動を制御する呪縛が課せられるわ。そのチョーカーは『そういうこと』よ」

あれよあれよという間に首へ回される革製のベルト。

穴へと通すためにくぱああああと開かれる姿は、実に淫靡であった。

んああああ! 苦しい! やめてええ!

「というか、それはほぼ矯正用と言った方が正しいわね。相手の了承を得ずに女の子にエッチなことをしようとした際は、きゅ、と締まってきたくなるから気をつけなさいね?」

「逆に言えば、ムードさえ作れば何とかできるってことだからね。そのあたりのお勉強だと思えば何とかかなるはずだよ」



紐を結ぶようなジエスチャーでほほ笑む部長に、俺の首筋を蹂躪し  
終えていい仕事したぜと笑顔の祐奈。

俺何かしましたか!? そこまで信用得てないんすか!?

「そしてこれが貴方が休んでいた分の仕事百喚よ。復帰そうそう悪いけれど、イツセーにしか熟せないような仕事なのよ、お願いできるわよね？」

俺が泣く間も与えられず、代わりに差し出されたのは見覚えのある住所のメモ。

……森沢さん家やミルたんのおうちだと記憶しております。

俺は変態専門ってことかい!?

チクシヨー! やってやんよお!

変態召喚師の希望に応えて、上級悪魔になってやんよお!

▽  
▽  
▽

うおおおおおお……、とドップラー効果が途切れるまで叫び、  
自転車で依頼者宅へと向かったイツセーを見送り、3人は顔を見合わせる。

「……これでいいのですよね?」

「ええ、イツセーには全部話す必要はないわ。あの子じや何もできないでしょうし」

本人が別の事柄に気を取られすぎて気付いていなかったが、イツセーが聞くべきことはもつと他にあった。

意図して開示すべき情報に制限はかけたが、其処を気付けられなかった時点で彼は平凡な高校生からは逸脱し切れてはいない。

そんな彼を巻き込むことは本意ではないし、何より役に立たない以上は口出しを忌避するためにも蚊帳の外へ置くことは当然の措置と言えた。

「戦力的にも見込みがないことはわかっていたけど、飼いで殺しにするのも以前から決まっていたことだわ。お兄様の眷属が目を光らせていたのも事実だけだね」

「何より烏丸くんが異世界の存在であることも一部以外には知られない方がよろしいでしょうし、素直に兵藤君に教えて煽る必要もありませんわ。世の中には知らなくてよいこと、というものもあるということで」

リアスの言葉を引き継いだ朱乃の言葉が二人の冷徹さを際立たせる。

顔つきは笑顔のままだが、イツセーの扱いに関しては記憶のない状態と比べても一切の修正が施されていなかった。

眷属に甘いとされていたはずのグレモリーは何処へ行ったのだろうか。

「朱乃さん……何か、怒ってませんか？」

「兵藤君の視線が胸から一切離れなかったことが不快だっただけですわ。きちんと躰けなさいね、祐斗」

「躰け……、りよ、了解です」

笑顔のままだが、その細められた目の奥は一切笑っていないように伺えた。

自分が怒られたわけではないのだが、思わずわずかに震えた声で返せば、話は終わりだとばかりに控えていた資料を取り出す朱乃。

さて、とリアスが口にするれば、空気はぴしりと切り替わっていた。「先ほどの邪竜ですけど、確かに伝説上に存在する名ですわ。酷くマインナーでゼノヴィアの所持していた怪物辞典にも載っていないなかったほどこですけれど」

レイナーレの皮を被って現れ、名乗った【邪竜】という存在は見過ごすことはできない。

邪竜『ゴルイニシチエ』、出典はロシアの物語集『ブイリーナ』より語られる。

奇襲、不意打ち、勝負に負ければ命乞いをし、その約束を反故にすることも躊躇わない、【卑劣竜】の二つ名で呼ばれるほどの悪竜。

物語ではそれだけやっても英雄には勝てなかったとあるが、元来強靱なはずのドラゴンがそこまで恥も外聞もない行動を起こせる知恵を働かせることが恐ろしいのだ。

元来強靱な肉体を備えているドラゴンは、そんな小手先の技を使わなくとも神代の時代からの強者であることは事実なのだから。

本当に議題として挙げるべき事情を再確認した3人。

そんな相手であるからこそ、例えば烏丸の眷属としてどうやってか蘇っていようと脆弱なままの墮天使だと（彼女らは）思い込んでいるミツテルトが相手では、逃げられることも止むを得なかったのだろう、と勘違いもしていた。

実際は聖杯に似た何かで復活させられていると思われる以上討伐しても復活する可能性があったために、『槍状の絶デイメンション・ロスト霧』という攻撃性結界神器という手札を晒すことに躊躇いが生まれたためでもある。

攻撃するだけが戦いではない、という些事のような戦略眼すら、以前のレーティングゲームの敗北でも未だに学べていないようである。「しかし、どうやって奴はレイナーレの姿をもって現れたのでしょうか。イツセーくんを挑発することが目的だとしても、そうそう姿を自在にできるものなのでしょうかね、ドラゴンというものは」

「その辺りは、ひよっとすれば伝承が伝えているのかもしれませんがね」

物語では英雄に命乞いをしたのち、舌の根乾かぬうちにその出身地から姫を攫い討伐されたとあるが、仮にもドラゴンがそうそう討ち取られるほどか弱いはずはない。

そう思っている朱乃は、件の攫われた姫と姿を取り換える術か何かを使ったのでは、と推測していた。

そうして生き延びて、今日まで封印されているのだと思ひ込ませたのだ、と。

「その推測は今も置いておくとして、問題は今後のことね。下手をすればコカビエルの時以上の被害がこの町に出るかもしれない。そのためにも、戦力の確保は第一条件だわ」

「ですわね。烏丸くんの眷属にはミツテルトさんが通達に行ってるでしょうし、私は冥界、グレイフィア様へ。祐斗は、」

「はい。皇さんにも声をかけておきます」

「私はソーナにも声をかけておくわ。アイドル活動も大変でしょうけど、流石にこんな状況を見過ごすほど附抜けているはずはないでしょう」

聖杯の事情を知らない(アザゼルを除いた)聖書陣営からすれば、名を名乗って逃げ去ったとはいえ『伝承上討ち取られ封印されているはず』の【邪竜】の一角が姿を現した事実は、前回の『奇襲』で未だ姿を現していないとされる『禍の団』<sup>カオスブリゲード</sup>が存在している可能性を示唆させてもいる。

その警戒心が、『蚊帳の外』を意識から外させた。

ゴルイニシチエが何を思っただけでイツセーに接触したのかを、誰もが気かけなかったのだ。

その意識のズレは、後に致命的な運命を彼らへ齎すモノだと、それを知るのは未だ徒に差配するルシファーのみである。

「何でも知ってるわけじゃないけれど、あの先輩が信用ならないことだけは把握できてる」

「あ、イツセー先輩だ」

ギヤスパークんのその眩きに、彼の見ている方角へと視線を傾けます。

すると禿頭と傷だらけの顔に強面が特徴的な伊達先生に引き摺られる、呼吸困難に陥つてると思いき土気色の顔色をした兵藤先輩とその他2名ほどの男子、そしてそれに付き添う胴着姿の女子数名が視界に映りました。

他の男子の方はさておき、兵藤先輩の様相は明らかに救急車両の呼び出しが必要な案件に思えてきますが、それに付き添う名も知らぬ女子生徒らも伊達先生も気にかけて様子はございません。

不審に思っていると、同じく様子を伺っていた岡崎さんが説明をしてくれました。

「レイヴェルさんはアレを見るのは初めてでしたっけ。覗きの現行犯ですよ」

「ああ、あれが噂に聞く……」  
「なるほど、通常運転ってことね。よしギヤスパーク、トス行くわよー」

「こともなげに言いますがそれって普通に警事案件なのでは!？」

二学期とはいえまだ高校一年生であるクラスメイトが何のこともないように口にするのは聊か鍛えられ過ぎなのではないのですの!？」

驚愕する私わたくしを他所に、一緒に話を聞いていたミツテルトさんはボールを上へ。

私たちと同じくブルマ姿のギヤスパークんは岡崎さんの言葉に納得しつつも、はわわとたどたどしくミツテルトさんに付き合います。

男子である彼が男女別と思しき体育の授業で私たちと同列になることがやや不思議にも感じられそうですが、彼がその形なりのまま男子た

ちに交じる方が不要な劣情を煽るのだそうで、他女子からの嫌厭の声もなしにこれが日常でした。

って、そんなことは今は問題ではなくて。

「休み明けは大人しかつたみたいだけど、元々あの先輩たちって『そういう人たち』なのは周知だからねー。学校側だって好き好んで恥を外聞に晒したくはないだろうし、被害者との示談で事を済ませるつもりなんじゃないの?」

「きーちゃん詳しいね。そういう経験が?」

「それはどういう経験なのかな……」

「満員電車で痴漢冤罪を掛ける経験?」

「人聞き悪いんだけど?」

さらりと高校生らしくない説明を被せる斧崎さんですが、ミッテルトさんの軽口で岡崎さんからの視線が微妙に引かれているのはどうしようもないのかと。

この辺は烏丸さんの居た影響なのでしょう。

窺めている本人は言うほど気にした様子はありませんが。

「そいえば噂じゃ木場先輩と良い仲だって聞くけど、そこんとこどうなの?」

と、斧崎さんがこれまた聞きづらい問いをこちらに振ります。

一応は同じ部活動に所属している私たちに、恐らくは軽い意味での真相究明っぽいですが……。

……い、言えませんわ……!!

女性化した木場先輩を孕ませてこつそり付き合っている、だなんて真実を、まかり間違っても仄めかすことが出来るはずありません……!!

いえ、わざわざ教える必要性がないのは事実ですけど、こう咄嗟に話を振られると普段の現実を把握している身としては何とも言い難い妙絶な間が空いてしまうのが不測過ぎて……!!

「ああ、あいつらホモだから問題ないよ」

「いや、そこは問題しかないんじゃないですか……?」

その逡巡の間に、ミッテルトさんのどうとということのないセリフが

挟まれます。

というか、それはフオローになっただけじゃないか!?

幸いにもミツテルトさんは軽口と冗句を笑しやかに口にするキャラ、という認識が強いので本気にする方は居られませんが、さらに追及されるようになったらどういたしますの!?

▽  
▽  
▽

さて、俺が復活してから早くも1週間が過ぎた。

——首輪はまだ取れない。

……いや、これおかしくね!?

部長の言葉じゃ軽く締まる程度だっただけで、西遊記のアレみたいにギリギリ締め付けてくるよ!?

酷い時にはクラス以外、廊下で女子に声を掛けたら締まって、吊るして、弾くような衝撃の後に脱力し、どさりと落とされた。

声かけの瞬間に嫌そうな顔した女生徒の対応にも問題ありだろうがあ!?

汚物ってか!?! 俺は存在が汚物ってか!?!

時代劇の仕事人に処理されたかのような俺を、心配してくれる女子はいなかったよ……っ!

それならば、と部室で召喚依頼を待つ間、祐奈を相手に『女の子の扱い方』を実践付きで教わる俺。

同じく屯する後輩2人にやや引かれた顔で伺われていたけど、命の危機に比べたらなんてことはないね!

な、泣いてなんかいないんだからねっ!

なお、未だ合格点はない模様。

お陰で随分とご無沙汰ですよ、ははっ。

ご無沙汰と言えば……、

「レイヴェルは烏丸についていかなかったんだな」

「……あの兵藤先輩、あまりこちらへ卑猥な視線を向けないでいただけますか……?」

「喋っただけですけど!?!」

レイヴェルの距離の取り方が物理的にも遠い。

同じく召喚待ちの後輩フェニックスは窓際に学校備品の簡易な椅子でギヤスパーと談笑中であったのだが、ふと気づいた俺の問いに返ってきた言葉は普通に辛らつだった。

その距離は部室内で実に2メートルほど離れているのだが、グレモリー眷属への移籍出向中という彼女も下級悪魔としての仕事を割り振られている以上はこの場にはいないといけない。

……あの、この拘束具やつぱり外しません? 誰も幸せになれないよコレ。

「喋っただけでそれだと昼日中に街中を歩けませんよ、イツセー先輩……」

「そうだね。今後はもうちよつと性欲を抑えるのが課題だね」

レイヴェルの言葉にあっさりと同意を示すギヤスパー&祐奈。

マジで? そこまでわかりやすいか、俺?

いや、実際以前の体育倉庫でレイヴェルのセックスシーンだけでなくて、小猫ちゃんと比べるまでもなく豊かになった後輩おっぱいを目の当たりにしちゃってるわけですからね? こう、現実にAV女優と顔を合わせたみたいな感激というか感動というか……」

「感動している人は男女問わずに其処まで表情筋緩まないよ。あと声に出てるから」

気付けば、こちらをジト目で呆れ見る祐奈に、自分の身体を隠すように斜に構えるレイヴェル。

ギヤスパーは大して変化はないが、室内の空気が四面楚歌なのがよくわかった。

とりあえず、後輩でも女の色気が凄いレイヴェルと一発やってみたくなりました!

……っ、はっ、かひゅっ、首がまた、締まって……っ!





「どーもおー、お呼びにいただき参上しましたグレモリーでえーつす……つてえ、ありや？」

「おー、悪魔くん。いらつしやい、待ってたよー」

さて、久しぶりに【変態】ではない新規のお客さんからのご召喚！此処で新たなカテゴライズへと開拓すべく、ちよつとばかり気合を入れて転位したわけだが、そこで迎えてくれた召喚主様を見て少しばかりの意表を突かれた。

いや、転位が出来なかつたわけじゃないんだけどな？

俺が毎回自転車で参上するのは常連さん方から「なんか似合わない」と言われるご意見に沿った選択なのであって、何も俺自身が毎回自転車で玄関からインターホン鳴らして馳せ参じたいわけじゃないんだ。実際、アザゼル先生に呼び出されたときとかはしつかりと転位で召喚されていたわけだし。

そのときにもあったことなのだが、召喚士さんの側に相応の実力があれば、下級悪魔でも個人指名を受けて召喚される場合が結構ある。

しかもその場合は相手側の術がこちらの足りない魔力を補ってくれるので、俺みたいな呼び出されることが不得意な悪魔でも問題がないとか。

いや、森沢さんが悪いわけじゃないよ、ただ初めて悪魔として召喚されるなら悪魔っ娘に傾倒した童貞のアニオタじゃなくて、悪魔召喚に実践的に慣れたちよつとでもお色気成分が可能性ありそうな魔女っ娘の方が良かったなって話だよ。うん。

はっ……！ 否応なしに実力のある召喚士に呼び出されて拒否できずに身体を許してしまう悪魔っ娘……！ ——今夜の『おかず』が決定したな。

……だつて、マジで最近ご無沙汰だしさあ……（イジケ。

話が逸れたが、俺が意表を突かれたのはそういう『おかず』に気付いたから……とかいう理由ではなくて。

「まあ楽しんでくれよ。召喚の対価だつてきちんと払うからさ」

「いや、お前……ええ〜……」

呼び出した奴が、年端もいかな少年子供であつたという事実について

だ。

現実に居るんだな、そういう幼年召喚士みたいなドラマ的存在って……。

そーいえば、先日のレーティングゲームで天界側から呼び出されたゲストにもけっこう若い子供が混じっていた気もするし……。

い、意外と珍しくもないのか？ こっちの社会<sup>世界</sup>じゃ……？

「改めて自己紹介させてもらうかね。リゼヴィムってんだ、よろしくなあ悪魔くん」

促されるままに、何処かのホテルの一室へと召喚された俺は、高級そうなソファに座り偉そうな態度の子供召喚士と向き合う。

なんかデジャブを感じると思ったら、状況的にアザゼル先生に呼び出された時と似通いすぎてて納得する。

あれ、でもちよつと待て、そうなるよこの子供も人外の可能性が……？」

「お、もう気付いたのか？ そーだよん、こー見えてキミより年上だぜ」

うっ!? 心を読まれた!?

態度からもそんな気はしていたが、実際やられると納得するなあ……!

「ふう……。で？ 俺になんか用でもあるのか？」

「お？ 案外取り乱したりしねえのか。ひと昔前のミステリー追跡漫画みたいにならぬに驚いてくれたっていいんだぜ？」

「いや、こーいと呼び出しはもう二度目だし、あんまり大げさに反応しても見る側を喜ばせるだけじゃねーか」

「なーんだよ、そこがいいんじゃないか。つまんねーやつだなー」

「そうそう楽しませてられるか、俺は道化じゃねーんだよ。大体、こっちの心を読むような真似を軽くできるやつを相手に、アレコレ考えたって無駄じゃねーか」

「……いや、最期ら辺キミ自分で口走って……あまあいいか別に」

何か小声で呟かれた気がするが、開き直っていた俺にその言葉は届いていなかった。

そちらを訝しげに見直したときには、小学校低学年にしか見えない  
そいつは既に気を取り直すようにその表情を愉悦に歪めていたとこ  
ろだった。

「さて、今日キミを呼び出したのはお願いしたいことがあるからなん  
だが、その前にちよつとした『おしやべり』をしよう。なあ悪魔くん、  
先日までキミたちのところにいた烏丸イソラってやつが今何処にい  
るのか、知りたくはないか？」

「——知ってるのか、お前……？」

俺が散々な苦汗を舐めさせられた原因であるあの屑野郎を、この子  
供がなぜ知ってるのかは今は問題にしない。

思わず身を乗り出すようにそれに食いつくことを自覚するけど、何  
よりも欲しがっていたことならば『そうなる』のは当然だ。

部長たちからも、それとなく教えられていない事情があることは、  
何となくだが把握していた。

自分の眷属が出向するのだから、居場所が知れないなんてことは絶  
対にないだろうし、何より俺が烏丸にこういう感情を向けることは誰  
の目にも明らかだったからこそ、詳しく教えてもらえないであろうこ  
とも納得できた。

だが、其処を避けて知れる情報源が新たに出てくれば、——どうに  
かして奴を不意打ちできる……！

「教えてくれ、アーシアたちは何処にいるんだ？」

「おーおー、食いつくねえー」

何処となく誰かに似ているような気がしなくてもない、リゼヴィム  
の歪んだ笑みが怪しくても、アーシアを助け出すためならどんな敵だ  
ろうと倒して見せる……！

その覚悟で聞いた話は、俺の想像を超えた異常な話だった。

「——異世界？ マジかよ……」

「——とまあ、烏丸って奴の居場所は判明したが、聞いて分かる通り簡  
単に行ける場所じゃねえ。そこでだ、悪魔くんをお願いしたいのは此  
処からなんだ」

詳しい話は語らなかったが、烏丸に俺みたいに何かしらの因縁が

あつたと説明するリゼヴィムは、反撃のために異世界への扉を開きた  
いと言いつつた。

そして、そのために必要な『何か』の一端として、【赤龍帝の籠手】  
の使い手である俺への願い。

「俺たちと手を組まねえか？ 一緒に異世界へ行つて、烏丸の奴を  
ブツ飛ばそうぜ」

その勧誘に、俺は――、

☆「その手に掴んだものは、決して手放したくない  
……！」

「……断る」

「ほう？」

イツセーはそう間も置かずに、リゼヴィムの要求を断った。

異世界へ進出しようという彼の企みはともかく、イツセーに何をさせたいのかも詳しく説明する暇もなくの拒絶だ。

烏丸に対して色々と鬱憤が積もっているだろうに、その辺りの自尊心を擽るような勧誘を敢行したにも拘らず、だ。

交渉としては決裂もいいところなのだが、しかしリゼヴィムは拒絶されたことに、思わず面白そうに眉目を歪めていた。

「何故か聞いてもいいか？ 悪魔くんは、烏丸イソラを許せないと  
思ってたんだがなあ」

そういった返答にいきり立つのは、精々が現悪魔社会で『立場』を笠に着ている貴族程度のモノだ。

悪魔としての実力として重視される、年月を重ねて貯め込まれる魔力総量を喪失し、手引きの組織戦力をほとんど使い捨てられ人員不足としか言いようのない少数人員を引き連れる羽目となったりリゼヴィムには、『子供の不理解』程度で癩癩を返すほどの『余裕』はない。

自分の要求が通って当然、と思考が凝り固まっている貴族のように  
は押れやしない、と内心皮肉たっぷりに彼は尋ね返していた。

その内実は無意識の領分。

領分の幾つかには、また別種の愉しみを味わおうとする少年心があることを、リゼヴィムは自覚していない。

正直現状から何からで苦汁を舐めつつあるリゼヴィムなのだが、引

き籠っていた時代と比較するとずっと充実したハードル挑戦の連続で、困難な立場を味わうほどに愉悦が零れるような、軽い被虐症状が誘発されているようになっていた。

が、改めて言うがそこに自覚症状は無い。

それもこれも烏丸つてやつ所の為なんだ！

「いや、正直異世界とか行きたくはないんだけど？ 確かに烏丸の奴は許せないけど、異世界に喧嘩を売るって要するに戦争するってことじゃねーか。戦争するとエッチなことが出来ねえ！ だから断らせてもらおうぜ！」

と、リゼヴィムの微進化はさておいて、イツセーはきつぱりと誘惑を跳ね除ける。

その辺の事情を把握できているのは、以前の駒王会談でアザゼルの例え話が耳に残っていたためと思われる。

理由としては実に情けないが、それでも正解を引き当てるあたりは主人公と呼んで然るべきかもしれない。

よっ、寝取られ主人公っ！

「アーシアちゃんを連れていかれたのにかにや？」

「なんだかんだ言ってもアーシアは悪魔だろ。ずっと人間である烏丸と一緒に生きていられるわけではない。帰ってきたときに迎え入れてやれば、すぐにバカなことをしていたって気付いてくれるさ」

事情の摺り合わせに伴って、イツセーはアーシアが人間に戻ったことを把握していない。

イツセーには伏せられている情報がどの程度までなのかをリゼヴィムも知らなかったから教えていなかったが、自らが優良種族へ存在進化しているという事実を掻いている『子供』では、返答が日和見になるのも無理はなかった。

改めて、交渉は失敗した。

「そーかい、そりゃあしかたねーなあ」

が、リゼヴィムは大して残念にも思わずに言葉を返す。  
交渉は失敗したが、そこに彼は重要性を備えてはいなかった。

「悪いな、烏丸征伐は見逃せねえが、手を貸すだけの義理もない。ていうか、そんなことに時間割いてたら俺が出世できねえし」

「いやいや、こちらこそ悪かったなあ。考えてみりゃあ悪魔くんの上司に断り入れずに勧誘するのもヒデエ話さ。聞かなかったことにしといてくれ」

「おう。上手くいくことを祈ってるぜ！」

もう一度言うが、情報を正しく与えられず、何より覚悟もない子供を、これ以上勧誘する余裕はリゼヴィムにはない。

失敗しても胎も痛まない交渉なのだから、流れたとしても不備とは思っていないかった。

朗らかに談笑する少年たち。

しかしその隙間を、蛇のように悪意が潜んでいるとはイツセーのほうは思いも依らない。

ひとしきり笑い合った後、その悪意は滑るように彼へと押し出された。

「——さておき、今回の報酬だ。ぜひ受け取ってくれ」

「ハァイ、イツセーくん♪」

何処か厳かに、リゼヴィムの声がそう聴こえたイツセーは、彼の背後にするりと現れた少女に目を見開いた。

「つれ、レイナーレツ!？」

ある種トラウマに似た思い出を抱いている少女、ご丁寧に駒王学園の制服に身を包んだ人間としての名を天野夕麻といった黒髪の少女が、朗らかに手を振っていた。

「お、お前っ、なんでっ!?!」

「落ち着けよ悪魔くん。報酬だっって言っただろ?」

その突然すぎる再会に、思わずソファから立ち上がってしまうイッセー。

落ち着いている目の前の少年に諭されるように呼びかけられても、その動揺は抑えられそうにもない。

「報酬って何のことだよ!?! ていうか、レイナーレは死んだはず……!」

「アレエ? 先日挨拶に行かなかったか?」

「え、あ……!」

と、そこで思い出す。

一週間前に、自身がこの世界のことを思い出す切っ掛けとなった出来事を。

そして彼女の生死に関しても抜けていたのだと、状況が錯綜に陥っていると解かりつつも、自分の言動の間抜けっぷりに赤面してしまう。

それをからからと笑い飛ばすリゼヴィム。

まるで朗らかな家族の団欒のような穏やかな光景が、そこにはあった。

「お間抜けだなあ、悪魔くんは」

「うっ、うるせえっ! いきなり目の前に現れたら誰だっけと驚くだろうっ!?!」

「あらら、驚かせちゃったみたいねえ」



改めて、生前のレイナーレには感じられなかった何処か高慢な態度を伺えず、妙にほんわかとした雰囲気を感じ取ったイツセーは、まじまじとレイナーレの姿をした彼女を見る。

「えーと、確か中身が違うんだったよな。何て呼べばいいんだ？」

「どうとでもいいさ。なんなら、天野なんとかって呼んでやればいい」

ならば夕麻と呼ぼう、と心に決めるイツセー。

トラウマ混じりとはいえ初デートを楽しんだ女子だ、危険度が感じられず、さらに何処か好感触のようなモノを匂わせて来れば、そこまです警戒することもないだろう。

「……で、報酬ってどういうことだ？」

「簡単な話だ。此処まで来てくれた悪魔くんは、こいつを一晩貸し与えてあげよう、ってだけのな」

「……なん、だと……!?!」

別の意味で警戒が先走る。

同時にバツと勢いよく顔を上げ、その視線は夕麻の身体へと釘付けとなった。

今度は別の意味で彼女の身体を視姦する。

イツセーのイツセー自身の方も先走っていた。

「勧誘は断られたが、召喚されることそのものは悪魔くんのお仕事だからな。今夜時間を取らせちまったそれ相応の対価を貰えないんじゃないや、キミだつて納得いかないだろう？ かといって、こちらの要求を満たしてくれたわけじゃないんだから、宝石とかをポンと出せるような吊り合いは取れてない。だから、——こうして形が残らないで、キミに満足してもらえような『お土産』を送りたいんだよ、悪魔くん」

どちらが悪魔かわかったものではない言い分であるが、それに気づくイツセーではない。

彼は今、夕麻の身体を品定めするのに夢中である。リゼヴィムの言葉にうわの空で、イツセーはどうかして返事をしようとする。

即座に状況に甘んじようとしなのは、リアスや木場に少しばかり後ろめたいためでもあったが。

「い、いやあ、でも、そんな、悪いってえ」

「いやいや、こつちもさつきは無茶なことを要求しちゃったからそのお詫びも込めてな？ ああ、心配しなくても病気とかもない真まっ新さらな新品だから安心していいぜ？ 今だけ悪魔くんだけにご奉仕しちゃう女の子だから、好きなよーに扱っても構わないからな」  
「す、好きなように……い！」

リアスや朱乃ほどのポリュームはないが、例えるならばゼノヴィアくらいにメリハリの利いた魅力的なバスト。

墮天使の姿になったときには思わず目を引かれた、露出された肌にはシミひとつなく、肉付きの良い太ももや臀部などは実に抱き心地が良さそうだと連想される。

ごくり、と生唾を飲み込む。

後ろめたさは一瞬にして灰燼と化した。

そういえば、最期にシタのはいつのことだったか。

夏休み中に木場を相手に初モノを体験してからは、リアスと一度だけ、そして顔も覚えていないが誰か良い身体の子を掴んだような記憶がある。

実感だけが残っていて誰なのかが思い出せないのも、ひよつとしたらグラビアアイドルか何かと明晰夢でも味わったのかもしれないがそれはさておき。

考えてみれば木場とすらも、今では性欲を擦られるように搔き立てられるだけで、性行為がそれ以降に成立した記憶がない。

そこまで思考が循環した頃には、長いことお預けを食らっている猛獣の如く、イツセーは目の前のごちそうに今にも齧り付かんばかりの鼻息で目を見開いていた。

「というか、ぜひ召し上がってくれると助かるんだけどなー。こっちはちよいとばかり表沙汰に出来ない計画の一端を語っちゃまったし、口止め料つてことで貰ってくれると安心できるんだけどなー」  
「し、仕方ねーなあー！ 悪魔だし、対価を貰うのは悪いことじゃないもんなあー！」

「そうそう、悪魔くんもわかってるじゃないか」

あ、覗く趣味はないから俺は退散させてもらうけれどな？ と言いつ残し、リゼヴィムが部屋から立ち去ったその瞬間。

イツセーはル●ンダイブで夕麻へと躍りかかる。

早脱ぎコンマ1.5秒。

世界新であった。



やる気になったイツセーが躍りかかるその前に、夕麻は自然とソファの上へと陣取るように移動していた。

飛びかかってきたイツセーに、押し倒されるがままに抱き着かれる少女の中身は邪竜であるのだが、行為自体に異存はないらしく本当にされるがままである。

胸を強調するまともな教育機関としてはあり得無さ過ぎる制服に手を伸ばされて、抱き留められた少年は夕麻の心情など気にも留めずに豊満な乳房を貪った。

衣服の上から皺になるのも構わず指先は這い回り、乳の谷間に埋められた顔は鼻息も荒く、バフバフグリグリと押し付けながらその隙間から匂いを嗅ぎ感触を味わう。

押し広げられるように開いたシャツの隙間から覗く肌とフリルの

ついた下着を見つけると、シャツの上からもふくよかさを捉えられた双丘を鷲掴み、より乱暴に顔面を埋め続けた。

そんなイツセーにしかし、嫌厭しても可笑しくないはずの少女は笑いかけ、その頭を優しく撫でつける。

「こおら、慌てないの。そんなにがつつかなくなつて、私は逃げないわよ?」

慈母のような微笑みは、少年がこの数年味わったことのないものであった。

実はリアスとか朱乃とか祐斗とか、初期から数えてもイツセーにそこまでの優しきさはつきりと示したことはない。

祐斗は女性として未成熟過ぎるために、その感情を愛と呼ぶには独り善がり果てしなく、リアスや朱乃の場合は最初の頃は、下級生相手というよりはペットを相手にするような感情しか抱いたことはない。

もう少し良い形で関係が発展していたのならば、女子高生としての精神性に伴ってそれなりの立場と愛情を得られていたのかもしれないが、今の彼女たちは先走った身体の関係で爛れた性欲に感<sup>かま</sup>ける畜生と大差のない雌であるので、見込みはもはや微塵も無かった。

「……っ、う、うおおおおっ、夕麻ちやああん……!」

「んっ、ああんっ」

そして、味わったことのない感情を向けられたその衝撃は稲妻のようにイツセーの脳裏を掠め走り、イツセーもまた女子を慈しむという感情を思い出させてくれた夕麻に縋りつくように泣きついた。

そしてそのまま手付きは変わらずに乳房を揉みしだく。

泣きついても行為に変動はなかった。

「……ねえ? おっぱいが好きなのはわかったけれど、どうせなら直接触つたらどうかしら? 制服や下着越しなんかより、ずっとそっちの方が気持ちいいわよ?」

夕麻の言葉に一端のクールタイムを設けられ、彼女が制服を脱ぐことをそわそわしつつも座して待つイツセー。

夏服なのでケープはないが、腰回りを覆う謎の装飾を除けば、駒王

の制服は身体の線を視覚効果で細く見せる縦縞柄のシャツに、膝上15センチはあろうかという下着をギリギリの領域で隠す裾の短いスカートのみ。

女子だけ無駄にハイクオリティな駒王学園制服を脱ぎ捨てて、夕麻は薄い桃色の下着と紺の靴下しか身に着けていない。

衣服で隠れていた腰から太腿にかけての下半身は女性らしいふくよかさを見せながらも、陰部を隠す薄布の上には無駄な肉がほとんど付いていない、よく引き締まった腹を外気へと晒した。

その状態で後ろ手にホックを外そうとしたが途中で止めて、凝視するイツセーへと声をかけた。

「全部脱いじゃっていいの？ イツセーくんの好きなおところで止められるのだけど」

「っ！ じゃ、じゃあつ、ソックスだけ残して、パンツから下ろす形でっ！」

「ふふ、ほんとおっぱいが好きなのねえ」

止めていた手をショーツへと回し、程よい肉付きの太ももに擦るように指先を滑らせる。

引き締まった腹とは裏腹に柔くふつくらとした下腹部と薄布越しにも透けていた薄く生え揃った陰毛が覗き見せるが、イツセーからすればメインディッシュはその次だ。

再び後ろ手にホックを外した夕麻のもったいぶった仕草に、猛牛のような鼻息で前のめりになるイツセー。

目を限界まで見開き、カップからプルンとこぼれるふくらみを、桃色の先端まで余すところなく視界へ納めていた。

「はい、どうぞぞ♪」

「い、いっただっきまあああつす!!!」

とうとう露わになった双丘へ、再度飛びかかって行くイツセー。掴みかかり、むしやぶりつき、張りのある柔肌と豊満な乳房の感触を、リアスにしたように味わい尽くす。

イツセー少年の乱暴な手つきは、夕麻の時折挙げる歓声に駆り立てられながらも、豊潤な果実を蹂躪するように夢中に貪っていた。

そうして10分ほど堪能したころ、未だ顔を埋め続けるイツセーへ、甘い嬌声を上げ続けていた夕麻は尚も優しく声をかけていた。「イツセーくうん……、そっちのほうも、もう我慢が利かないんじゃない？」

夕麻の指先が、イツセーの股間に触れるか触れないかの距離で指し示す。

全裸であったイツセーは改めて、己のガチガチに反り勃ったイチモツを認識する。

「好きにしているんだからねえ……う！」

夕麻の指先はイツセーの股間から、自分の股間へと滑っていた。

薄い陰毛に隠れていた、柔く滑らかな膣口の割れ目を広げる仕草が目映る。

甘い声音に誘惑されたイツセーであったが、しかし、と逡巡した。「な、なあ、それじゃあ夕麻ちゃんが挿入<sup>いれ</sup>してくれよ。俺のちんこを握ってさ」

掴んだままの乳房から手を放したくなかったイツセーは、そんな提案をしていた。

リアスも祐斗も、腰を落としたのは自分の行動で、処女であった2人を自分がリードする形で初体験を済ませた。

そう自負しているイツセーであったが、一番好きなのはおっぱいだ、本音を漏らすなら男女の決着をつけるその瞬間までもずっと放したくない。

そんな独り善がりから漏れ出た提案であったが、それすらも夕麻は微笑んで受け入れていた。

「あああんっ、はいったああ……っ！」

細い指に握られた瞬間に爆発しそうであったが、それを乗り越えたイツセーをぎゆうぎゆうに包み込んだのは夕麻の肉穴であった。

思いの外狭く、膣壁で感じる壁のざらざらとした感触が、今にもイツセーの息子を暴発させそうになる。

気持ちいいのに苦しい、相反する感触に身動きが取れなくなるイツセーへ、夕麻は抱き着くように腕を彼の背へと回して囁いた。

「ねえ、いいこと教えてあげる。この身体、再生してから『こういうこと』をしたのは、あなたが初めてなの……♪」

「つつっ！ ゆっ、夕麻ちゃあああんつつっ!!」

その囁きでイツセーの籬は完全に外れた。

墮天使であった夕麻はイツセーの知らない男に身体を預けたかもしれない過去がある、とイツセーの中では雌豚ピッチ扱いであった。

だが精神面はさておき、現状の夕麻は間違いようがない初物で、自分がその最初として好きにできるのだ。

中身がどれほどビッチ雌豚であろうが、身体はスタイルが最上の美少女だ。

そう認識したイツセーは、自分の腰へと脚を絡めてくる夕麻へ向かって、激しく前後へと運動を始めていた。

「あっ、ああんっ、はげしいっ、いいわよおイツセーくうんっ、もっともっとしてえっ」

ガッツンガッツンとソファが壊れるくらいに腰を押し付けて、夕麻の股間から滲んだ血液が水鉄砲みたいに押し出される。

しかし夕麻は痛みなどを返さず、嬌声と愉悦の悲鳴でイツセーを急き立てる。

なおも掴まれたままの乳房は握り締められるように形を変えて、股間をぶつけることで口元も噛みしめたイツセーの歯形が乳首を傷つける。

夢中で夕麻を貪るイツセーは、その傷跡に一切気が付かず、彼女の身体を見る見るうちに傷だらけにしていた。

「あっあっ、おっおっ、ゆっ、夕麻ちゃあんっ、おれっ、もうでるうっ！」

「いいわよおっ、すきにしてえっ、たあくさんっ、私の中に出してえっ！」

そんな無茶な交尾は当然長くは続かず、早くも限界を迎えたイツセーは、自身の叫びとともに精液を絞り出すように吐き出した。

「~~~~おっ、お、おお~~~~つつ……い！」

背を仰け反らせたイツセーは、声にならない海驢みたいな鳴き声を

上げながら、股間同士を張り付けることに無上の悦びを感じていた。夕麻の膣穴に、白く濁った粘液がマグマみたいに流れ落ちる。

その熱を子宮で受け止めながら、ぷつりと意識が落ちたイツセーを、夕麻は抱き留めて微笑んだ。

その顔は、——何処かの新世界の神のように酷く歪んでいた。

▽      ▽      ▽

その後、数十分後に目を覚ましたイツセーが夕麻の乳の柔らかさから離れられなくなりしばらく重なり合っていたところを、夕麻自身の謎魔法で次弾装填（意味深）させられるイツセー。

そんな遣り取りを数セット繰り返し返したところで、ようやく賢者モードに移行することが出来たイツセーが帰宅する頃には、長い夜は明けようとしていた。

身支度を整えて満足して帰ってゆくイツセーを笑顔で見送り、夕麻はホテルの部屋に備え付けてあるバスローブを羽織って身体を休める。

肉体は脆弱な女性であるが、その中身は封印を解かれた邪竜だ。

イツセーが自覚しないままに痣と歯形だらけになった身体は、竜の備え付けている回復力の働きによって自然と治っていった。

「首尾はどうよ？」

「上々、ってところかしら」

ジユクジユクと傷口が塞がり、元の白い肌に戻ってゆく様を眺めていたところへ、退室していたリゼヴィムが意味深な言葉とともに帰ってきた。

脇にはクレオがついている。

夕麻の、バスローブを羽織った『だけ』の前を一切隠そうとしない姿に赤面し、思わず目を逸らす思春期の眼鏡少年が其処にいた。



「途中ばれないように竜と混ぜる術式を加えたから、遺伝子にはキツチリと補填されてるはずよお？ クレオきゅん、恥ずかしがってないでしつかり働きましょうねえ？」

「わ、わかっているよ。エレクトロラを助けるためにも、やるべきことはきちんとやるさ」

以前にも語ったが、彼がエレクトロラと呼ぶ銀髪の少女はグレイフィアの劣化遺伝子とユーグリットの遺伝子とを混ぜ合わせて製造された合成悪魔だ。

今はもう亡きユーグリットの生命倫理を冒瀆する独善に基づいて製造された数多くいた少女たちの最後の生き残りであり、その寿命は酷く短い。

それはユークリッドの備えていた思惑、というよりも、元より【聖杯】を使用する際に参考にされた人の世のクローニング技術の限界のようなものだ。

これもまた以前に語ったが、元々使用された素材が摩耗し切ったモノであり、それを培養しても細胞分裂数が早期より上限を振り切っていた。

【聖杯】はあくまで生命の改竄や改造に対しての性質を發揮する神器であるので、生命を一から創ることに性能を割り振られてはいない。

其処まで出来たら『聖書の神』のような【原初神格】相当に値するし、例えその息吹が詭えられた道具であろうと、いや、道具であるからこそ『その領分』へは踏み込めない。

一見万能に見えても出来ないことも当然あるのだ。

そして、クレオの持つ【生死覆す万象の杖】ロッド・オブ・アスクレピオスは拙い治療能力に魂の召喚を性質に持つ。

元より魂そのものが粗雑かつ矮小なエレクトロラを、最低でも健全な人生を送らせる程度までですらも、彼の神器では尽力すらも及べない領域の話であった。

そんなクレオが助けたいと、偏に願った彼に出来ることは、何を何

でも利用して、エレクトラの延命措置を施してもらおう伝手を探ることだ。

そのためならば、彼は悪魔ルシファーに手を貸すことも、「赤龍帝」を騙すことも厭む気はなかった。

なお、読者が思い浮かべたこの世界特有かつ最大の延命装置に当たる【悪魔の駒イビル・ピース】や、ネフレアの持つ神器【托卵エキドナ・ドロッツ促す怪物の雫】も、エレクトラのような特殊人種に対しては効果の程が不明瞭に過ぎるので見送られている。

ひよつとすれば『人造魂魄』というカテゴリに属するクローン多人数で共有されていたと思しき魂を所持しているエレクトラが、それらの装置や神器の抱えている使い手でも思いも依らない副作用が効果を発揮しないとは限らない話。

それにそもそも、英雄派に所属していたクレオらが悪魔を増やすことを良しとしない建前もあるが、エレクトラにはむしろ普通の女の子としての人生を送ってほしい、と願っていることもまたクレオの本心であった。

旅の最中に肉体の機能障害が発覚し、突然倒れて以降療養に回された少女を思い浮かべ、クレオは決意を再び固める。

顔を上げた少年は、覚悟を決めた目つきで呟いた。

「任せろ。赤龍だろうがなんだろうが、素体さえ用意すればこっちを『本物』に変えてやる」

☆「何を書けばいいかわからないとき、とりあえずエロいのを書いておけば問題は無いってじつちやが言ってた」

銀糸の髪に透き通る肌、胸部の豊満なふたつの果実。

これだけの特徴だと肌の張りから柔らかさまで、穴の具合から身体の相性までと通算四日程度しか付き合っていないのに味わい尽してしまった、紅魔館PAD長に似たあのおひととカテゴリが被る被る。

しかし経産婦である咲夜さん改めグレイフィアさんと比べて、絶対に彼女の方には経験が足りない。

そうでなければ、こんな非常識な男子に惚れるなどということは無いはずですので。

「ココか？ ココがイイのか？ アアン？」

「んほおおっ！ しょうでしゅうううっつ！ しょこがいいんでしゅううっつっ！」

呂律の回ってない銀髪戦乙女ロスヴァイセを、少々乱暴に組み伏せる。

彼女は甲冑をつけているが、手甲脚甲程度の守るべき場所も守れていない丸出しで四つん這いの恰好だ。

結果として、晒し出されてぶら下がった乳房は責められるたびに前後に揺れて、突き出した尻は穴をヒクつかせながら膣口を穿られる快感に震えている。

部屋の薄暗い明りで夜景が見渡せる大窓にはアへ顔で悦ぶそんなロスヴァイセの痴態が映し出されており、それを自覚してなのか猶更窄まる子宮口は俺の肉棒を汲々と締め付けていた。

ところでぶら下がっている乳房だが、その大きさの割には『垂れる』という形態推移が為されておらず、そのものの自重を忘れたかのようにはぶるぶると震えている。

やっぱり重力魔法とかかかってない？ 神秘人種の身体ってス

ゲー。

ロスヴァイセがこうして人目を忍んで俺に会いに来た経緯は、まあ色々理由がある。

初めのうちは北欧神話の使い宜しく、エインフェリアルという戦争に駆り出されるための神々の英雄として勧誘しに来たわけだが、確かアレって死んだ魂を導くのではなかったかな？

元々なる気もないが、それとは別にロスヴァイセは個人的に俺を囲おうという意図が垣間見れた。

……いや、英雄に相応しいかどうかを確認するためには精力を測るのが第一、って明らかにエツチする口実にしか思えないから……。

その後も、ちよくちよくと理由をつけては逢瀬を繰り返す戦乙女。流石に養護教諭として就任した手前、学校で人目を憚り乳繰り合うようなリスクを負う真似はしなかったが（シタがっていた気配はあったが）、最初に突き合ったラブホ近辺に集合する形での呼び出しが懇願するように幾度もあった。

例えば、アザゼル先生からの愚痴でも聞いていたのか、俺が帰還のために次元の狭間を通過する際に、世界断層を遮る壁みたいに封印の要となっていた巨大生物に関するレポートを用意できる、というのが今回の題目だ。

英雄として勧誘を掛けられることよりは幾分かマシだが、件のレポートを提出する代わりに好みのシチュでシテ欲しい、と。

……まあつまり、今回の此れは俺の趣味とは違う。

なんでも、現在戦乙女コミュの間で『くつ殺女戦士プレイ』なるモノが流行中であるらしい。

色々と屈強なエインフェリアルなんかは無理やり責められて、最終的には子宮が屈してしまうような過程を愉しむのだからか。

尤も、元ヴァルキリーの大隊長に当たる現ブリュンヒルデなんかは、実際に屈強なエインフェリアルである現ジークフリードを従僕させて豚みたいに鳴かせるのが好みのプレイだとかいう話なので、それはそれで業が深いよね……（遠い目）。

……アレ？ ジークフリードって何処かに居なかったっけ……？

色々終わってんな北歐神話、とか思ったり、微妙に記憶の端に引つ掛かりそうなキーワードに既視感を覚えたりしたが、それはそれ。

さて此処でちよいと回想を挟むが。

『……くっ、私はそう簡単に陥落したりはしませんよ……っ、異端に晒されようと戦乙女の潔意までは犯せません！ 無駄なことは止めるのですね！』

『くっくっく……、その気の強さを何処まで持たせられるかな……っ？』

熊本弁に近い言い回しで、打ち合わせしていた通りの言葉遊びを彼女と交わす。

場所はいつものラブホの一室で、彼女は一見すれば豪華な甲冑を身に纏っている。

その甲冑を俺は片手で破り取り、ベッドの上へと投げ出されるのはあられもない姿を晒し出したロスヴァイセだ。

なお豪華で頑丈そうなのは見た目だけで、打ち合わせの段階で百均で揃えた疑似だと暴露されていた。

金属製に見せかけた衣服、それも紙に近い代物なので簡単に破り取ることが出来たわけだが、……最近の百均はこんなパーティグッズまで売ってるのか、と素直に驚愕したのは隠すまでもない。……どういう用途に使われるのだろうか……？

その後も、口先だけでは抵抗しているようなロスヴァイセの身体を撫で回し、わずかに埋没していた乳首が今にも授乳させたいとピンピンに勃起し出した状態を目視で計り、濡れそぼった膣穴へ反った逸物をやや乱暴に挿入させた。

其処は最早慣れたもので、俺の形を覚え込まされたロスヴァイセの秘所は食らいつくすっぽんのように、みちみちきゆうきゆうと肉壁を窄めてんほおおおと嬌声を上げる。

交尾の瞬間に、演戯のえの字も吹っ飛んでいた。

「お前はなんだったのかなあ？ ほら、言ってみろよ。お前自身の口から答えてみる」

「んひいっ！ わ、わたしはあつ！ ごくぶとおちんぽにしえいぶくさえたにくべんきでしゅうっ！ ごしゅじんしゃまのこだね

でえっ！　じゅしえいしゆることがよろこびのおっ！　しえつくしゅだいしゆきへんたいおまんこむしゆめでしゅうううっ！」

「よく言えました。——ご褒美だ」

「あ、……………へあ……………」

回想も終えて、四つん這いで宣言したロスヴァイセの秘所から、ずりりとそれを引き抜き尻を撫でる。

少々乱暴に扱ったそれは掴んだ指の形に赤くなっていたが、もちもちとした柔肌は手のひらに吸い付くような誘惑を忘れることはなく、思わず撫で続けていたい気にさせるくらい的美尻に太腿が大きく口を開けている様は素晴らしい以外の感想が湧いてこない。

しかし、俺は知っている。

「あ、あの……、烏丸くん……？」

行為を途中で止められたロスヴァイセが、困惑したように疑問の声を上げる。

こちらを伺う彼女を、俺はそのまま仰向けへと転がせた。

わずかな声音でベッドの上へとされるがままに寝転ぶ彼女が、不安げな顔で跨ったこちらを見上げる。重力に反抗していた乳房も、自重に任せたままに身体の両側へと広がっていた。

俺が行為を止めたことを、恐らく彼女は自分が何か気に障ることをしたのではと考えているであろう。

だが、違う。

俺は知っているのだ。

彼女は、本当はそういう趣味をしていない、ということ。

「あ、んむ……………」

仰向けになったロスヴァイセへ、覆い被さってキスをする。

舌先は口中を侵食し、歯の裏を舐り、舌の粘液を虐げて、頬の内側を蹂躪する。

乱暴だが柔らかく絡みつくそれを、ロスヴァイセは俺の首筋へと抱き着くことで受け入れていた。

恋人にされるようなキスをしてもらって、悦んでいる証の行為だ。たっぷり十分ほどかけてから唇を離れたころには、先ほどまでの白

目を剥いたアへ顔から一転、熱に浮かされた蕩けた雌の表情でこちらを見上げる『少女』が其処に居た。

「こつちの方が好きだろ？」

「あ……っ、はい……」

嬉しそうに、俺が優しく乳房を愛撫することを、上気した頬で受け入れる。

年上であるにも関わらず、男性関係が少なかつたらしい彼女は、こういう優しいプレイの方が戦乙女らのトレンドよりもずっと好みだった。

向き合い抱き合った形で覆い被さられたロスヴァイセは、俺の逸物を再び受け入れる。

伸ばした腕は背へと回され、開いた脚は俺の太腿と絡み合い、腰を緩慢に前後するだけで柔らかな嬌声が部屋へと響く。

胸板でつぶれる乳房は先端が擦れて上下し、掴まえる細い腰とサラサラな手触りの銀糸が手のひらで左右共に揺れて波打つ。

全身で彼女の感触を味わせることが彼女にとって是最上の悦びであり、そうして隙間なく重なり合っているからこそ、彼女の身体の内奥が何を望んでいるのかが実に容易く把握できていた。

「あっあっあっあっ、からす、まくうんっ、もっとお、もっときてえ……っ」

「ああわかってるさ、欲しいんだろ？」

「そうなのおっ、あなたのおっ、こだねがほしいのおっ」

蕩けた声音が耳朶を打つ。

お互いに最高潮に達した快感が、囁き合うことで更に昂ることを通じ合う。

野獣のように組み伏せられていた時では味わえない零距离での睦言に、ロスヴァイセの子宮が大きく間口を広げていることを良く把握できていた。

——其処を目掛けて、接触した鈴口からドロドロの粘液を放射する。

当然、彼女の高揚が絶頂に達するその瞬間を狙っての発射であつ

た。

「~~~~~っっ！」

何度目かも覚えていないであろう熱く勢いのあるそれを受け止めて、彼女はひととき大きく背を仰け反らせる。

幾度となく味わつても決して熟れるとは言い切れない快感に、声にならない悲鳴を食い縛った口から絞り出すように叫び続けた。

呼吸することも困難なくらい身体を撥ね続けて、痙攣に似た反動で力が抜けてゆくことを腕の中で把握する。

くたり、と萎れた花のように、ロスヴァイセは俺に抱き留められたまま、静かに眠り続けていた。

▽      ▽      ▽

「……またやってしまいました」

「おはよう」

翌朝。

目を覚ましたロスヴァイセが、腕の中で顔を覆う。

つけていた甲冑もどきは彼女が寝ている間に総て外してあるので、彼女の今は俺と同じく全裸のままだ。

ベッドの中で『朝起きた』ことが許せないのだろう、自己嫌悪に苛まれる彼女は彼女で、年上ではあることながらもそれなりに可愛かった。

「お、起こしてくれたっていいじゃないですか、私だって、一晩中シタ  
い願望もあるんですよっ！」

「いやあ、あんまり安らかに眠るモノだから、ついね」

少々強気な発言で苦言する彼女だが、それが強がりであるのは割と透けて見える。

その願望が実現したことは一度もない。現実是非情なのだ。

これが他の娘ならば、先の一回の後で回復可能かどうかは何えても一回戦もう十戦とやり続けられるのだが、ロスヴァイセの場合は教師という神経を使う仕事に就いた弊害か、いつも一回済ませると死ん



だように眠ってしまおう。

よっぽど疲れてるんだろなあ、と乳を揉んでも濃厚なキスをして  
も試しにもう一発寝てる間に交わっても、身体は反応しているのだが  
意識が浮上することは一切なかったので、起こすのはもう諦めた俺で  
ある。

やっぱり女の子を玩具みたいになんて、つてのはちよいと気が咎めるネ。

まあ、起きたら起きたで再開できるわけですが。

「シ足りないのなら今からすればいいだろ、いつもみたいに」

「そういうことじゃなくってですね？ んむゆ」

このひとは口を開けば愚痴と泣き言ばかり漏らすイメージが強く、  
ぶつちやけ養護教諭を執行できているのかが保健室を普段使いしな  
い俺からすれば不安に思えてくる。

実際、こういう風に遊ぶとき以外は雰囲気づくりなど微塵も利か  
ず、呑みに付き合えばロックグラス片手にクダを巻くのが常道である  
ことだし。

むくれる銀髪娘（年上）を朝チユンで黙らせる。

本日はそのままお休みのご予定なので、シーツの中に未だ沈む乳  
房、腰、背中へと腕を伸ばし、起き抜けの彼女のしなやかさを手のひ  
らで味わう。

一口目を不本意に受け止めたロスヴァイセだったが、肌を撫ぜる手  
付きにかすぐに易々と受け止めて、俺を抱きしめ返していた。

重なる唇と交わる粘膜は延々と水音を滴らせ、微睡みから抜けきら  
ない身体も重ね合い、彼女の肌が即座に元気になる俺の逸物を擦り上  
げて――。

――唇を離し、改めて彼女を見つめる。

横になったままのロスヴァイセは蕩けた顔でこちらを見つめ返し、  
その頬に撫でていた手を滑らせれば懐いた猫のように嬉しそうに笑  
みを返す。

白い鎖骨から覗ける形の崩れない乳房もまた露わとなっており、俺  
の劣情は夜半よりずっと眠っていないのだということ再確認させ  
てくれた。



自然と繋がり合ったふたりに言葉は要らず、朝日が差し込む部屋にベッドの軋む音がわたしの嬌声と一緒になつてリズムを奏でる。

腰と太腿を抱えられて、乳房が自然と上下へ跳ねる。

されるがままに、淫らな姿を晒すわたしに彼は口づけを。

それは、わたしだけの英雄が一時の奉仕を捧げる姿に見えてしまい、思わず応えなくなるのは女性として当然の反応になるのも致し方なかった。

「んっ、ちゅ、んぷうっ、っあはっ、もっとお、もっときださい、ゆうしやさまあっ」

自分でも驚くほどの淫靡な鳴き声が、喉から断続的に絞り出る。

そそり立つ逸物も汲々と膺の中を圧迫し、小鳥が啄むような唇だけを触れ合うキスだけではなく舌の付け根まで絡め合う蛇の交尾のような口づけを交わし、最初のころに見せていた処女の反応はもう見せたくはなかった。

今のわたしが応えるのは、雄の誘いに本能を晒す、発情した雌の獣のような喘ぎ声だ。

嬉しそうに雌の本能に導かれるままに行為を教え込まされた戦乙女は、すっかりそうすることが当然であるかのように身体を揺すり続けた。

「あっあっあっあーっああーっ、いくっ、わたしまたいつちやううーっ！」

やや大袈裟にも声を上げるが、彼に組み敷かれたベッドの上では応えられることなど言葉以外にはない。

お胎なかの奥では子宮を潰されている感触が続くが、被虐趣味も持つていないはずなのに彼にされると感じる、それだけで自身の目元が蕩けていることを自覚する。

逸物の先にコツコツと当たる子宮口の感触からも、赤ちゃんのお部屋が降りて来ていることは明白で。

程よく熟れた、少女を通り越したこの身体が、子供を作りたいと待ち望んでいることを改めて教えてくれていた。

「あつあつあつ、いいのおつ、もつとお、もつとほしいのおつ」

情けないことに、彼と出会うまで男性経験というモノは全くと言っていいほど無かった。

身体が出来上がっていても、それを十全に生かせるだけの経験が無いが為に、わたしは自分が知る限りの言葉を探す。

先輩ヴァルキリーらの行為を参考にしたり、呼び方を変えたり、言葉ではなく行為で快楽を教えてくれる彼に<sup>答え</sup>応えられる経験の手持ちは非常に少ない。

学園でそれなりの注目を集めていると自負できているこの大きな胸や、自惚れかもしれないが小奇麗に整った顔つき、女性としては恥ずかしいが戦士としては誇れる肉付きの良い脚。

せめてこの身体だけでも差し出して、彼のすべてを受け止めようとされるがままに蹂躪される。

それを浅ましくも悦ばしく感じてしまうわたしへ、彼はまた奉仕を繰り返してくれる。

この時だけは、わたしだけの英雄として。

「あつあつあつあつあつあつんあつあつああーっつっ!!」

悦楽の絶叫で喘ぐわたしを組み敷いて、微睡みの中で何度となく射精を繰り返される。

本日もまた、遅れたブランチを迎えることになりそうだった。

『ぶつちやけると、まともな神なんて微塵もない』

「あれ？ ロスヴァイセちゃ、じゃなかった先生、どうしたんすか？」  
「……兵藤君こそ何言ってるんですか？」

何故か保健医のロスヴァイセちゃんがオカ研の部室に居たのでその疑問が口から出たのだが、当の本人からさも居て当然みたいな返答が返ってきた。

……はっ！ これは、彼女も俺のハーレム候補ってことか!? 学校では明かせない女教師との秘密の関係……イイネ。

「おいグレモリー妹、ひよつとして教えてないんじゃないか？」  
「そうだった、かしら……？ イッセー、ロスヴァイセさんは北欧の遣いよ。そしてそちらが主神にあたるオーデイン様」

アザゼル先生の言葉で思い出したように教えられる驚愕の事実。  
あ、いえ、まあ大体知ってましたけどね。冥界関係かなーってとは、思っていましたよ、ええ。

……少しくらい夢見たって良いじゃないっすか。  
ついでに見たことある気がする爺さんも紹介されたが、なんとなく俺と同類っぽい爺さんなんて興味もないのでどうでもいいっす。

「こうして話すのは初めてかのう、赤龍の小僧よ」  
「どもっす。えーつと、というか、何故に今になって紹介されたんすか？」

ロスヴァイセちゃんの赴任はとっくの昔だ。  
初めからオカ研に関わるのであれば、眷属としてもつと前から教えられていてもおかしくなかったのでは。

……信用問題？ かもねー……（諦め）

「うむ。その辺りは少々こちら側の事情によるモノでな、どうにも、うちのロキがお前さんらを狙っておるようなのじゃよ」

「「なぜに……？」」

接点のない誰かさんを間接的に紹介されている気がするのだが、誰もがその理由に思い至らないので同時に口を突いて出た。

「何故も何も、お前さんらは駒王協定の組まれた場にも連れ出された『魔王の系譜』じゃろうて。何処の神域でも、それに納得できんものはそれなりに居るモノよ」

あ、テロ？ テロ系？ ひよつとして駒王つて対処専門にって思われてたりしましたか？

いやいや、確かにその場にはいたけども、実績そのものはそんなにないっすよー。

コカビエルするときも、旧魔王襲撃の時も、英雄派との騒乱も、流されるままに事態が終わってましたからねー……。

……マジで、頑張ろう……。

「いや、それにしたって今更じゃないのか？ どうせなら冥界襲撃のときに合わせて来れば片付いただろうに。なに、そいつハブられてるの？」

「ロキは禍カオス・ブリゲードの団とは別枠じゃよ。情報が取れんかったのかもしれんし、実際あの時は使者として組み込むことも難儀じゃったしのう」

片付いた、というのはあの【巨神召喚】のことを指しているのじゃうか。

それ、いっしょに討伐されてれば、みたいな意味にしか聴こえないっすよアザゼル先生。

余波で吹っ飛ばされた俺には耳に痛いつす……！

「……何かしたのか？」

地味に精神ダメージ食らっている俺をさておき、ふえっふえっふえと笑っている好々爺な雰囲気の爺さんは、何かを察したらしいアザゼル先生に睨まれてその空気を崩さないままに言い放った。

「ちよーつと遊びが過ぎる小僧なので、奴の有り金で買い物少々な。身動きできんくらいに押さえておけば、動ける頃には事態は収束済みってな寸法じゃよ」

と、何気にちよつと酷いことをしている気がしないでもない爺さまに応えは返さず、アザゼル先生はロスヴァイセちゃんへと目を向ける。

考えてみれば、北欧とやらから赴任してきてからこっちに掛かりきりになっていると思しきロスヴァイセちゃんが、今更になつてこの爺さまのお付きみたいな立場に戻されたのも納得のいかない話だ。

しかし説明を求められていることを察した彼女は、何か諦めたような溜息をひとつだけ吐いただけで応える。そんなお人好しなところも男子生徒から人気を誇る理由のひとつだったりする。

「オーデイン様が何かしたかは知りませんが、ロキ様は北欧神話でも有数の悪神です。あの方の狙いは他神話との関わりを鎖すところにあると思われれますから、どちらにしろ遅かれ早かれ、介入は避けられなかったかと思われれますね」

「チツ、狙いが今一つはつきりしねーな。今ある情報だけじゃ本当に何処まで狙ってくるのかが見えねえし、目標も絞れねえんじや誘い込むのも難しいか」

「はい。なので、皆さんにはオーデイン様の護衛を依頼したいのです」

と、アザゼル先生とロスヴァイセちゃんの会話は、実に意外な才力

研への依頼として締めくくられたのであった。

▽      ▽      ▽

主神爺様の秋葉原観光なんかにつき合うため東京にまで行った。

メイド喫茶に行きたいと駄々を捏ねられたので護衛として付き合ったんだけど、正直男心に色々とくるモノがあったな。

いや、美少女ばかりってわけじゃないんだよ。ぶっちゃければ駒王の方が可愛い子は多いさ。

というか、地元にもメイド喫茶はあるよ。まああつちで一番人気の子は水色髪で中学生くらいの眼帯ロリだから、俺の好みとは違うのだけど。

そうじゃなくて、パフォーマンスの問題だな。

俺は残念ながら地元ではガチの迷惑客として認識されてしまっているらしく、根本的に歓迎されないという悲しみ。幾ら支払えばおさわりオツケーですか!? という言葉だって冗句に決まってるじゃねーか。店長にアックスボンバーで叩き出された客なんて俺以外いねーぞたぶん。

そんな中、初めて目にするだけで首輪が締まらなかった悦びは、俺に女子と触れ合える楽しさを再認識させてくれたわけだ。

秋葉原サイッコオオオオ!!!

そんなテンションで付き合っていたら、意気投合した爺様にミヨルニルとかいうハンマーを貰った。

「爺さん、これ、めっさ重くて持ち上がらない」

「なんじゃ、ええ若いもんが情けない。それはの、メギンギョルドという力帯を装備すれば簡単に持ち上げられるのじゃよ。ツールに頼めば貸してくれるぞい」

「いや、そっちのほうが無茶振りじゃね?」

熱気をひと通り堪能し、賢者モードに似た冷めた感情でマイルドに

ジツチャンにツツコミを入れる。

誰だよトオルさん。個人名出されても知らねえ人だよ。

「オーデイン様、それこそ色々な方面に影響与えそうな神器をぽろつと貸し与えたりしないでください。イツセーくんは今普通に悪目立ちしてるんですから」

護衛に付き合い一緒に遠出していた祐奈がジツチャンを諫めていた。

駒王から離れているけど残念ながら男装したままである。

護衛デートの雰囲気も味わえない悲しみが、ちよっぴり空しかった。

「ダイジョーブじゃろー、北欧もそれなりに目を掛けておる、という証左にもなるーし、なんならこっちに鞍替えするのもアリじゃぞ？  
ヴァルキリーはかわええ子もいっぱいおるでのお」  
「ダメだよイツセーくん、キミはグレモリーの所有物モノなんだからね」

尚も勧誘する爺様に対して、腕を組むように引いて阻止する祐奈。俺に直接言う辺り、信用がねえなあ、とも思う。

反面、女子からのそういう諫め方には心を撥られて嬉しいモノもあるのだが、現在の祐奈の見た目は普段の『木場祐斗』のモノ。

世間での男子らに対しての優越感などは抱けるはずもなく、微かに女子特有のイイニホイが香る以外はサラシで封じ込められた胸部の感触も味わえずに柔らかさが圧倒的に足りない。

この構図で悦びの声を上げるモノもそこかしこに見受けられる事態が尚、残念さを際立たせている。どうぞ、腐海の森へお還りください。

……わーい、俺ってばモツテモテだあー（現実逃避）

「爺さん、どうせ勧誘されるんならロスヴァイセちゃんにシて欲し



「かつたんだけど……」

「ム？ その様子じやとロスヴァイセには勧誘されなんだか。ということは、儂からも口出しできんのう。なんせ、ヴァルキリーのエインヘリヤル勧誘は総て本人らの意図で行われる、戦乙女としての権能に携わる儀式じや。いくら主神でも口出しできんモノもあるのじやよ」

「見込みねーってことか!? 嘘だと言ってよロスヴァイセちゃん!」

「あ、この服かわいいですねー」

こつちの遣り取りに一切ノータッチのヴァルキリーが、チラシ配り中のメイドさんへと意識を向けていた。

護衛と言うことでオーディン付きに一時的に復帰させられたとか言っていたが、行動を共にする以上の配慮をする気はないらしい。

ガツテム!

「見つけたぞクソ爺!」

と、街中へ響く声。

俺たちだけではなく、散見するその他大勢<sup>モ</sup>の人々も声のする方を見上げると、ソ●マップと描かれた看板のあるビルの上にて、どう見ても一般人とは思えない、むしろ先ほどの喫茶店などでならば違和感のないぶつちやけコスプレ染みた格好でいきり立つ姿が。

そして視線は確実にこちらを捕えており、気焰立ち上るかの如く怒れるその男性は、見下ろす俺たちを、というかジツチャンを指さして声を上げていた。

え!?! 白昼堂々襲撃しかけてくるの!?

一般人を巻き込みかねない事態にすわどうすると狼狽える俺たちであったが、それに反して街の人々の反応はやや好奇に彩られている。

何かのイベントとでも捉えているのだろうか。随分と訓練された街である。

「おーおー、ロキの坊やではないか。そんなに怒ってどうしたんじや？」

「どうした、だと……!? よくもぬけぬけと言えたものだな！」

煽るように問いかける爺さんに、ああもう他人の振り出来ねえ……、と諦め顔の俺たち。

しかし、……んん？ テロを企んでこの場へ来たにしては、随分と狙いが露骨じゃないか？

実際に煽られて憤慨已む無しなロキと呼ばれた男は、ビシィ！と爺さんを指さして啖呵を切った。

「俺の財宝をすべて換金してくだらんソーシャルゲームの課金に充てたこと、忘れたとは言わせんぞ！ あまりの事態にニヴル Heim から抜け出してきたわ！ 今ここでラグナロクを引き起こしてやろうかクソ爺め！」

後半の言葉の意味はよくわからなかったが爺さんが原因じゃねーか!!

それは怒るわ！ 俺でも怒るわ！ せめてエロビデオでも買ってやれば良かったのに……！

「そう喚くでないわい。お前さんのお陰でナル●アちゃんを引けたしもう、悪いことでもなからうて」

「デメエゼツタイクロス……！」

ナ●メアって誰だ。そしてロキさんが殺意の波動に吞まれて人語を介せなくなっている。この場の誰もが彼に対しては同情的だ。この爺さん守りたくねえ……。

『こちらミッテルト、ロキを確認。でも話の内容も確認。ぶっちゃけ関わりたくねーつす、どうぞ』

「うん、僕も同じ意見だよ、どうぞ」

呆れた祐奈も無線向こう外周警護要員のミッテルトと共に、この仕事を放棄したくて堪らなくなっていた。

アザゼル先生が建てた当初の予定じゃ、囿として街を散策する俺たちに引っ掛かってロキが登場したらミッテルトに狙撃させる、というモノだったのだが、改めて関わりたくない空気にされるとは思ってもみなかった。

というか、あのゴスロリ狙撃とかできるのかスゲエな。

『この分だと狙いは完全にオーデイン様のようなね。となると、猶更私たちが出張の必要性もなくなってくるのだけど……』

『そうですわね……。人目に付くことも避けたいですし、いつそこらの土地神の方にもお任せしましょうか』

『ちよつとー、無茶振りでもないけど面倒事を持ってこないでほしいなー。働きたくないよー』

無線越しに、部長と朱乃さんの会話と知らん女子の声と一緒に聞かせる。

どちら様ですか。

『というか他神様の領域に何を持ち込んでるのさー、これだから悪魔とは関わりたくないんだよー』

『申し訳ねえ、この埋め合わせは後に必ずつけるから、手を貸しちゃうれねえか？　せめて認識阻害結界だけでも張ってくれたら助かる』

『もう張れてるよー、この街で起こった事象に関してはー、みんな特に気にすることもないよー』

知らぬ声の主恐らく少女とアザゼル先生の会話が流れる。

ああ、なんか訓練されてるなと思つたら裏事情があつたのか。

……ひよつとしてこの声の主ってめっちゃ有能？

『それよりもー、キミたちに言いたいのはそのつちのとは別だけどー?』  
『なに?』

『……っ、アザゼル様ツ! レイナーレを確認したっす!』

——は?。

「はあい、皆さま。お元気い?」

息を呑むミッテルトの声に、重なるように聴こえた知っている声。  
声のするのはロキの居場所とはまた別で、俺たちのすぐ後ろから囁くように聴こえていた。

振り返るその瞬間、爬虫類を思わせる腕に変化していた『彼女』の腕が、逆薙ぎに祐奈の胸元を引き裂く姿が目映る。

「レ、イナーレ……ッ!」

「ゴレイニシチエって呼んでね?」

いつか見た墮天使コスと同じ格好だが、竜の鱗を連想させる質感の赤で彩られたその姿は、以前の印象を一新させる。

そして背には墮天使の黒翼ではなく、これまた赤い、蝙蝠を思わせる羽根で彼女はその姿を現していた。

そして霞む、某悪神の復讐劇。

秋葉原で俺たちは、更なる事態へと呑みこまれてゆくことになる――

「あの日上がったお前の断末魔以上の絶望を僕はまだ知らない」

先ほどまで発情期の獣のように跨っていたアーシアは、熱に浮かれた淫靡な表情でその男と口づけを交わしていた。

仕草のひとつひとつに喜色は混じり、それが彼女自身が望んだものであると嫌でも認めざるを得なくなる光景……。

運動で汗ばみ湿った小振りな尻には金糸の髪が艶やかに絡みつき、女性としては未だ熟すには及ばないささやかな乳房のふくらみと細い腰が、それを見上げるイツセーの逸物を無駄に膨らませていた。

絶望に浸されても、金髪の美少女シスターが背徳行為に自ら及ぶ、という光景へ勃エレクチオン起は止まらない。

彼を抑えつけている女体化した祐斗の、背中へ押し付けられている胸の感触もまた原因であろうか。

はたまた、アーシアが口づけを止めないその下で、イリナとゼノヴィアという見知った美少女眷属仲間が男性へ向かって胸で挟んで擦っている光景が想像力を喚起させたのか。

見上げるしかできないイツセーからは、今から本番やるぜー、と体操服を脱ぎ去った少女たちの突き出された桃尻しか伺えない。

リアスには及ばずともそこそこ巨乳なクラスメイトのダブルパイズリフェラだとう!? と男子として実に羨ましい光景を目の当たりにさせられて、悔しさで口元を噛みしめるしか彼にはできなかつたのである。

——そんな光景を、公衆に曝け出された祐奈のおっぱいを目の当たりにしたイツセーは何故か思い出していた。

控えめに言って最低である。

「祐奈ああーっ！ ナイスおっぱい！」

「死ねばいいのにー！」

彼女とは思えないキリ返しが放たれたが仕方がない。

何故そうなったのかと言えば、邪竜ゴルイニシチェの逆袈裟懸けの一撃が、祐奈の胸を男性相応に抑えつけていたサラシを無残にも引き裂いた所為だ。

学生服も諸共に、かろうじて薄皮一枚で回避に成功していた祐奈であつたが、その代償は大きかつた。

他人に見せることを良しとしていない、そんな性癖持ち合わせていない祐奈からすれば、これはかなり屈辱的な光景である。

余談だが、後ろの方では某爺様主神を筆頭に、男装美少女の閃乱系ドレスブレイクでプチ祭り状態であつたのはどうでもいい話だろう。死ねばいいのに。

「……っ、こっつの……っ！ いきなりご挨拶だねレイナーレ……！」

このタイミングで不意打ちするとは思わなかつたよ……！」

「ゴルイニシチェだつてんでしょお？ むしろあんな目立つ奴が出張つてる今強襲しかけないとかないわよお」

かろうじて無事であつたブレザーを羽織るようにして胸を隠そうとするが、妊娠に伴つて最近大きくなり始めた元男子には不釣り合いな胸部は、それでは容易に隠せそうにない。

押し上げられて強調されたかのように谷間が出来る美少女のリアル谷間に、そこいらの男性は全員が「おおぅ……」と息を吞んで前かみになった（イツセー含む）。

話の矛先を向けられたロキは、しかし狼狽えていた。

一方的に見せ場を奪つておきながら、此処でこっちに振るの？ と狼狽えていた。

じ、自分どうすればいいいつすかね？ と少しばかり事態を俯瞰するべきかを思案しているようで、その実いきなり仕事場へ放り出された経験ゼロのアルバイトのように狼狽えた悪神は、同じように手持無

沙汰になっっている某戦乙女とはたと顔を見合わせる。

「……そちらもですか？」

「ええ、まあ、はい……」

そんな、なんだか和んだ一角はさておき。

赤い鎧、むしろビキニアーマーと呼ぶべき恰好で、ゴルイニシチエは其処に居た。

手甲脚甲は蜥蜴を思わせる鱗で覆われ、その形状はそのまま武器として扱えそうな鋭利さを見せており、背の翼は完全に悪魔でもなければ墮天使でもない。

先に明かしたビキニアーマーのビキニ部分はまた鱗のような形状で上下の局部を保護しており、此処が秋葉原でなければコスプレ以前に露出過多で捕まりそうな恰好だ。

こんなことを言うのもなんだが、秋葉原で襲撃があつて本当に良かった、と現場をモニターしていたヴァレリーは安堵する。

『なんか誰かがホツとしている気配が伺えるんだけどー？ アキバでも往来でのコスプレはタブーだからねー？』

『えつ、そうだったんですか？』

『ウチをなんだと思つてたのかな』  
アキバ

『W W W』のやや沈んだ声が、通信機越しに全員に届いていた。えつ、秋葉原つてコスプレしなきゃ入街できないって話じゃなかったんですか!?(偏見)。

変に穏やかな一幕はともかく、現場を土地神と共にモニターしているヴァレリーはふと気づいたことを祐奈へ告げる。

『木場さん、彼女の腕に見覚えのあるような宝玉があるんですけど、ひよつとして……』

「……………えつ?」

祐奈もまた気付いた。

いや、どちらかといえば思い至りたくなかった事実の欠片に気付いた。

思考が止まったその隙に、ゴルイニシチエは高らかに叫ぶ。

「さあ、お披露目の時間よ！  
赤龍帝ッ！」

『——ああ、ゴルイニシチエ。邪竜に使われるのは癪だが、手も足も出ない以上文句などは無いさ』

『『はあああっ?!』』

声を上げたのはイツセー、アザゼル、ミッテルトの三人。

リアス、朱乃、祐奈は言葉もなく、モニターを見ていたヴァレリーと同じく引き籠っていたギヤスパー、付き添いのレイヴェルは俯瞰する側だ。

事態の面白さを予想して何処かの爺主神は目を光らせているが、今はどうでもいい。

『おいこらイツセー！　いつ盗られた！　お前の神器だろうが!?!』

「とっ、盗られてないっす！　なんで!?!　どうしてレイナーレがそれを!?!」

「……イツセーくん？　本当に心当たりはないの?」

祐奈の視線が、やや浮気者の旦那を責めているような、そんな目つきに伺えて来るから不思議である。

そうは言われても無知な少年は、何故そうなっているのかの因果が全く把握できていないでいた。

「こ、心当たりつつあったって、何がどうなってるのか……!」

『……つ例えば、身体の一部を、髪でも血でも爪でも、そういうモノから肉体を修復させる神器だってある。本当に無いのか？　オリジナ



ルの赤龍帝を宿したお前なら、其処から複製を造ることも可能かもしれない』

幾分か落ち着きを取り戻したアザゼルは、どこぞの聖杯を思い出しつつ自身の情報をかみ砕くように掻い摘む。

そこに答えを示したのは他でもない、ゴルイニシチエの腕に顕れたドレイグ赤龍帝自身であった。

『オリジナル？ なるほど、貴様らはこの俺が代替え可能なモノと思っているらしいな。そんなわけがあるか、天龍の魂をもう一つ、などという真似は例えかつての唯一神であろうと出来るはずがない。俺こそが赤龍帝ア・ドレイグ・ゴツホ、違うというのならその元宿主よ、神器を顕して見せよ』

ゴルイニシチエへ向いていた視線が、イツセーへと再び集まる。彼女は嗤うだけで、それ以上をしようとしなない。

戦うことが目的のではなく、恐らくはこうして見せつけること自体が目的だったのだろう。

そうして仲間たちに、そして秋葉原の衆人に監視される中、イツセーは籠手を顕現させる。

しかし、その様は――、

「――ッ、ぶ、ブーステッド、ギアが……!?!」

片腕に顕現したのは赤ではなく、よりどす黒く灰掛かった紅殻。ベンガラ

全体が罅割れて、何よりひときわ目立っていた宝玉は見る間に崩れてゆく。

慌ててそれを抑えようと手を添えるが、既に手遅れだった宝玉の崩壊は止めることはできず、抑えた手のひらからガラス細工のように輝く砂がザラザラと零れていった。

『見てのとおりだ、元宿主よ。俺の力を祿に引き出せないような貴様に付き合うよりも、俺は邪竜とはいえ俺を過分に取扱ってくれる実力者の手に収まろう。この方が、ずっと暴れられる——！』

——結果として、少年の価値と命運は此処に尽きた。

今更な話かもしれない。

▽  
▽  
▽

——それからのことを話そう。

意外なことに、強襲はそれで終了した。

レイナーレの姿をしたゴルイニシチエの『ねえどんな気持ち？頼りにしていた神器を奪われて価値のない弱小転生悪魔に成り下がってしまどんな気持ち？ねえねえ答えてよお？』という無駄にねちっこい質問があったことはさておき、彼女並びにドライグはそれ以上の追撃を仕掛けてはこなかった。

無論、事態はそれで収束するはずはない。

『どのようにして』<sup>神滅具</sup>ドライグを犠牲無くイツセーから引き離したのかは依然として明らかにされておらず、少なくとも謎の一団の手にかつて脅威となっていた二天龍の一角が移籍したことは間違いがない。

報告を受けた聖書陣営はカオスブリゲードとは恐らくはまた別の集団の脅威に備えて足並みを揃えるべきなのだろうが、みすみす赤龍帝を奪われた悪魔の株はそれまでに好き勝手やっていたことも相俟って『それなりに』失墜しており、その生きる証人であるイツセーへ向けられる悪魔貴族らからのヘイトは留まるところを知らない。

こんな状況でリアスの婿として発表することなど出来るわけもなく、出生率の悪い悪魔にとつては目出度かったはずの彼女の懐妊にケチが付けられる寸でのところで、リアスはその『本当の父親』を大々的に発表した。

その人物が人間であったとはいえ、現魔王サーゼクスとは懇意にしており天使や墮天使からも一目置かれる存在であった事実からも、リ

アスを守るためにも時機を見て脅威に晒されている人間界から引き離されることが決定される。

駒王町の管理は実質執り行っていたシトリーに引き継がれ、リアスの眷属らは一時的に彼女の下に就くことも決まりつつあった。

今は姿が見えない、だからこそ恐ろしい人物との繋がりが発覚したこと、首の皮一枚で繋ぎ止められていた悪魔の名誉は、ギリギリのところ、聖書陣営の足並みを揃えることに成功する。

とはいえ、堕天使はともかく天使側は過去を顧みても一枚岩ではないことは明らかであるし、悪魔の中にも不満を持たない者が居ないとも限らない。

そんなモノたちの代表と言える立場にすっぽりと収まってしまったイツセーだが、だからこそ大々的に処罰を言い渡されることは免れた。

貯まり捲ったヘイトから首を撥ねろ、地獄の最下層で氷漬けにして、との声も上がったのだが、今更不満を貯める者を暴力で排除したところで、秩序が乱れるだけで『足並みを揃える』為には不必要過ぎる手段でしかない。

よって、神滅具ドライブグを篡奪されたことに関しては『兵士の駒の全封印』と『監視並びに悪魔社会との50年に及ぶ接触不可』という処罰が言い渡され、『居場所を把握されているはぐれ悪魔』と呼べるような状態のまま人間界でそのままの生活を余儀なくされた。

あとは『魔王の妹』に対して手を出したという心情的な点での罰則がグレモリー領より上申されたが、魔王自身がそれを苦汁を呑んで却下。

妹想いで有名な彼の方がその判断ならば、とグレモリー領のリアスファンクラブの面々も涙を呑んで納得せざるを得なかった。

但しまかり間違つてグレモリー領に来たら覚悟しとけよ兵藤一誠、と暗い決意を胸に秘めながら。

話を戻すと、謎の団に関しては『どうしようもない』のが聖書陣営の総意だ。

アドバイザーとして烏丸陣営の少女らにも意見を伺ったところ、

【聖杯】と呼ばれる神器に似た何かを所持している可能性を示唆される。

しかし、確信を持っている所持者ヴァレリーと被験者ミッテルトの意見に同意できる者などアザゼルのような研究者以外にはおらず、既に死者であるはずのレイナーレを中身は違うが復活させた実績だけを頼りに、仮の名前として『神秘を悪用する者』として「クリフオート逆さ生命の樹」と名付けられた。

そして件のクリフオートだが、ドライグのお披露目以降は何も反応は無い。

その静けさが嵐の前を思い起こさせるのは、奇しくも烏丸イソラに直接関わった彼の配下とアザゼル、そしてグレイファイアだけだったのは悲しい現実であった。



赤い髪の少女が、陽の当たる部屋の簡素なベッドの上に寝そべっている。

衣服は身に纏っておらず、豊満な乳房と細い腰つき、秘所、太腿、彼女の総てが隠されることなく曝け出されていた。

清潔そうなシーツだけが敷かれ、それが横たわる彼女を豪華な食事として盛り立てる皿のように連想させて、観る者の喰らいつきたい衝動を刺激する。

光のコントラストに充てられた素肌は透き通るように真白く蠱惑的で、悪魔と呼ばれるよりは天使のようだと伺わせるような整った顔つきの美女は、しかし何処かにあどけなさを残している絶妙なバランスを保って美少女と呼ばれている。

それを獣のように、跨って蹂躪する陰が掠れた画面の向こうで映り替わる。

少女は嬌声を上げて、覆い被さる彼の背へと手を伸ばし、その脚は彼の腰を離さないようにと絡みつく。

啼き続ける彼女の唇を塞ぐ彼の姿が写り込み、首筋へと手を伸ばして抱きしめる少女の表情は蕩けるように熱に浮かれていた。

その間も、男の腰は少女の身体を下から押し上げるように上下に揺すれて、少女の抵抗は一切ない。

長い長い、ふたりの、蛇が絡み合うような上下運動は時間にして20分以上も続き——途中で一度吐き出してしまったイツセーは、己の逸物から手を放して場面を止めた。

「……………ふう。くそ、烏丸め……、リアスとこんなことしたのかよ……」

吐き出した白い粘液で手を汚しながら、その愚痴は留まらない。

冥界への謹慎を言い渡されたイツセーであったが、学校まで休ませられているわけではない。

しかし今更才力研に戻る気にもなれず、実際個人的な活動休止も言い渡されていたので、姫島朱乃から渡された極秘DVDの鑑賞をする日々を送っていた。

そのラインナップは『リアスグレモリー、秘密の保健室』『巨乳巫女・朱乃の処女喪失』『淫靡な雌になるボクっ娘〜金髪少女調教日誌〜』の3本。

リアスは清純派女優のように光の射す窓際で胸を寄せて微笑み、朱乃は巫女服からでもよくわかるように乳房を抱えて押し上げて、最期の金髪少女には目の辺りに黒い線が引かれていたために誰なのか判明しないが、M字開脚でダブルピースを晒している写真がそれぞれのパッケージジャケットに充てられていた。最後のボクっ娘とやらが誰かはわからない。わからないと思ったらわからない。

事情が事情なので謹慎は仕方がなく、お互いに不幸にしかならないので会うことも憚られたイツセーへの最後の慰み物として朱乃は以上のDVDをプレゼントした。

主演男優は全部烏丸だが、朱乃と烏丸の趣味と采配で撮影されたそれにヤラセは一切なく、ノリノリで撮影された表紙もそのまま商品に使えそうな出来栄だ。

そしてこれらのプレゼントは、暇を持て余した少年にとっては垂涎

の品と言えた。

「……少し休んだら続きを見るか。夜はまだ長いしな」

悪魔の仕事をしなくなり、体力だけが有り余ったイツセーは朱乃に感謝していた。

烏丸に寝取られていたことは悔しいし許し難いが、最近のリアスの様子から顧みてもその妊娠の大本が自分である、とは連想し難かったことも事実なのだ。

あまりにもそっけなく、ボディタッチすら拒まれる状態で父親になれ、などと言われても納得いくはずがない。

その時は押し切られたが、事の真相がモノのついでで露見してからは、思いの外イツセーの中にあつたはずのリアスに対する恋心が悲鳴を上げることもなかった。

学園でも女子に対するセクハラを止めることのない純朴だったはずの少年は、気付けば淡い感情を喪失してしまっていた。

理由は童貞を失ったことに大きく起因するのだろう。

青少年特有の女性と関われないリビドーは、体験を通じてその想像力を育むことを喪失させる。

成長と呼べば聞こえはいいが、実際は汚れて、大事なモノを失ったに過ぎない。

それなのに其処にまで考えが至らない少年は、喪失した空白を埋めるための衝動すら喪失してしまったがゆえに、かつて備えていたはずの熱意を思い起こすことも無く、此処から只、無為に堕ちてゆくしかないのである。

其処は烏丸とは関係のない、少なくとも直接的には非の無い、イツセー本人の責に依る事態であることは間違いがなかった。

熱意を喪失した少年はしかし、思春期特有のスケベ心発情だけは失うことは無かった。

悲劇と言うより喜劇である。

「ハイハイ、スキップスキップ。しかしなげーなー、もつと身体見せろよカメラ」

リモコンを弄り、片手は股間に添えたまま。

汚れちまつたイツセーは、今夜もひたすらにリアス抜きどころを追う。

四つん這いで豊富な乳房をぶら下げた体勢に変わった少女を見て、ニヤニヤと笑みを浮かべつつ再生をクリックした。

ティッシュはまだまだ手放せそうにない。

▽      ▽      ▽

「……DVDは届けてくれましたか？」

「ええ。けれど、祐斗くんも彼に抱かれていたとは思いませんでしたわ」

「事故みたいなものですよ。件のモノは記念にと押し付けられたモノです。……出来栄えだけは無駄に良作なんですけどね」

自分が主演を務めていたDVD作品を思い出し、木場祐斗は顔を赤らめる。

烏丸はそれを使って祐斗の身体をさらに弄ぶことも選択できたのだろうが、元々アレはそういう風に『ひとりに感ける』ことを選ばないクズだ。

作品を作ったのも、イツセーの知り合いである彼女祐斗自身に教えるかどうかの選択を任せてしまった意図だろう。

「でも、良かったんですの？ 兵藤君にばれてしまうのでは？」

「作品内では全部モザイクみたいな目線が入っているので、最低限特定されることは無いです。気付いてくれた方が、ずっとマシですけど」

力なく微笑う。

祐斗の中にあつたイツセーへの情動は、此処までの積み重ねでそろそろ振り切れそうであつた。

悪魔社会から村八分扱いにされたイツセーの子を身籠っている、などと言うことを無論、公おおやけに出来るわけではない。

しかし悪魔は元々懐妊が困難な種族で、だからこそ妊婦や子供は大事にされる。

それが転生悪魔だつたとしても、医者へ通されることは悪魔社会では当然のこととして周知されていた。

そして、祐斗もまたグレモリー領の医者によつて、体調を慮られている妊婦のひとりである。

当然その父親は尋ねられるのだが、人間の技術に加えて悪魔の技術も相俟つて、敢えて偽装を施そうというわけでもない限り、事實は容易く解析が出されるのだ。

今更になつて隠したり偽つたりするほどの価値をイツセーに見出すことができなくなつてしまつた祐斗は、事態のままに流されることを選択してしまつていた。

「なんてーか、スマンな。遊びのつもりだつたのだが、此処まで大事になつちまうとは思わなかつた」

「アザゼル先生の責任……も、まあ、七分くらいはありそうですね、全部を負ってもらうほどじゃないですよ。それに、生まれてくる子に責任はありませんから」

愛おしそうに己の腹を撫でながら、祐斗は微笑む。

今更「墮胎おたろせば？」とは言い難い顔つきであつた。雌の貌とも言う。

「それと、やっぱり修学旅行は行けそうにありませんか」

「まあなあ。イツセーの奴を悪魔と関わらせることが出来なくなつたわけだから、お前らが留守番だ。アイツのご両親に言い訳するより、そつちの方が容易いからな」



「まあ、僕はこんな身体になってますから、男子と一緒にの部屋になるわけにもいきませんしね」

もし実現して居たらまたひとつ下手な需要が生まれていたことだろう。

クラスの見知らぬ<sup>モ</sup>他<sup>ッ</sup>大勢<sup>男</sup>に秘密がばれて妊婦女子高生の大乱交大会……などというウスⅡ異本展開なんて無い。だからリクエストしないですね。お願い。

「あーあ、京都旅行いきたかったなあー」

「仕方ないだろう。政治的な配慮が必要になっている今、余計な火種を造らないのも仕事のうちさ」

「ぜ、ゼノヴィアさんが頭の良さそうなことを言ってます……!?!」

「おいギヤスパー、その発言の意図はなんだ？」

イリナ、ゼノヴィア、ギヤスパーの残りのグレモリー眷属が和気あいあいと会話をして、はたと気付いたのかロツテが手を挙げた。

「……あれ？ ボクは？」

「お前さんはどっちでも構わんぞ。できれば旅先でイツセーがバカをやらないように見張っていてほしいが」

「ええー、そんな気疲れしそうな旅行やだなー……」

「じゃあ行かなくてもいいだろ」

「義務が生じなければ後顧の憂いもなく行けるんだけど？」

「行きたいんだったら働け」

「ボクのご主人様はそらくんなのにー」

そんなこんなで、次回からは修学旅行編。

もうダレてきたから辞めたい気配が漲っている作者であったのだが。

『少年に宿る新たなチカラ！ 妖狐の母娘と乳の神！』

なんやかんやあったが修学旅行の始まりである。

誰が何と言おうと修学旅行だ。原作時系列的に早すぎない？とか、参加キャラの削減が激しすぎて旅行に魅力が無いよね、とか。色々言及されること必至だが修学旅行は始まってしまった。

イツセー本人に身に覚えが無かろうと、冥界の貴族しかも大盟主とも呼ぶべき魔王の系譜に砂をかけ名誉やら面子やらを汚し、イツセー本人には実力的な面での実績も価値も最底辺へと失墜したが、それでも腐っても原作主人公。

この世界の物語は彼を中心に回り、それを識るモノたちからすれば、それこそが此処を突破するための、それこそ『付け入る隙となる』のである。

思いの外真面目な話が展開して開くブラウザを間違えたのでは。そう思った方のために敢えて言わせていただくが、間違ってもいないし、今になって彼を此処まで引き摺り下ろした言い訳をしているわけではない。断じて。

その証拠に、ややゲンドウんなポーズで彼の動向を未だ探り続ける一団もまたいるのだから。

「始まったようだねえん」

「せやな」

机に肘を付いて重ねた手で口元を隠しかけたグラサンを輝かせるという、妙に胡乱な姿勢を維持するリゼヴィムにクレオ少年はおざなりに返す。

戯言に付き合う気は全くない、という清々しいまでのスルーだった。

「酷いぜクレオきゆうん。せつかく事態も漸くの段階へ来たんだ、遊び心を忘れちゃ人生損だ☆ぜ？」

「その人生をサラツと狂わせられた奴を生み出しておいて、よくもまあそんな口が利けるよ」

「にやつはつはつは、同罪同罪☆ クレオきゆうんが言えた義理じゃねーぜい！」

確かにその通りなので、リゼヴィムの言い分には嘆息せざるを得ないクレオ少年。

何しろ、彼がイツセーに対してやってのけたことは、赤龍帝を引き剥がしてゴルイニシチエに移植するという結果を出してしまったのだから。

イツセー自身の遺伝子という媒体があつたこともまた原因に当たるとは、クレオからすれば完全に利用するためだけにイツセーの立場を脅かしたことを自覚しているので、会ったことも無い転生悪魔の少年に少しばかり負い目が残っているようである。

なお、事情を同じく知っているクレオ少年の仲間少女ネフレアは、イツセーのことに対しては単純に自業自得であると認識していた。女子の視点にイツセーを立てる気は一切無かった。

「で、元赤龍帝が京都入りしたのは確認したけど、それがどう繋がるんだ？ 京都って何がいたっけ」

「京都は妖怪の都だよん。日本の各地にいる妖怪たちの総本部みたいなもんでな、戦力としちや足りないこと甚だしいが個人の能力に関しては目を瞑るには惜しすぎる。もしも上手いこと『群れ』として纏まっていたなら、悪魔らだって無視しちやいなかっただろうな」

「……？ ちよつとまで、悪魔って日本の許可なく蔓延ってたのか、ひよつとして」

「そうだぜー。だがまあ、元々日本にや悪魔とタイマン張れる神秘存在もいなかったからにやー。居座り放題だったぜ☆」

「日本神話とやらは何してたんだよ……」

「無理無理、あいつら基本的に引き籠りだもんよ」

リゼヴィムの言い分に補足すると、日本神話の神々は根本的に『日本』の先祖に当たる。

なので現在では生きていないのは当然で、そもそも日本の神々は他神教とは違い『何か恩恵を授けてください』と崇めるものではなく『どうか何もしないでください』と宥め賺されるモノたちだ。

だからこそ、それぞれの神の齎すとされている『恩恵』は彼らの『得られなかった結果』へと補填されるモノであり、信者らの成功のために邪魔をしないように身動きを取られぬよう括られる。

ゆえに彼らは『柱』と数えられ、それぞれの神域へと奉<sup>封</sup>じられるのが常となっていた。

禁足地とは立ち入りを禁じられた地ではなく、出ることを許可されない土地になるわけである。

なお、この点に関しては烏丸もまた勘違いをしていた。

彼の世界では神秘存在はごった煮のように出歩いているために、東方の神の誰それが欠けていたところで基本的に何の問題もないのである。

そして基本的に神の代わりに当たる存在が、また別に彼の居る世界を支えている。

だからこそその無問題が前提にあるからこそ、烏丸はこの世界にも『日本神話勢』と呼べるモノたちが受肉している、と勘違いしていた。

「悪魔が日本に移住始めたのは、大体250年くらい前からだけどナ。この国がオランダとかと金の遣り取りを始めた辺りから、此処は住み易すぎるってなことに気付いて、全体での大移動が始まったのヨ。だから冥界もこの国の『裏』にある」

「まあ、次元の狭間とか異界とかってなモノは亜空間に属するから、其処に土地が無けりやそもそも住むことも無理か。天使の住処だって空の上にあるわけでもないしな」

「そゆこと☆」

もう少し補填すると、天界の存在する異界に相当する場所は『聖典』の本拠地に値するバチカンの場所と位相を重ねて存在している。

西暦が数え始められたのが2000ちよつと前なんだから、一万年と二千年前から生きてるっぽいことを言う悪魔様方ならそれくらい前から日本に居たんじゃね？ と聡明なドクシヤなら推測するのだろうか、それならば300年以前の人材ももつと転生されていて然るべきだろうし、下手すればリアルドリ●ターズを実現できていたかも知れなかった。そうではなかった。読み解くと悪魔の人間社会への関わり方が、どうにも腑に落ちない点が目立ってしまうのである。

あと改めて考えると悪魔の前身は神族に連なるので、せせこまっしい冥界に引き籠つてないで信者連れて新宗教立ち上げた方がガッツリ生き延びられるのではとか、まあなんやかんやも思ってみたり。話を戻す。

「まあそんなわけで、裏日本に居る妖怪らにとつちや俺らは目の上のタンコブ、不当に住処を圧迫している不法移民なわけヨ。猫？の姉妹とか拉致ったりした奴もいたしナ」

「その時点でブチ切れるだろ普通」

「だから、帰属意識が低いんだってバカ。仲間意識そのものは高いんだろうけど、本来妖怪らは個人主義で、自分以外のモノには興味が無い。『仲間』と認めるモノだって、俺らみたいな悪魔よりもずっと限定されている。もつとも、そんな妖怪らを悪魔は眷属よりも使い魔として認識してるから、抗議挙げられてもナシの飛礫つてなもんだらうけどな」

妖怪を眷属に据えるなんて一部のモノ好きだけだぜー、と例え話を用意して、リゼヴィムは講義を続けた。

希薄なナシヨナリズム、民族意識を説明し、しかし、と更に続ける。

「現代はむしろそんな奴らじゃ生きていけないからにやー。京都は僅

かに生き延びた妖怪らの集まって隠れ住む追い立てられた楽園サ。そんなところに、今現在立場の危うい悪魔少年がこのこと事情も知らずに訪れる。——ひと悶着ありそうだと思わないかによ？」

「そこまで狙ってたのかこのクズ野郎……！」

ドン引きだった。

クレオ少年は引き彎った顔で、ニヤニヤ嗤うリゼヴィムを罵倒した。

「そこまで考えてねーよ？ でも、直接狙うとしたら俺じゃないかって別口だろうにやー」

▽      ▽      ▽

「(どうしたもんかによコレ……)」

現在黒猫の姿で隠密行動中の塔城小猫の姉・黒歌は、想定していなかった事態に現実逃避したかった。

元特A級の賞金首に当たるはぐれ悪魔であったが、今はその手配も取り消され白龍皇ヴァーリの仲間、つまりは墮天使陣営の一員として認識されている黒髪猫耳付きの和服美女。

幼児体系を突き進む小猫の姉とは思えぬほどにその身体つきは妖艶かつグラマラスに育っており、そんな美味しいキャラでありながら終始烏丸の毒牙に掛からなかった稀有な猫だ。女性

そんな彼女は、本日はヴァーリの修学旅行にこっそりについて来ていた。

別に妖怪の総本山であるとかいう胡乱な話を鵜呑みにしたわけではなく、単純に観光目的での散策だ。

こっそりと仙術を教えていた妹が気付けば恋人を作りさらりと異世界へ旅立ってしまったために、体形の一部が妹に似通っている某白龍皇を妹に見立てて構っているとかそういうった事情は一切ない。

単に暇だったので暇を潰したかった、それだけの話だった。

そんな折に、悪魔内での評価が頗る悪くなっていたイツセーが、妖怪に連れ去られるのを目撃してしまってさあ大変。

妖怪の術なので追跡は楽だったのだが、其処で黒歌は祿でもない妖怪の事情を知ってしまったのである。

「おねがいなのじゃああ、かあさまを、かあさまをかえしてたもれええ  
〜……」

巫女服を着た「のじゃロリ子狐」という、最近のジユブナイルではよく見かける青少年の描く妖狐のイメージそのものな幼女に継られて、困惑するイツセーが其処に居た。

「そ、そういわれても、俺も何が何だか……」

「おんしら悪魔が八坂様を連れて行ったんじゃろうがあ！ 九重さまがろりじゃからと言つていつまでも甘い顔しとる思ったら大間違いじゃぞクソガキヤあ！」

「ひいー!? 知らねーものは知らねーんですけどおおおー!?」

赤鬼に脅されて即涙目になる少年。

幼女は即座に仲間内の妖怪に宥められ、イツセーから離される。ずんぐりむつくりとしたタイヤ●●んみたいな妖怪だ。恐らくベイマ●●クスとは無関係であろうが。

ちなみに黒歌は現在魔力を隠し妖力を表に出しているので、そこらの猫又の一種と思われるスルーされているらしい。

しかし、赤鬼の言った言葉に黒歌ははて?と疑問を抱く。

「(あのボウヤに悪魔は関われない、って魔王様が決めていたはずにや。イコール京都に近寄ることが盟約に反すると思うのになのになんでこんな事件が起こってるにや?)」

聞くに、ヤサカという者は妖怪らの重要な立場の存在なのだろう。それがイツセーの京都入り以前に悪魔に連れていかれたとあるのなら、もつと以前に抗議が寄越されても可笑しくないはずなのだ。ならば件の事件はごく最近に起こった事情で、それが修学旅行と同じタイミングで動き出すのは、偶然とは思えない。

「(どうにも不穏だにやー……。とりあえず、アザゼルに連絡入れるにや)」

引率として一緒に京都入りしていたアザゼル先生へ、スマホを取り出しタップする黒猫。

何処から出したか？ 懐だ。

肉球で器用に『拉致現場なう』とLineを送る黒歌とは裏腹に、イツセーは亀甲縛りで逆さ吊りにされていた。

音速の尋問移行であった。

「吐けエー！ 八坂様の居場所を吐くんじゃ悪魔めエー！」

「アツーーーーー！ やめ、アツーーーーー！！！」

異端審問に勤しむ妖怪という奇跡の和洋折衷を垣間見て、黒歌はパシヤリと鞭打たれるイツセーを撮影する。

白うねりと一反木綿に鞭で打たれるという、そこらの京都旅行では味わえないサービスに吊るされるイツセーの瞼は涙でいっぱいであつたという。

それが歓喜によるモノでないの言うまでもない。

▽      ▽      ▽

この物語を、33分持たせて見せる……！

別にそんな意気込みは特にないが、いつかテニヌ勝負をした雪女(ゴリラ)が口入れしたお陰でイツセーの尋問は恙無く終了し、疑いこ



そ持たれているモノの犯人とは特定されなかったために釈放されたり。

犯人であった悪魔は密かに冥界から出てきていたグレモリーのファンであったことが判明し、イツセーに罪を着せ処刑を推進するために悪魔の仕業として解かり易い証拠を残していたのだよなんだってー！なドタバタが一幕起こったり。

誘拐されていたはずのナイスバディ人妻妖狐・八坂は、いつの間にもやら抜け出して修学旅行中であったイツセーの隣のクラスの二級フラグ建築士とちやつかり出会い、メガネ美少女ドジッコ剣士&天井下がり系隠密忍者美少女の爆乳コンビとの修羅場を物語の陰で展開して居たり。

そんななんやかんやを得て現在。

連れ去られたはずの八坂も居ないのに、件の彼女の写真ぶろまいどを一目見て是非とも恩を売りたいと、悪魔の集団と激突することとなった我が主人公兵藤一誠。

駒の力も神器も無い少年の下へ、とうとう彼女が降り立った。

『——モッフッフ、奴の足跡を辿ってみれば、素晴らしい気配の世界にたどり着いたネ……。特にその小僧、中々相性の良さそうなモノを持っていて。暫くお世話にならせてもらおうネ』

「……ッ、な、おまえ、いったい……!?!」

『我こそは乳神、名をパイオ・ツウ。良さげな意識の器、隠れ家にはモツテコイネ……!』

崩壊した魔法世界からの逃亡犯、乳神改めパイオ・ツウ女史の参上である。

実際、この世界は某ソシヤゲでもドレスブレイクな絵柄が蔓延るほど魅力的なヒロインが多数いるので、ネギまと比べてもどっこいなレベルで彼女向けなのだろう。

精神体で現れた彼女は不敵な笑みを浮かべつつ、かなり相性の良さそうな少年を隠れ蓑にすることに決めたらしい。

驚愕するイツセーとは裏腹に、透けた身体の褐色少女は罅割れて機能しなくなっていた【赤龍帝の籠手】に染み込むように重なってゆく。魔法世界という幻想の中でしか存在を許されていない彼女たちは、この世界においても『器』が無ければ活動できないのである。

『力が欲しいのダロウ少年？ 私を持ってゆくネ、素晴らしい力を授けてヤロウ……！』

「うおおおおお!!? せ、セイクリッドギア神器が……!?!」

全体を覆っていた罅は見る見るうちに修復し、何処か龍を模していた籠手は滑らかさを顕せ始め、まるでシルクの手袋のような姿へと変貌する。

くすんだ赤であつた灰がかつていた色合いも輝きを取り戻し、以前よりもずっと薄い色の赤——桃色へと色彩を変える。

手の甲に付いていた宝玉は既に無いが、代わりに円を重ねた魔法陣が顕現し、それはまさに女性の乳房を彷彿とさせる紋様を顕していた

「最低だアイツ!」

「卑猥すぎる! なんであんな奴が元グレモリー眷属なんだ!?!」

「とつとと処刑されるクソガキーツ!」

悪魔たちのブーイングが酷かった。

「うるせえ! 俺だつてこんな好きで付けてないわーツ!」

『モッフ、それは酷いな少年。素晴らしい力を授けたというのに』

紋章から声が響く。

先ほどの少女の声だが、紋章の中心が輝く姿が乳首が光っているようにしか見えなくイツセー自身ドン引きしていた。

『使い方は既に教えてある。さあ、論ずるより産むが易しネ!』  
「ああくそ、やってやらあ! 【アルティメットストーカー!】」  
「「「「?」」」」

瞬時に、イツセーの姿が消える。

悪魔数人で囲んでいたはずなのに、抜ける隙間など何処にも無いというのに逃げたのだ。

人間よりも優れた動体視力を持つ悪魔たちには捉えることが出来なかった異変は、彼らの中に居た女性悪魔にすぐに訪れる――!

「――ひゃあん!?!」

「……! Gカップ、か。良いモノを持つてるじゃねえか……!」

ぐえっへっへっへとどす黒い嘲笑で、女性悪魔の背後を瞬時に捉えたイツセーは、流れるような仕草で彼女の乳房を揉みしだく。

女性が混じっていることは間違いではない。グレモリーは女性悪魔にも人気なので、ファンとしてとても許せない奴を断罪するために今回の事態へと参戦した次第であった。

『我が乳神の権能、【アルティメットストーカー】<sup>神秘を追い求めるモノ</sup>。どのような足場でもどのような難所でも、女性のおっぱいを揉むためならば瞬時に移動できるネ。少年、キミなら上手く使いこなせると信じていたヨ……!』

「ああ、素晴らしいチカラ、使わせてもらうぜ!」

「ちよっ、いやあ、やめて……!」

「「「やっぱり最低だアイツ!!」」」

ブチ転がすぞクソガキヤアアアア! と殺到する男性悪魔諸君。

なお、男性には特に効かない権能らしい。

女性悪魔に泣かれつつも揉みしだくことを止めなかったイツセーは、殺到した男性悪魔らにフルボッコにされたとき。